岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (23)

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

13

1978・3

岡山県教育委員会

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

13

序　　文

中国縦貫自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査は，昭和44年３月に始まり，昭和51年10月をもって終了しました。岡山県教育委員会では順次，発掘調査報告書を刊行してまいりましたが，このたびの第13分冊の発刊をもってすべての遺跡の報告を終える運びとなりました。本書に収録した遺跡は，大畑遺跡・宮の鼻古墳・宗金遺跡・佐藤遺跡・道上遺跡・横田東古墳群・横田遺跡・藤木城址・忠田山遺跡で，広く北房町・新見市・神郷町・哲西町にかけての様々な時代の地域史が刻みこまれた遺跡であります。

しかしながら，この報告書の内容については，現地発掘調査の期間や報告書作成の期間の関係もあって必ずしも十分に意を尽したものとはいえませんが，この状況を御理解のうえ，文化財の保護・地域史の研究のために，本書を御活用いただければ幸甚に存じます。

最後に，現地調査の実施・報告書の作成にあたって，日本道路公団並びに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめとして，北房町・新見市・神郷町・哲西町の各教育委員会，その他関係各位からよせられたご協力とご指導に対し厚くお礼を申し上げます。

昭和53年３月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

凡　例

1. 本書は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地に係る埋蔵文化財の緊急発掘調査の調査報告である。

2. 岡山県内の発掘調査は，第1次整備区間（落合インター・チェンジ以東，25遺跡）では，昭和44年3月久米郡久米町久米廃寺に着手し，昭和48年6月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで4年3ケ月を要した。この調査に係る報告書は5分冊に分けて刊行された。第二次整備区間（落合インター・チェンジ以西，50遺跡）の調査は，第一次整備区間の調査に引続いて実施され，昭和51年10月阿哲郡哲西町横田遺跡の終了をもって完了じた。第二次整備区間にかかる報告書は本分冊を含めて5分冊が既に刊行され，さらに，昭和52年度中に3分冊の刊行をもって完了する。

3. 本書は，通巻第13分冊にあたり，以下収録した遺跡名と調査担当者を録す。

大畑遺跡	井上　弘
宮の鼻古墳	伊藤　晃
宗金遺跡	井上　弘・内藤善史・浅倉秀昭
佐藤遺跡	竹田　勝・岡本寛久
道上遺跡	岡本寛久・竹田　勝
横田東古墳群	伊藤　晃・山磨康平
横田遺跡	岡田　博・秀島貞康
藤木城址	下澤公明・浅倉秀昭
忠田山遺跡	福田正継・中野雅美

4. 中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会は，昭和42年5月岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて設置した。

昭和53年3月現在，対策委員に下記の諸氏に委嘱している。

勝央中学校教諭	浅野　克己	（昭和47年11月～）
岡山大学教授	近藤　義郎	（昭和47年11月～）
津山みのり学園	植月　荘介	（昭和44年4月～）
院庄小学校教諭	土居　　徹	（昭和44年4月～）
津山高等学校教諭	宗森　英之	（昭和47年11月～）
津山市文化財保護委員	渡辺　健治	（昭和44年4月～）

5. 調査にあたっては，岡山県教育委員会文化課が埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

6. 遺跡の位置図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。

（承認番号）昭53中複，第29号

7. 本書に用いたレベル高は，すべて海抜高である。

8. 各々の報告に用いる時代区分は一般的な政治区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用した。

9. 昭和50，51，52年度の調査実施体制と調査遺跡を下記にあげる。

昭和50年度

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は，文化課，津山・高梁両教育事務所が協議した結果，前年度からの継続調査中の遺跡については津山教育事務所で，その他の遺跡は高梁教育事務所でそれぞれ担当することになった。このため，調査員は文化課に配置換え（高梁教育事務所兼務）となった。前年度から継続調査中の遺跡の担当調査員は，調査終了まで津山教育事務所勤務となり，その後文化課へ配置換え（高梁教育事務所兼務）となった。

文化課

課長	小林孝男
参事	富岡敬之
	西口秀俊（課長補佐・文化財二係長事務取扱）
文化主幹	水田稔（文化係長事務取扱）
主任	光吉勝彦
文化財保護主査	葛原克人
文化財保護主事	山磨康平　正岡睦夫　下澤公明　井上弘
	岡田博　高畑知功
主事	田仲満雄　二宮治夫　浅倉秀昭　竹田勝
	福田正継　友成誠司

津山教育事務所

所長	菱川豪
次長	吉田賢吾
主幹	田中篤周（庶務係長事務取扱）
主任	大山行正
主事	山本政昭

高梁教育事務所

所長	田井治太郎
次長	小林克己
主幹	守屋明
庶務係長	小野茂正
主事	丸尾洋幸　藤井守雄

調査遺跡名

谷尻遺跡・桃山遺跡・空古墳・岩倉遺跡（共に前年度より継続），宮の鼻古墳，宗金遺跡，新見庄関連遺跡（二日市場・祐清塚），横見古墳群，横見墳墓群，迫遺跡，新市谷遺跡，古坊遺跡，岩屋城

址，安信古墳群，塚谷古墳群，山根屋遺跡，中林調査区，野田畝遺跡，西江遺跡，二野遺跡，光坊寺古墳群，土井遺跡，鳴山古墳群，清水谷遺跡，塚の峯遺跡。

昭和51年度

担当調査員は，調査終了（昭和51年10月）までは高梁教育事務所兼務として調査にあたり，その後は兼務を解かれて，同52年３月まで担当調査員全員により岡山市西古松の収蔵庫（文化課分室）において報告書作成に従事した。なお，横田東古墳群と工事中発見の二本松・岸本下両遺跡の計３遺跡の調査は，高梁教育事務所兼務の調査員だけでは対応できず，文化課勤務調査員が出向いて調査にあたった。

文化課

課長	小林孝男				
参事	西口秀俊				
文化主幹	水田稔				
文化係長	小川佳彦				
文化財二係長	光吉勝彦				
文化財保護主査	葛原克人				
文化財保護主事	伊藤晃	山磨康平	正岡睦夫	下澤公明	
	井上弘	松本和男	岡田博		
主事	田仲満雄	浅倉秀昭	福田正継	竹田勝	
	中野雅美	友成誠司	岡本寛久	秀島貞康	
	内藤善史				

高梁教育事務所

所長	田井治太郎	
次長	小林克己	
主幹	守屋明	（庶務係長事務取扱）
主事	丸尾洋幸	藤井守雄

調査遺跡名

宗金遺跡，岩屋城址，山根屋遺跡，西江遺跡，清水谷遺跡，塚の峯遺跡（以上前年度より継続）桑原遺跡，門前中屋古墳，佐藤遺跡，道上古墳，横田東古墳群，横田遺跡，藤木城址，大倉遺跡，忠田山遺跡，御供川遺跡，四日市古墳，二本松遺跡，岸本下遺跡，岸本城址

昭和52年度

新見市～哲西町間の発掘調査が昭和51年10月に終了し，同年11月１日付けで高梁教育事務所兼務を解かれる。以降，文化課分室において担当調査員全員による報告書作成に従事する。同52年４月以降は６名が報告書作成にあたり，同53年３月まで順次担当遺跡を刊行した。なお，新規発見遺跡として上房郡北房町上呰部所在の大畑遺跡の調査が同52年12月１日から13日にかけて行われた。

文化課

課長	飛田真澄
課長補佐	塩見篤
主幹	小川佳彦
文化財二係長	光吉勝彦
文化財保護主査	河本清
文化財保護主事	正岡睦夫
	山磨康平
主事	岡本寛久

文化課分室

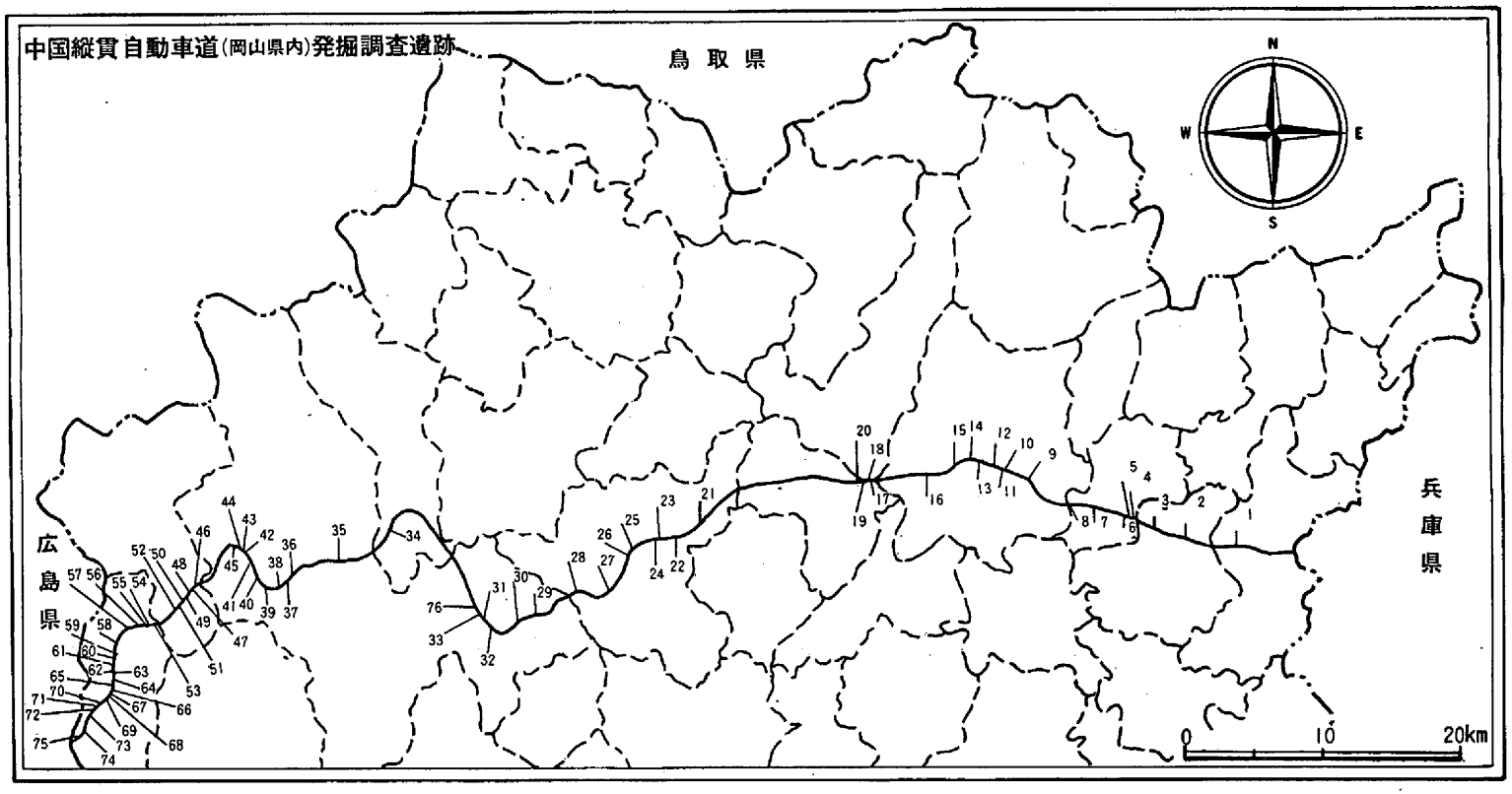
文化財主幹	難波進
文化財保護主査	葛原克人
文化財保護主事	井上弘
	下澤公明
	松本和男
	岡田博
主事	福田正継
	竹田勝
	藤井守雄

総　目　次

Ⅰ　中国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査の経過と問題点(総括)……15

Ⅱ　発掘調査報告

1. 大畑遺跡(76)……23
2. 宮の鼻古墳(37)……43
3. 宗金遺跡(40)……53
4. 佐藤遺跡(53)……131
5. 道上遺跡(55)……183
6. 横田東古墳群(64)……265
7. 横田遺跡(65)……369
8. 藤木城址(66)……509
9. 忠田山遺跡(68)……551



1 高本遺跡
2 谷遺跡
3 北山古墳群
4 上相遺跡
5 小中古墳群
6 中遺跡
7 平遺跡
8 梶原遺跡
9 天神原遺跡
10 押入飯綱神社古墳群
11 押入西遺跡
12 野介代遺跡
13 志戸部調査区
14 沼古墳群
15 美作国府遺跡
16 二宮大成古墳
17 日南古墳群
18 宮尾遺跡
19 久米廃寺
20 領家遺跡
21 下河内調査区
22 赤野遺跡
23 穴塚古墳群
24 西原遺跡
25 下市瀬遺跡
26 旦原遺跡
27 須内遺跡
28 宮前遺跡
29 備中平遺跡
30 谷尻遺跡
31 桃山遺跡
32 植木遺跡
33 空古墳
34 戸谷遺跡
35 塔の畝遺跡
36 青地遺跡
37 下館谷宮の鼻古墳※
38 桑原遺跡
39 岩倉遺跡
40 宗金遺跡※
41 二日市場遺跡
42 横見古墳群
43 横見墳墓
44 谷内遺跡
45 祐渭塚遺跡
46 迫三方塚古墳
47 新市谷遺跡
48 古坊遺跡
49 岩屋城址
50 門前中屋古墳
51 安倍古墳群(三基)
52 塚谷古墳
53 佐藤遺跡※
54 山根屋遺跡※
55 道上遺跡※
56 林遺跡
57 野田畝遺跡
58 西江遺跡
59 二野遺跡
60 光坊寺古墳群
61 土井遺跡
62 城遺跡
63 鳴山古墳群
64 横田東古墳群※
65 横田遺跡※※
66 藤木城址※※
67 大倉遺跡※
68 忠田山遺跡※
69 御供川遺跡
70 四日市遺跡
71 渭水谷遺跡
72 塚の本遺跡
73 二本松遺跡
74 岸下遺跡
75 岸本城址※
76 大畑遺跡※

(※：本分冊に掲載した遺跡)

資料中国縦貫自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表（1969・7～1976.10.29）

遺跡番号	遺跡名（掲載分冊）	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積（㎡）	主な調査員	概要
1	高本（こうもと）遺跡（5分冊）	作東町川北	47・4・1 48・6・30	8	4,000	井上・松本 泉本・岡田 山磨	弥生時代中期中葉～後期，住居址3・貯蔵穴状ピット・土器・太型蛤刃石斧扁平片刃石斧・石鏃・石庖丁，磨製石剣・サヌカイト製砥石・分銅形土製品　古墳時代終末期，須恵器　奈良～平安時代，掘立柱建物8・鍛冶・炉壁鉄滓・焼土・木炭片，須恵器・土師器・円面硯2，墨書土器1（「郡」）中世～近世，備前焼・青磁・陶器
2	狼谷遺跡（4分冊）	美作町楢原	47・4・1 48・3・31	6	2,500	松本・二宮 泉本	弥生時代中期～後期包含層・住居址6・土器・土器片紡錘・太型蛤刃石斧・台石古墳時代後期，掘立柱建物6・土壙墓？28・古墳6・溝4・須恵器・土師器　平安時代以降，土壙墓1・土師器・備前焼
3	北山古墳群（2分冊）	美作町北山	47・4・1 47・11・30	4	800	松本・二宮 泉本	弥生時代中期中葉，住居址2・土器・石斧・石鏃・石錐・石庖丁・サヌカイト破片古墳時代後期，円墳4・木棺直葬・須恵器（装飾付壺）・土師器・埴輪（土師質・須恵質・円筒・ヒレ付・朝顔・人物）・勾玉・管玉・ガス玉・土玉・直刀・刀子・鎌・鍬・馬具（轡・辻金具・鈴具）・鏡　鎌倉山地区※弥生時代終末期～古墳時代前期，住居址42・袋状ピット・土器・石庖丁石錘・砥石・磨石・たたき石・鉇・勾玉※古墳時代後期，住居址・須恵器・土師器※鉄滓
4	上相（かみや）遺跡（1分冊）	美作町上相	47・7・1 47・8・31	2	500	松本・二宮・泉本	古墳時代後期，住居址2（竈付）・掘立柱建物3・須恵器・土師器・砥石・鉄滓・炉壁・砥石
5	小中古墳群（4分冊）	勝央町岡	47・4・1 48・6・30	3	1,300	栗野・高畑	弥生時代終末期，住居址8～10・土器・石皿・たたき石・石庖丁・砥石・鉇・古墳時代後期，円墳4（木棺直葬？）土壙墓3・須恵器・土師器・金環・刀子・馬具（轡）鈴具・鉄鏃奈良～平安時代，古道・須恵器・土師器
6	小中遺跡（4分冊）	勝央町岡		12	4,500	栗野・高畑 松本	弥生時代中期中葉～後期終末期～古墳時代前期？，住居址30・掘立柱建物・柵列・掘・土壙墓14・壺棺1・土器・土器片紡錘・土師器・管玉・石庖丁・太型蛤刃石斧・石鏃・石槍・砥石・たたき石・台石，古墳時代後期，土壙1・鎌奈良～平安時代，古道・掘立柱建物・須恵器・土師器・瓦質土器・鉱滓中世後半～近世，墓・土製品（人形・魚・鈴）・古銭・鎌・庖丁・釘・キセル・火打鎌・カンザシ
7	平（たいら）遺跡（5分冊）	勝央町平	47・4・1 48・3・31	10	3,000	田仲・井上	勝田郡の郡家の一部？，奈良・平安時代，礎石建物1・掘立柱建物8・柵列1・溝・井戸・鍛冶炉7・須恵器・土師器・瓦器・緑釉（土師質・須恵質）・灰釉・青磁・文字土器（印・ヘラ書き・墨書）硯（蹄脚硯・円面硯・風字硯風字二面硯・坏蓋硯）瓦（軒丸瓦2種・軒平瓦2種・平瓦・丸瓦）・管状土錘・鉄滓・ふいごの羽口・刀・刀子・釘・木の葉中世，建物6・墳墓・備前焼骨壺・人骨・土師器・近世陶磁器
8	梶原遺跡（1分冊）	勝央町福吉 津山市梶原	47・7・18 47・8・11	2	1,000	田仲・井上	弥生時代後期，包含層・柱穴・土器　中世，墳墓・備前焼骨壺・人骨　近世墓・陶磁器・古銭・硯・キセル
9	天神原遺跡（4分冊）	津山市河辺	45・11・24 47・6・10	20	4,908	河本・橋本 柳瀬・下澤 新東	先土器時代，切出状ナイフ形石器1　弥生時代前期末・後期・終末期・住居址25・掘立柱建物7・溝・土壙5・貯蔵穴・土器・石斧・石鏃・たたき石・石皿・砥石・鉇・刀子・鉄鏃炭化材・古墳時代後期，円墳7（木棺直葬・箱式石棺）・土壙墓・住居址2（鍛冶炉付？）・須恵器・土師器・陶棺・鏡・鉄滓　奈良時代・須恵器・円面硯

遺跡番号	遺跡名（掲載分冊）	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積（㎡）	主な調査員	概要
10	押入飯綱神社古墳（2分冊）	津山市押入	45.4.1 45.9.10	2	693	橋本・柳瀬	古墳時代後期，方墳1（葺石・箱式石棺）・円墳1・土壙1・配石遺構・須恵器・土師器・刀子
11	押入西遺跡（1分冊）	津山市押入	45.9.5 45.11.30 47.1.7 47.3.31	8	1,470	河本・橋本 柳瀬・下澤 井上	弥生時代中期後半，住居址9・掘立柱建物3・段状遺構・土器・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁（未製品も）・石鏃・砥石・炭化米・古墳時代後期・円墳2（木棺直葬）・鹿角装刀子・素環頭太刀・鉸具・銙帯・帯先金具・鉄斧・鎌・鑿・釘・須恵器・土師器・奈良時代，墳墓・須恵器骨壺2・人骨
12	野介代（のけだい）遺跡（1分冊）	津山市 野介代	46.2.26 46.3.31	8	270	河本・橋本 柳瀬・下澤	弥生時代中期後半，住居址3・土器・扁平片刃石斧・石鏃・炭化材
13	志戸部調査区（1分冊）	津山市 志戸部	46.12.1 46.12.10	1	446	井上・伊藤	遺構なし
14	沼古墳群（5分冊）	津山市沼	46.12.1 46.12.9	1	446	伊藤・井上	古墳時代，箱式石棺4？・人骨
15	美作国府址（3分冊）	津山市総社	45.3.5 45.3.31 46.3.9 47.3.31	14	8,167	高橋・河本 橋本・伊藤 泉本・井上 柳瀬・岡田 池畑	弥生時代中期～後期，土壙・集石土壙・溝・土器・太型蛤刃石斧・石庖丁・鏃石・砥石・織具・ヒョウタンの種子・桃の種子・カヤ・古墳時代後期土師器・須恵器・美作国府（西北部）・建物6・築地跡・溝・井戸5・井戸状ピット5・瓦（軒丸瓦3種・軒平瓦3種・平瓦3種・丸瓦）・（蹄脚硯・円面硯・風字硯（坏蓋硯）・緑釉（土師質・須恵質）灰釉・青磁・白磁・須恵器・土師器・馬形土・製品・墨書土器・転形土器・瓦器・斎串形木簡・斎串・曲物・つるべ桶・籠・桃・栗・櫛・鉄製刀子・刀・釘・鉄滓・炉壁・ふいごの羽口・牛の鼻輪
16	二宮大成（おおなる）（二宮大東）遺跡（3分冊）	津山市二宮	46.2.4 47.2.20	1	600	栗野・泉本 山磨	弥生時代中期，後期・終末期・住居址3・溝・ピット・炉址・土器・鉇・たたき石・石庖丁・炭火材・古墳時代後期，住居址・円墳（横穴式石室）・陶棺3・須恵器・土師器・刀子・鉄鏃・金銅透彫鍔・馬具（轡・杏葉）・勾玉・切子玉・ガラス玉・土玉・飛鳥様式単弁軒丸瓦平安末～中世，ピット3，建物2・須恵器・土師器・備前焼・古銭・鉄滓
17	日南（ひな）古墳群（2分冊）	久米町宮尾	47.11.1 47.11.30	1	230	橋本・山磨 岡田	古墳時代，箱式石棺1 平安時代，古道・土師器・須恵器
18	宮尾遺跡（2分冊）	久米町宮尾	46.9.20 46.12.11 47.4.1 48.1.31	12	7,922	橋本・岡田 山磨・井上	縄文時代晩期，土器・石鏃，弥生時代中期初頭～中葉・後期・水路・土器・扁平片刃石斧・石庖丁・石鏃・炭化米・管玉・古墳時代後期，須恵器　久米郡の郡家跡，白鳳時代～奈良・平安時代，掘立柱建物20・柵列・門：溝・井戸1・土壙・瓦少量・須恵器・土師器・瓦器・硯・円面硯・杯転用硯・転形土器・緑釉・青白磁・鉄滓・ふいごの羽口・古銭・漆膜付須恵器・植物種子・薬・板材・野辺地区，白鳳～奈良時代，竪穴状遺構3・鍛冶炉3・井戸状ピット・溝状遺構・須恵器・土師器・土師器・釘・鎹・円板状鉄器・釘・鉄滓・砥石・平瓦
19	久米廃寺（2分冊）	久米町宮尾	44.2.1 44.3.31 44.4.1 45.1.31 45.4.1 46.3.31	24	5,232	河本・葛原 枝川・栗野 泉本・山磨	弥生時代中期・後期，土器・環状石斧・サヌカイト原石・古墳時代後期，住居址？・須恵器・土師器・鉱滓・白鳳時代創建寺院跡・奈良～平安時代，塔・金堂・講堂・僧坊？等（礎石建物5・掘立柱建物3，回廊・築地・溝・円形ピット・瓦（軒丸瓦4種・軒平瓦5種・丸瓦2種・平瓦6種・隅切瓦・熨斗瓦）・須恵器・土師器・緑釉・仏像（塑像仏は如来・菩薩・天部など・塼仏3）・円面硯・墨書土器

遺跡番号	遺跡名（掲載分冊）	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積（㎡）	主な調査員	概要
							・文字瓦・水晶・金箔・相輪・鉄鏃・釘・鎹・刀子・鉄滓・掘立柱根・流木・壁土・種子（くるみ・もも・とち）・石製銙帯
20	領家遺跡（5分冊）	久米町領家	46.4.1 47.3.31	12	2,900	栗野・山磨	先土器時代，丸のみ片刃石斧・弥生時代中期，後期，住居址13・土壙2・集石遺構1・土器・石庖丁・太型蛤刃石斧・扁平片刃斧・石鏃・敲石・凹石・紡錘車・ガラス玉・炭化米・炭化材・カヤ・古墳時代前期～後期，住居址19（竈付）・時期不詳住居址9・鍛冶炉1・土壙1・合口甕棺1・土師器・須恵器・土製支脚・竈形土器・金環・鉄滓・ふいごの羽口・鉄斧・砥石・ガラス玉・桃の種子・炭化材・奈良～平安時代，掘立柱建物16・礎石建物1・井戸1（曲物の井戸枠）・溝・土師器・須恵器・花文壺・緑釉・灰釉・青磁・刀子・鉄鏃・釘・鉄製紡錘・クサビ・鉄滓・石錘・管状土錘・瓦（軒丸瓦・軒平瓦）・石製銙帯
21	下河内（しもごうち）調査区（5分冊）	落合町下河内	47.1.20 47.2.7	1	120	河本・橋本 柳瀬	遺構なし，弥生式土器・須恵器・土師器・古銭
22	赤野遺跡（1分冊）	落合町赤野	47.1.20 47.2.19 47.4.1 47.6.21	3	960	河本・橋本 柳瀬・岡田 山磨	縄文時代早期・後期・晩期，土器片・サヌカイト石鏃・すり石・黒曜石片古墳時代前期・後期，住居址2・住居址2・土師器・須恵器中世（鎌倉～室町時代），館跡・建物3・L字状堀によって区画・ピット・土師器・灯明皿・灰釉・備前焼（擂鉢・壺）・青磁碗・白磁・中世陶器・漆器片・鉄鏃・釘
23	穴塚古墳（5分冊）	落合町西原	45.7.27 45.9.25	2	157	中力・伊藤	古墳時代後期，円墳1（横穴式石室）須恵器・馬具（鞍）・刀子・鉄鏃・鉄斧
24	西原遺跡（3分冊）	落合町西原	44.10.1 45.3.31	6	1,530	神原・河本 枝川・栗野 橋本・中力 伊藤・新東 松本・柳瀬	縄文時代中期・後期・晩期，土器片・御物石器・弥生時代中期・後期～終末期，住居址12・土壙10・すり鉢状ピット1・土器・石庖丁・太型蛤刃石斧・両刃石斧・石鏃・砥石・錘・分銅形土製品・古墳時代，奈良時代以降，須恵器・土師器・管状土錘・紡錘状土製品
25	下市瀬遺跡（1冊分）	落合町下市瀬	47.8.20 48.5.31	9	4,000	岡本・河本 田伸・新東	弥生時代中期末・後期・住居址1・壺棺1・井戸1・水路・土器（特殊壺・絵画土器～スタンプ・施文土器）・石包丁・石皿・たたき石・石錘・太型蛤刃石斧・土玉・銅鐸・フォーク状木器・櫂状木器・槽・田下駄？・スプーン状木器・建築材・種子（桃・どんぐり・かんぴょう）古墳時代後期，水路・須恵器奈良～平安時代，礎石建物・掘立柱建物5・井戸3・須恵器（多首壺・遮弁付高杯）・土師器・瓦器・墨書土器・緑釉（須恵質）青磁・管状土錘・瓦（軒丸瓦2種・軒平瓦5種）・杯転用硯（朱墨あり）舟形木器・人形・斎串・木皿・櫛状木器・ヘラ状木製品・種子（桃）・鉄滓中世～近世，建物3・備前焼・近世陶磁器
26	旦原（だんのはら）遺跡（8分冊）	落合町西河内	48.7.17 48.12.31	5.5	2,000	高畑・山磨	弥生時代中期後半～後期・住居址7，袋状土壙8，柱穴土器溜り　古墳時代，後期古墳3土壙墓2，土玉・刀子　奈良～平安時代・火穴葬土壙1・骨蔵器2（壺，杯）・建物1・柱その他土壙，溝
27	須内（すのうち）遺跡（6分冊）	落合町鹿田	49.1.8 49.6.30	6	1,200	橋本・松本 浅倉・井上 栗野	縄文時代後期，晩期土器片，黒曜石片　弥生時代中期末～後期の住居跡2・弥生式土器多数・太型蛤刃石斧2・扁平片刃石斧2，石鏃5（サヌカイト）サヌカイト片・ドリル1（サヌカイト）・石匙1　中世・建物4・柱穴・土壙7・溝・墳墓（骨壺10・五輪塔40以上・宝篋印塔3以上）須恵器・土師器・青磁片・緑釉陶器片2・灯明皿・平瓦片・鉄滓・鉄釘・銅印（「財」）・刀子・骨片・炭・砂利敷

遺跡番号	遺跡名（掲載分冊）	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積（㎡）	主な調査員	概要
28	宮の前遺跡（7分冊）	落合町一色	48.4.23 49.9.30	17	7,500	橋本・二宮 浅倉	縄文中期・晩期・土器片・貯蔵穴40・ドングリ・クルミ・木の葉　弥生時代前期・中期・後期住居址16・炉址1・周溝墓8（円形，方形・土坑墓・石蓋土壙墓6・箱式石棺5・土器・石鏃数十点・黒曜石製石鏃1・石庖丁7・石皿・たたき石・スリ石・打製石斧・磨製石斧1・太型蛤刃石斧1・石錐10数本・石匙11・石槍2・管玉3・勾玉1・土錘・土器片紡錘　古墳時代6世紀頃の溝・須恵器・土師器・鉄滓・炉跡　平安時代～中世・土壙・須恵器・古銭・白磁・柱穴列3
29	備中平（ひら）遺跡（7分冊）	北房町五名	48.7.17 49.3.31	9	2,500	栗野・井上 岡田	縄文時代円形土壙1・早期土器片・乳棒状石斧2・石鏃・弥生時代，土壙　方形土壙・土器片・石鏃　古墳時代前期の住居址，方形土壙・古墳（横穴式石室のこわれたもの），須恵器・土師器　奈良～平安時代，建物16，溝状遺構7・井戸3・須恵器，土師器・墨書土器（「吉祥」）緑釉陶器片1・鉄鏃状鉄器1・鉄製円盤1　中世，窯跡・鍛冶炉状遺構3・ピット・溝・炭・鉄滓・須恵器・土師器・青磁
30	谷尻（たんじり）遺跡（6分冊）	北房町 上水田	48.10.20 48.12.27 49.4.1 50.3.31	15	4,500	高畑・山磨 栗野・井上	縄文時代早期・後期・晩期包含層・石鏃・石斧・サヌカイト片　弥生時代土壙墓29以上住居址4・柱穴・溝・紡錘車・ニワトリ形土製品・太形蛤刃石斧・石鏃　古墳時代・住居址3・包含層・須恵器・土師器　奈良～平安建物・柱穴・溝・土器溜り　中世～近世　土壙墓・井戸・建物・古銭・青磁・須恵器土師器・備前焼・瓦器・鉱滓・土錘・陶器・水晶片
31	桃山遺跡（7分冊）	北房町 下呰部	48.7.17 48.9.26 49.4.1 50.3.31	15	2,800	田仲・二宮 福田・竹田	縄文時代，後期・土器片・黒曜石　弥生時代中期・後期，住居址・建物・袋状ピット・太型蛤刃石斧・石鏃・石庖丁（打製・磨製）・砥石・分銅形土製品　古墳時代，古墳1（横穴式石室）・土壙墓？・須恵器・土師器　平安時代，土壙墓・鍛冶炉・建物・溝・須恵器・土師器・鉱滓　中世～近世，墳墓
32	植木（えき）遺跡（6分冊）	北房町植木	48.10.20 49.3.28	6	1,280	田仲	弥生時代末～古墳時代初頭，水路　室町時代～鎌倉時代，館跡・建物11・池？・井戸1・鉄鏃15本・たがね5本・短刀1・刀子1・火打鎌・備前焼・須恵器・宋銭28枚（永楽銭1枚・北宋銭19枚）・青白磁・砥石4・硯1・鉄滓・炉壁・ふいごの羽口・潔椀5・曲物2・井戸枠
33	空（そら）古墳（6分冊）	上房郡北房町大字下呰部空	1975.7.14 1975.8.20	1	122	田仲	横穴式石室，出土遺物・装身具（金環5・勾玉4・管玉2・錬り玉4），鉄器（鏃24・刀子6・ノミ5・その他4）須恵器（横瓶2・壷2・把手付碗1・平瓶4・提瓶8・甕3・高杯13・杯48・蓋4）土師器（壷3・杯1・高杯2）貝殻，石室下及び墳丘内の遺構，遺物（弥生時代中期のピット及び土器，押型文土器片）
34	戸谷遺跡（6分冊）	大佐町 田治部	49.7.1 49.7.31	1	300	橋本・井上 浅倉	縄文時代，前期土器片・奈良末～平安時代，住居址1・須恵器・土師器・鉄器2点
35	塔（とう）の畝（うね）遺跡（6分冊）	親見市 上熊谷	49.10.1 49.10.31	1	100	井上	平安末～中世，石積遺構（方形），須恵器・瓦質土器・五輪塔
36	青地（あおち）遺跡（旧史跡七人塚）（6分冊）	新見市 下熊谷	49.7.1 49.12.30	6	1,400	井上・浅倉	縄文時代，早期・前期，土壙・土器片・サヌカイト片・黒曜石片・チャート片　弥生時代中期・後期，土壙墓・住居址2・柱穴・土器片・提砥・　古墳時代前期・後期，円墳（周溝のみ）・住居址1・須恵器・土師器

遺跡番号	遺跡名(掲載分冊)	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積(㎡)	主な調査員	概要
37	下熊谷宮の鼻古墳(13分冊)	新見市下熊谷字宮の鼻461	1975.11.6 1975.11.12		桑原遺跡に含む	伊藤	丘陵先端に存在した箱式石棺，1基，工事中に発見されたため，墳丘・周溝等不明 石棺内より人骨頭部片のみが出土，石室は用地外へ移築
38	桑原遺跡(10分冊)	新見市桑原	1976.7.19 1976.8.24	1	50	内藤	小石積の塚1 宋銭および寛永通宝等古銭多数，特殊壺片
39	岩倉遺跡 岩倉古墳群(8分冊)	新見市高尾岩倉	1974.11.13 1975.8.5	9.5	700	浅倉 岡田	遺構，横穴式石室墳3，竪穴式石室墳1，箱式石棺11，石蓋土壙2，土壙墓1，火葬墓1，竪穴式住居址6，窯状遺構4，溝状遺構列石遺構，土壙，ピット，その他，縄文式土器（後期），弥生式土器（前期，中期，後期）土師器，須恵器，備前焼，黒曜石石鏃，サヌカイト石鏃，石庖丁，紡錘車，砥石，鉄鏃，鉋，釘，刀子，鉱滓，金環，玉類，人骨
40	宗金遺跡(13分冊)	新見市西方宗金	1976.3 1976 10.7	7	3,000	井上 内藤 浅倉	古墳2，土壙，土壙墓，住居址4，中世の建物址，弥生式土器，須恵器，土師器，青磁，白磁，鉄滓，銀環
41	二日市場遺跡(10分冊)	新見市西方上市	1976.1.19 1976.2.10	1	祐清塚に含む	岡田 浅倉	平野部のグリッド調査，柱穴，土壙，陶磁器，古銭，須恵器，土師器，鉄滓
42	横見古墳群(9分冊)	新見市西方横見	1975.8.6 1975.12.5	4	横見墳墓群に含む	岡田 浅倉 田仲	方墳1，(石列を外部施設としてもつ)円墳1，(玄室の1部のみ)須恵器，土師器，鉄器，人骨，玉類，石帯，古墳に伴わぬ遺物として縄文式土器片，弥生式土器，土師器ほか
43	横見墳墓群(9分冊)	新見市上市横見	1975.4.1 1975.12.16	9	2,600	下澤 友成	弥生時代後期～古墳時代中期，13基の方墳石室墓9，箱式石棺墓17，木棺直葬墓109，石蓋土壙墓6，中世墓1，近世墓10その他
44	谷内遺跡(8分冊)	新見市西方谷内	1975.10.6 1976.2.17	5	945	岡田 浅倉 田仲	火葬墓3，土壙墓1，炭窯1，遺跡，須恵器蔵骨器，土師器蔵骨器，土師器ほか
45	祐清塚遺跡(10分冊)	新見市西方谷内	1976.1.19 1976.2.10	1	50	岡浅 田倉	1次調査は文献調査班による，グリッド調査を行ったが埋葬に関わる遺物，遺構は確認できなかった
46	迫三方塚古墳群(9分冊)	神郷町下神代	1975.9.3 1975.11.30	3	678	竹田	横穴式石室1，須恵器，土師器，大刀，刀子 シスト1，住居址3，弥生式土器
47	新市谷遺跡(9分冊)	阿哲郡神郷町新市	1975.7.16 1975.12.	5	800	井上 竹田	住居址16，貯蔵穴3，土壙墓2，土壙3，建物2，弥生式土器，土師器，鉄製クワ先，鉋，鎌，鉄鏃2，鼓形器台，鉄鏃
48	古坊遺跡(9分冊)	阿哲郡神郷町新市	1975.12.10 1976.1.28	1.5	新市谷遺跡に含む	井上 竹田	土壙墓24，住居址3，土壙3，弥生式土器（後期），特殊器台片，サヌカイト片
49	岩屋城址(10分冊)	阿哲郡神郷町下神代	1976.2.24 1976.5.20	3	2,000	岡田 秀島	経塚，掘立柱建物・柱穴列・柱穴・経筒片・銭貨(宋銭・寛永通宝)，湖州鏡・和鏡，青白磁合子・青白磁小壺・青磁片・須恵器片・鉄器片・土師器片・青銅錫丈残欠
50	門前中屋古墳(11分冊)	阿哲郡神郷町下神代	1次調査 1976.4 1976.6 2次調査 1976.9.16 1976.10.8	1.5	380	葛原 竹田 岡本 井上 内藤	横穴式石室墳1，須恵器28，鉄鏃5，刀子1，金環2，管玉3，切子玉
51	安信古墳群(8分冊)	阿哲郡神郷町下神代	1975.4.22 1975.7.16	3.5	500	井上 竹田	横穴式石室4，石棺2，土壙墓2，須恵器(杯，甕，高杯)，刀子，銀環，勾玉，ガラス小玉，土製小玉，切子玉，鉄鏃，鉋
52	塚谷古墳(8分冊)	阿哲郡神郷町三信字塚谷	1975.5.1 1975.6.12	1.5	156	正岡 二宮	円墳，横穴式石室，須恵器（杯身，杯蓋）壺片，銀環，ガラス玉
53	佐藤遺跡(13分冊)	阿哲郡哲西町上神代	1976.4.5 1976.9.27	4	750	竹田 岡本	縄文時代の土壙，住居址，縄文式土器，古墳時代の住居址7，土師器

遺跡番号	遺跡名（掲載分冊）	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積（㎡）	主な調査員	概要
54	山根屋遺跡（12分冊）	阿哲郡哲西町上神代	1976・1・19 1976・9・5	9	1,350	竹田 岡本	弥生時代住居址29，弥生式土器，石鏃，古墳時代の方形台状墓1，シスト20，刀子，鏃，鉄斧，鎌，剣，土壙1，円墳（内部主体シスト）2，鉄鏃，横穴式石室3，須恵器，大刀，金環，奈良時代の火葬墓1
55	道上（みちのうえ）遺跡（13分冊）	阿哲郡哲西町上神代	1976・5・28 1976・10・18	6	山根屋遺跡に含む	岡本 竹田	横穴式石室，須恵器，馬具，太刀，鉄鏃，玉類，中世墳墓4，土師器小皿，五輪塔群備前焼
56	中林遺跡（10分冊）	阿哲郡哲西町上神代	1975・3・1 1975・3・30	1	400	井上	発見時に確認されていた地形は，谷川が，山道として利用されていた凹部と考えられる
57	野田畝遺跡（11分冊）	阿哲郡哲西町上神代	1975・12・1 1976・2・29	3	800	高畑 福田	弥生時代竪穴式住居址96以上，土壙墓1，溝1，大形ピット16，小形ピット多数，古墳時代，竪穴式住居址2，古墳3；歴史時代，窯跡1，土壙墓1，柵列1，近世土壙墓6
58	西江遺跡（10分冊）	阿哲郡哲西町上神代字西江	1975・7・1 1976・10・10	15.5	4,500	田仲正二 岡宮	縄文晩期，土器，黒曜石，弥生前期，中期住居址，方形土壙，後期，住居跡，弥生後期～古墳時代前半の土壙墓132（石蓋土壙，木棺直葬）特殊器台，ガラス玉，古墳時代住居跡，古墳5，（土壙，箱式石棺），須恵器，（提瓶，高杯，杯）刀子，ガラス製勾玉，同小玉，奈良，平安時代の建物，須恵器，土師器，円面硯，中近世，建物，鍛冶炉，墓壙，方形土壙，備前焼，亀山焼，青磁，瓦器，土錘，鉄釶，鉄鎌，刀子
59	二野（ふたの）遺跡（9分冊）	阿哲郡哲西町矢田	1975・7・1 1975・9・30	3	800	高畑 福田	先土器時代，ナイフ形石器，（サヌカイト）1点，縄文時代土器片，前期，後期，晩期弥生時代土器片，中期，後期，石器，中期，鏃1，磨製石庖丁1，スクレーパー2，古墳時代，横穴式石室（二野古墳），出土遺物，壷（須恵器1，土師器1）杯（須恵器1）金環1，銀環1，平安時代，建物5，鍛冶の作業場1，柵列1，近世，近世墓……数基
60	光坊寺古墳群（9分冊）	阿哲郡哲西町矢田	1975・7・1 1975・9・30	3	241	高畑 福田	古墳3，1号墳2列の石列（葺石）を有する円墳，竪穴式石室，組合せ式石棺2，木棺直葬土壙2，出土遺物，壷1，高杯1，鉄片1，鏡（珠文鏡1，ガラス製小玉4，低脚杯1，鈴1，2号墳，円墳，木棺直葬人形残影，出土遺物，直刀1，11号墳，方形台状墓石枕状の角礫2を有する木棺直葬土壙，出土遺物，周溝内より，小形丸底坩1
61	土井遺跡（10分冊）	阿哲郡哲西町矢田	1975・10・1 1976・11・30	2	800	高畑 福田	建物，21以上，溝4，出土遺物，古銭，弥生式土器片，土師器片，古備前焼片
62	土井城址（11分冊）	阿哲郡哲西町土井	1975・10・1 1976・2・20	5	1,800	下澤 友成	鎌倉時代～室町時代の中世山城，建物3以上，土塁，柵，溝，土師質皿，釘，備前焼，弥生後期の住居址3，弥生式土器，古墳時代後期の住居址1，横穴式石室1（須恵器，土師器，馬具），横穴2（須恵器），石蓋土壙1
63	鳴山古墳群（11分冊）	阿哲郡哲西町土井字鳴山	1976・2・20 1976・3・20	1	200	下澤 友成	当初古墳と考えられていたが，発掘調査の結果室町時代～鎌倉時代に至る古墓が存在した。土師質皿7
64	横田東古墳群（13分冊）	阿哲郡哲西町矢田	1976		300	伊藤 山磨	古墳時代後期，円墳2（横穴式石室，竪穴式石室），石蓋土壙墓8，箱式石棺2，土壙墓4，須恵器，土師器，鉄器，玉類，金環
65	横田遺跡（13分冊）	阿哲郡哲西町矢田	1976・5・24 1976・10・29	5	2,400	岡田 秀島	弥生時代遺構（土壙墓群，竪穴住居址，袋状ピットほか）古墳時代以降（古墳2基，溝状遺構，竪穴住居址群，掘立柱建物，柱穴群）磨製石斧，石槍（サヌカイト），弥生式土器，土師器，須恵器，鉄斧，鉄滓，刀，珠文鏡ほか

遺跡番号	遺跡名（掲載分冊）	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積（㎡）	主な調査員	概要
66	藤木城址（13分冊）	阿哲郡哲西町畑木	1976.7.12 1976.10.20	4	600	下浅 澤倉	遺構，頂上の平坦部に土塁，柱穴，石蓋土壙1，土壙墓2，土壙1，南側谷部に版築，北側谷部に貯蔵穴1，掘立柱建物2，土塁遺構，弥生式土器（後期），須恵器，瓦器，青磁，釘
67	大倉遺跡（10分冊）	阿哲郡哲西町青谷	1976.4.16 1976.7.5	3	800	松友 本成	弥生時代中期の溝，土壙，土器，弥生時代後期の土壙，ピット，土器，古墳時代後期の住居址1，土壙1，ピット，石組溝，須恵器，土師器，中世～近世の土器
68	忠田山（ちゅうたやま）遺跡（13分冊）	阿哲郡哲西町四日市	1976.6.15 1976.10.20	5	500	福中 田野	古墳時代前半，住居址4，貯蔵穴2，円形周溝2，土器，砥石，鉋室町時代，掘立柱建物11軒以上，井戸2，鍛冶炉1，池状遺構2，古道1，溝3，備前焼，須恵器，亀山焼系土器，青磁，鉄器，鉄滓，不整形土壙約25
69	御供川（ごくうがわ）遺跡（11分冊）	阿哲郡哲西町畑木	1976.5.11 1976.8.26	3	880	松友 本成	弥生時代後期～古墳時代前期の住居址1，溝，土壙，ピット，土器
70	四日市古墳（12分冊）	阿哲郡哲西町畑木	1976.4.19 1976.7.9	2.5	78	下浅 澤倉	遺構，横穴式石室，円墳1，柱穴数本，土壙1，遺物，弥生式土器（後器）数片，須恵器，甕形土器数片
71	清水谷遺跡（12分冊）	阿哲郡哲西町畑木	1976.3.10 1976.7.8	4	1,440	下友浅 澤成倉	弥生時代，掘立柱建物1，土壙3，古墳時代，竪穴住居址1，中近世，建物3，墓10，遺物，縄文式土器（晩期），弥生式土器（前期，中期，後期）土師器，須恵器，青磁，銅鐸型土製品，分銅型土製品，紡錘車，寛永通宝200枚以上，棺釘，キセル，横櫛，人骨
72	塚の峯遺跡（12分冊）	阿哲郡哲西町大竹	1976.3.6 1976.8.11	5.5	1,200	高福中 畑田野	縄文式土器片（前期） 弥生時代後期前半～古墳時代前半住居址20，配石墓1，貯蔵穴5，土器，石庖丁，円墳2（木棺直葬2，シスト1，石蓋土壙1），土壙1，刀子1，須恵器，鍛冶炉1，ドーナツ状土壙3
73	二本松遺跡（12分冊）	阿哲郡哲西町大竹	1976.5.22 1976.7.17	2	500	伊山 藤磨	弥生時代末～古墳時代前期，竪穴住居址2，ピット，平安・鎌倉時代，掘立柱建物5，溝1，須恵器，土師器，備前焼，青磁
74	岸本下遺跡（11分冊）	阿哲郡哲西町大竹	1976.4.22 1976.5.25	1	800	伊山 藤磨	古墳時代前期，竪穴住居址1，溝状遺構2，土師器，時期不明，土壙墓4
75	岸本城址（12分冊）	阿哲郡哲西町大竹	1976.8.10 1976.10.27	2	360	田正松友 仲岡本成	鎌倉時代～室町時代の山城跡，本郭と二つの郭を調査，建物2，土壙，溝，柵，土師質皿，備前焼，弥生後期の住居址1，弥生式土器，古墳時代前期の土壙墓13，古墳時代後期の住居址1，土師器
76	大畑遺跡（13分冊）	上房北房町上呰部	1977.12.1 1977.12.13	0.5	300	井 上	江戸時代の柱穴，鍛冶炉，焼土，陶磁器（伊万里焼），土師質の小皿

Ⅰ　中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過と問題点(総括)

標題のことがらについては既に昭和51年度まで調査年度単位に中国縦貫道発掘調査報告書に述べられてきている。

昭和52年度をもって9年間にわたる調査が終了する機会にこれらの特筆すべき事項をとりまとめ，さらに報告書作成・遺物整理保管を中心にして記載する。

1.　事前の埋蔵文化財分布調査と路線決定

昭和42年第一次整備区間の路線が発表され，県教委は文化財保護委員会（現文化庁）の緊急分布調査費の補助を得て，岡山県遺跡保護調査団に路線内の分布調査を委託し，昭和43年度当初にはその結果が提出された。分布調査の範囲は路線を含めた巾約 0.4Kmについて実施した。その結果，100ケ所にも及ぶ古墳・遺物散布地点があった。

昭和42年に，買収用地が決定し，県教委は分布調査の結果をもとにして用地外のもの，地形等から一つの遺跡と考えられるものなど一部の遺跡保護調査団員と検討したが，昭和43年津島遺跡の問題を契機に県教委と遺跡保護調査団の関係が悪化し，県教委が独自で決定し，27遺跡とした。

昭和43年，落合Ⅰ・Cより広島県境までの第二次整備区間 62.40Kmも路線が内定し，高梁教育事務所を中心に関係市町村による分布調査委員会を設置し実施した。この区間の分布調査の早期実施を対策委員会から強く要請されたが，県教委は，従来の岡山県遺跡保護調査団に委託する方法を廃し，市町村に委嘱した。

特にこの調査結果に基づき新見市以西のルートが決定され，道路建設用地内の埋蔵文化財包蔵地は，山城1，墳墓群1，古墳5，祭祀遺跡1の8遺跡となった。昭和49年になって，発掘調査実施計画策定のため，上記8遺跡の現地踏査を行ったところ多数の問題点が生じた。これらを種々検討した結果，遺跡の工事中発見の防止と調査期間，調査体制を早急に確保整備するためには，再度ルート内の確認調査を実施することが良策であるとの結論に達した。ルート内確認調査は，昭和49年8月27・28日にわたり実施され，ほぼ同時に新見市においては，岡山県埋蔵文化財5か年分布調査の実施時期にあたっていたため，その成果を加え，これらを総合して検討したところ新たに26遺跡を数え，当初の4倍となる総計32遺跡となった。

以上，事前の分布調査の経緯を述べたが，ルート策定の資料としての分布調査の重要性を痛感するとともに，今後にあってはならない教訓としたい。

2.　遺跡の保存と発掘調査報告会等の開催

埋蔵文化財の破壊に対する危惧は岡山県内の考古学研究者，歴史研究者をはじめ，兵庫県を含む中

国地方の関係各県の考古学研究者にも強く，日本道路公団，日本国有鉄道，各県知事宛に埋蔵文化財の保存を要請するなど広汎な保護運動が行われていた。岡山県内においても岡山県文化財を守る会，岡山県遺跡保護調査団は日本道路公団などに道路用地内の埋蔵文化財の保存等の要請を行なった。

久米町宮尾所在の久米廃寺，津山市総社所在の美作国府跡，津山市河辺所在の天神原古墳群については重要な遺跡であることから，これらの道路部分については中国縦貫自動車道建設推進本部を通じ日本道路公団に路線変更を要望した。これに先だって，岡山県文化財を守る会は美作国府跡の保存を日本道路公団に要請している。これに対して日本道路公団は総裁の現地視察ののち次のように回答した。

① 美作国府跡については，国衙域と推定される部分―国府域内中心部と推定される部分を横断する路線であったものを約 0.2㎞北に変更すること。

② 久米廃寺・天神原古墳群部分については，周辺の土地状況等から変更はできない。

久米廃寺・宮尾遺跡の保存については第一次調査の結果に基づき，県教委と日本道路公団と再び協議を行ない，つぎのような結論がでた。宮尾遺跡の台地部分に高架橋を建設しても現状では地表との空間がわずかとなり，さらに高くすることは技術的に困難である。したがって久米廃寺の建物跡を主体にして宮尾遺跡の弥生時代の農業用水路と考えられる溝を含めた 174m間を高架橋により保存するというものであった。そのため宮尾遺跡の大部分の保存は不可能となった。第二次整備区間内では3遺跡において部分的な保存策をとることができた。その一つは宮の前遺跡で検出された縄文晩期の貯蔵穴で，しばしばトチ・ドングリなど堅果類を穴内に残す遺構であり，いま一つは，縄文時代後期の住居址を検出した佐藤遺跡（哲西町）である。いずれも河砂で穴および遺構面を被覆する方法を介入させて，しかるのち土盛工法をとることになった。

他の一つは，北房町地内に所在する桃山遺跡内にある横穴式石室墳一基の処置についてである。公団との協議結果，幹線道工事そのものよりむしろ付帯工事としての側道と競合することが判明したため，側道および法面の設計変更によって，かろうじて現状保存できることとなった。

横見墳墓群は，建設ルート策定資料の埋蔵文化財包蔵地に記載されておらず，当初は同尾根末端に所在する横穴式石室墳1基が調査対象となっていた。昭和50年3月に岡山県5ケ年埋蔵文化財分布調査により確認され更に同年4月県教委において再調査の結果，墳墓と推定される13基のマウンドが確認されたため発掘調査に着手した。発掘調査の初期の段階で次のことがらが判明した。

① 弥生時代後期ないし古墳時代前期の方墳13基，石棺墓，木棺直葬墓等の墳墓群であり，弥生時代の終末期から古墳時代初頭にわたる墓制の変遷を解明する重要な遺跡である。

② 備中国北端に位置し，出土遺物等からも山陰（出雲東部）と交流がうかがえるため，貴重な資料となる。

昭和50年6月28日に開催された中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会において，遺跡の現状保存の意見が提案され，現状保存が可能であれば，発掘調査はこれ以上に進めることは好ましくない旨の指示を受けた。

直ちに，日本道路公団に遺跡の現状保存の検討を要請し，次の回答を受けた。遺跡の現状保存を検

討するとき，地元住民に及ぼす影響と保存に対する理解を得ることが最も重要な課題である。

① 横見墳墓群は，昭和50年３月にはじめて遺跡の所在が確認され，地元住民にも知られていなかった。したがって，道路公団の地元協議から設計・土地買収に至るまで，住民は全く知らなかったため，保存のコンセンスを得るには難しい条件が多い。

② 現状保存のための設計変更をするには，山間の貴重な平野部の一部や多数の家屋の立退きが必要であり，地元に対する影響が非常に大きい。

昭和50年８月28日開催の対策委員会で，道路公団提出の保存検討資料等を説明し，対策委員から今後更に一部保存を含めて検討することの要望があった。しかしながら，最終的には，発掘調査期間を延長（３ヶ月）し，充分の記録調査することとなった。

一方こうした保存協議とは別に発掘調査現場ならびに出土遺物を通じて地域住民に文化財保護意識の向上をはかるため昭和46年３月津山文化センターで中国縦貫自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告会（県教委主催）を３日間開催，遺跡のスライドによる紹介，出土遺物等の展示をおこない約２千人が訪れた。同時にパンフレットとして「古代の美作」を刊行した。また，久米廃寺，西原遺跡，下市瀬遺跡等で主に地域住民を対象に発掘調査現地見学会を開催した。

3. 発掘調査体制

発掘調査開始当初，複数の調査員による調査体制が望ましいことであるので，１遺跡の調査終了まで，その体制を変えないことを原則としていた。しかし昭和46年度，美作国府跡の調査では当初６名であったが，年度途中で３名に減少し，さらに，宮尾遺跡，押入西遺跡，二宮大成遺跡の調査に加わらねばならないこともあり，美作国府跡の調査を最後まで継続した調査員は１名であった。対策委員会からもこのことについての問題点を指摘された。しかし，昭和48年度からは１遺跡１名が原則となった。上記の体制へ踏み切った理由は幾つかの状況の推移が考えられるが，まず第一点は，昭和42年度以来もっとも深くかかわってきた山陽新幹線の建設が完了したこと，第二には，中国縦貫道の新見市以西の遺跡がわずか８ケ所であると認識していた点で，以上の発掘調査事務量の見通しのうえにたって，調査員の削減を，県独自の責任においてやらなければならないという重要課題に直面した事実をあげることができよう。したがって，県教育委員会は，調査員の希望を聴取しつつ，市町村派遣主事として，あるいは県立博物館等関連施設の職員に，または他府県への転出を勧めるなど，漸次，調査体制縮小への試みをとったのである。ところが新見市以西の発掘調査は８遺跡から急遽32遺跡となった。（詳細は分布調査の項に前述）その対策として

① 50年度は調査員を13名に増員し，１現場２調査員制とし，６班編成で調査を実施する。うち１名は，報告書作成に従事する。

② 遺跡の調査順序は工事工程にできるだけ支障をきたさないよう配慮し，双方で協議する。

県教育委員会は，埋蔵文化財の調査は，事前に確定しがたい未知な要素が多いため，計画の追加，延長の変更は当然あり得ることを条件として付け加えた。調査体制の確立にあたっては，次のような問題点を痛感した。すなわち発掘調査は，用地買収後でなければ実施が不可能な現状であるが，現社

会情勢での開発事業で最も困難なことは，用地の取得交渉であり，それに要する期間は長期にわたりまたその決着時期の見通しも不確実な要因が強い。したがって用地が取得されると，短期間のうちに工事着工となる場合が多い。開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の経費は原因者負担となっていることもあって，これらの状況のもとに事前に調査員を確保し，体制を整えておくことが非常に困難であるというところに調査体制が立遅れとなる根本的な原因があると思われる。しかも県段階においては，調査員雇用が非常に困難な状況にある。したがって，国および各自治体では全国的な規模で人的構成と配置などを根本的に検討すべき時期であることを付記しておきたい。

4. 調査報告書作成

中国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書は，通巻13分冊に76遺跡の調査を収録作成し本年度をもって終了することになった。

報告書の作成は，第一次整備区間（兵庫県境～落合ＩＣ）の発掘調査終了を契機に昭和48年７月以降順次実施してきたものである。

イ） 大規模開発に伴う発掘調査報告書作成

発掘調査期間が少なくとも２年以上にわたる大規模開発に伴う発掘調査報告書は，早期に遺物，図面，写真等の整理，報告書作成に着手すべきことはいうまでもない。しかしながら開発工事計画上発掘調査が優先され整理，報告書作成が後手にまわるのが実態である。また，温暖な瀬戸内海圏にある岡山県は，冬期においても若干調査条件が悪くなるにしても発掘調査がまったく不可能になることはないから，いきおい発掘調査優先の傾向が要請される。

したがって，中国縦貫道発掘調査報告書作成は前述のとおり発掘調査第５年次からようやくにして着手されたのである。その間において，日本道路公団に対して１年度の調査結果は次年度で整理作成することを強く要望してきたことは言うまでもないが，今後の検討課題として提起したい。

ロ） 発掘調査と併行しての報告書作成

大規模開発に伴う発掘調査は長期間にわたるため調査報告書作成が，必然的に発掘調査と併行して実施されることになる。中国縦貫道発掘調査報告書第１分冊～第７分冊は，昭和48年後半～51年し末までの間約３年６ケ月にわたり第２次整備区間の発掘調査と並行しつつ，35遺跡の調査を作成収録したものである。

報告書作成体制及び作成期間は発掘調査班の構成を調査員２名で編成し，原則としてうち１名が３ケ月単位で報告書作成に従事する交替制で実施したが，実際には調査員の間に不均衡がみられたようである。その間には，調査員の県外転出等もありその連絡調整に手まどる等種々の問題が生じた。

抜本的な対策は作成期間と体制をどうするかにある。反面，発掘調査期間についても開発工事計画上から必ず制約を受けるため，報告書作成期間と体制（人員）の確保については非常にむずかしくなる。今後少なくとも２年間発掘調査に従事し，翌年の１年は整理，報告書作成にあたる体制の確立を目標にして努力すべきであろう。

ハ） 発掘調査終了後の報告書作成

中国縦貫道発掘調査報告書第８分冊～13分冊及び補遺編については，昭和51年後半～52年度末の間約１年６ケ月にわたり報告書作成に担当調査員が専従して41遺跡の調査を収録された。

報告書作成体制と作成期間については，昭和51年度後半は発掘調査従事調査員全員で報告書作成にあたり，52年度は調査員の半数６名が報告書作成に従事した。この年度には百間川遺跡の調査が予測されていたため，これには発掘調査の頭初時期から１遺跡２名担当の原則で実施する計画を立てるとともに，51年後半において調査担当者間において出来るだけ支障をきたさないよう事前の調整準備期間をとる対応策を講じたが，やはり連絡調整に若干の問題が生じた。

作成期間については原則として発掘調査期間の２分の１を目標として計画を立案したが，一部の遺跡において基準に達し得ない例があったり，またその逆が生じる等なお改善の余地がある。しかしながら，従来しばしば問題となった発掘調査と併行しての作成期間に比較すればかなり前進したものと思われる。

開発に伴う受託事業の文化財調整は，開発側が一般的に発掘調査を第一義的として，報告書作成を副次的に考える傾向がある。

したがって，発掘調査終了後の報告書作成については開発側にその重要性かつ必要性の理解と了承を得るべく対応しなければなるまい。少なくとも発掘調査終了一年度前には，報告書作成計画を立案し確約を得るべきであろう。

ニ） 報告書作成の諸条件整備

報告書作成の基本的条件は期間と体制にあるが，その十分な確保は現状では非常に困難性があることはさきに述べたとおりである。

これを補う意味においても報告書作成上の諸条件を整備することも軽視できない。

① 整理作業員の専門技術の養成

報告書作成には，土器の復原，実測，鉄器処理，図面トレース等の作業量の比重が大きい。

したがって，長期雇用を条件に整理作業員に技術修得の養成をはかり調査員の補助的役割と協業が重要な課題となる。中国縦貫道報告書作成においても47年度～50年度には，津山市収蔵庫に３名，51年以降は岡山市西古松文化課分室に６名配置し土器の接合・製図などに著しい成果をみている。

② 報告書作成に必要な建物・設備の整備報告書作成は緻密な作業が要求されるため特に夏・冬期においても支障のない建物並びに作業効率をあげる複写機を中心とする設備の整備が必要である。岡山市西古松収蔵庫用地に報告書作成棟及び諸設備を一応整備したことが，作成期間・体制の問題点をかなり補ったし，こうした条件整備が発掘後の一切の作業の出発点になることを痛感した。

5. 遺物の整理と保存管理

中国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査は，昭和44年３月～52年12月まで76遺跡を実施したがこれに

伴う出土遺物は整理箱にして約 5,500箱を数える膨大な数量に達している。現在，県教委の岡山市西古松仮収蔵庫及び津山市教委の二宮仮収蔵庫に保管されているが，これら遺物の整理と保存管理についてはかならずしも十分な状態ではなく，今後の大きな課題である。

イ） 報告書作成に伴う遺物整理

報告書作成に伴い若干の整理がなされるが，大遺跡については報告のための最低限の処置にとどまる例が多く，未了の部分が少なくない現状にある。

今後，未整理の遺物の整理と大量の遺物の保存管理が課題となる。特に鉄器については早期に化学的含浸処理が必要であるが，ようやくにして52年4月から岡山市西古松収蔵庫に処理機一基が設置され，処理が行なわれる体制が整った。同様に木器類についても整理作業員による水槽管理が，常時出来る体制は出来たが今後化学的保存設備整備を検討すべきであろう。

土器類については，少なくとも洗浄・注記の基本的な整理作業は完了すべきである。現在，中国縦貫道関係出土遺物については洗浄作業は完了し，注記作業が約4割方未了となっている。

ロ） 遺物の収蔵管理と活用

岡山県教育委員会では，約10年間の発掘調査で出土した遺物約12,000箱を大半が未整理の現状で収蔵管理している。今後さらに百間川改修・瀬戸大橋・山陽自動車道など大規模な公共事業の計画決定がなされていることを考慮すれば，必然的に埋蔵文化財の発掘調査量および出土遺物は増加の一途をたどるものと予想され，県教育委員会での収蔵管理にも物理的に限度がある。

遺物は，出土した市町村の公共機関で収蔵・管理し活用するのが適切と考えられる。今後は市町村管理施設へ移管することを積極的に検討したい。

6. むすび

中国縦貫道発掘調査は約9年間の長期にわたり実施され，岡山県北部の歴史の解明にかなりの手がかりとなる成果を収めたと言うものの貴重な76遺跡が消滅し，残されたものは通巻13分冊におよぶ多量な記録報告書と約5500箱の膨大な出土遺物であるのが，いつわらざる実態である。しかも出版された調査報告書は受託事業として限られた期間において，最大の努力を結集したものであるが，未整理のものが残されており，このなかには将来において，貴重な学術資料となるものが含まれていることは当然予側される。

岡山県教育委員会として，今までにない大規模な中国縦貫道埋蔵文化財発掘調査を一応終了するが，今後，調査記録及び出土遺物を充分活用し，文化財保護思想の啓蒙と地域の歴史解明に役立たせることが文化財行政に課せられた最も重要な使命であろう。

中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会記録

中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会は昭和44年４月岡山県遺跡保護調査団からの申し入れに基づいて設置され，現在例言に記しているとおり対策委員を委嘱している。

昭和44年久米廃寺の発掘調査以来９年の長期間，発掘調査・報告書作成さらには遺跡保護保存にわたり，ご助言・ご指導を得て多大の成果を得たことを感謝いたしたい。

対策委員会記録は順次報告書に記載しているが昭和52年度分は下表のとおりである。

（昭和52年度）

年月日	場所	審議事項	指摘（要望）・その他
52.6.25	岡山市西古松 文化課分室	1) 中縦報告書８の検討・反省 2) 〃 ９の進行状況及び内容説明と検討	1. 頁数を制約しないよう配慮すること 2. 写真に改善を計ること方位・スケールを統一すること
52.10.1	岡山市西古松 文化課分室	1) 中縦報告書９の検討・反省 2) 〃 11の進行状況及び内容説明と検討	1. 作成期間を十分に配慮すること 2. 文責を明確にすること
53.1.21	岡山市西古松 文化課分室	1) 中縦報告書10の検討・反省 2) 〃 12の進行状況及び内容説明と検討	1. 図版のレイアウトに改善を計ること
53.3.24	岡山市西古松 文化課分室	1) 中縦報告書11の検討・反省 2) 〃 13の内容説明と検討 3) 補遺編の内容説明と検討 4) 中国縦貫道埋蔵文化財調査終了に伴う全体反省討議	1. 補遺編は，補って完成する意義からみて内容に欠ける面がある。今後，検討を要する。

大畑（おおばたけ）遺跡（76）

例　　言

1．この報告書は，中国縦貫自動車道の建設に伴い発掘調査された大畑（おおばたけ）遺跡の調査報告である。遺跡の所在地は，上房郡北房町上呰部（じょうぼうぐん　ほくぼうちょう　かみあざえ）である。

2．調査期間は，昭和52年12月１日から，同月13日までである。

3．発掘調査は井上　弘が担当し，松本和男の援助を得た。

4．報告書の作成は井上が行い，その作業は，岡山県教育庁文化課分室（岡山市西古松265）にて行った。

発掘調査，および，報告書作成に伴い作成した実測図，写真等，また，出土遺物は文化課分室にて保管している。

6．この報告書の位置図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の1/50.000の地図を使用した。また，遺跡の地形図は，日本道路公団の1/1000路線図をトレースしたものである。

承認番号 昭53　中複，第29号

7．発掘調査を実施するについては，下記の諸機関より種々の協力，援助を得た。また，発掘調査に同意され，便宜を与えられた地権者の方々に感謝いたします。

北房町企画開発課

北房町教育委員会

《発掘作業員》（敬称略）

中山明正　谷口定一　山下潔　相原久子　中山品恵

山下のぶよ　片岡静子　中山千代野　植木栄

目　　次

本文目　次

1　調査に至る経過…… 27
2　遺跡の位置…… 27
3　調　　査…… 30
　A地点…… 30
　B地点…… 32
　出土遺物…… 33
4　ま と め…… 35

図　目　次

第1図　遺跡の位置図（1/5万）……28
第2図　遺跡の地形図（1/1000）……29
第3図　A地点トレンチ断面図……31
第4図　A地点発掘区全体図……31
第5図　焼土（1/10）……32
第6図　鍛冶炉（1/10）……32
第7図　柱穴実測図……33
第8図　B地点　トレンチ及び断面図……34
第9図　出土遺物実測図（1/4）……35

図版目次

図版1－1　遺跡の遠景
　　1－2　A地点全景
図版2－1　A地点第1・2トレンチ
　　2－2　A地点第2トレンチ断面
図版3－1　A地点発掘の全景
　　3－2　鍛冶炉，柱穴の全景
図版4－1　B地点，第1トレンチ柱穴検出状態
　　4－2　B地点第1トレンチ全景
図版5－1　焼土
　　5－2　鍛冶炉
　　5－3　碗
図版6　　出土遺物

1　調査に至る経過

中国縦貫自動車道も，北房インターチェンジまで開通し，さらに西へと延長工事が続けられている。この自動車道は，4車線の道路として完成している。この中で，大畑遺跡付近は，地形的な制約もあって，2車線のみが設計され着工されていた。残りの2車線は，計画にはあっても未定であり，設計協議が続けられていた。その設計協議も整い路線が決定した段階で，岡山県教育委員会に対して遺跡の有無に対しての申し入れがあった。そこで県教委は，昭和52年3月に新たに決定した路線に沿って遺跡の分布調査を実施した。その結果，ここに報告する大畑遺跡が路線にかかることが判明し，発掘調査の対象地とされた。しかし，その段階では，路線が決定したのみで，買収は未了であった。県教委としては，未買収地の発掘調査は実施しないのが原則であるため，調査時期は用地買収の完了するまで待つことにした。

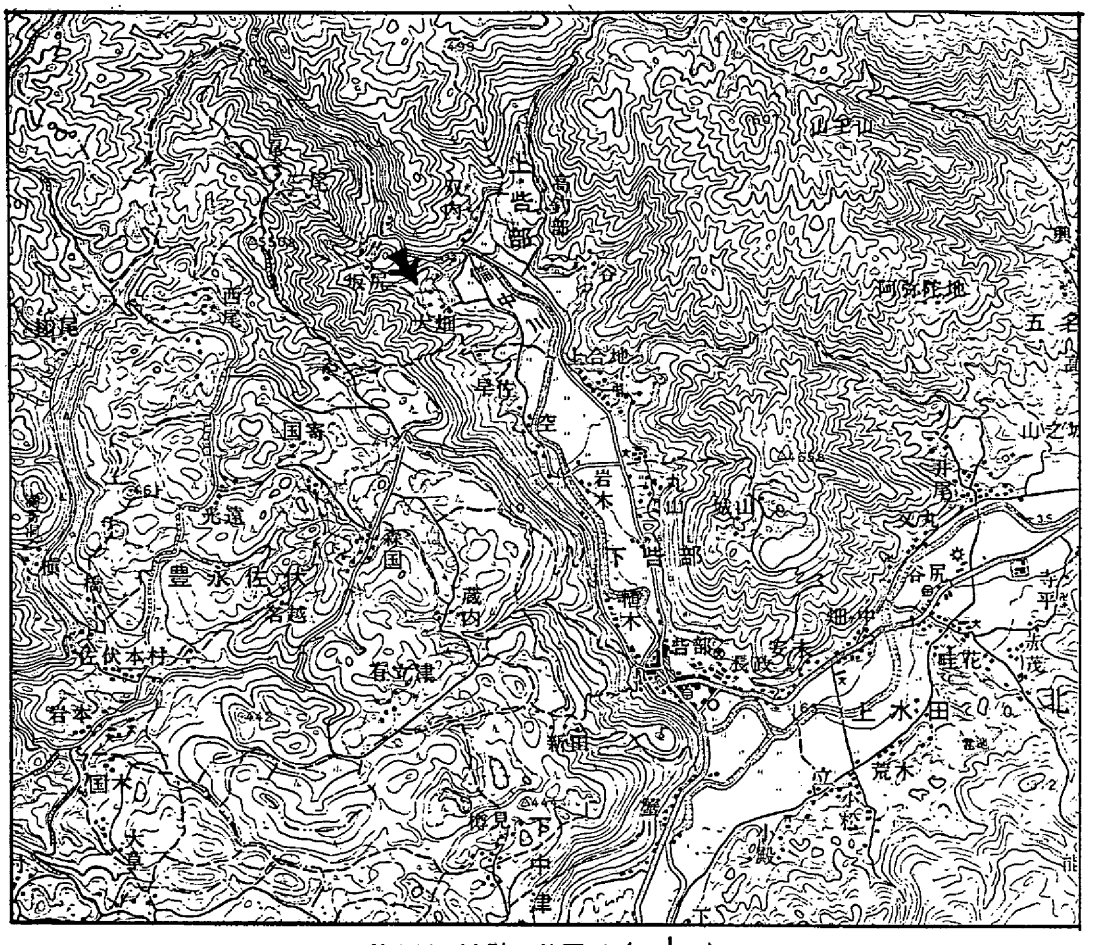
しかし，用地の買収は早急には完了せず，その完了見込は昭和53年5月頃と見做されるに致った。道路公団としては，早期着工を望むにもかかわらずそのような状態であり，用地買収完了後に発掘調査を実施しておれば，工事完了の時期が公団の予定に合わなくなる状況さえ生じてきた。そこで，用地買収後に早急に工事に着手する必要を感じた公団は，未買収地ではあるが発掘調査を実施するために，地権者の同意を得て，県教委に対し，発掘調査の早期実施を求めてきた。県教委としては，未買収地であるという問題点はあるが，公団の要望を入れて調査に着手することにした。同地は，山間の地であるため，厳寒の時期はできるだけ避けることとしたが，結局12月に着手することになった。調査期間は，12月1日から，同月13日までである。

調査に至る経過の概略は以上であるが，ここで遺跡名について触れておきたい。遺跡分布調査終了時での遺跡名は，『大迫遺跡』であった。それは，手元に有った地図に依拠してその字名に拠ったものである。しかし，同町に問い合せた結果，『大迫』なる地名は無く，同地は『大畑』と呼ばれている旨を知った。道路公団との契約等では『大迫遺跡』としたが，前例が地元の字名を使用して遺跡名としていることから，『大畑遺跡』と改称することとした。

2　遺跡の位置

大畑遺跡は，上房郡北房町上呰部に所在する。周囲に山稜がせまる盆地の一角に，遺跡は所在する。盆地の中央には備中川が南流しており，その周辺は備中川により開析された平地が見られる。遺跡は，川の西方に位置し，山稜の裾に見られる緩斜面上に立地している。遺跡に西接する山稜の斜面は，急崖を成して遺跡に迫っている。その急崖も登りつめると平坦となり，阿哲台と呼ばれる台地となる。この北房町付近から隣接する新見市を経て広島県帝釈峡にかけては石灰岩地帯であり，鍾乳洞，カルスト台地が見られる。

北房町内の遺跡の在り方は以前から注目されるところであった。古墳，前方後円墳の所在，さらに

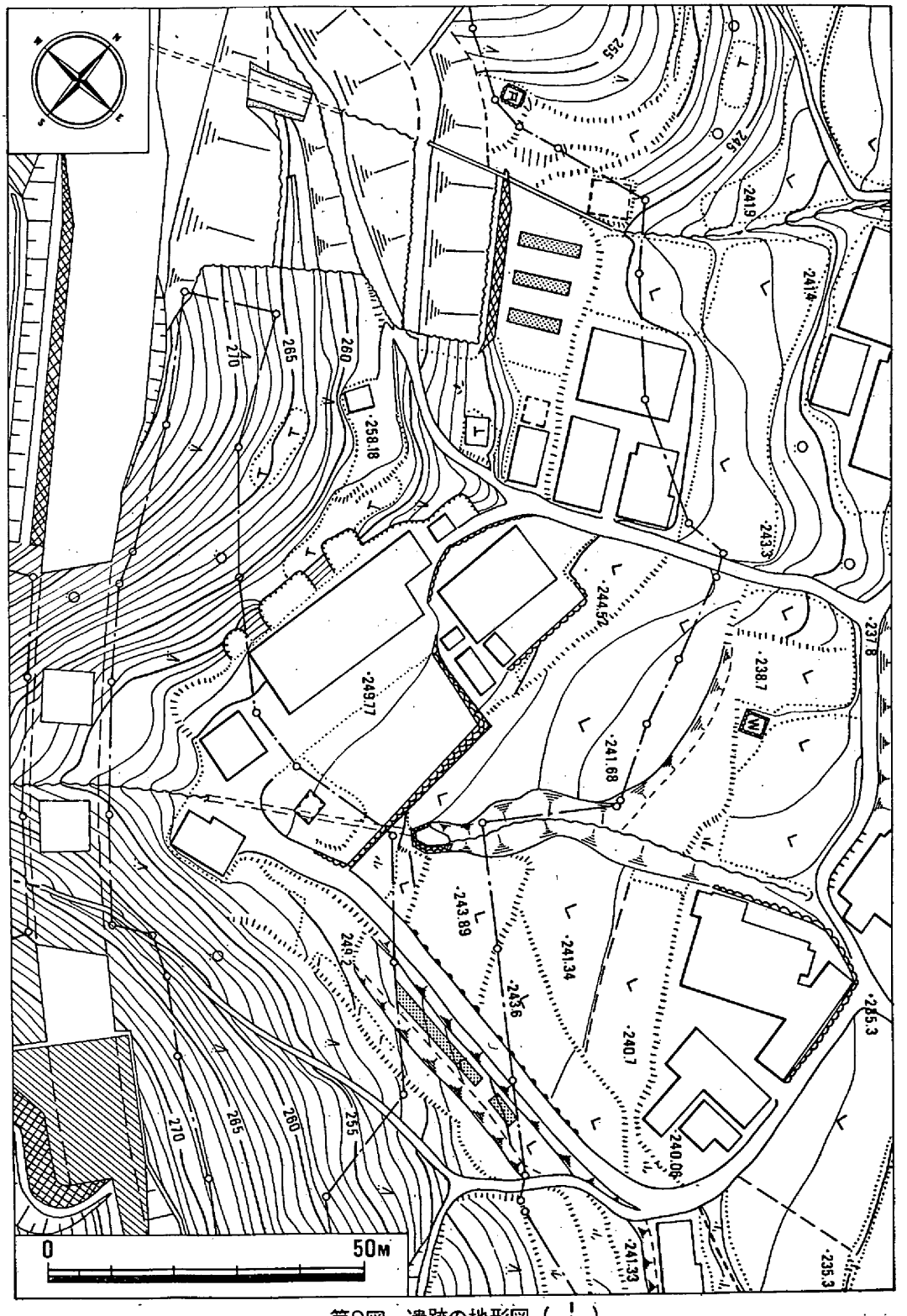


第1図　遺跡の位置図（$\frac{1}{50000}$）

は，白鳳期の創建と考えられる赤茂廃寺等が，岡山県の中北部の小平野を中心にまとまって存在することは注目される点である。それに加えて，自動車道に関係して調査した遺跡の内容はさらに厚みを増すものと言えるであろう。それらは，主に上水田を中心に展開しているようであるが，その上水田に次ぐ地域として告部が考えられる。平地の広さとその周辺に見られる低丘陵の在り方等，地理的にも上水田が有利とし得るであろう。

この告部地内で，自動車道に関連して植木遺跡，空古墳が調査された。植木遺跡は中世の建物，井戸，堀等を検出し，多くの遺物が出土した。さらに，空古墳は，全長8.9mの横穴式石室墳で，須恵器約80点，鉄器39点，装身具15点と多量の遺物が出土した。この空古墳は，大畑遺跡の南約1Kmに位置している。

大畑遺跡は，西と北とを山稜でさえぎられ，南には舌状の尾根が延びている。それらに囲まれた中に，東に向けて緩やかに下る斜面に遺跡は広がるものと推測される。遺跡の中心は，現在の集落とほ



第2図　遺跡の地形図（$\frac{1}{1000}$）

ぼ重複しているものと推察される。そのため，遺跡の範囲は限定し難いが山裾から東へ広がる斜面の中により広い部分を考える必要があろうかと考える。

3 調　　査

大畑遺跡の中心は，現在の集落とほぼ重なるものと考えられ，その集落の全域が遺跡の範囲と考えられる。今回の調査は，その大畑遺跡の最も山裾の部分である。そのために，遺構を検出しても，その密度はさして濃くないものと推測される部分があった。調査地点は，2箇所あり，いずれも山裾に位置している。この両地点の北側をA地点，南側をB地点とした。A・B両地点とも，まずトレンチを設定し，その状況を把握することから調査に着手した。以下にその調査の概略と，出土遺物の概略を述べたい。

A 地　　点

A地点には，ほぼ東西に長いトレンチを3本設定した。トレンチの巾は2mで，4mの間隔で設定した。長さは最も長いトレンチで約10m，短いもので約8.5mである。トレンチは，北から番号を付し，番号をもってトレンチ名とした。

A地点の地目は畑である。そのため，調査の直前まで野菜が植えられていた。しかし，斜面に造られた畑にしては，その耕作面が平坦であることが注目された。各トレンチとも表土を排除すると整地面とも考えられる面を検出する。今回検出した遺構は全てこの上面において検出した。

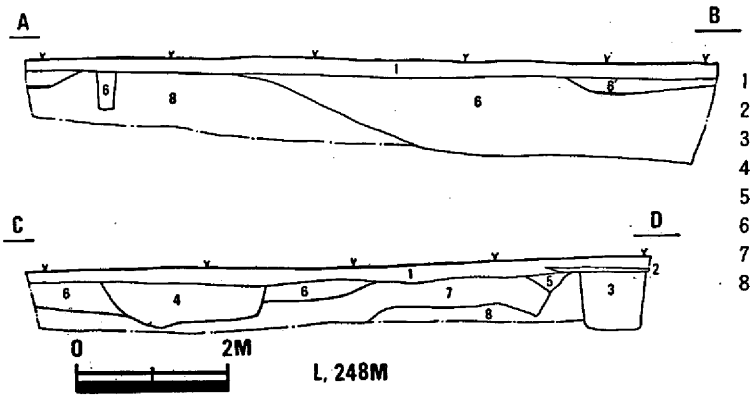
第1トレンチ

このトレンチからは，多くの焼土が出土した。それは，トレンチの西半のほぼ全面に広がるもので，焼土面を呈する状況であった。その中にあって，特に強く火を受けたと見られる部分があった。それは，トレンチの境にあり，そのほとんどは未掘部分にあった。その火所は，状況から見てより強く火を受けたと推測されるものがあり，同一場所において繰り返し，火のたかれたことが考えられる。

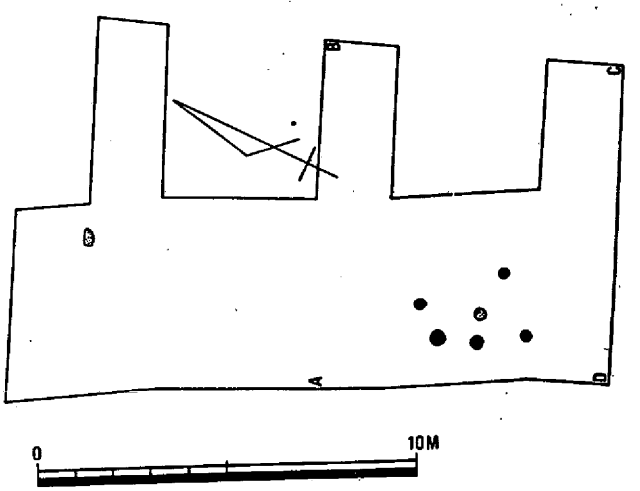
同トレンチの東半からは何も検出されるものはなかったが，火所の検出場所がトレンチの北壁部分であるため，その部分を掘り広げる必要があると考えた。

第2トレンチ

同トレンチは，耕作土を排除した段階では何も検出されなかった。そこで，1mの巾でさらに掘り下げた。第3図のＡＢ断面図がその断面である。同図からも解るように，層位の関係は単純である。耕作土を排除すると，概ね2層よりなる。茶褐色の土層と，角礫を多量に含む黄褐色を呈する土層である。トレンチは，1．2m前後掘り下げたが，耕作土以外からの出土遺物は皆無であった。茶褐色土層は，その下層である黄褐色層まで掘り下げたが，黄褐色は礫が多いこと，層位が厚いこともあって掘りきることはできなかった。この黄褐色土層は自然堆積層とすることができるであろう。トレンチ西端の近くに，柱穴状の落ち込みを検出した。それは断面において1箇所のみであり，トレンチの平面には検出されていないものであるので，柱穴であるか否かは定かではなかった，そこで，柱穴の可



第3図　A地点トレンチ断面図　($\frac{1}{100}$)



第4図　A地点　発掘区全体図　($\frac{1}{200}$)

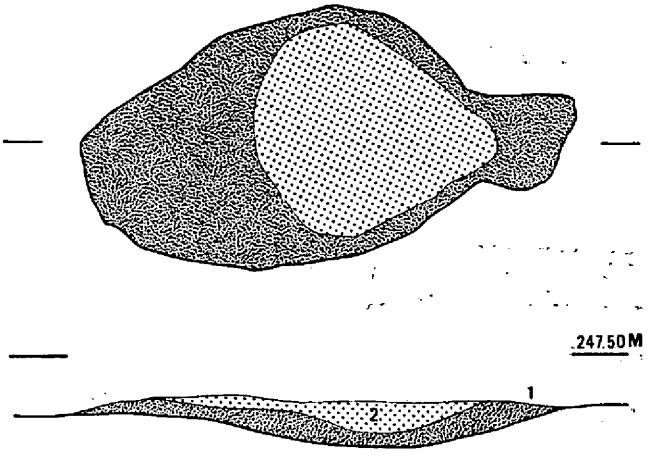
能性を考慮して，発掘面積を広げることにした。

第3トレンチ

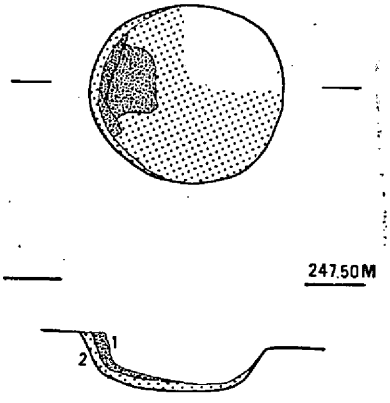
このトレンチからも明瞭に遺構であることを示すものは検出されなかった。そこで，トレンチの南側を1m巾で掘り下げることにした。第2トレンチの断面は単純であったのに比べて，このトレンチの断面はやや複雑である。しかし，角礫を含む黄褐色土層がその最下層にあって，基盤層的な層位を成すことは同じである。以上のように，3名トレンチからは遺構と考えられるものは検出されなかった。しかし，第2トレンチの断面に柱穴状の落ち込みが見られたことにより，その周辺を掘り広げることとした。それは，トレンチの西端から東へ5mまでの範囲とし，各トレンチ間の未掘部分を調査することとした。さらに，第1トレンチにおいては，その北側にも調査部分を設定した。これらの調査部分からは，第1トレンチの北側からは焼土面，第2，第3トレンチの間からは柱穴と鍛冶炉を検出した。

焼土

第1トレンチとその北側に拡張した部分との境で検出した。検出した遺構の最大長は65cm，巾は33cmを測る。遺構は，周辺部分が青色に変色しており，中心部分は赤褐色を呈している。断面を見ると，青色に変色した部分が赤褐色を呈する部分の下層まで続いており，赤褐色部分を包み込んでいる。つまり，その状況は火を強く受けた中心部分が赤褐色を呈しており，その火力の遠のくに従い青色に変色したものと推察される。



第5図　焼　土　($\frac{1}{10}$)



第6図　鍛冶炉　($\frac{1}{10}$)

鍛冶炉

鍛冶炉は，第2トレンチと第3トレンチ間の拡張区より検出した。検出した遺構は，長径25cm，短径23cm，残存する深さ6cmを測るものである。残存する鍛冶炉の平面形は，ほぼ円形を呈しており，外周の土は赤褐色を呈しており，内側は濃青色を呈しており，堅く焼けている。しかし，濃青色を呈する部分の遺存状態は悪く，その一部が残存するのみであった。

柱穴

先に述べた鍛冶炉を中心にして，5本の柱穴を検出した。柱穴は，3本が直線的に並ぶほかは関連性が見られない。また，柱穴間の距離も短いものが多く，最長で2.4mを測るほかは1m～1.4mを測るものである。

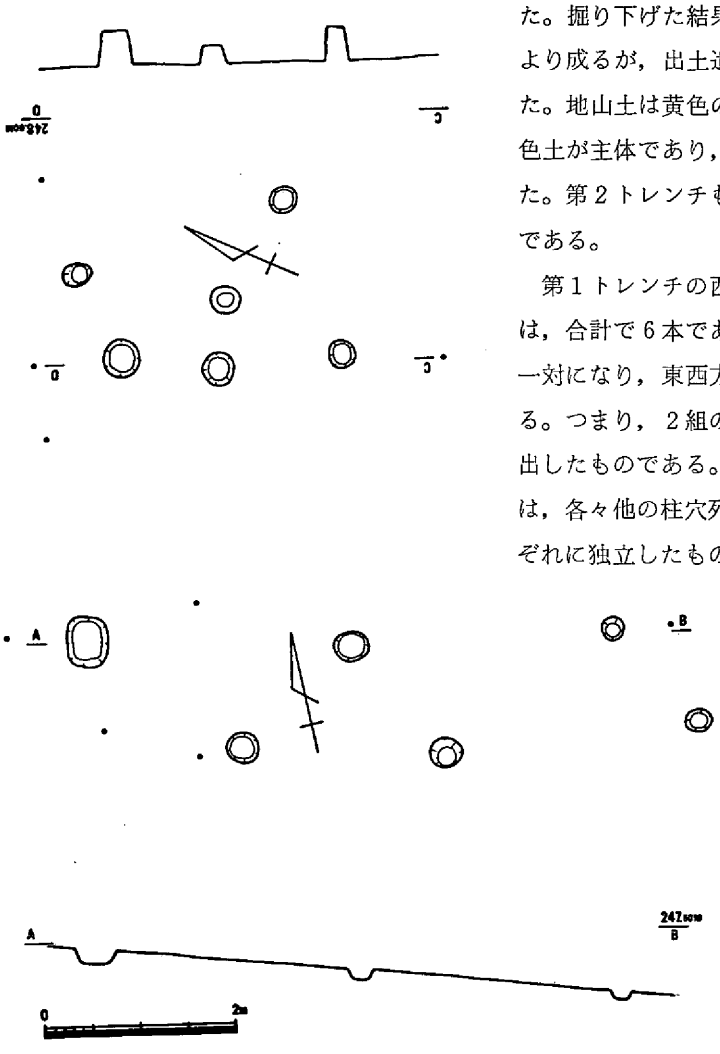
B　地　　点

B地点は，丘陵の斜面が，現在では畑地化されている緩斜面に変換する変節点付近にある。現況では，巾3～4mを測る細長い畑となっており，1～2mの段差をもって，その上部にも同じく巾2～3mを測る平地がある。階段状に存在する平地の上段は墓地であり，最も古い年号は，正徳五年である。

今回の調査地点は，墓地の下段にある細長い畑である。畑は，ほぼ東西に長く，西から東に向けて緩やかな斜面を形成している。この点は，先述のA地点と大きく異なるものがある。B地点は，以上のような地形を呈することから，地形に沿ったトレンチを設定した。畑の中間には一本の果樹があり，それを避けて掘ったために，それ以西を第1トレンチとし，以東を第2トレンチとして調査を実施した。

トレンチ

第1トレンチでは，耕作土を排除した段階で柱穴状の落ち込みを6個検出した。それもトレンチの西半のみであり，東半には何ら変化は見られなかった。そこで，東半は，さらに掘り下げることとし



第7図　柱穴実測図（$\frac{1}{80}$）

た。掘り下げた結果は，地山土までは２～３層より成るが，出土遺物及び遺構の検出はなかった。地山土は黄色の粘質土で，その上層は黄褐色土が主体であり，地山土に近い土質であった。第２トレンチもほぼ同じ状況を呈するものである。

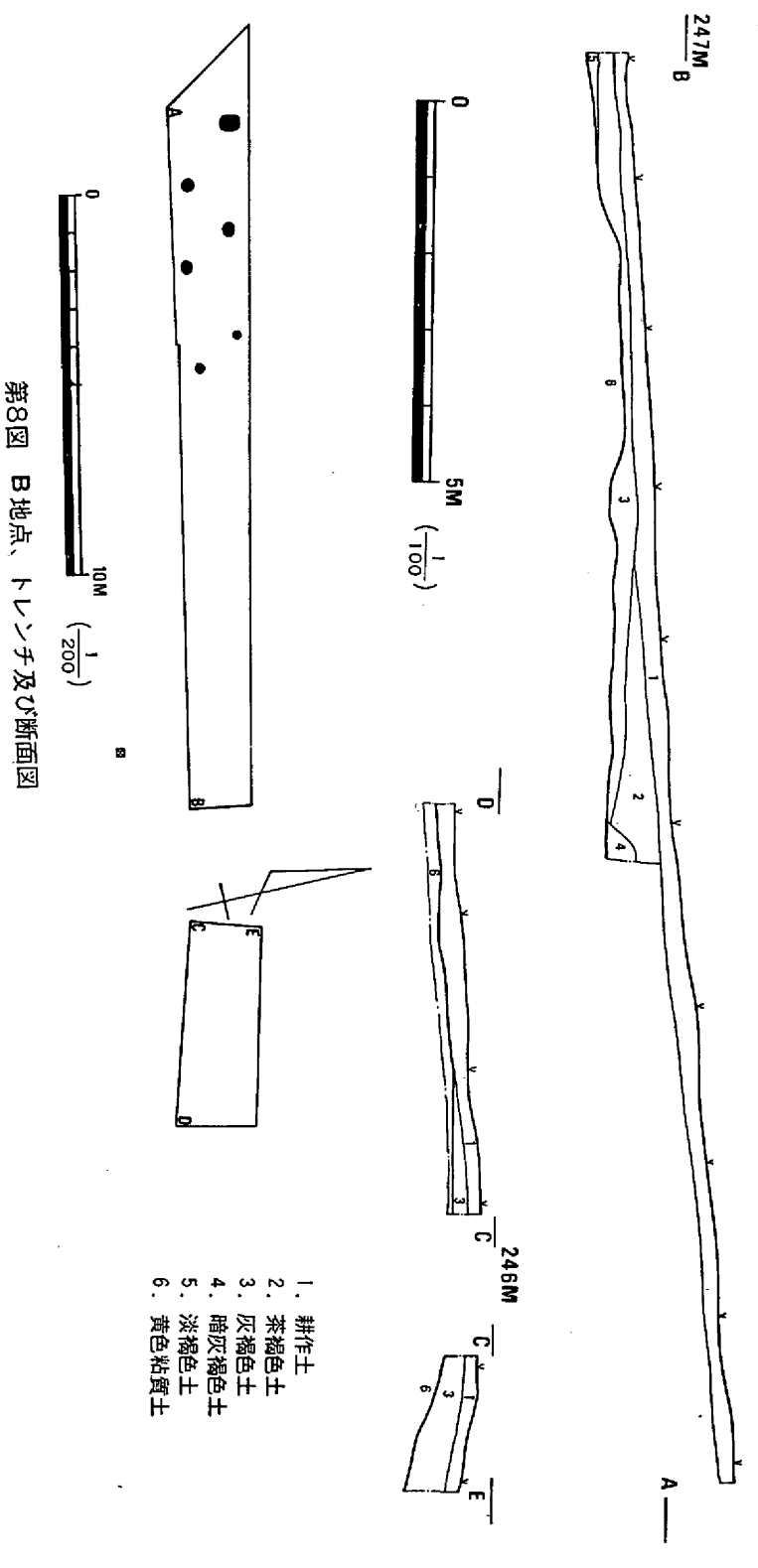
第１トレンチの西半で検出した柱穴状の遺構は，合計で６本である。それらは，各々３本で一対になり，東西方向に直線的に並ぶものである。つまり，２組の柱穴列を平行する状態で検出したものである。検出したその柱穴列の柱穴は，各々他の柱穴列の柱穴とは対応せず，それぞれに独立したものとし得る。柱穴列の各柱穴の遺存状態は悪く，残存する柱穴の深さは，12～13cm前後である。

B地点からの出土遺物は，全て耕作土中からであり，陶磁器の小片２点，角釘１点が出土した。

出土遺物

大畑遺物からの出土遺物の量は決して多くはない。さらに，小破片が多いため図示できるのも少ない。出土遺物を種類別に見ると，磁器類と土師質の小皿類である。１～６が磁器であり，７～12が土師質の小皿である。

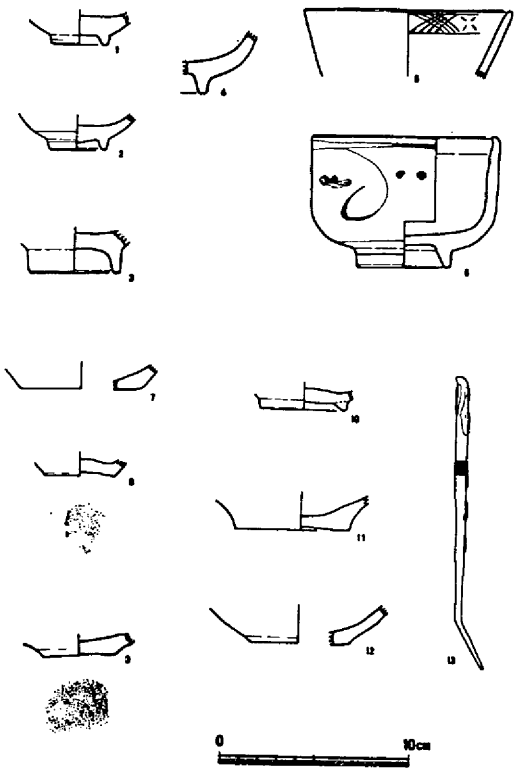
１は，碗の底部である。高台は削り出しであり，直径は３cmを測る。胎土は上質で，白質ないし淡い青色を呈している。釉は均一にかかっており，光沢がある。わずかではあるが染付の一部が見られる。色調は淡青色を呈している。２は，形状，胎土，釉等は１にほぼ同じである。器壁の肉厚と，底部及び高台に染付の線の見られる点に違いがある。染付の色は紺色を呈している。３は，高台の部分である。高台は，ほぼ直立しており，比較的高い。胎土は，象牙色を呈している。釉は薄く均一にかけられており，貫入が見られる。釉の色調は，無色透明である。全体の色調は淡黄褐色を呈している。４は，底部から高台にかけての破片である。高台は，削り出しによるもので，ほぼ垂直に立ち上る。



第8図　B地点、トレンチ及び断面図

胎土は上質で緻密であり，青灰色を呈している。釉は無色透明であり，貫入が見られる。色調は，やや灰色を帯びた青色を呈している。5は，口縁部付近である。開きながら直線的に立ち上り，口縁端部は丸くおさめられている。胎土は，緻密で淡い青色を呈している。釉は，内面は無色透明であるが，外面は淡く緑色を呈している。内面の口縁部に接しては，斜格子状に染付がなされている。色調は，内面は青色，外面は淡緑色を呈している。6は，今回出土した遺物の中で最も大きい破片であり，形状のほぼ全体を知り得るものである。体部は，ほぼ垂直に立ち上るもので，口縁端部は丸くおさめられている。高台は削り出しによるもので，ほぼ垂直に立ち上るものである。釉は薄く均一にかけられており，淡緑色を呈しており 透明である。 胎土は，上質で緻密であり，淡灰色を呈している。外面には紺色による染付が見られる。器の内外面には細かな貫入が見られる。色調は，淡いオリーブ色を呈している。

7は，土師質の小皿片である。 底部の一部が 残るのみで，形状の全体は明らかでは



第９図　出土遺物実測図（$\frac{1}{4}$）

ない。胎土は，微砂を少し含むも良質で，焼成も良好である。色調は赤褐色を呈している。８も土師質の小皿である。底部は糸切による痕跡が見られる。胎土は，微砂を少し含むも良質である。焼成も良好で，色調は淡赤褐色を呈している。９も土師質の小皿である。底部には糸切が見られ，他の部分はヨコナデによる。胎土は，微砂を少し含むも良質で，焼成は良好である。色調は淡赤褐色を呈する。10も土師質の小皿と考えられるものの底部である。底面には高台を貼付するものである。胎土は良質ではあるが，若干の細砂を含み，焼成は良好である。色調は，乳褐色を呈している。11も土師質の皿である。内面，及び体部はヨコナデによる。胎土は，良質であり，微砂を少量含む。焼成は良好で，色調は赤褐色を呈する。12も土師質の皿である。内外面の器壁が剝離しているため整形技法等不明である。胎土は良質で，微砂を少し含む。焼成は良好であり，色調は赤褐色を呈する。

13は鉄製の角釘である。頭部は，わずかに折り曲げられた状態を残している。胴部での太さは，一辺が約６㎜を測る。釘は折れ曲がった状態で出土したが，ほぼ完存するものと推測される。残存する全長は15.6㎝を測る。

大畑遺跡出土の陶磁器は，染付の見られるものがほとんどである。第９図１・２・４～６の染付の見られる陶磁器は伊万里焼であり，図示しなかったが他に染付の見られる陶磁器も同じく伊万里焼である。時期的には江戸前期と考えられる。第９図３は，高麗茶碗を模した京焼きと考えられるものである。他に一点だけであるが，瀬戸焼系と考えられる破片が見られる。

４　ま　と　め

大畑遺跡からの出土遺物は極めて少量であった。その内わけを見ると，陶磁器片がほとんどで，少量の土師質の小皿片がある。そして，鉄製品として角釘が出土している。それらの出土遺物の中で，陶磁器は，この遺跡の年代を決める指標となるであろう。その陶磁器は，近世陶磁器を中心とするものとし得る。また，Ｂ地点より出土した角釘も，その製造年代の下限，西洋式製鉄法の導入以前にほぼ限定することができ，この遺跡の年代を考えるに重要な資料とすることができよう。

A地点にあっては，調査に着手した時点から畑の平坦性に注目していた。つまり，斜面に造られた畑としては水平すぎることである。その平面性は，畑地以外のものとして造成され，その造成された目的が終了した後に畑として使用されたものと推測される点があった。以上の推測は調査が進行するに従い，焼土面，鍛冶炉，柱穴が検出されることにより確実視することができた。つまり，推測していたように，まず住居地として造成され，その住居が，何らかの理由により，他に移転したあとに，畑として使用されるに致ったとすることができるであろう。その住居地として使用された時期は，陶磁器の年代とほぼ一致，もしくは若干降るのとすることができるであろう。ちなみに付言しておくと，調査地点から50～60m下方に在る家の屋号を鍛冶屋と呼ぶ旨を聞いた。当遺跡との関連性については不明であるが，興味を引かれるものがあるので付記しておきたい。

A地点については，上記のように推測したが，次にB地点について考えてみたい。B地点には調査した畑の上段に墓地がある。その墓地に立つ墓石に刻まれた年号を見ると，全て江戸時代のものである。その年号を列記してみると，正徳五年，延享元年，宝暦八年，安永八年，天明元年，文化十四年，文政九年である。その年号からすれば，江戸中期初頭から後期にかけてのものである。この中の最も古い年号の頃にこの墓所は造成されたとすることができる。ここで墓所について触れたのは，B地点の造成はその墓所の造成と関連するのではないかと推測するためである。つまり，相前後して，もしくは，ほぼ同時期に両方ともに造成がなされたと推測するものである。また，角釘の出土は，その点を考えるためにも重要な資料とすることができるであろう。このB地点は，地形，立地等からして，住居地とするには不適とすべきであろう。

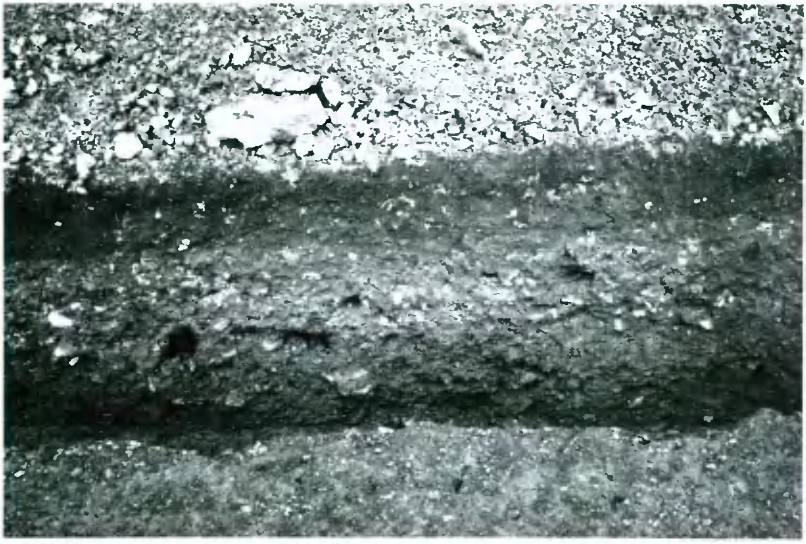
出土した陶磁器について少しばかりふれておきたい。前項でも述べたように，出土した陶磁器のほとんどは伊万里焼であり，瀬戸焼と考えられるのは一点のみである。この遺跡から出土した遺物は，当時の日常雑器として使用されたもので，伊万里焼の下手ものである。それが，日常雑器としてこの地方にもたらされたものであることと，それの占める量の多いことは，窯とその販路を考える上での良好な資料になるものと考える。

1．遺跡の遠景

2．A 地点 全景

図版２

１．A 地点 第１・２トレンチ



２．A 地点 第２トレンチ断面

１．A 地点発掘の全景

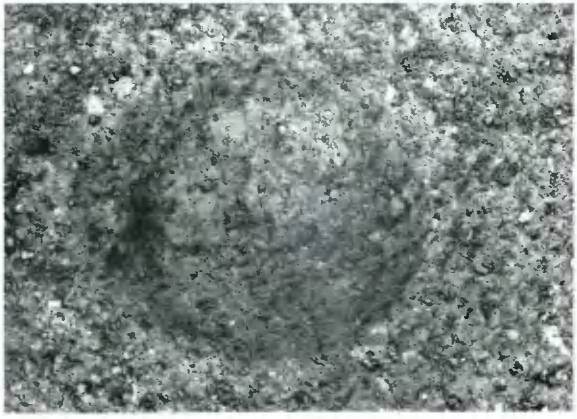
２．鍛冶炉・柱穴の全景

図版４

１．Ｂ地点 第１トレンチ柱穴検出状態

２．Ｂ地点 第１トレンチ全景

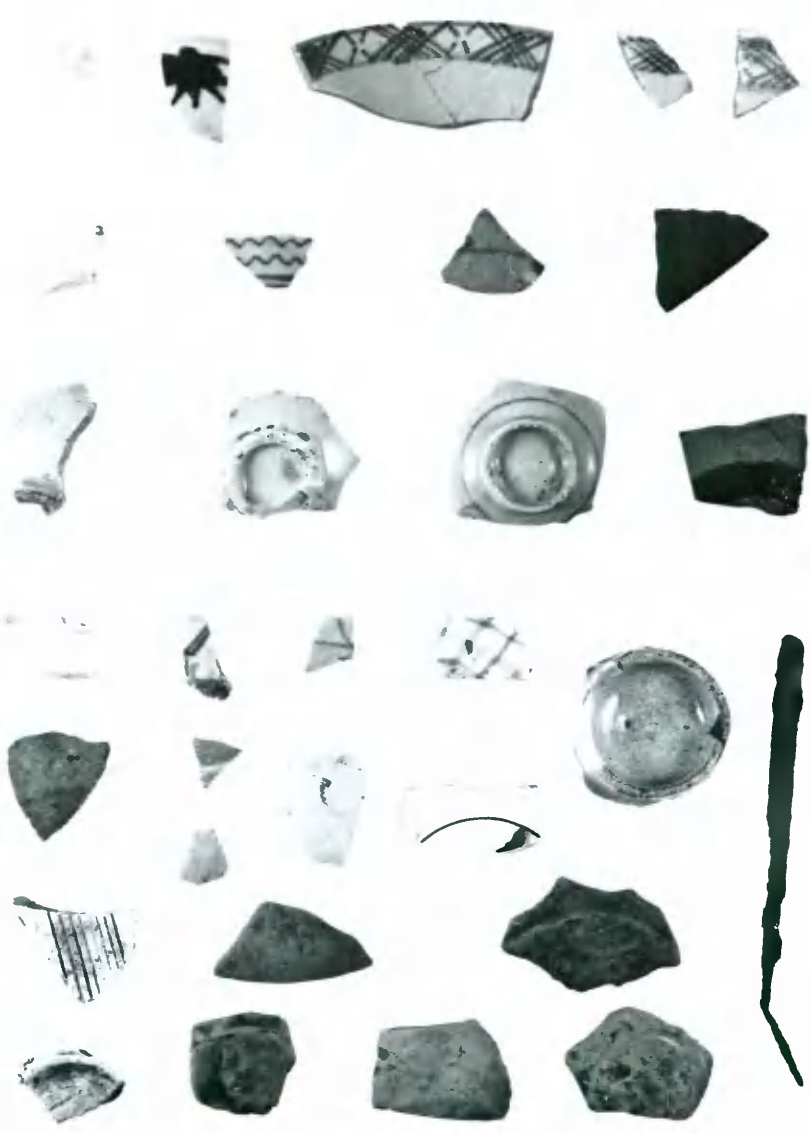
１．焼土



２．鍛冶炉

３．碗

図版６



出土遺物

下熊谷宮の鼻古墳　(37)

例　　言

1．遺跡名　下熊谷宮の鼻古墳

2．遺跡の所在地　新見市下熊谷字宮の鼻

3．調査期間　昭和50年11月６日～11日

4．調査・報告書担当者　　伊藤　晃

5．遺物・図面等の保管場所　岡山県教育庁文化課分室（岡山市西古松265）

6．発掘調査にあたっては，新見市教育委員会岩崎活明，文化財保護委員長谷川明，市議会議員柴田元美，旧地権者柴田義晴，西崎昭夫，文化課職員岡田　博，浅倉秀昭等々の援助を受けた。又，西松建設ＫＫには工事中発見でもあり調査中迷惑をかけた。

目　　次

1　調査に至る経緯と経過……46
2　宮の鼻古墳の位置および調査の概要……46

図　目　次

第１図　宮の鼻古墳位置図 $\left(\frac{1}{5\text{万}}\right)$ ……46
第２図　宮の鼻古墳周辺地形図(1/1000)……47
第３図　箱式石棺実測図（1/20）……48

図　版　目　次

図版１－１　古墳遠景（南から）
　　２　箱式石棺出土状況（東から）
図版２－１　箱式石棺（東から）
　　２　箱式石棺（北から）
図版３－１　人骨枕石出土状況（東から）
　　２　人骨枕石出土状況（西から）
図版４－１　人骨出土状況（東から）
　　２　頂部五輪塔移転跡（西から）

1. 調査に至る経緯と経過

昭和50年度に入り中国縦貫道関係の調査は新見以東がほとんど終了し，新見市内あるいは神郷町内の遺跡の調査を行っていた。そうした中で11月５日，新見市教育委員会岩崎氏より市内の縦貫道の工事中に古墳が発見され人骨が出土し，一応工事を中止されているので，来てほしいとの連絡が入り，市内で調査を行っていた岡田・浅倉両名に現地の状況を見てもらった。その結果，側面になる山塊を削り取るためブルドザーにより山斜面に工事道をつけている時に発見され，墳丘等はほとんど見られず，箱式石棺が半壊された状態であり早急に処理する必要があり，又，箱式石棺は斜面の途中から出土しており，その上方に位置する高まりも古墳かも知れないとの報告を受けた。翌６日伊藤が現地におもむき，実測図の作成，頂部の確認調査を行い，完了後，石棺は用地外の柴田宅所有地に移転し埋置した。

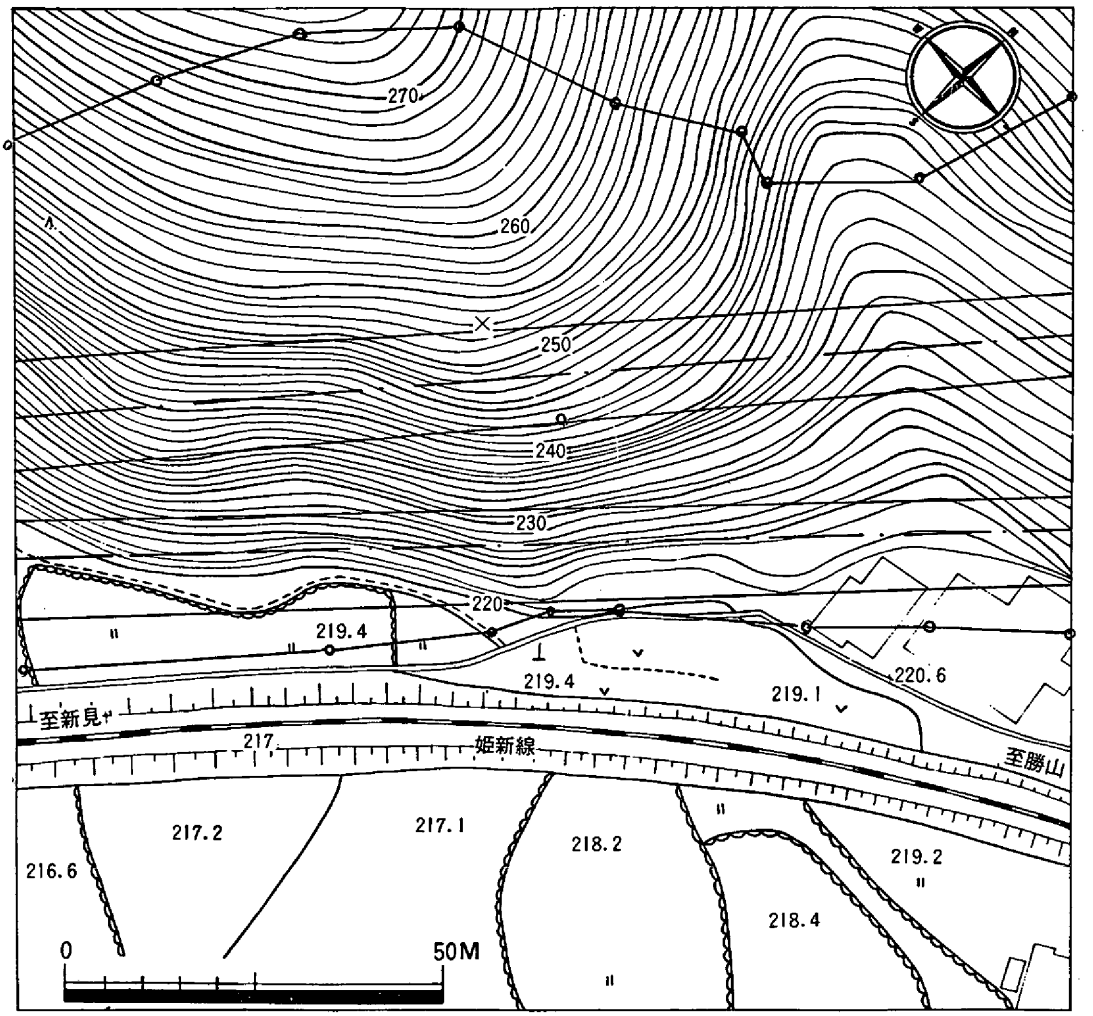
2. 宮の鼻古墳の位置および調査の概略

宮の鼻古墳は新見市下熊谷宮の鼻に存し，新見市街地から北東に３*Km*，熊谷川に沿って勝山に向かう 313号線が走り，北西には標高 500*m*を越える山塊が連なり，南東に面する斜面中腹に位置する。

この古墳は，床面での標高約253*m* 近くになり，北側で１*m* 以上削られておりマウンドもほとんど存在していなかったと思われる。工事用道路により，北側半分がすでに壊され，何枚かの天井石も工事関係者の手で開口され下の谷に投げられていた。

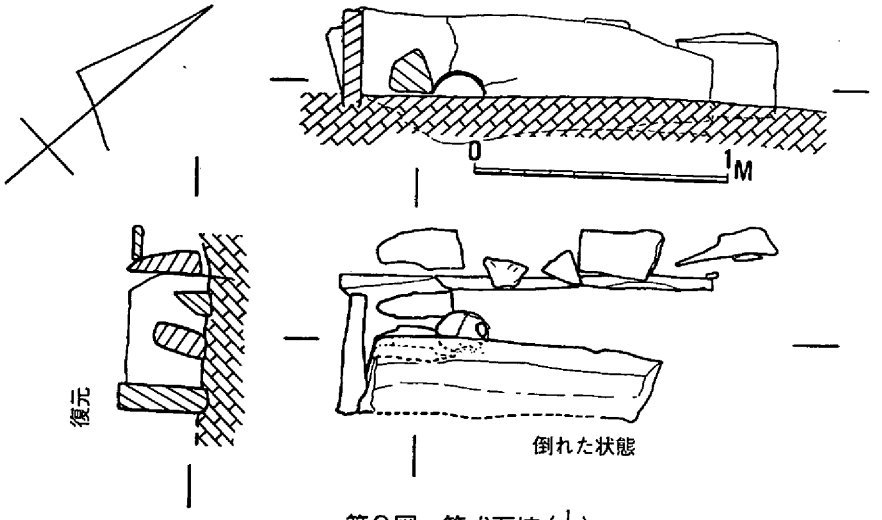
北側側壁は100*cm*程の一枚石をたて，南側も70*cm*の石をたてている。奥壁部での幅30*cm*を測り，工字状に組み合せている。床面西側手に10×20*cm*角の石を２個置き枕石にし，丁度その東手から頭部人骨が出土した。他の遺物は全く検出出来なかった。

第１図　下熊谷宮の鼻古墳位置図（$\frac{1}{50000}$）



第２図　宮の鼻古墳周辺地形図（$\frac{1}{1000}$）

またこの石棺の上方も古墳状の方形の高まりを成していた。柴田宅が管理する墓地で五輪塔などが柴田氏によって他地に移されたあとであった。このため全面を掘り下げたが，遺構，遺物は検出されなかった。



第３図　箱式石棺（$\frac{1}{30}$）

1－1　古墳遠景（南から）

1－2　箱式石棺出土状況（東から）

図版２

２－１　箱式石棺（東から）

２－２　箱式石棺（北から）

３－１　人骨枕石出土状況（東から）

３－２　人骨枕石出土状況（西から）

図版４

４－１　人骨出土状況（東から

４－２　頂部五輪塔移転跡（西から）

宗金遺跡（40）

例　　言

1．この報告書は，中国縦貫自動車道の建設に伴う宗金（むねかね）遺跡の発掘調査報告である。遺跡の所在地は，新見市西方宗金（にいみし　にしかた　むねかね）である。

2．調査は，第１次のトレンチ調査と本調査とに分けて実施した。それぞれの期間と調査員名を列記する。

第１次調査

昭和51年２月17日～同年３月31日　調査担当者　浅倉秀昭

本調査

昭和51年４月１日～同年９月30日　調査担当者　井上弘　内藤善史

3．報告書の作成と執筆分担は，概ね調査担当に準じて行い，第１章，第２章　井上，第３章　浅倉，第４章第１，２，３節　内藤，第４節　井上，第５章　井上が担当し，全体のまとめは井上が行った。写真は，各遺構については担当者が，遺物については井上が撮影した。航空写真は，昭和49年秋に撮影したものである。

4．遺物の整理は，一部は現場事務所にても行ったが，主として文化課分室にて行った。また，一部の遺物については，百間川遺跡調査事務所にても行った。遺跡の地形図，トレンチ配置図，及び遺物のトレースの一部について浜本早苗の援助を得た。土器の復元整理は，坪井和江，細田美代子，朝森君恵，三垣敬子の，原稿の浄書は，塩見康代，山本悦世，石丸清美，広田陽子の援助を得た。

5．実測図，写真，遺物は，文化課分室（岡山市西古松265）にて保管している。

6．遺跡の位置図（第１図）は，国土地理院長の許可を得て，同院発行の1/50,000の地形図を使用した。承認番号　昭53中複　第29号

遺跡の地形図（第２図）は，日本道路公団の1/1000路線図をトレースしたものである。

7．陶磁器については，京都国立博物館の河原正彦氏の御教示を，樹木については，岡山大学農学部教授　畔柳鎮氏の鑑定と御教示を，また，縄文式土器については，岡山県文化センターの高橋護氏の御教示を得た。記して謝意を表します。

黒曜石の分析は，立教大学助教授　鈴木正男氏に依頼し，鉄滓の分析は，岡山県工業技術センターにて行った。

《作業員名》（順不同）

田中義三　浅原公章　松永里美　岡本清治　山本光三郎　平山政夫　山崎春恵　上田孝子　小谷光久　佐々井益三　山本賀洋　吉国徳人　竹本智之　近藤勝則　坂口晃　梅林政市　梅林邦男　樫本恵治　西村虎治　吉国とみ子　吉国辰代　吉国朝代　渡辺益恵　岡本静子　小谷百代　平田裕子

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過……59
　第１節　調査に至る経過……59
　第２節　日誌抄……60
第２章　遺跡の位置……61
第３章　第一次調査の概要……64
　第１節　一次調査の経過と結果……64
　第２節　一次調査出土遺物……67
第４章　本調査の概要……73
　第１節　１区の概要……73
　第２節　２区の遺構と遺物……78
　第３節　４区の遺構と遺物……80
　第４節　３区の遺構と遺物……85
第５章　まとめ……113

図　目　次

第１図　遺跡の位置図（1/50,000）……61
第２図　遺跡の地形図（1/1500）……62
第３図　グリッド図，及びトレンチ配置図……64
第４図　トレンチ断面図（Ｔ－１，Ｔ－３，Ｔ－６）……65
第５図　トレンチ断面図（Ｔ－９，Ｔ－11）……66
第６図　１次調査出土遺物（縄文式土器，弥生式土器，土師器他）……68
第７図　１次調査出土遺物（須恵器，陶磁器他）……71
第８図　１次調査出土遺物（鉄器・石器）……72
第９図　１区全体図……74
第10図　１区出土遺物実測図……75
第11図　２区全体図……76
第12図　２区遺構実測図……77
第13図　２区遺構内出土土器実測図……78
第14図　２区出土遺物実測図……79
第15図　４区全体図……81
第16図　４区断面図……80-81
第17図　４区土壙墓実測図　出土土器実測図……82

第18図　4区遺構実測図……83
第19図　3区全体図……85
第20図　1号住居址実測図　出土遺物実測図……86
第21図　2号住居址実測図……88
第22図　2号住居址出土遺物（土師器）……89
第23図　2号住居址出土遺物……90
第24図　3号住居址実測図と出土遺物実測図……91
第25図　4号住居址実測図と出土遺物実測図……92
第26図　出土遺物拓本（縄文式土器　弥生式土器・製塩土器）……94
第27図　出土遺物実測図……95
第28図　出土遺物実測図（須恵器1）……96
第29図　出土遺物実測図（須恵器2）……97
第30図　出土遺物実測図（須恵器3）……98
第31図　出土遺物実測図（須恵器4）……99
第32図　出土遺物実測図（須恵器5）…… 100
第33図　出土遺物実測図（土師器1）…… 102
第34図　出土遺物実測図（土師器2）…… 103
第35図　出土遺物実測図（土師器3）…… 104
第36図　出土遺物実測図（土師器4）…… 105
第37図　出土遺物実測図（土師器5）…… 106
第38図　出土遺物実測図（土師器6羽口）…… 107
第39図　出土遺物実測図（竈1）…… 108
第40図　出土遺物実測図（竈2）…… 109
第41図　出土遺物実測図（陶磁器）…… 110
第42図　出土遺物実測図（鉄製品・土錘・砥石）…… 111

表　目　次

表1.　鉄滓分析表……112

図　版　目　次

図版1－1　遺跡の俯瞰（南東上空から）
　　2　遺跡の俯瞰（東上空から）
図版2－1　T－3
　　2　T－6
図版3－1　T－8
　　2　T－9

図版４－１　２区調査状況
　　２　２区円形土壙
図版５－１　土壙内土器出土状況
　　２　４区円形土壙
図版６－１　１号土壙墓（西から）
　　２　４区の全景
図版７－１　３区の全景
　　２　３区谷部
図版８－１　１号住居址（南から）
　　２　２号住居址（南から）
図版９－１　３号住居址（南から）
　　２　４号住居址（南から）
図版10　出土遺物（須恵器）
図版11　出土遺物（土師器）
図版12　出土遺物（竈）
図版13　出土遺物（縄文式土器・弥生式土器・製塩土器）
図版14　２号住居址・谷部出土遺物
図版15　出土遺物（土師器・須恵器・弥生式土器）
図版16　出土遺物（陶磁器・耳環・石鏃・鉄製品）

第１章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経過

宗金遺跡の調査は，当初の計画では昭和49年７月に着手の予定であった。昭和49年度は，落合町，北房町付近に所在する遺跡の調査が主体であった。しかし，一方では，日本道路公団は宗金遺跡の調査を急いでいた。それは，道路公団にとっては，新見インターチェンジへの土砂の搬入路の確保が重要な問題であり，一般道路での重量車両の往来を極力避けていた。そこで，インターチェンジへの一方の入口である宗金遺跡を進入路として確保できることを切望していた。そのためには，工事着工以前に宗金遺跡の調査が完了していることが必要であった。道路公団としては，そのような希望に従って計画を立て，県教委に対し協議を申し入れてきた。協議の結果として昭和49年７月から調査に着手する計画になった。しかし，そこに地元から一つの重要な問題が提議された。それは飲料水の問題であった。地元にしてみれば，工事に着工することにより井戸水が汚濁し，枯渇することへの懸念があった。事実，宗金地区の井戸は浅く，一・二の家庭ではすぐさまその影響の見られる可能性があった。さらに一つの思惑があった。それは，これを機に上水道をこの地区に付設することであった。そのため，地元，新見市，道路公団と三者が入り組むことにより，交渉は複雑化した。しかし，その点に関して道路公団と地元との数次にわたる交渉が行なわれたが，問題は一向に解決の方向には進まず，むしろ地元の結束は強まった。そのような状況に直面した道路公団は，地元の同意が得られるまで宗金遺跡の調査期日を延期することにして，北房～新見インターチェンジ間の遺跡の調査を完了させることを主眼とし，青地遺跡，塔の畝遺跡，戸谷遺跡等の調査に順次着手した。

昭和50年度には，自動車道関係の発掘調査は新見市，神郷町，哲西町がその対象地域となった。当然，宗金遺跡もその範囲に含まれることになった。この年度の宗金遺跡の調査時期は７月からと考えられていた。道路公団としても，それまでに飲料水の問題を解決することにしていた。しかし，問題は解決されることなく越年する状況を呈してきた。その間，宗金遺跡の調査担当に予定されていた調査員は，神郷町内の安信古墳群，新市谷遺跡，迫古墳群，古坊遺跡の調査を実施し，さらに昭和51年１月には哲西町の山根屋遺跡の調査に着手していた。

宗金遺跡の調査を実施するについての飲料水の問題も昭和51年に入ると解決のきざしが見えてきた。そこで同年２月17日より第１次調査として発掘に着手した。調査は，トレンチにより遺跡の範囲と遺構の密度を確認することにした。宗金遺跡の調査に予定されていたパーティは，山根屋遺跡の調査中であり，さらにその中の１人は報告書作成のため津山収蔵庫に勤務していた。そこで，岩屋城址を調査中であったパーティから１人を選び，浅倉が調査を担当した。第１次調査は３月31日に終了し，４月から新たにパーティを編成し，井上，内藤の２名が担当した。

第2節　日　誌　抄

第1次調査

2月17日～28日

一面雑草に覆われているため，草刈りから着手する。トレンチを設定し，掘り下げ開始

3月1日～12日

本格的にトレンチの掘り下げにかかる。T－6の黒色土層からは比較的多くの遺物が出土した。

3月15日～19日

T－7，8は耕作土直下から黄色粘土層の地山になる。この面に数個のピットを検出する。

3月22日～31日

T－9～11からは多量の遺物が出土する。トレンチの壁面実測，位置の測量を行う。

本調査

4月5日～29日

T－10を拡張することから調査に着手する。谷を形成しているため，堆積が厚い。出土遺物は多い。T－10の北端付近にて住居址を検出する。

5月1日～15日

谷部を形成する底部で須恵器蓋杯，土師器高杯が出土する。

6月1日～15日

T－11の東側を掘り下げる。出土遺物の量は多い。1号住居址の実測，4区の調査に着手する。

6月16日～30日

T－11の東側の掘り下げ完了，遺構の検出作業を行う。4区遺構の検出，掘り下げ。

7月1日～15日

T－11の西側の掘り下げ完了，遺構の検出作業を行う。4区は遺構の掘り下げ，実測の続行。

7月16日～31日

3区，住居址3，柱穴群の検出，4区，実測の完了，2区，表土排除作業に着手，7月19日～8月24日は内藤，桑原遺跡の調査

8月1日～13日

3区遺構の検出作業，2区，表土排除，1区は，重機による表土排除

8月17日～31日

3区遺構の掘り下げ，2区遺構の検出作業，1区表土排除を続ける。

9月1日～15日

3区，実測，写真撮影を終了し，調査完了する。2区遺構の検出作業，1区表土排除

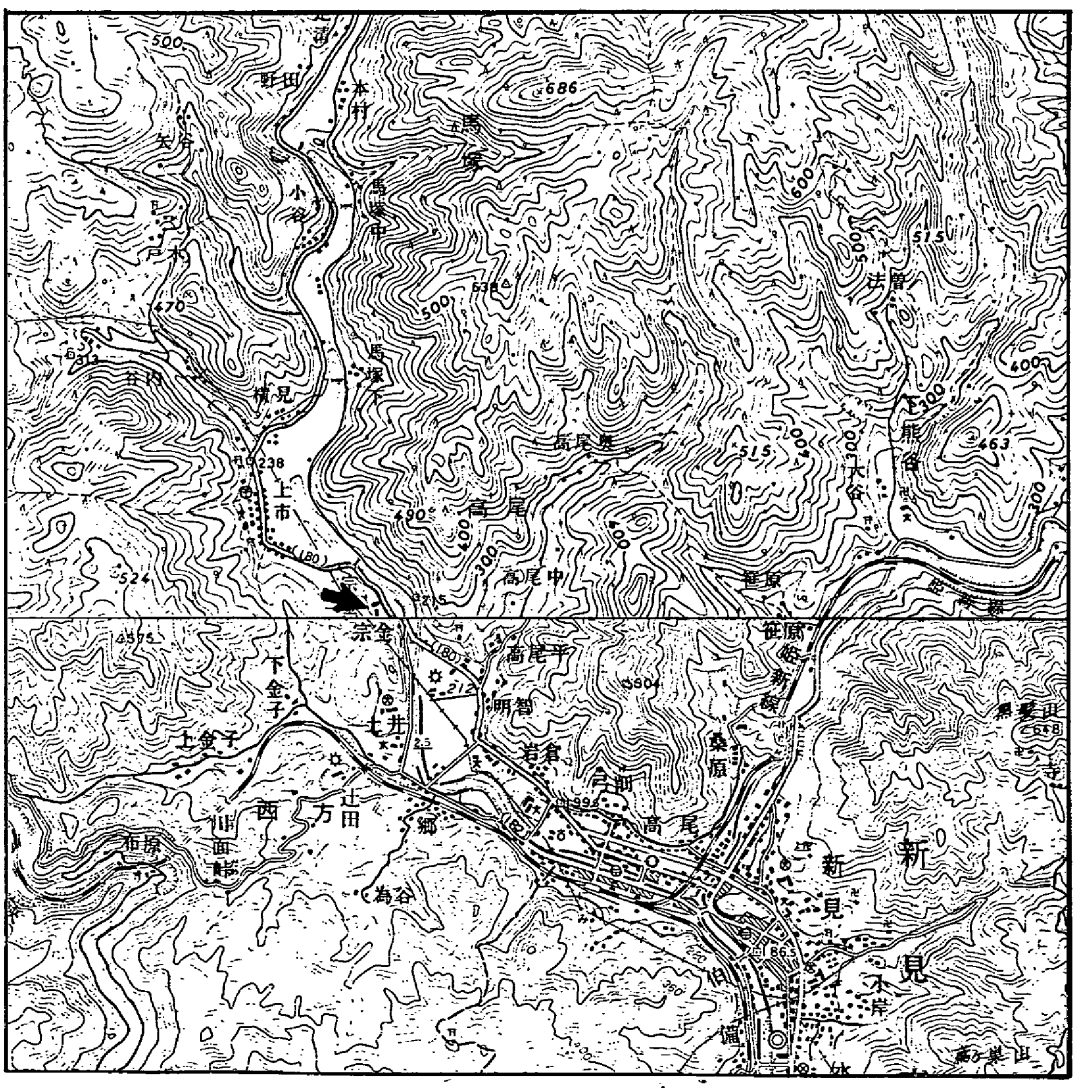
9月17日～30日

2区遺構の掘り下げと検出作業，1区は，表土の排除を行うも遺構の検出なし。事務所を整理して撤収作業，井上は，17日より神郷町，門前中屋古墳の調査，宗金遺跡は，実測等若干の作業残り，内藤は残務整理を行い，10月上旬に調査を終了する。

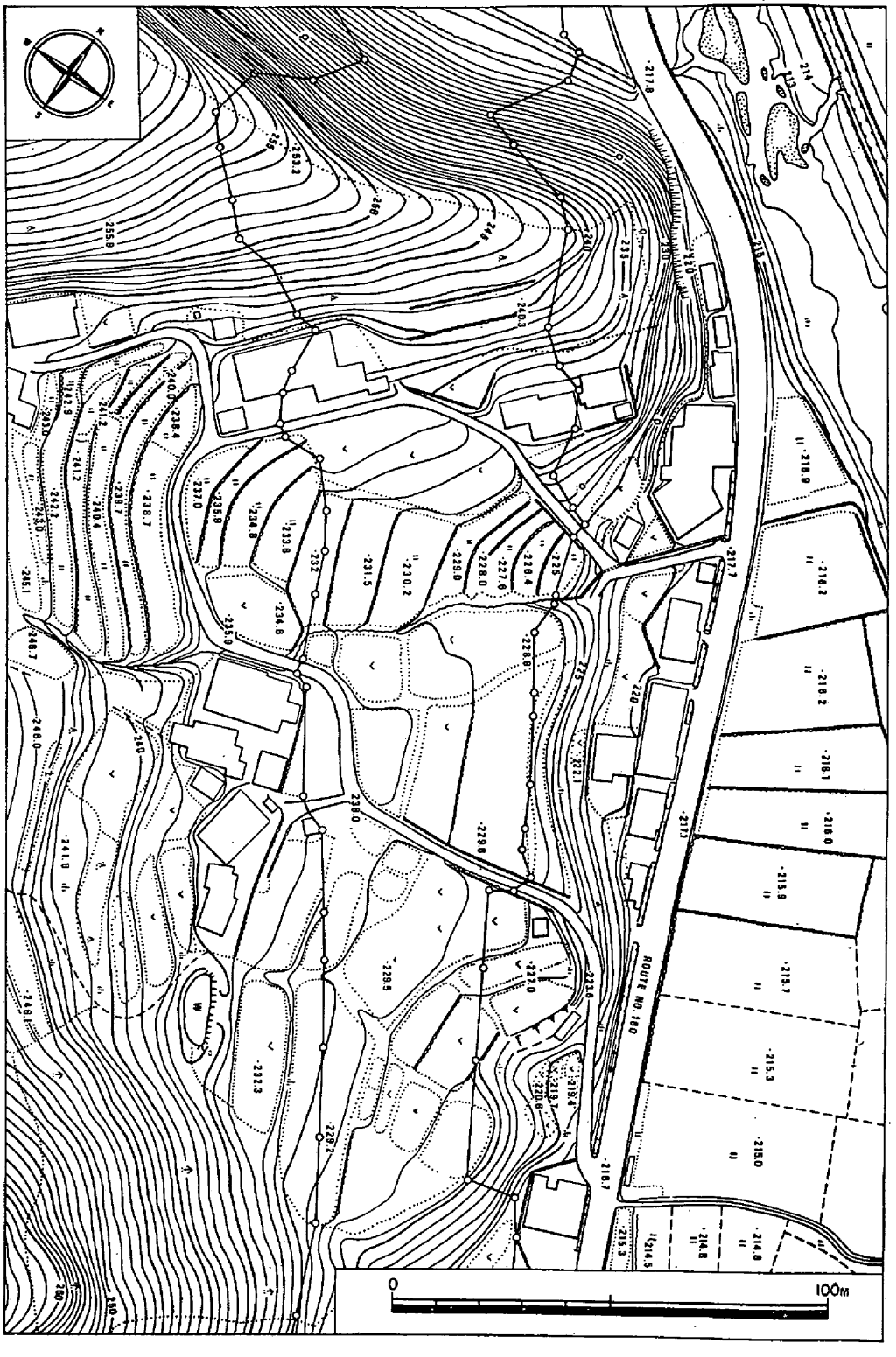
第２章　遺跡の位置

宗金遺跡は，岡山県の北西部，新見市に所在する。新見市は，中国山地の南側にあり，市域全体に対する山林の占める比率は大きい。この新見市内をほぼ南北に高梁川が貫流しており，所々に高梁川により開析された平地が見られる。現在の市街地は，そのような平地の一つに市街地を形成したものである。その市街地のほぼ中心に国鉄新見駅があり，遺跡はその北西約２kmの位置にある。

駅と宗金遺跡の間にはやや広い平地が見られ，宗金遺跡の付近では川の両側から丘陵が迫っており，細い谷状を形成している。この細い谷を抜けるとまた川に沿って帯状の平地が見られる。遺跡



第1図　遺跡の位置図（$\frac{1}{50000}$）



第2図　遺跡の地形図（1/1500）

は，この両方の平地を区画する低丘陵上に位置している。

遺跡の周辺には山稜が迫り，その山稜の緩斜面上に，遺跡，古墳等が立地している。大仁伍，岩倉，高尾，馬塚，横見等には数基の横穴式石室からなる古墳群が見られる。また，新見市立商業高校校地には住居址が知られている。いずれにしても，現在までこの狭小な平野を囲む地域には大規模な遺跡は知られていない。

新見市内の，自動車道関係の遺跡を列記すると，東から，塔の畝遺跡，下熊谷宮の鼻古墳，青地遺跡，桑原遺跡，岩倉古墳群，岩倉遺跡，宗金遺跡，上市二日市場遺跡，横見古墳群，横見墳墓群，谷内遺跡，祐清塚の遺跡があげられる。これらの遺跡は昭和49年８月から51年９月までの期間に調査された。それを遺跡の性格から見ると，下熊谷宮の鼻古墳，岩倉古墳群，横見古墳群，横見墳墓群の古墳・墳墓を主体とした遺跡，青地遺跡，岩倉遺跡の住居址を検出した遺跡，塔の畝遺跡，桑原遺跡，祐清塚の宗教的色彩をおびた遺跡等である。また，青地遺跡，岩倉遺跡からは縄文式土器も出土しており，各時代の遺物が出土している。以上のように，自動車関係の遺跡を調査することにより，種々の遺構，遺物を検出し，新しい知見も得られた。それらの立地する地形を見ると，尾根上，もしくは，緩斜面上に位置するもので，平地において調査したのは，中・近世の市場と推定される二日市場遺跡のみである。そして，それは大規模な遺跡であるよりは，一つ一つが小さなまとまりを見せる遺跡である。

歴史上に，新見が大きく表面に出現するのは，中世においてである。それは，京都東寺の文書である東寺百合文書にしばしば登場する新見庄としてである。この東寺百合文書には，新見庄に関する文書が非常に多く残っており，全国的に見ても，文書の多く残存する庄園として有名である。さらに，近年まで大規模に開発されることなく，中世の庄園時代の景観をよくとどめるものとしても恰好の研究対象である。この庄園関連遺跡として，自動車道関係でも二日市場遺跡，祐清塚が調査された。また，宗金遺跡は，領家方の政所と推定される場所にも近く，新見庄の中心地に近い位置と考えられ，「宗包名」の推定される場所でもあり，中世の遺構，遺物も注目されるものがあった。

参照文献

発掘調査の成果については，『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』の11，14，15，20に掲載されている。
新見庄に関しては，
杉山博『庄園解体過程の研究』東京大学出版，昭和34年
松尾惣太郎『新見市史』新見市，昭和40年８月
「新見庄関連遺跡」の調査報告は，『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20に収載されている。

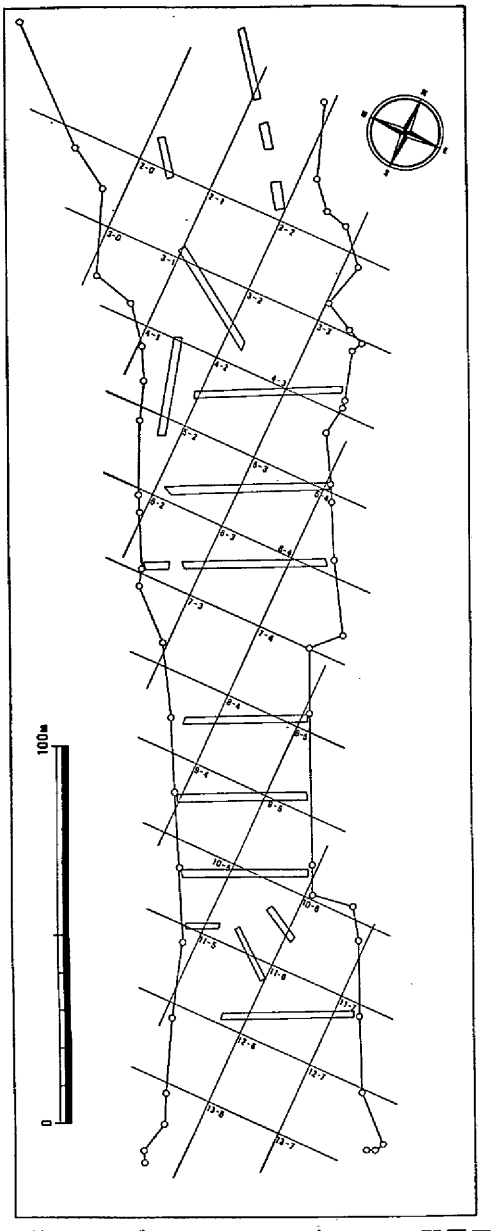
第３章　第一次調査の概要

第１節　一次調査の経過と結果

一次調査は，宗金事務所開設（昭和49年８月）以来漸次行なってきた表面採集と，本調査に入る直前のトレンチ調査がある。

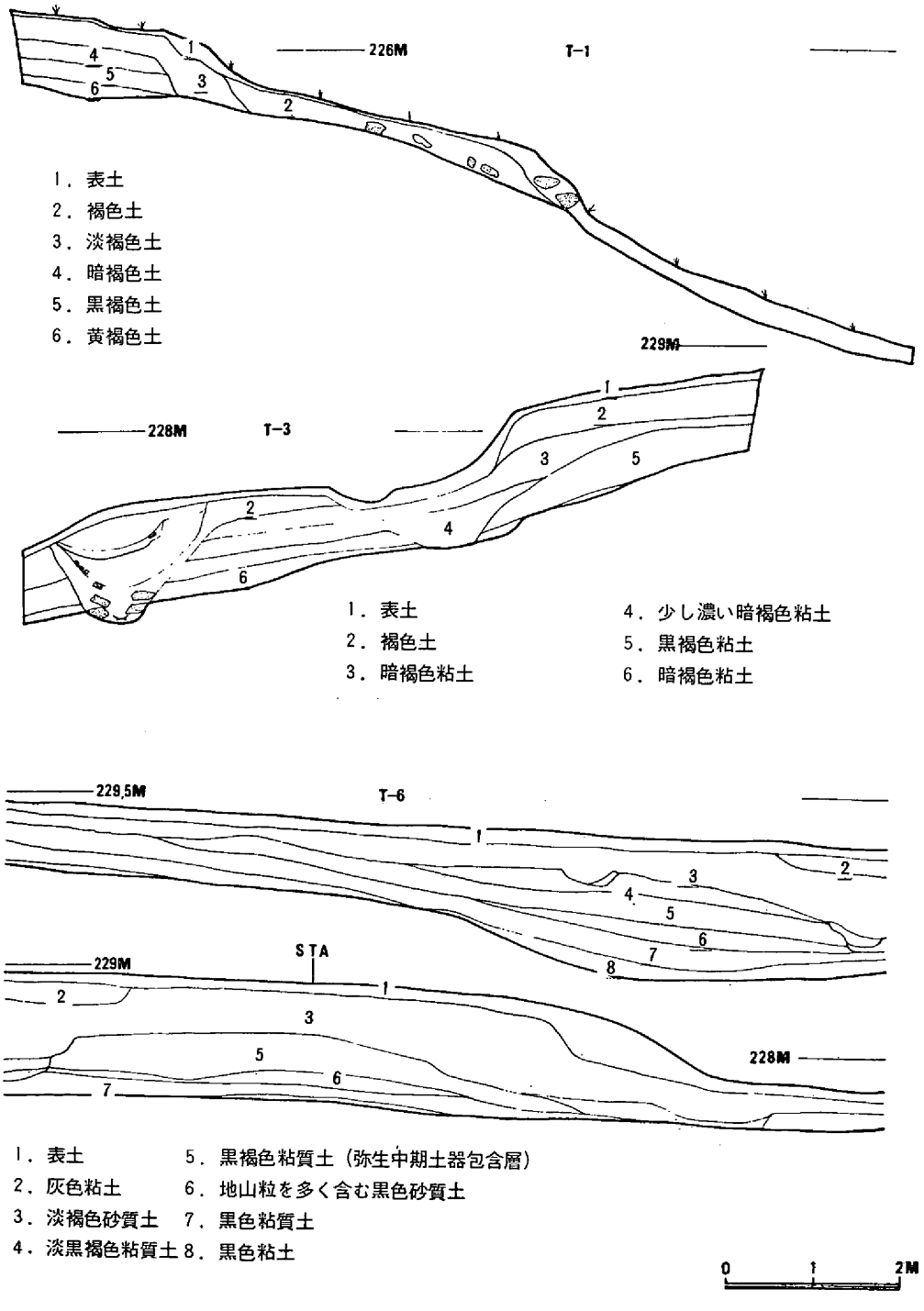
宗金遺跡は，大きく４区に分けることができる（第２図）。１区は市道から南の段丘斜面までの約3600㎡で，旧宅地で現在荒地になっており，土師器片を数点表採している。２区は市道から北の谷水田までの約2400㎡で階段状の畑地になっており，土師器片数点及び青磁一片を採集している。３区は谷水田と北側の畑地となっている緩斜面で約2400㎡あり，畑地で土師器片，須恵器片，青磁片等を少量採集している。４区は北端の舌状の丘陵及び斜面で約3200㎡あり山林となっており土師器，石鏃を採集した。表面採集の土器は，ほとんど細片で実測可能なものはない。

トレンチ調査は，昭和49年２月から約１ケ月間で岩屋城（神郷町）の調査を行なっていた浅倉が担当した。トレンチの設定は，各区で土器を表採しているため，遺構の密度を調べることに重点を置いた。幅２ｍで長さは様々である。トレンチの名称は南から順次Ｔ－１・Ｔ－２と呼んだ。

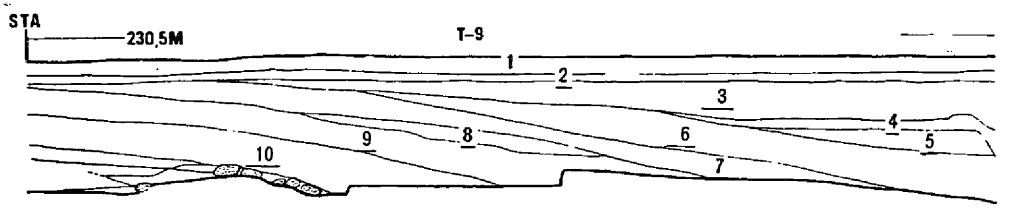


第3図　グリッド図，及びトレンチ配置図 $(\frac{1}{2000})$

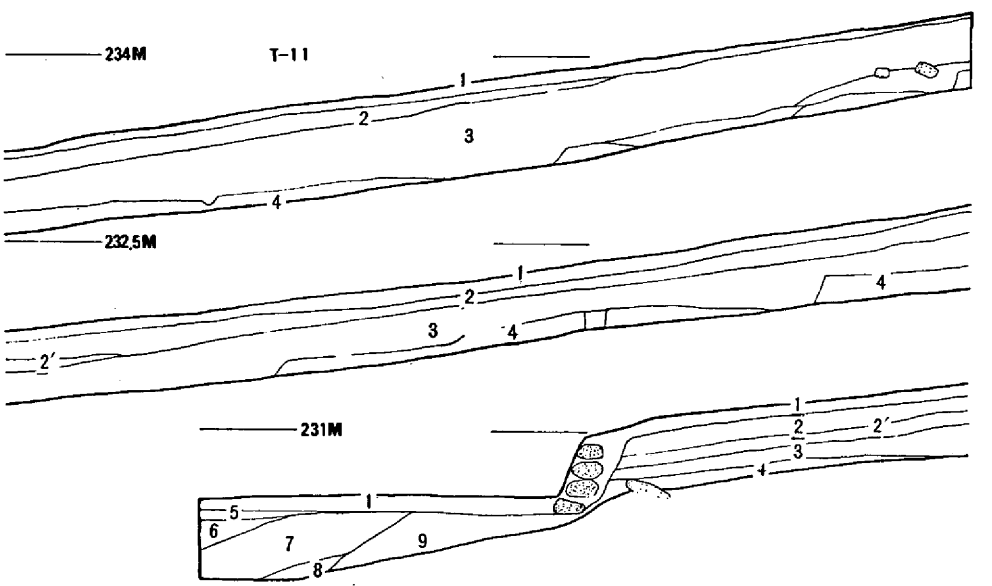
１区で，荒地に３本，段丘斜面に２本，その他１本を入れた。Ｔ－１～Ｔ－６の６本である。Ｔ１（第４図上），Ｔ－２では遺構，遺物は皆無である。Ｔ－３（第４図中）では，溝状遺構と土壙を検出した。前者は無遺物で暗褐色粘土で埋まっていた。時期，性格は判らない。後者は褐色土が埋まり，染付けの磁器椀が底部から出土している。Ｔ－４，Ｔ－５では，柱穴らしきものが２～３本検出できたが遺物は皆無である。Ｔ－６（第４図下）では弥生中期後半の土器を多量に含む暗褐色粘質土の包含層を検出した。以上の結果，１区はＴ－６の周辺で弥生中期の遺構が検出できるが，その他の遺構密度は低いであろう。しかし，Ｔ－６の低位部の用



第４図 トレンチ断面図（T-1, T-3, T-6）



1．現耕作土
2．赤褐色床土
3．淡灰褐色粘質土
4．灰色粘土
5．淡灰褐色粘質土
6．暗灰褐色粘質土（スエ・ハジ）
7．黒褐色粘質土（スエ・ハジ）
8．灰黒褐色砂質土
9．暗茶褐色粘質土（スエ・ハジ）
10．黒褐色粘質土（スエ・ハジ）



1．現耕作土
2．淡褐色粘質土　2′褐色粘質土
3．淡黒褐色粘質土
4．黒色土
5．赤褐色床土
6．黒色土と灰褐色土の混合土
7．灰褐色粘質土
8．灰褐色粘土
9．黒色土

第5図　トレンチ断面図（T-9, T-11）

地外には横穴式石室墳が現存しているためその関連遺構が検出できる可能性が大きい。

2区は，2本入れた。T－7・T－8では柱穴数本と大型の円形土壙数個を検出した。柱穴は径約30㎝で江戸時代と思われる碾臼（ひきうす）の破片が検出できたものもある。土壙は直径2ｍ以上あり灰色粘土が埋まっており，1区南斜面にあった大正期まで焼かれていた瓦窯との関連が考えられる。その他遺構密度はきわめて薄い。

3区は，谷水田部に2本と畑地の緩斜面に1本入れた。T－9（第5図上），T－10では，須恵器・土師器包含層の斜面堆積が認められた。T－11（第5図下）では，住居址が2軒検出できた。壁帯溝・柱穴が断面に掛っていた。黒色土（火山灰）を切って淡黒褐色粘質土が詰まる。多量に出土した土師器・須恵器からみて6C～7C頃と思われる。その他，縄文式土器・弥生式土器等が出土している。この斜面が宗金遺跡中最も遺構密度の濃い所と言える。

4区は5本入れたが，T－15で土壙が1個検出できた以外には，遺物・遺構は全く認められなかった。しかし，南側用地外には鉱滓と土師器を含む住居址か工房址状の遺構が道端に覗いていることから全面調査する必要がある。

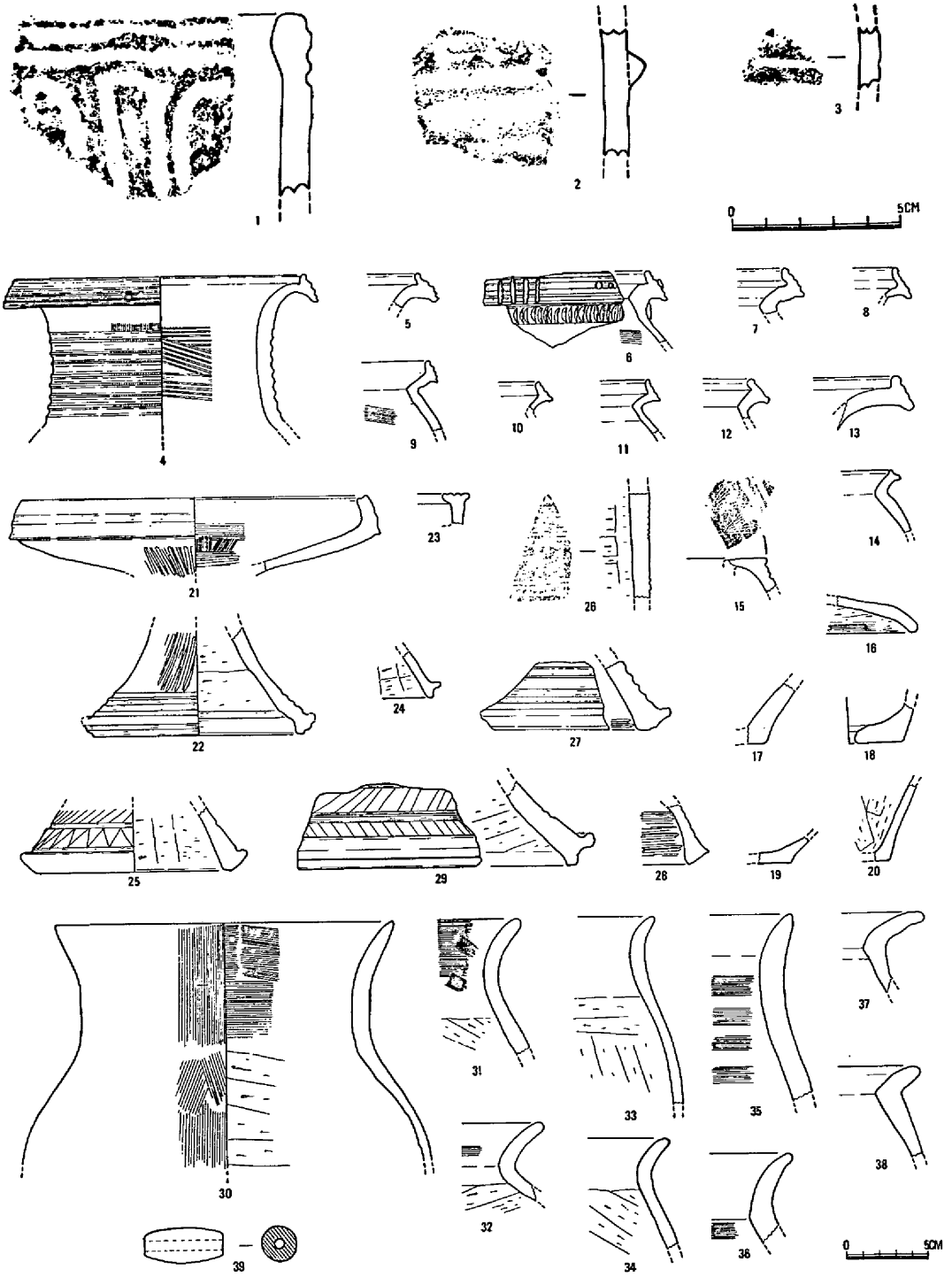
以上のレンチ調査の結果から，時間の許す限り遺構の密度の濃い所はもちろん薄い所も一応全面調査が必要である。宗金遺跡の性格は，縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の4期からなる重複した遺跡であることが判明した。縄文時代の遺跡としては青地遺跡が知られるが，早期末～前期である。岩倉遺跡は縄文後期の土器が出土している。弥生時代の遺跡としては岩倉遺跡が知られているが，中期末～後期であり中期後半の一括の土器が包含層として多量に認められることはない。古墳時代には遺跡内に2基の横穴式石室墳が残存しており，更に埋没している可能性も大きい。中世では新見庄の関連で宗金遺跡は位置的に重要な部署を占めているように考えられる。

第2節　一次調査出土遺物

表面採集の遺物は石鏃・弥生前期の土器片以外は実測できるものはなかった。トレンチからは，縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器・陶磁器・鉄器・土錘が出土している。実測可能なものはすべて図示した。復元できるものは復元し，同一個体の実測の重複は絶対に避けるように努力した。以下順次若干の説明を加える。

縄文式土器（第6図1，2）は2点で，いずれもT－11の黒褐色土から出土した。1は鉢形土器で，口縁部はやや丸くおさめ外面に太い沈線文を施し，黒雲母を沢山含み，焼成は良好で茶褐色を呈す。2は鉢形土器で貼り付け（三角形の断面）凸帯は刻みをもつ。細砂粒を多く含み，黒雲母は1に比べて少ない。茶褐色を呈す。1は後期後葉，2は晩期後半と思われる。

弥生式土器（第6図3～29）は，27点で，3は4区表採，その他はT－6，T－11・T－1・T－aから出土したものである。（註（）は出土トレンチを示す）3は沈線をもつをもつ甕で篦描き沈線が2条認められる。内面は撫で仕上げである。細砂粒が多く焼成は良好で淡褐色を呈する。弥生前期中葉と思われる。4（T－6）は長頸壷で口縁部は漏斗状に広がり端部を上下に肥厚し端面には3条の



第6図　1次調査出土遺物（縄文式土器・弥生式土器・土師器他）

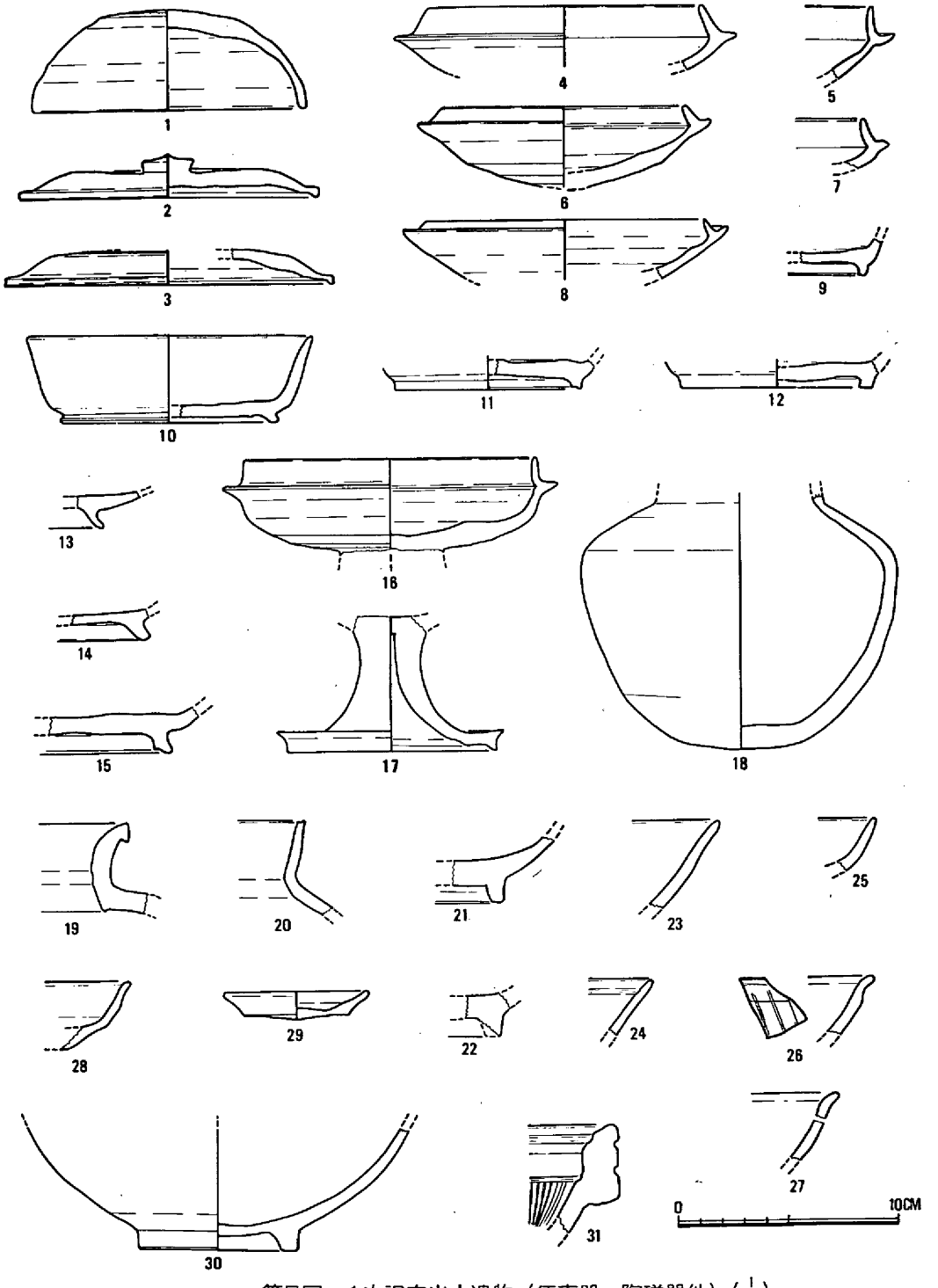
凹線文を施している。頸部外面は粗い刷毛目調整をした後凹線文を施している。頸部内面は斜方向の櫛目が見られる。砂粒を少し含み，淡黄褐色を呈す。5（T－6）は4と同様な長頸壷と思われる。6（T－6）は甕でくの字に折曲する口縁部をもち端部は上下に肥厚し端面に凹線文を施し，その後棒状と円形の浮文を貼り付けている。頸部外面には爪形文の貼付け凸帯を有す。極めて飾られた土器である。体部外面は篦の横磨き，体部内面は刷毛目調整している。微砂粒を多く含み，黄褐色を呈す7（T－11）は6と同じような口縁部をもつ。微砂粒を含み，明茶褐色を呈する甕である。8（T－6）は7よりも口縁端部の上方への拡張が大きい甕である。微砂粒を多く含み，茶褐色を呈す。9（T－6）の甕は体部内外面に刷毛目調整が見られる。10（T－6）の甕は凹線文が浅い。淡褐色をを示す。11（T－11）の甕は口縁端部が上方へのみ拡張し，体部外面に刷毛目が見られるが内面は横撫でである。12（T－6）の甕は口縁端面は横撫でしている。微砂粒を多く含み径5㎜大の砂粒も含む。茶褐色を呈する。13（T－6）は器台と考えたい。2－4㎜の砂粒を含み，黄褐色を呈する。14（T－6）は甕で口縁端部はわずかに肥厚する。内外面とも横撫でで，微砂粒が多く，黄褐色を呈する。15（T－11）は壷と考えたい。口縁部は下方に垂れ下がる。上面には篦描きの鋸歯文，外面には凹線文を施している。微砂粒を多く含み，淡黄褐色を呈している。丹塗りが認められる。16）T－6）は蓋であろう。外面は天井部が縦方向，口縁部は横方向の篦磨き，内面は下方は横方向の篦磨き，天井部は篦削りしている。微砂粒を多く含み，淡黄褐色を呈する。17（T－6）は壷の底部であろうか。内面撫で，外面は縦方向の篦磨きである。微砂粒を含み，淡黄褐色を呈する。18（T－6）は甑で内面撫で外面篦磨き。底部の円孔は焼成後外から穿っている。細砂，微砂粒を含む。19（T－a）は甕であろう。調整は不明。微砂粒を多く含み，淡灰茶褐色を呈する。20（T－6）は甕で，内面篦削り，外面篦磨き調整である。褐色を呈する。21（T－11）は高杯で口縁部はやや内傾して立ち上がり端部に凹線が1本見られる。口縁内外面は横撫でする。体部は外面篦磨き，内面櫛目を施す。砂粒を少し含み，茶褐色を呈す。22（T－11）は高杯脚部で漏斗状に拡がる脚はやや端部を肥厚し，外面下半及び口縁面に凹線文を施している。外面上半は篦磨き，内面上半は篦削り下半は横撫で調整が見られる。21と同一個体と思われる。23（T－6）は高杯の口縁部で直立する口縁部の端部を左右に肥厚し端面に凹線文を施している。微砂粒を多く含み，褐色を呈する。24（T－6）の高杯脚部は端部を外方に肥厚し，外面篦磨き内面篦削り調整している。黄茶褐色を呈する。25（T－11）の高杯脚部は外面に沈線と篦描き斜線文・鋸歯文を施し，内面は篦削り調整している。黄褐色を呈する。26（T－6）は器台筒部で外面に凹線文と篦描き鋸歯文を施し，内面は篦削りしている。淡褐色を呈する。27（T－6）の器台脚部は端部を外方に肥厚し，外面下半に凹線文を施し，内面は下端を篦磨きその他は横撫で仕上げである。淡黄褐色を呈する。28（T－6）の器台脚部は端部をやや肥厚し，外面は浅い凹線文を施し，内面は篦磨き調整である。褐色を呈する。29（T－6）は器台脚部と思われる。端部は外上方に拡張し，外面に篦描き斜線文と凹線文を綾杉状に施し，内面は篦削り調整である。黄褐色を呈する。以上4～29は弥生中期後半～末に比定できる。

土師器（第6図30～38）はほとんどT－9・T－11からすなわち3区から出土している。甕・甑・かまど片等が認められたが実測可能なものは9点で甕の口縁部だけである。T－9のものは32・36・

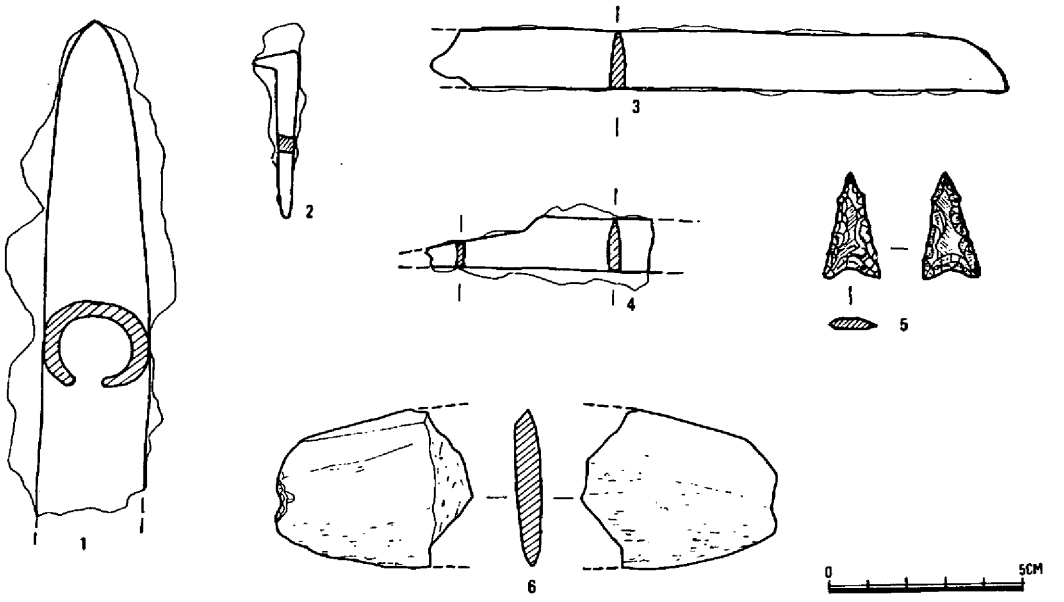
37の３点，他はＴ―11より出土している。いずれも外面は粗い刷毛目調整が見られるが内面は口縁部に刷毛目のあるもの（30～32）は体部に刷毛目のあるもの（35・36）がある。また体部内面を篦削りするもの（30～34）と撫でるもの（35～38）がある。篦削りのあるものは口縁が如意状を示し，撫でのものは口縁がくの字状になる傾向が見られる。時期差かあるいは工人の違いによるものか判断しがたい。いずれも胎土は微砂粒を多く含み，粗砂粒も多い。焼成は良好で茶褐色か赤褐色を呈する。時期は６Ｃ後半から８Ｃ頃まで含むと考えられる。

須恵器（第７図１～20）は，Ｔ－９・Ｔ―11から多量に出土した。蓋・杯・盤・高杯・壷・甕等が見られる。１は天井部篦おこし後指で押し出し丸く整形した蓋である。口縁端部も丸くおさめている。径５㎜大の小石も含み，濃灰色を呈する。６Ｃ後半に比定できる。２・３は偏平な天井部に宝珠つまみを持ち口縁端部を下方に折曲した蓋である。いずれも微砂粒を多く含み，灰褐色を呈する。７Ｃ頃のものであろう。天井部篦削りは逆時計回りで天井部の約½を占める。４の杯は立ち上がりは内傾し端部を丸くおさめ水平な受部をもつ。良質の粘土を使用し淡灰色を呈す。５の杯の立ち上がりはやや内傾し，端部を丸くおさめる。受部は外上方に伸びる。砂粒は少なく，濃灰色を呈する。６の杯は底部篦削りが⅔を占め，砂粒を少し含み，灰色を呈す。７の杯は立ち上がりが折れ曲がっている。８の杯は立上がり短かく受部は斜め上方に伸びる。微砂粒を多く含み，淡灰色を呈する。４～７は６Ｃ後半，８は７Ｃ前半に比定できよう。９～14は高台付の杯である。10はやや広がる口縁部をもち端部を丸くおさめる。高台は短かいがやや外に踏んばる。砂粒は少なく，灰色を呈する。11の高台は垂直に立つ。９と12の高台はやや内傾する。13と14の高台はやや長く外傾する。15は杯ではなくて盤と思われる。砂粒が少なく焼成は悪い。灰褐色から灰白色を呈する。９～15は奈良時代に比定したい。16は高杯の杯部で垂直に立ち上がる口縁部と水平に伸びる受部をもつ。底部は逆時計回りの篦削りが⅔を占める。６Ｃ後半に比定したい。粗い砂粒を多く含み，暗灰色を呈する。17は高杯の脚部で漏斗状に広がる脚の端部を折曲している。端部は鋭く角ばっている。黒色の自然釉がかかっている。７Ｃ頃のものか。18は直口壷と考えられる。肩が張って丸底である。体部内外面横撫でし，底部外面篦削りである。胎土は良質で微砂を含む。灰色を呈する。19は甕でやや外反する口縁部の端部を肥厚している。体部外面は格子目の叩き，内面は同心円の叩きが見られる。口縁部には濃緑色の自然釉がかかる。20は直口壷でやや外傾する口縁部の端部に凹線をもつ。灰褐色を呈する。18～20は６Ｃ後半に比定したい。

陶磁器（第７図21～27・30）は比較的少なかった。21はＴ－８から出土した青磁椀片で釉は緑色を呈しやや厚く掻き取りは底部に見られる。やや灰色を帯びを白色の胎土である。22はＴ―10から出土した青磁椀である。釉は緑色で薄く，底部に掻き取りが見える。灰茶褐色の胎土である。21・22は明代のものと思われる。23・24はＴ－９から出土した灰緑色の釉が施されている碗で白磁と思われる。灰褐色の胎土である。24は内面に浅い凹線が１本入っている。25はＴ－９から出土した白磁椀である。26はＴ―11から出土した淡灰緑色の釉が施された碗で白磁と考えられる。口縁部を少し外に折り曲げ，外面に篦描きの線刻が見える。胎土は淡灰褐色である。23～26はやはり明代のものであろう。27はＴ－６より出土した天目茶椀である。口縁部と体部は直接接合できないが同一個体と考えられ



第7図　1次調査出土遺物（須恵器・陶磁器他）（$\frac{1}{3}$）



第8図　1次調査出土遺物（鉄器・石器）（$\frac{1}{2}$）

る。口縁端部を外に少し折り曲げている。釉の色は暗茶褐色を呈し，胎土は灰色を呈する。中国製で明代のものか。**30**はT－8から出土した碗で緑色釉を内面全体と外面底部近くまで施している。胎土は灰白色で釉のかかっていない底部は茶色を帯びた淡灰褐色である。青磁であろうか。時期は不明。

その他の土器（第7図28・29・31）は3点図化した。**28**はT－9から出土した瓦器質椀で精選した粘土を使い焼成はやや良く黒色を呈す。仕上げは撫でである。**29**は土師器小皿で精選した粘土を使い焼成は良好で淡茶褐色を呈す。やや外反する口縁部をもち底部は篦起こしで仕上げは撫でである。**31**はT－10から出土した備前焼擂鉢で口縁端部は肥厚し外面に2条，内面に1条の沈線を施す。体部は上まで篦削りしている。内面の掻き目は全面に施されている。**28・29**は鎌倉時代以降，**31**は江戸時代以降と考えられる。

鉄器（第8図1～4）は4点図化した。1はT－6で出土した鉄斧の様に折り曲げたもので，時期，用途は不明な鉄器である。2はT－6で出土した中世の釘である。3，4は刀でやはり中世のものであろう。

石器（第8図5・6）は2点出土している。5は4区で表採したサヌカイト製の石鏃である。凹基式石鏃である。先端に近い部分に突起を有す。縄文時代のものであろう。6は黒色変岩系の磨製石庖丁であるが，両端を鼓打して打製のものと同じ形態を示す。弥生中期末に比定できるよう。

その他の遺物（第6図39）は土錘がT－9から出土している。微砂粒を若干含み焼成は良好で茶褐色を呈す。古墳時代のものか。木器と思われる加工の痕跡が見える木材がT－9から若干出土しているがここでは略した。また鉱滓も若干T－11から出しているし，ふいごの羽口片も見える。

第４章　本調査の概要

第1節　１区の概要

1.　１区の調査

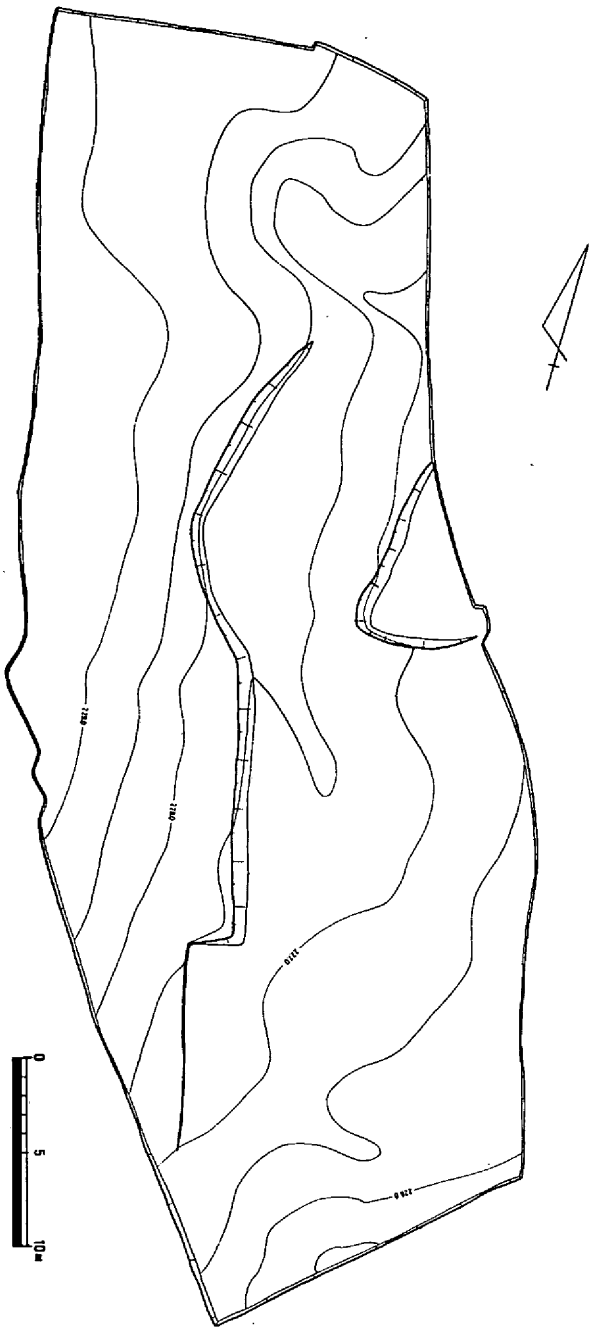
１区の調査は，近世まで瓦窯がありまた１次のトレンチ調査においても，土器の出土により遺構の存在が見こまれた，本遺跡南側の，西から東へ下がる緩斜面の部分を調査区域として，巾20～25mで，65mにわたり全面を調査した。調査の結果，表土下の包含層内より，弥生時代から近世に至る土器片等の遺物が出土したが，遺構を検出することはできなかった。（第９図）

なお調査区内，南東端の表土下より，「銀山御料」の文字が篦描きされた瓦片が出土した。

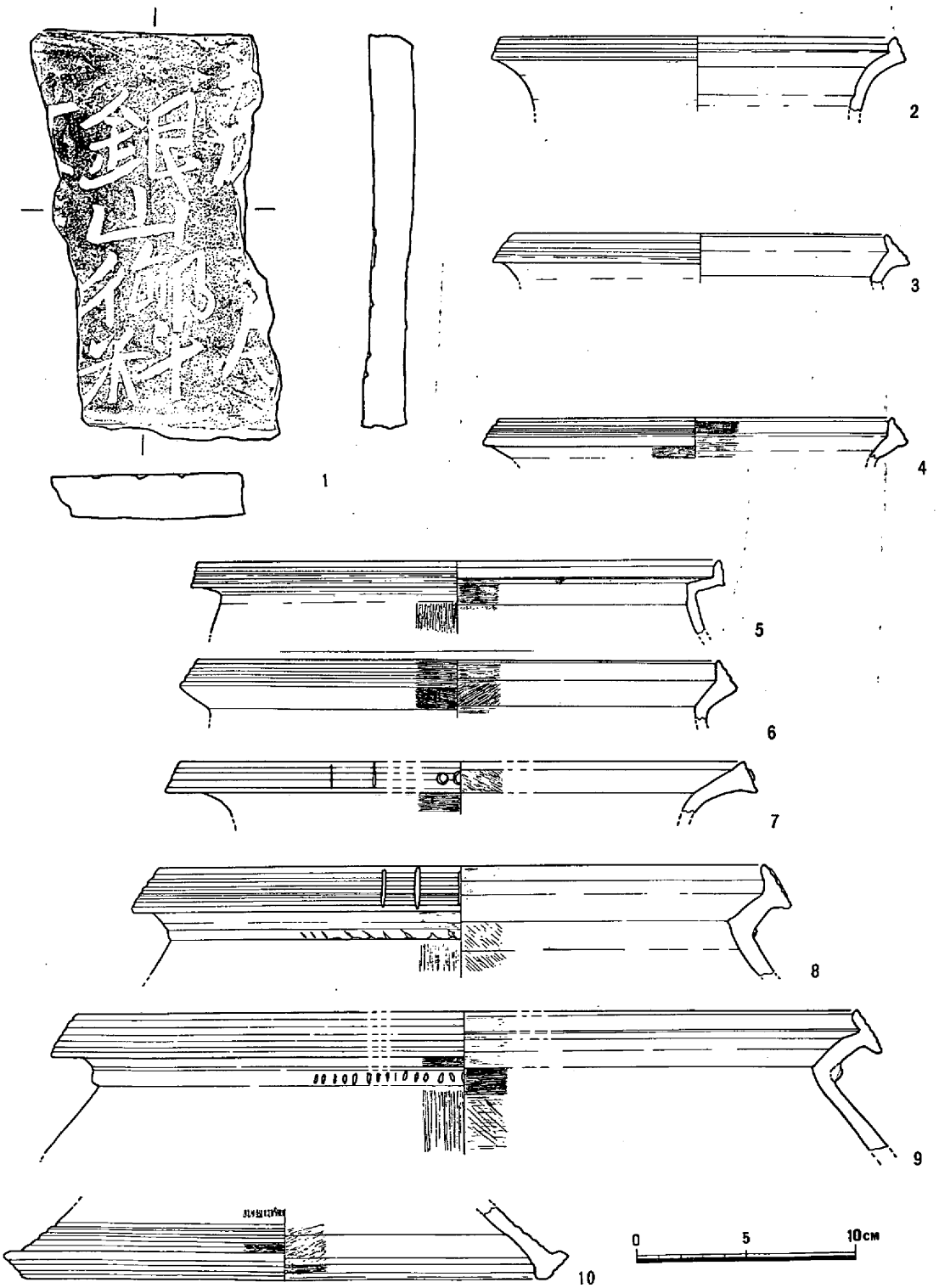
2.　１区の出土遺物（第10図）

出土遺物のうち，計測可能な土器は９点あった。２～６は，いずれも甕形土器の口縁部で，２は頸部から口縁部にかけてゆっくり外彎し，口縁端部はやや肥厚して上方に立ち上がっている。外面には凹線文を施している。内面は口縁から頸部にかけて横方向の，外面頸部から下には縦方向の刷毛目による調整がなされている。胎土には細砂を含み，色調は淡い赤褐色を呈する。焼成は普通である。口縁端部で径18cmを測る。３・６は頸部から口縁にかけて「く」字状に外反し，口縁端部は内傾して立ち上がり外面に凹線文をもつ，口縁・頸部に内外面とも横および斜めの刷毛目が施され胎土に微砂を含んでいる。３は白っぽい黄褐色を呈し，焼成はやや甘い，口径17cmを測る，６は淡い赤褐色を呈し，焼成は普通である。口径24.5cmを測る。４は頸部から口縁にかけて「く」字状に外反し，口縁端部が上方に立ちあがっている。外面に凹線文をもち，内外面に刷毛目が施されている。胎土に微砂を含み，暗茶褐色を呈する。焼成は普通で，口径18cmを測る。５は口縁部が，逆「L」字状に外側に折れ曲がり，端部は肥厚して立ちあがっている。外面に凹線文を施し，口縁の内外面および頸部内面には横方向に，頸部外面は縦方向に刷毛目が施されている。胎土には細砂を含み，黒褐色を呈している。焼成は普通で，口径24.5cmを測る。７は器台型土器の口縁部で，外彎しながら張り出した口縁の外面に凹線文を施し，その上に２個単位の円型浮文および，２本単位の棒状の刻目がみられる。内外面とも横ナデを行なっている。胎土には微砂を含み，黒褐色を呈する。焼成はやや不良で，口径26cmを測る。８・９は頸部から口縁にかけて「く」字状に外反し，口縁端部が内傾して上・下に拡張し，頸部にはきざみ目を施した凸帯をもつ大型の甕の口縁部で，８は口縁外面に凹線文を施し，その上に三本単位に棒状浮文のつくもので，口縁から頸部にかけて内外面に横方向の刷毛目が，外面頸部から下には縦方向に刷毛目が施されている。胎土には細砂を含み，灰茶褐色を呈する。焼成は普通で，口径28cmを測る。９は口縁外面に凹線文を施し，口縁から頸部にかけて内外面に横方向の，また外面頸部

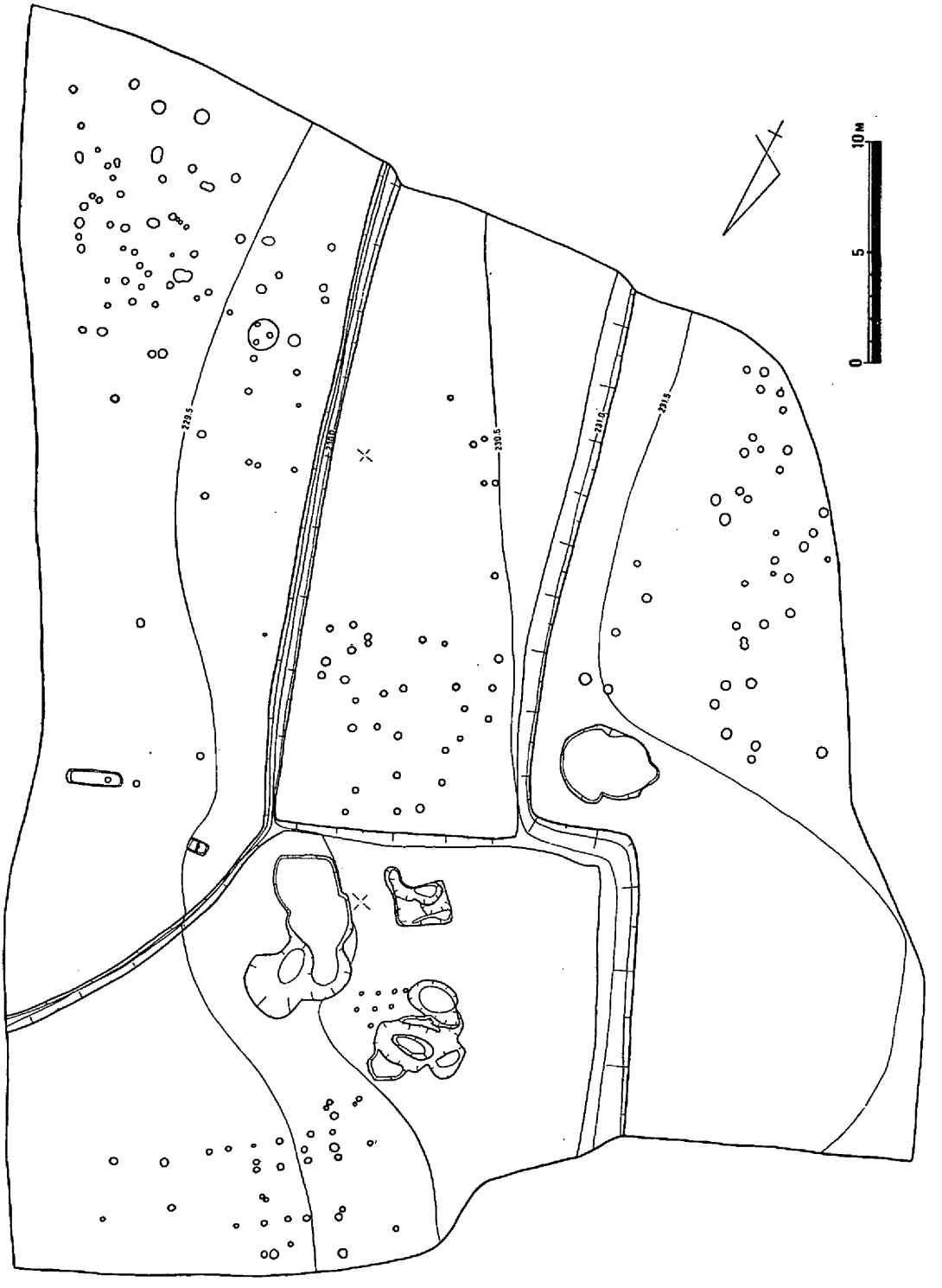
から下には縦方向に刷毛目が施されている。胎土には微砂を含み，黄褐色を呈する。焼成は普通で口径36cmを測る。10は高杯の脚部で，緩やかに広がり端部は肥厚して外側へ張り出しがみられる。胎土には細砂を含み黄褐色を呈する。焼成は普通で，脚端部で径24cmを測る。1は調査区の南東隅，少し下がりの部分にかかる表土下から出土したもので，長さ18.5cm，厚さ2cmの瓦の内面に，巾4mm前後，深さ2mm程で文字を篦描きしている。両側が欠損していて前後の字句が不明であるが「銀山御料」の4文字を読むことができる。



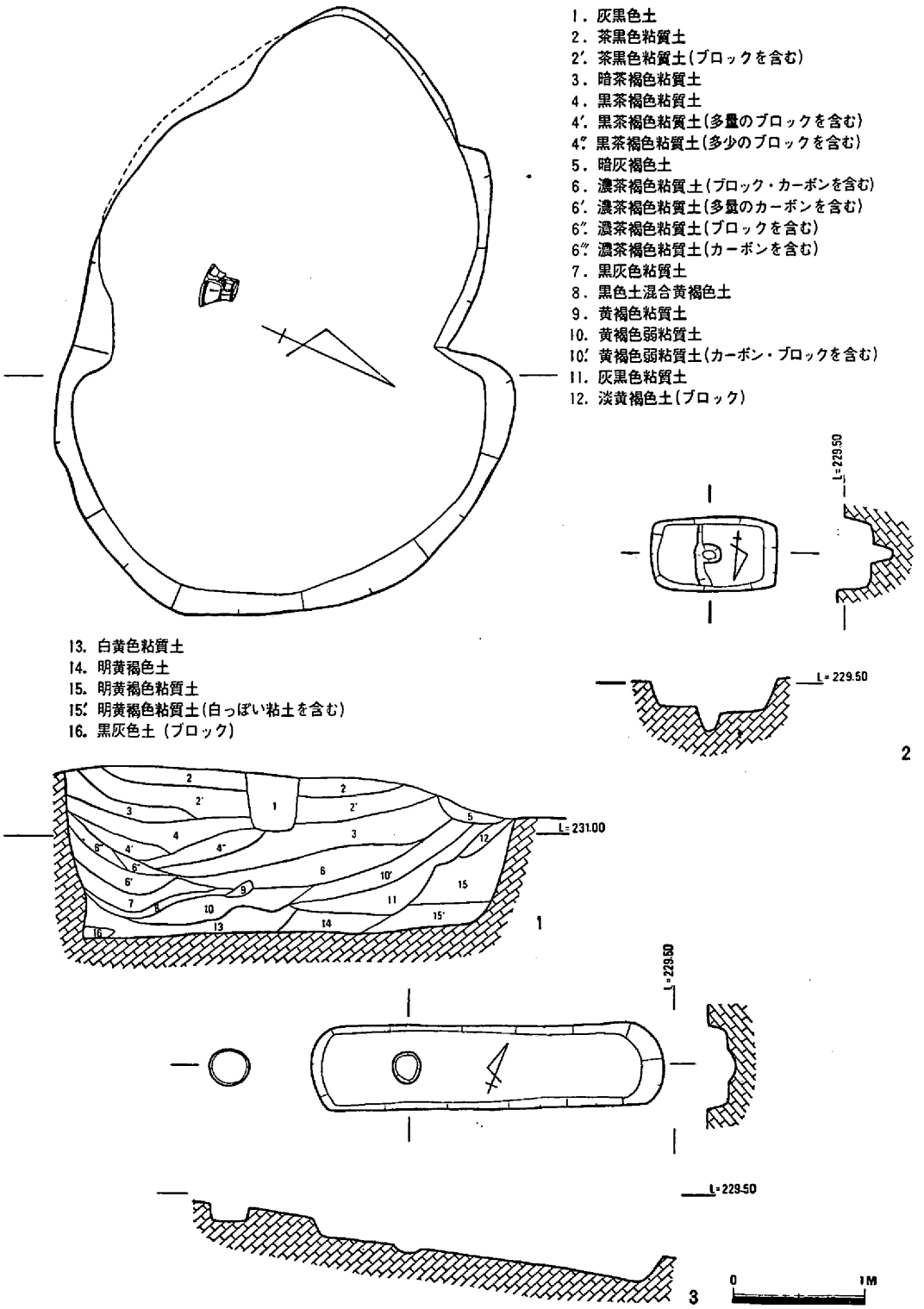
第9図　1区全体図（1/400）



第10図　1区出土遺物実測図（$\frac{1}{3}$）



第11図　2区全体図（$\frac{1}{300}$）



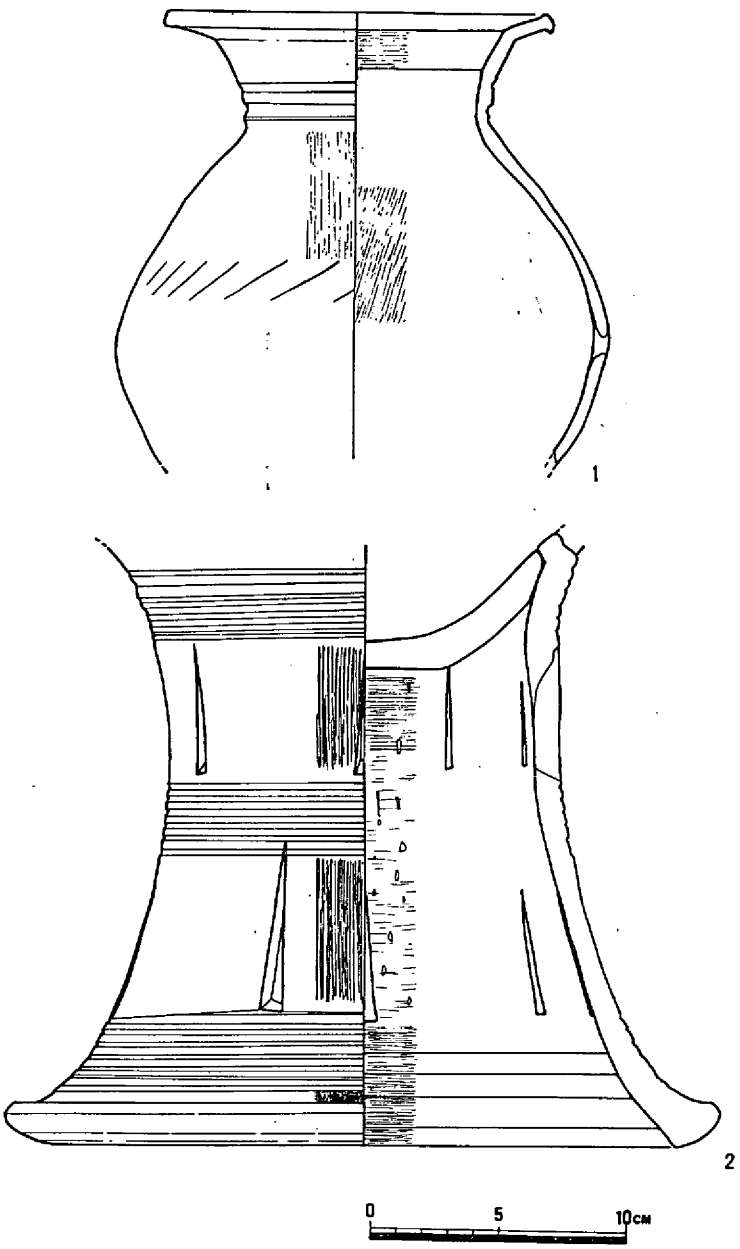
第12図　2区遺構実測図（$\frac{1}{50}$）

第2節　2区の遺構と遺物

1．2区の調査

2区の調査は，1区から道を隔てた北側55mを，巾35～40mで行なった。2区の西端から東端までは，3m程の高低差があるが，巾10～12mで50～80cm程づつ，段状に下がっている為，それぞれの部分は，かなり水平な安定した面を形成している。これらの面は，中・近世において建物等の為に造成した可能性が強いと考えられ，全面調査を行なった。

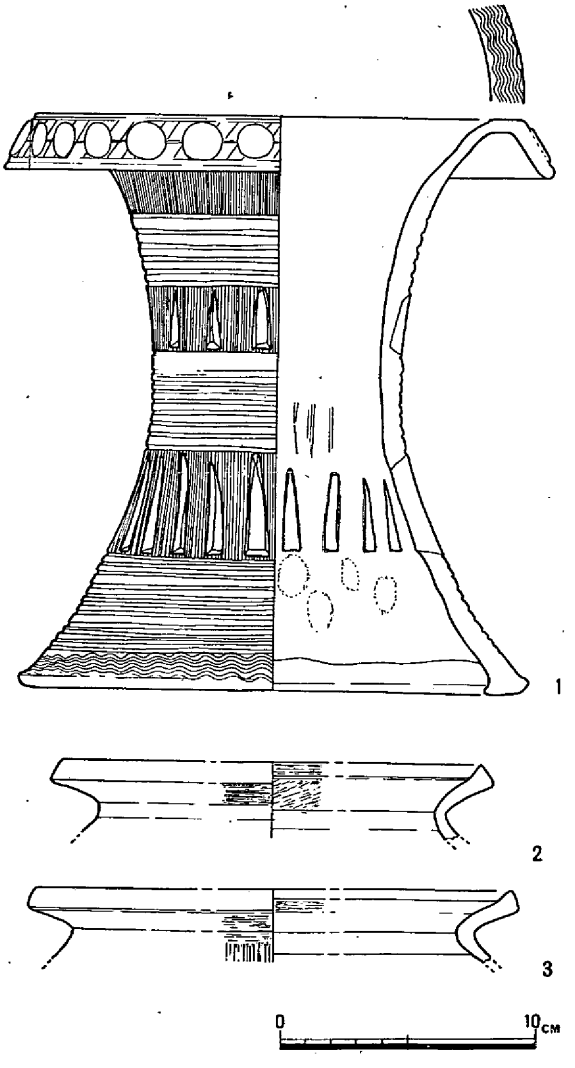
2区調査区全体で200を越える，直径20～50cmの柱穴および柱穴状のピットを検出したが，並び・深さ等まちまちで，建物址を想定することはできなかった。地山面で遺構の検出を行なった段階で，調査区の北側半分において，遺構と思われる不定形の黒色土部分が数カ所みられたが，凹凸の落ち込み状のものがほとんどで，遺構として検出できたのは，平面でややゆがんだ卵型を呈した円型の大土壙と，土壙墓状の土壙および長方形の小土壙の3つであった（第11図）。出土遺物としては，円形の大土壙から壺等が出土した他は，器台型土器と外少の土器片等が出土しただけで，遺物の量は極めて少なかった。



第13図　2区遺構内出土土器実測図（$\frac{1}{3}$）

2. 2区の遺構（第12図）

1は2区中央から少し西寄りで検出された，東西4.5m・南北3.5mで，少しゆがんだ卵型をした大土壙で，深さは1mを越えるものである。土壙の底に近い黄褐色粘質土層から，壷形の土器と大型の土器の脚の部分とが出土したが，遺構の性格は不明である。2は2区の北西部で検出した，東西95cm・南北55cm・深さ約40cmを測る長方形の土壙で，ほぼ中央に直径15cm・深さ15cm程のピットをもち，これを境として東側は底が8cm程高くなっている。出土遺物はなく用途は不明である。3は2の土壙から4m程西で検出した，東西260cm・南北60cm・深さ20～30cmの土壙で，中央西寄りに，直径20cm・深さ5cm程の浅いピットをもち，等高線にほぼ直行している。中に出土遺物はないが形状から土壙墓と想定できるものである。この2・3の遺構が存在している面は上面が削平されて，各遺構はかなり浅くなてっいると思われる。



第14図　2区出土遺物実測図（$\frac{1}{3}$）

3. 2区出土遺物

第13図の土器は円形の大土壙から出土したもので，1は口径14.5cmを測る壷型の土器で，頸部から外反した口縁が端部で幾分拡張している。頸部には2条の凹線をめぐらせている。器壁は4mm程で比較的薄い，胴部の最も張っている部分より少し上部には，篦描きによる斜線文がめぐっている。また一番張っている部分に1個，焼成後に外側より穿った，直径1cm程の穴がある。土器の外面及び内面の，口縁から頸部にかけては，刷毛による調整がなされている。底部近くが欠損している為，器高は不明である。きめ細かな胎土で，薄い茶褐色を呈する。焼成も良好である。2は上部が欠損している為，形状は不明であるが，高杯あるいは鉢など，大型土器の脚（高台）部で，脚端部において径25cm，胴部の最も細い部分でも径15cmを測る。胴部から裾部にかけてはゆるやかに広がり胴部には二段にわたり三角形の透しが，縦方向の櫛描きがなされた上から切り込まれている。透しのない部分には裾部まで凹線文がめぐっている。内面はナデによる調整がみられる。杯部と脚台部とは連続してつくられ，その杯底部を円盤

で充塡している。充塡している円盤は，杯の底部の様に整型されたもので，面とりがなされている。胎土には微砂を含み淡い赤褐色を呈する。焼成は普通である。

第14図の土器は，いずれも遺構には伴っていないもので，1は口径21cm・高さ22.8cmを測る器台形土器で，口縁部は拡張して平端面がつくられ，口唇部が下方に延びている。この下方に延びた口唇部面の，上部と下部に凹線をめぐらし，その間に篦描きの斜線文が施されている。その斜線文の上面に，直径1.5cmの円型浮文が貼り付けられている。この円型浮文は，出土した4分の1弱の口縁部において7個を数える。広く延した口縁上端の平端部分には，7条の櫛描きによる波状文が施されている。口縁部から胴部にかけては，口縁に近い部分は刷毛ナデが行なわれ，その下部には凹線文がめぐる。さらにその下部は，櫛ナデ後三角形の切り込みが入れられているが，内面にまでは届かず，透しとはなっていない。その下部にはまた凹線文がめぐり，下に櫛ナデ後切り込まれた，三角形の透しがある。その下部から裾部までは凹線文がめぐっている。裾端部には，7条の櫛描き波状線が，凹線文の上から施されている。三角形の透しは上段・下段とも不整形である。内面は胴部にしぼり込みのあとがみられ，口縁部および裾部はナデによる調整が行なわれている。胎土に細砂を含んでおり，赤褐色を呈している。焼成は普通である。2・3は頸部から口縁部にかけて「く」字状に外反した口縁端部が拡張し，上方に少し立ち上がっている甕型土器の口縁で，2は口縁端部から外面にかけて横ナデが見られる。胎土には微砂を含み，黄褐色を呈する。焼成は普通で，口径17cmを測る。3は頸部から胴部にかけ，縦方向の刷毛目が見られる。胎土には微砂を含み，白っぽい黄褐色を呈する。焼成は普通で，口径19cmを測る。

第3節　4区の遺構と遺物

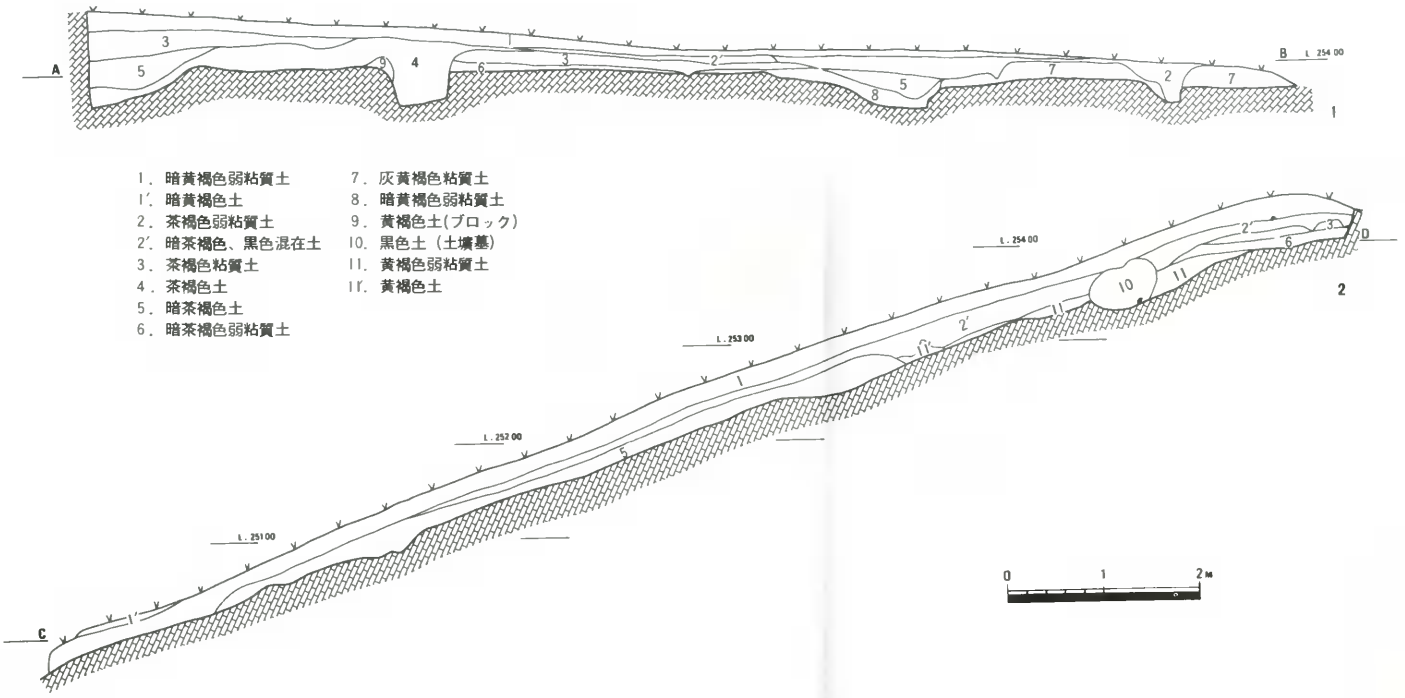
1．4区の調査

4区は遺跡全体からみて北端部に位置している。20度ぐらいのかなり急な斜面となっているところで，墓地まで取りつけられた道が地山面まで削り取って南から東へと巡っている為，その道の内側から西の巾杭まで約180㎡の全面について調査を行った。なお4区の北側は崖状になっている。

4区では，遺構として土壙墓2，土壙2，遺構検出面においてドーナッツ状を呈する円形土壙1が検出された（第15図）。また出土遺物としては，土壙墓内から須恵器の杯が出土した他，包含層より須恵器，土師器数片が出土した。

2．4区の遺構

1号土壙墓（第17図—1）調査区の北西部，かなり高い位置（L＝253・50m）に，長さ300cm巾70cm深さ約40cmの土壙墓が等高線に平行して検出された。この土壙墓内の西壁から80cmの中央部床面に，伏せた状態で須恵器の杯身（第17図—4）1個がほぼ完形で出土した。この杯身は，受け部が横へ少し張り出し，やや内傾して立ち上がる。底部にはヘラ削りがなされているが，やや不整形である。内面底部にはタタキによる圧痕がみられ，直線のナデにより幾分整形されている。胎土には1～2㎜の小

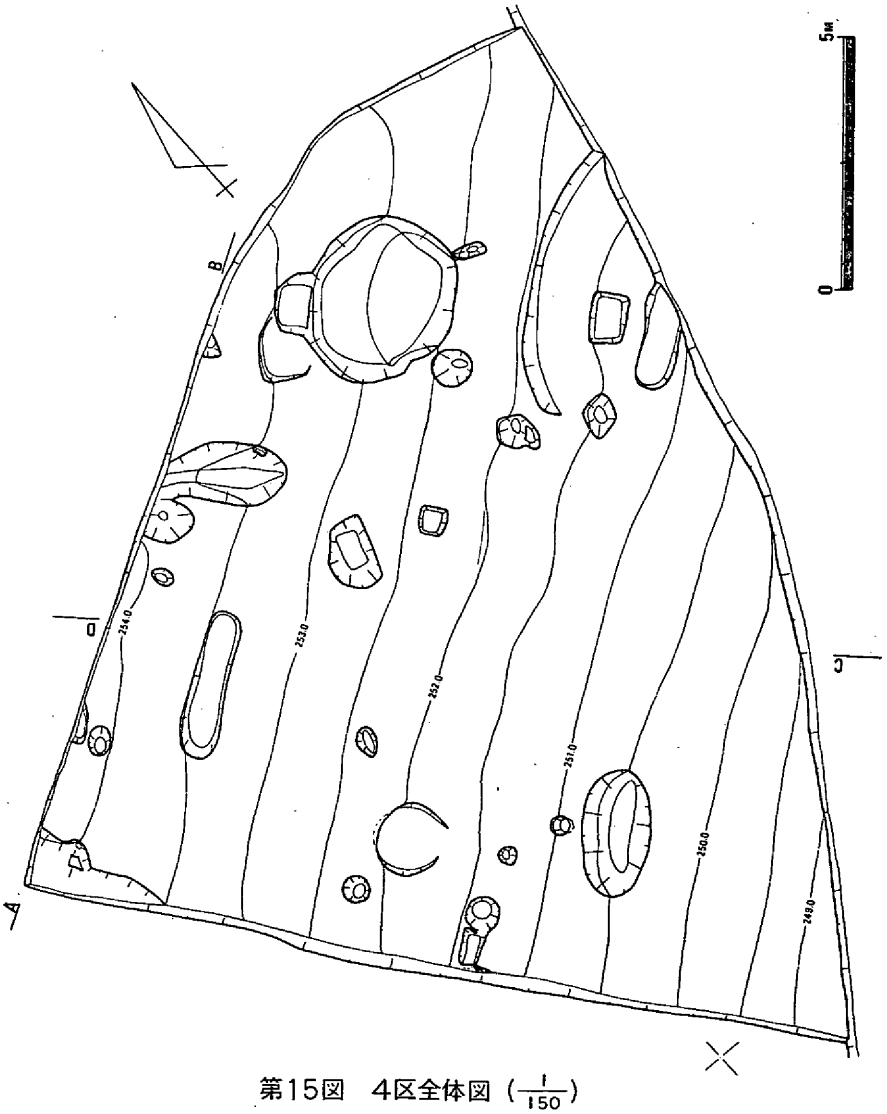


1．暗黄褐色弱粘質土
1′．暗黄褐色土
2．茶褐色弱粘質土
2′．暗茶褐色、黒色混在土
3．茶褐色粘質土
4．茶褐色土
5．暗茶褐色土
6．暗茶褐色弱粘質土
7．灰黄褐色粘質土
8．暗黄褐色弱粘質土
9．黄褐色土(ブロック)
10．黒色土（土壙墓）
11．黄褐色弱粘質土
11′．黄褐色土

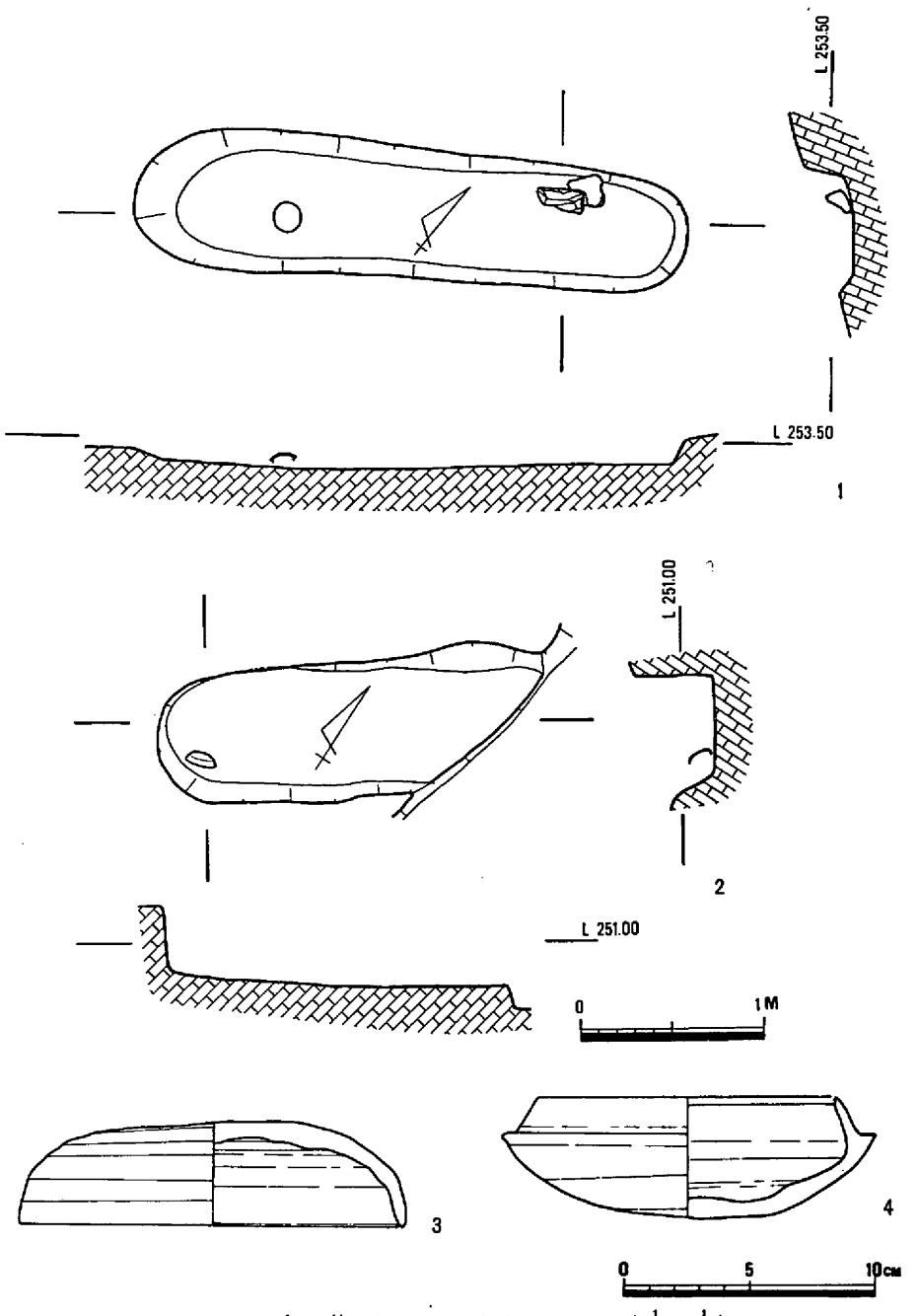
第16図　4区　断面図（$\frac{1}{60}$）

石粒を含んでいる。全体に灰色を呈しているが，外面の半分には釉がかかり，黄灰色を呈している。焼成は良好で，口径12cm，器高５cmを測るものである。

２号土壙墓（第17図―２）１号土壙墓から東へ９mのところ（L＝251・25m）に，巾70cm深さ約40cmの土壙墓を検出した。土壙墓の東側が道の為に削平を受けていて，長さが不明である。１号土壙墓と同様，等高線に平行して検出された。この土壙墓の南西隅に，土壙墓の壁面に伏せる様な状態で，須恵器の杯蓋（第17図―３），１個がほぼ完形で出土した。この杯蓋は，天井部から口縁部に移る部分に段がみられ，天井部にはヘラ削りが施されている。口縁部から内面にかけては，横ナデによる調整がなされ，内面天井部の凹凸は直線のナデにより整形している。胎土に２mm前後の小石粒を含んでい



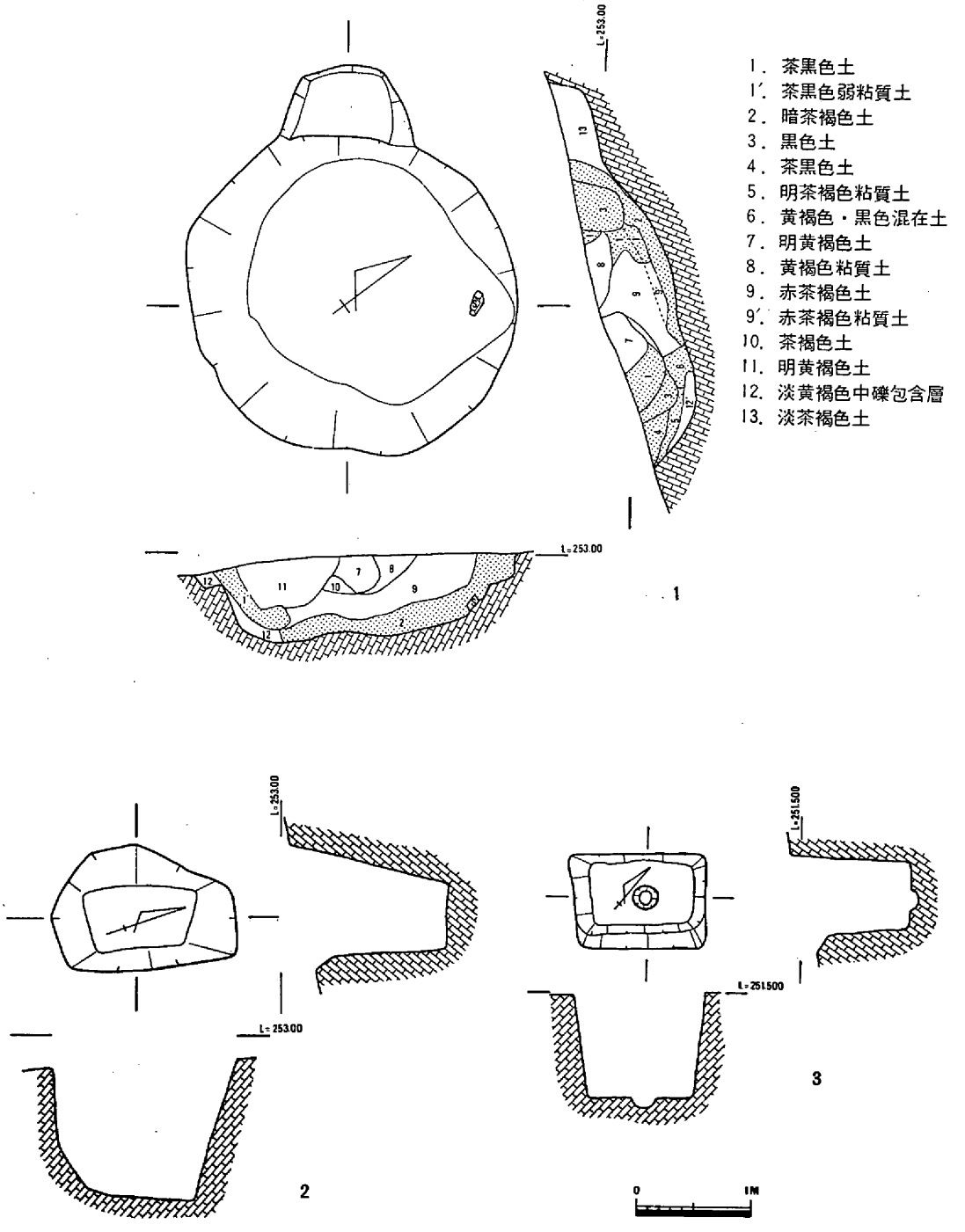
第15図　４区全体図（$\frac{1}{150}$）



第17図　4区土壙墓実測図・出土土器実測図（$\frac{1}{40}$・$\frac{1}{3}$）

る。淡い青灰色を呈し，焼成は普通である。口径15㎝器高４㎝を測る。

土壙（第18図―２・３）３は２号土壙墓の北側，0.4mに検出した，南北90㎝・東西115㎝・深さ100㎝の長方形の土壙で，この土壙のほぼ中央には，直径20㎝・深さ10㎝のピット状の窪みがみられる。２は調査区の中央やや北西寄りに，南北160㎝・東西100㎝・深さ130㎝の多少形のくずれた長方形で検出された土壙である。２・３とも土壙内からの出土遺物はなかった。



1．茶黒色土
1′．茶黒色弱粘質土
2．暗茶褐色土
3．黒色土
4．茶黒色土
5．明茶褐色粘質土
6．黄褐色・黒色混在土
7．明黄褐色土
8．黄褐色粘質土
9．赤茶褐色土
9′．赤茶褐色粘質土
10．茶褐色土
11．明黄褐色土
12．淡黄褐色中礫包含層
13．淡茶褐色土

第18図　4区遺構実測図（$\frac{1}{60}$）

円形土壙（第18図－1，図版5－2）遺構検出面において，中央部に，ちょっと見ただけでは地山と見違える土があり，この土と地山との間を20㎝～50㎝の幅で黒っぽい土がめぐり，黒色土が環状を呈している遺構が，調査区の北部において検出された。この黒色土の囲っている範囲は，直径3ｍにおよぶ。この遺構を土層断面で確認すると，中央部の地山に似た土は，一種類の単純層ではなく幾層かに分けられ，移動して埋ったものである。環状にめぐっている黒色土も，幾層かに分かれる。そして，環状にめぐっている黒っぽい土は，地山に似た土の下にまではいりこんでいて，この土と地山とが，完全に分離していることが確認された。なお遺構に出土遺物はみられなかった。

3．　4区のまとめ

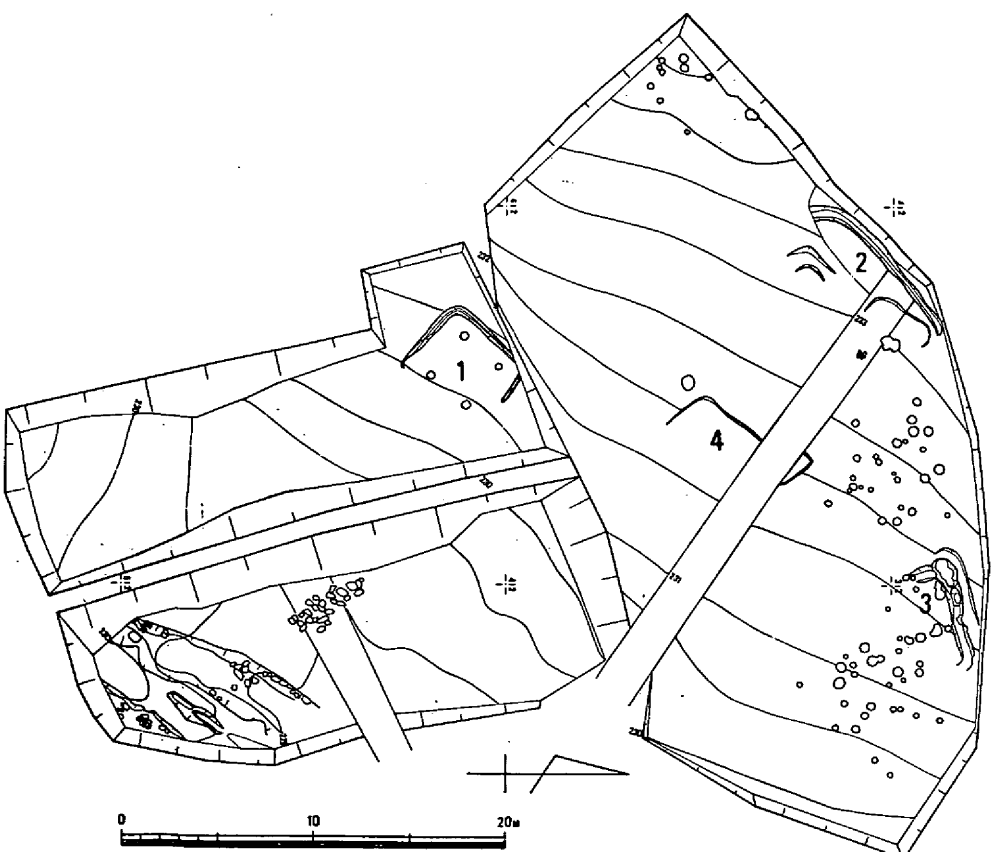
4区において確認された遺構は以上の5つであるが，このうち土壙墓については，1号土壙墓では，土壙墓から東へ2ｍ・西へ2.5mのところに，L＝253.5m前後のほぼ均一の高さで北側へまわると思われる窪みがみられる。一方の2号土壙墓においても，土壙墓の西から北にかけて，2～2.5ｍ外側を窪みのめぐる痕跡がみられる。これらの窪みはいずれも各々の土壙墓を中心として巡っていると考えられ，これらの土壙墓に伴う周溝と思われる。2号土壙墓の長さは，道により削平をうけていて不明であるが，巾・深さが1号土壙墓とほぼ同じであること，2つの土壙墓はいずれも周溝をもち，等高線に平行して築かれていること，埋葬されている土器が，一組のものと思われる須恵器の杯身と杯蓋であることなど，共通している点が多く，この2つの土壙墓は対をなしているものであり，2号土壙墓の長さも，1号土壙墓と大差ないと思われる。次に2つの長方形の土壙については，いずれも出土遺物がなく，年代・用途とも不明であるが，深さが100㎝・130㎝といずれもかなりあり，一方の中央にはピットをもつていることから，貯蔵庫のようなものと考えられる。円形の大土壙は，土層断面から，中の土が移動して埋っていることは確実である。しかし，地山との境には明確な掘り形などはなく，これが，人の手によるものなのか，または，岡山県北数カ所の遺跡等において，風倒木痕として報告されている様に，自然現象により生じたものであるのか，その性格が不明なものである。出土遺物としては，土壙内から出土した須恵器の他に，いずれも細片で計測不能であったが，包含層から須恵器・土師器等数片がある。

第４節　３区の遺構と遺物

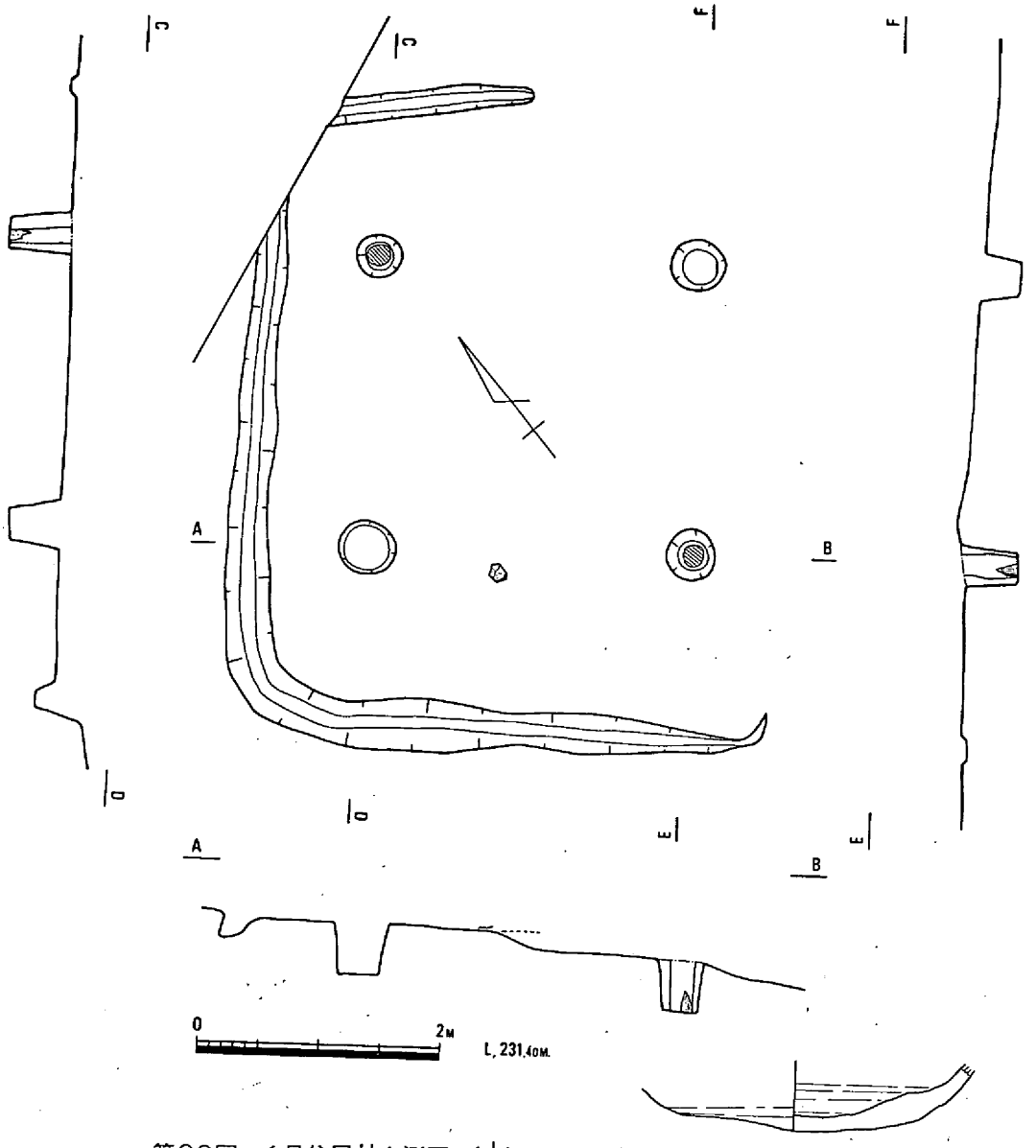
３区の範囲は，北側市道に接して南側で，第一次調査時のＴ９～11トレンチの含まれる部分である。地形的には，北側の尾根の南側斜面の裾に当る。そして，南側に２区とした区画のある低い尾根とに挟まれており，小さな谷状を形成している。Ｔ９トレンチは，この谷状の地形の最も深い部分に相当するものである。この３区の範囲内においては，北から南に向けて緩斜面を成しており，１号住居址の南側から谷に向う角度は大きくなる。今回検出した遺構は，この緩斜面上に立地している。

１号住居址（第20図）

Ｔ10トレンチの北端付近で検出したもので，隅丸方形を呈する。検出した住居址の壁は，ほとんど削平されており，南西側の一部が残存するのみであった。壁に沿っては溝が廻るものであるが，南東に向けて斜面が下ることもあって，その方向の溝は検出されず，三方の溝を検出した。良好に残存す



第19図　３区全体図（$\frac{1}{400}$）



第20図　1号住居址実測図（$\frac{1}{60}$）・出土遺物実測図（$\frac{1}{3}$）

る一辺の長さは，5.30mを測る。

住居址の床面には，4個の柱穴を検出した。柱穴は，西隅を1とし右廻りに北側を2，以下3，4とする。柱穴1，2間，柱穴3，4間の距離は2.5mを測り，柱穴2，3間，柱穴1，4間は2.7mを測る。柱穴の掘り方は，ほぼ円形を呈しており，径は35～45cmを測る。柱穴1及び柱穴4の掘り方には柱痕が見られ，その径は約20cmを測る。さらに，掘り方の底には柱根が残存していた。柱根は，直接に掘り方の底面に接するもので，礎盤等の施設は見られなかった。残存する柱根は，柱穴2はクリであり，柱穴4はナラガシワである。

住居址の床面に，柱穴１，４のほぼ中間で須恵器片を検出した。出土した須恵器は，壷の底部と推測されるもので，その形状は第32図２の形態を呈するものと考えられる。

２号住居址（第21図）

T—11トレンチの北端で検出したもので，その残存状態は悪い。地形的には，緩斜面を成すものであり，その傾斜は，１号住居址の位置する場所よりも角度は大きい。そのためもあって，検出したのは，壁溝と，床面を最大巾で1.5 mまでである。残存する壁溝の全長は，9.7 mを測り，その両端でゆるやかに曲るものである。その形状からして隅丸方形を呈するものと推察される。

この住居址は，埋土からも多くの遺物が出土した。さらに，床面にも多くの遺物を検出した。床面から出土した土器の出土状態は，概ね二群に分けられる。さらに，検出した壁溝からは，須恵器製の高杯（第23図15）が出土している。

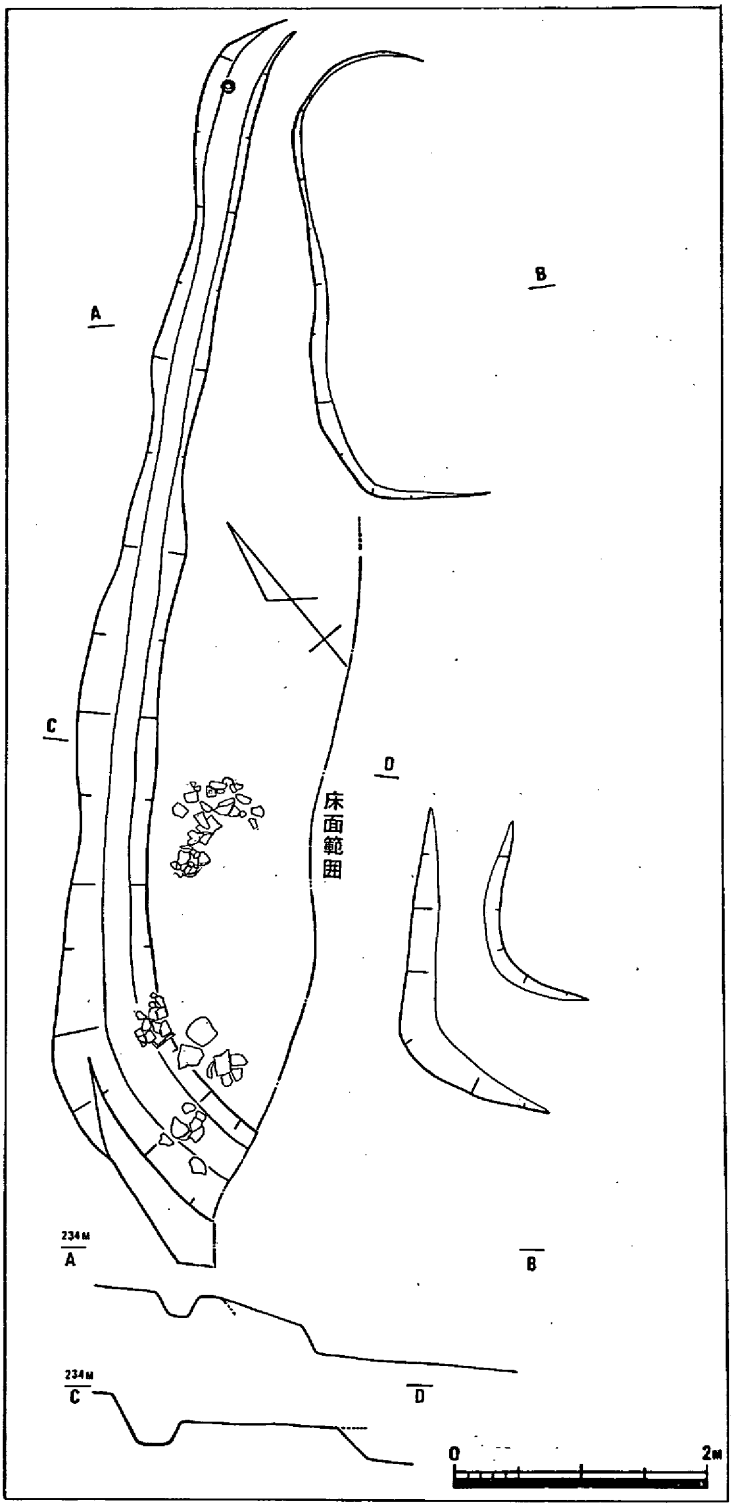
住居址は，遺存状態が悪いこともあって，柱穴は検出されず，住居址の構造等は不明である。

住居址に接しては，土壙と溝状遺構を検出した。土壙の形状は，北西及び南西の側辺は直線であり，北東側の一辺は弧を描くものである。土壙の残存する全長は，3.6mを測る。この土壙からは，小破片であるため図示しなかったが，高台の付く壷の底部が出土している。溝状遺構は，「L」字状に屈曲するものを検出した。検出した全長は短かく，この使途は不明である。土壙は，住居址よりも新しいとすることができる。

２号住居址出土遺物，（第22・23図）

第22図，第23図８～16は，住居址の床面から出土した一括遺物である。１，５～７は甕形土器であり，２は甑形土器，３は壷形土器，４は鉢形土器である。１は，外面はナデ，内面にはクシ状工具によるヨコナデが見られる。色調は茶褐色を呈する。２は，上端から下端に向けて細くなる筒状の形状を呈するもので，口縁部の直径約23cm，底径約11cm，高さ約27cmを測るもので，全体の形態を知ることができる。胴部には一対の把手を貼付するもので，底部には，径0.8cm前後の孔が２個一対で穿孔されている。胴部外面は，上端，下端はヨコナデにより，他はクシ状工具によるナデがなされている。内面は，同じく上端，下端はヨコナデがなされており，他の部分は，下から上への入念なヘラ削りがなされている。胎土は比較的良質で，色調は淡褐色を呈している。３は，外面はナデ，内面は板状工具によるナデがなされている。色調は茶褐色を呈しており，底部外面は，二次的に火を受けた痕跡が見られる。４は，内面をハケ状工具により調整を行ったもので，色調は茶褐色を呈する。５，６は，内外面ともナデによる仕上げがなされているものである。５の口縁部には，粘土紐の痕跡が明瞭に見られる。７は，口縁端部付近は内外面ともヨコナデであり，外面の他の部分は，クシ状工具によるナデがなされている。内面は，胴部内面はヘラ削りで，頸部の一部はクシ状工具によるヨコナデがなされている。

８～14は，前記の土器と一括で出土した須恵器である。８は蓋で，内外面ともヨコナデによるものである。９は杯で，底部はヘラ起し痕を残すもので，やや平坦である。立ち上り部は内傾しており，端部は丸い。受部は，やや上方にのびるもので，端部は丸い。胴部は，内外面ともにヨコナデによる。10は，底部外面にヘラ削りの見られるものである。立ち上りは，内傾しており，端部は丸い。受



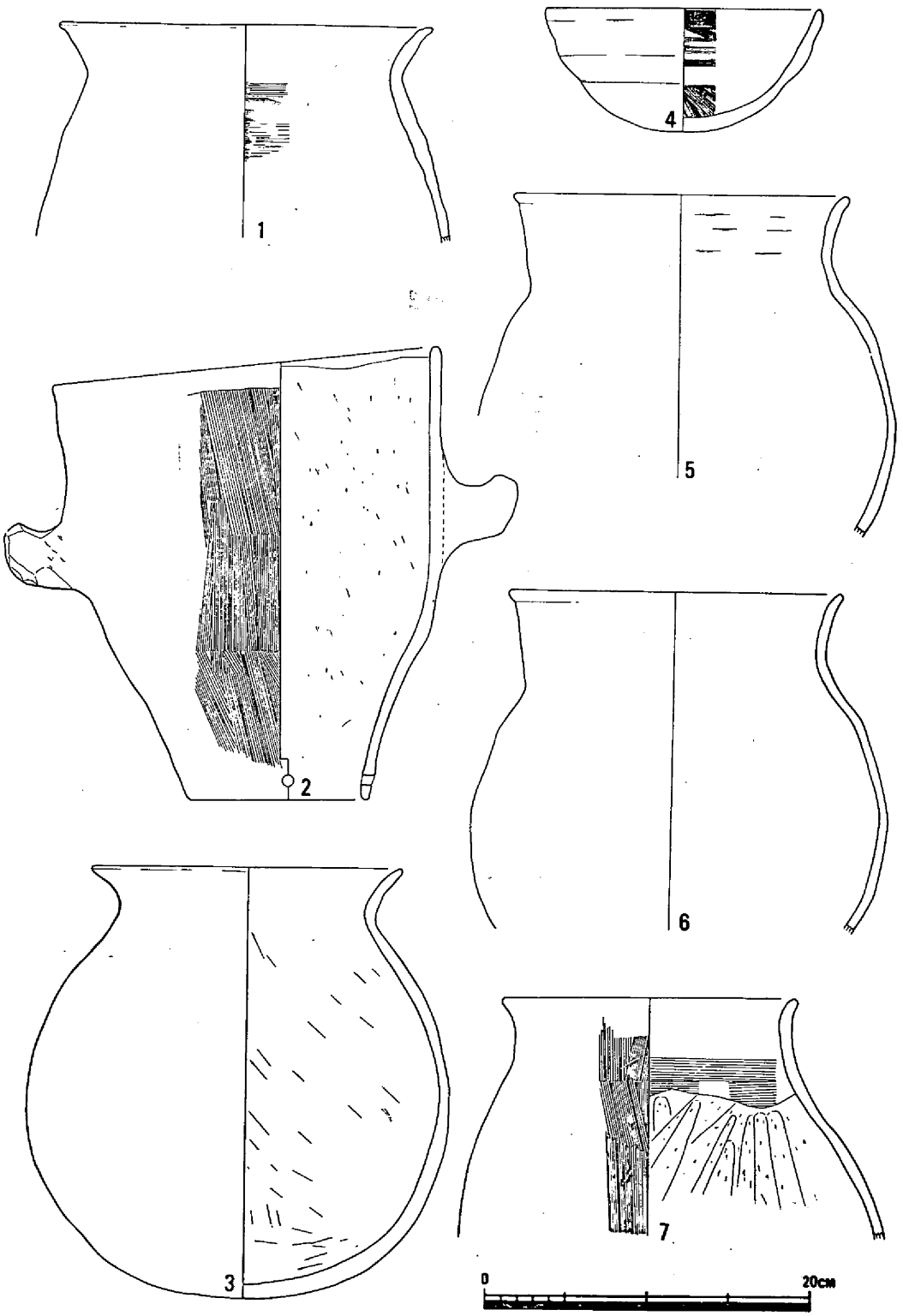
第21図　2号住居址実測図（1/60）

部は水平ぎみに短かくのびるもので，胴部の内外面はヨコナデによる。11は小型の壷で，肩部にはクシによる施文が見られる。13，14は高杯の脚である。15は，住居址の壁溝から出土したもので，同じく高杯である。杯部の一部を欠失しているが，脚部は，13，14と同じく裾に向けて大きく開くもので，端部はやや厚くなる。胎土には，砂粒をやや多く含み，色調は濃青色を呈する。16は竈の廂の部分である。

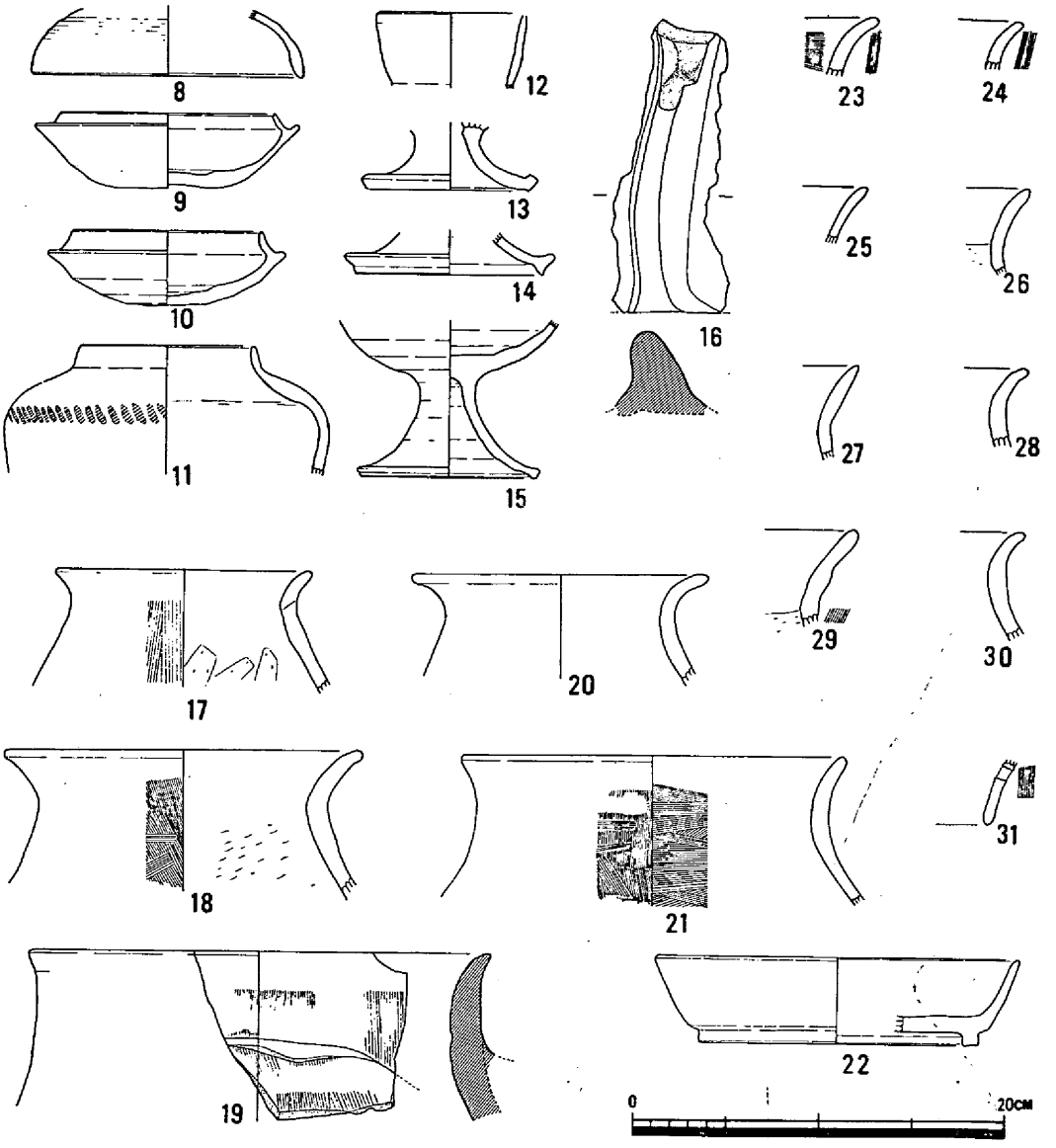
17～31は埋土中からの出土である。17，18，23は外面をクシ状工具によるナデ，内面をヘラ削りするものである。内外面ともにクシ状工具によるものは，21，23がある。19は，竈の口縁部で，廂が欠落した痕跡が見られる。復元口径約24cmを測る。外面はクシ状工具によるナデ，内面はナデによる。口縁端部は火を受けていないが廂の内面は二次的に火を受けている。胎土には砂粒を含むも良質で，焼成も良好である。色調は淡褐色を呈する。31は甑の底部穿孔部分で，端部はヨコナデにより，外面はクシ状工具によるヨコナデがなされている。22は貼付高台の付く須恵器の皿である。

3号住居址（第24図）

3号住居址は，北側市道に接



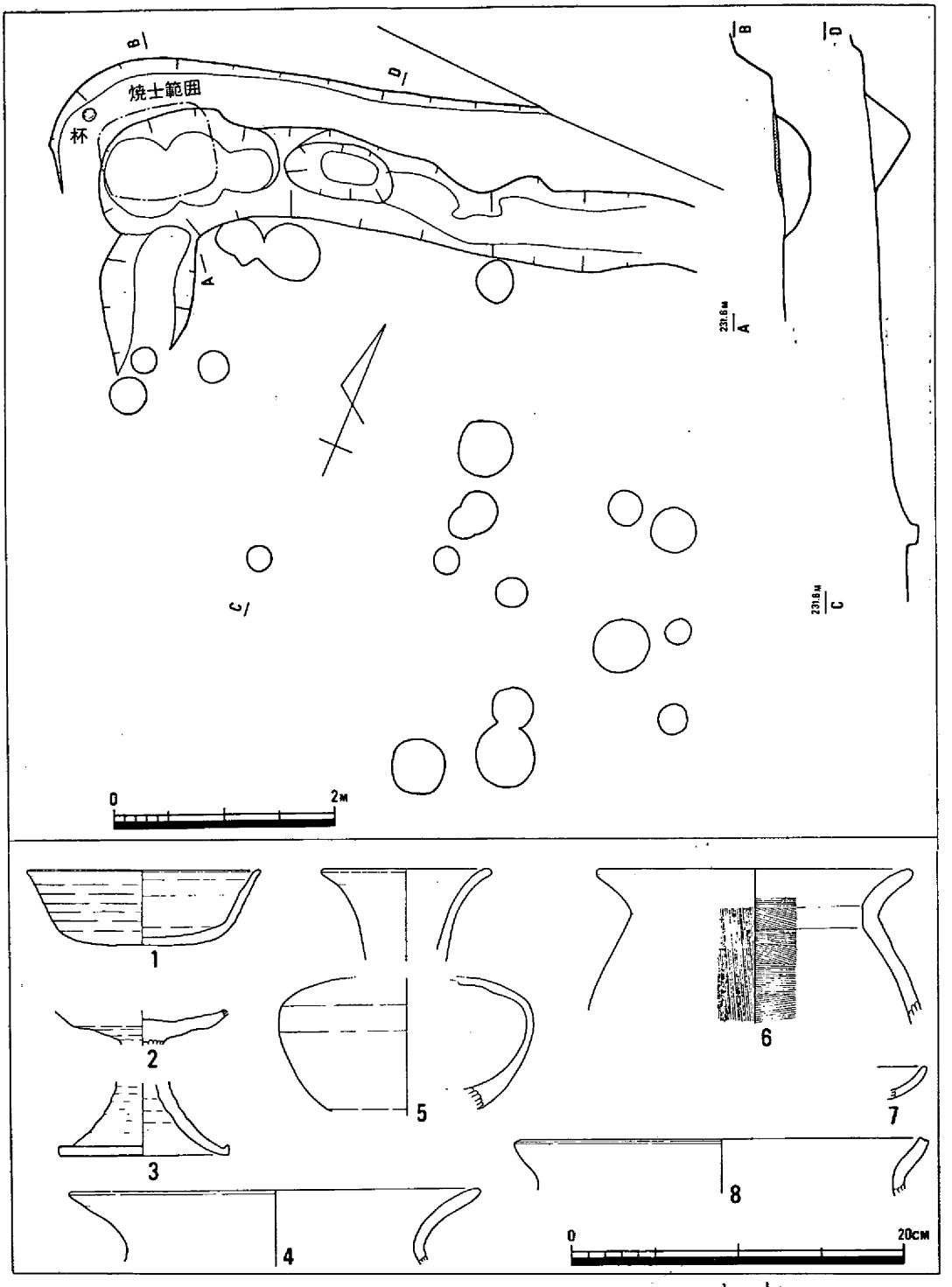
第22図　2号住居址出土遺物（土師器）（$\frac{1}{4}$）



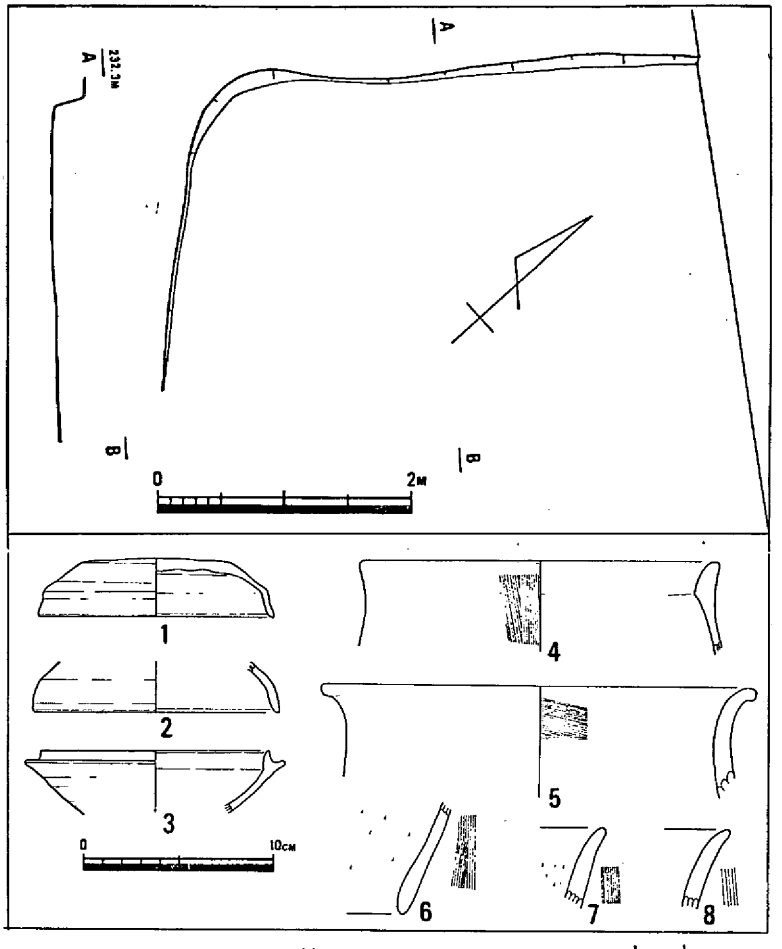
第23図　２号住居址出土遺物（$\frac{1}{4}$）

する位置で検出し，遺構の一部は市道の敷地まで延びている。そのために，検出し得たのは住居址の一部である。検出した住居址は，北側壁の一部と，それに続く西側壁の一部である。検出した形状から，その形態を推考すれば，隅丸方形を呈するものとしうる。住居址の西隅の床面上に100×80cm四方の範囲に広がる焼土面が見られた。その焼土面と壁との間より，床面よりやや高い位置で須恵器の杯（第24図１）が出土した。

住居址の側壁から約30cm内側に，側壁に沿って巾約80cmの溝が廻る。住居址の側壁と，この溝は



第24図　3号住居址実測図と出土遺物実測図（$\frac{1}{60}$・$\frac{1}{4}$）



第25図　4号住居址実測図と出土遺物実測図（$\frac{1}{60}$・$\frac{1}{4}$）

はぼ同一の方向性を見せており，何らかの関係を示すのであるが，住居址の壁溝とするには大き過ぎる。また，焼土面は，この溝を覆うものである。住居址内には多くの柱穴を検出したが，いずれが住居址に伴うものかは確定し難い。

3号住居址出土遺物

1～5は須恵器である。1は，床面に近い位置から出土したもので，体部は，やや開きながら立ち上るもので，端部は丸い。胎土には微砂を含み灰青色を呈する。2，3は高杯で，胎土は良質で，青色を呈する。4は長頸壺で，入念な仕上げであり，整美な形態をなくしている。胎土も良質で，淡灰褐色を呈する。

6～8は土師器である。6は，口縁部が大きく外反するもので，胎土には砂粒をやや多く含む。7，8は，良質の胎土を用い，入念な仕上げの見られるもので，内外面に丹が施されている。

4号住居址（第25図）

2号住居址の南東約10mの位置に検出したこの住居址は，T—11トレンチの断面においても確認されていた。調査において検出したのは，北西，及び南西の側壁の一部で，北東部分は，トレンチにより，南西部分は，地形的に低下するため削平されており検出されなかった。また，住居址の床面は，地山面まで掘り下げたが柱穴は確認されなかった。

4号住居址出土遺物

1～3は須恵器で，1，2は蓋である。1は，天井部はヘラ起しによるもので，上面は平坦である。3は杯で，立ち上りは短かく，受け部も短かく水平にのびるものである。4～8は，土師器である。4は，外面はクシ状工具によるナデであり，内面は，口縁部はヨコナデ，胴部はヘラ削り後ナデ

によるものである。5は，外面はナデ，内面の口縁部はクシナデ，胴部はナデによる。6は甑であり，内面は下から上へのヘラ削り，外面はクシナデが見られる。

3区包含層出土の遺物

3区の包含層からは，非常に多くの遺物が出土した。出土した遺物は，縄文式土器，弥生式土器，土師器，須恵器，製塩土器，竈，陶磁器，鉄製品，砥石等がある。

縄文式土器（第26図1～11）

1～8は，口縁端部に無節縄文が施され，他は条痕の見られるものである。器壁の厚さは，0.8～0.9cmを測り，粘土紐の痕跡が見られる。胎土には，微量であるが繊維を含み，色調は茶褐色ないし暗褐色を呈している。時期は，縄文時代早期末とすることができるであろう。9～11は，口縁部の近くに凸帯を貼り付けて刻目を施すものである。胎土には砂粒を含み，色調は茶褐色を呈している。時期は，縄文時代晩期とすることができるであろう。

弥生式土器（第26図12・13）

12，13は弥生式土器である。12は，ゆるく外反した口縁の端部に刻目を施すものである。12は，三本のヘラ描き沈線文を施すもので，いずれも弥生時代前期に属するものである。

製塩土器（第26図14・17）

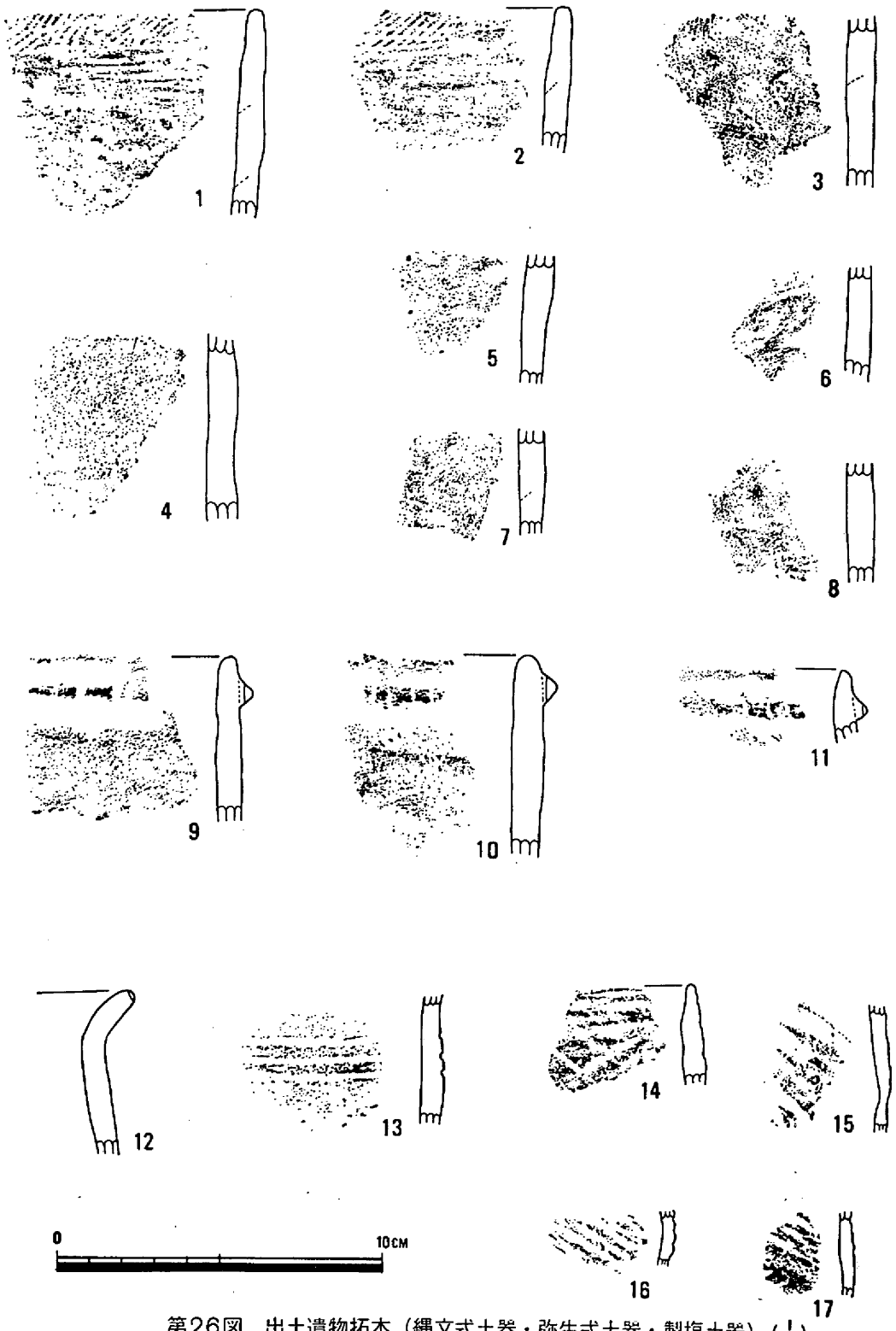
14～17は，製塩土器（師楽式土器）で，外面には叩きが見られる。出土した破片はいずれも小片で，器形，器高は知ることはできない。

谷部出土の一括遺物（第27図）

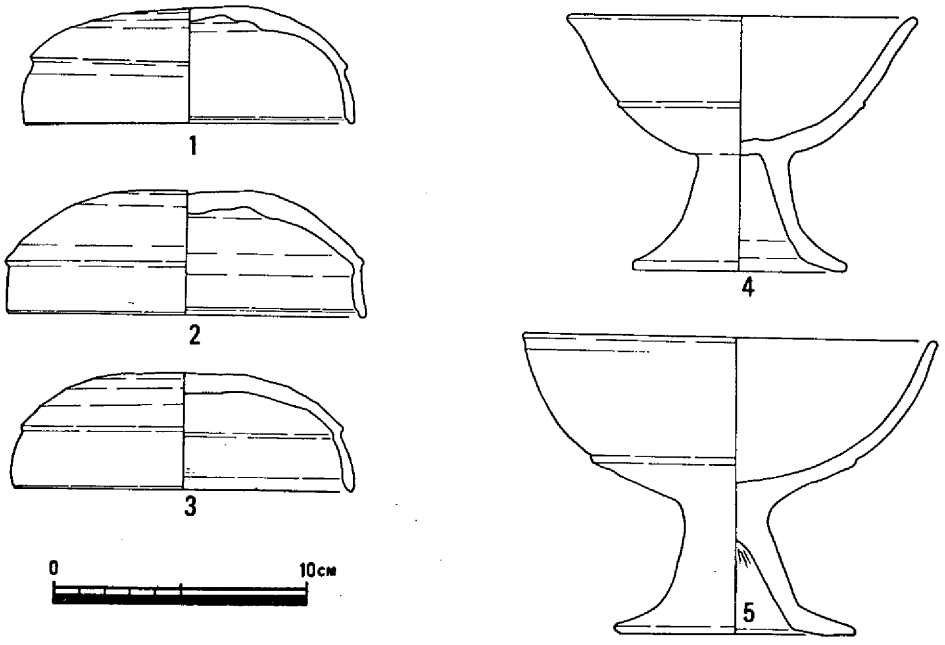
1号住居址の南，谷の底部より出土したもので，須恵器蓋3点，土師器高杯2点がまとまって出土した。1は，天井部をヘラ削りするもので，体部との境は明瞭に段が認められる。口縁端部は斜めになっており，小さな段が見られる。2も1とほぼ同様であり，天井部にはヘラ削り，体部との境には段が見られ，体部は直線的である。口縁部にも内側に段が見られる。3も，天井部にヘラ削りが見られ，体部との境は線が認められる。口縁端部は斜面をもつが，やや鈍い。いずれも胎土は良質で少量の微砂を含み，仕上げも入念であり，色調は青灰色を呈する。4，5は土師器の高杯で，杯部は全体的に曲線を描く。4は，杯部の下方に凸帯が廻るが，5は段を形成する。脚部の柱状部はやや開きながら伸びて途中から急に開くものである。胎土は精良であり，色調は赤褐色を呈する。

須恵器（第28，29，30，31，32図）

1，2は，天井部にヘラ削りが見られ，天井部と体部との境は段を形成し，体部の立ち上りは長い。口縁端部の内面に斜面をもつものである。3，4は，天井部にヘラ削りが見られるが，1，2に比べればその範囲は狭い。天井部と体部との境には凹線が1本廻るもので，口縁端部は丸くおさめられている。5～9は，天井部にヘラ削りが認められるも，その範囲は狭くなる傾向にある。体部と天井部との境は大きく屈曲するもので，体部の立ち上りは短かくなる。口縁端部は丸くおさめられている。10，11は，天井部の上面にヘラ起こしの痕跡の残るもので，その部分は平坦に造られている。天井部と体部との境は明瞭なものはなく，なめらかな曲線を描く。平坦面以外はヨコナデによる調整がなされている。12～15は鈕の付く蓋で，12は上面が平坦で，平坦面と体部との境には，一本の凹線が



第26図　出土遺物拓本（縄文式土器・弥生式土器・製塩土器）（$\frac{1}{2}$）



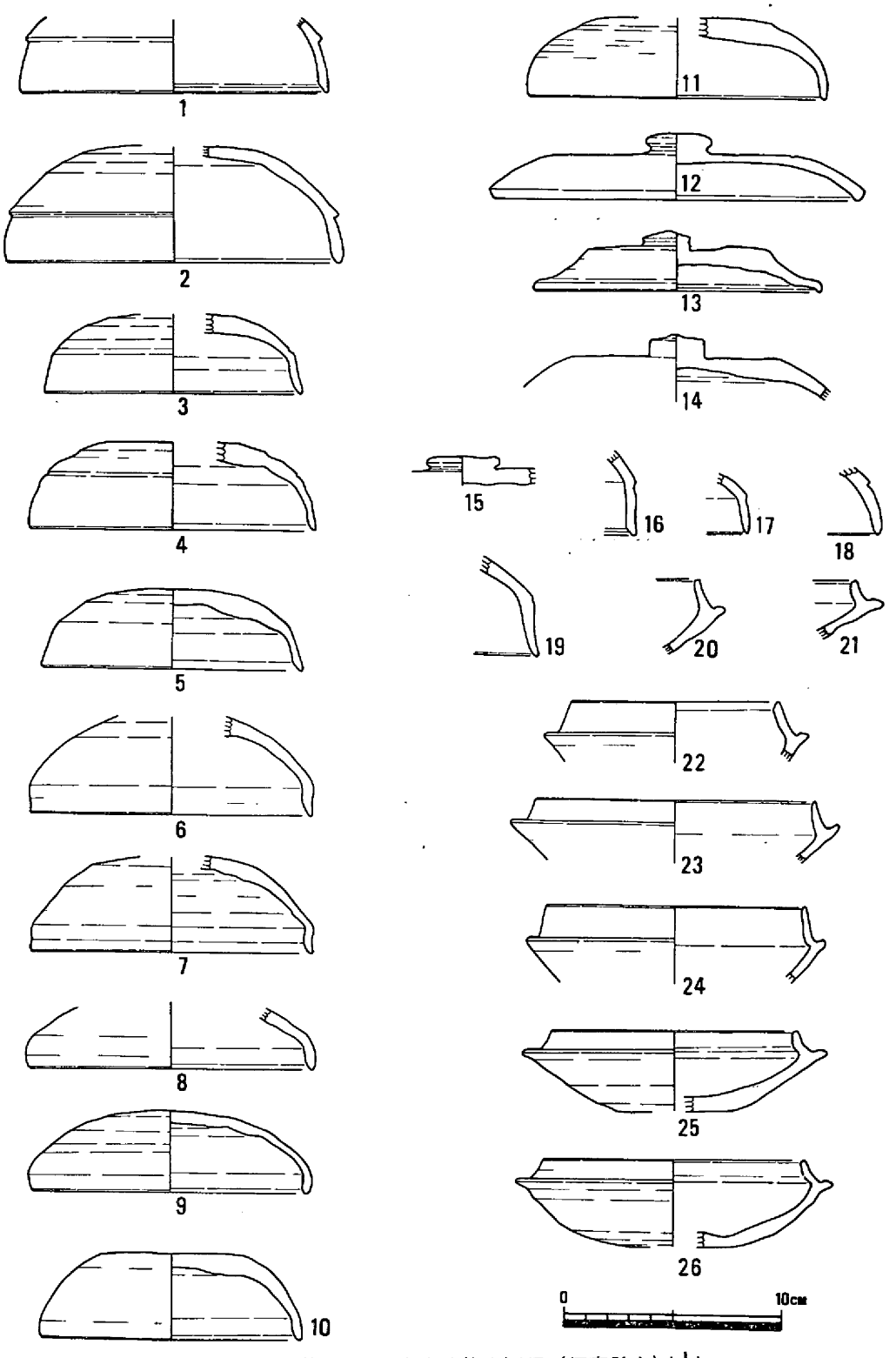
第27図　出土遺物実測図　($\frac{1}{3}$)

めぐる。鈕は扁平で，蓋の器高は低い。胎土はやや粗く，焼成は軟調であり，色調は灰褐色を呈する。13も，天井部はやや平坦であり，体部は一度内側にそり，端部付近でやや平坦になり外方に伸びて，端部は垂直に立つ。天井部の器壁は厚く，全体的に雑な造りである。

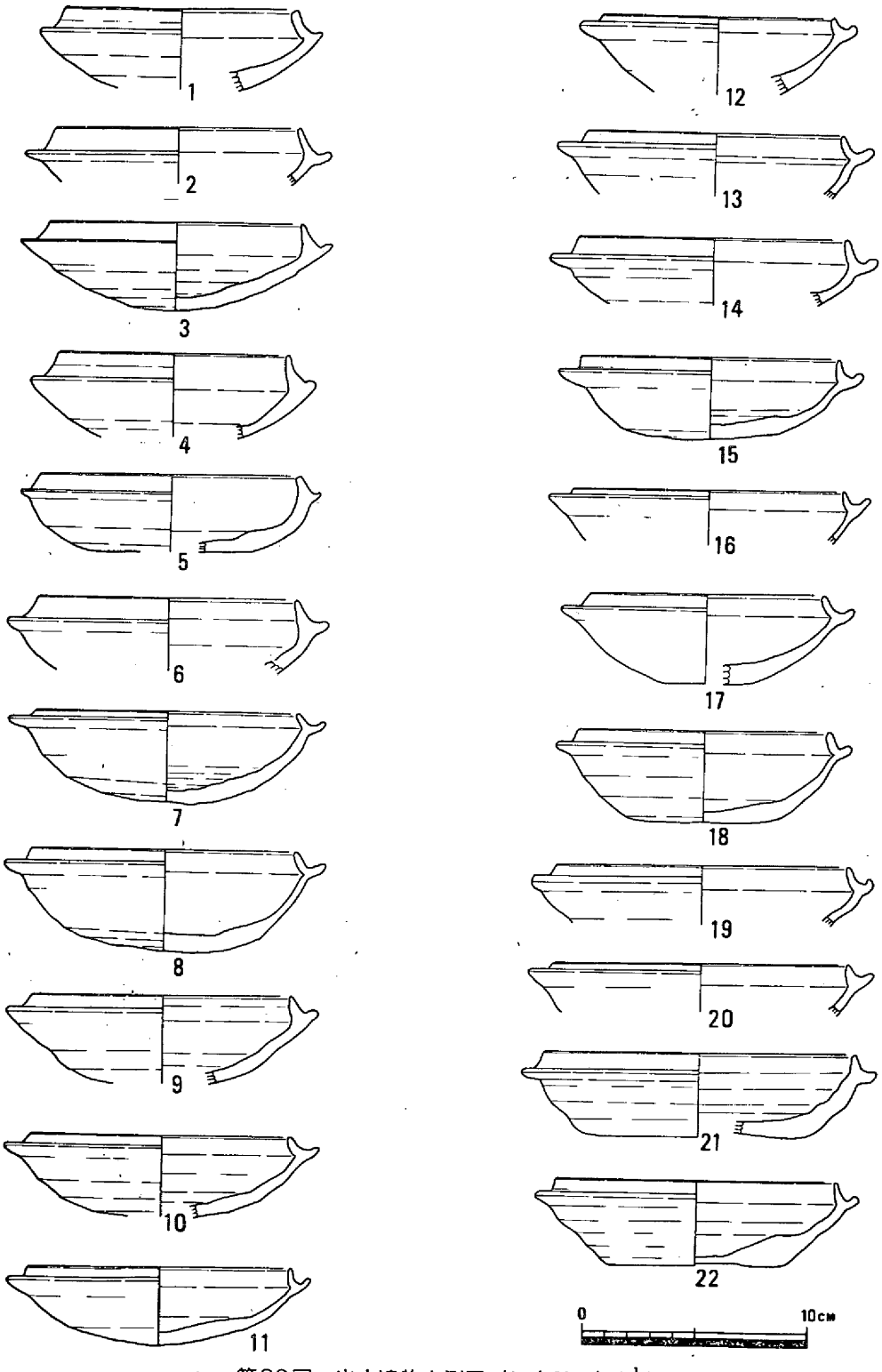
22は杯の口縁部である。立ち上りはやや内傾しており，その部分は長い。口縁端部には斜面をもつ。23，24は，立ち上り部がやや長いものであるが，その端部は丸くおさめられている。25，26，第29図1～11は，底部にヘラ削りの見られるものである。さらに，口縁端部は丸くおさめられている。立ち上り部の形状が第28図25，26，第29図1～6はやや長いもので内傾して立ち上るものである。第29図は7～11立ち上り部が短かいもので，受部が斜め上方に伸びるため，立ち上り部を受け部の端部の高低差が小さくなるものである。15～22は底面にヘラ起しの痕跡の見られるもので，その部分は平坦面を存している。

第30図は高台の付く杯である。1は，ゆるく外反しながら立ち上る体部で，口縁端部は丸い。高台は貼付したもので，外方に張り出すように立ち，高さも高い。2，3は，1に似るものであるが，立ち上り，器壁の厚さ等で雑なものである。高台は，外方に開くも，立ち上りは短かい。4，5は高台の稜線が明瞭なものである。6～10は高台の高さは低いが，やや外方に張り出すものである。体部の立ち上りは，やや開きながらも直線的であり，長さも短かい。11～21は高台を形式的に貼り付けた感じのもので高さも低い。

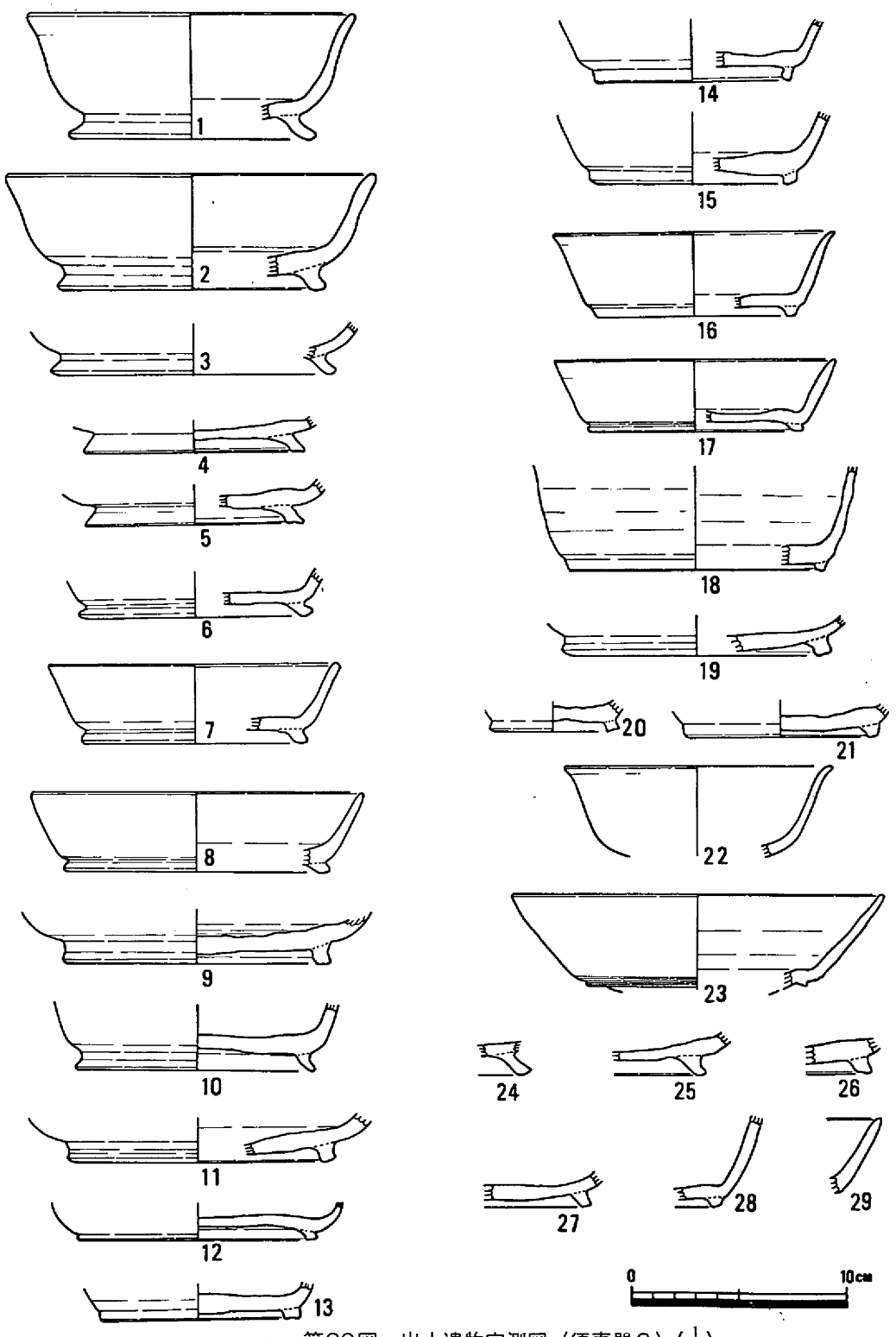
第31図1～5は杯である。体部は，概ね外反して直線的なものである。1の底部はやや丸いが，2～5は平坦である。6は碗形であり，底面は不定方向のヘラ削りが見られる。7～9は蓋で，7は穿



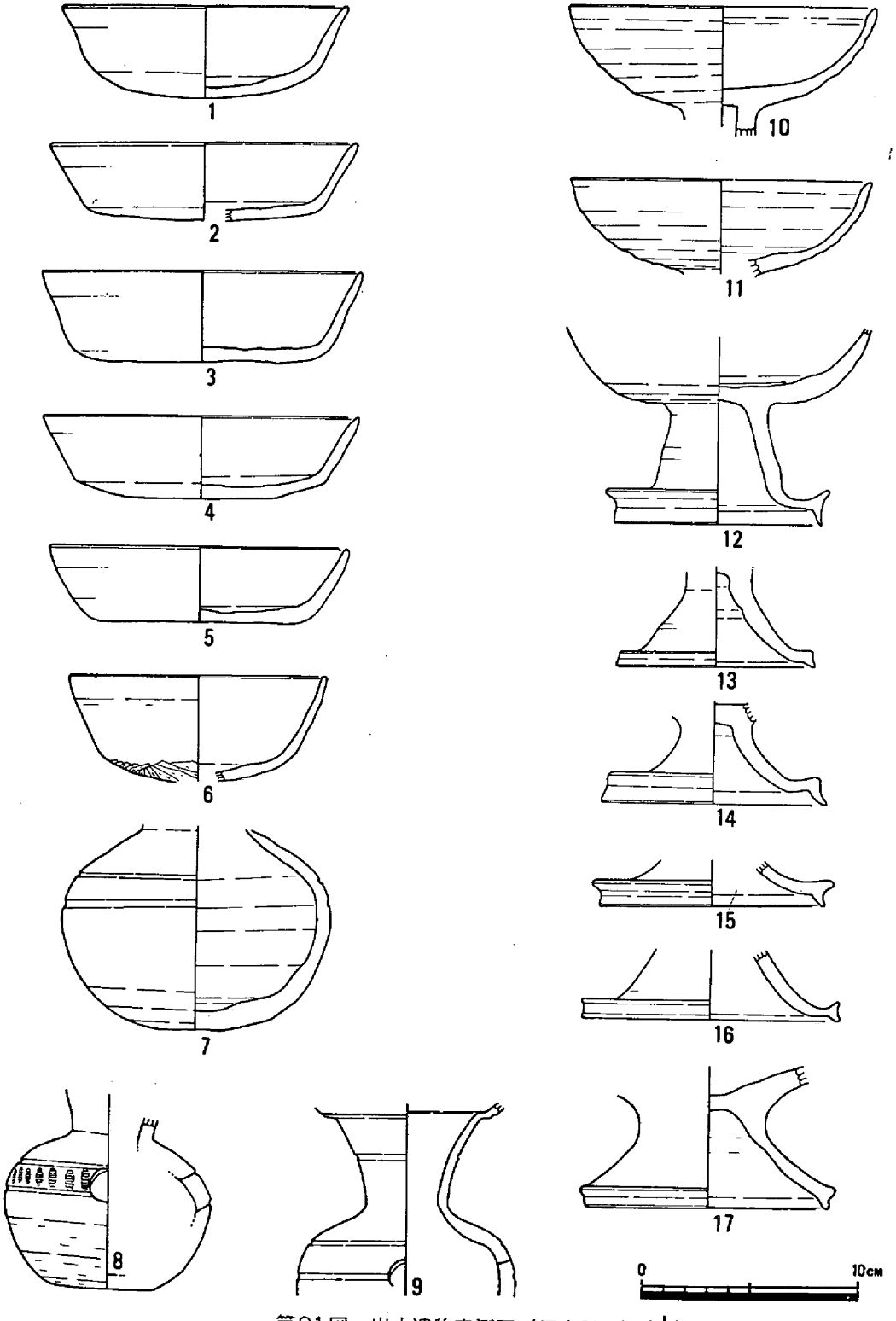
第28図　出土遺物実測図（須恵器１）（$\frac{1}{3}$）



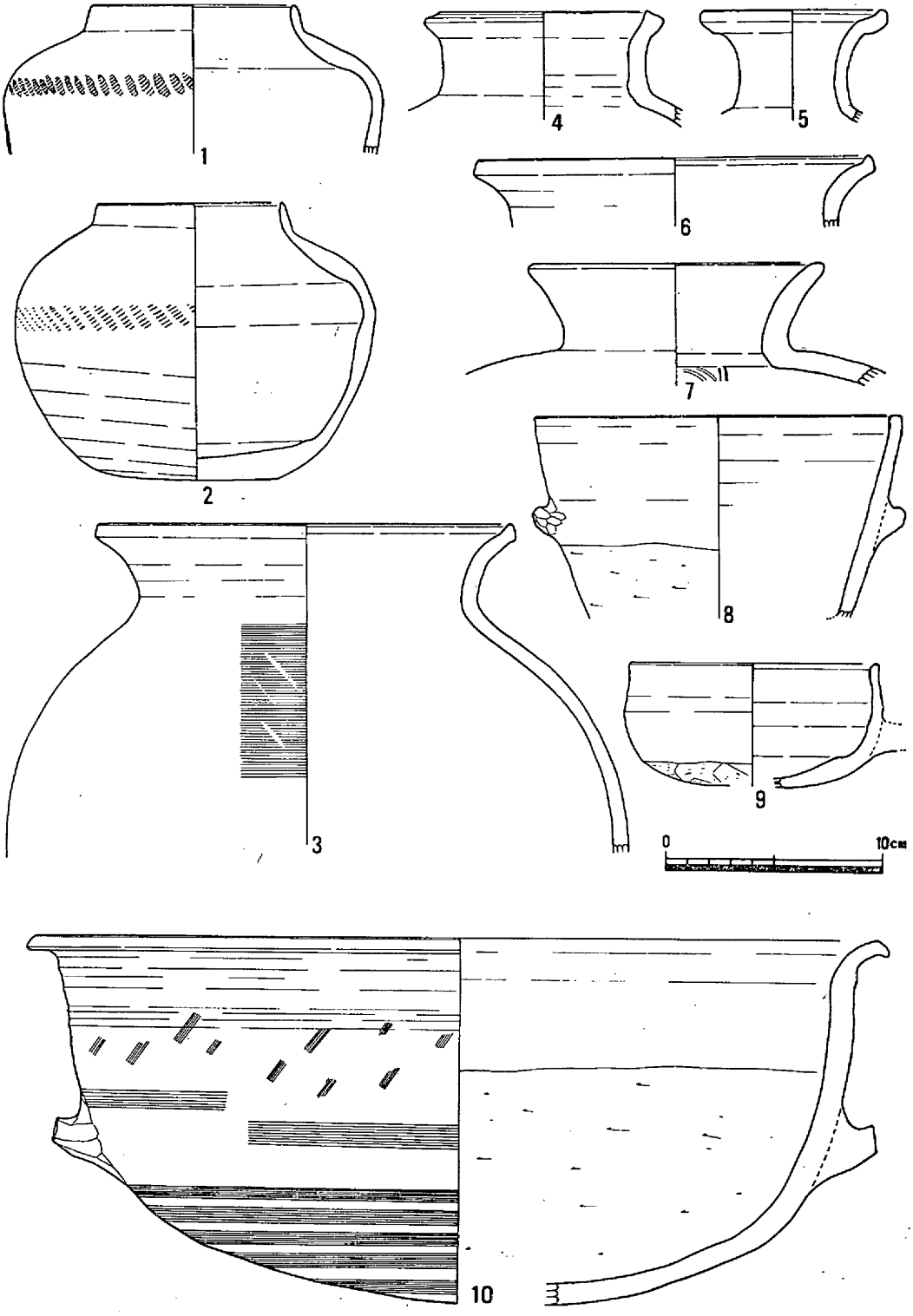
第29図　出土遺物実測図（須恵器2）（$\frac{1}{3}$）



第30図　出土遺物実測図（須恵器３）（$\frac{1}{3}$）



第31図　出土遺物実測図（須恵器4）（$\frac{1}{3}$）



第32図　出土遺物実測図（須恵器5）（$\frac{1}{3}$）

孔部分が欠落しているが，胴部はほぼ球形をなしている。8，9の胴部の形状は似るものがあり，頸部がやや長く伸びるものである。10～17は高杯で，10，11の杯部は曲線を描く。12～17は脚部で，大きく開きながら裾に向うものと，柱状部がほぼ筒状になるものとがある。

第32図は，壺，甕，鉢等である。1は2号住居址出土のものである。2は1と同じく小壺である。8は，底部の欠損部分でわずかに屈曲するものが認められ，甑かと考えられる。9は把手の付く碗である。10は大型の鉢で，外面底部はクシ状工具によるヨコナデであり他はクシナデ後ヨコナデがなされている。外面には把手が付く。内面は，上半はヨコナデ，下半は横方向のヘラ削りが見られる。胎土はやや粗く，色調は灰褐色を呈している。

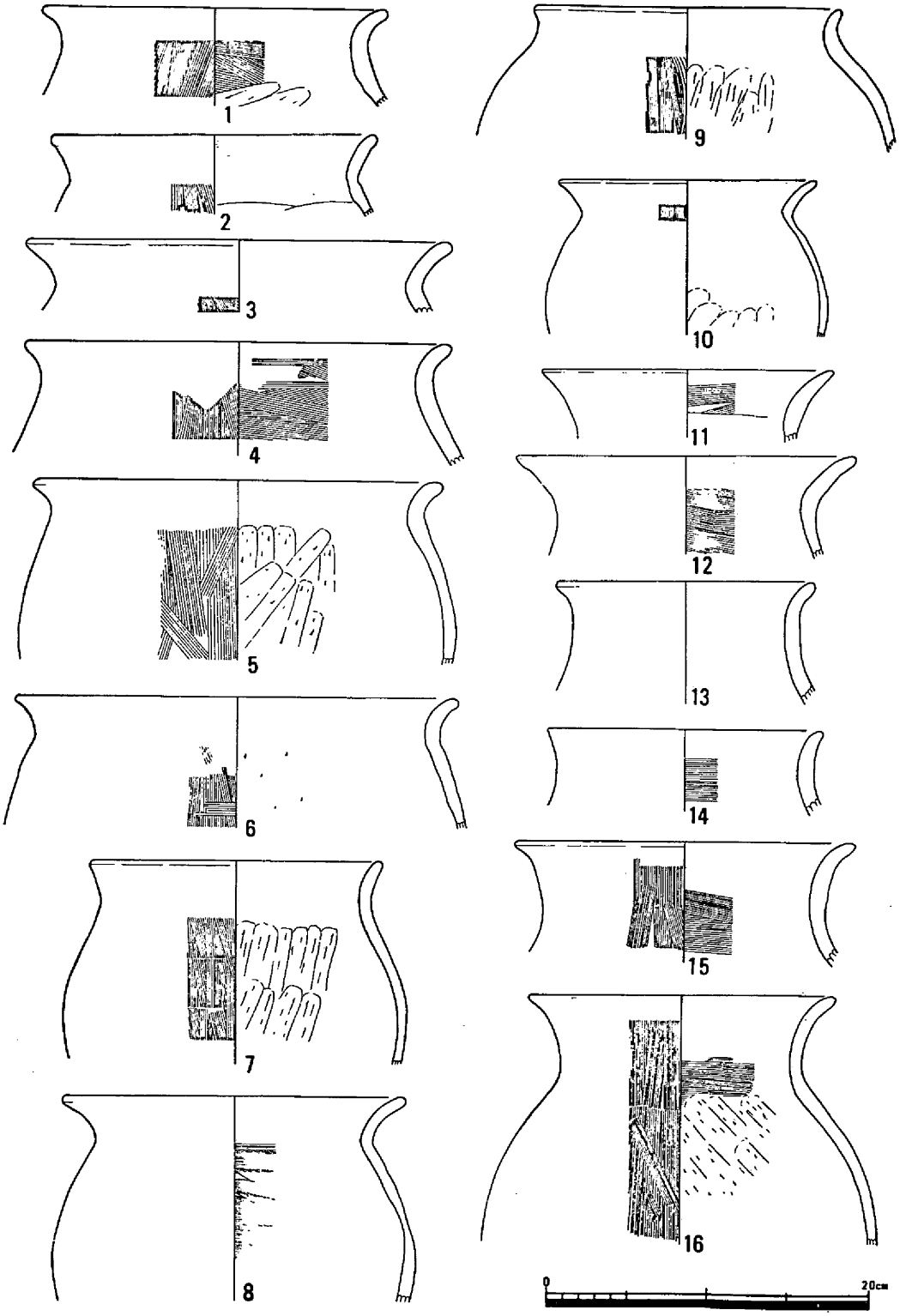
土師器（第33，34，35，36，37，38図）

第33，34図は，口縁部が短く外反するものである。調整技法等により分けると，外面の口縁部付近はヨコナデにより，他はクシ状工具による上下方向のナデである。内面は，クシ状工具によるヨコナデ，胴部はヘラ削りの見られるものである。内面のヘラ削りは，入念であり，口縁部において段もしくは稜線を形成しないものである。また，外面は同じであるが，内面にクシ状工具の調整が見られないものと，全体にクシ状工具により調整されているものがあり，さらに，工具による調整の見られないもの（第33図10）もある。ヘラ削りの方向は，下から上に向けてである。第34図11～16は，内面のヘラ削りにより口縁部との境に稜線を形成するものである。ヘラ削りの方向は，横方向（左回り）が多い。

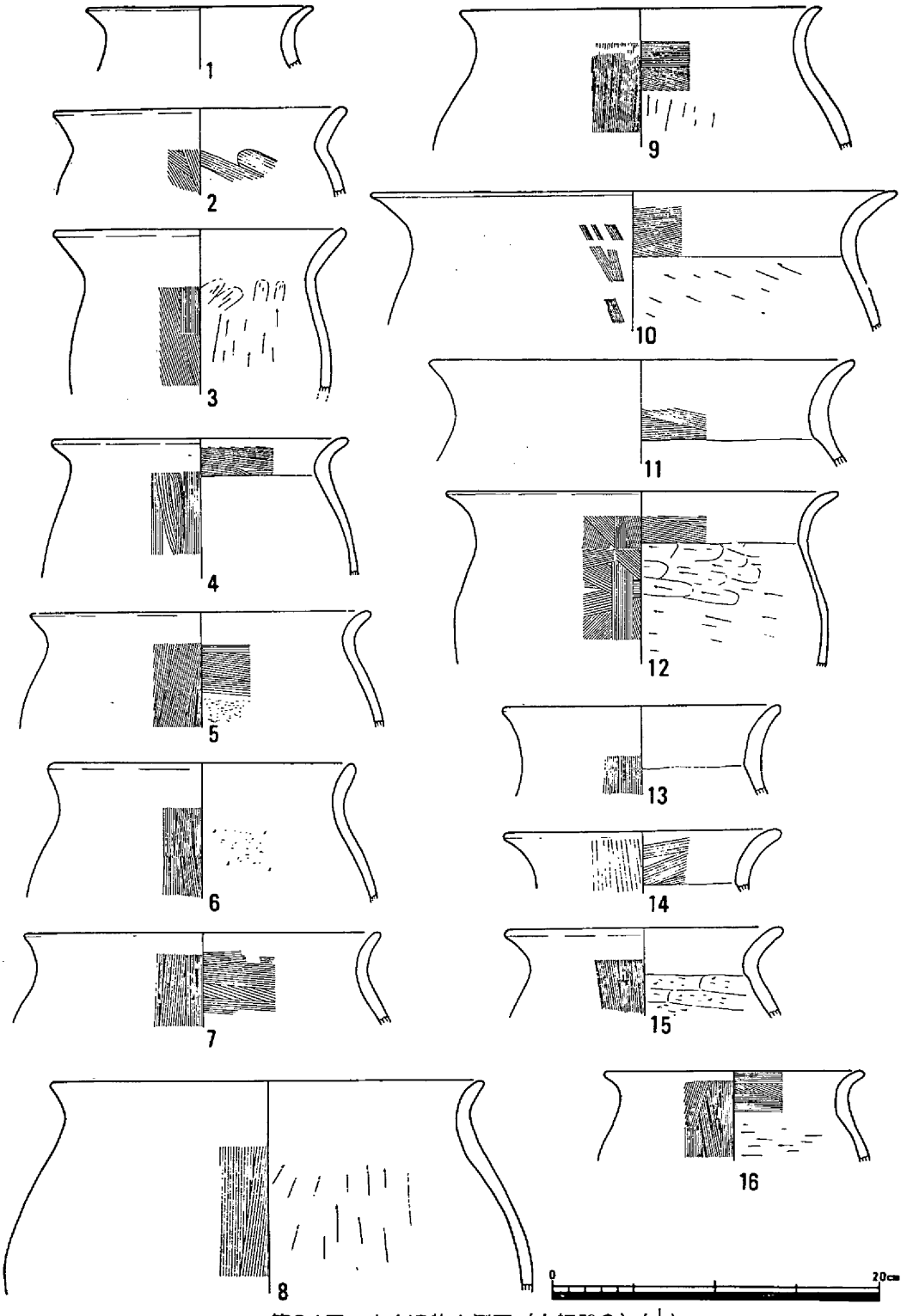
第35，36図は，口縁部と胴部との境に明瞭な稜線の見られるものである。調整を見ると，外面はクシ状工具による上下方向のナデである。内面は，工具による調整のなされていないもの，口縁部のみクシ状工具によるヨコナデが見られるもの，クシ状工具によりナデられたもの，クシ状工具によりナデられた後に，板状工具によりナデているものがある。工具による調整の見られないものは，比較的入念にヘラ削りした後に，その痕跡の見られないようにナデているものである。また，横方向のヘラ削りのされたものもある。さらに，板状工具によりヨコナデされたものもある。

第37図（1～11）は，胴部の直線的なものである。それ等の調整は，外面はクシ状工具による上下方向のナデである。内面は，口縁部はヨコナデにより，胴部は下から上へのヘラ削りによるものがあり，ヘラ削り部分とヨコナデ部分との境は明瞭でない。口縁部はクシ状工具によるヨコナデが見られ，胴部はヘラ削りされるものがある。この場合，ヘラ削りは斜方向である。また，口縁部との胴部との境に明瞭な稜線の見られるものがあり，口縁部がヨコナデされる例と，クシ状工具によりヨコナデされる例とがある。胴部は，ヘラ削りされるものと，工具による調整の見られないものとがある。

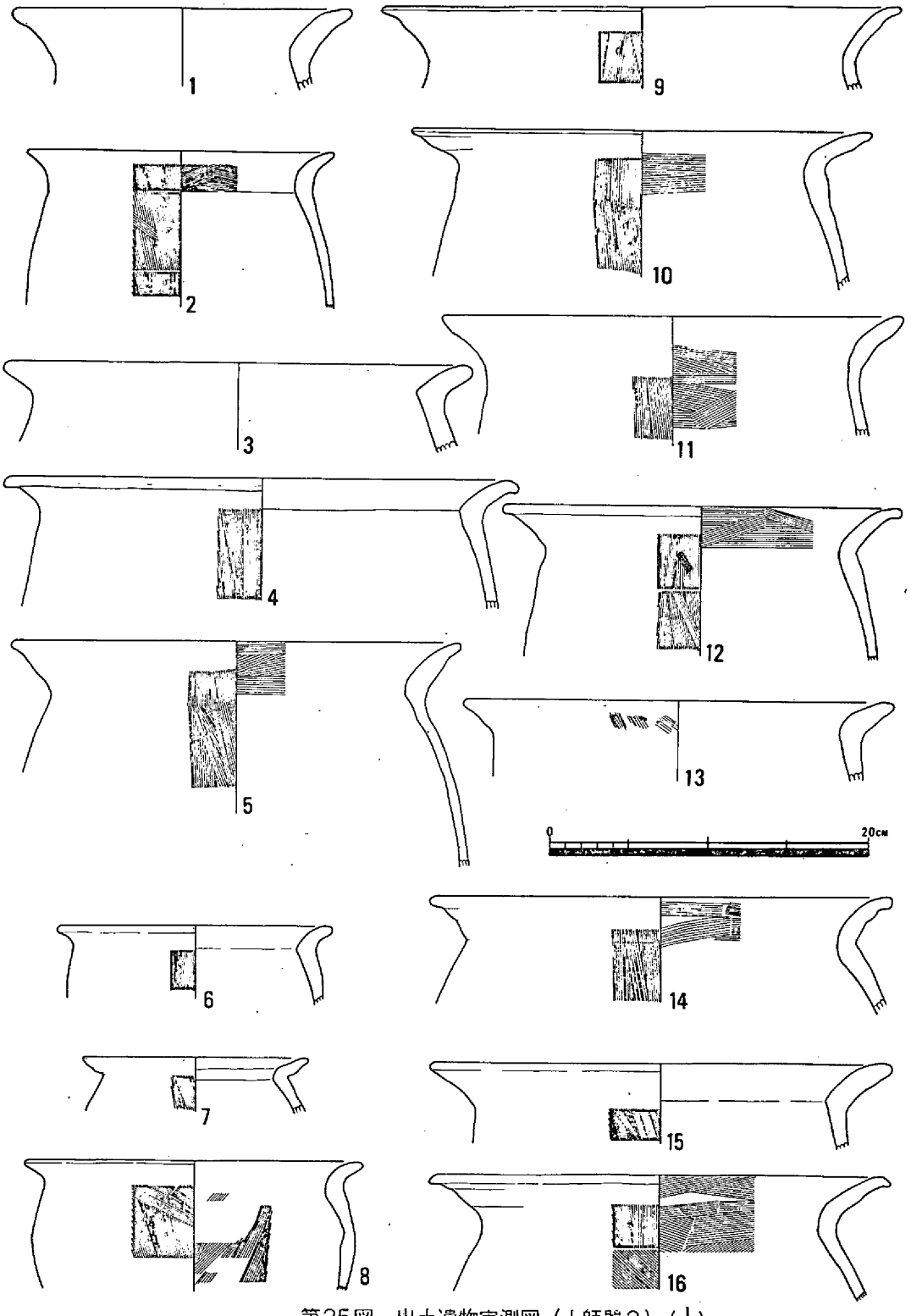
第38図1～5は，丹塗りの土器である。胎土は精良であり微砂を少量含む。8，10，11は，小型の鉢である。8は，外面はクシ状工具により，内面はヘラ削りによるものであり，10は，指頭圧痕の認められるものである。12，13は甑である。いずれも外面はクシ状工具による上下方向のナデ，内面は，下から上へのヘラ削りがなされている。14は大鉢で，外面はクシ状工具によるナデ，内面は，横方向（左回り）のヘラ削りがなされている。15は羽口である。大型のものであり，径は約9㎝を測る。



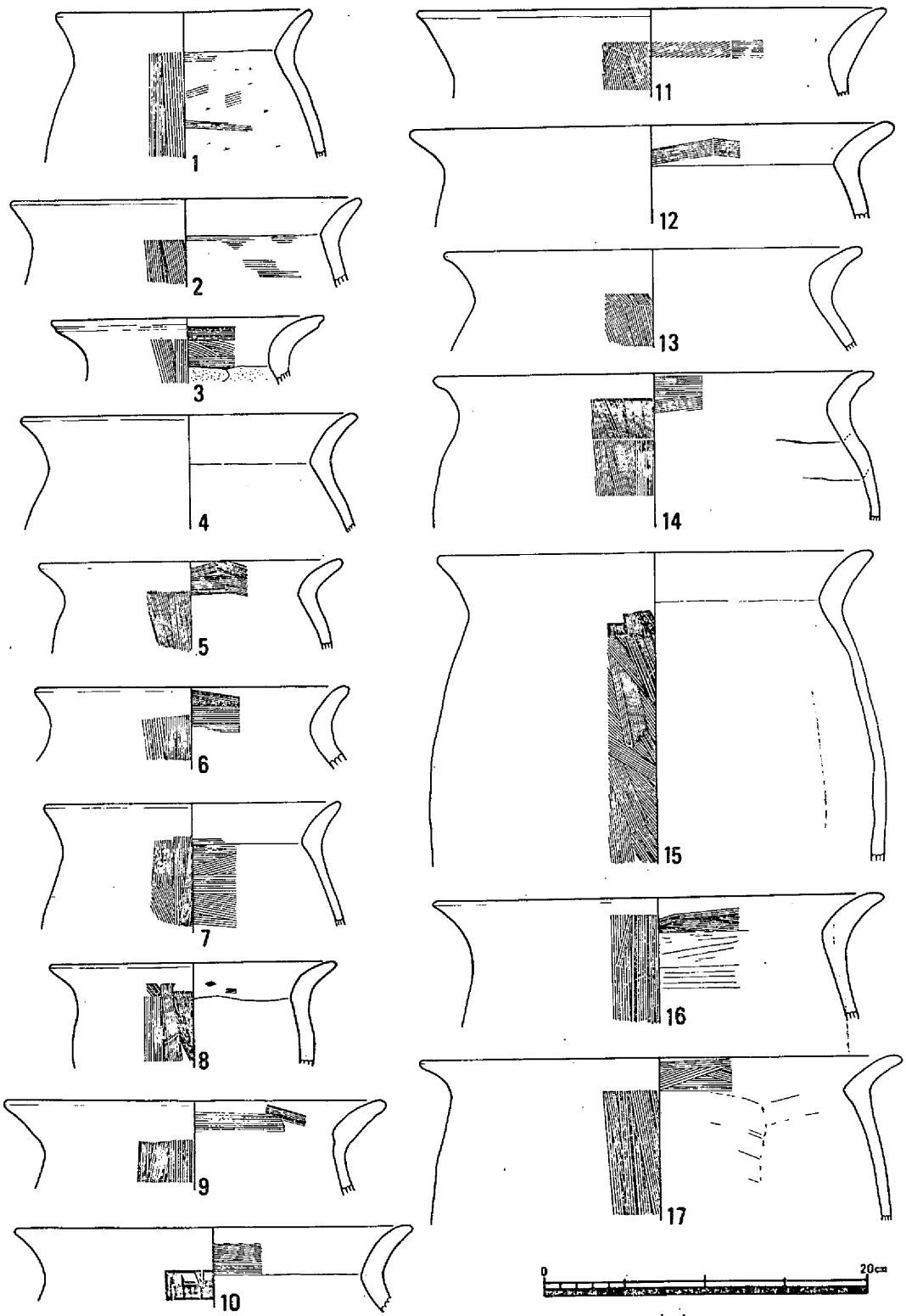
第33図　出土遺物実測図（土師器1）（$\frac{1}{4}$）



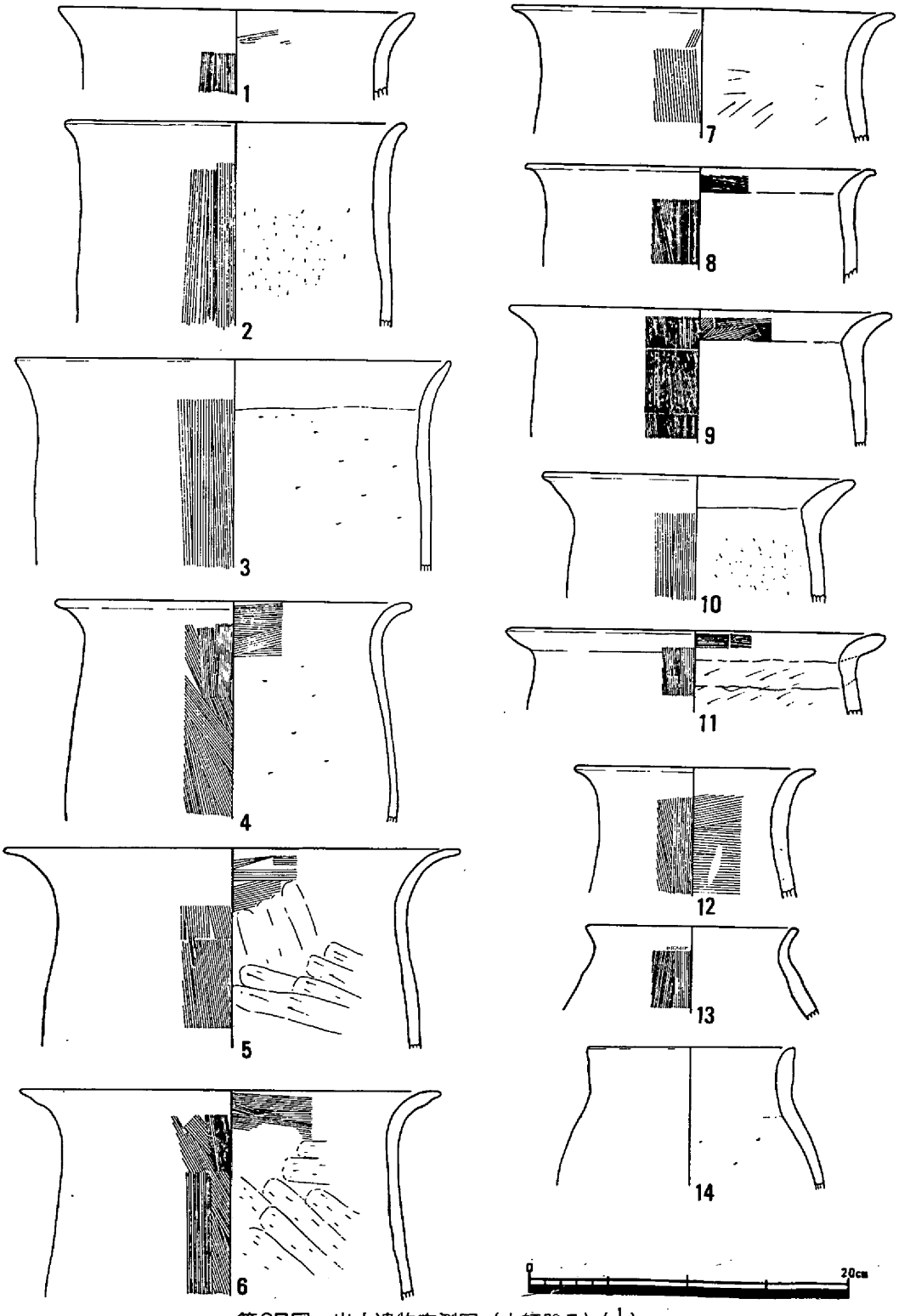
第34図　出土遺物実測図（土師器2）（$\frac{1}{4}$）



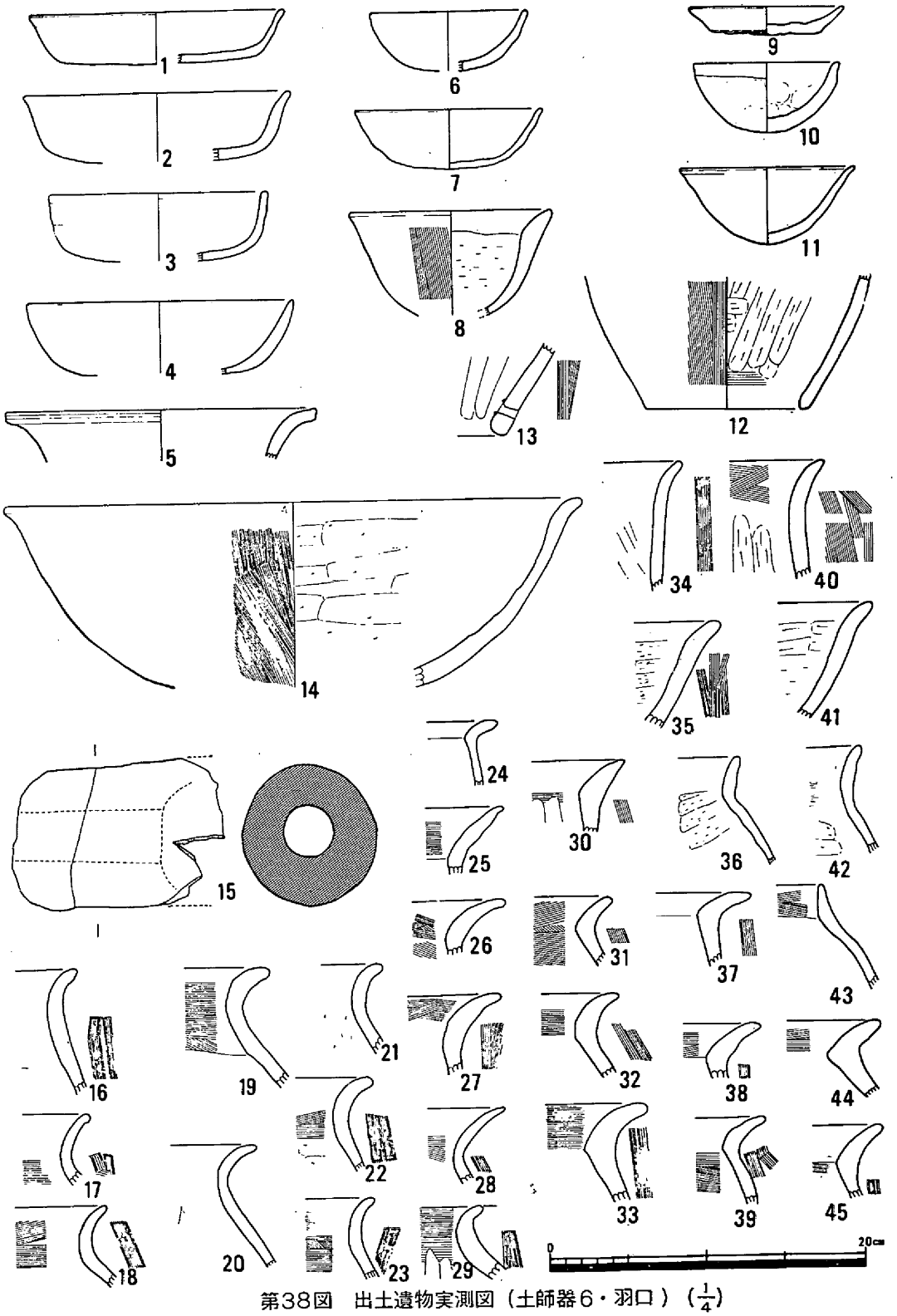
第35図　出土遺物実測図（土師器3）（$\frac{1}{4}$）



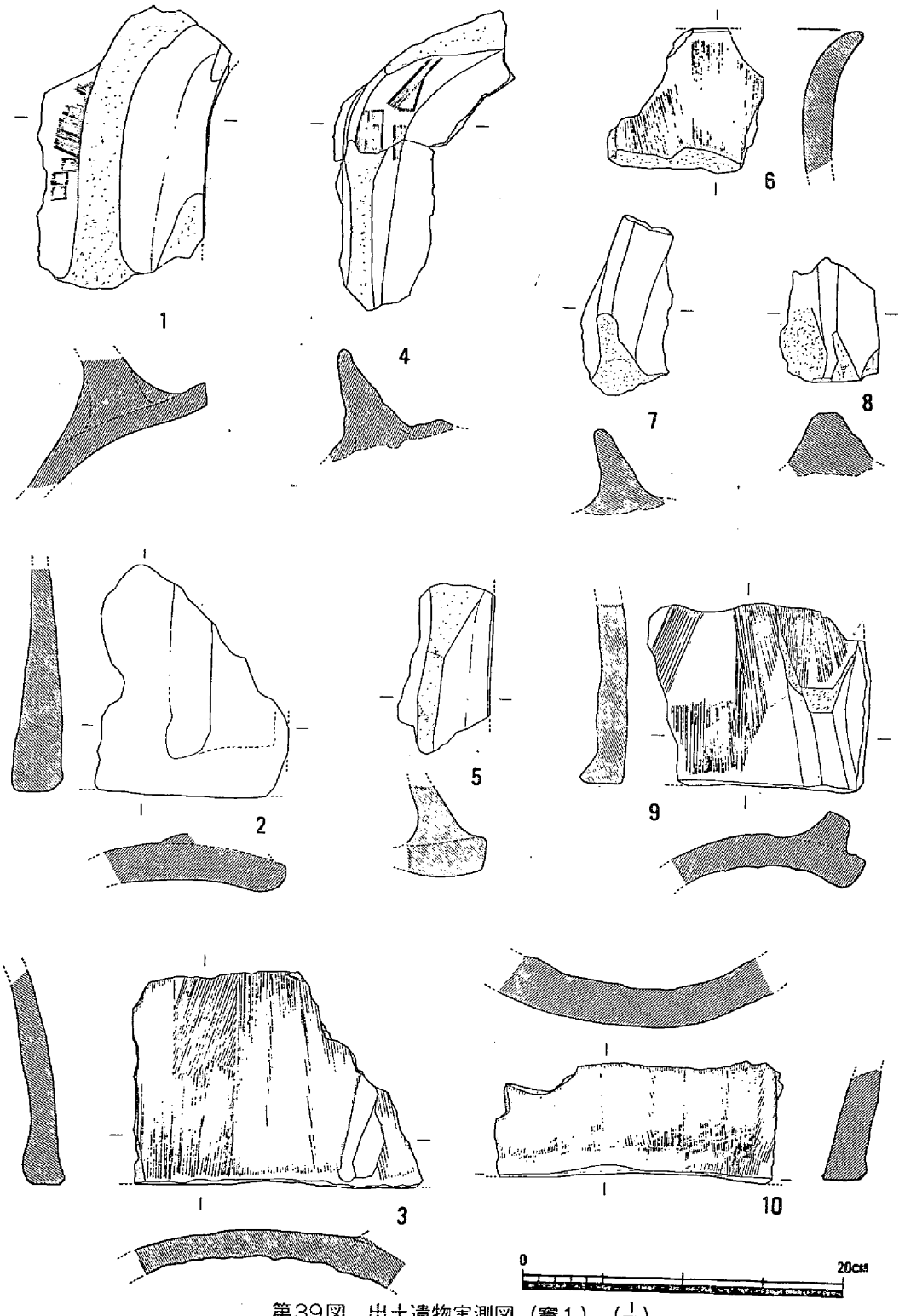
第36図　出土遺物実測図（土師器4）（$\frac{1}{4}$）



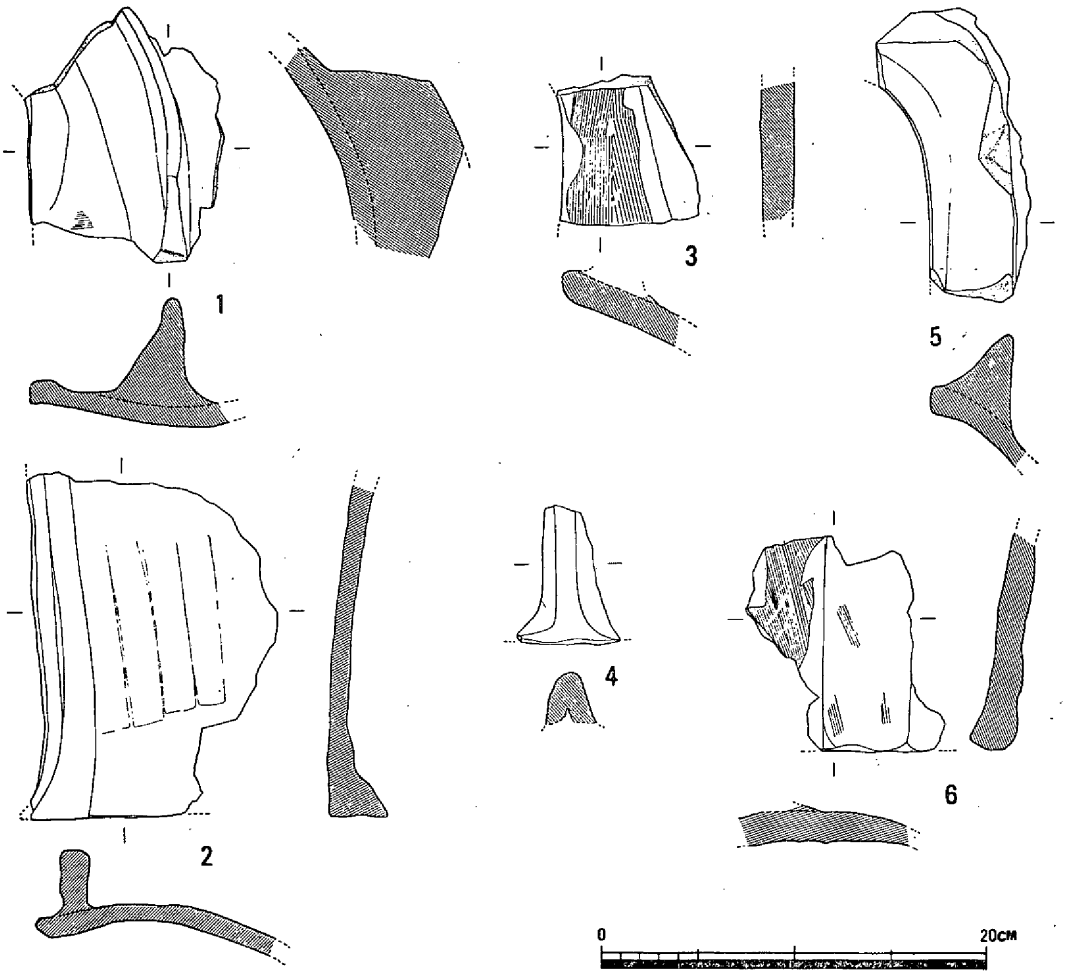
第37図　出土遺物実測図（土師器５）（$\frac{1}{4}$）



第38図　出土遺物実測図（土師器6・羽口）（$\frac{1}{4}$）



第39図　出土遺物実測図（甕1）（$\frac{1}{4}$）

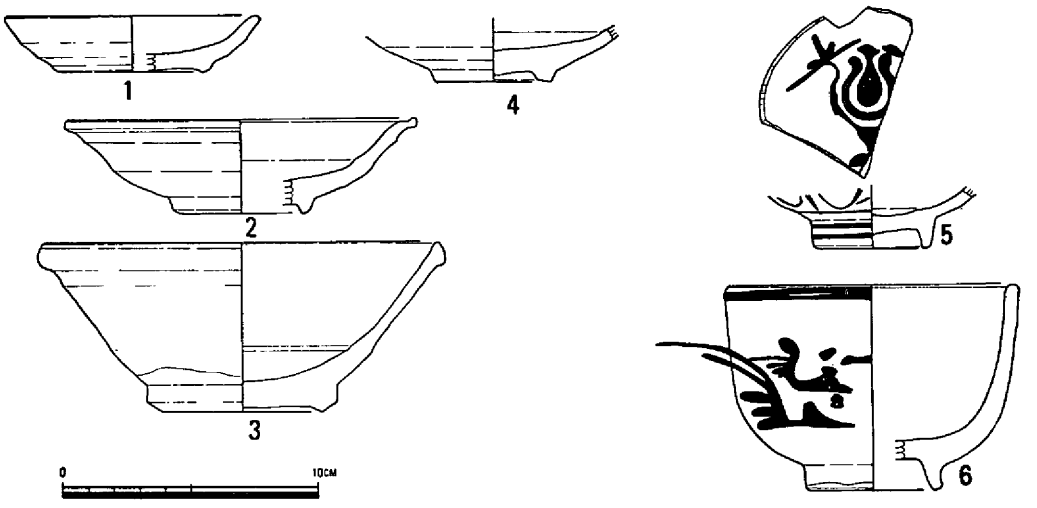


第40図　出土遺物実測図（竈2）（$\frac{1}{4}$）

竈（第39・40図）

宗金遺跡の調査では，比較的多くの竈の破片が出土している。それらの破片をみると，同一個体と思われるものは少なく，全体の形状の解るものは出土していない。第39図は，10以外は竈に向かって左側を形成する破片である。1，4は焚口の廂の曲る部分で，側面から上面に変る部分である。6は口縁部の破片であり，2，3，9，10は底部である。第40図は，竈に向かって右側を成す破片である。1，3，5は焚口の廂が側面から上面に変る部分であり，2，4，6は地面に接する部分である。竈は，輪積により造られており，第39図10は，その接着部分から離れたものである。整形技法を見ると，火を受けて表面が荒れているものが多いが，クシ状工具によるナデの見られるものが多く，第40図2のように，板状工具によりナデられているものもある。廂は，器表面を工具により調整した後に，廂を貼付けたものである。そのため，廂の欠落した部分に下地の調整が見られる。

陶磁器（第41図）



第４１図　出土遺物実測図（陶磁器）（$\frac{1}{3}$）

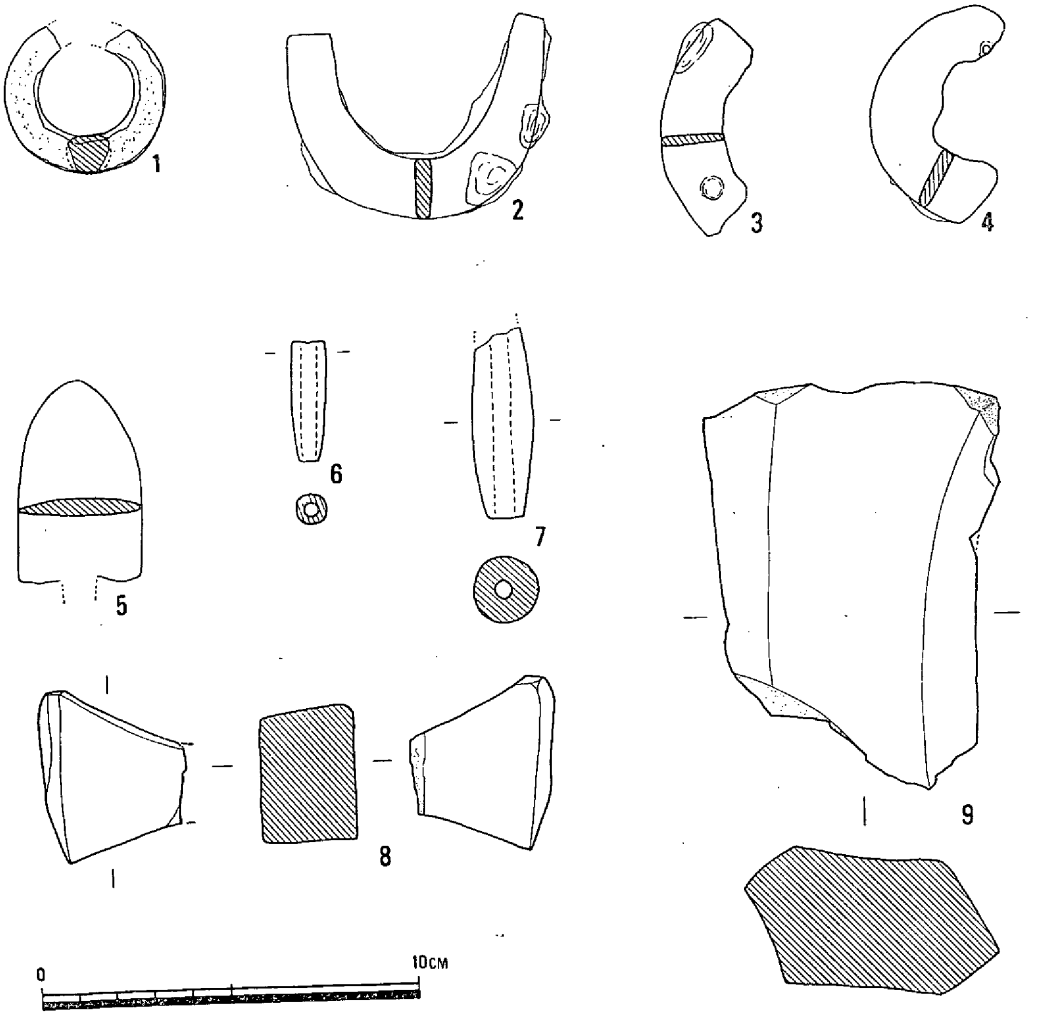
陶磁器の出土は，量的には多くはなく，日本製のものと中国製のものとが出土している。第41図には，出土した陶磁器の中から図化できるものを示した。1は小皿である。淡褐色のきめのこまかな胎土に淡緑色の釉がかけられている。底部には削り出しの小さな高台付いている。窯は，瀬戸系のものと考えられ，室町初期とすることができるであろう。2は，平碗である。胎土は，やや赤色を帯びた砂質の多いもので，釉薬としては，灰釉を薄くかけている。窯は唐津系と考えられ，時期としては，室町末～桃山期とすることができるであろう。3は，口縁部が折口になった青磁碗である。胎土は精良で白色を呈している。高台は削り出しで，高台内面は浅く削るものである。高台を含めた底部の厚さは厚い。窯は，中国福建の民窯と推定され，宋代のものとすることができよう。5は，染付の見られる碗の底部である。胎土は精良で白色を呈しており，釉も無色透明である。窯は伊万里で江戸中期と考えられる。6も染付の見られる碗である。染付は明瞭でない部分もあるが飛龍文とも考えられる。胎土は暗灰色を呈し，やや砂質分を含む。釉薬は淡青色を呈し，こまかな貫入が見られる。窯は木原窯と考えられ，時期は江戸初期と考えることができるであろう。

図示したのは以上であるが，他にも小破片の出土が見られる。それらは，中国製の青磁としては，龍泉窯系のもの，同安窯系のものが見られる。また，影青（青白磁）が4点出土している。他に染付の見られる破片が多数ある。それらはほとんど伊万里の系統と考えられるものである。

陶磁器については以上であるが，日本製のものでは，その大多数が伊万里であり，瀬戸系のものは数点しか出土していない。また，中国製陶磁器も，出土した個体数の中では，数的には大きなものや占めている。

その他の出土遺物　（第42図）

1は，銅地銀張りの耳環である。銅地は錆化が著しく，欠落する部分もある。銀は，内傾，および外側に帯状に残るものである。耳環の最大径は2.2cmを測る。2は，馬蹄形に曲った鉄製品である。



第42図　出土遺物実測図（鉄製品・土錘・砥石）（$\frac{1}{2}$）

鉄地の厚さは，約４㎜を測る。３，４も２に似るものであるが，３には笠鋲が付着しているとも思える状況がある。また，４は鋲が貫通した状況の見られるものがある。２～４は，その使途は不明である。５は，鉄鏃である。茎は欠落している。鉄鏃の残存する最大巾は3.3㎝，長さは5.3㎝を測る。鏃は扁平ではあるが，両丸造りと考えられる。６，７は，土錘である。６の最大径は0.9㎝，７は，1.8㎝を測る。孔は，いずれも0.4～0.5㎝を測る。８，９は，砥石である。８は，四面を使用しており，９は６面を使用している。石材は，いずれも砂岩と考えられる。他に，黒曜石の破片が出土している。分析の結果によれば，産地は，津井の池（隠岐東郷）である旨の報告がなされている。また，水和層の測定により，3100年Ｂ・Ｐとの報告もあり，宗金遺跡より出土している縄文式土器の年代を考えるための資料となるであろう。

包含層からは，多くの鉄滓，炉壁が出土している。それらは，鉄分を多く含むものから，そうでないものまである。また，何らからの形状に沿ったものであろうか，片面に曲線を描くものもある。その中より一部を選んで分析した。その結果は，下表を参照されたい。

表１　鉄滓分析表

単位　％

	Total Fe	TiO_2	V	備　　考
1	40.01	1.50	0.10	新しい断面は，にぶく光る。 一つの面に焼土が付着する。
2	47.04	1.35	0.08	断面が弓状になる。
3	50.38	2.20	0.15	
4	12.44	0.55	0.03	やや大きい気泡状の孔が多く見られる。 大きさに比べて軽い。

第５章　ま　と　め

宗金遺跡は，低丘陵上に立地しており，そのほぼ中心に，自動車道の建設が予定された。今回は，その用地内を全長約250 mにわたって調査した。地形的には，北側に一段高い尾根があり，その南に斜面が広がるものである。それをさらに小さく見ると，尾根の裾に小川が流れており，その川より南に小さな尾根を形成し，ゆるやかに南へ傾斜して，今回の調査区の南端まで伸びる。そして，その南端でやや急な斜面となっている。遺跡は，この尾根と，その斜面に立地している。調査にあたっては，この区間を便宜上４区分した。つまり，南側の小丘陵を１区と２区とし，北側の尾根を４区，その裾の斜面を３区とするものである。

１区は，全体的には緩斜面であるが，地形は，小さな起伏があり，その中間に，浅く谷状にくぼむ場所がある。この谷を境に南は頂部が削平されている。北側は旧地形をよく停めるものと思われたが，瓦製造のために粘土を採取したことにより，撹乱されていた。そのため，谷状部分に弥生式土器等の出土遺物が見られたが，それに伴うと思える遺構は検出されなかった。

２区も元来は，西から南に伸びる小さな尾根状を呈していたものと考えられる。しかし，その尾根の東端付近を除いては畑地として開墾され，旧状はほとんど停めていない。であるから畑として開墾された部分は，遺構の深さが深い場合には残存しているが，そうでなければ削平されたものと考えられる。しかし，東端付近では明瞭な遺構を検出したし，器台も，旧地表に立てられた状態で検出した。この２区からも，弥生式土器が出土しており，また，陶磁器も出土している。

３区は，緩斜面に立地している。そのため，包含層に含まれる土器の量は多かった。出土した土器は，縄文式土器，弥生式土器，土師器，須恵器，製塩土器，陶磁器である。その中で，縄文式土器，弥生式土器，製塩土器は少量であり，土師器，須恵器が最も多かった。また，検出した遺構も，縄文時代，弥生時代とし得るものはなく，検出した遺構は，多量に出土した土師器，須恵器と同時期のものと考えられる。

４区は，尾根上に立地している。この区画からは，２基の古墳と２個の土壙，さらに１個の円形土壙を検出した。出土遺物は，古墳から出土した須恵器蓋，杯である。遺物の分布調査では，縄文式土器を採集したが，それに伴うと考えられる遺構は検出されなかった。

以上のように，宗金遺跡において検出した遺構数は少なかった。それは，一つは開墾等により削平されているのが大きな要因と考えられる。しかし，縄文式土器の出土，弥生時代の生活の足跡等が見られたことは，一つの成果であろう。

出土遺物について見れば，土師器の出土が最も多かった。そして，その器形には大きな変化はみられず，時期的はむしろ巾の狭いものを感じさせる。また，出土した層位もほぼ同一の層位からである。しかし，小さな変化を見れば，３～４に分類できる。土師器に次いで多く出土したのは須恵器である。須恵器の杯の最も古い段階のものは，３区谷部出土の一括遺物である。古墳時代の宗金遺跡は，それらの遺物の時期頃から生活を始め，その後，多量に出土した土師器，須恵器の時期に遺跡は

最も栄えたものであろう。そして，その中心的な時期は，6世紀中頃から7世紀にかけての時期と考えられる。多量に出土した土師器と須恵器の対応を考える良好な資料としては，谷部出土の一括遺物と，2号住居址の床面より出土した一括遺物がある。

出土遺物に混じって鉄滓が多く出土した。鉄滓には，鉄分が多く，破壊面に金属質の光沢の見られるものと，鉄分のほとんど認められないものとがある。また，炉壁と考えられる焼土塊も数点出土している。さらに，一点ではあるが，羽口も出土しており，製鉄に関する遺構のあったことが推測される。しかし，それが溶解炉であるのか，鉄製品を造る鍛冶炉であるかについては，俄には決めがたいが，土師器，須恵器を包含する層から多く出土しており，その時期の遺物とすることができるであろう。また，砥石の出土も，それとの関係において考える必要がある。

出土点数は4点と少量ではあるが，製塩土器（師楽式土器）が出土している。この製塩土器は，中国縦貫自動車道関係の遺跡では，哲西町の西江遺跡から多く出土している。また，他の遺跡からも数点の出土が知られている。これらの製塩土器は，それが出土した山間のこの地点で塩を造るために使用されたとは考え難く，むしろ塩の製産地との交流を考える必要がある。宗金遺跡では，出土した4点の中の1点（第26図14）は，2号住居址の床面より出土した一括遺物の中より出土している。

1号住居址の柱穴には，柱根が遺存していた。それらの樹種は，クリとナラガシワである。いずれの木質にしても，水による腐朽に対しては非常に強い性質をもつものであり，木質の強度も強いものであり，耐久力の強い材質が選ばれている。また，谷部の粘質土中から加工痕の見られる木材が数点出土しているが，その中の1点は，コウヤマキである。現在岡山県下にはコウヤマキは自生していない。そのことをもって，過去もそうであったとする証拠にはならない。しかし，その木質が出土した層位は，古墳時代の遺物を包含するものであることを考えれば，古墳時代の中国山地にコウヤマキが自生していたか否かが問題となる。いずれにしても，宗金遺跡からコウヤマキが出土したことは事実であるので，その流入経路が問題として残る。

中・近世の遺物として，陶磁器の出土がある。出土点数は，大小合せて約50点である。そのうちで約半数が中国製であり，残りが日本製である。中国製の陶磁器では，上手のものは1～2点で，他のほとんどは下手である。その点は，中国との交易の一端を窺わせるものがあり，また，日本における購買層の一端をも窺わせるものがある。日本製の陶磁器では，その大部分が唐津，伊万里系統の製品である。瀬戸系の製品と考えられるものは，数点しか出土していない。地理的に，北九州に近いことを考えると当然であるかも知れないが，この地方における窯産地からの製品の占める比率を提示するかのごとくである。

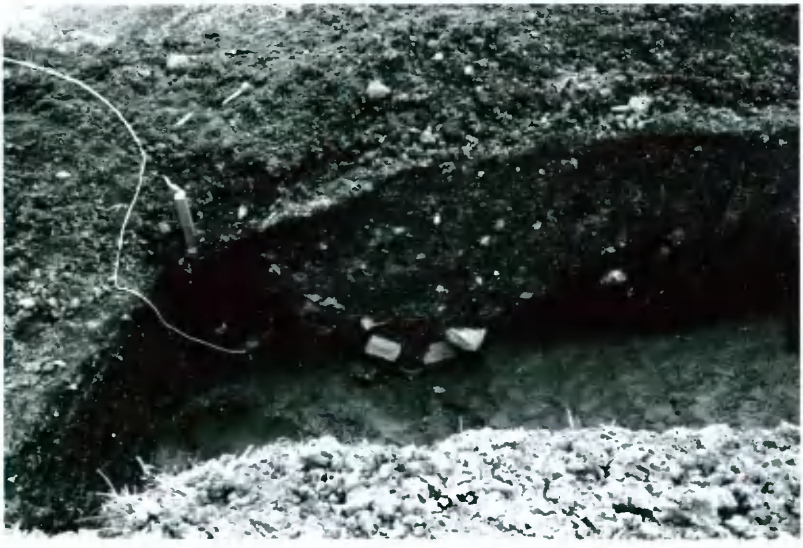
簡略ではあるが，上記のように充分なまとまりもなく問題点，疑問点を列記してみた。これにて全ての責を果すつもりはなく，むしろ，関係者の今後の課題とすることでまとめに代えたい。

1．遺跡の俯瞰（南東上空から）

2．遺跡の俯瞰（東上空から）

図版2

1. T－6



2. T－3

1．T－8

2．T－9

図版４

１．２区調査状況

２．２区円形土壙

1．2区土壙内土器出土状況

2．4区円形土壙

図版６

１．１号土壙墓（西から）

２．４区の全景

１．３区の全景

２．３区谷部

図版８

１．１号住居址（東から）

２．２号住居址（南から）

１．３号住居址（南から）

２．４号住居址（南から）

図版10

出土遺物（須恵器）

出土遺物（土師器）

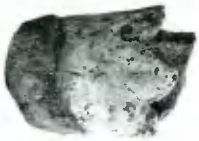
図版12

出土遺物（竈）

出土遺物（縄文式土器・弥生式土器・製塩土器）

図版 14

2号住居址・谷部出土遺物



出土遺物（土師器・須恵器・弥生式土器）

図版16

出土遺物（陶磁器・耳環・石鏃・鉄製品）

佐藤遺跡 (53)

例　　言

1. 本報告書は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した，中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。
2. 佐藤遺跡は阿哲郡哲西町上神代字佐藤（215，216番地）に所在する。
3. 発掘調査は工事工程の都合によって1976年４月４日から６月10日，７月３日から７月９日，８月11日から９月27日の３回にわたり，延べ81日間実施した。調査担当者は原則的には竹田勝と岡本寛久であったが，岡本は道上遺跡の調査に専従しており，専ら竹田が担当することとなった。
4. 発掘調査にあたっては哲西町教育委員会をはじめ，地域住民の方々にお世話になり，また発掘作業は下記の方々の御協力によって行なわれた。記して感謝の意を表したい。

   男知合音一　福田宮二　福原章　奈須岩根　塚本武志　田辺光男　入江繁一郎　難波石男　奈須真吾　野田常吉　武坂繁男　畑勇　谷本繁　小林栄　内田信恵　土屋光子　千原美屋野　吉岡ふみ子　田原毎世　木下絹子　千原康代　西川マスヨ　忠田小夜子（事務担当）
5. 出土遺物の整理については，現地の遺跡調査事務所（神郷町下神代）において，竹田が忠田小夜子の援助をうけて一部を行ったが，大半は1978年１月から３月にかけて文化課分室（岡山市西古松）にて，竹田が坪井和江と細田美代子の援助をうけて行った。なお出土遺物は岡山市西古松 265，岡山県教育庁文化課分室において保管している。
6. 報告書の編集・執筆は竹田が行った。また報告書の作成にあたっては近藤友子，塩見康代，大沢さつき，難波和児の援助をうけた。記して感謝の意を表します。
7. 本書に掲載した遺跡分布図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の50000分の１地形図を用いて作成した。（承認番号昭53中複，第29号）また遺跡の地形図に用いた図面は，日本道路公団が作成した1000分の１路線設計図に手を加えトレースしたものである。
8. 本書掲載の図は，特に断らないかぎり住居址は60分の１，土壙は30分の１，遺物は３分の１の縮尺になっている。
9. 本遺跡出土の黒曜石については，立教大学助教授鈴木正男氏に原産地の同定を依頼した。

目　　次

例　　言
目　　次
第１章　調査の経緯…… 137
第２章　遺跡の位置と環境…… 139
第３章　調査の概要…… 143
　第１節　住居址と出土遺物…… 144
　第２節　土壙・その他の遺構と出土遺物…… 155
　第３節　遺構に伴わない遺物…… 159
　　Ⅰ　縄文式土器…… 159
　　Ⅱ　弥生式土器…… 162
　　Ⅲ　土師器…… 164
　　Ⅳ　須恵器…… 164
　　Ⅴ　陶磁器…… 164
第４章　まとめ…… 165

図　目　次

第１図　調査の範囲 $\left(\frac{1}{1500}\right)$ …… 138
第２図　佐藤遺跡の位置と過辺の遺跡 $\left(\frac{1}{50000}\right)$ …… 140
第３図　佐藤遺跡地形図 $\left(\frac{1}{1500}\right)$ …… 141
第４図　遺構全体図 $\left(\frac{1}{500}\right)$ …… 143
第５図　１号住居址平面図・断面図…… 144
第６図　１号住居址出土遺物…… 144
第７図　２号～５号住居址平面図…… 146
第８図　２号～５号住居址断面図…… 147
第９図　２号，３号，５号，７号，８号住居址出土遺物…… 148
第10図　６号住居址平面図・断面図…… 149
第11図　６号住居址出土遺物（１）…… 150
第12図　６号住居址出土遺物（２）…… 151
第13図　７号，８号住居址平面図…… 152
第14図　７号，８号住居址断面図…… 153
第15図　１号土壙平面図・断面図…… 154
第16図　２号土壙平面図・断面図…… 154

第17図　3号土壙平面図・断面図…… 155
第18図　3号土壙出土遺物…… 155
第19図　4号土壙平面図・断面図…… 156
第20図　4号土壙出土遺物…… 156
第21図　5号土壙平面図・断面図…… 157
第22図　円形柱穴列平面図・断面図…… 157
第23図　ピット出土遺物…… 158
第24図　遺構に伴わない遺物（縄文式土器）…… 160
第25図　遺構に伴わない遺物（縄文式土器）…… 161
第26図　遺構に伴わない遺物（弥生式土器，土師器，須恵器，陶磁器）…… 163

図　版　目　次

図版1－1　佐藤遺跡遠景（南より）
2　佐藤遺跡遠景（山根屋遺跡より）
図版2－1　1号住居址検出状態（南より）
2　1号住居址（南より）
図版3－1　2号～5号住居址（南より）
2　3号，4号住居址（南より）
図版4－1　2号，5号住居址（南より）
2　6号住居址（南より）
図版5－1　7号，8号住居址検出状態（南より）
2　7号，8号住居址（東より）
図版6－1　7号，8号住居址（南より）
2　1号土壙（南より）
図版7－1　2号土壙（南より）
2　3号土壙（南より）
図版8－1　4号土壙（南より）
2　5号土壙（南より）
図版9－1　円形柱穴列（南より）
2　A－1グリッド調査状況（南より）
図版10－1　B－2グリット全景（西より）
2　1号住居址出土遺物
図版11　6号住居出土遺物（1）
図版12－1　6号住居址出土遺物（2）
2　8号住居址出土遺物

図版13　　ピット出土遺物
図版14　　遺構に伴わない遺物（縄文式土器）
図版15　　遺構に伴わない遺物（縄文式土器）
図版16　　遺構に伴わない遺物（弥生式土器，土師器，須恵器，陶磁器）

第１章　調査の経緯

Ⅰ　調査に至る経過

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の調査は，文化庁と日本道路公団の「覚書」に従い岡山県教育委員会が実施することになった。

まず分布調査が実施され，第一次整備区間を1967年度に，第二次整備区間を1969年度におこなった。落合インターチェンジ以西の第二次整備区間の分布調査は，1968年に路線が内定した後に，高梁教育事務所を中心に関係市町村による分布調査委員会を設置して行った。この結果に基き新見市以西のルートが決定され，道路建設用地内において８遺跡が確認されていた。しかしこの段階においては佐藤遺跡をはじめとして，多くの遺跡は未発見の状態であった。ところが，1974年になって新見市以西の発掘調査実施計画策定のため，細部にわたって検討した結果未発見遺跡の存在が考えられ，なおかつ工事中発見の防止と調査期間・調査体制の整備などに万全を期すため，再度分布調査を実施することにした。

分布調査は1974年８月27・28日に文化課と津山教育事務所とで実施した。その結果，これまで確認されていた８遺跡の３倍以上もの遺跡が新たに発見され，総計32遺跡となった。佐藤遺跡もこの時点で発見されたもので，畑の中に縄文式土器，土師器などが若干散布していた。

このような多くの遺跡が新たに発見されたことから，新見以西の調査工程は非常に厳しい状況になり，分布調査の重要性と方法について改めて考えさせられた。

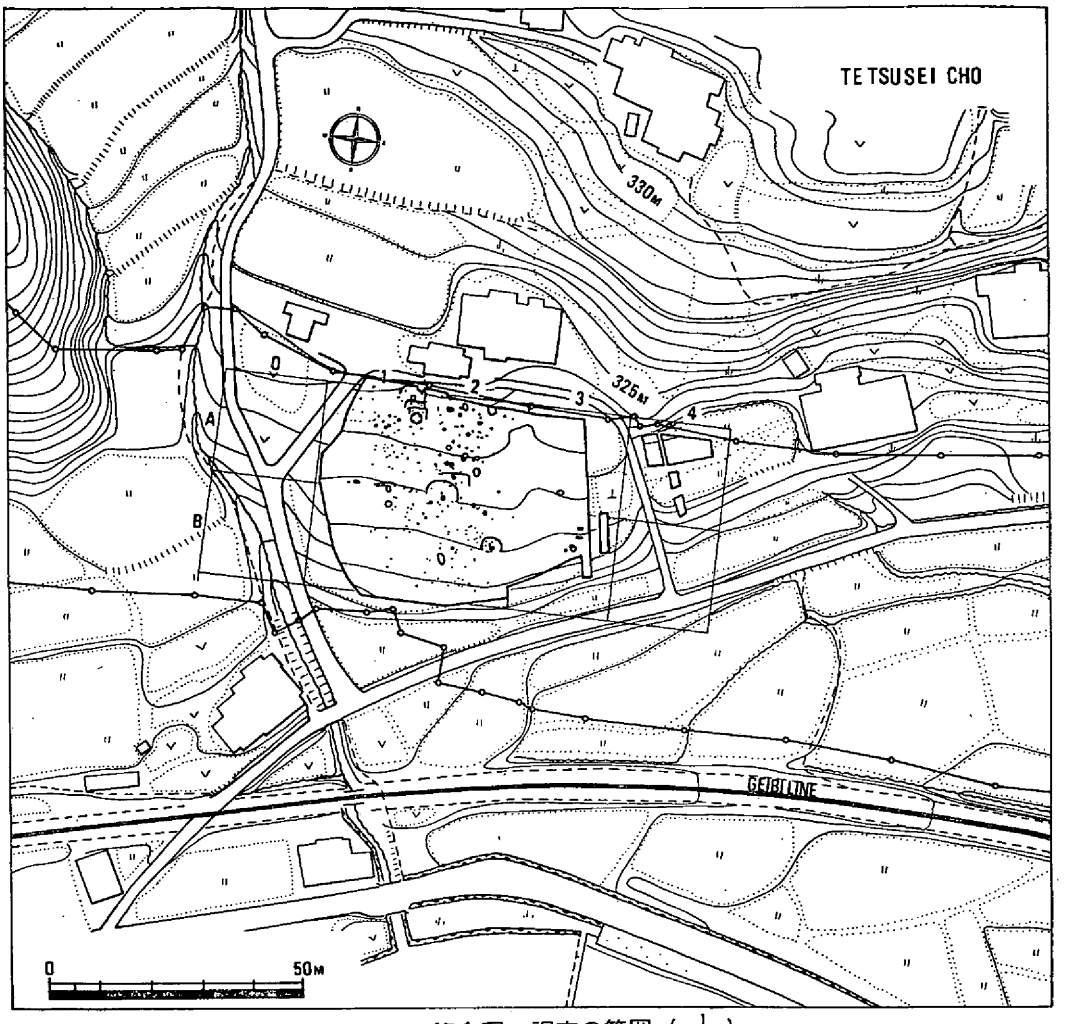
Ⅱ　調査の経過

新見以西の発掘調査は1975年４月より本格的に開始され，調査体制も津山教育事務所から文化課と高梁教育事務所に移った。佐藤遺跡の調査は1976年４月４日から開始され，９月27日に完了したが，この間工事工程などの都合によって断続的に調査を行ったため，実質的な調査日数は81日である。また調査員は原則的には二人であるが，隣接する山根屋遺跡，道上遺跡と併行して調査を行っていたため，ほとんど一人で担当した。

調査は20ｍのグリッドを設定し，全面発掘を行った。しかしＡ－４グリッドの水田部分はトレンチ調査を行い，遺構の存在が認められないことから，平面的な調査は行わなかった。遺跡の中心は畑地であり，黒褐色を呈する耕作土の下は礫を多く含む黄褐色土の基盤層になるが，場所によってはその間に黒色土（黒ボコ）が存在する。

日誌抄

1976年４月４日～５月５日　工事工程の都合で，Ａ－１，Ｂ－１，Ｂ－２グリッドから発掘調査を開始した。まず表土剝ぎを行い，排土場はＡ－２，Ａ－３，Ｂ－３グリッドをあてた。



第1図　調査の範囲（$\frac{1}{1500}$）

5月6日～25日　B－2グリッドの遺構検出，写真，実測などを行う。

5月26～6月3日　A－1，B－1グリッドの遺構検出，写真，実測を行う。

6月4日～10日　全景写真，発掘後の地形測量などを行い，工事用道路部分の調査を完了した。

7月3日～9日　A－4グリッドの水田にトレンチを設定した。中世，近世の遺物が若干出土した。

8月11日～9月3日　A－2，A－3，B－3グリッドの発掘を開始する。表土剝ぎを中心に，1号住居址の保存処置などを行った。

9月4日～23日　遺構検出と写真，実測などを行った。A－3，B－3グリッドでは遺構が少ない。

9月24日～27日　全景写真，発掘後の地形測量などを行い，27日に完了した。山間部はもう秋，朝夕は肌寒くなっていた。

第２章　遺跡の位置と環境

佐藤遺跡は神代川に面した扇状地に位置する。神代川は哲西町を二分するように北流し，その両岸には狭い沖積地が形成されている。この沖積地に向って両側から丘陵が樹枝状に発達しているが，神代川の東側の山々は吉備高原の北端をなし，西側の山々は中国山地へ連なるものである。両岸とも比較的急峻な山に囲まれている神代川は，古代においては両岸の山際まで氾濫原であったと考えられる。したがって，両岸の丘陵上に位置する弥生時代以後の集団は，水稲農耕の適地をこの神代川の沖積地に見いだすことはできなかったと思われる。そこで発達している開析谷を利用した谷水田などが考えられ，また緩斜面，あるいは丘陵平坦部での畑作などを考えなければならないだろう。

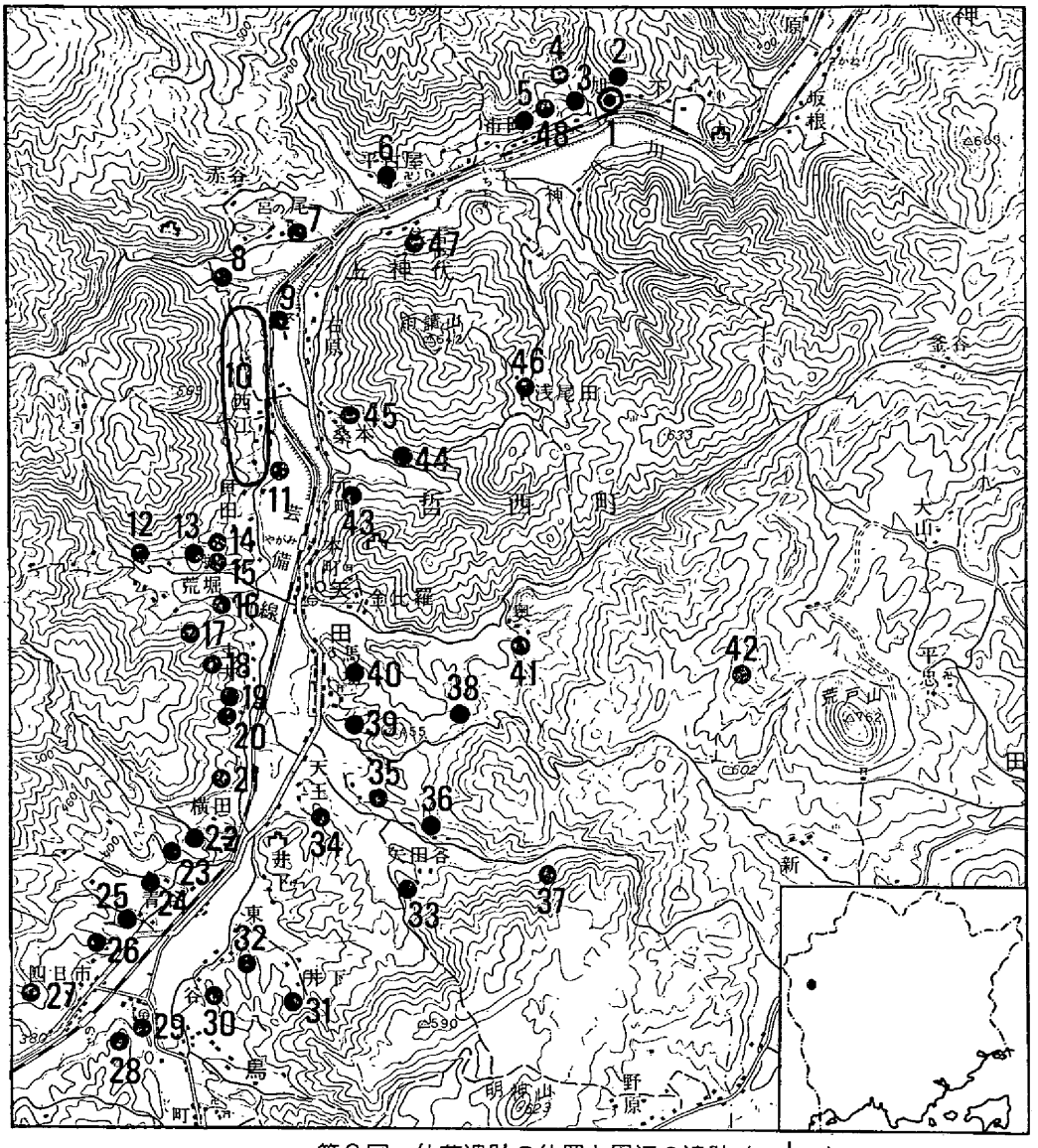
哲西地域の遺跡は，その多くが神代川両岸の丘陵上，あるいは扇状地の上に認められるが，開析谷の奥部や，吉備高原上にも発見されている。これらの遺跡の多くは弥生時代以後のものであるが，それ以前の遺跡も中国縦貫道建設に伴う発掘調査で明らかになりつつある。

哲西地域における最古の遺物は二野遺跡出土のナイフ型石器と尖頭器であろう（註１）。いずれも先土器時代に使用されていたもので，山間部での発見は注目されるものである。

縄文時代になるとかなりの遺跡が認められ，早期の押型文土器が土井上遺跡，馬場遺跡で出土している（註２）。一般的にいって早期は小集団と考えられており，移動の頻繁なことが知られている。これらの遺跡もそうしたもののひとつで，短期間の住居を示すものと考えられる。前期は塚の峯遺跡（註３）で土器が出土している。この土器はこれまで知られている土器とは異なっており，類例は少ない。おそらく山間部に分布するものと考えられるが，今後の課題であろう。後期では佐藤遺跡や二野遺跡で土器が出土している。晩期になると少量ではあるが多くの遺跡から土器片が出土しており，二野遺跡，清水谷遺跡（註４），西江遺跡（註５），佐藤遺跡などがある。これらの遺跡から出土する土器は，山陽地方で黒土ＢⅡ式といわれる口縁部外面に刻目凸帯を有するものである。晩期の遺物を出土する遺跡は中国縦貫道の調査によってかなり多く知られるようになり，またこれらの遺物が出土すると，しばしば弥生前期も出土している。

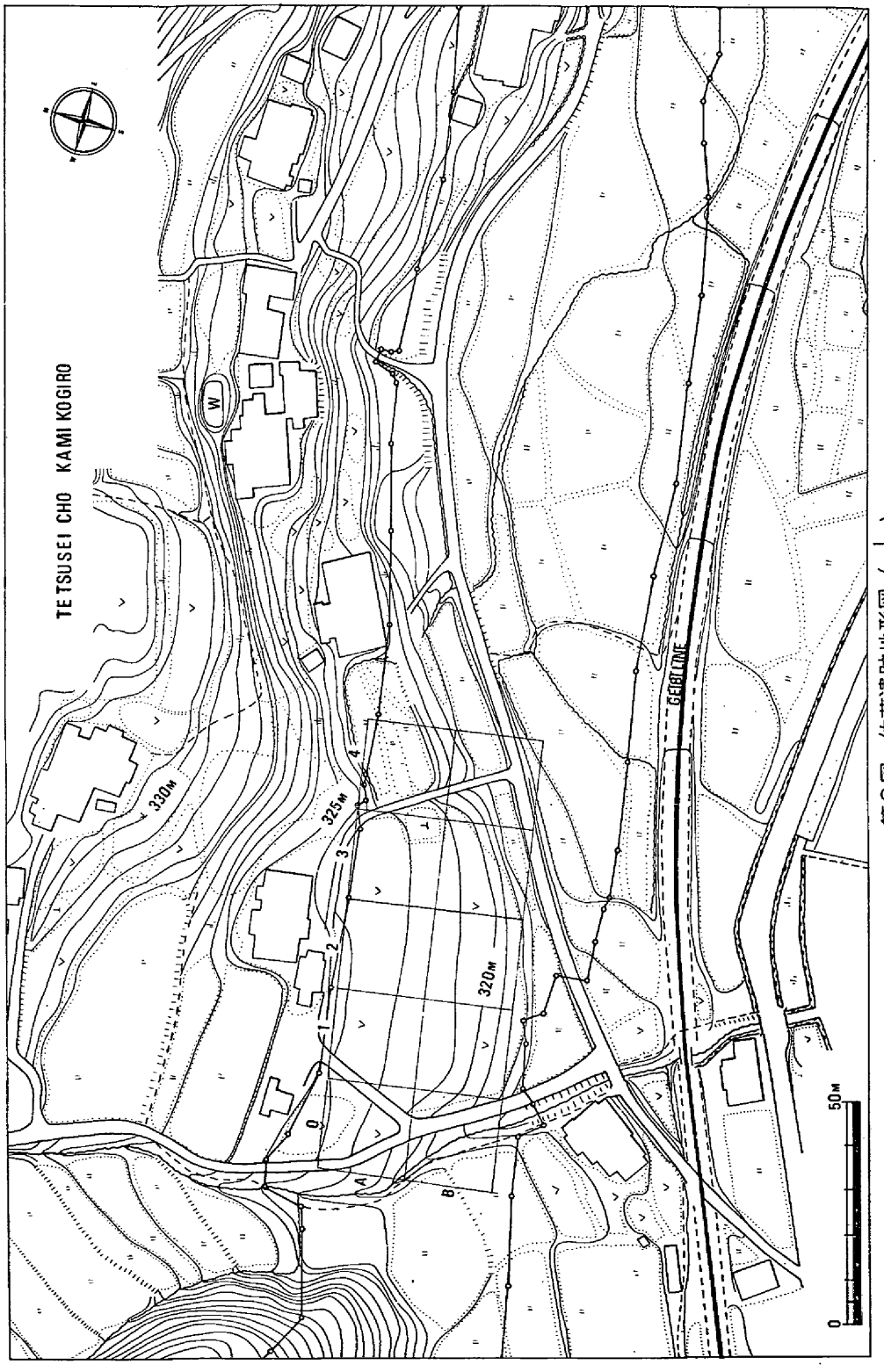
弥生時代では西江遺跡，大倉遺跡（註６），清水谷遺跡において前期の土器が出土しているが，遺跡数や規模が拡大するのは中期の後半からである。隣接する山根屋遺跡（註７）をはじめとして，１㎞上流の野田畝遺跡（註８），さらに上流の西江遺跡，二野遺跡，横田遺跡，大倉遺跡，清水谷遺跡家坂遺跡（註９），善光院裏山遺跡（註10），三角高下遺跡（註11）などで住居址や遺物が出土している。これらの遺跡はすべて丘陵上に位置しており，周辺に良好な水田適地は認められない。後期ではこれらの遺跡に加えて土井遺跡（註12），土井城址（註13），横田遺跡（註14），藤木城址（註15），御供川遺跡（註16），宮の尾遺跡（註17）などがある。これらは集落址あるいは遺物散布地であるが，西江遺跡では墳墓群が検出されている。

古墳時代の住居址は佐藤遺跡をはじめ，野田畝遺跡，西江遺跡，土井城址，横田遺跡，大倉遺跡，忠田山遺跡（註18），清水谷遺跡，塚の峯遺跡，岸本下遺跡などで確認されている。



第２図　佐藤遺跡の位置と周辺の遺跡（$\frac{1}{50000}$）

1. 佐藤遺跡　2. 温光庵古墳群　3. 山根屋遺跡　4. 京の段古墳群　5. 中林遺跡　6. 野田畝遺跡　7. 宮の尾遺跡　8. 宝堂古墳群　9. ひさご塚古墳　10. 西江遺跡　11. 山王小丸古墳群　12. 塚原古墳群　13. 善光院裏山遺跡　14. 二野遺跡　15. 光坊寺古墳群　16. 土井遺跡　17. 竹川内横穴群　18. 愛宕山横穴群　19. 土井城址　20. 鳴山古墳群　21. 横田東古墳群　22. 横田遺跡　23. 藤木城址　24. 大倉遺跡　25. 忠田山遺跡　26. 御供川遺跡　27. 四日市古墳　28. 鳴木山古墳群　29. 鳴木山東古墳群　30. 茶筌山古墳群　31. 井下谷遺跡　32. 塚の段古墳群　33. 叶谷古墳群　34. 天王奥古墳群　35. 室ケ畝古墳群　36. 上川内古墳群　37. 腰刈古墳群　38. 郷ケ鳴古墳群　39. 武内古墳群　40. 登宇の畝古墳群　41. 奥古墳群　42. 横路古墳　43. 浪方古墳群　44. 水江古墳群　45. 桑本古墳群　46. 浅尾田古墳群　47. 実本古墳群　48. 道上遺跡



第３図　佐藤遺跡地形図（$\frac{1}{1500}$）

古墳時代の墳墓は後期の横穴式石室が多く，６世紀の後半にはこの地域にも多く築かれている。前半期のものは西江遺跡の弥生時代以来の墳墓群の中にも認められ，山根屋遺跡，あるいは小形の珠文鏡などが出土した横田遺跡の墳墓群がある。光坊寺古墳群（註19）では円墳の主体部から古式土師器や珠文鏡などが出土し，この地域では最も古い古墳のグループであろう。

後期の横穴式石室はすぐ北側の丘陵上（温光庵古墳群），あるいは西側の道上古墳，そして国鉄市岡駅の裏山にも数基認められる。また西隣りには山根屋古墳群や京の段古墳（註20）と呼ばれている横穴式石室がある。

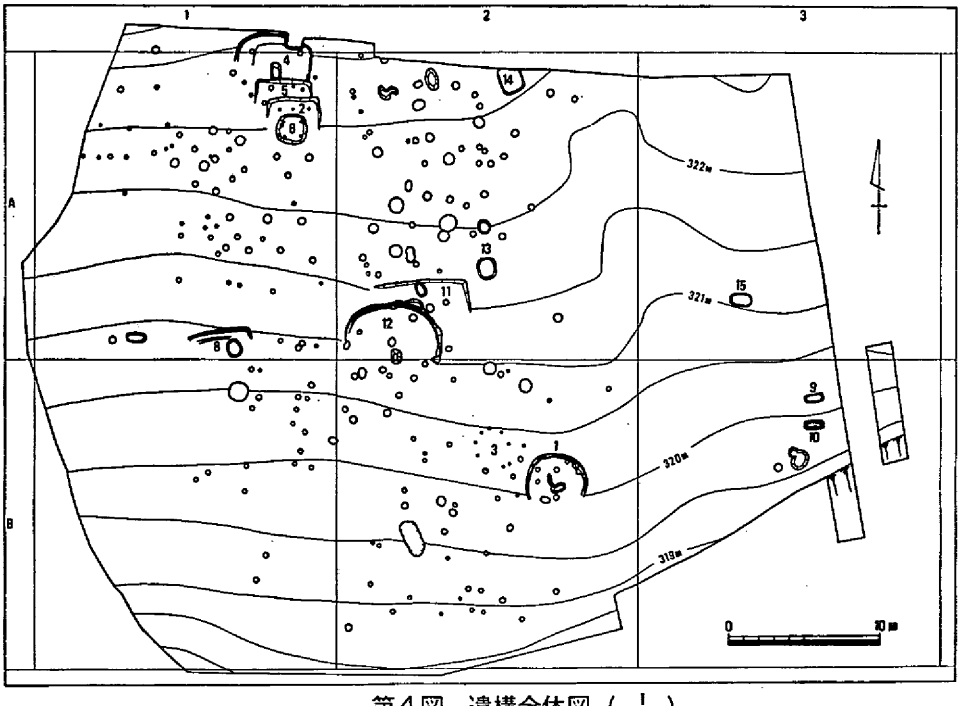
以上見てきたように，佐藤遺跡の所在する上神代地域には多くの遺跡が認められる。この地域は国鉄芸備線坂根駅の少し上流で，北側よりせり出した丘陵によって下神代地域と区分され，上流は神代川が南に向けて大きく屈曲する宮の尾で，上流の矢田地域と区分されている。上流の矢田地域は神代川流域の中心的地域と考えられるが，上神代地域は矢田地域と関係をもちつつも，ある程度完結した単位地域と考えられるのではなかろうか。

註

註１　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15』岡山県教育委員会　1977年
註２　『岡山県埋蔵文化財報告７』岡山県教育委員会　1977年
註３　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告22』岡山県教育委員会　1977年
註４　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告22』岡山県教育委員会　1977年
註５　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会　1977年
註６　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会　1977年
註７　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告22』岡山県教育委員会　1977年
註８　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』岡山県教育委員会　1977年
註９　藤田等「備中哲西町弥生式遺跡」『古代吉備』第４集　1961年
註10　『哲西史』哲西町　1963年
註11　註10に同じ
註12　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』岡山県教育委員会　1977年
註13　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』岡山県教育委員会　1977年
註14　本書掲載
註15　本書掲載
註16　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』岡山県教育委員会　1977年
註17　哲西町遺跡台帳
註18　本書掲載
註19　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15』岡山県教育委員会　1977年
註20　『哲西史』哲西町　1963年

第３章　調査の概要

発掘調査は畑地を中心に行なわれ，住居址８軒，土壙５基，ピット多数を検出した。遺構はＡ－１Ａ－２，Ｂ－１，Ｂ－２グリッドに集中して認められ，Ａ－２とＡ－３グリッド間の浅い谷の東側では少なくなる。縄文時代の遺構については断定することはできないが，１号住居址はその可能性が強い。古墳時代前期の住居址は３号住居址，６号住居址，８号住居址がある。６号住居址は方形を呈し，やや時期が新しくなるが，３号住居址と８号住居址は隅丸方形を呈し，６号住居址より古いものと考えられる。古墳時代後期では２号住居址，４号住居址，５号住居址，７号住居址がある。いずれも方形を呈するものであるが，５号住居址は小形であり，住居址かどうか決めかねるものであるが，細い柱穴が４本認められ，一応住居址とした。その他柱穴状のピットが多く検出されているが，建物と考えられるものはなかった。これらのピットの中には中世の土器や炭を含むものが多かった。なお遺構の検出はすべて基盤層の上面で行なった。発掘面積は約2000㎡である。



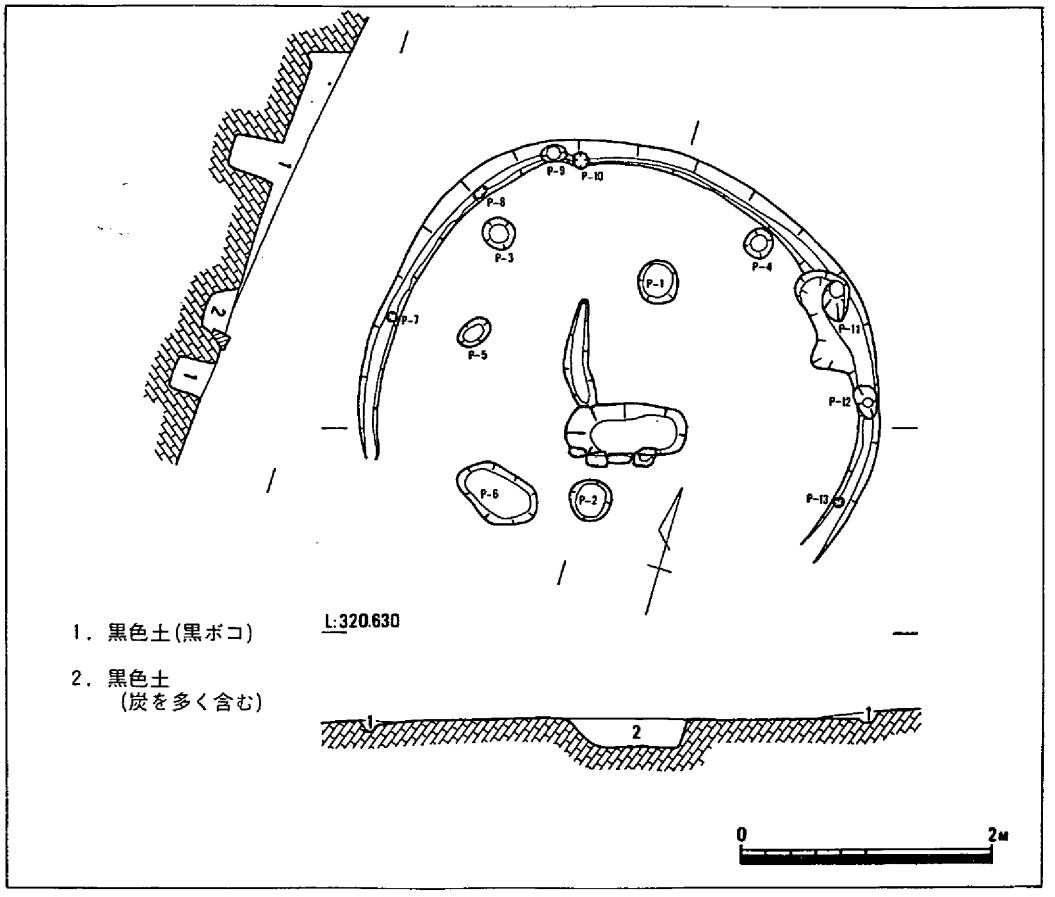
第４図　遺構全体図（1/500）

1. １号住居址　2. ２号住居址　3. 円形柱穴列　4. ３号住居址　5. ４号住居址　6. ５号住居址　7. 欠番　8. ６号住居址　9. １号土壙　10. ２号土壙　11. ７号住居址　12. ８号住居址　13. ３号土壙　14. ４号土壙　15. ５号土壙

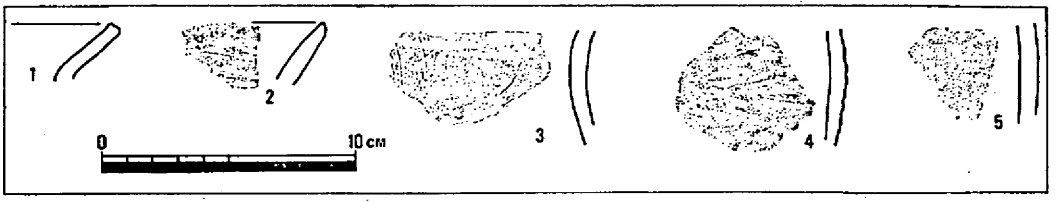
第１節　住居址と出土遺物

１号住居址　（第５図）

１号住居址はＢ－２グリッドにおいて検出された。約30cm程度の耕作土を除去するとすぐ礫を多く含む黄褐色の基盤層に達する。この基盤層上面で遺構の確認を行った。住居址は半円に黒色土の落込



第５図　１号住居址平面図・断面図



第６図　１号住居址出土遺物

みが認められた。土層観察用の畦を残して埋土を除去したが，埋土の中から縄文式土器の小片を発見した。しかし住居址の壁も僅かしか残っておらず，遺物は少量であったが壁溝の中と中央炉から縄文式土器が出土した。これらのことからこの住居址は縄文時代のものではないかと考えていたが，埋土中に土師器が1片認められたことから，これを縄文時代のものと断定するには多少の疑問が残される。いずれにしても類例の少ない現在では縄文時代のものである可能性が強いことを指摘しておきたい。

さて住居址はほぼ円形を呈すると考えられ，壁にそって溝がめぐる。この溝の中には不規則ながら少さなピットが認められる。柱穴と考えられるものはP－1とP－2の2本がしっかりしており，P－3，P－4なども柱穴として使用されたかもしれない。中央には長方形のピットが認められた。ピット内の土は炭を多く含んでおり，一部残存していた石組みも火をうけた痕跡があることから，炉ではないかと考えた。

遺物（第6図）

遺物はすべて土器で，土師器が1片認められた以外は縄文式土器であった。

1は土師器の甕の口縁部である。胴部から「く」の字状に外反する口縁部をもつもので，口縁端部はヨコナデによって僅かにつまみ上げるクセをもつ。外面には煤が付着している。

2～5は縄文式土器である。2は口縁部の破片で，外面は条痕，内面はナデによって仕上げられている。暗黄褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。3は壁溝の中より出土したもので，深鉢の胴部破片と考えられ，外面には垂下する条線（細い沈線）が施される。内面は丁寧なナデによって仕上げられる。暗褐色を呈し，胎土に細砂粒を多く含む。4，5は外面に擦痕が認められ，砂粒の移動痕が残っている。内面はナデによって仕上げられる。暗黄褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。これらの縄文式土器は条痕や擦痕の認められる粗製土器などから後期の時期と考えられる。

2号住居址（第7，8図）

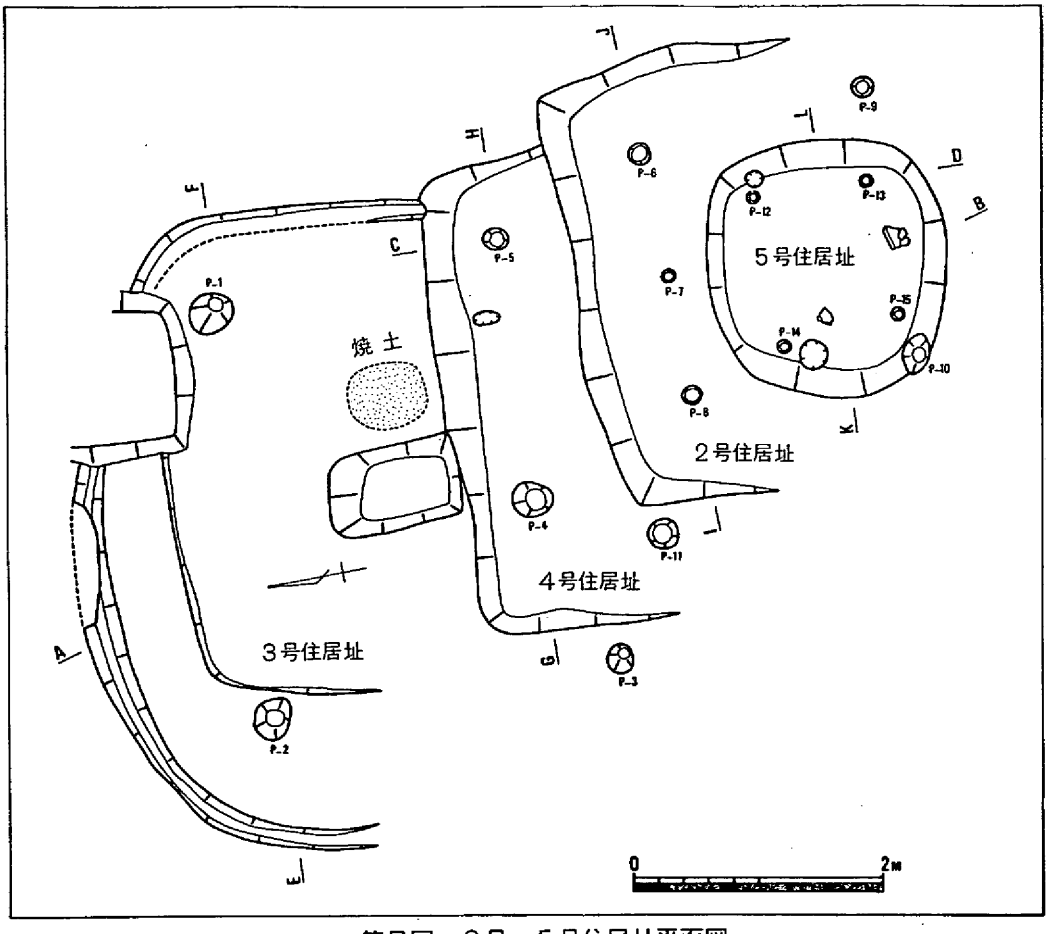
2号住居址はA－1グリッドで検出され，4号住居址を切断して作られている。5号住居址との関係は，2号住居址の残存状態が良くないため，十分に確認できなかった。住居址は1辺が約 3.4mの方形を呈する。柱穴はP－6，P－8，P－9，P－10の4本が考えられる。

遺物（第9図3）

遺物は埋土の中から土師器が一片出土した。長い胴部に「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕である。内縁端部は丸くおさめ，内外面とも刷毛目で仕上げている。暗茶褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。古墳時代後期のものと考えられる。

3号住居址（第7，8図）

3号住居址は4号住居址に切断され，また北側も構造物によって一部破壊されていた。A－1グリッドは20cmほどの耕作土があり，その下はすぐ基盤層である。このため住居址の壁は僅かしか残存しておらず，遺物も少量であった。住居址は隅丸方形を呈し，壁にそって一段高い部分がめぐる。柱穴はP－1，P－2，P－3しか検出できなかったが，おそらく4本柱と考えられる。中央には長方形



第7図　2号～5号住居址平面図

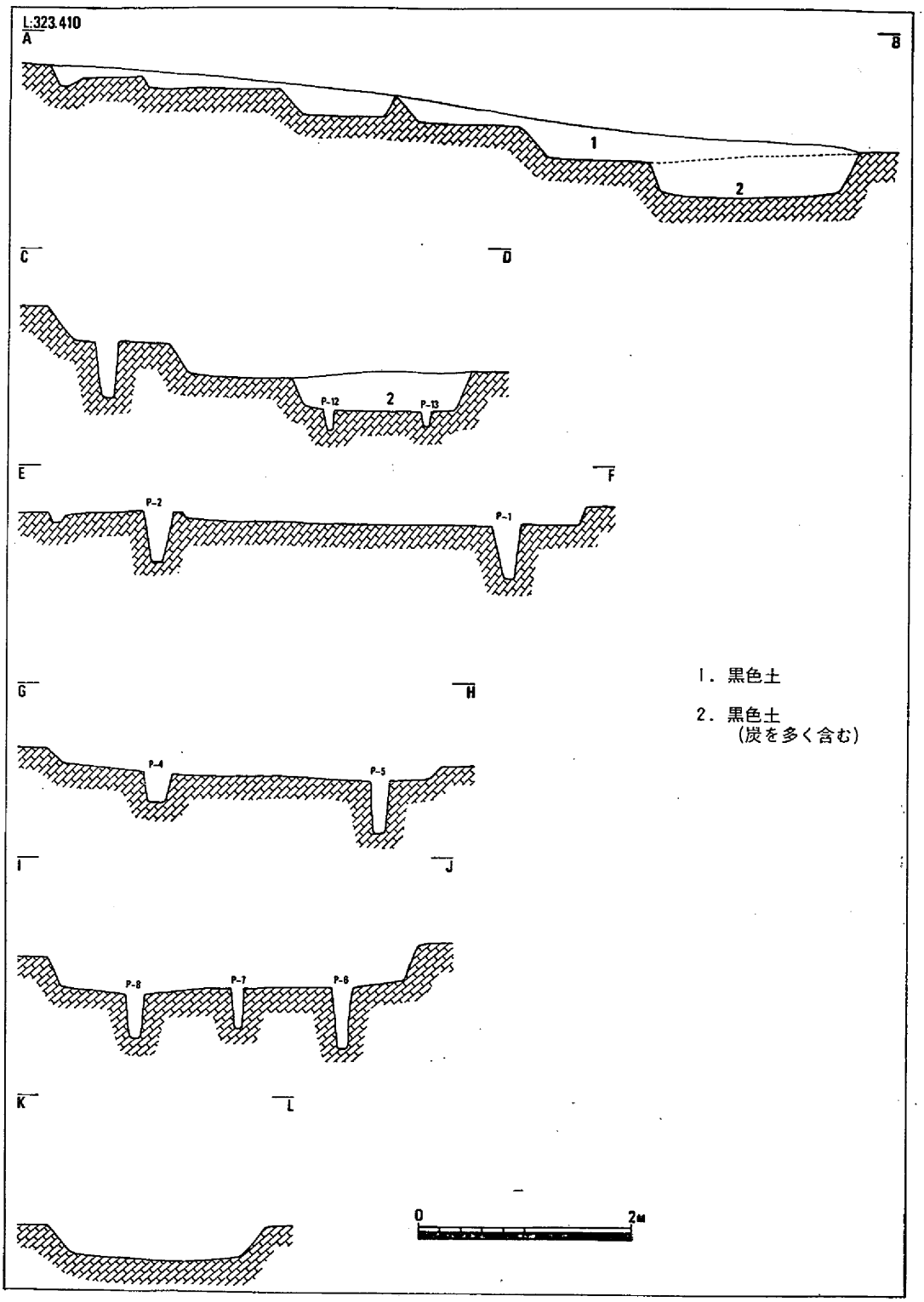
の土壙があり，その東側には火所がある。

遺物　（第9図1，2）

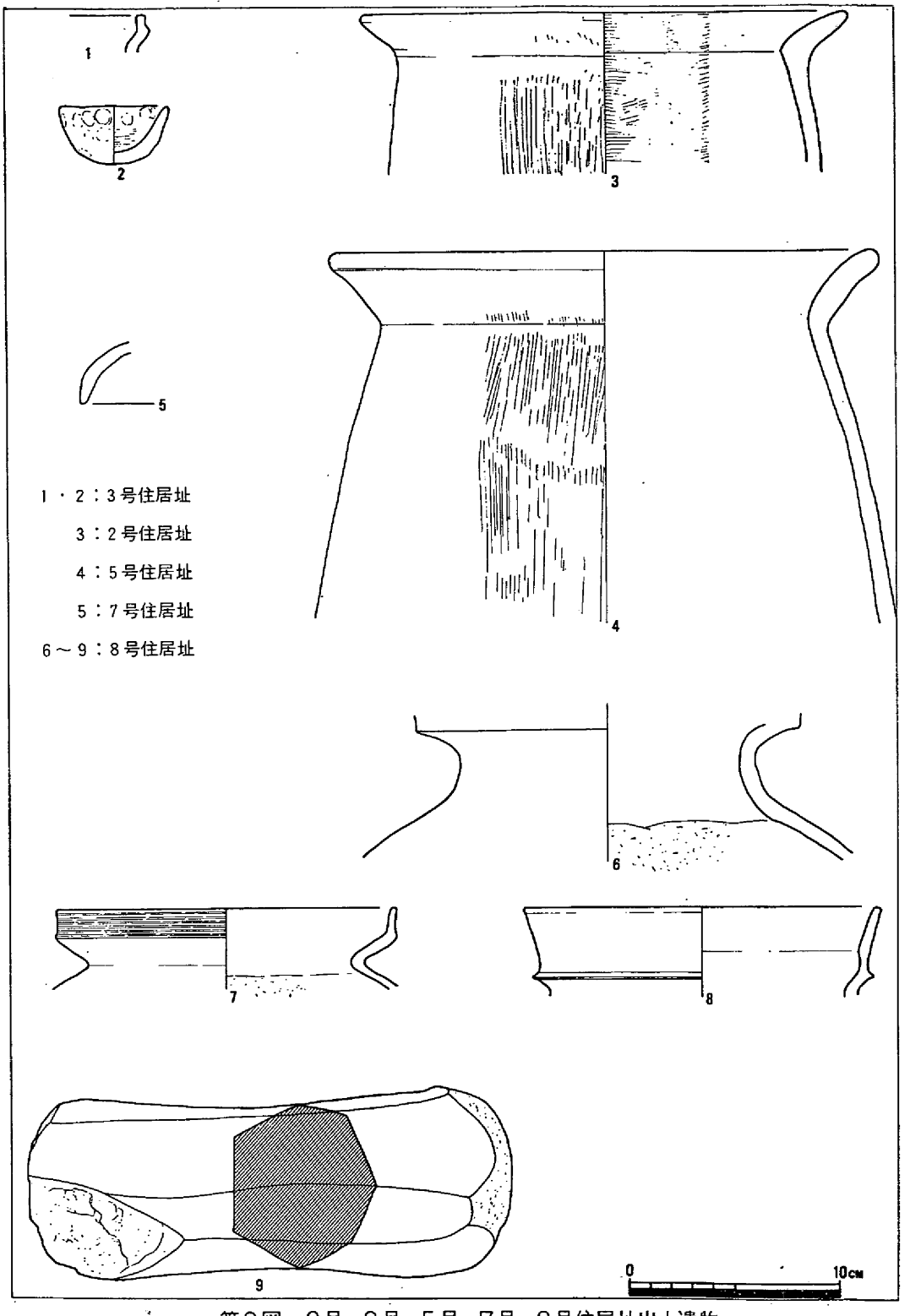
遺物は土器が少量出土した。1は埋土の中から出土したもので，甕の口縁部である。「く」の字状に外反した口縁部から，口縁端部を上方へ拡張している。2は北側の溝に接して出土したもので，手捏ねの小形品である。内外面とも指の圧痕が顕著であるが，内面の下半には刷毛目が認められる。これらの土器は古墳時代前期のものと考えられる。

4号住居址　（第7，8図）

4号住居址は3号住居址を切断し，南側は2号住居址に切断されている。一辺3.6mの方形を呈し，4本柱と考えられるが，P－4とP－5しか検出できなかった。遺物はなかったが，切り合い関係と，住居址の形態から古墳時代後期の時期が想定できる。



第8図　2号～5号住居址断面図



第9図．2号、3号、5号、7号、8号住居址出土遺物

5号住居地 （第7．8図）

1辺約2ｍの隅丸方形を呈するものであるが，住居址と断定するには問題が残るものである。埋土の中には炭を多く含み，土師器も出土した。柱穴は4本確認でき，屋根がつく構造であることが明らかになった。

遺物 （第9図4）

土師器が少量認められ，いずれも床面よりかなり上部で出土した。4は長い胴部に「く」字状に外反する口縁部をもつ甕で，口縁端部は丸くおさめられ，外面は刷毛目，内面はナデによって仕上げられる。暗茶褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。古墳時代後期のものと考えられる。

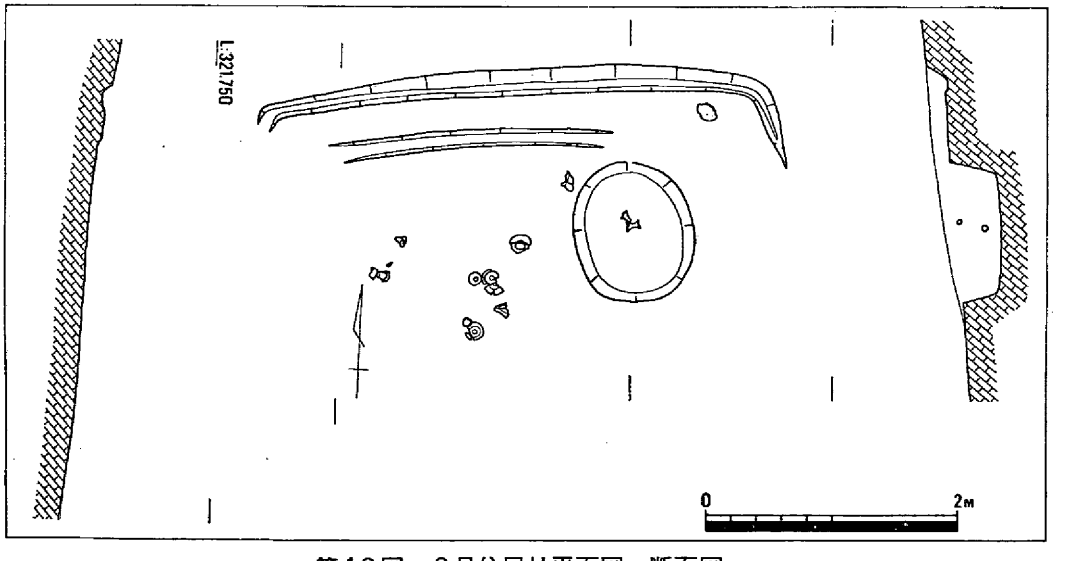
6号住居址 （第10図）

6号住居址はA－1グリッドの南端で検出された。一辺約4ｍの方形を呈するが，柱穴は検出できなかった。楕円形の土壙が中心から東よりに検出された。

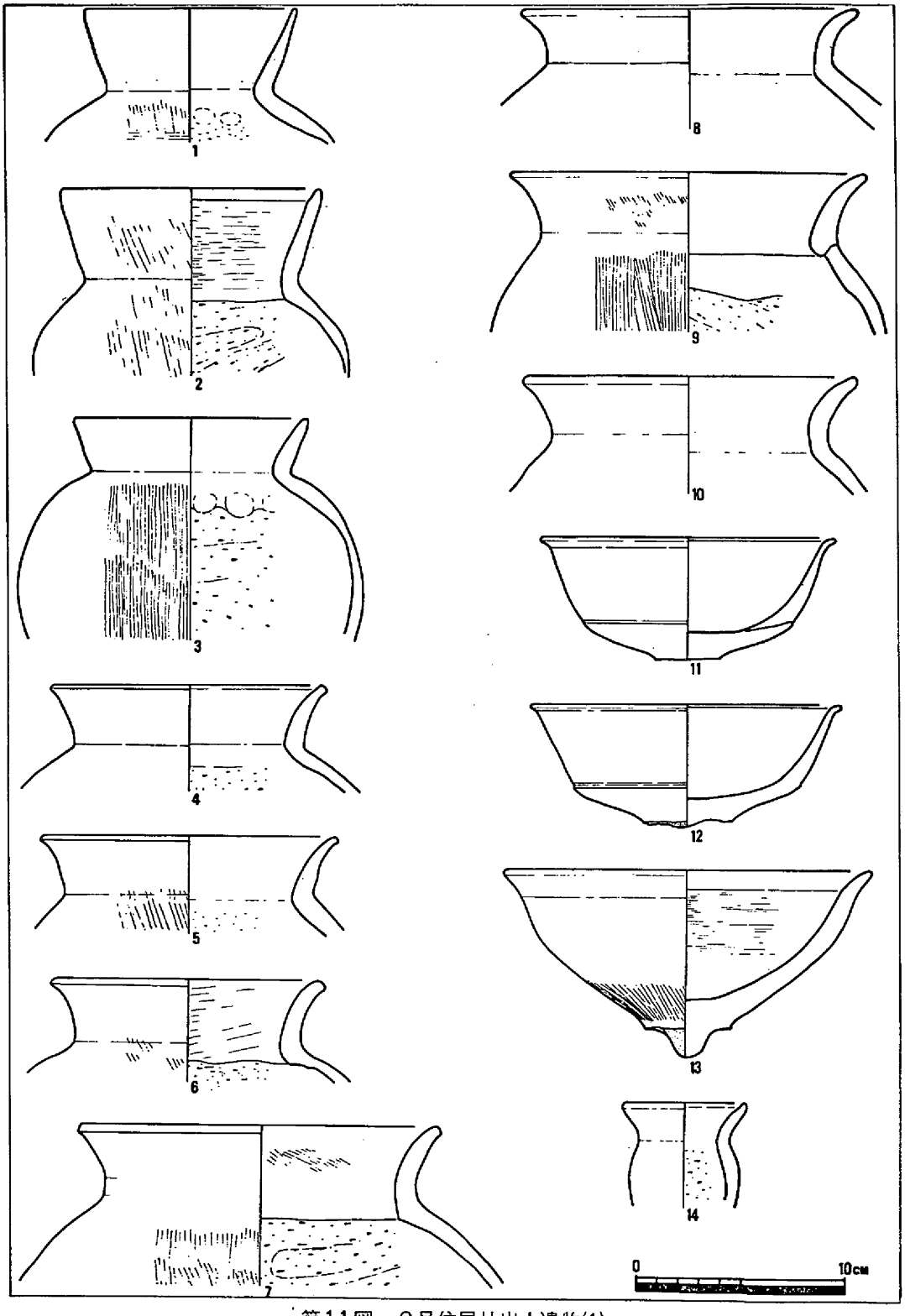
遺物 （第11，12図）

遺物は良く残っており，土師器が一括出土した。これらは1から23までが住居址から，24，25が土壙内からの出土であるが，まず住居址の土器から説明を加える。

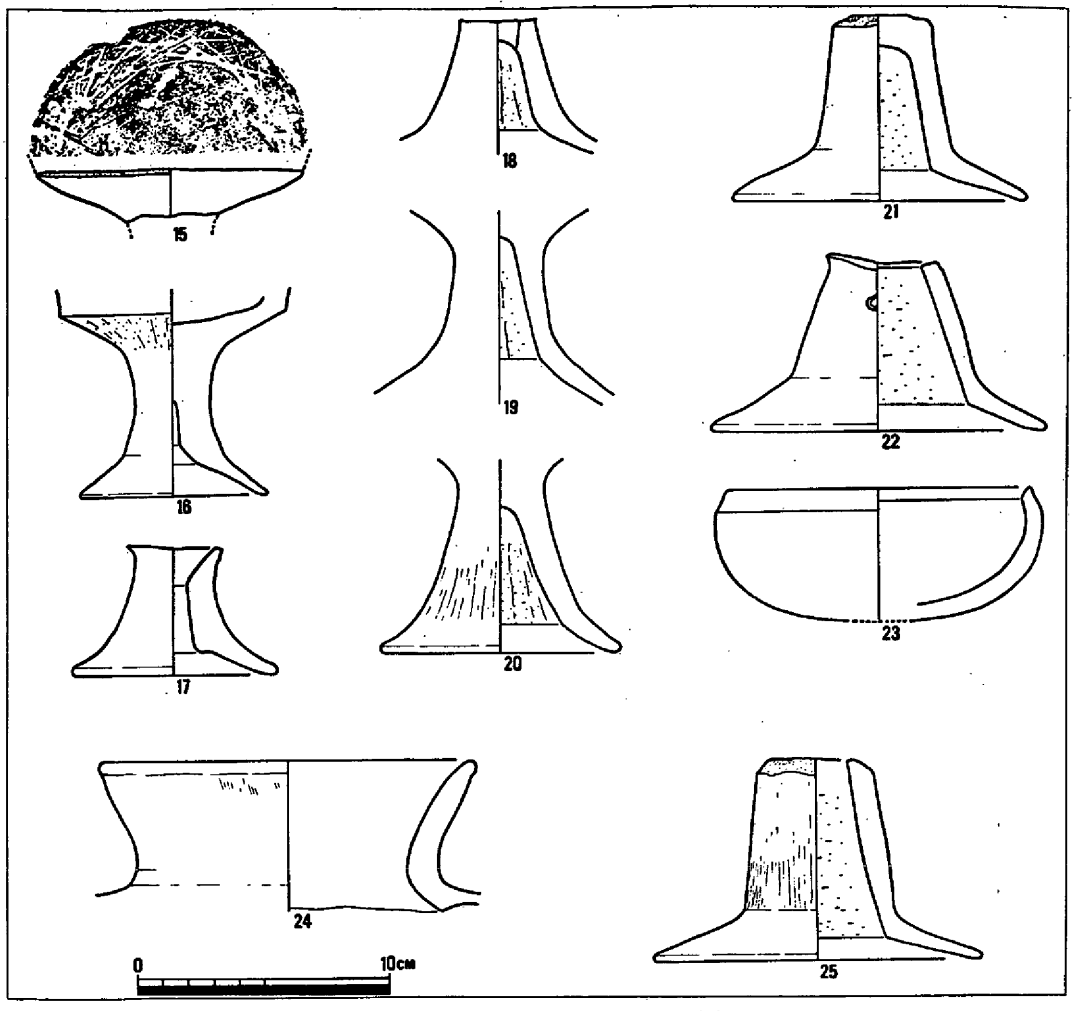
壷（1，2） 1は球形の胴部に外反する長い口縁部をもつ小形の壷である。口縁端部はヨコナデによって丸くおさめられている。胴部は外面が刷毛目，内面は肩の部分に指頭圧痕を残すが，基本的にはヘラ削りによって仕上げられる。2は（1）より大きく，口縁端部内面にヨコナデによる凹部がめぐる。外面は口縁部，胴部ともに刷毛目整形され，内面は口縁部を刷毛目により，胴部をヘラ削りによって仕上げている。いずれも，赤褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。



第10図 6号住居址平面図・断面図



第11図　6号住居址出土遺物(1)



第12図　6号住居址出土遺物(2)

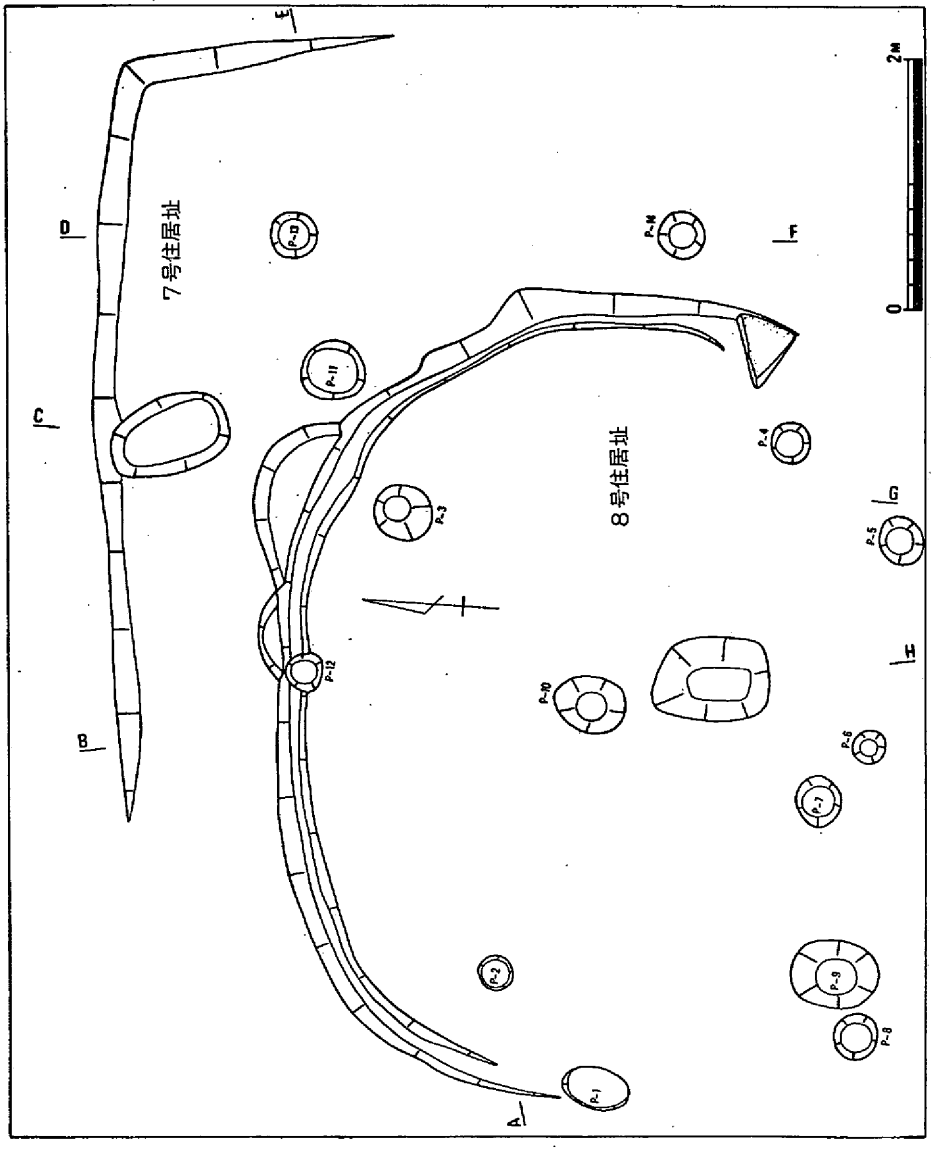
甕（3～10，14）　14以外はほぼ球形の胴部に「く」の字状に外反する口縁部をもつものである。これらの口縁部は外側に反転する傾向が認められ，端部はヨコナデによって丸くおさめるもの（8～10）と面をもつもの（4～7）がある。胴部の器面調整は基本的に外面は刷毛目，内面はヘラ削りである。口縁部は内外面ともナデによって仕上げられるが，一部残ることもある。色調は茶褐色や赤褐色を呈し，胎土には多くの砂粒を含み，やや粗雑な感じを受ける。14は小形の甕で，やや長い胴部に外反する口縁端部は丸みをもって内傾している。

高杯（11～13，15～22）　高杯の杯部の形状には，（a）円盤状の底面から急に屈折して斜め上方にひらくもの（11，12），（b）底面からゆるやかに斜め外方にのびるもの（13）とがある。（a）は底部と口縁部が段を有する部分で接合されるもので，接合部には刻目が施される（15）。口縁端部は

ヨコナデによって外方へつまみ出されている。（b）は底面と口縁部とが区画されているが，外面の刷毛目整形の部分とナデの部分で区別されるのかもしれない。口縁端部は強く外方へ屈折させている。色調は赤褐色，暗黄褐色を呈し，細砂粒を多く含む。

脚部は柱状部から急激に屈折して裾部にむけてラッパ状にひらくものである。脚端部はヨコナデによって丸くおさめている。調整は外面に刷毛目を残すものもあるが，ナデによるものが多く，内面では柱状部はヘラ削り，裾部はナデによっている。これらの高杯は杯部と脚部は別につくられ，杯部のヘソ状（13）のものを脚部に差込むようにして接合するものと考えられる。

杯（23）　底部から内傾ぎみに立上るもので，口縁端部は内傾した面をもつ。色調は赤褐色を呈



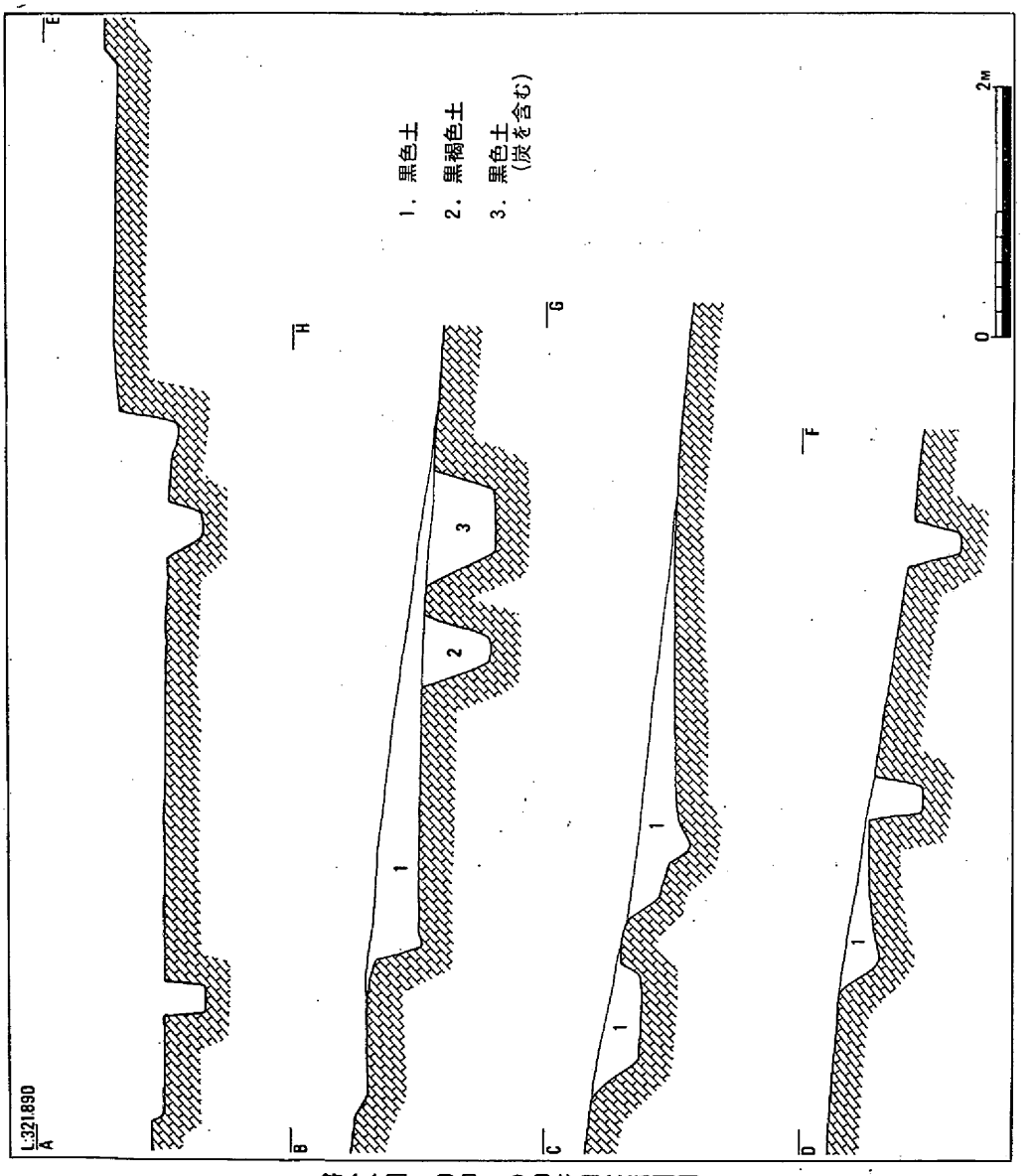
第13図　7号、8号住居址平面図

し，胎土には砂粒を僅かしか含まない。

24，25は土壙内より出土したものであるが，住居址の土器と異なるところはない。

7号住居址 （第13，14図）

7号住居址はA－2グリッドで検出された。1辺約6mの方形を呈する住居址で，北壁に接して土壙が付設されている。柱穴はP－12，P－13，P－14の3本しか検出できなかったが，4本柱になると考えられる。住居址の時期は切合い関係からは言えないが，8号住居址よりは新しく，遺物や住居址の形状などからみて古墳時代後期と考えられる。



第14図　7号、8号住居址断面図

遺物　（第９図５）

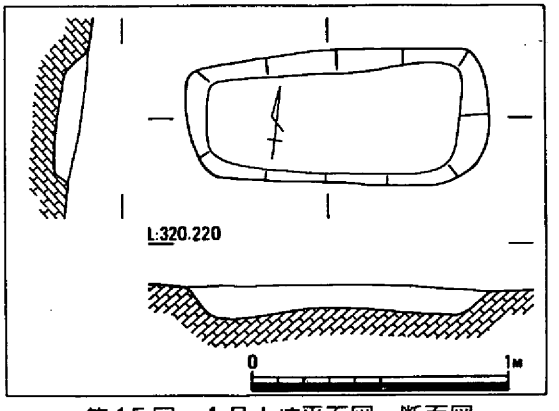
遺物は土師器片が少量と須恵器が１片出土した。図示したものは須恵器の杯で，６世紀の後半と考えられる。

８号住居址　（第13，14図）

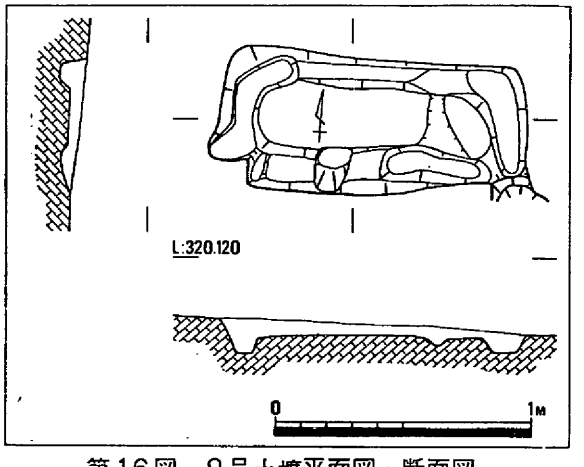
８号住居址はＡ－２グリッドで検出された。隅丸方形を呈する住居址で，壁に接して溝がめぐる。柱穴は明確でないが，Ｐ－３，Ｐ－５，Ｐ－９などが考えられ，４本柱になると思われる。中央には長方形を呈するピットがあり，内部に炭が認められた。東側の壁に接して石があるが，住居址に付設する人工的なものかどうかは不明である。

遺物　（第９図６～９）

遺物は少量であるが，埋土の中より土師器や砥石が出土した。



第15図　１号土壙平面図・断面図



第16図　２号土壙平面図・断面図

６は壷の口縁部から頸部にかけての破片で，口縁端部は外面しながら立ち上がる，二重口縁を呈するものである。外面には丹が塗られ，ヘラ磨きによって仕上げられる。７は「く」の字状に外反した口縁部からさらに上方に拡張され，その端面に櫛状工具による条線がめぐる甕である。胴部内面はヘラ削りによって仕上げられる。８も二重口縁を呈する甕であるが，胴部より外反した口縁部からさらに立ち上がる段は短かい。

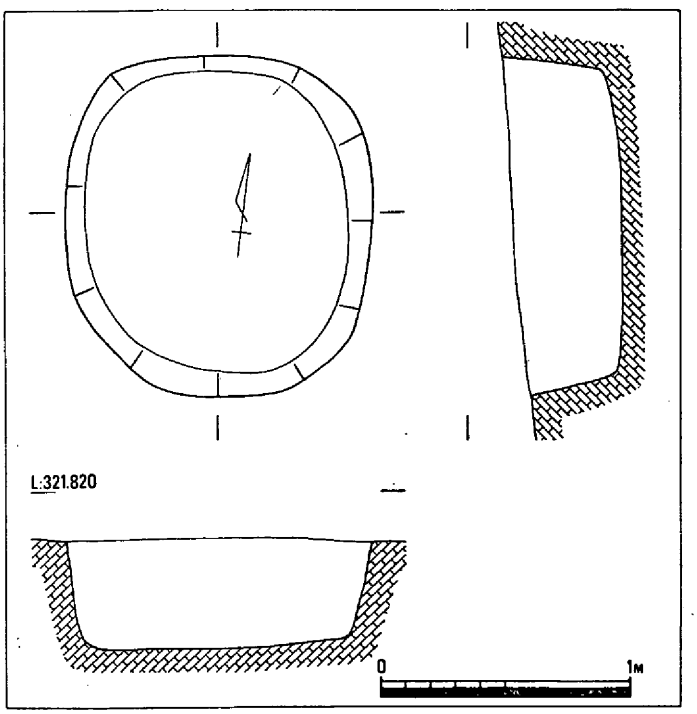
９は棒状の砥石で全面を使用している。

さてこれらの遺物の時期であるが，少量であるため厳密な比較はできないが，古墳時代前期と考えられる。７の甕は中部瀬戸内を中心に，山間部においてもよく認められるものであり，上東遺跡において亀川上層式（註１）と言われているものである。８の甕は山陰を中心に岡山県北部にも多く認められるものであり，青木遺跡においてⅤ・Ⅵ期（註２）とされている。したがってこれらの土器は，畿内の布留式（註３）直前，あるいは布留式の古い時期と考えられる。

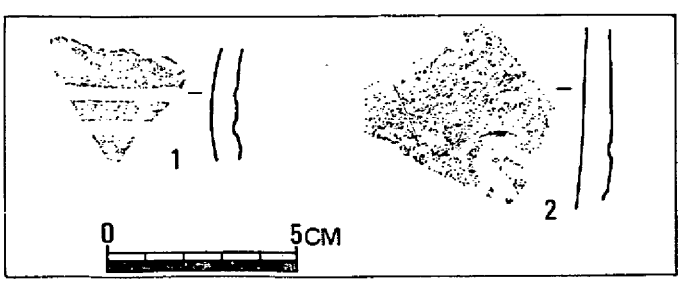
第２節　土壙，その他の遺構と出土遺物

１号土壙　（第15図）

１号土壙はＢ－３グリッドで検出された。長さ1.2m，幅0.5mの長方形を呈する土壙である。土壙内には黒色土が充塡しており，床面は中央が高く，長軸の両端はやや低くなっている。遺物は出土せず，遺構の性格を判断する材料に乏しいが，土壙墓の可能性が強いと考えられる。



第17図　３号土壙平面図・断面図



第18図　３号土壙出土遺物

２号土壙　（第16図）

２号土壙はＡ－３グリッドで，１号土壙の南側に平行して検出された。長さ1.2m，幅0.5mの長方形を呈する。壁にそって溝状の凹部が認められ，石組，あるいは木棺などがあった可能性が強い。遺物はなく，黒色土が充塡していた。

３号土壙　（第17図）

３号土壙はＡ－２グリッドで検出された。長径1.4m，短径1.2mの楕円形を呈し，床面は平坦である。埋土は黒色土で，遺物が少量出土した。

遺物　（第18図）

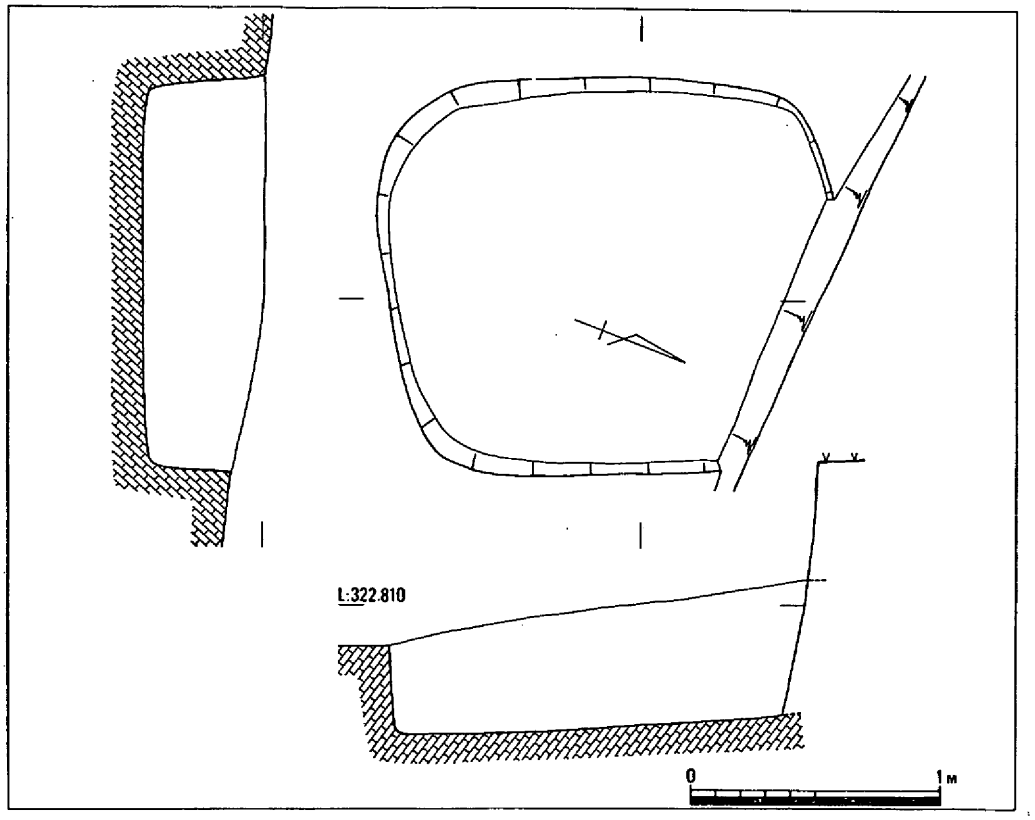
遺物は埋土の中に含まれており，縄文式土器と黒曜石の剝片が認められた。１，２とも沈線による文様が施され，内面は丁寧にヘラ磨きをしている。器厚は６㎜前後で胎土に砂粒を多く含む。時期は後

期の前半と考えられる。

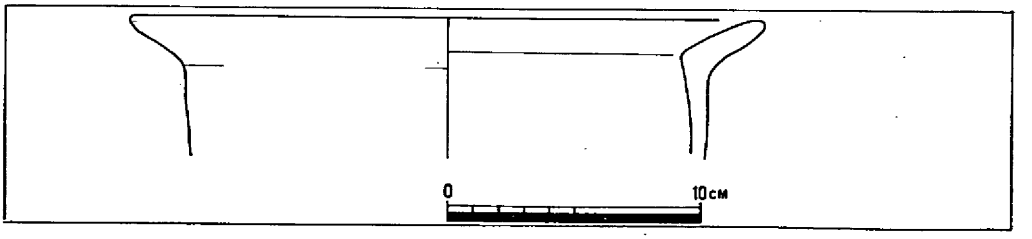
4号土壙 （第19図）

4号土壙はA－2グリッドで検出されたが，一部は路線外になり，完掘することができなかった。長さ約1.8m，幅1.6mの長方形を呈する土壙で，床面は平坦になっている。土壙内には黒色土が充填しており，土師器が含まれていた。

遺物 （第20図）



第19図　4号土壙平面図・断面図

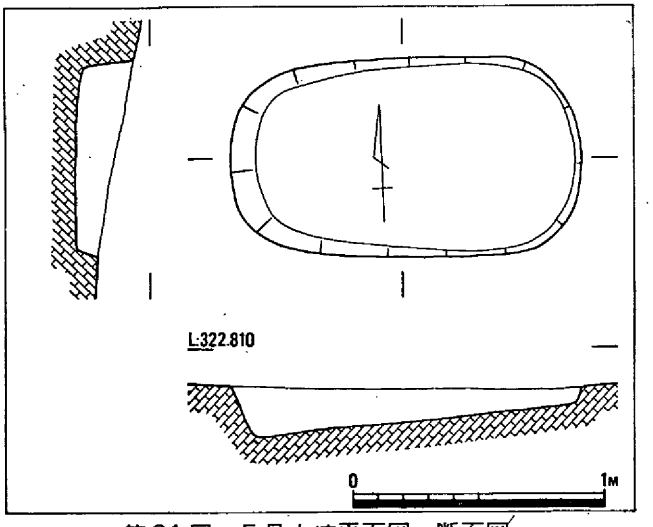


第20図　4号土壙出土遺物

遺物は土師器が少量出土したが，図示できるものは一片だけであった。長い胴部に「く」の字状に外反する口縁部がつく甕である。口縁端部はヨコナデによって丸くおさめられている。胴部は内外面ともナデによって仕上げられている。赤褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。時期は古墳時代後期と考えられる。

5号土壙（第21図）

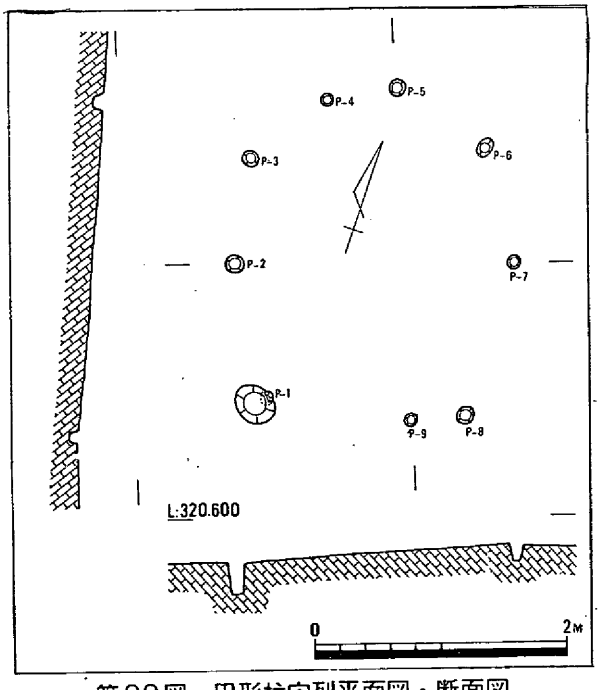
5号土壙はA－3グリッドで検出されたもので，長径1.4m，短径0.8mの長方形に近い楕円形を呈する。埋土は黒色を呈し，遺物は出土しなかった。



第21図　5号土壙平面図・断面図

円形柱穴列（第22図）

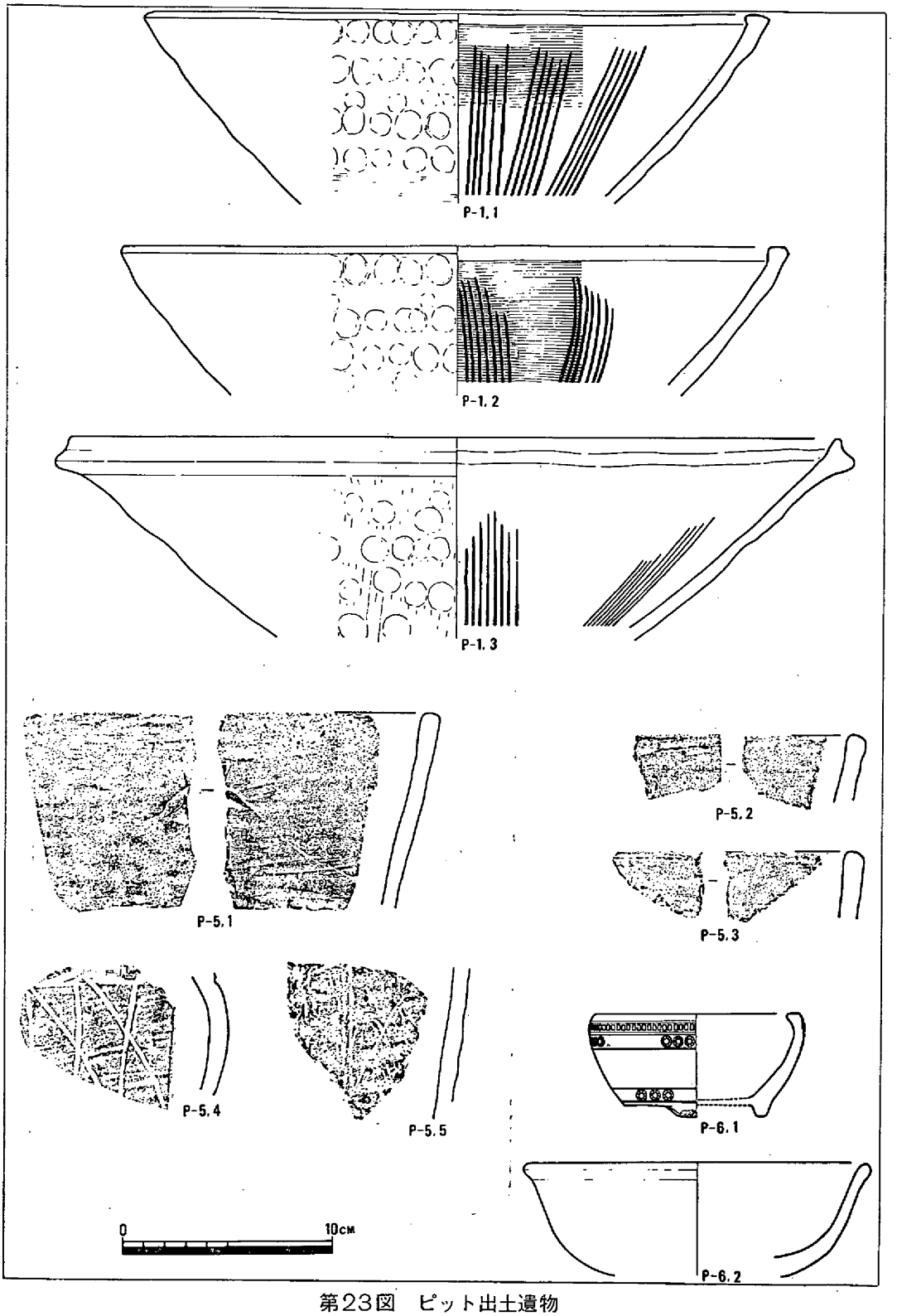
B－2グリッドの1号住居址北西側に検出された。長径約2.5m，短径約2.2mの楕円形に細い柱穴が並ぶものである。これらの柱穴はP－7からP－9間で多少の乱れがあるものの，ほぼ等間隔に並び，何らかの構造物を想起させるものである。時期は柱穴内に遺物が認められないため，手懸がない。



第22図　円形柱穴列平面図・断面図

ピット出土の遺物（第23図）

ピットはA－2，A－3グリッド間の谷部から両側で多く検出された。これらのピットは多くのものは柱穴と考えられるものであるが，性格不明の穴もある。ここに図示した遺物はすべて柱穴状のピットから出土したものである。



第23図　ピット出土遺物

P－1出土遺物（第23図P－1，1～3）

直径約30cm，深さ40cmのピットで，3個体の擂鉢が出土した。1は口縁端部を内側につまみ出し，端面をつくり出している。外面は指頭圧痕がほぼ平行に残り，底部近くは横方向の刷毛目で仕上げている。内面は横方向の刷毛目の後に下から上へ櫛状工具で5本の条線を施す。また胴部下半はよく磨消している。色調は暗灰褐色を呈し，硬質で須恵器的な感じをうける。胎土には砂粒を多く含む。2は瓦質のような感じがするが，やや硬いものである。外面は指頭圧痕が残り，煤が付着している。内面は横方向の刷毛目で仕上げられる。3は口縁端部を上下に拡張し，その端面に凹部がめぐる。外面には指頭圧痕が残るが，刷毛目で仕上げられている。煤が付着して色を呈する部分もあるが，土師器的な感じをうけるものである。胎土には砂粒を多く含む。

さてこれらの擂鉢は，倉敷市玉島の亀山で焼かれた亀山焼に類似した土質を示すが，これに類似したものは備後の沼隈（ぬまくま）焼や美作の勝田焼などがあり，現在では決めかねるものである。時期についても，擂鉢では口縁端部の拡張のないものが古く，新しくなると拡張が大きくなると言われていがる，図示したものには両者が認められる。しかしピットの一括品であり，ここでは一応鎌倉から室町時代に比定しておきたい。

P－2出土遺物（第23図P－5，1～5）

径35cm，深さ20cmのピットから出土した。1～3は同一個体の口縁部で，内外面には擦痕が認められる。暗黄褐色を呈し，胎土には多くの砂粒を含む。4は縄文式土器で，条痕地に沈線で×印の文様を施している。内面は丁寧に磨かれている。暗茶褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。5も縄文式土器で，凹凸のある粗雑な器表に，無造作な条線が認められる。暗茶褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。これらの縄文式土器は後期の時期と考えられる。

P－6出土遺物（第23図P－6，1～2）

径25cm，深さ36cmのピットから出土した。1は香炉形の土器である。灰褐色を呈し，硬質である。胎土には細砂粒を若干含む。2は青磁で，口縁端部は肥厚ぎみに丸くおさめている。気泡やヒビが多く，粗雑な感じをうける。

第3節　遺構に伴わない遺物

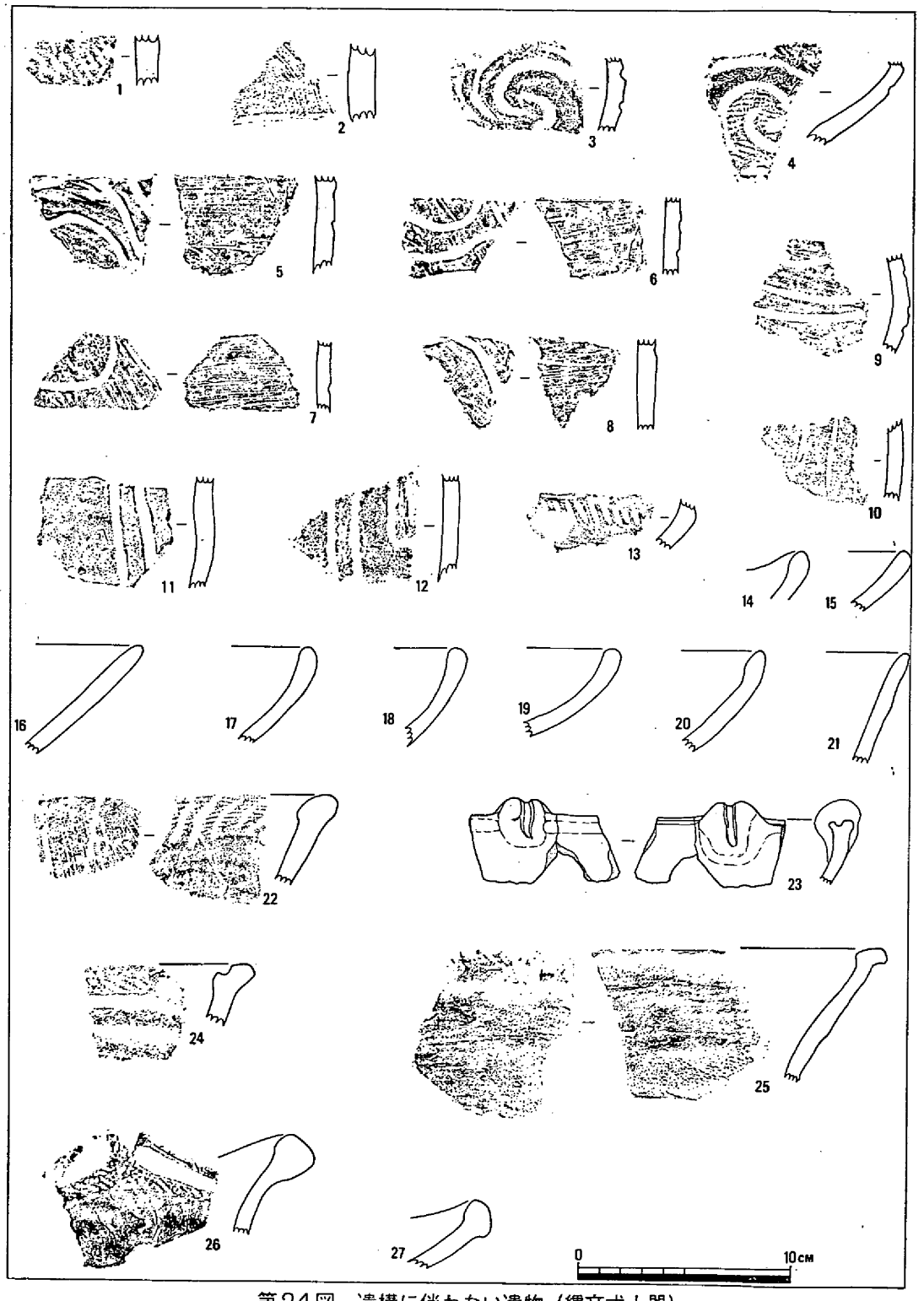
Ⅰ　縄文武土器　第(24図，25図)

縄文式土器はA－1，B－1，A－2，B－2のグリッドから出土し，層位的には表土と黒色土層に含まれていた。時期的には早期，後期，晩期のものが認められるが，大部分は後期に属するものである。

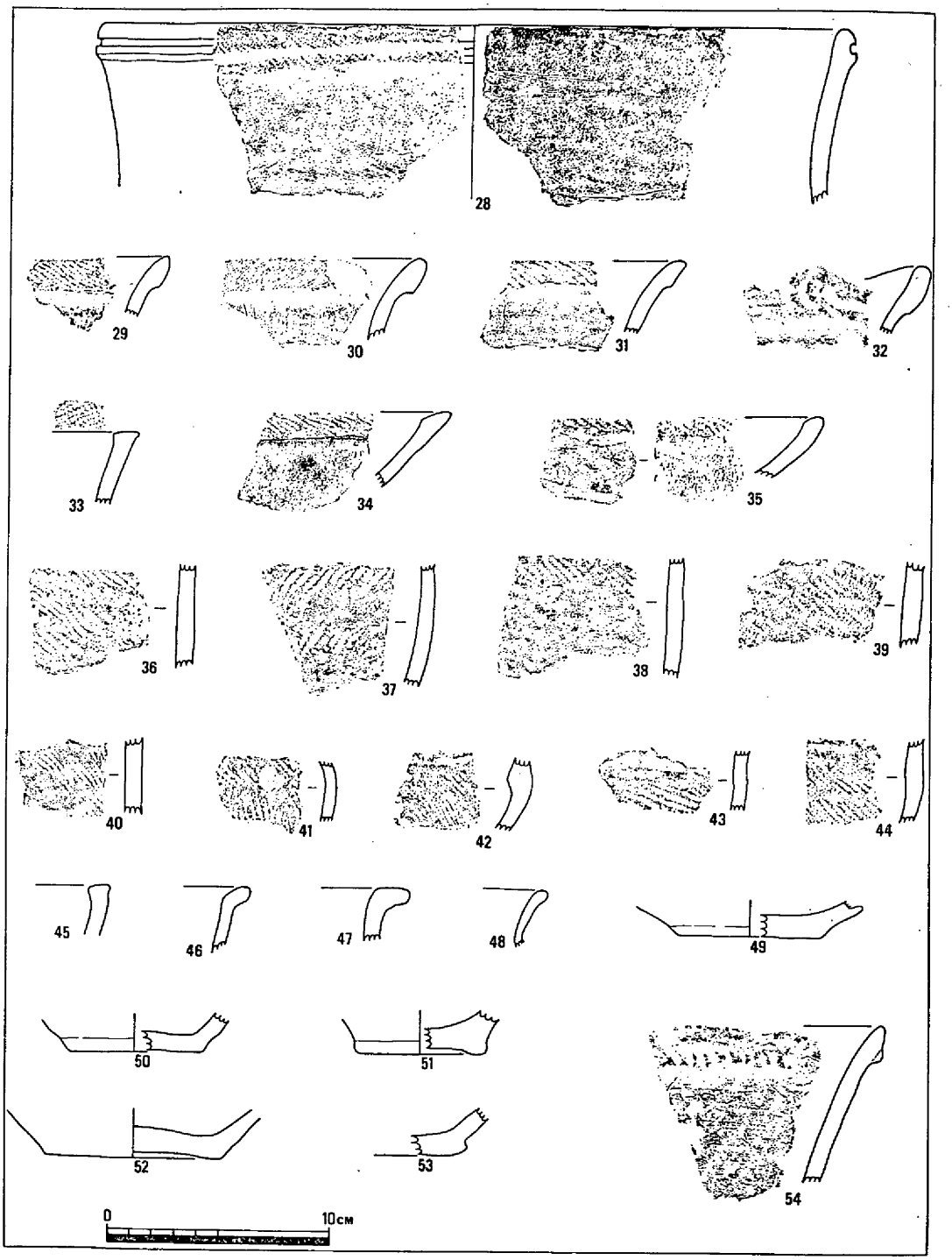
早期の土器（第24図1）

1片だけであるが，器表に縄文が施され，胎土に繊維を含むものである。器壁は1.3mmを測る。

後期の土器



第24図　遺構に伴わない遺物（縄文式土器）



第25図　遺構に伴わない遺物（縄文式土器）

後期に層する土器は同時期のものでなく，時間的な幅をもっていると考えられ，凡そ2時期に分類できる。1つは後期初頭の中津式に相当する時期，もう1つは後期中葉の彦崎ＫⅠ式とか津雲Ａ式などの時期，あるいはそれよりやや新しいものである。

Ⅰ類　（第24図5～9，11，12）

太い沈線で文様を施したものである。5～8は同一個体で，条痕地に沈線文が施され，内面も条痕調整されている。11，12は直線的な沈線文を施し，内面な篦磨で仕上げられる。これらは黄褐色，暗褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含んでいる。器壁は7㎜前後である。

Ⅱ類

Ⅱ類としたものは口縁端部を肥厚さしたものを中心に，磨消縄文，細い沈線文などを一括した。

Ａ（第24図3，4）

磨消縄文が渦巻状に施されるものである。いずれも丁寧なつくりで，内面は篦磨きされている。

Ｂ（第24図10）

細い沈線が垂下しているもので，内面は篦磨きされ，胎土には砂粒を多く含んでいる。

Ｃ（第24図2，22～27。25図28～32）

口縁端部を肥厚させたもので，内面に肥厚させたものと，外面に肥厚させたものと，外面に肥厚させたものとが認められる。色調は暗褐色，茶褐色，黄褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。

Ｄ（第25図33～35）

口縁端部上面に縄文を施すものである。内面はよく篦磨きされている。胎土に砂粒を多く含む。

Ｅ（第25図36～44）

縄文の施されたもので，胴部の破片である。

Ⅲ類（第24図14～21，25図45～48）

無文のものを一括したが，同時期ではない。14～15，17～20は口縁端部がやや肥厚ぎみに丸くおさめられ，内外面とも篦磨されており，Ⅰ類に伴うものと考えられる。46，47などは口縁端部を肥厚したものに伴なうと考えられる。

底部（第25図49～53）

上底を呈するものと平底になるものとが認められる。胎土に砂粒を多く含む。

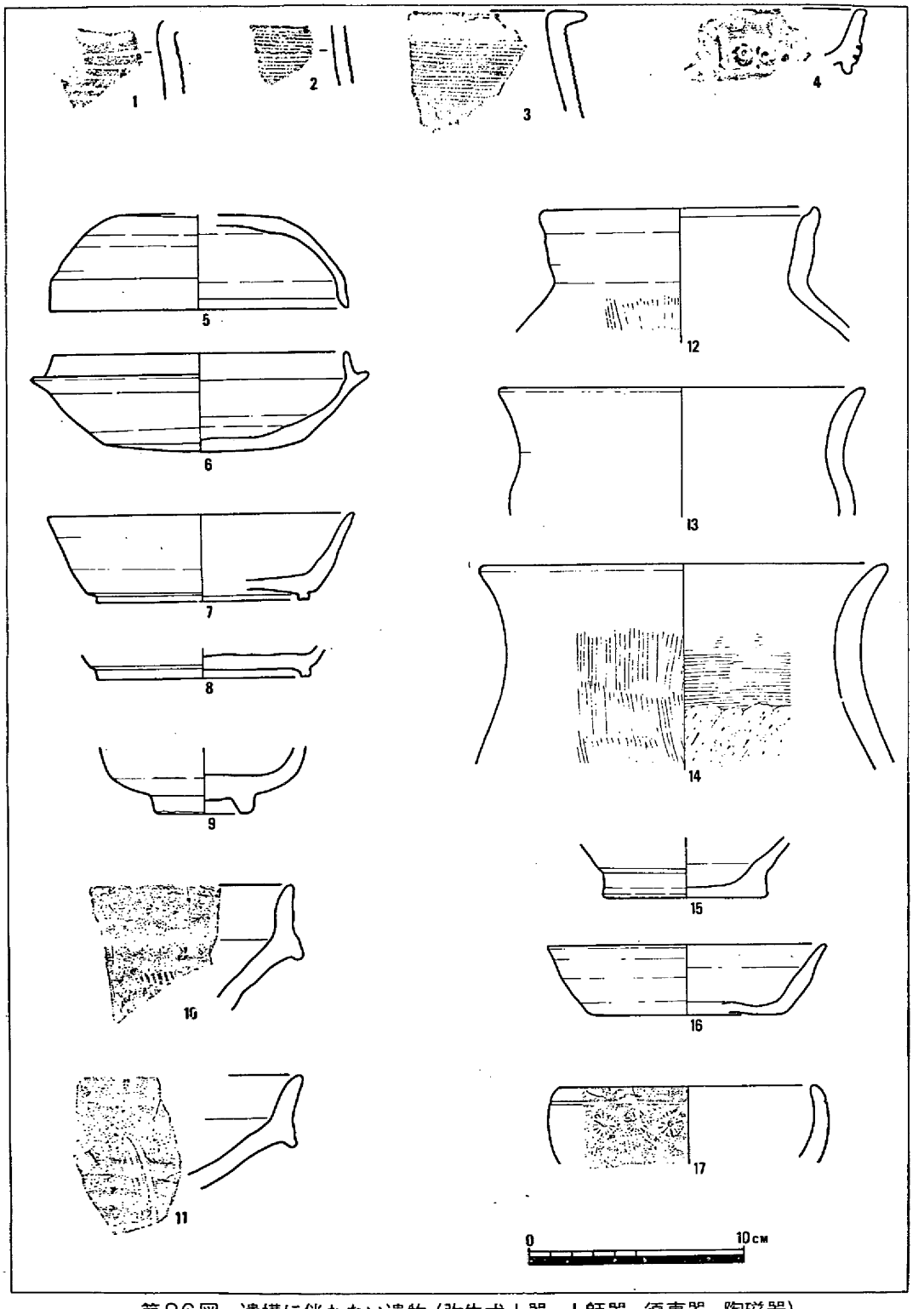
晩期の土器（第25図54）

口縁部に刻目のある貼付凸帯をめぐらすものである。条痕による調整が認められる。

Ⅱ　弥生式土器（第26図1～3）

1は甕の頸部で，篦状の工具による沈線が4条めぐっている。色調は茶褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。弥生時代前期の新しい時期と考えられる。

2，3は逆「Ｌ」字状の口縁部をもつ甕で，頸部には櫛状工具による条線がめぐっている。内面はナデによって仕上げられる。弥生時代中期初頭の時期と考えられる。



第26図　遺構に伴わない遺物（弥生式土器、土師器、須恵器、陶磁器）

Ⅲ　土師器（第26図4，12～16）

4は口縁端部が外反ぎみに立上るもので，端面には棒状浮文と円形浮文に竹管状工具で刺突をしたものとが認められる。内外面とも丹が塗られ，丁寧に篦磨がなされている。

12は球形の胴部に，外反ぎみに立上る口縁部がつく。口縁端部内面には凹部がめぐっている。胴部外面は刷毛目で仕上げる。暗茶褐色を呈し，胎土には金雲母を含む。

13は単純に外反する口縁部をもつもので，端部は丸くおさめる。暗褐色を呈し，砂粒を多く含む。

14は長い胴部に単純に外反する口縁部をもつ甕である。口縁部は内外面とも横ナデにより，胴部外面は刷毛目，内面は刷毛目と篦削りによって仕上げられる。茶褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。

15，16は杯である。15は高台状のしっかりした底部をもっている。16は底部が凹んでいる。褐色，赤褐色を呈し，胎土は良好で，砂粒は少ない。

Ⅳ　須恵器　第26図5～8）

5は杯蓋である。天井部は平坦に仕上げられ，口縁部は体部から屈曲してほぼ垂直になっている。口縁端部内面は斜めの面をもつ。調整は口縁部，体部内外面が横ナデ，天井部外面は篦切りの後をナデて仕上げている。色調は灰褐色を呈し，胎土に砂粒を少量含む。

6の杯はほぼ完形で，口径14cm，器高4.5cmを測る。受部の立上りは知かく内傾しており，端部は丸くおさめている。底部は平坦で，篦切りの後をナデて仕上げている。灰褐色を呈する。

7，8は高台付の杯である。高台の底面は横ナデによって凹部がめぐる。7は内外面にゴマ状の自然釉が付着している。いずれも青灰色を呈し，胎土に砂粒を少量含む。

Ⅴ　陶磁器（第26図9～11，17）

9は白磁の碗である。器表は網目状の罅がみられる。胎土は灰白色を呈する良質なものである。

10，11は備前焼の擂鉢である。いずれも備前焼特有の赤色には発色せず，青灰色を呈している。

17は香炉で，口縁部が内彎ぎみになる浅い碗形になると思われる。文様は細い沈線と印判による花弁状のものがめぐる。調整は外面が篦磨き，内面がナデによって仕上げられる。

註

註1　伊藤晃，柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』岡山県教育委員会　1973年
柳瀬昭彦，江見正巳，中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会　1977年

註2　青木遺跡発掘調査団・編集者団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』鳥取県教育委員会
青木遺跡発掘調査団・編集者団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』鳥取県教育委員会　1977年

註3　坪井清足「王泊遺跡」『岡山県笠岡市高遺跡調査報告』　1958年

第４章　ま　と　め

佐藤遺跡出土の縄文式土器について

前章において縄文式土器を，文様を中心にして大別をおこなったが，細片のため器形や全体の文様構成が不明なこともあって，今後訂正される部分も多いと思われるが，ここでは時期と分布について若干の考察を試みたい。

早期の土器としたものは，瀬戸内沿岸部では未発見であり，山間部で多く発見されている。この土器は帝釈峡遺跡群（註１）において，層位的に押型文より上層，羽島下層式より下層から出土することが確認されている。分布範囲は不明な点が多いが，京都府の日本海側などでも認められ，近畿北部，山陰，中国山地などに分布していると考えられる。岡山県においては，野原遺跡群（註２）や中和村向山遺跡に認められる。

後期の土器はⅠ類からⅢ類に分類した。Ⅰ類は中津式に類似するが，磨消縄文が認められず，やや様相が異なる。Ⅱ類Ａとしたものは磨消縄文であるが，福田ＫⅡ式に細くて華麗な磨消縄文を渦巻状に施すものが知られており，これだけの資料で判断することは困難である。Ⅱ類Ｃとしたものは彦崎ＫⅠ式・津雲Ａ式に比定されるものである。この両型式は同時期と考えられているが，彦崎ＫⅠ式は口縁部内面を肥厚させそこに直線的・幾何学的な文様を主に施しているのに対し，津雲Ａ式は外側に肥厚させ曲線的な文様をもつことが指摘されている。この相違が時間差を示すものか，あるいは地域差を示すものかについては解決されていない。佐藤遺跡では両者が認められ，22・24・25などが彦崎ＫⅠ式に，28・32などは津雲Ａ式に比定される。29～35は黒土遺跡において黒土Ｅ類（註３）とされたものであり，津雲貝塚にも多く認められる。Ⅱ類ＤはⅡ類Ｃと同時期と考えられるが，類例に僅しい。Ⅱ類ＥはⅡ類Ｃなどの胴部を飾るものではなかろうか。Ⅲ類は無文の土器で，Ⅰ・Ⅱ類に伴うものであるが詳細な時期の比定はできない。

さてこれらの文様を施された土器以外にも，多くの粗製土器が出土している。これらの中には一見して土師器と区別のつかないものが多かった。これらの粗製土器を見ると，貝殻による条痕は少なく，篦状の工具でナデた擦痕や，茎のようなものを束ねて調整した条痕が多いことが認められた。

以上土器については多くの課題を残すことになるが，今後さらに正確を期したい。縄文時代の問題については，土器以外にも３号土壙から出土した黒曜石の原産地同定を行っており，隠岐島産のものに類似するという結果がでた。今後こういった自然科学的方法によって黒曜石の入手経路なども明らかになるであろう。

佐藤遺跡における集落の変遷

佐藤遺跡は神代川に面した，狭い扇状地の上に位置している。今回の調査区域は，その南端部ではあったが，地形などからみて，遺跡の主要な部分は明らかにされたものと考えられ，断続的ではあるが，縄文時代から中世に至る遺構・遺物が出土した。ここではこれらの遺構・遺物をもとに，佐藤遺

跡の歴史的展開を通史的に概観してみる。

佐藤遺跡の位置する扇状地の上に，活動の痕跡を留める最初の時期は縄文時代早期末である。一般的に早期の遺跡は小規模であり，また集団の移動が頻繁であったことが知られている。神代川流域や野原高原を含む岡山県北西部は，早期の遺跡が集中して認められる地域の一つであり，これが当時の生活圏＝集団領域と考えられ，この領域の中で移動を繰返していた早期人の，短期間の居住地として，佐藤遺跡の存在も考えられる。

続いて，縄文時代後期においても小集団というイメージは脱却せず，遺物の量はやや多くはなるが，一時期にすれば僅かなものである。もっとも，縄文時代の確実な遺構が不明な現在においては詳細な比較検討をすることができないが，県北の縄文時代遺跡は，県南の貝塚を形成したような遺跡に比較して，小規模であるといえる。

やがて縄文時代は弥生時代へと移行してゆくが，佐藤遺跡では晩期終末の土器と弥生時代前期の土器が出土しており，山間部での縄文時代から弥生時代への移行過程を解明する資料となるであろう。

弥生時代中期初頭の土器も少量出土しているが，以後古墳時代前期に至るまで活動の痕跡は認められない。古墳時代前期になると3号住居址，6号住居址，12号住居址などが作られるが，これらは同時に存在したものではなく，すでに破壊されてしまったものや，路線外にも存在する可能性を考慮しても，一時期においては，1軒から数軒の住居址より構成される小集落が想起される。古墳時代前期に属する3軒の住居址のうち，3号住居址は遺物が少ないため時期を決定することが困難ではあるが，ベッド状遺構が存在することや，住居址の平面ランプが隅丸方形を呈することから，4世紀後半に比定される12号住居址に近い時期，すなわち4世紀代が考えられる。6号住居址は平面プランがすでに方形を呈しており，また出土した土師器からも5世紀後半に比定できる。古墳時代後期の住居址は2号，4号，5号，11号の4軒であるが，2号，4号，5号の住居址は切り合っており，同時に存在したとは考えられず，やはり前期同様の小さな集落であったと思われる。古墳時代に限って言えば，隣接する山根屋遺跡の墳墓群造営者の集団とするにはあまりにも小集団であり，近くに大集落を想定させるような場所はない。このことから佐藤遺跡のような小集団が上神代の地域に数集団存在し，その共同の墓域として山根屋遺跡の丘陵が利用されていたと考えられないだろうか。

鎌倉時代から室町時代にかけての遺物も少量ながら出土しており，またこの時期と考えられるピットも検出された。調査区内で建物などは検出できなかったが，日常の什器が出土していることから，小規模ながら生活をしていたことがうかがわれる。

以上通史的に佐藤遺跡の変遷を記してきたが，いずれの時期においても小規模な集団の存在が考えられる。これらは佐藤遺跡の立地条件が発展的な地形を呈していないこともあるが，この地域の生産諸条件に規定されたものであり，地域史としての総体的把握のなかで解明されるであろう。

註

註1　松崎寿和編『帝釈峡遺跡群』

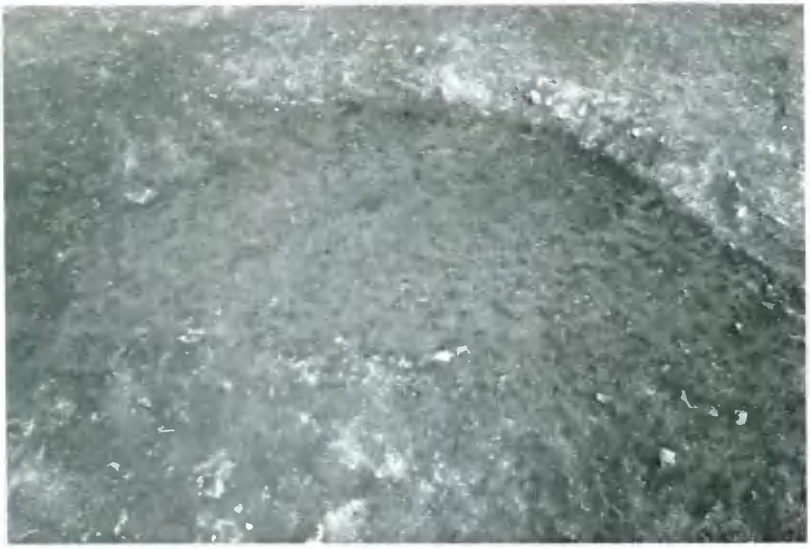
註2　安東信「野原高原採集の縄文遺物」『倉敷考古館研究集報八』　1973年

註3　坪井清足「黒土遺跡」『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』　1958年

1．佐藤遺跡遠景（南より）

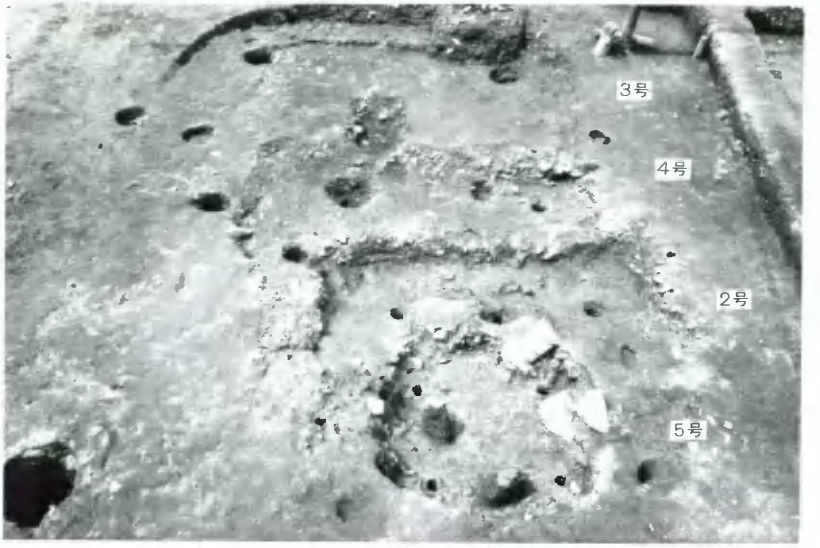
2．佐藤遺跡遠景（山根屋遺跡より）

図版２



１．１号住居址検出状態（南より）

２．１号住居址（南より）



１．２号～５号住居址（南より）

２．３号・４号住居址（南より）

図版４

１．２号・５号住居址（南より）

２．６号住居址（南より）

１．７号・８号住居址検出状態（南より）

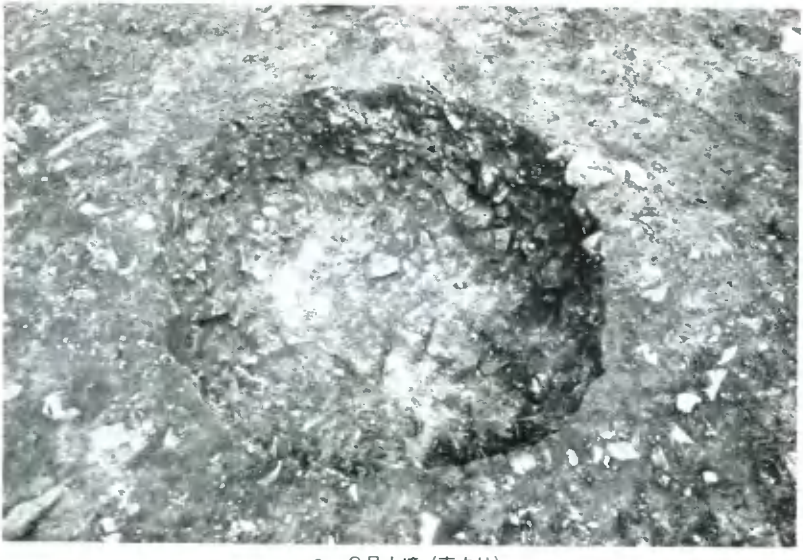
２．７号・８号住居址（東より）

図版６

１．７号・８号住居址（南より）

２．１号土壙（南より）

１．２号土壙（南より）

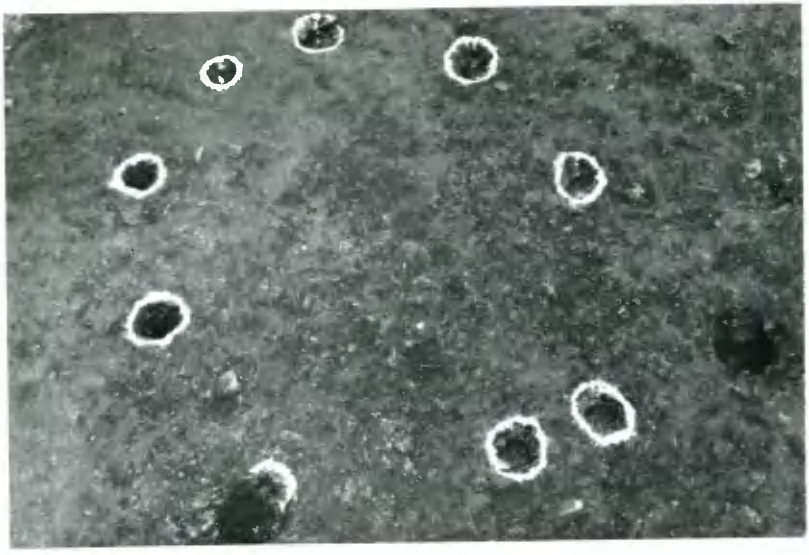


２．３号土壙（南より）

図版８

１．４号土壙（南より）

２．５号土壙（南より）

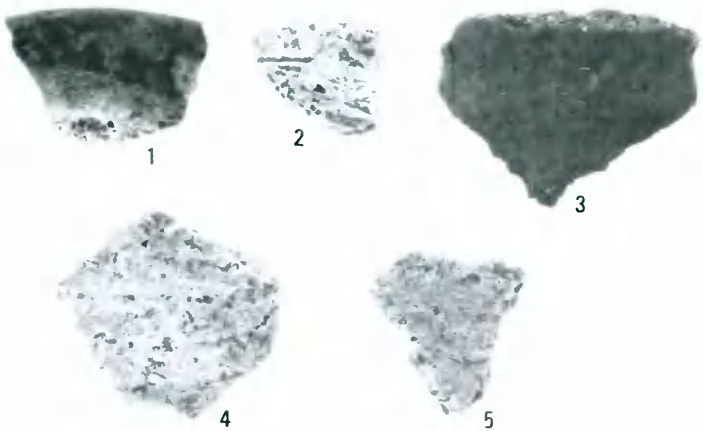


１．円形柱穴列（南より）

２．Ａ－１グリッド調査状況（南より）

図版10

1．B－2グリッド全景（西より）

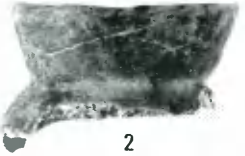


2．1号住居址出土遺物

1

7

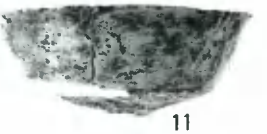
9


2

8

10

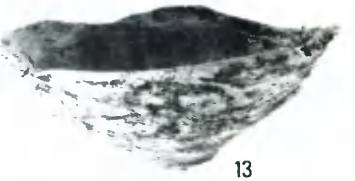
3


11

4

12

5


13

6

6号住居址出土遺物(1)

図版12

15

18

21

16

19

22

17

20

23

1．6号住居址出土遺物2

6

8

7

9

2．8号住居址出土遺物

P-1.1

P-1.3

P-1.2

P-6.1

P-6.2

P-5.1

P-5.2

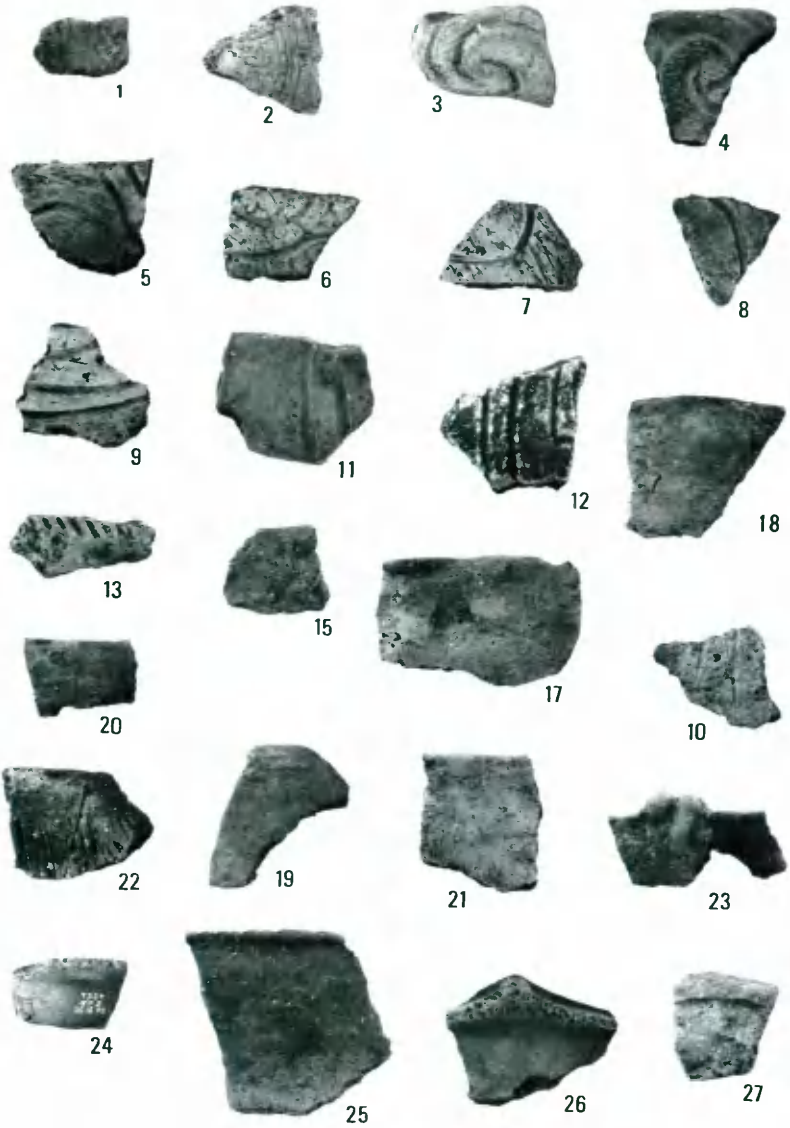
P-5.3

P-5.4

P-5.5

1．ピット出土遺物

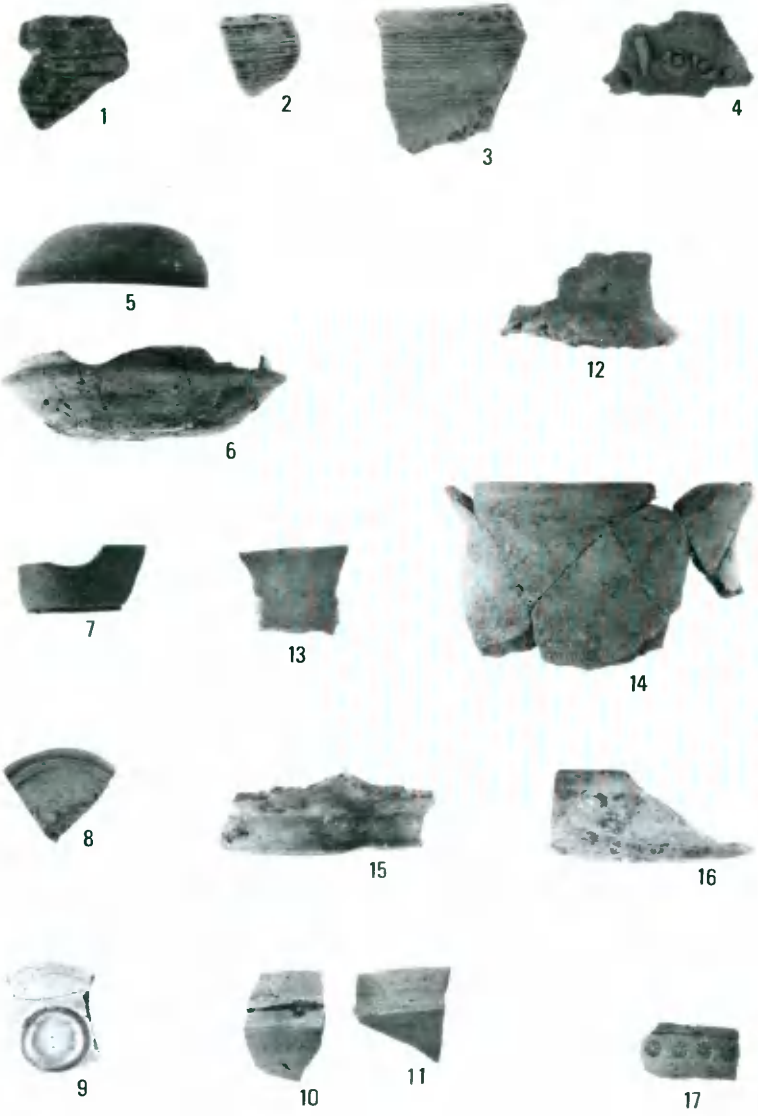
図版14



1．遺構に伴わない遺物（縄文式土器）

1．遺構に伴わない遺物（縄文式土器）

図版16



1．遺構に伴わない遺物（弥生式土器・土師器・須恵器・陶磁器）

道上（みちのうえ）遺跡（55）

例　　言

1. 本報告は，中国縦貫自動車道の建設に伴い，日本道路公団からの委託を受けて，岡山県教育委員会が緊急調査を実施した，岡山県阿哲郡哲西町大字上神代字道上に所在する道上遺跡の調査の概要である。
2. 発掘調査は昭和51年５月20日から，同年10月18日まで実施した。
3. 発掘調査は主として岡本寛久が担当し，竹田勝の補佐を受けた。
4. 報告書作成作業は，岡本が担当した。
5. 遺物・図面は岡山市西古松265，岡山県教育庁文化課分室に保管されている。
6. 遺構・遺物の実測図の縮尺は統一されていない。個々に縮尺率を表示している。
7. 遺物写真の縮尺は不統一である。
8. 遺物実測図と図版写真及び，遺構内出土状態実測図の遺物番号はすべて統一してある。
9. 図中の北方位は，第２図を除き，すべて磁北である。第２図は真北である。
10. 実測図中の高度値はすべて海抜高である。
11. 第１図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の50,000分の１地形図を複製したものである。(承認番号) 昭和53中複第29号。
12. 現地調査にあたっては，下記の作業員の方々の協力を得た。記して謝意を表します。

    男知合音一　福田　宮二　福原　　章　奈須　岩根　塚本　武志　田辺　光男　入江繁一郎
    難波　石男　奈須　真吾　野田　常吉　武坂　繁男　畑　　勇　谷本　　繁　小林　　栄
    内田　信恵　土屋　光子　千原美屋野　吉岡ふみ子　田原　毎世　木下　絹子　千原　康代
    西川マスヨ　忠田小夜子（事務担当）

13. 遺物整理ならびに，報告書作成にあたっては，文化課分室において下記の方々の協力を受けた。感謝します。

    近藤　友子　細田美代子　坪井　和江　塩見　康代

目　　次

第1章　調査の経過…… 190
第1節　遺跡の位置と環境…… 190
第2節　調査の経過…… 192
〈調査日誌抄〉…… 194
第2章　調査の概要…… 196
第1節　道上古墳…… 196
1．立地…… 196
2．外部施設…… 196
3．内部施設…… 198
4．石室床面…… 200
5．閉塞施設及び墓道…… 202
6．遺物…… 207
a．土器…… 209
b．太刀…… 218
c．刀剣…… 219
d．刀子…… 219
e．鉄鏃…… 219
f．馬具…… 220
g．装身具…… 221
第2節　石組土壙墓…… 224
1．1号石組土壙墓…… 224
2．2号石組土壙墓…… 225
3．3号石組土壙墓…… 227
4．4号石組土壙墓…… 229
5．5号石組土壙墓…… 229
6．遺物…… 230
第3節　土壇遺構…… 231

挿 図 目 次

第1図 道上遺跡位置図（S＝1/50000） …… 190
第2図 道上遺跡周辺地形図（S＝1/2000） …… 191
第3図 道上遺跡地形図及び測量用ポイント位置図（S＝1/300） …… 193
第4図 道上古墳墳丘実測図（S＝1/120） …… 195
第5図 道上古墳外護列石実測図（S＝1/50） ……196・197
第6図 道上古墳墳丘断面土層図（S＝1/60） …… 197
第7図 道上古墳横穴式石室実測図（S＝1/50） ……198・199
第8図 道上古墳石室床面遊離遺物出土状態実測図（S＝1/30） …… 199
第9図 道上古墳石室内遺物出土状態実測図（S＝1/30） …… 200
第10図 道上古墳閉塞状況実測図（S＝1/40） …… 201
第11図 道上古墳墓道及び羨道部ピット実測図（S＝1/30） …… 202
第12図 道上古墳出土遺物 須恵器（1）（S＝1/3）…… 203
第13図 道上古墳出土遺物 須恵器（2）（S＝1/3）…… 204
第14図 道上古墳出土遺物 須恵器（3）（S＝1/3）…… 205
第15図 道上古墳出土遺物 須恵器（4）（S＝1/3）…… 206
第16図 道上古墳出土遺物 須恵器（5）（S＝1/3）…… 207
第17図 道上古墳出土遺物 須恵器（6）（S＝1/3）…… 208
第18図 道上古墳出土遺物 太刀（S＝1/3） …… 218
第19図 道上古墳出土遺物 刀剣（S＝1/4） …… 219
第20図 道上古墳出土遺物 刀子（S＝1/2） …… 220
第21図 道上古墳出土遺物 鉄鏃(1)（S＝1/2） …… 221
第22図 道上古墳出土遺物 鉄鏃(2)（S＝1/2） …… 222
第23図 道上古墳出土遺物 馬具装身具（S＝1/2） …… 223
第24図 道上遺跡石組土壙墓位置図（S＝1/60） …… 224
第25図 1号石組土壙墓実測図（S＝1/30） …… 225

第26図　2号石組土壙墓実測図（S＝1/30）…… 226
第27図　2号石組土壙墓出土遺物（S＝1/3）…… 227
第28図　3号石組土壙墓実測図（S＝1/30）…… 227
第29図　4号石組土壙墓実測図（S＝1/30）…… 228
第30図　5号石組土壙墓実測図（S＝1/30）…… 230
第31図　土壇遺構出土備前焼小壷（S＝1/3）…… 232
第32図　土壇遺構出土古銭（S＝1/2）…… 232
第33図　道上遺跡土壇遺構実測図（S＝1/40）……232・233
第34図　土壇遺構出土五輪石実測図（S＝1/4）…… 233
第35図　土壇遺構出土五輪石実測図（用地外移転分）（S＝1/4）…… 234

図　版　目　次

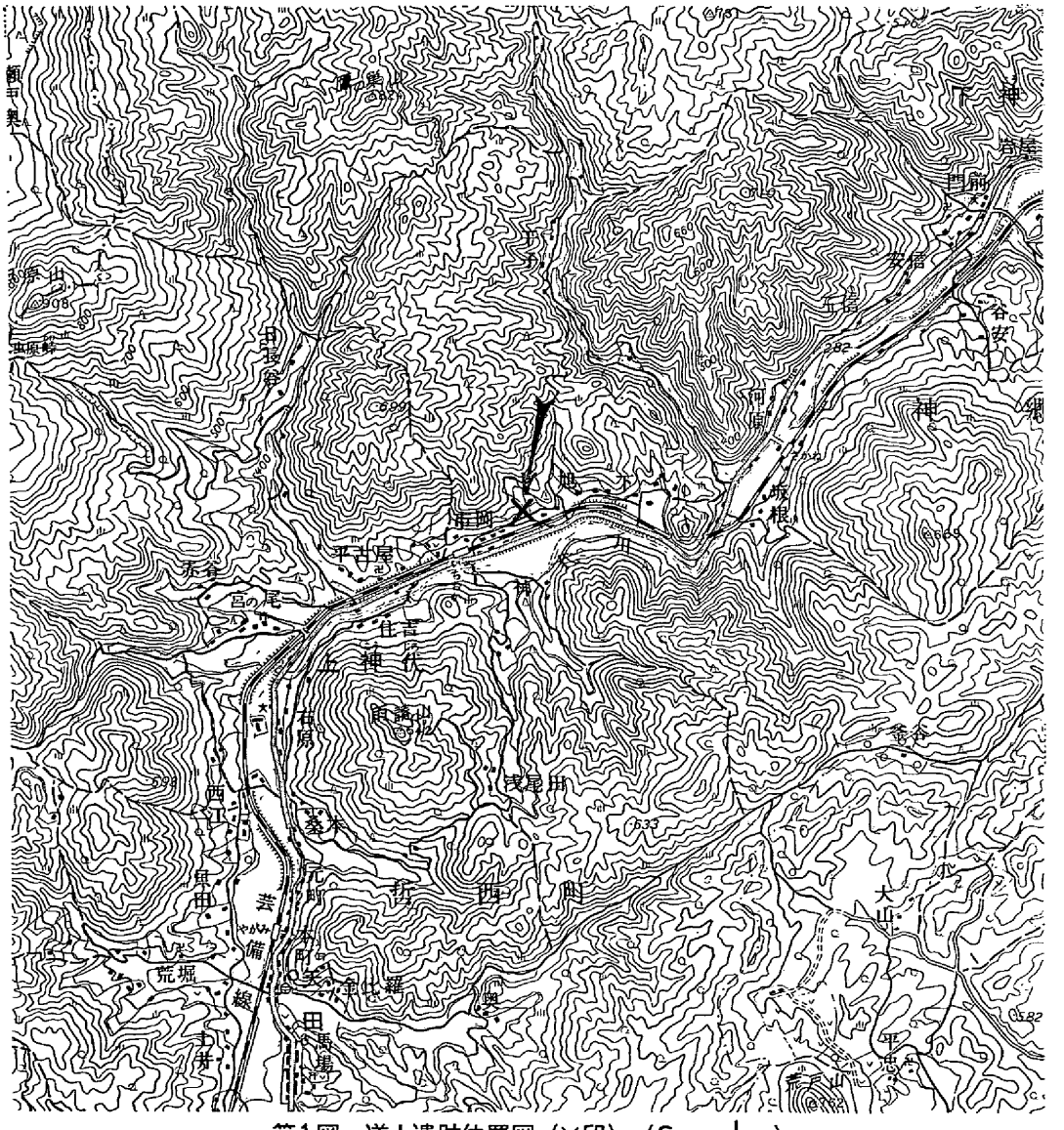
図版1－1　遺跡遠景（東　山根屋遺跡から）
　　2　遺跡遠景（南から）
図版2－1　道上古墳発掘調査前全景（西から）
　　2　同上　発掘調査後全景（北西から）
図版3－1　道上古墳　全景（南西から）
　　2　同上　外護列石（北西から）
図版4－1　道上古墳　外護列石（北東から）
　　2　同上　内側列石（北東から）
図版5－1　道上古墳　閉塞石残存状況（南西から）
　　2　道上古墳　石室内全景（北東から）
図版6－1　道上古墳　遺物出土状態（南西から）
　　2　同　上（北東から）
図版7－1　道上古墳　石室内全景（南東から）
　　2　同上　閉塞石間遺物出土状態（南西から）
図版8－1　道上古墳　閉塞石下ピット及び墓道（南西から）
　　2　同上　閉塞石下ピット（南西から）
図版9－1　道上古墳　墳丘断面（北東から）
　　同　上（北東から）

図版10—1　道上古墳　墳丘断面（北西から）
2　同上　石室掘り方
図版11—1　1号石組土壙墓全景（南東から）
2　1号石組土壙墓と2号石組土壙墓（南東から）
図版12—1　2号石組土壙墓検出状況　（南から）
2　2号石組土壙墓小礫除去後（南から）
図版13—1　2号石組土壙墓上部石組除去後（南から）
2　2号石組土壙墓墓壙完掘後　（南から）
図版14—1　4号石組土壙墓と5号石組土壙墓（南東から）
2　同　上　（東から）
図版15—1　4号石組土壙墓　（北東から）
2　4号石組土壙墓石組除去後　（南西から）
図版16—1　3号石組土壙墓　（北西から）
2　4号石組土壙墓　（南東から）
図版17—1　5号石組土壙墓　（南東から）
2　同上　完掘後　（南東から）
図版18—1　土壇遺構調査前全景（北西から）
2　同上　調査後全景（南東から）
図版19—1　土壇遺構　（南から）
2　同上　（南東から）
図版20—1　土壇遺構　（東から）
2　同上　（北東から）
図版21—1　土壇遺構　（北から）
2　同上　（北西から）
図版22　道上古墳出土須恵器
図版23　道上古墳出土須恵器
図版24　道上古墳出土須恵器
図版25　道上古墳出土須恵器
図版26　道上古墳出土須恵器
図版27　道上古墳出土遺物
図版28　道上古墳出土遺物
図版29　道上古墳出土遺物
図版30—1　2号石組土壙墓出土土器
2　土壇遺構出土遺物

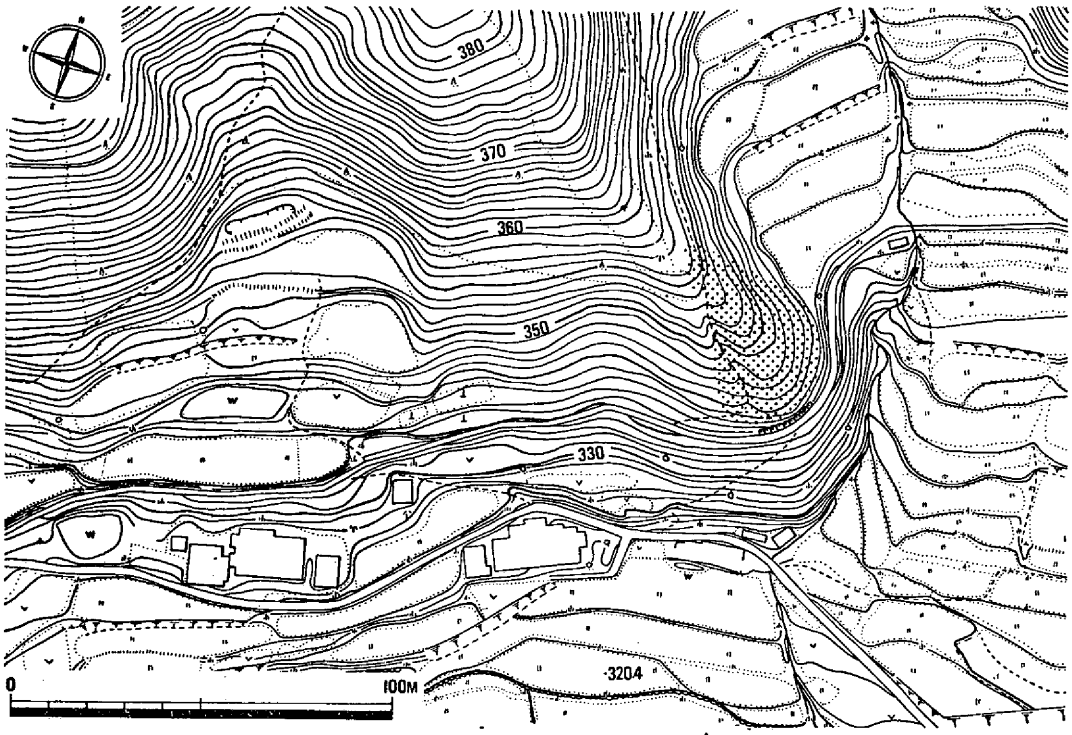
第1章 調 査 の 経 過

第1節 遺跡の位置と環境

道上遺跡は，国鉄芸備線市岡駅の北西約500mの丘陵端部に位置する。市岡駅周辺には，東西に長い河谷平野が，狭いながらも形成されており，この平野部へ，北方の中国山地から派生した，舌状の



第1図 道上遺跡位置図 (×印) (S=1/50000)



第2図　道上遺跡周辺地形図（S＝1/2000）

丘陵が幾筋か伸び出している。この丘陵尾根筋には点々と遺跡が立地しているが，道上遺跡もその一つである。

道上遺跡は丘陵の末端部に位置しており，かなりの傾斜面となっている。丘陵斜面と表現されうる地形である。道上遺跡の所在する丘陵の東はかなり深い谷になっているが，西は軽い凹凸をもつのみで，単純な，幅広い丘陵裾部に連続し，全体として幅550mに及ぶ大きな舌状丘陵を形成している。立地上からは，道上遺跡はこの大きな舌状丘陵の南東隅のわずかな突出部に位置すると考えるべきであろう。道上遺跡は海抜350m付近にあり，平野部の水田地帯との比高差は25m程度である。遺跡からの眺望は良好で，市岡付近一帯を一望することができる。

神代川流域全域での平野部のあり方を概観すれば，哲西町横田と神郷町・哲西町境の二ケ所の狭隘部で，大きく三つの地域に分割することが，地理的には可能と考えられるが，市岡の平野部は哲西町矢田を中心とする地域の北端に位置している。一つの狭隘部である町境から道上遺跡までは直線にして約1.2Kmを測る。

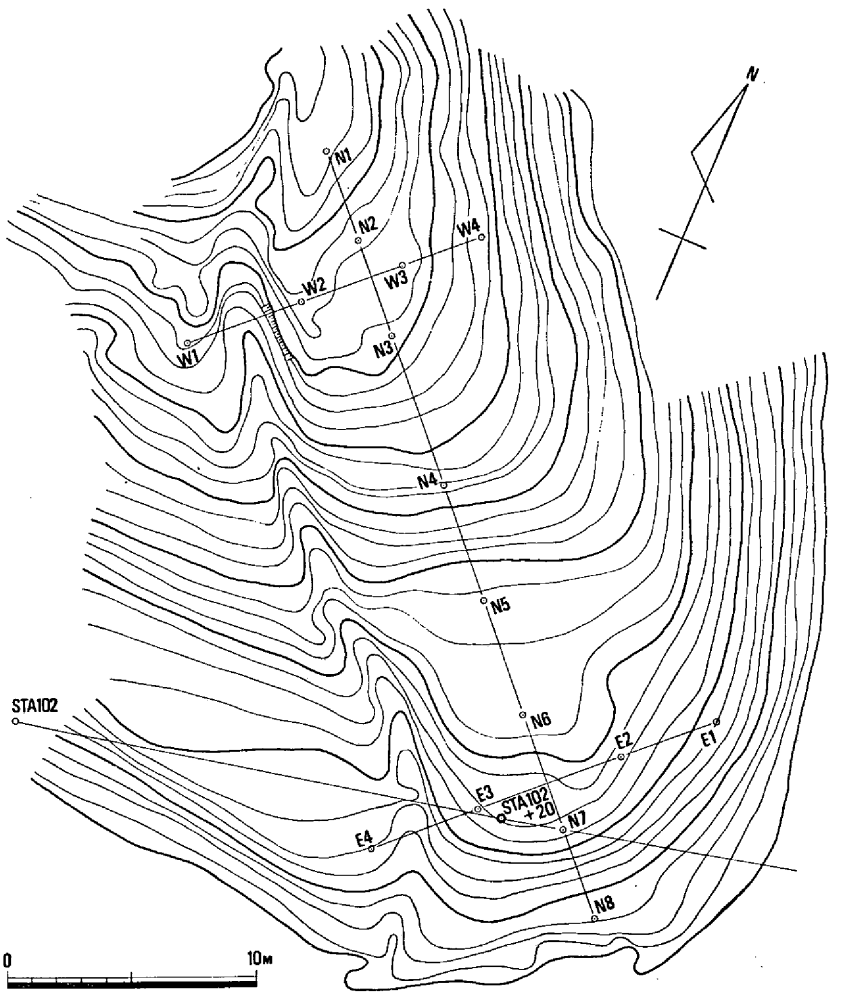
道上遺跡周辺の歴史的な環境であるが，神代川流域は岡山県北地域のなかではきわめて遺跡の密集した地域であり，市岡の平野部周辺にもかなりの遺跡がこの平野部を基盤として立地している。道上遺跡の所在する丘陵の東方に谷を隔てて山根屋遺跡の所在する丘陵があるが，その丘陵の東裾，谷の開口付近緩斜面上に位置する佐藤遺跡（註1）からは縄文時代後期の住居址や土壙が検出されている。山根屋遺跡（註2）は弥生時代の住居址群と古墳時代墳墓群との複合遺跡であり，墳墓としては，横穴

式石室を主体とする古墳が三基の他中期古墳3基，方形台状墓1基，箱式石棺墓，石蓋土壙墓，土壙墓あわせて23基が検出された。前述の佐藤遺跡では縄文時代の遺構だけではなく，古墳時代前，中期の住居址も数軒検出されており，古墳時代には，このような小集団が散在して定着していたことをうかがわせる。山根屋，佐藤の両遺跡のほか，弥生時代，古墳時代前期の遺跡は市岡の平野部では，現在知られていないが，古墳時代後期と推定される古墳はかなりみられ，数基ずつが群集して存在している。佐藤遺跡裏の丘陵裾には温光庵古墳群，山根屋遺跡の背後丘陵上には京の段古墳等数基の古墳があり，道上遺跡の所在する丘陵の西方，市岡駅周辺にもやや距離を置きながら数基の古墳が散在している。市岡の平野周辺における遺跡は，ほとんど神代川の北岸に位置しているが，南岸にも数ケ所墳丘らしい高まりが認められる所があり，古墳群の存在が想定される。古墳時代以降については，山根屋遺跡での奈良時代骨蔵器の出土をみるのみで，顕著な遺跡はない。なお，町境の城山頂上には武坂山城址がある。市岡の平野部に西隣する哲西町矢田地区は濃密な遺跡の分布状況を示すが，特に大きなものとして，野田畝遺跡（註3）の住居址群，西江遺跡（註4）の土壙墓群，そして神代川流域唯一の前方後円墳である瓢塚古墳（註5）などがある。

第2節 調 査 の 経 過

道上遺跡は，昭和51年度の発掘調査委託契約段階では予定されていなかった新発見の遺跡である。昭和51年の当初から山根屋遺跡の調査を担当していた井上 弘・竹田の両調査員は，谷を挟んで西隣する丘陵尾根筋の傾斜が不自然であることに注意をしていたが，昭和51年3月26日，現地で開催された保護対策委員会において，参加者からの指摘を受けたこともあって，昭和51年度に入り，新たに山根屋遺跡の調査担当者となった岡本と竹田の二名で，現地踏査を行った。検土杖による探査の結果，石列らしきものを検出したため小範囲の発掘を行って実見し，地形から考えて箱式石棺墓の可能性が強いと判断し，結果を文化課デスクに報告した。その後，山根屋遺跡では，工程の関係上，下半部の調査を4月中に終了させる必要があり，また，佐藤遺跡での発掘調査も同一の担当者で4月5日より開始したため，道上遺跡の件は文化課デスクと公団との協議結果を待つ形となった。

5月に入り，箱式石棺墓程度なら，山根屋遺跡の契約内で処理しうると判断し，岡本が担当して発掘調査を実施することとなった。調査にあたっては，箱式石棺墓の想定される平坦部分以外にも，尾根筋上方に五輪塔を建立した平坦部分が存在していたため，その部分も調査対象として行うこととした。5月20日より発掘調査を開始したが，新発見のため，業者による測量用の杭打ちがなされていないので，尾根筋に沿ってラインを一本設定して，ライン上に任意に杭を打ち，二ケ所の平坦部上で，このラインに直交するラインを設定し，やはり，ライン上に任意に杭を打った。(第3図)。発掘は設定したラインに沿って幅1.5mのトレンチを設け，二ケ所の平坦部では面的に拡げ，未発見の遺構の検出にも努めた。発掘開始当初にして，墳丘周囲で列石が検出され，また推定箱式石棺墓の北方にも石組遺構が発見され遺構の増加複雑化が考えられたが，5月29日になって，従来箱式石棺墓の蓋石と考えていた石列は横穴式石室の側壁上端であることが明確となり，調査期間の変更が必至となった。



第3図　道上遺跡地形図及び測量用ポイント位置図（S＝$\frac{1}{300}$）

また，石組遺構も二基の検出をみた。6月上旬に石室内の掘り上げを完了したが，石室内は撹乱をほとんど受けていない良好な状態であり，豊富な遺物の出土があり，また閉塞石も完存に近い形で残存していたため，実測にかなりの期間を要することとなった。

6月下旬に入り，五輪塔の平坦部分の全面発掘を開始したが，周囲に石積みを配した土壇がこれもかなり良好な状態で残存していることが確認された。古墳周溝の埋土に掘り込まれた石組土壙の実測後，周溝を掘り下げたところ，外護列石が検出され，これらの石積，列石の実測に更に期間を費した。

9月に入り，石組土壙のあり方から，周辺にまだ存在する可能性が考えられたため，検土杖探査を周辺一帯で行い，新たに二基の石組土壙を検出，発掘区を拡大して，検出，実測等を行った。また，この頃遺跡の隣接斜面において，業者がブルドーザーによる表土剝ぎを実施したが，その際には遺構は検出されず，道上遺跡の遺構は本報告分がすべてと考えられる。道上遺跡の調査は最終的には昭和

51年10月18日に終了した。

このように，道上遺跡の発掘は当初予想されなかった大規模な遺構が新たに検出され，さらにその構造が石を多用したものであったため実測が困難であり，大幅な期間の延長を招いた。

本報告書の作成は岡本が担当し，文化課分室にて行ったが，作成にあたっては，実測・浄写については，竹田　勝，伊藤　晃，下沢公明，柳瀬昭彦，中野雅美の文化課調査員諸氏の他，山尾真由美，浜本早苗，山本悦世，古屋野桂子，宇垣匡雅，平井典子，難波和児の諸君に，写真撮影については，伊藤　晃，井上　弘，細田美由紀，三宅靖子の諸氏にお世話になった。記して謝意を表します。

〈調査日誌抄〉

昭和52年５月20日～27日　測量抗設置・草苅り・トレンチ設定作業

29日～６月１日　表土剝ぎ。１号石組土壙墓検出。横穴式石室確認。

３日～７日　古墳石室内掘り下げ。１号石組土壙墓写真撮影・実測。

８日～15日　古墳石室内遺物出土状態・閉塞石写真撮影。１号石組土壙墓実測。２号石組土壙墓検出作業。

16日～26日　古墳石室床面遊離遺物実測，写真撮影。１号石組土壙墓実測・写真撮影。土壇遺構全面発掘開始。

29日～７月７日　古墳石室内遺物出土状態実測・写真撮影。２号石組土壙墓写真撮影。土壇遺構石積検出状況写真撮影。

８日～14日　古墳石室実測。

15日～28日　古墳閉塞石実測。

29日～８月２日　古墳羨道部墓道検出作業，墓道埋土土層図実測，閉塞石下ピット検出。２号石組土壙墓実測，写真撮影。

４日～６日　古墳石室床面断面土層図実測，墓道遺物出土状態写真撮影・実測。外護列石検出作業。２号石組土壙墓壙内掘り下げ，写真撮影。３号石組土壙墓検出，写真撮影。

10日～18日　古墳表土剝ぎ。２号石組土壙墓実測，写真撮影。３号石組土壙墓実測，写真撮影。

19日～21日　古墳石室床面下側壁実測，石室断面実測，全景写真撮影。

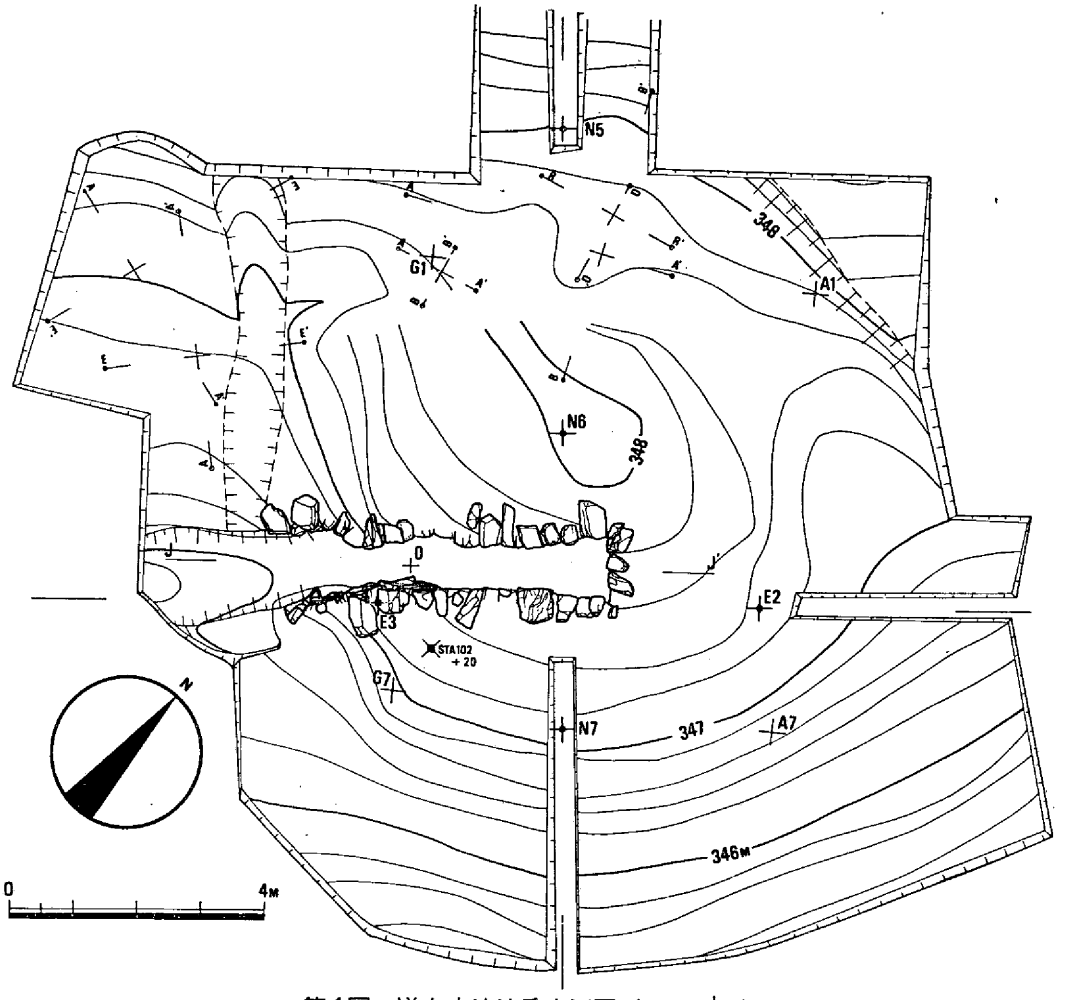
22日～27日　古墳全景写真撮影，中央畦写真撮影・実測，外護列石写真撮影。土壇遺構山側列石実測。

31日～９月４日　古墳羨道部側壁実測，墓道実測，石室断面実測，外護列石実測用割付。

５日～８日　古墳外護列石実測。４号・５号石組土壙墓写真撮影。

14日～21日　古墳外護列石実測，墳丘断面図実測

22日～29日　古墳墳丘地形実測，内側列石実測，墳丘断割，石室掘り方検出，墳丘断



第4図　道上古墳墳丘実測図（S＝1/120）

面土層写真撮影・実測。4号石組土壙墓実測。土壇遺構平坦面清掃。

10月2日～5日　古墳石室平面図実測，石室掘り方実測。

6日～15日　4号石組土壙墓写真撮影・実測。5号石組土壙墓写真撮影・実測。土壇遺構実測。

16日～18日　土壇遺構実測，断割土層図実測，遺物取り上げ。

註(1)　竹田勝「佐藤遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(23) 岡山県教育委員会1978年3月
(2)　竹田勝・岡本寛久「山根屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(22) 岡山県教育委員会1977年12月
(3)　高畑知功・福田正継「野田畝遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(21) 岡山県教育委員会1977年9月
(4)　正岡睦夫・田仲満雄・二宮治夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(20) 岡山県教育委員会1977年6月
(5)　『哲西史』哲西町1963年

第2章 調査の概要

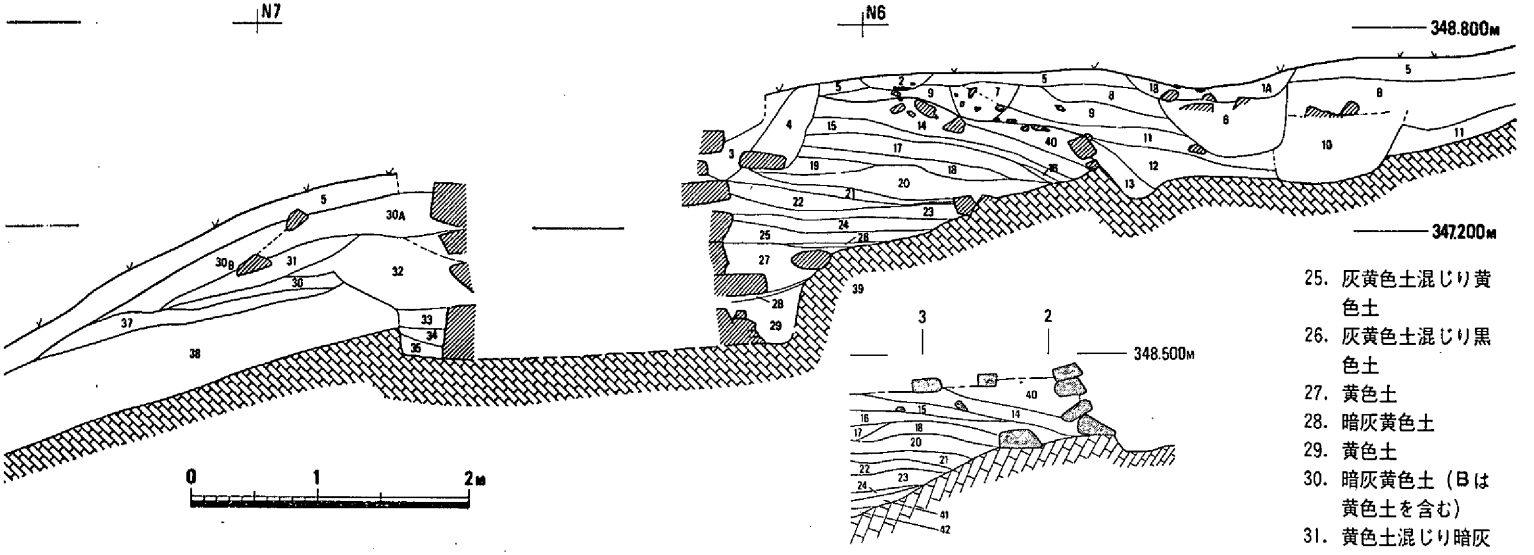
第1節 道上古墳

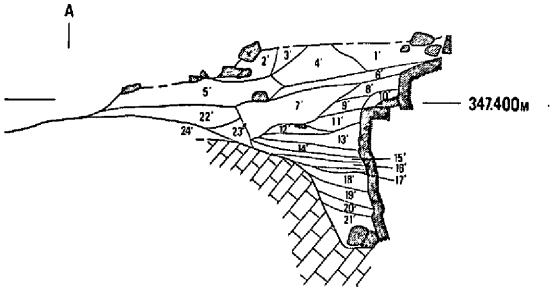
1. **立地** 道上古墳は道上遺跡の南端，丘陵尾根筋の突端に位置している。古墳の所在する地点はかなりの傾斜をもっているが，古墳から南方はより急傾斜となり，一気に平野部へ落ちていく。古墳の現状は，山側からの流土によって周溝が完全に埋没していたために，墳丘の高まりを認めることはきわめて困難であったが，本来の墳頂から山側周溝にかけて，径4m内外のかなり広い平坦面が形成されており，その地形の不自然さから，人為的な痕跡を認めることができた。墳丘の西には山道があり，これが古墳を一部削っていたが，墳頂部には，大きな撹乱の痕跡はみられず，概して保存状況は良好と判断された。しかし，古墳の東側の斜面は流土の堆積によってすでに自然な傾斜をもつまでに周溝掘削部が回復しており，西側は山道による削平を受けていたため，墳丘規模，ならびに墳形を推定することはできなかった。古墳の最高部は海抜348.5m程度で，平地との比高差は25m前後である。

2. **外部施設** 道上古墳は発掘調査の結果，山側に半円形の周溝をもち，墳端に外護列石をめぐらせた円墳であることが確認された。平坦部はこの周溝に流土が推積して形成されたものであり，墳丘は周溝に面した側でかなり良く残存していた。外護列石が有効に機能したためであろう。

墳丘は断面土層図から明らかなように，石室を挟んで，山側と谷側とでは土層状況を異にしていた。山側では同じような厚さの黄色土と黒色土の層が互層になっていたのに対し，谷側ではこのような互層はみられず，側壁の裏には黄色土が厚く充塡されていた。石室の両側の土層の相違は，おそらく石室の構築に起因するものと考えられる。墳丘の築成は石室の構築と一体のものであり，石室の構築と墳丘の築成は併行して進行したものと考えられる。したがって側壁の裏の土層状況は，石室構築に要した時間をある程度反映している可能性がある。このようなことを考慮すると，前述の土層状況の相違は，石室の北側壁と南側壁の構築の時間的な差異を示していると考えられそうである。しいていえば，南側壁の構築が先行するのではなかろうか。このような土層状況は，ひとつ道上古墳のみに止まらず，隣接する山根屋遺跡の山根屋1号墳にも観察できたことであり（註1），その際もやはり谷側が均一で，山側が互層を呈していた。この二つの類例のみで一般化するのは危険ではあるが，このような土層状況の類似は，丘陵傾斜面に位置する古墳，特に石室の主軸が等高線と平行するような古墳の築造において，一定の共通した構築技術が存在していたことを思わせる。このことから直線的に横穴式石室の構築に従事した，専業集団の存在を想定することは飛躍に過ぎるであろうが，このような土層状況の二古墳間における類似は注意されてしかるべきである。なお，土層図からすでに明らかなとおり，道上古墳の墳丘は，旧地表をかなり削平した後，新たに築成されている。この削平は，表土である黒色粘質土を除去することが目的であると考えられる。

第5図　道上古墳外護列石実測図（S＝$\frac{1}{50}$）





1. 灰茶褐色土
（Bはより粘質）
2. 灰茶褐色土
3. 暗灰褐色土
4. 暗灰黄色土
5. 灰茶色土
6. 暗灰茶色土
7. 暗灰色土
8. 暗灰茶色土混じり黒色土
9. 灰茶色土
10. 灰黒色土
11. 暗灰黄色土（小石粒多し）
12. 明灰黄色土（小石粒大量）
13. 灰黒色土（小石粒多し）
14. 黒色土
15. 暗灰黄色土混じり黄色土
16. 黄色土混じり黒色土
17. 黄色土混じり暗灰黄色土
18. 黄色土混じり灰黄色土
19. 暗灰黄色土混じり黄色土
20. 黒色土
21. 黄色土
22. 暗灰黄色土混じり黒色土
23. 黄色土混じり暗灰黄色土
24. 暗灰黄色土混じり黒色土
25. 灰黄色土混じり黄色土
26. 灰黄色土混じり黒色土
27. 黄色土
28. 暗灰黄色土
29. 黄色土
30. 暗灰黄色土（Bは黄色土を含む）
31. 黄色土混じり暗灰黄色土
32. 黄色土
33. 黒色土
34. 黄色土混じり暗灰黄色土
35. 黄色土
36. 黒色土混じり暗灰黄色土
37. 暗灰黄色土混じり黒色土
38. 黒色土
39. 黄色土
40. 黄褐色土混じり暗灰黄色土
41. 黒色土混じり灰黄色土
42. 黒色土混じり黄色土

1'. 暗灰褐色土
2'. 〃
3'. 暗灰黄色土混じり暗灰褐色土
4'. 黄色土・黒色土混じり暗灰褐色土
5'. 黒色土
6'. 暗灰褐色土混じり灰黄色土
7'. 暗灰黄色土混じり暗灰褐色土
8'. 黄色土混じり灰黄色土
9'. 黒色土
10'. 暗灰褐色土
11'. 灰黄色土混じり黄色土
12'. 黒色土混じり暗灰黄色土
13'. 暗灰黄色土混じり黄色土
14'. 黒色土
15'. 黄色土混じり暗灰黄色土
16'. 黒色土混じり暗灰黄色土
17'. 黄色土
18'. 黒色土混じり暗灰黄色土
19'. 黒色土混じり黄色土
20'. 黒色土混じり暗灰黄色土
21'. 黄色土
22'. 暗灰黄色土混じり黒色土
23'. 黒色土
24'. 灰黄色土

第6図　道上古墳墳丘断面土層図（S＝1/60）　上：Nライン　下右：Fライン　下左：5ライン

この土は水にもろいため，削平することなく石室を構築した場合には，石室の崩壊の恐れがあると判断されたためであろう。したがって，墳丘断面土層図の地山岩盤の上面の線はわずかな削平を受けているだけで，本来の傾斜をかなり残している。石室は，この削平によって形成されたごく浅い皿状の凹部の中心より少し南（谷側）にずれて，一段深く穿たれた墓壙内に構築されている。

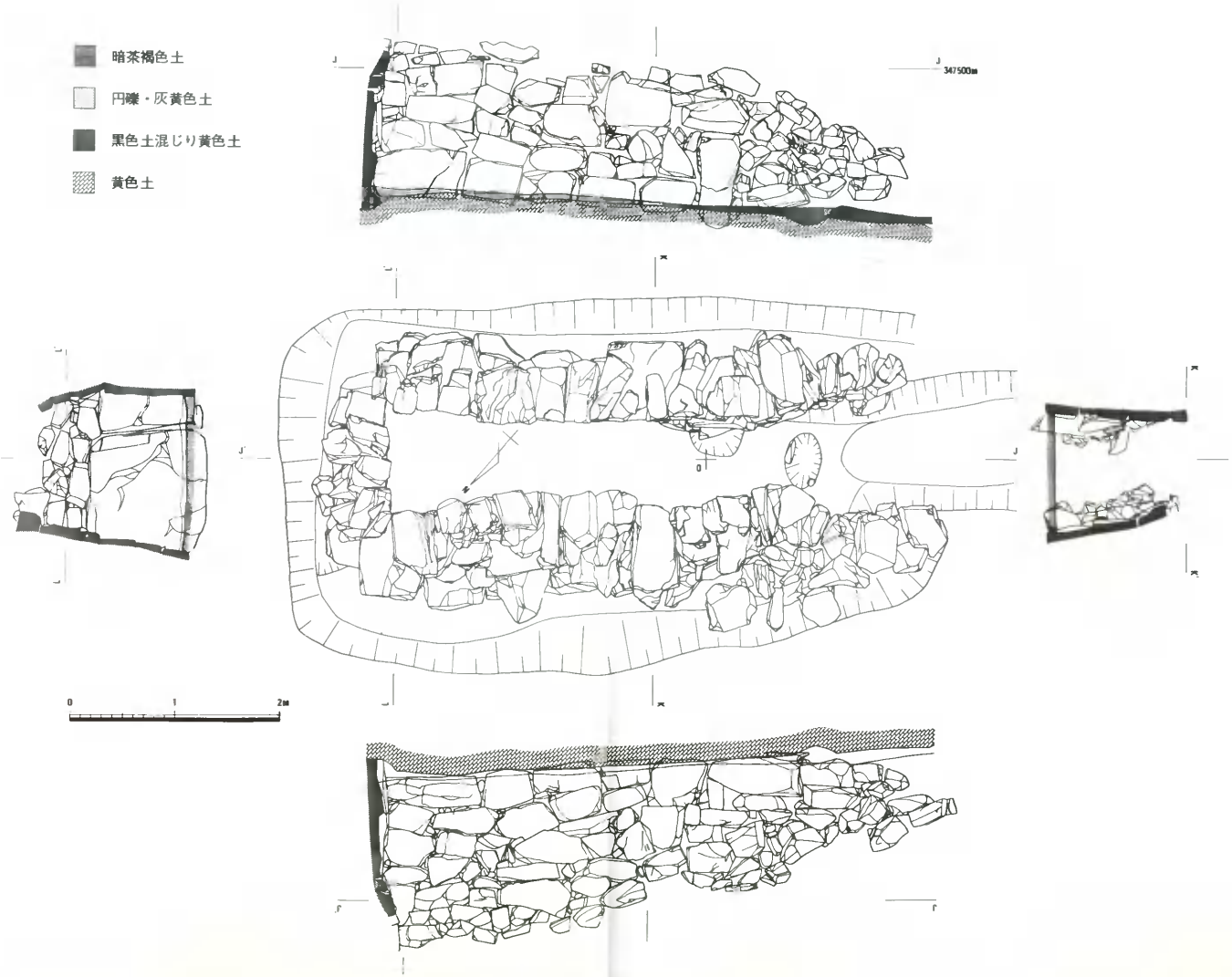
道上古墳は墳丘の裾部に外護列石をめぐらせており，このことが，当古墳の大きな特徴となっている。外護列石をめぐらせた古墳は，神代川流域では，現在のところ寡聞にしてその存在を知らない。隣接地域では，新見市西方の横見1号墳にその類例をみる（註2）。道上古墳の外護列石は，第5図から明らかなように二重に石室を取りまいている。石室南側の石列は内側の列石と考えられ，外側の列石は傾斜面のため転落したものであろう。墳丘外南斜面で二・三のかなり大きな石が検出されたが，あるいはこれらが，外護列石として使用されていたものかもしれない。外側の列石はほぼ円形にめぐるが，内側の列石は，石室の南側と北側とでは直線的に石室主軸と平行してならぶ。本来の意味からすれば，内側の列石は外護列石と呼ぶべきではないと考えられるが，機能的には同様のものと推察される。外護列石の残存状況は，周溝に面した北側がきわめて良好であった。基底部には長径40～50cm，なかには80cmもの大石を据え，その上に，二・三段程度の石を積む。石積みの高さは現存で60～70cmを測り，石室の上端とほぼ等しい高度にある。石積みの傾斜はかなり急であるが，垂直にはならず，80° 位の角度で墳丘側へ傾いている。外側の列石は墳丘築成当時，古墳の表面に露出していたことが，墳丘断面の土層観察から認められる。内側の列石はその位置・高度から判断して，本来は墳丘内部に埋もれていたものである。

外護列石の構築について考えるため，Fラインと5ラインを切断し，土層を観察した。その結果，内側と外側の列石とでは，内側の列石が先に置かれ，その後，墳丘を最終的に盛り上げる段階で外護列石が積み上げられたものと判断される。外護列石については，墳丘の規格を決定すること，封土の流失防止の二つの機能が考えられるが，内側の列石については，その機能が必ずしも明確にされたとはいえない。5ラインの断面から考えれば，封土流失防止の機能をもっていたようにも考えられるが，本来，墳丘内に埋没しているものであることから，むしろ墳形規格の面から捉えられるかもしれない。いずれにしても，その機能は明瞭とはいえない。

道上古墳は丘陵の山側を削り，三日月状に周溝を設けている。この周溝は墳丘外かなり上方から旧表土の黒色粘質土を削った後，幅3m以上で地山岩盤を浅く削り，墳端付近では幅60cm，深さ15cm程度の細溝を，さらに一段穿ったものである。この種の傾斜面に構築された古墳の場合は，その視覚的な均斉さを保つためには必然的に山側を削平することになる。これが周溝の一つの存在意義であろう。道上古墳の周溝の場合，墳端にさらに一段深い溝があることから，文字通り，排水機能をも考慮されていた可能性がある。

道上古墳の墳形ならびに墳丘規模は外護列石から推定することができる。墳形は円墳であり，規模は直径約8.5mと推定される。

3. **内部施設** 道上古墳は横穴式石室を内部主体としてもつ。原位置からずれてはいたが，天井石が二枚残存しており，石室の残存状況はきわめて良かった。天井石を欠くのみで，側壁・奥壁はほぼ

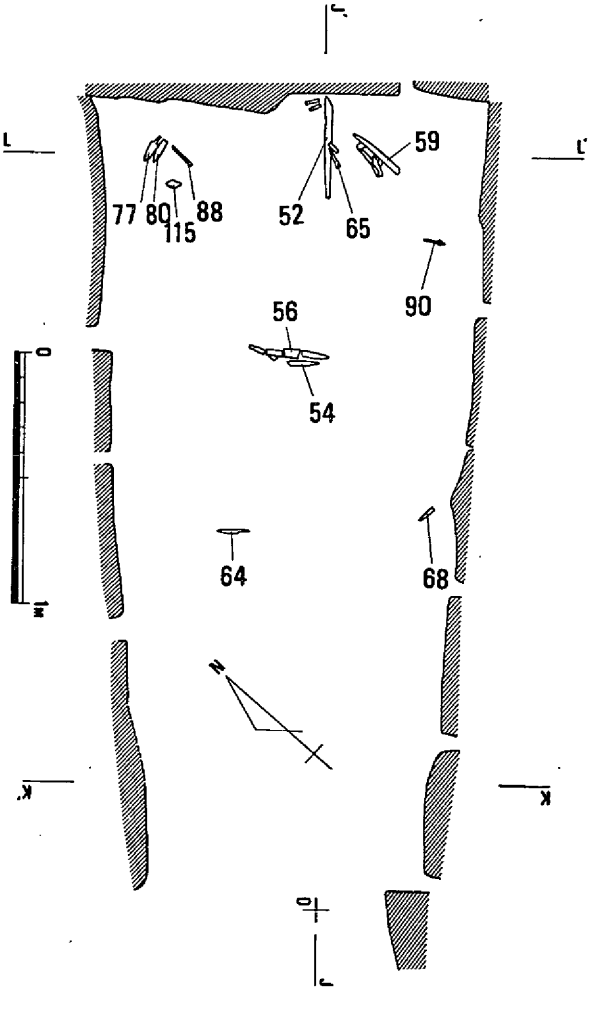


第7図　道上古墳横穴式石室実測図（S＝$\frac{1}{50}$）

完存と考えてよい。石室の石材には大きな角礫を使用しており，側壁の構築にあたっては，基底では広口面を室内に向けて立て，それより上方では横口積みと小口積みの併用がみられるが，小口積みの方がより一般的である。側壁の最上段には，長径30～40cmの少し小さな石を多用して小口積みにしてあった。奥壁は一枚石ではなく，奥壁幅の5分の4程度の扁平な大石に，もう一枚細長い石を継ぎたした二枚からなっており，この二枚の石の上に，やや小さな石を小口積みにしていた。

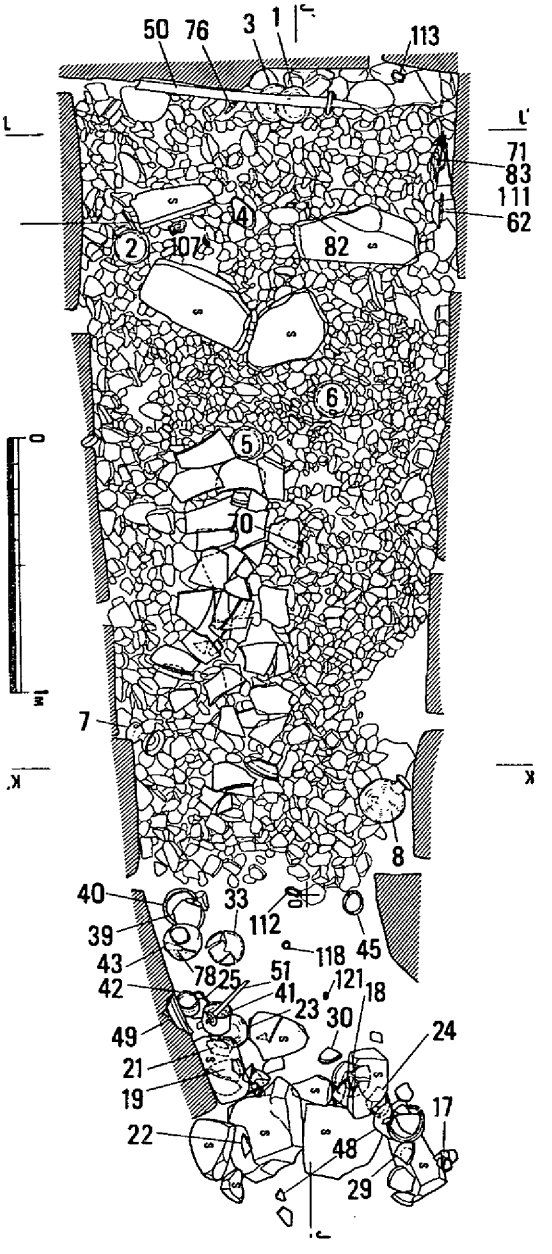
道上古墳の石室の特徴は，南側壁にみられる細長い立石にある。この立石のみ側壁面から突出しており，また，この立石を境として奥部と前部では側壁の構築が極端に相違していることから，これに玄室と羨道との境界石の役割を持たせたものと判断される。このような立石は，石室の形態の系譜の上からは，山根屋1号墳（註1）の横穴式石室に連なるものと考える。山根屋1号墳石室の袖部を形成していた細長い石が，側壁内に組み入れられたものが，道上古墳石室の立石と推定される。他に類例として神郷町塚谷1号墳がある（註3）。

もう一つの特徴として，玄室と羨道部の側壁構築の相違がある。南側壁では，前述したように，立石を境として相違がみられるが，北側壁でも，南側壁とほぼ対応する位置で相違がみられる。しかし，南側壁ほどの差ではなく，また，玄室側と羨道側の構築は一時に連続してなされたように，石の重なりからは推測される。このような構築の類例もやはり山根屋1号墳にみられる。山根屋1号墳の場合，この相違は閉塞石との関連で捉えることができたが，道上古墳の場合も，閉塞石が立石の西端付近から積まれているため，このような点を考慮すべきであろう。しかし，羨道部側壁の構築と閉塞石の積み上げとの時間的な関連については，それを明確にする資料に欠ける。閉塞石を除去しても羨道部側壁は，不安定ではあっても崩壊することはない。



第8図　道上古墳石室床面遊離遺物出土状態実測図（S＝1/30）

道上古墳の横穴式石室は無袖式で

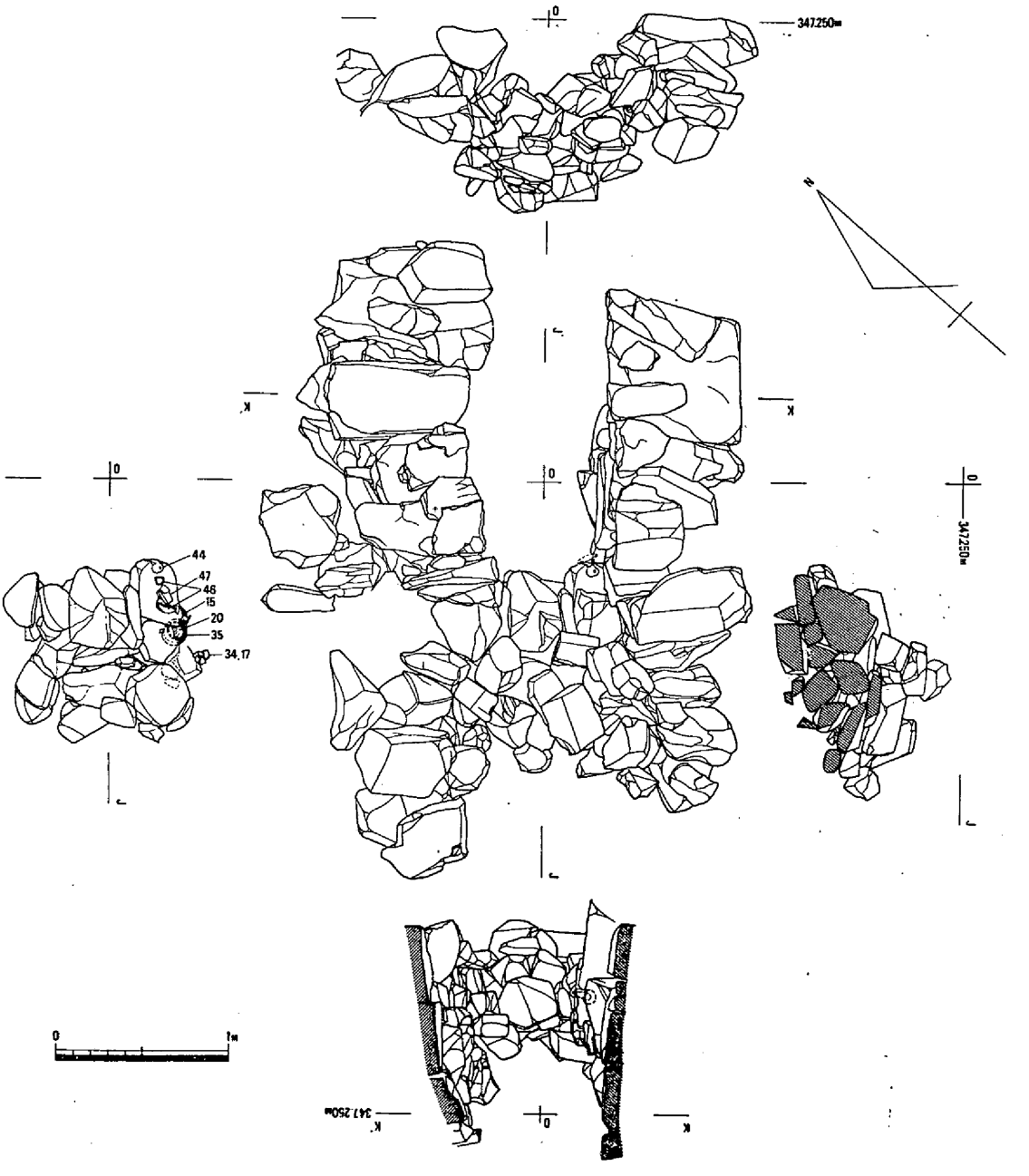


第9図　道上古墳石室内遺物出土状態実測図（S＝1/30）

あり，現存長5.5m，玄室長3.2m，玄室最大幅（奥壁）1.5m，羨道長2.3m，最大高（床面から）1.6mを測る。玄室の平面プランは羨道部へ向かって幅を減じていく，ややいびつな方形をもち，北側壁はかすかに内彎している。羨道部は開口部に向かって「八」の字に開く。

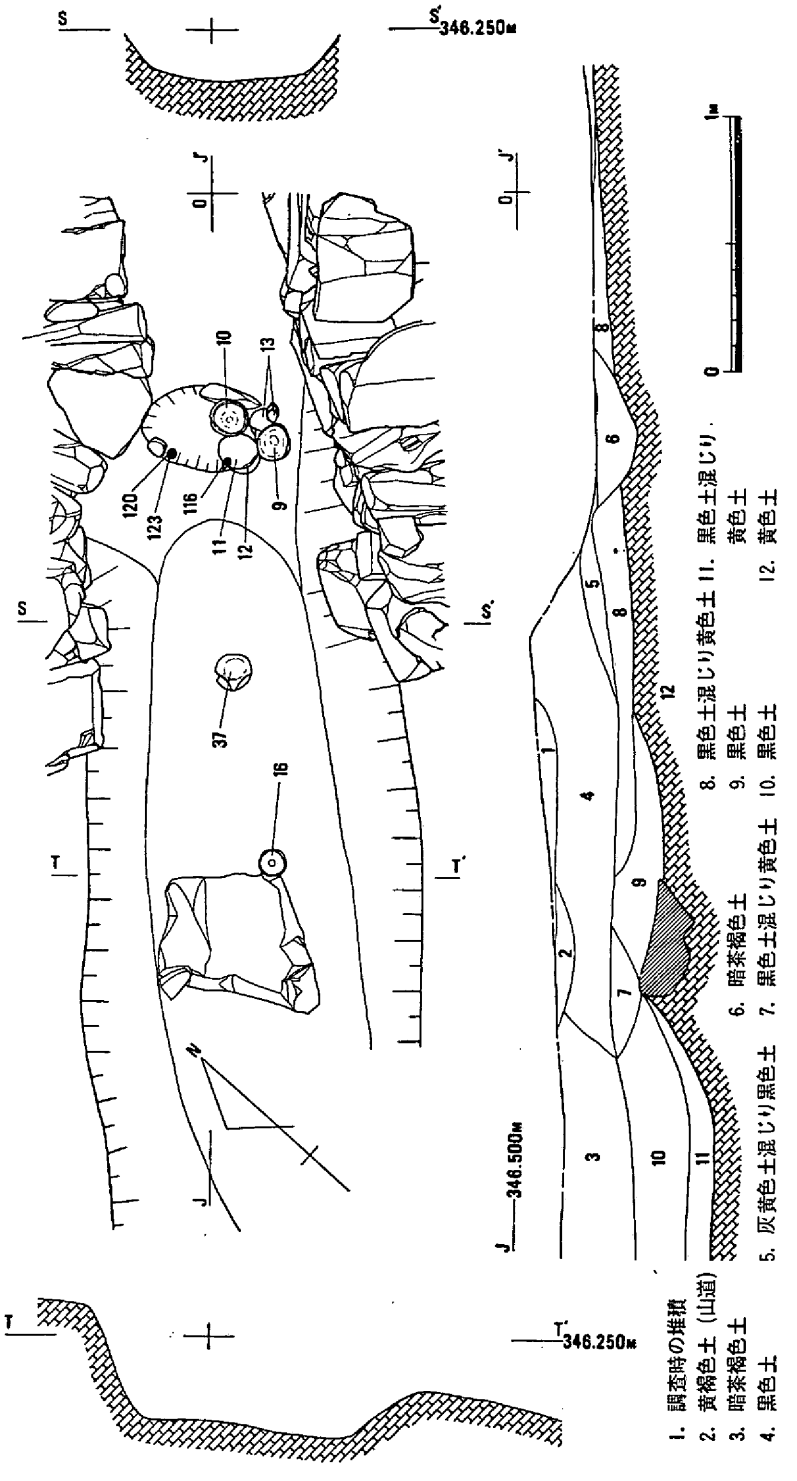
石室の掘り方は，石室平面プランと相似形であり，長さ6.5m，幅3.6m，深さ0.6mを測る。石室は掘り方の中央よりはやや南に偏して構築されている。掘り方の南壁の上半は黒色粘質土からなっている。

4. **石室床面**　石室の床面は天井石の欠除にもかかわらず，ほとんど撹乱を受けていない状態で検出することができた。玄室一面には玉砂利が敷きつめられており，多量の遺物が原位置を保って出土した。玄室の奥部には棺台に使用されたとみられる扁平な長径30～50cmの石が四個残存しており，また石室中央には，ちょうど一個体分の中形甕の破砕片を敷きつめた遺体安置のための施設がみられた。遺物は石室内の各所から検出されたが，大きくみれば，棺台周辺，敷甕周辺，玄門付近の三カ所に集中している。棺台周辺と敷甕周辺の遺物については，それぞれの遺体埋葬に伴う副葬品と解することができる。玄門付近の遺物については，一括品の中の甕口縁部破片が，敷甕と同一個体のものであることからすれば，敷甕の遺体埋葬に伴う副葬品とすることができる。遺物のなかで特に注意を引いたものに，玄門付近で北側壁に立てかけた状態で出土した太刀がある（図版6）。このような類例はあまり聞かないが，この太刀に込められた送葬者の意識は考慮すべきである。また南側壁際，奥壁に近い所からは，鉄器が一括して出土している。下に鉄鏃の束があり，その上に馬具類が置かれていた。鉄鏃は木質の残存から判断して，矢柄に装着されていたとみられ，矢を束ねた状態で側壁に沿わせて副葬したのであろう。



第10図　道上古墳閉塞状況実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

石室床面における状況は前述のとおりであったが，石室の掘り下げ途中，床面から20cmほど上方で鉄器がかなりの点数出土した（第８図）。玄室奥半分に集中していることや，10cm程度の範囲内で高度が揃うこと，鉄器出土面を境にして埋土が異なることから，第二次の床面ではないかと思われたが，一方，鉄器の方向に統一性がなく，また土器類をみないこと，埋土中から鉄器破片が出土すること等もあるため，断定することはさし控えたい。

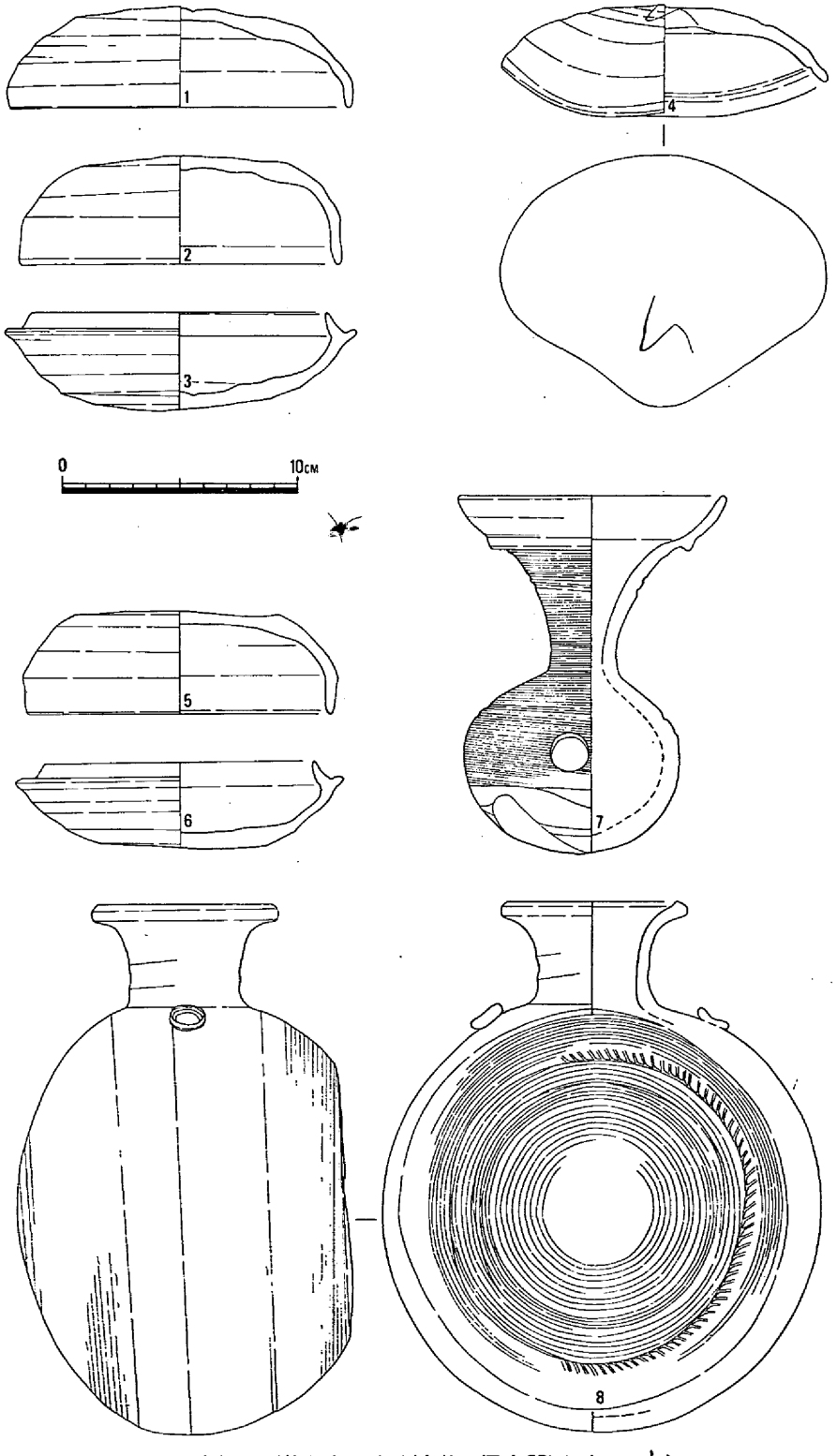


第11図　道上古墳墓道及び羨道部ピット実測図（S＝1/30）

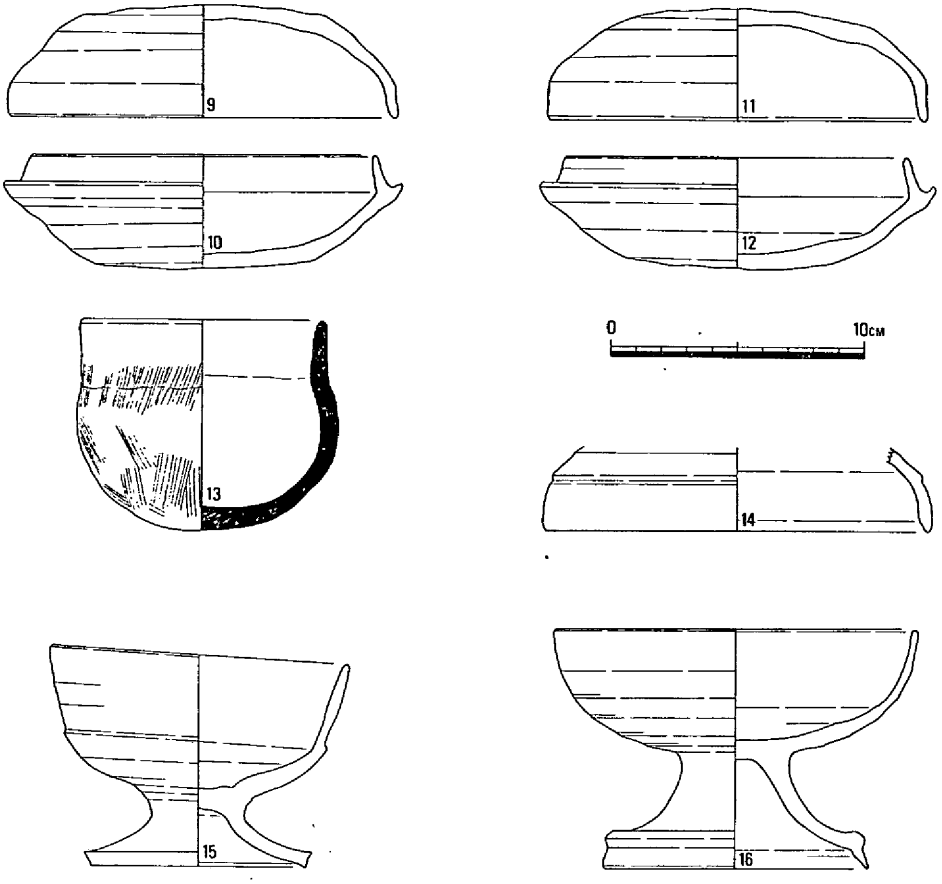
5. 閉塞施設及び墓道

道上古墳の閉塞石残存状況はかなり良好なものであった。閉塞石は一時に積み上げられたものである。石材は長径30～40cmのやや角のとれた山石を使用し，高さ70～80cmにまで積んでいる。閉塞石の間や下からはかなりの数の須恵器片が出土した。このうち，閉塞石の下，あるいは一段目の石の上で検出されたもの（第9図）については，追葬の際，閉塞石を構築する以前に，玄室内から掻き出されたものと考えられるが，それより上方の，南側壁際の小さな棚状に突き出た石の上で検出されたもの（第10図）については，閉塞石の構築と併行して副葬されたものと判断される。

羨道部から南西方向へ向かって，地山を掘穿して形成された墓道が伸びているのが検出された。墓道は底が平坦な溝状を呈しており，検出上端幅は約



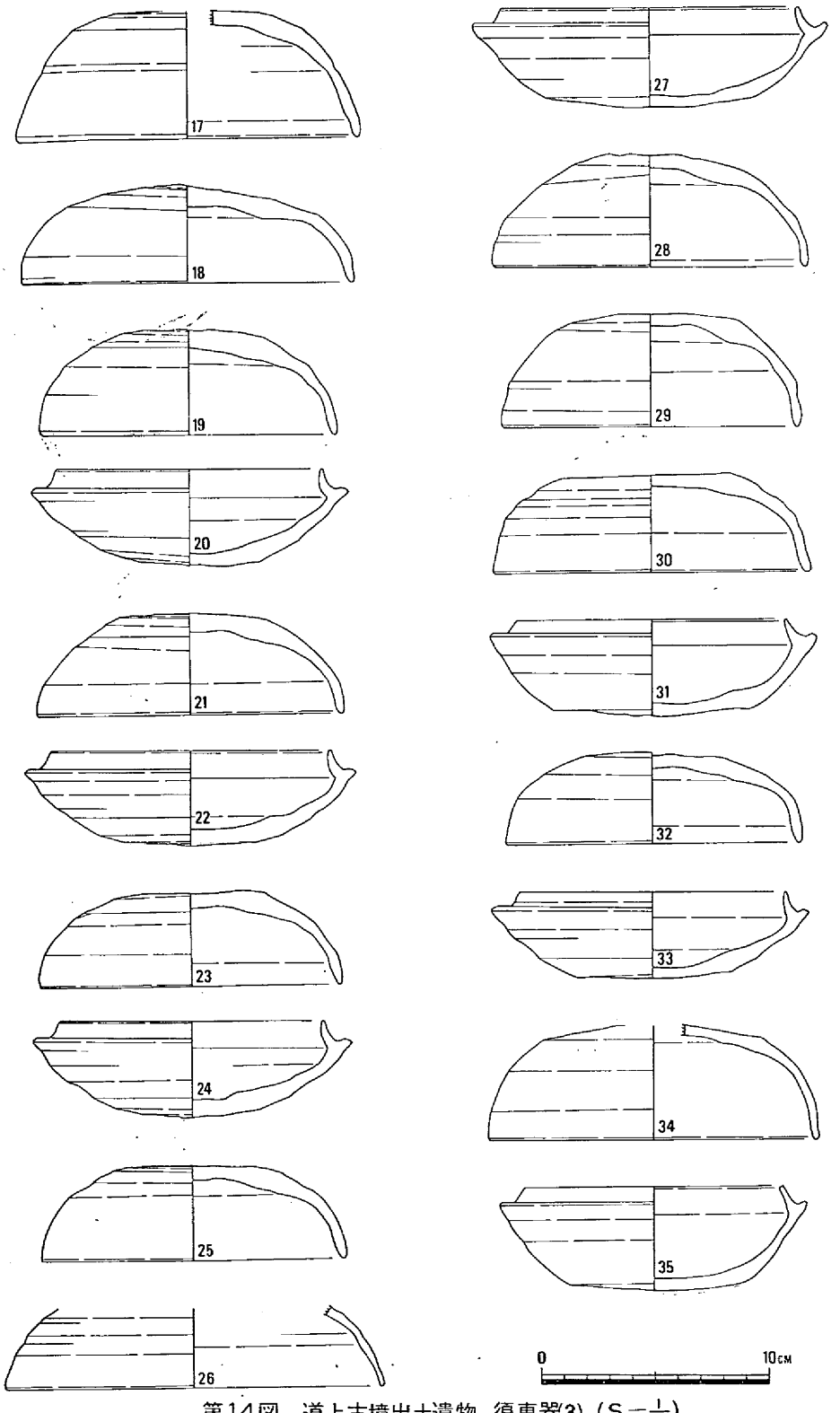
第12図 道上古墳出土遺物 須恵器(1) (S=1/3)



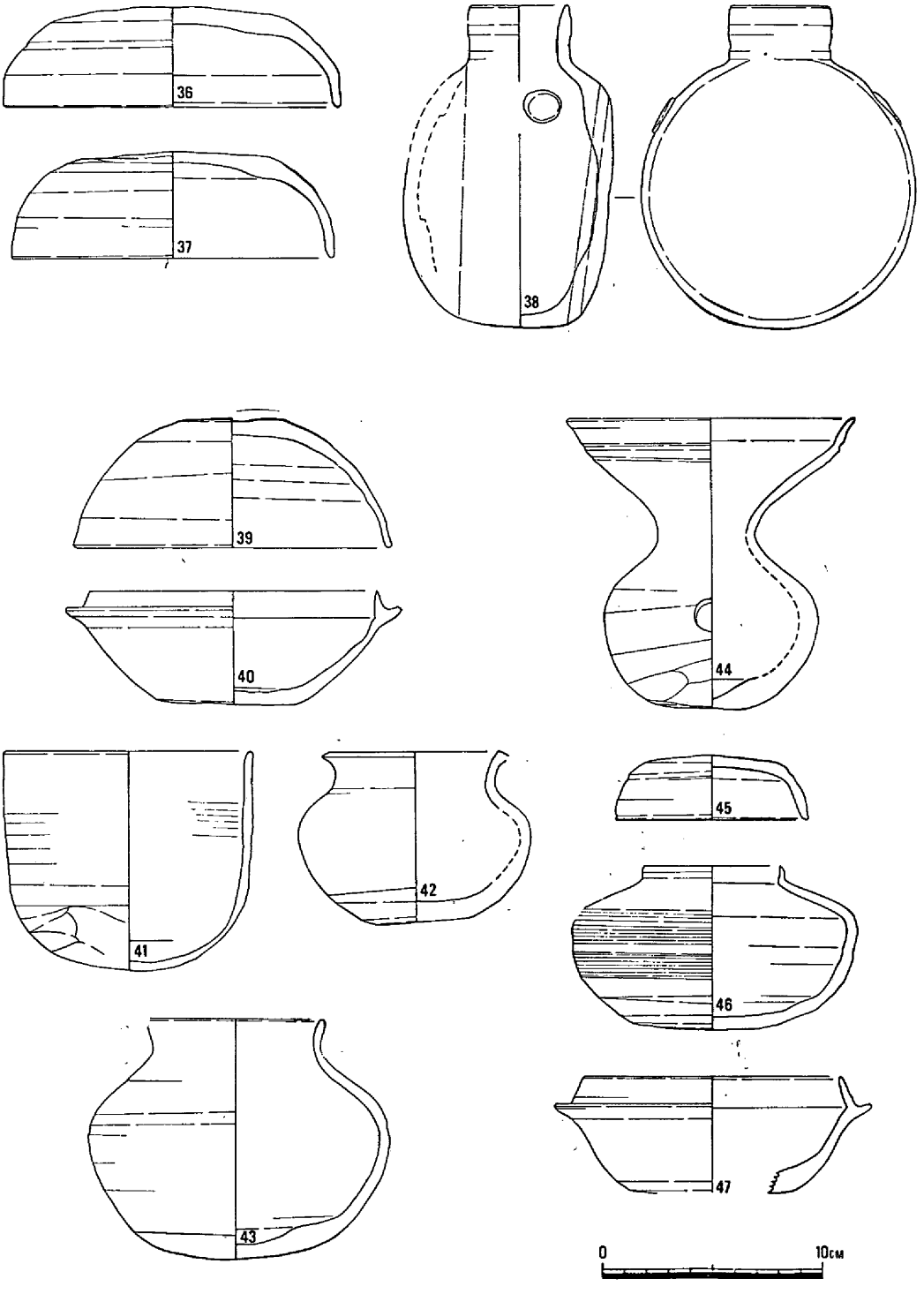
第13図 道上古墳出土遺物 須恵器(2) (S＝$\frac{1}{3}$) (13は土師器)

1·4m，道幅は1m程度を測る。墓道は石室主軸に沿って3m程南西へ直線的に続いた後，南方向へ彎曲していくようである。墓道の埋土は大きく二層に分けることができる。上層は第11図2～4，下層は同図5・7～11である。4の土は閉塞石を埋めていた土であり，閉塞石を積み上げた後，羨道部を完全に密閉するために盛られた土であろう。第11図に図示した墓道中出土須恵器16・37は共に墓道埋土4の層に包含されていたものである。

閉塞石を除去した後，石室内を地山まで下げたところ，閉塞石のちょうど真下に完形の須恵器蓋杯二セットと土師器坩一点の出土をみ，その部分に35×55cmの長楕円形のピットが検出された。深さは検出面から20cm弱であったが，遺物はピットの南半に集中し，半分はピットの肩部にのっていた。出土した須恵器はきわめて丁寧に仕上げられたものであり，神代川流域出土の須恵器の中では一級品である。このような遺物をもったこのピットの性格は送葬儀礼に伴うものと考えられそうであり，羨道部の閉塞に先立つ墓前祭的なものではないかと想像する。このピットと閉塞石の間には第11図5の層がみられ，ピットがこの層を切り込んでいないと観察されることから，ピットと閉塞石とは直接的にはつながらない。しかし，5の土が，閉塞石の投入に先立って，ピットを埋める土



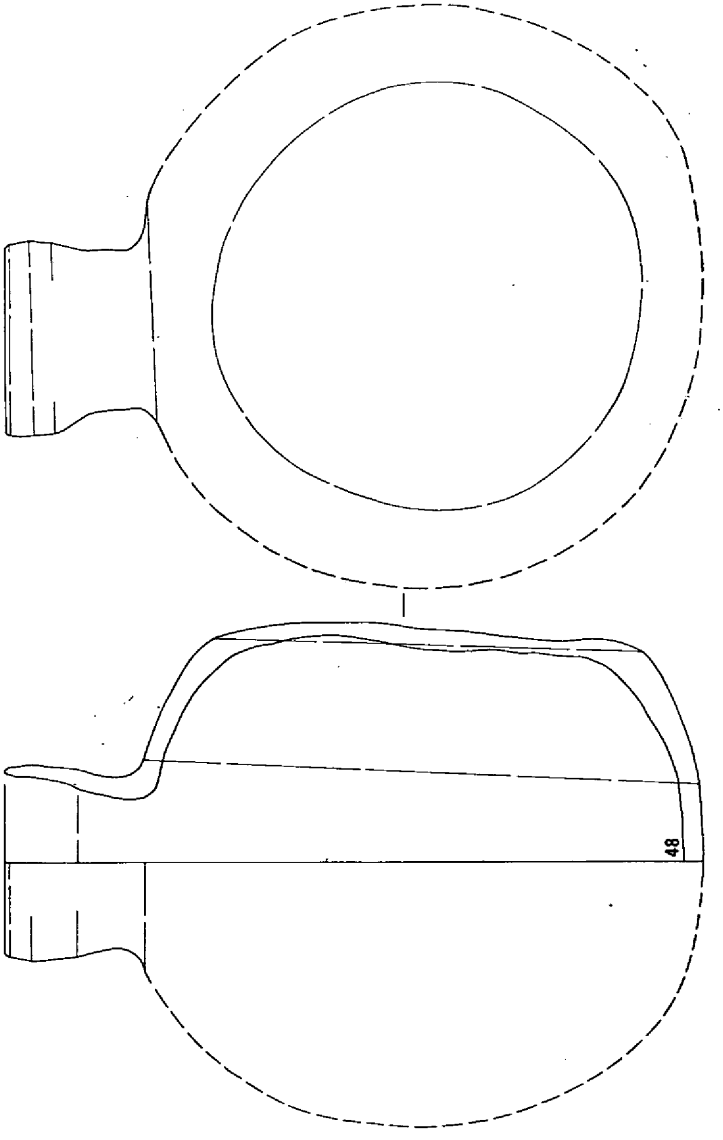
第14図 道上古墳出土遺物 須恵器(3) (S.=$\frac{1}{3}$)



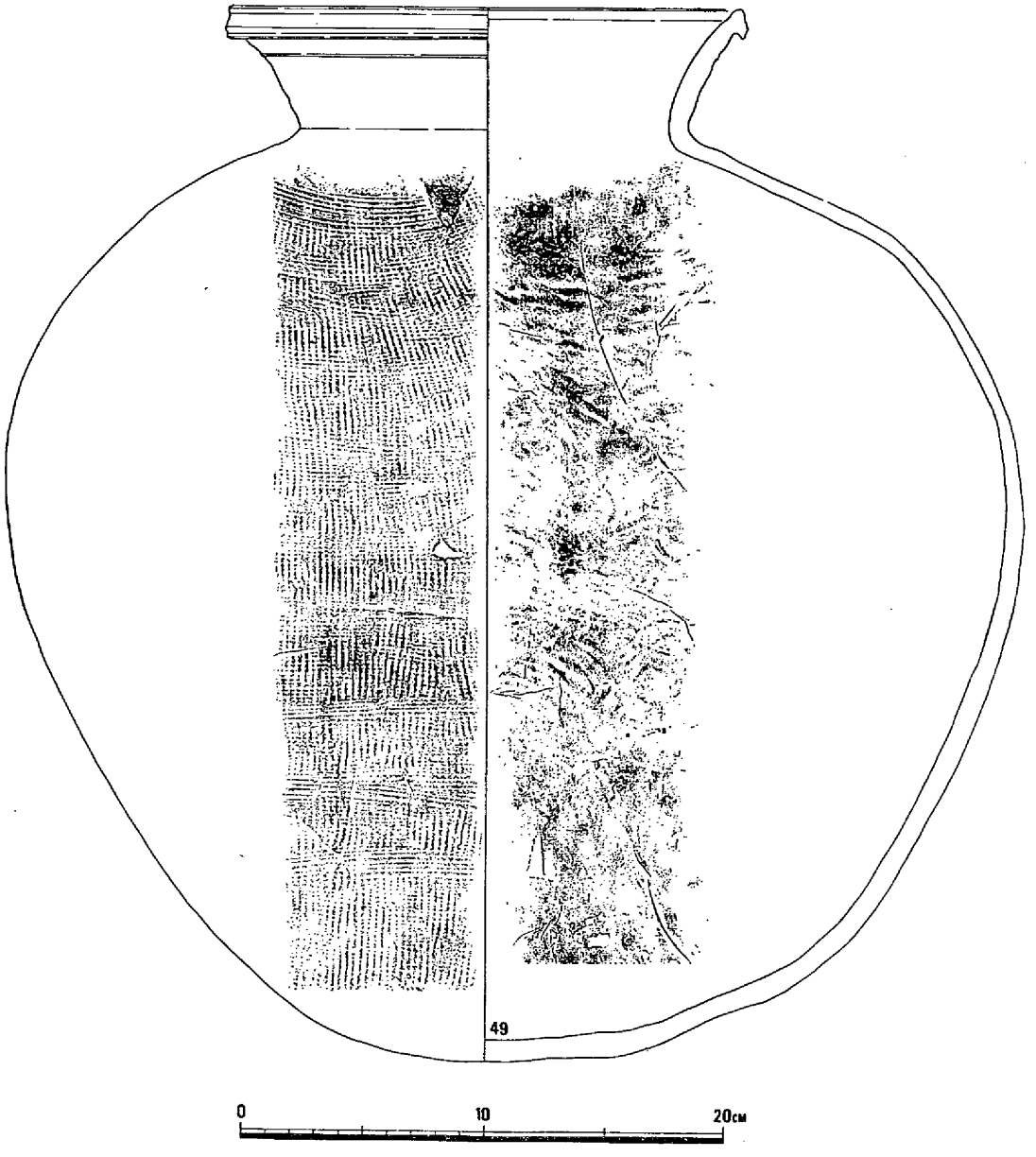
第15図 道上古墳出土遺物 須恵器(4) (S=1/3)

であったと解すれば，ピットと閉塞石はきわめて近接した時間的な連続性をもち，同一時期の所産と考えることができる。ところが，閉塞石の下端の線は第11図の一点さ線のように，開口部へ向かってむしろ上がっていくことから，ピットと閉塞石それぞれが関係した埋葬は異なるものと判断される。

6. **遺物** 道上古墳から出土した遺物はかなりの量にのぼり，鉄器については完全な整理を完了していない。遺物の種類は須恵器・土師器の土器，鉄器の武器・工具・馬具そして金環・玉類の装身具がある。



第16図 道上古墳出土遺物 須恵器(5) (S=1/3)



第17図 道上古墳出土遺物 須恵器(6) (S=1/3)

a．**土器** 道上古墳から出土した土器は，須恵器・土師器が図示しうるもの49点の他，図示しえなかったが，無文と叩目文の二種の師楽式土器片や弥生式土器が若干ある。

古墳に直接関係する須恵器は，その出土位置からいくつかのグループにまとめることができる。実測図の配置においてそれを示しているが，1．玄室棺台周辺（1～4） 2．玄室敷甕周辺（5～8） 3．閉塞石下ピット一括（9～13） 4．閉塞石下・閉塞石間（15～35・48） 5．墓道埋土中（36～38） 6．玄門付近（39～43） 7．閉塞石上（44～47）の7グループにまとめることができる。このうち2と6のグループは前述したように同一埋葬に伴うものと考えられる。4のグループはほとんど追葬に伴う掻き出しによって破砕されており，接合関係を調査したところ，玄室奥部から墓道埋土までの広範囲にわたって破片の拡散がみられ，なかには48のように石室内から閉塞石間・閉塞石下そして墓道埋土にまで破片の散乱しているものがあった。その量から判断して，数次にわたる追葬に伴うものと考えられる。以下，土器の詳細については，観察表を参照されたい。

表1 道上古墳出土須恵器観察表（注：備考欄に残存率のないものは完形）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	蓋	口径 143.5mm 器高 42.5mm	口縁部は天井部から屈折して短く垂下し，先端は丸くおさめる。天井部外面にはラセン状の凹凸あり。内面天井部一段凹む。扁平な感じの器形。	天井部中央は，不定方向のナデ調整とみられるが，ヘラ削りを思わせるようなラセン状の痕跡を残す。天井部内面，ごく簡略化された一ナデあるいは，二ナデの仕上げナデ。	胎土，砂粒・細砂を多く含む，やや砂質。焼成，良好。色調，外面：青灰色，内面：淡青灰色。口縁端はかなり歪んで正円をなさず，水平面からもややはずれる。
2	蓋	口径 134mm 器高 45mm	口縁部は天井部から屈折し，やや長く外反気味に垂下し，先端は丸くおさめる。内面口縁端直上には，不明瞭だが，平らな面をもつ。天井部中央に平坦面をもつ。内面天井部中央付近がやや凹む。	天井部平坦面は不定方向のナデによって調整するが，やや荒い，ラセン状の回転痕跡らしきものが認められるが，ヘラ削りではなさそう，天井部内面やや小範囲に仕上げナデ，	胎土，石粒若干，砂粒・細砂を含む，やや砂質。焼成，良好。色調，淡青灰色・黒色。口縁端は正円に近いが若干歪む。水平面にのる。内外面に黒色斑点，内面により顕著。外面多孔質状。
3	杯	口径 125.5mm 器高 41mm	たちあがりは軽く外反しつつ，かなり内傾して立つ，先端は尖り気味におさめる。受部は外上方へ短く伸びる，先端は丸くおさめ，上面も丸味をもつ。内面立上がりから底部への移行は屈折的で明瞭な線をもつ。	底部回転ヘラ削り(削り方向，左回わり)，荒く，削り残し部分あり。内面底部中央に仕上げナデを施すが部分的で，簡略，形式的。	胎土，石粒を多量に含む(石英粒)。焼成，良好。色調，青灰色。口縁端は若干歪み水平面にのらない。
4	蓋	最大口径 137.5mm 最小口径 104.5mm 器高 46.5mm	口縁部先端は丸くおさめる。内面天井部との境に凹部がめぐる。天井部外面に凹凸がある。内面天井部が一段凹むが，他は滑らか。	天井部小範囲に回転ヘラ削り(削り方向，左回わり)，荒く小部分削り残しあり。天井部内面には仕上げナデはみられない。	胎土，砂粒・細砂を含む。焼成，良好。色調，暗灰黒色～黒色。器形全体に大きく歪んでいる。天井部外面にヘラ記号。

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	蓋	口径 128㎜ 器高 42.5㎜	口縁部は天井部から強く屈折して，直線的にやや内へ折れるように伸び先端は丸くおさめる。天井部中央に平坦面をもつ，天井部内面はごく軽く凹む程度でほぼ平らである。	天井部平坦面は不定方向のナデによって調整するが，やや荒い，ラセン状の回転痕跡らしきものが認められるが，ヘラ削りではなさそう。天井部内面やや小範囲に仕上げナデ。	胎土，砂粒・細砂を多量に含む，砂質(石英小粒)。焼成，良好。色調，外面：淡青灰色・黒色，内面：青紫色。口縁端は正円でなく歪むが水平面にのる。内外面に黒色小斑点を若干認める。
6	杯	口径 114㎜ 器高 36㎜	たちあがりは短く外反気味で，内傾する。先端は尖り気味におさめる。受部は短く，やや斜上方に出，先端は丸くおさめる，上面は丸味をもつ。内面たちあがりから底部への移行は滑らかで明瞭な線をもたない。たちあがりと受部の境は浅い凹線がめぐる。底部に平坦面をもつ。	底部平坦面周縁に回転ヘラ削りを行った後，平坦面に短く弱いヘラ削りを行う，削り残しが多く，荒い調整。底部内面は広範囲にわたって多方向の仕上げナデを施す。	胎土，砂粒をかなり含む。焼成，不良(やや堅固)(生焼け)。色調，暗灰褐色～淡灰褐色。口縁端は立上がり部が大きくくずれ歪んでいる。水平面からはずれる。蓋32とセットか。
7	甕	口径 111㎜ 胴径 91㎜ 器高 148.5㎜	口頸部はかなり開く。口縁部は内彎気味に伸び，先端は丸くおさめる。頸部はよくしまる。口縁部と頸部の境に凸帯をもつが鋭さにやや欠ける。胴部は球形を呈する。頸部中央と胴部肩にそれぞれ二条の凹線を施す。	頸部から胴部上半にかけてカキ目を施す。底部は不定方向のヘラ削りを行う，周辺部は短く回転させて行なう（左回わり）が中心は不定方向，ヘラ削りはカキ目の後になされている。	胎土，石粒・砂粒をかなり含む。焼成，良好。色調，淡灰色～暗灰褐色。口縁端は正円に近いが水平面からは少しはずれる。
8	提瓶	口径 73㎜ 胴径 185㎜ 器高 220㎜	口頸部は上半かなり外反し，先端は丸くおさめ，若干上方へつまみ出し気味に肥厚させる。胴部前面かなり膨みをもつ，背面もいきなり平坦にならず，かなり，膨んだ後平坦面になる。肩部に一対小円板を貼付ける。	胴部前面，背面共にカキ目を施す，カキ目の後横ナデで調整したためか，カキ目がかなり消えている。背面中央はナデによって消えている。背面平坦面周縁にタタキ目による文様がみられる。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，灰色～暗灰色。口縁内面・肩部外面に自然釉が霜降り状に付着。口縁端はほぼ正円をなし水平面にのる。
9	蓋	口径 149㎜ 器高 45㎜	口縁部は天井部から軽く屈折して垂下し，先端は丸くおさめる。天井部中央に平坦に近い面をもつ。内面は滑らかであまり大きな凹凸はみられない。扁平な感じの器形。	天井部平坦面は不定方向ナデあるいはオサエによって調整するが，やや荒々しい仕上げ。天井部内面やや小範囲で仕上げナデ調整，多方向で丁寧。ヨコナデは全体に丁寧。天井部平坦面周縁に回転ヘラ削りらしき痕跡。	胎土，砂粒・細砂を多量に含む，やや砂質(石英小粒)。焼成，良。色調，外面：淡灰色～淡青灰色，内面：淡灰茶色。口縁端は正円になり水平面にのる。杯10とセット。
10	杯	口径 133.5㎜ 器高 46㎜	たちあがりは直線的にかなり垂直に近く立ち，先端は丸くおさめる。受部は短く，内彎しつつ斜上方へ伸び，先端は	底部平坦面はナデによって調整するが凹凸あり。底部内面仕上げナデを施す，多方面で丁寧。	胎土，砂粒・細砂を多く含む，砂質（石英粒）。焼成，良。色調，外面：青紫色，内面：淡灰茶色。口縁端は

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			尖り気味に丸くおさめる。底部に平坦面らしきものをもつが，やや丸味をもつ。内面は滑らかで凹凸なし。内面たちあがりから受部への移行は屈折的で線をもつ。		正円をなし水平面にのる。蓋9とセット。
11	蓋	口径 147.5mm 器高 45mm	口縁部は天井部から屈折して垂下し，先端は丸くおさめる。内面口縁端直上にごく浅い凹線。内面は滑らかで大きな凹凸はみられない。扁平な感じの器高。	天井部中央は不定方向ナデあるいは，オサエによって調整するが，荒い仕上げで小凹凸あり。天井部内面は仕上げナデ調整，多方向で丁寧。内面と外面の調整は対照的。	胎土，砂粒・細砂を多量に含む，やや砂質。焼成，良。色調，外面：灰色～青灰色，内面：淡灰紫色。口縁端はほぼ正円をなし水平面にのる。杯12とセット。
12	杯	口径 134mm 器高 45mm	たちあがりは直線的で上半でごく軽く外反する，先端は丸くおさめる。受部は短く，内彎しつつ斜上方へ伸び，先端は尖り気味に丸くおさめる。底部にある面をもつが平坦ではなく丸味をもつ。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で，その境は，ごく浅い溝状を呈する。	底面は，強いナデによって調整する，凹凸がかなりあり，粗い仕上げである。底部内面仕上げナデを施す，丁寧。	胎土，砂粒・細砂を多く含む，砂質（石英粒）。焼成，良。色調，外面：青紫色，内面：淡灰紫色。口縁端は正円をなし水平面にのる。蓋11とセット。
13	坩	口径 93mm 胴径 101.5mm 器高 84.5mm	口頸部は，直線的ではほぼ直立し，先端は丸くおさめる。頸部と胴部の境はあまり屈折的でなくやや不明瞭。底部は丸い。内面頸部と胴部境に鈍い稜線をもつ。	外面は粗いハケを不定方向に施す。頸部付近は縦方向，口縁部はハケの後ヨコナデを施す。内面は指頭で成形後，不定方向にナデ回している。指頭圧痕の凹凸をかなり残す。底部外面ナデる。口縁部内外面には指先によって成形した際の軽い凹凸を残す。	胎土，石粒・砂粒を若干含む，やや砂質なるも緻密，石英，黒雲母小片が多くみられる。焼成，良（やや甘い）。色調，淡赤褐色。口縁端は正円より若干歪む，ほぼ水平面にのる。頸部に小黒斑をもつ。土師器である。
14	蓋	口径 151mm 残存高 33.5mm	口縁部は内彎して伸び，不明瞭ではあるが，口縁端面らしきものをもつ。口縁部と天井部の境には凹線がめぐる。	天井部広範囲に回転ヘラ削り（削り方向，左回わり）。	胎土，砂粒を含む。焼成，良好。色調，暗青灰色。残存率小破片。
15	高杯	口径 115mm 脚径 84mm 器高 88mm	杯部口縁部は直線的に伸び先端は丸くおさめる。杯部口縁部と底部の境に軽い段をもつが鈍い感じ。杯底部内面一段凹む。明瞭な脚端面をもち，縁の稜はきわめて鋭い。脚端わずかに下方へつまみ出し気味にする。	杯底部内面の凹部に余分な粘土塊が付着し接合後の調整が徹底していない，ナデが一部みられる。杯部内面は砂粒が完全に沈まず小凹凸あり，かなり荒い調整。	胎土，石粒・砂粒をかなり含む。焼成，良好。色調，淡青灰色。杯部口縁端は大きく歪み，水平面からかなりはずれる。脚端はほぼ正円をなし，水平面から若干はずれる。
16	高杯	口径 141mm	杯部は直口で単純に内彎しつつ立ち，先端は丸くおさめ	杯部内面底部中央に仕上げナデを小範囲に施す。	胎土，石粒・砂粒・細砂を多く含む。焼成，良好。色

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
		脚径 104㎜ 器高 95.5㎜	る。杯部は何段か軽い段をもち，それぞれに鈍い稜をもつ。脚部先端は屈折し，先は鈍く尖る，屈折部分外面は丸味をもち鈍い感じをうける。		調，灰色～暗青灰色。口縁端は歪むが，ほぼ水平面にのる。残存率，脚部完存，杯部½強残存。
17	蓋	口径 150㎜ 残存高 56㎜	口縁部は直線的に伸び，先端部は内へ軽く屈折。先端は丸くおさめる。口縁部と天井部の境には軽い段がめぐる。内面大きな凹凸なく滑らか。	天井部回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），丁寧削り残しなし。天井部内面やや広い範囲に仕上げナデを施すも，小凹凸を残す。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，暗灰色。残存率約½。
18	蓋	口径 146㎜ 器高 43㎜	口縁部は短く，先端はかすかにつまみ出し気味で丸くおさめる。内面天井部が一段凹む。全体に扁平な器形。	天井部回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），削り残しなし。天井部内面乱雑で疎な仕上げナデ，つけたしの感じ。ヨコナデは荒く砂粒が多く浮き出している。	胎土，石粒・砂粒をかなり含む。焼成，良好。色調，外面：黒色・淡青灰色・白色，内面：暗青灰色。口縁端は少し歪み，水平面にのらない。外面一部多孔質状。
19	蓋	口径 129.5㎜ 器高 46㎜	口縁部と天井部の境は不明瞭，口縁部はやや肥厚し，口縁先端は丸くおさめる。内面には小凹凸をいくつか残す。	天井部小範囲の回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），やや荒く，中央を削り残す。天井部内面仕上げナデ調整，執拗になされているが，指頭圧痕の小凹凸を残す。	胎土，砂粒・細砂をかなり含む。焼成，不良(生焼け)。色調，外面：白色，内面：淡灰褐色。口縁端は歪むが，水平面にのる。杯20とセットか。
20	杯	口径 118㎜ 器高 42㎜	たちあがりは強く外反して立ち，先端は尖り気味におさめる。受部は水平に短く伸び，先端は丸くおさめる，上面は丸くなる。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で明瞭な線をもつ。	底部回転ヘラ削り(削り方向，左回わり)，荒い。底部内面広範囲に仕上げナデを施す。多方向で執拗になされる。かなり凹凸を残す。	胎土，砂粒・細砂をかなり含む。焼成，不良(生焼け)。色調，外面：白色，内面：淡灰褐色。口縁端は正円をなし水平面にのる。蓋19とセットか。
21	蓋	口径 135㎜ 器高 44㎜	口縁部と天井部の境はごくかすかに屈折し，鈍い稜をもつ。口縁部先端は尖り気味に丸くおさめる。内面ラセン状の凹部を残す。天井部中央に平坦に近い面をもつ。	天井部小範囲の回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），ごく軽く，削り残し多い。天井部内面仕上げナデ調整。	胎土，砂粒・細砂を含む。焼成，不良（生焼け）。色調，外面：白色～灰白色，内面：淡褐色。半完形出土。杯22とセットか。
22	杯	口径 124㎜ 器高 41.5㎜	たちあがりは外反しつつ内傾し，先端は丸くおさめる。受部は，短く水平に出，先端は丸くおさめる，上面丸く盛り上がる。内面たちあがりから底部への移行は屈折的だが，線はやや不明瞭。	底部回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），荒く，削り残しあり。底部内面広範囲に仕上げナデを行うが，やや荒い。内面ヨコナデはやや荒い仕上げ。	胎土，石粒・砂粒を多く含む。焼成，不良(生焼け)。色調，外面：白茶色，内面：淡灰褐色。残存率½強。蓋21とセットか。
23	蓋	口径 132㎜	口縁部と天井部の境はごくかすかに屈折し，鈍い稜をも	天井部回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），荒く，中心	胎土，砂粒・細砂をかなり含む。焼成，不良(生焼け)。

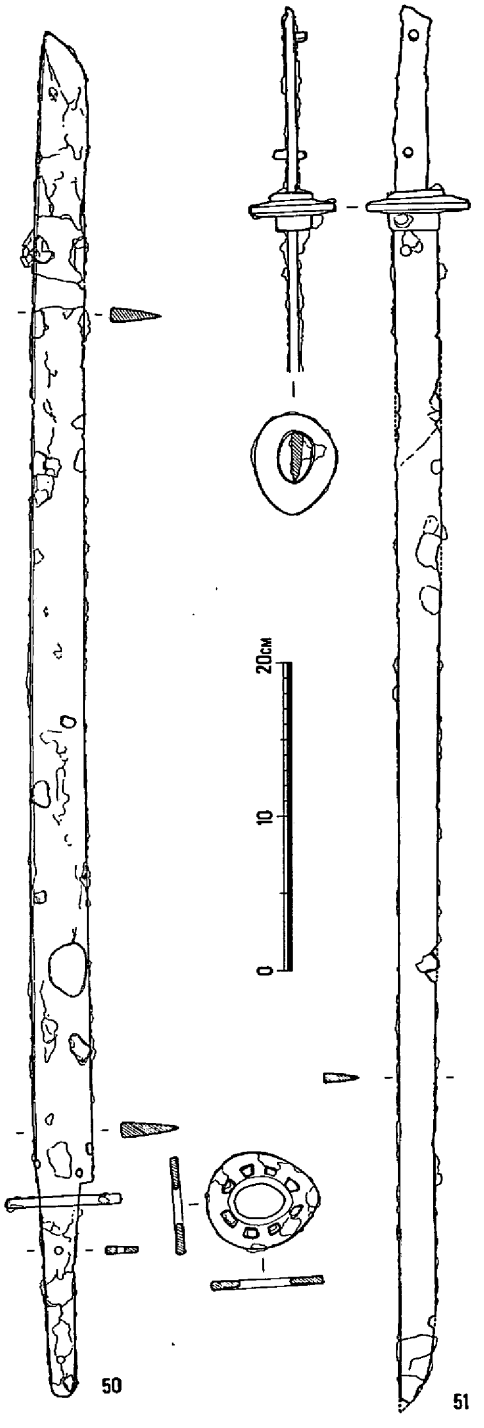
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
		器高 41mm	つ。口縁部先端は尖り気味に丸くおさめる。口縁部内面は平面となり，その上端天井部との境は軽い段となる。内面かなり小凹凸がある。天井部中央に広い平坦面をもつ。	部を広く削り残す。天井部内面多方向だが荒い仕上げナデで調整。	色調，外面：白色，内面：淡赤褐色。口縁端は，ほぼ正円をなす，水平面にのるが若干歪む。杯24とセットか。
24	杯	口径 117mm 器高 42mm	たちあがり外反しつつ内傾し，先端は尖り気味におさめる。受部は短く水平に出，先端は丸くおさめる，上面は軽く盛り上がる。内面たちあがりから受部への移行は屈折的で明瞭な線をもつ。底部内面小凹凸を残し，凹部がラセン状に残る。	底部回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），やや荒く，削り残しあり。底部内面不定方向の仕上げナデを施す。	胎土，砂粒をかなり含む。焼成，不良（生焼け）。色調，外面：白茶色～暗灰茶色，内面：淡褐色。口縁端は水平面にのる。蓋23とセットか。
25	蓋	口径 134mm 器高 41mm	口縁部と天井部の境は不明瞭。口縁部はやや厚くなる，口縁先端は丸くおさめる。天井部中央は平坦に近い。内面ラセン状に凹部が残る。	天井部小範囲の回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），軽いものであまり削られていなく，削り残しあり。天井部内面やや広範囲に仕上げナデ。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，不良（生焼け）。色調，外面：白茶色，内面：淡褐色。半完形出土。
26	蓋		口縁部先端は丸くおさめる。口縁部と天井部の境は不明瞭。天井部外面には軽い凹凸がある。内面口縁部から天井部への移行部分にはかすかな段をもつ。	薄手のつくり。	胎土，砂粒・細砂を含む，やや砂質（石英粒多し）。焼成，良好。色調，灰色～暗灰色。口縁小片残存。
27	杯	口径 130mm 器高 43.5mm	たちあがりは外反しつつ内傾し，先端は丸くおさめる。受部は内彎しつつ斜上方へ伸び先端は丸くおさめる。底部にある面をもつが，平坦ではなく丸味をもち，周縁の稜は不明瞭。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で明瞭な線をもつ。	底面は不定方向のナデによって調整する，やや荒い仕上げ。底部内面やや広範囲に仕上げナデを行う，小凹凸を残し荒い仕上げ。	胎土，砂粒・石粒をかなり含む（石英粒）。焼成，良好。色調，外面：暗青灰色，内面：青灰色。残存率⅓弱。口縁端は水平面にる。
28	蓋	口径 136mm 器高 49mm	口縁部は内彎気味に伸び先端は丸くおさめる。下半はやや肥厚する。外面天井部との境は鈍い稜をもつ。天井部は丸く高く，凹凸をもつ。内面，天井部は一段凹む，ラセン状の凹部や小凹凸を残す。	天井部中央不定方向ナデで調整，荒く，凹凸あり。この調整範囲の周縁は，回転ヘラ削りを一周させたか（ナデ以前）。天井部内面凹部の範囲を仕上げナデ調整。ヨコナデは内外面ともやや荒い。	胎土，石粒・砂粒を含む，細砂多し。焼成，良好。色調，外面：灰青紫色，内面：淡灰紫色。口縁端はひずむが，水平面にのる。半完形出土。
29	蓋	口径 128.5mm	口縁部は下半厚みをまし，先端は丸くおさめる。外面天井部との境はやや屈折的で鈍い	天井部平坦面は不定方向の短い直線的なナデで調整。平坦面周縁は砂粒の回転移動痕が	胎土，石粒・砂粒を含む（石英粒）。焼成，良好。色調，外面：灰色～薄灰紫色，内

番号	器種	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		器高 49㎜	稜をもつ。天井部中央に平坦面をもつ。天井部内面は一段凹み，小凹凸も残存する。	あり，回転ヘラ削りを行ったか，疑問。天井部内面凹部に仕上げナデがみられるが，形式的な簡単なもの。ヨコナデ内面やや荒く，砂粒が完全に沈んでいない。	面：薄灰紫色。口縁端はほぼ正円に近く，水平面にのる。
30	蓋	口径 137㎜ 器高 43㎜	口縁部はわずかに外反気味に伸び，先端は丸くおさめる。体部外面には凹凸がある。天井部中央に平坦面をもつ。内面はあまり凹凸なく全体に滑らかだが，口縁部から天井部への移行はかるく屈折する。	天井平坦面は不定方向ナデあるいはオサエによって調整。天井平坦面周縁には回転ヘラ削りが一回わりなされ，その後再度，小刻みに回転させながらヘラ削りを行っている（削り方向，右回わり）。天井部内面は仕上げナデ調整，多方向のナデ。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，灰色。口縁端は水平面からわずかにはずれる。半完形出土。
31	杯	口径 118㎜ 器高 42㎜	たちあがりは中途で更に軽く外反して立ち，先端にかすかに端面をもつが両縁は鈍い。受部は短く，やや斜上方へ伸び先端は丸くおさめる，上面も丸い。底部に平坦面をもつがかなり凹凸がある。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で，明瞭な線をもつ。	底部平坦面はナデあるいはオサエによって調整する。平坦面周縁に明瞭な砂粒の移動痕あり，あるいはヘラ削りを回転して行ったか。底部内面仕上げナデ調整，多方向で回転するように施す。	胎土，砂粒・細砂を多量に含む（砂質）。焼成，良好。色調，青黒色。口縁端はやや楕円に歪む，水平面にのらない。内外面に黒色小斑点を認める。
32	蓋	口径 128㎜ 器高 39.5㎜	口縁部，先端は丸くおさめる。内面，口縁端から口縁部の半分まで平坦な面をもつ，天井部との境はやや屈折的で鈍い稜をもつ。天井部中央は平坦に近い。内面天井部には小凹凸が多く残存する。	天井部中央は不定方向のヘラ削り，直線的でかなり荒く，削り残しを多くみる。かなり不調整。天井部不定方向ヘラ削りの範囲の周辺には，右回わりの砂粒移動痕がみられ，回転ヘラ削りを行ったかとも考えられる。天井部内面には広範囲に密な仕上げナデ調整がなされている。	胎土，石粒・砂粒をかなり含む。焼成，不良（生焼け）。色調，暗灰茶色～暗灰褐色。口縁端は部分的に大きく歪み，水平面からはかなりはずれる。杯6とセットか。
33	杯	口径 117㎜ 器高 37.5㎜	たちあがりは外反しつつ内傾するが，中途で更に強く外反する。先端は尖り気味におさめる。受部は水平に短く伸び，先端は丸くおさめる，上面は丸く盛り上がる。底部に平坦面をもつが中央わずかに丸味をもつ。内面たちあがりから底部への移行はやや屈折的であるが，線は不明瞭。たちあがりと受部の境は浅い凹線がめぐる。	底部平坦面周縁に回転ヘラ削りを行った後，平坦面を多方向の短いヘラ削りによって執拗に調整する。底部内面広範囲に多方向の仕上げナデを行う。	胎土，砂粒を多く含む。焼成，不良（生焼け）。色調，茶褐色～灰赤褐色。口縁端は正円でなくやや歪むが水平面にのる。

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
34	蓋	口径 143mm 残存高 49.5mm	口縁部は天井部からごく軽く屈折して外反気味に垂下し，先端は丸くおさめる。天井部中央が高くはなるが平坦に近い面をもつ。内面は滑らかで，天井部は軽く凹む。	天井中央部不定方向ナデあるいはオサエによって調整するが，概して未調整。天井部内面やや小範囲に仕上げナデ。	胎土，石粒・砂粒を多く含む。焼成，良（やや甘）。色調，外面：暗灰色，内面：淡青灰色。口縁端はほぼ水平面にのる。
35	杯	口径 113mm 器高 45mm	たちあがりは直線的で，先端は鈍いが端面に近いものをもつ。受部は短く斜上方へ出，先端は丸くおさめる。底部に平坦面に近い面をもつ，かすかに丸味がある。内面たちあがりから底部への移行はやや屈折的な部分もあるが，半分は滑らか。内面全体に滑らかで凹凸なし。	底部平坦面はナデによって調整する。底部内面小範囲に仕上げナデを施す。底部内面に指頭圧痕かと思われる小凹凸あり。	胎土，砂粒・細砂を多く含む，砂質(石英粒)。焼成，良好。色調，外面：淡青灰色，内面：青灰色。口縁端は正円に近く，水平面にのる。内外面全面に黒色小斑点を多くみる。
36	蓋	口径 147.5mm 器高 44mm	口縁部は天井部から屈折して垂下し，先端は丸くおさめる。天井部に広い平坦に近い面をもつ。体部外面中央に凹部がめぐる。天井部内面は一段ごく浅く凹む。	天井部平坦面は不定方向ナデあるいはオサエによって調整，やや荒くかなり凹凸を残す。天井部内面は仕上げナデ調整，小凹凸を若干残す。	胎土，砂粒・細砂を含む。焼成，良好。色調，外面：青灰色，内面：淡灰紫色。半完形出土。
37	蓋	口径 140.5mm 器高 47mm	口縁部先端は丸くおさめる。口縁部と天井部の境は不明瞭。天井部中央に広い平坦面をもつ。内面天井部が一段凹む。	天井平坦面は不定方向ナデあるいはオサエによって調整するが小凹凸を多く残し，丁寧とはいえない。天井平坦面周縁は一回わり回転ヘラ削りを行った後，再度小刻みに回転させながらヘラ削りを行っている(削り方向，右回わり)。内面天井部凹部仕上げナデ。内面の調整は丁寧で滑らか。	胎土，石粒・砂粒をかなり含む(石英粒)。焼成，良好。色調，暗青灰色。口縁端は正円に近く，ほぼ水平面にのる。
38	提瓶	口径 43mm 胴径 124mm 器高 142mm	口頸部は直線的で，先端は丸くおさめる。頸部から胴部への移行はやや屈折的。胴部前面の膨らみはやや小さく，背面平坦面はかなり丸味をもつ胴部肩に円板を一対貼付ける	胴部前面不定方向のナデで調整する。胴部背面，平坦面周縁は，回転ヘラ削り，平坦面は，軽い不定方向ヘラ削りと強いナデで調整する。	胎土，砂粒を含むわりに緻密。焼成，良好。色調，淡灰黄色～灰色～黒色。かなり厚手のつくり。
39	蓋	口径 138.5mm 器高 57mm	口縁部先端は丸くおさめる。口縁部から天井部までは滑らかで大きな凹凸なし。天井部中央小さな平坦面をもつ。内面軽い凹線がラセン状にめぐる。	天井平坦面は粘土円板を貼り付けてその縁辺をナデて付着させたような痕跡を残す。天井部中央は不定方向ナデあるいはオサエによって調整。天井部内面小範囲の仕上げナデ。内面は丁寧に滑らかに仕	胎土，砂粒・細砂を多く含み砂質。焼成，良好。色調，外面：明灰色，内面：暗灰色。口縁端は正円をなし，水平面にのる。杯40とセット。

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
				上げられているが，天井部外面は荒い仕上げ。	
40	杯	口径 128㎜ 器高 50.5㎜	たちあがりは垂直に近くたち，先端は尖り気味に丸くおさめる。受部は内彎しつつ斜め上方へ伸び先端は丸くおさめる。底部に平坦面をもつ。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で，きわめて明瞭な線をもつ。内面軽い凹凸をもつが，全体に滑らか。	底部平坦面はナデで調整したものと考えられる。篦先によったような沈線が数本走る。やや荒い仕上げである。内底面の小範囲だけ仕上げナデを施す。	胎土，砂粒・細砂を多く含む，砂質。焼成，良好。色調，灰色～淡灰紫色。口縁端はほぼ正円で，水平面にのる。蓋39とセット。
41	椀	口径 109㎜ 器高 97㎜	口縁部は，ほぼ直立し，先端わずかに外反し，丸くおさめる。口縁部から底部への移行は滑らか。底部は丸く整えられる。	底部外面不定方向の短いヘラ削りでたんねんに整えられている，削り残しなし，周辺部は左回わりに施す。底部内面は仕上げナデを横方向に回転させて行い，底部中央は，短い直線的なナデで調整する。ヨコナデは丁寧。	胎土，砂粒・細砂をかなり含む，やや砂質。焼成，やや不良(生焼け)。色調，灰白色～白色・白茶色。口縁端は，ほぼ正円に近く，水平面にのる。全体に入念なつくり。
42	短頸壺	口径 75㎜ 胴径 104.5㎜ 器高 76㎜	口縁部はかなり外反し，明瞭な口縁端面をもつが，両縁は鈍い。頸部から胴部への移行は滑らか。底部に平坦に近い面をもつ。	底部回転ヘラ削り（削り方向，左回わり），削り残しなし。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，暗灰緑色～暗灰赤紫色。口縁端は正円に近いが，水平面からはずれる。やや厚手のつくりで重い。
43	有蓋短頸壺	口径 77㎜ 胴径 135㎜ 器高 106㎜	口縁部は，わずかに外反して立ち，先端は丸くおさめる。頸部から胴部への移行は滑らか。底部は丸味をもつが，平坦に近くなっている。胴部最大径付近にごくかすかに凹線らしきものがみられるが不明瞭。底部内面一段凹む。	底部外面不定方向のヘラ削りを行う。周辺部は短く回転させ(左回わり)，中央は不定方向。底部内面にはナデをみない。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，灰色～暗灰色・淡青灰色。口縁部½強欠損。全体に滑らかなつくり。蓋をかぶせて焼成したため，口頸部から胴上半部分は淡青灰色を呈する。
44	壺	口径 128.5㎜ 胴径 96.5㎜ 器高 128㎜	口縁部は短く，大きく開く。頸部から口縁部への移行はわずかに屈折し，口縁部は軽く外反する。口縁部先端は丸くおさめる。口縁部と頸部の境に一条，頸部上半に一条，計二条の軽い凹線をめぐらす。頸部から胴部への移行は滑らか。胴部はやや扁平で，底部には狭い平坦面をもつ。底部内面中央一段凹む。	胴部下半から底部にかけて，ヘラ削りを行う，底部周辺は，短い削りを回転させて行う。底部平坦面ナデによって調整する。他にヘラ削りを思わせる，砂粒移動痕跡あり。また篦先によるかとみられる凹線がある。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，淡青灰色・暗灰褐色。口縁端は歪み，水平面からかなりはずれる。全体に鈍いつくり。

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
45	短頸壺蓋	口径 86㎜ 器高 28.5㎜	口縁部はわずかに内彎しつつ伸び明瞭な口縁端面をもつ。天井部は平坦だが，中央がやや突出する。口縁部と天井部の境に篦状工具によると思われる軽い凹線がめぐる。天井部内面は平坦に近いが，同心円状の浅い凹みがある。口縁先端はつまみ出し気味に少し外面へ肥厚する。	天井部平坦面は，不定方向のヘラ削りで調整したと思われるが，削り残しが，かなりあり小凹凸がある。天井部平坦面周縁は，短いヘラ削りを回転させて調整する(回転方向，左回わり)。天井部内面，仕上げナデを施す。	胎土，砂粒・細砂を含む。焼成，良好。色調，灰色～灰黒色。口縁端は歪み少し長円形をなす，水平面から若干はずれる。
46	有蓋短頸壺	口径 61㎜ 胴径 129.5㎜ 器高 72㎜	口頸部は短く垂直に近く立つ，先端は尖り気味におさめる。中途に稜をもつ。長い肩部をもち屈折気味に胴下半部へ移行する。底部は平坦に近くなる。	底部回転ヘラ削り(削り方向，左回わり)，丁寧で，削り残しなし。外面胴部中央にカキ目を施す。底部内面仕上げナデを施す。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，青灰色，断面・灰青紫色。
47	杯	口径 116㎜ 器高 51㎜	たちあがりは直線的に伸び，内傾する。先端は丸くおさめる。受部は長く突出し，内彎しつつ斜上方へ伸びる，先端は丸くおさめる，薄手のつくり。底部平坦面をもつ。内面たちあがりから底部への移行は屈折的で，明瞭な線をもつ。内面は滑らか。	底部平坦面はナデあるいはオサエによって調整する。平坦面周縁に回転ヘラ削りを行う。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，青灰色。内外面に黒色小斑点。残存率約⅕。
48	提瓶	口径 71㎜ 器高 278㎜	口頸部は一度外反した後で内彎する。先端は丸くおさめる。胴部背面は平坦であるが，縁の稜は鈍く，ほとんど丸くなっている。背面かなり張り出す。口縁は左右不均等。	胴部背面平坦面不定方向ナデによってたんねんに調整。背面内面は強い不定方向ナデを施す。指頭圧による凹みを多く残す。胴部内面（背面内面以外）ヨコナデで調整されるが，それ以前にハケ状工具によって整形を行うか。胴部外面ヨコナデ後にもナデあるいはヘラ削りを行って調整したか，長い砂粒移動痕あり。	胎土，石粒・砂粒をかなり含む。焼成不良（やや甘い）。色調，灰白色。残存率，口頸部，胴部共½。
49	甕	口径 209㎜ 最大腹径 418㎜ 器高 447㎜	口頸部は短く，頸部上半に突帯ふうの段をもつ。口縁端面をもつ，端面中央に鈍い稜をもつ。口縁端面上端は丸くおさめ，下端には垂下する突帯がめぐる。胴部はやや肩が張り，底部は丸底である。	頸部の段はヘラ状工具を一回転させて作り出している。口縁下端の突帯は貼り付けによる。胴部外面平行叩き目の上からカキ目を施す。胴部内面同心円文をナデによって消しているが，かなり残存がみられる。	胎土，石粒・砂粒を含む。焼成，良好。色調，灰黒色～暗灰色。底部に二カ所凹部あるも，大きくは歪まず。

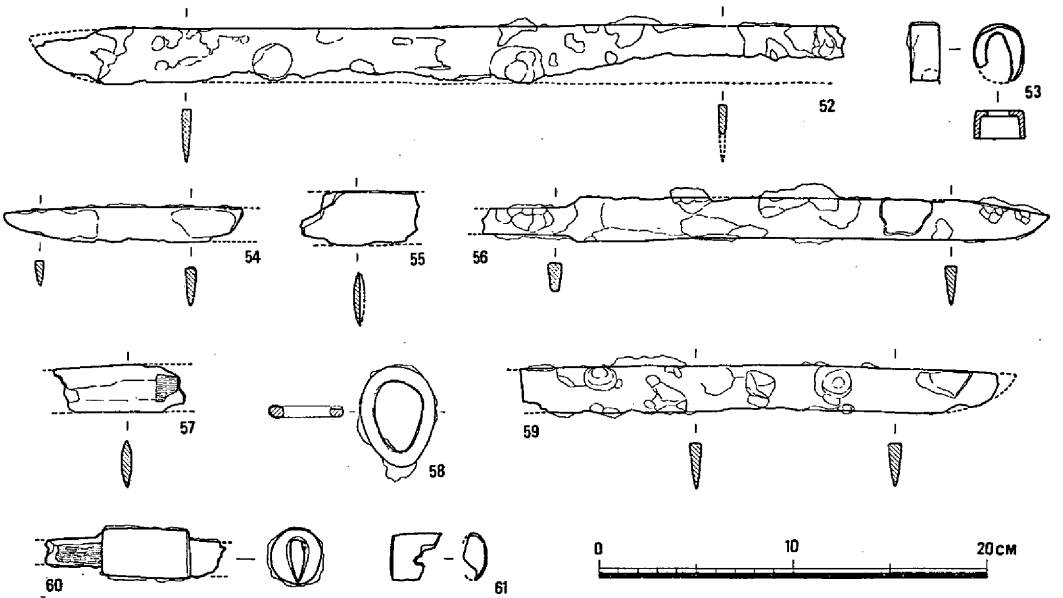


第18図 道上古墳出土遺物 太刀 (S=1/5)

b・太刀 道上古墳からは二振の太刀が出土した。50の太刀は奥壁に沿わせて副葬され，51の太刀は玄門付近で，北側壁に立てかけた状態で検出された。

50は全長890㎜，身長750㎜，身幅35㎜，背厚10㎜を測る。重量は955gである。刀身はかなり内反りをもっており，関は刃側にあるが，背側にも軽い屈折点が関付近に存在する。刃先から鋩への移行は滑らかであるが，鋩は鋭さに欠ける。茎は尻に向かって幅を減じていき，茎尻は丸くおさめる。茎には目釘孔が二カ所穿孔されている。鐔が装着されていた。鐔は75㎜×63㎜の倒卵形をなし，合形の透し孔が八孔穿たれていた。厚さは6㎜である。鎺はみられなかったが，鐔には鎺の痕跡らしきものが看取され，あるいは腐蝕する材料を使用していたかもしれない。

51は全長915㎜，身長780㎜，身幅30㎜，背厚6㎜，重量765gを測る。完全な直刀である。刃先から鋩への移行は滑らかであるが，鋩は鋭い。50に比して細身で，鋭い感じを受ける。関については鐔があるため明確ではないが，茎のあり方からすれば刃関と考えられる。茎はあまり幅を減ずることなく茎尻に至るが，全体に刃側へわずかに彎曲する。茎尻は直線的に切断さたように角張る。茎には二カ所目釘孔があり，共に目釘が残存している。目釘の残存長は片側で9㎜を測る。茎の断面は長方形ではなく，刃側が背側より薄くなっている。51では鐔の部分がよく残存していた。鐔は倒卵形をなし，長径66㎜，短径54㎜，厚さ5㎜であるが，透しはない。鎺は鉄製で幅10㎜を測る。鐔の把側には厚さ4㎜の責金具が



第19図 道上古墳出土遺物 刀剣 (S=$\frac{1}{4}$)

残存していた。38㎜×28㎜で鐔と同様の倒卵形を呈し，しっかりと固定されていた。

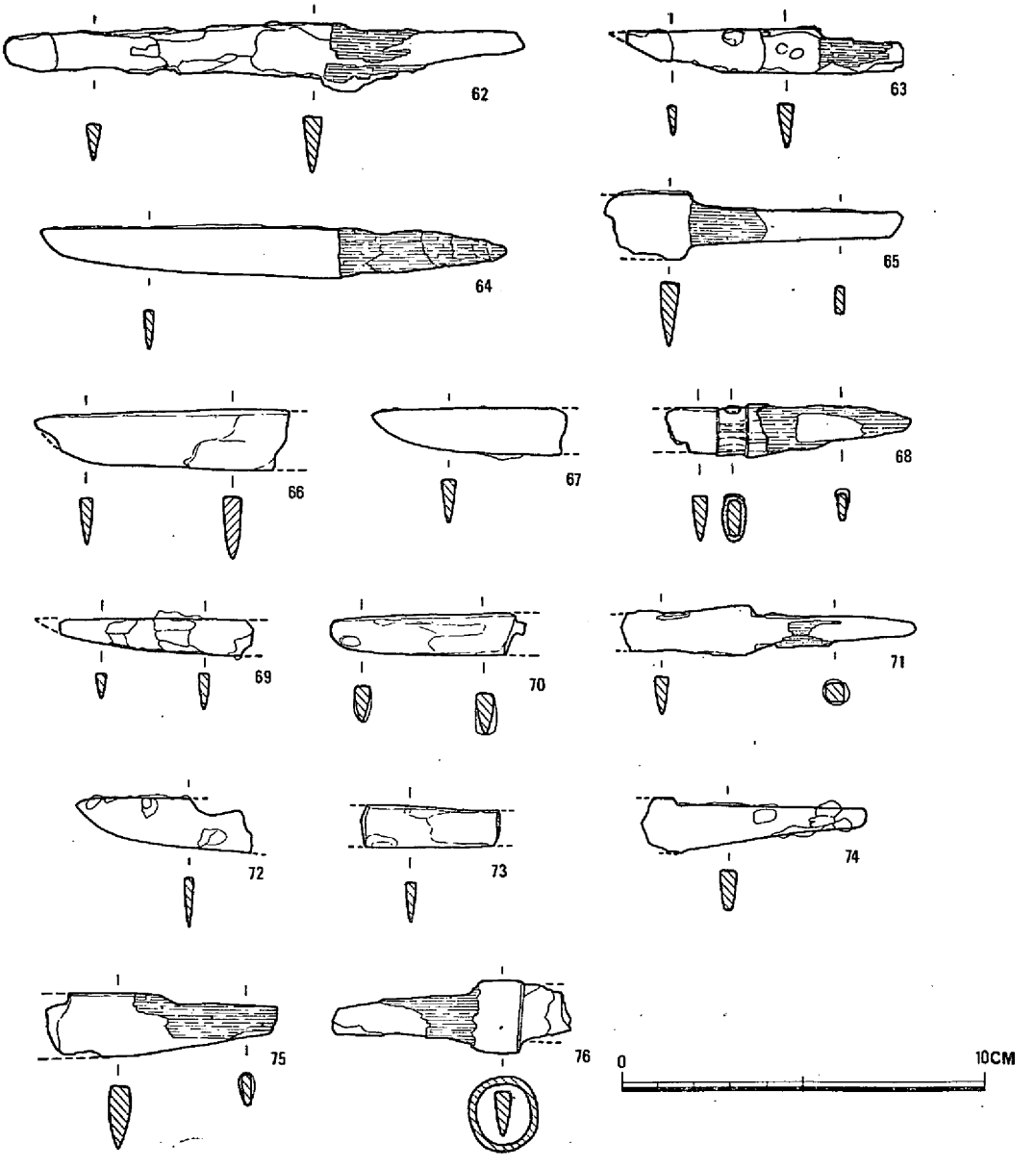
C・**刀剣** 刀四振が確認されている。55，57についてはその断面から剣と判断したが，錆化が激しいため確信はもてない。53は鎺，58は責金具，61は石突である。56はほぼ完存に近い。身長243㎜を測る。背と刃の両側に関をもつ。鋩の背側がやや異常で，刃側へ屈折する。52の鋩も破線の復原線よりもむしろ実線が生きているようにみられ，奇異な感じを与える。

d・**刀子** かなり変化に富んだ，種々の形態のものがみられる。62・63・64はほぼ完存である。全体に鋩は鈍く，70のように丸味をもったものまである。関は背と刃の両側にあるものが量的にはまさるようであるが，63のように片側にしかないものもみられる。いずれも茎には木質が残存しており，把を装着した状態で副葬されていたと考えられるが，身には木質はみられず，抜身であったと推察される。把に責金具を装着したものが二点みられた。68は銅錆が付着しており，あるいは金銅製の金具が巻かれていたかもしれない。76は鉄製である。しかし，このような金具をもつものは少なく，もたない場合が一般的である。大きさは64で全長127㎜，身長82㎜，身幅12㎜を測り，この程度のものが普通サイズで，63はむしろ特異な形に属するかもしれない。63は全長80㎜，身長58㎜，身幅12㎜を測る。鋩はきわめて鋭い。

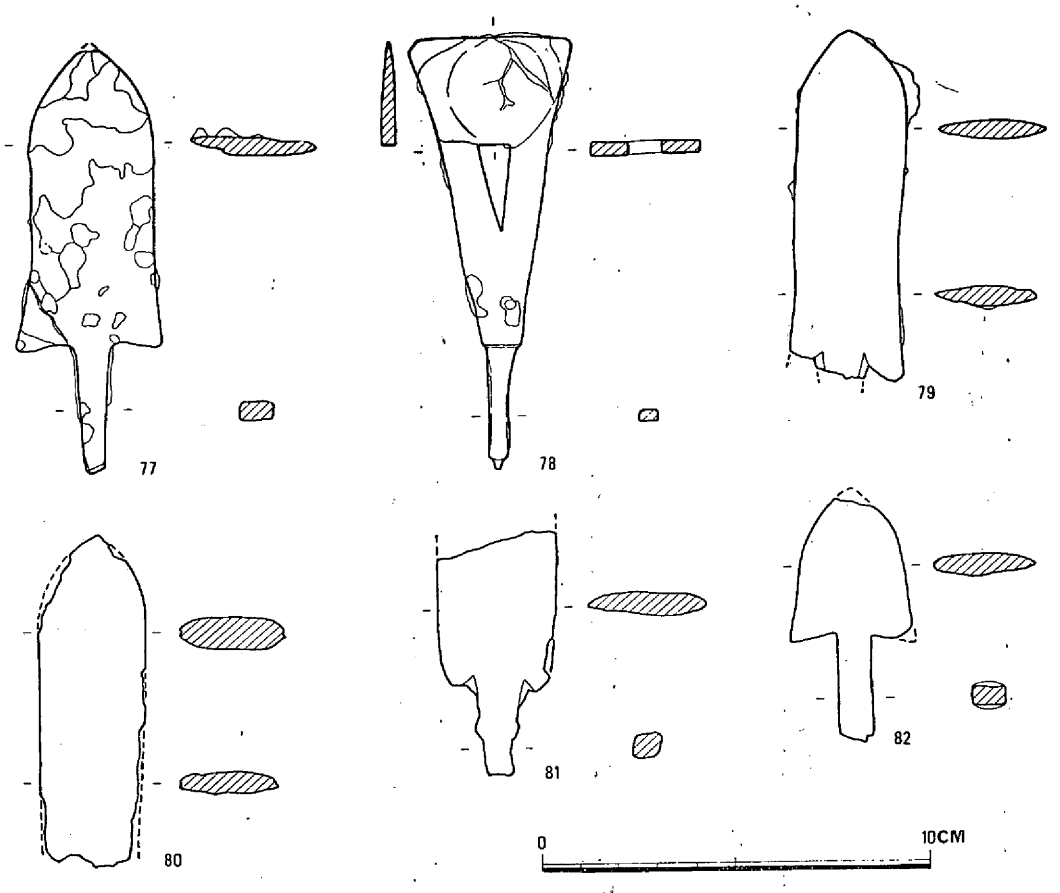
e・**鉄鏃** 鉄鏃もまた変化に富むが，数の上からは棘篦被鏃が圧倒的に多い。大形の有茎鏃も数点みられた。77・79～81は有棘柳葉式有茎鏃であり，77は全長115㎜を測る。79～81は77に比べてより細長く，棘もあまり開かない。78は方頭斧矢式有茎鏃であり，中央に透し孔をもつ。82は有棘三角形式有茎鏃である。棘篦被鏃はほとんどこまかく折損しており，正確な数をあげることは困難である。第22図では棘付近と先端部分の破片を取り上げて示した。83は柳葉形のものであるが，ほぼ完存に近く，全長148㎜を測り，鏃身の長さは118㎜である。先端の形は83・84・88のよ

うな柳葉形と87のような三角形に近いものの二種がある。断面形でも片丸造と両丸造の二種があり，85・87は鏑をもっている。茎と篦被の境のあり方では，ほとんどが棘をもっているとみられるが，なかには棘の存在がみられそうにないものも一部にみられる。茎にはいずれも木質が付着しており，矢柄に装着された状態で副葬されたことを推察させる。

f・馬具　道上古墳からはわずかではあるが馬具が出土している。107～110は轡の一部であり，おそらく一個体分の轡が副葬されていたとみられる。111は杏葉と思われる。その検出時における



第20図　道上古墳出土遺物 刀子 (S=$\frac{1}{2}$)



第21図 道上古墳出土遺物 鉄鏃(1) (S=$\frac{1}{2}$)

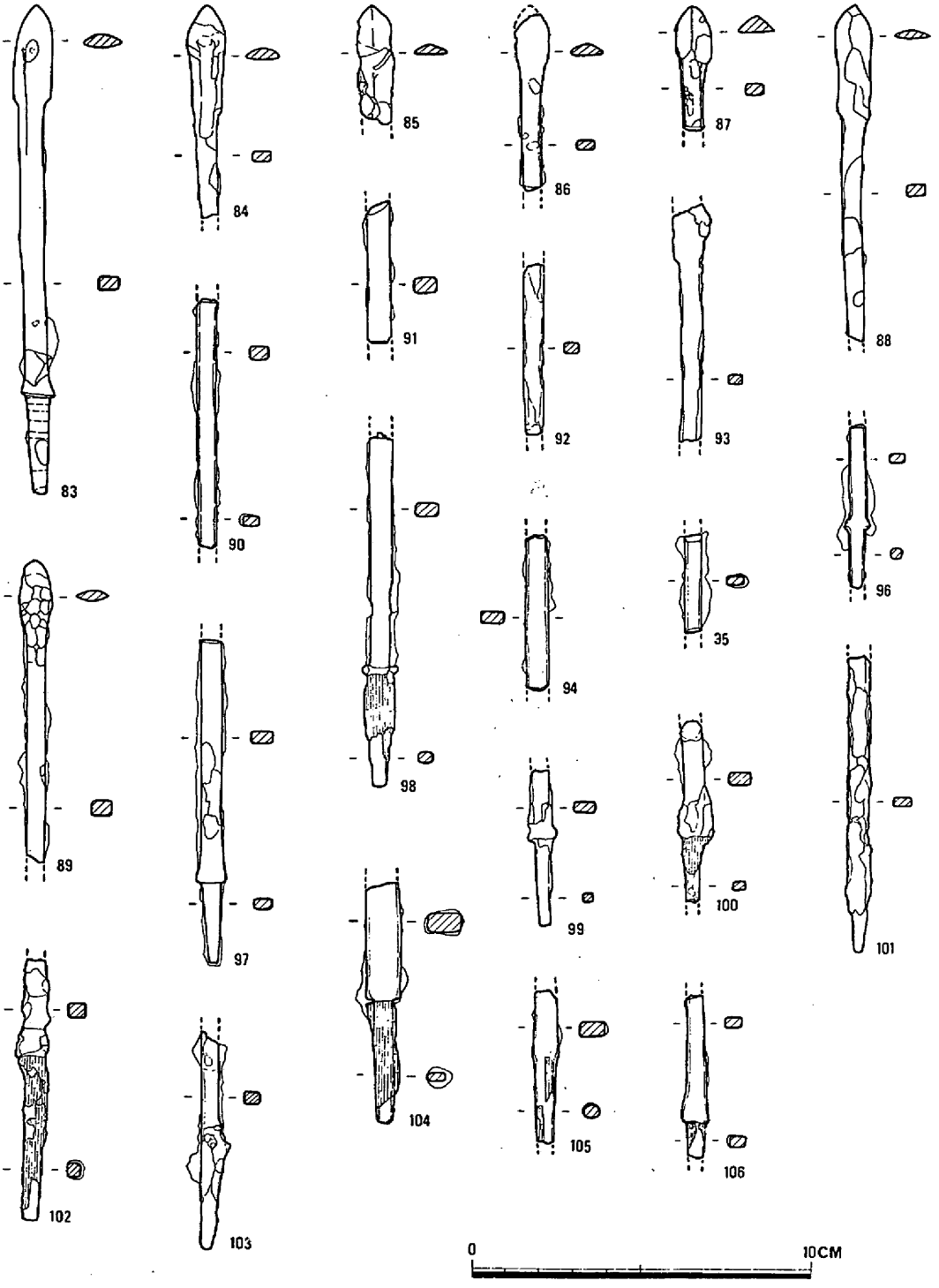
遺存状態から考えると，杏葉の下半は木質であった可能性がある。112～114は鋲具であり，115・116は帯の飾金具と考えられる。115・116は鋲の頭に銀張りをしている。馬具の出土は十点に過ぎない。玄室内の遺物遺存状況から判断すれば，本来この程度しか副葬されていなかったようであり，馬具の一部のみを副葬したと解される。

g．**装身具**　金環四個と切子玉二個，ガラス玉一個が出土した。金環はいずれも銅芯金張であり，大きさから判断すれば，ちょうど二対分出土している。しかし，出土状況からはセット関係を証明することはできない。117は径30㎜，119は径28㎜である。121・122はいずれも水晶製である。123は図の上と下に平坦面をもち群青色を呈する。玉類はいずれも片側穿孔である。

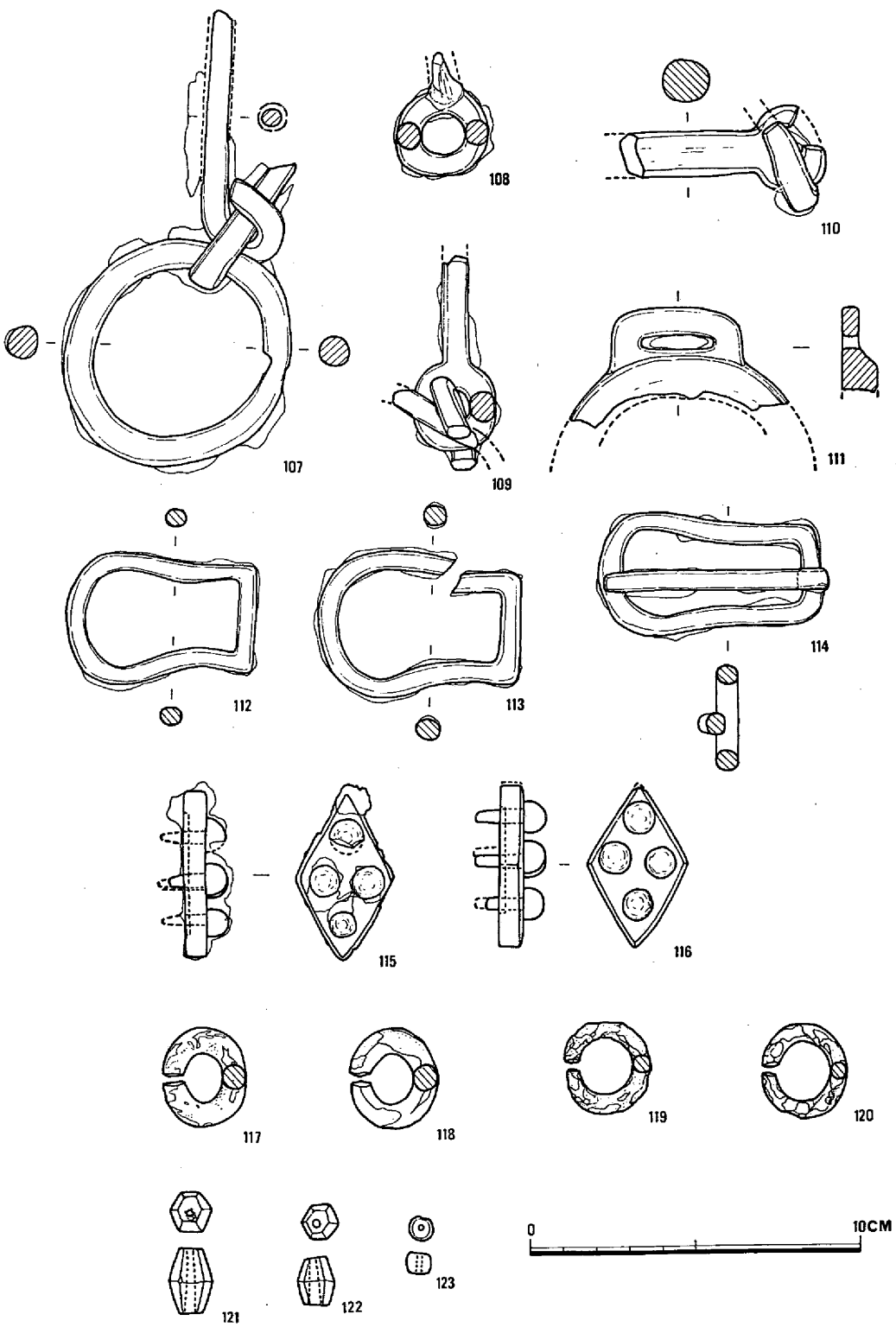
註（1）竹田　勝・岡本寛久「山根屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(22) 岡山県教育委員会　1977年12月

（2）岡田　博・浅倉秀昭・田仲満雄「横見古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(15) 岡山県教育委員会　1977年3月

（3）正岡睦夫・二宮治夫「塚谷古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(14) 岡山県教育委員会　1977年3月



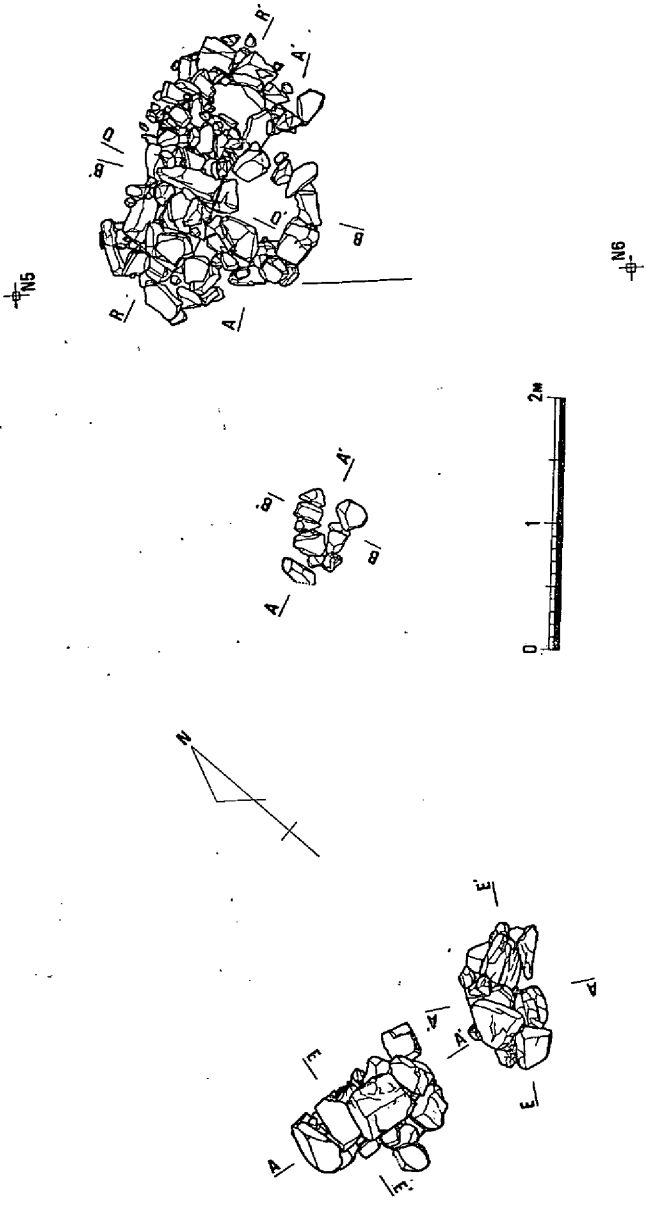
第22図　道上古墳出土遺物 鉄鏃(2) (S＝$\frac{1}{2}$)



第23図　道上古墳出土遺物 馬具・装身具（S＝$\frac{1}{2}$）

第2節　石組土壙墓

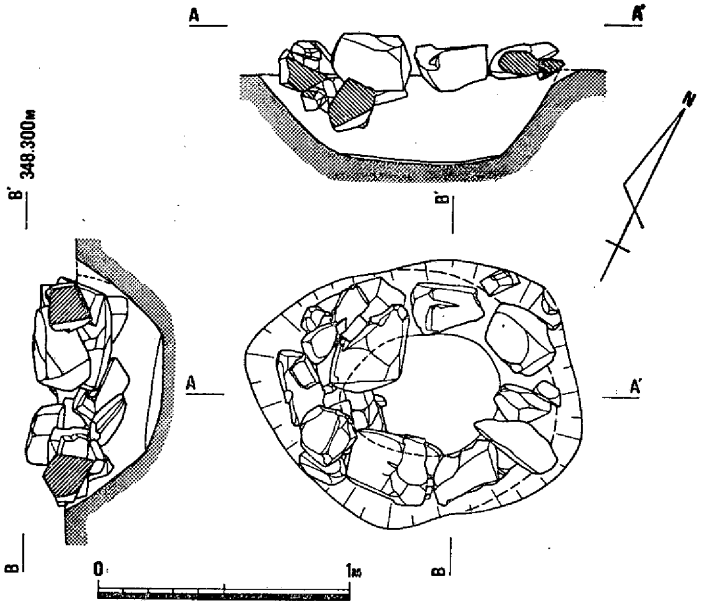
道上遺跡では，道上古墳の発掘調査中に，古墳の北側周溝埋土中から列石ないしは敷石遺構が検出され，精査の結果，それらが土壙を伴っていることが判明した。そして後述の2号土壙墓の発掘によって，時代は中世であり，土壙は墓壙として使用されたものであることがほぼ確実となった。群集する可能性が考えられたため，さらに周辺を探査し，その結果，五基の石組土壙墓を検出しえた。五基の石組土壙墓の位置関係は，1号・2号が切り合い関係にあり，4号・5号が近接している。3号はこの両者の中間に位置している。1号と4号は直線距離にして7.2m離れている。1号と2号の切り合いは，1号が2号を切っている。1号・2号は周溝埋土中で土壙を検出しえたが，3号は地山上で土壙を検出し，4号・5号も土壙は地山上面で検出した。



第24図　道上遺跡石組土壙墓位置図（S＝1/60）

1.　1号石組土壙墓

道上古墳の北側周溝内に存在し，周溝埋土中につくられている。2号石組土壙の一部を切っている。土壙は検出面で長径



第25図　1号石組土壙墓実測図（S＝1/30）

137cm，短径100cm程度のかなり不整な楕円形のプランをもち，底面は，長径63cm，短径48cmの卵形で，中央が少し凹んでいる。土壙の深さは約40cmあり，土壙の傾斜はかなり緩やかである。この土壙の上面（検出面）に長径20～40cmの石を，壙縁に沿って楕円形に並べている。これらの石は，土壙の東半部分については，一段しかみられないが，西半部分についてはかなり底から石を積み上げてあり，その最上段の石が東半の石と共に，楕円形の石列をつくっている。この西半石積みも乱雑ではあるが，壙壁に沿って半円形に積まれている。東半の石は壙底より25～30cm上方に位置ずるが，西半の石積の最下段の石は，壙底より15cm上方に位置する。なお石組の最高点は壙底より54cm上方にある。楕円形の石列の石はそれぞれわずかではあるが，土壙の中心にむかって傾斜しているように観察された。

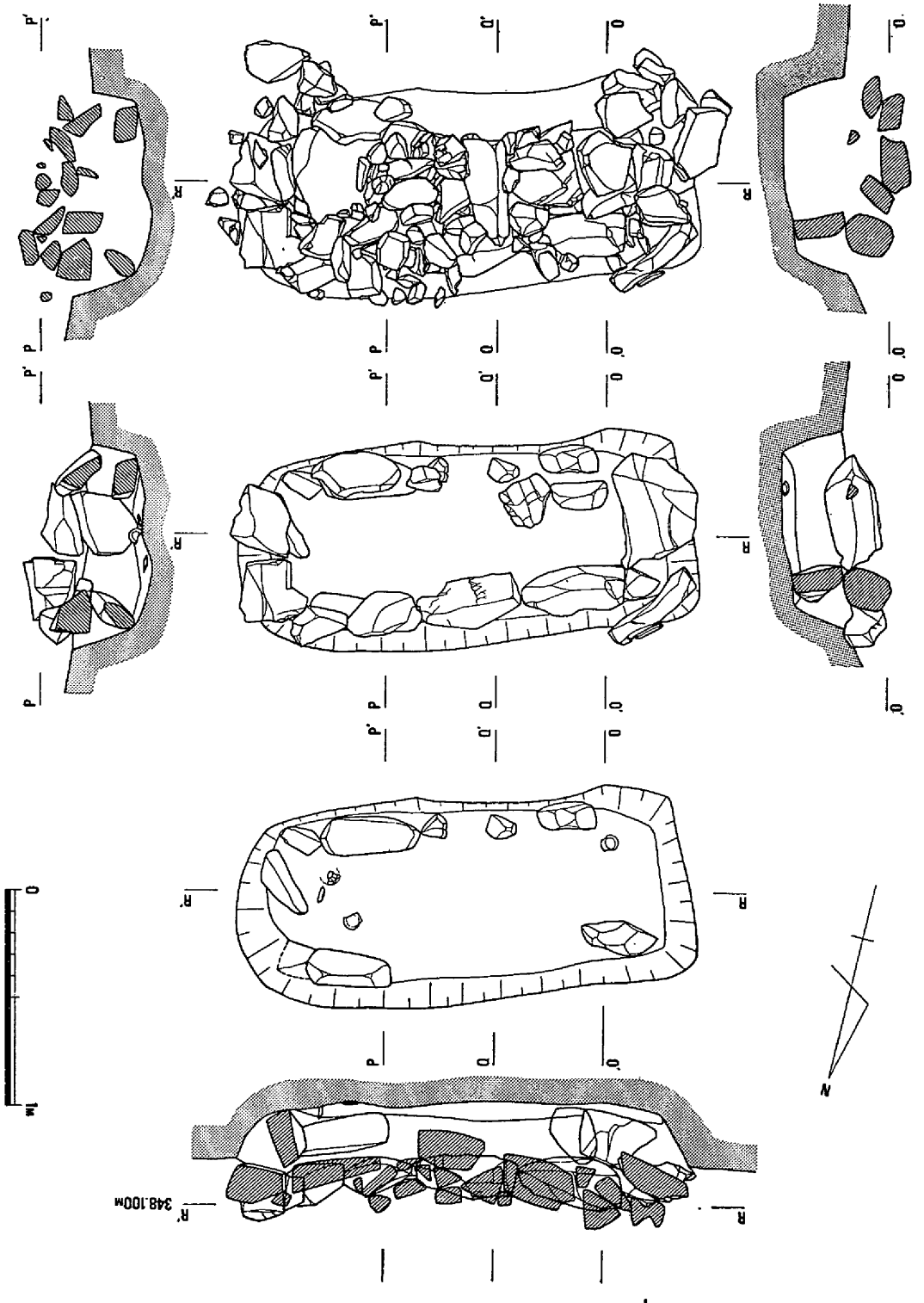
土壙内埋土は，しまりのないぱさぱさした暗灰茶色土一層であったが，底面近くには灰黄色土がブロック状に混入していた。土壙内からはなんらの遺物も出土しなかったが，ただ炭がぽつぽつとみられた。

楕円形の石列が，土壙の本来の上面にあって露出していたのか，それとも土壙の肩が本来はもっと高くて石列が土壙内に埋没していたのかについてはあまり明確ではないが，道上古墳の墳丘断面の土層観察によれば後者の可能性が考えられる。しかし，この部分の分層についてはあまり確信がない。もし，25図中の肩の線が，断面図での壙壁の不自然さ等から掘りすぎたものと判断されれば，本来の線は破線で復原した線になると考えられ，そうすれば石列は土壙上面にあったことになろう。

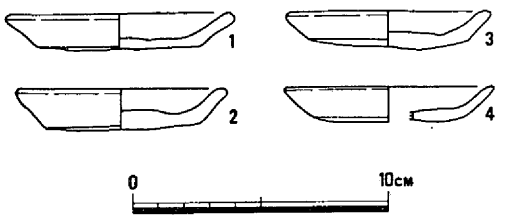
2. 2号石組土壙墓

1号石組土壙と隣接して，道上古墳の周溝内にあり，その一部は1号石組土壙によって切られ欠損している。土壙は，道上古墳の周溝埋土中から掘り込まれ，底部は古墳周溝底の黄色土をわずかに掘り込んでいる。

土壙は，ほぼ長方形を呈する。検出面で，長さ206cm，幅98cm，深さ35cmを計る。底面は長さ179cm



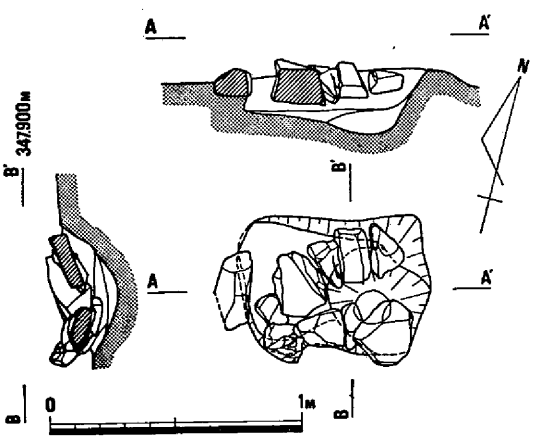
第26図　2号石組土壙墓実測図（S＝1/30）



第27図　2号石組土壙墓出土遺物（S＝1/3）

幅78cm程度あり，若干の凹凸がみられる。壙壁はかなり急である。北西隅では壙壁に地山の石が一部露出している。主軸の方位はN—72°-Eである。土壙の上面には多数の石が大小とりまぜ，あたかも土壙を覆うような形で積まれていたが，構造的には，まず第1段階として，長径25～50cm程度の石を長方形に配している。西短辺一個，北長辺四個，東短辺二個という配置であるが，南長辺は二～三個それらしい石が残存しているが，明確ではない。おそらく南長辺にも石列があったと思われるが，1号石組土壙の掘削によって破壊されたのであろう。このように長方形に石を並べた後，第2段階として，主としてその中を埋めるような形で多数の石を配している。長径50～70cmという大きな石も一・二個あるが，大多数は，長径10～20cm内外の石である。この配石の広がりは長さ230cm，幅120cmあり，土壙を完全に覆っている。これらの石の中には，高度からして，かなり土壙内に落ち込んだような形になっているものもみられるが，これらの石は，本来すべて土壙上面にあったものが，その後，土壙内の変化によって，壙内にずり込んだような形になったものと考えられる。配石の広がりが土壙の検出肩部より外にまで及ぶためである。土壙内には，壙底に接して五個の石が壙壁近くに置かれてあった。その配置は，南・北長辺にそれぞれ二個，東短辺に一個であり，その位置関係は何か意味をもっているものと考えられた。このような壙底での配石と，土壙上面の配石の壙内への落ち込みを考え合わせれば，この土壙には箱形の木棺が埋葬されていたのではないかと考えることができそうである。壙底の石は，木棺を壙内に安定させるため，木棺と壙壁との間に詰められたものと解釈するわけである。そうだとすれば，木棺の大きさがおおよそ見当づけられる。西短辺に石がないので西短辺では木棺を直接，壙壁に接触させたとすれば，木棺の規模は，長さ170cm，幅50cm程度と推定される。壙底からは，西短辺近くに一個体，東短辺近くに二個体の土師器小皿が出土した。他に埋土中から最底三個体分の土師器小皿の破片が出土した。以上六個体のうち図示うるものは四個体であった。これらの土師器は，副葬品として棺内に入れられたものと考えられる。なお配石の上方から鉄器が出土している。

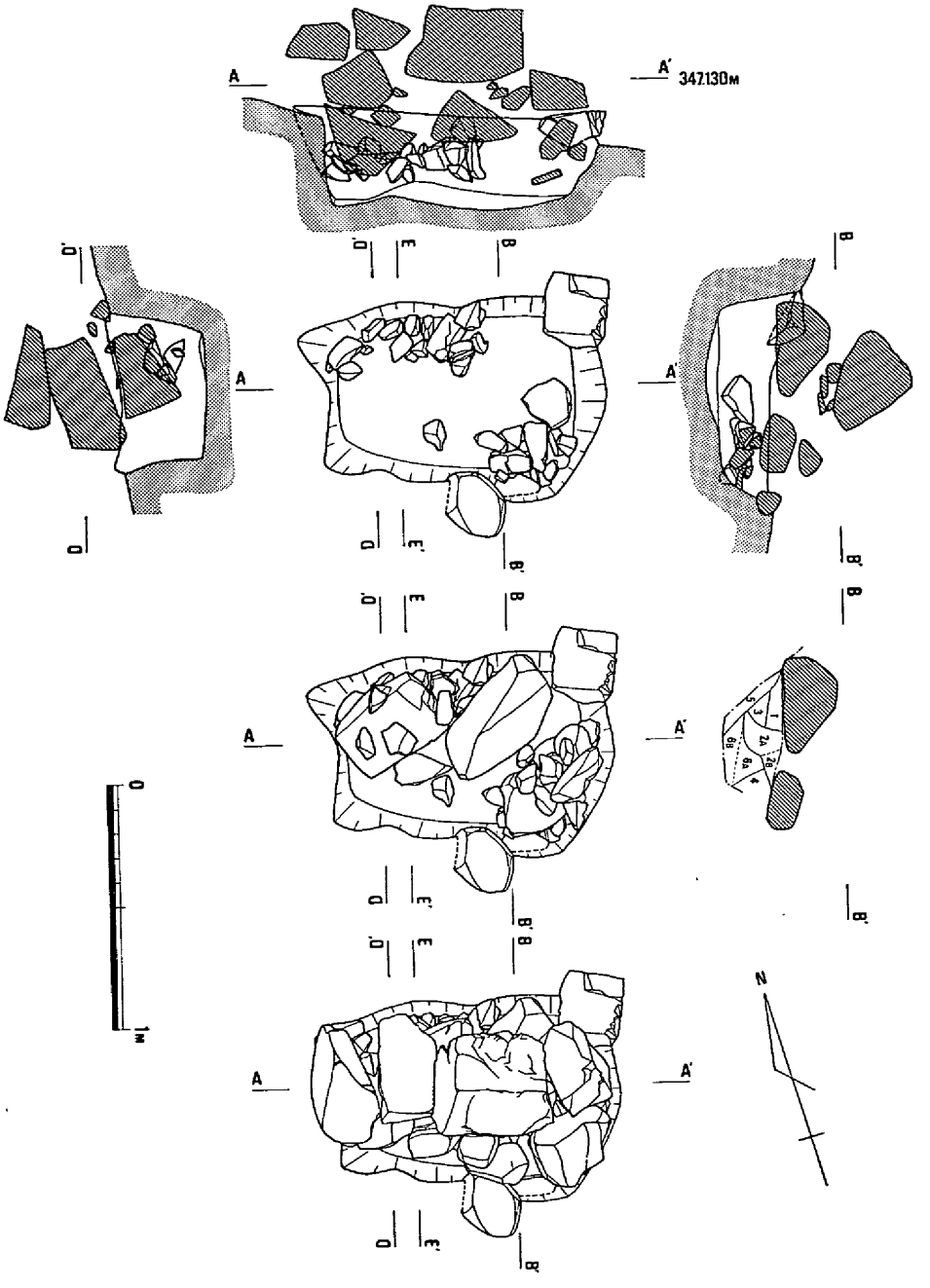
土壙の埋土は，灰黒色土一層であり，木棺痕跡は検出しえなかった。



第28図　3号石組土壙墓実測図（S＝1/30）

3.　3号石組土壙墓

1号石組土壙から西へ 2.5mのところにあって，道上古墳の周溝内にあり，周溝埋



第29図　4号石組土壙墓実測図（S＝1/30）

土中につくられている。

土壙は，かなり不整ではあるが，ほぼ長方形を呈する。検出面で長さ75cm，幅55cmある。主軸はN—75°—Eである。壙底は平坦面が広くみられるが，土壙の南東角に長径48cm，短径40cmの楕円形の

落込みがあり，平坦面から一段凹む。平坦面までの深さは15～20cm，落込みの底までは25cmある。配石は土壙の上面から壙内へ落ち込んだような形で，多くは壙底平坦面より10cm程度上方に位置していた。配石は土壙の平面形に対してやや片寄ったありかたを示していた。すなわち，土壙の南角の落込みを囲むように丸く並べられており，そして，どの石も落込みの中心へ向って少し傾斜をもっていた。土壙内は，灰黄色土混じりの暗灰褐色土によって充塡されており，層分けはできなかった。出土遺物もみられなかった。

4. 4号石組土壙墓

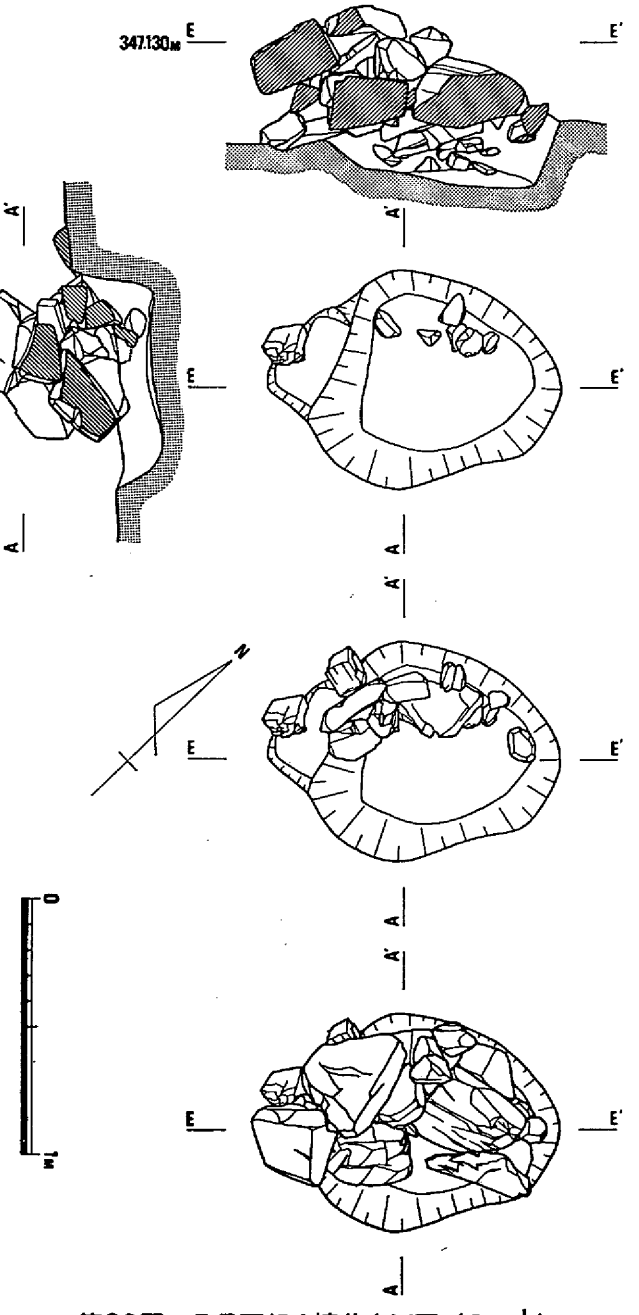
道上古墳の西方に隣接して位置し，5号石組土壙と近接する。土壙は，地山黄色土上面で検出され黄色土をかなり掘り込んでいる。土壙はかなり不整な長方形を呈し，検出面で長さ110cm，幅60～85cm，深さ40cm程度を測る。壙壁はかなり急傾斜で，二カ所で地山に含まれている大石が壙内へ露出している。壙底は，これもかなり歪んだ長方形の底面になるが，完全に平坦ではなく土壙東半と西半でそれぞれ一カ所が凹んでいる。広さは，長さ95cm，幅35～63cmである。主軸の方位はN—74°—Wである。

壙内では，南東隅と北西隅から北壙壁沿いの二カ所に集石がみられた。石はいずれも長径10～20cm内外の山石であり，それぞれ10数個が集まっていた。二カ所とも石はほとんどすべて底面からは浮いた状態で，5～10cm，中には20cmも上方に位置するものさえあった。集石そのものは，石が接触しあって積んだように重なっていた。この土壙の上面には，大小さまざまの石を多くもちよって石積みを構築してあった。大きな石は，長径40～50cm，小さな石は10cm内外と変化に富んでいる。石積みはかなり高く60～70cmもあり，2号石組土壙の石積みの高さが，30～40cmであったのに較べると，より強固な感じを受ける。石積みの構造的な面について考えると，先述してきた1号～3号石組土壙との間には相違がみられる。1号～3号は土壙上面に壙縁に沿って石を並べるということで共通しているが，4号にはそのような石列はみられず，ただ乱雑に石を積み上げているだけである。ただ機能的には，2号石組土壙の石積みと同様，石蓋土壙の蓋石のように土壙の上に架して蓋をするという種類のものではなかったと考える。石積みの下部は土壙内かなり深くまで入りこんでいるが，これは本来土壙の上面にあったものが壙内へ落ち込んだものと考えたい。

壙内埋土については，一応図のように分層を行ないえたが，いずれもよく類似した土であり，またこの結果から何か事実関係について言及できるようにも思えず，あるいは一層として取り扱うべきであるかもしれない。壙内からは，遺物の出土はみられなかった。

5. 5号石組土壙墓

4号石組土壙の東方60cmのところに近接して存在する。土壙は，地山黄色土上面で検出した。黄色土を掘り込んで作られている。土壙は，不整なやや三角形に近い円形を呈し，南西に浅い張り出し部をもつ，張り出しをも含めた全体の長さは116cmあり，張り出し部を除いた部分は，長径101cm，短径83cmを計る。深さは30cm程度で壙壁の傾斜はかなり急である。張り出し部の深さは5cm内外である。



第30図　5号石組土壙墓実測図 (S=1/30)

壙底は，長径66cm，短径62cmの土壙上面と同じ平面形の底面となるが，東半が軽く一段5cm程度深くなる。土壙内には，北壁に接近して，長径10cm内外の小石が数個あり，半数は底面に付着し，残りは底面から5cm程度上方に位置していた。土壙の上面には高く石が積み上げられていた。石積みの高さは60cm程もあったが，平面的には，土壙の北西半を中心に積まれるという片寄りがみられ，土壙の南東付近には積み石がみられなかった。使用されている石は土壙の規模に較べるとかなり大きなものであり，長径40cm程度のかなり角張った石が数個みられた。もちろん長径15cm内外の石も用いられていた。石積みの最下段にはすこし小さめの石を半円形に配しているようにみられたが，1号～3号石組土壙のように明瞭ではない。石積みの下部は，土壙内にかなり落込み，最下段の石は，壙底から5～10cm浮いているにすぎなかった

土壙内の埋土は，暗灰黄色土一層であった。出土遺物はみられなかった。

6. 遺　　物

石組土壙墓群から出土した遺物は2号土壙墓の石組上から検出された鉄器と，壙底に副葬されていた土師器の皿が六個体あるのみで，他の石組土壙中からはまったく遺物の出土をみなかった。鉄器については錆化が激しく，どのような器種か不明である。土師器の皿は三個体がほぼ完形で，一個体は半分が欠失していた。

土師器の皿は四個体とも製作手法は同一である。底部には回転を利用したヘラ起こしの痕跡が明瞭に認められる。口縁部は丁寧にヨコナデされ，内底面はヨコナデから連続して指頭でナデ回されている。形態的には内底面の周囲が浅い溝状になることを特徴とし，外底面は軽い凸面となっている。2と4は器壁の厚さにかなり差があり，1と3がその中間にある。また2と4は口縁の形態についても相違している。すなわち，2の口縁は軽く外反するのに対し，4の口縁は直線的である。1は口径85㎜，2は79㎜，3は77㎜，4は80㎜を測る。4の胎土は緻密で精選されているが，他はかなり砂粒を含んでいる。焼成はすべて良好であり，色調は2が淡褐色を示す以外すべて淡灰褐色を呈する。

第3節 土 壇 遺 構

道上遺跡の調査対象は主として道上古墳であったが，道上古墳の所在する平坦面より20m程山側にも一カ所平坦面が存在しており，そこには五輪石を集積して祭っていたことが調査前から知られており，また現に礫が多数散乱していた。この平坦面も人為的な造成面の可能性が高かったため，この部分についても発掘調査を実施することとし，平坦面中央付近で尾根筋ラインに直交するラインを設定して測量杭を設置し，トレンチ調査から開始した。トレンチ調査の結果，平坦面の南辺で積石を検出したため，平坦面全面の発掘調査を継続して実施することとし，以下に述べるような結果を得た。

発掘の結果，遺構の西側が山道によって削平されているため完全なことはいえないが，ほぼ三角形を呈する平坦面が，山側を削って谷側に土を盛るという方法で形成されており，山側の尾根筋に直交する辺では石列が認められ，他の二辺には石積みが検出された。中央平坦部にはなんらの施設も存在せず，また礫等の散乱もほとんどみられなかった。

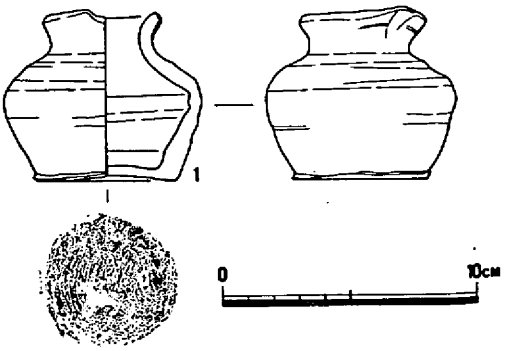
山側の尾根筋に直交する辺では石列が検出された。かなり乱雑に礫がころがっているようであったが，注意して見れば，どうも三列の石の並びが認められるようであり，それぞれの石列の間は平坦な面になっていた。石列に使用されている石はほとんど，周辺の地山中に含まれている礫であったが，一部わずかに河原石も散見できた。一番山側の石列の背後は傾斜面となり，尾根筋の自然な傾斜面へと続いていく。石列は検出された部分で長さ5m，幅は1.5mあり，各石列の間隔は約30㎝であった。

谷側の二辺では平坦面の流出を防ぐ目的をもっていたと考えられる石積みが検出されたが，東辺と南辺では様相がかなり異なっていた。東辺の石積みはほぼ均等な大きさの礫を使用し，密に積みあげられていた。これに対して南辺の石積みは石材の大きさも揃わず，またかなりまばらに石積みがみられ，傾斜面全面を石で覆うようなものではなかった。石積の基底部にはところどころ大きな礫が配置されており，これが積石の崩落を予防する働きをもっていたものと考えられる。石積みの高さは東辺で50㎝内外，南辺でもやはり同じぐらいあり，各辺の残存長は東辺5m，南辺3mであった。

中央平坦面は約14㎡の広さをもっていた。平坦面上にはあまり注意するようなものはみられなかったが，一つ，東辺に長辺を平行させるような形で50㎝の距離を置いて長径90㎝の大石があり注意された。当初，この平坦面に墓壙のようなものが存在するかと考えて精査したが，そのような施設はいっさいみられなかった。

平坦面の造成過程を調べるために断割トレンチを入れ，土層を観察した。その結果によればまず平坦面に盛土を行った後に石積みを構築して造成を完了している。

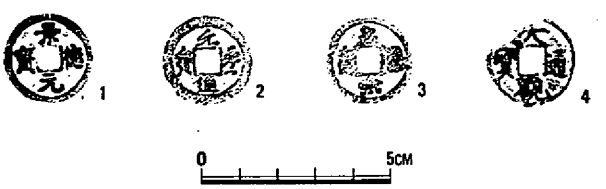
土壇遺構から出土した遺物は，備前焼の片口の小壷と古銭，それに五輪石である。五輪石はほとんどが山側の列石周辺から出土し，備前焼小壷もこの列石中から出土した。



第31図 土壇遺構出土備前焼小壷 (S=1/3)

以上のような状況からこの土壇の性格を考えてみると，山側列石からの多量の五輪石の出土が注意され，列石の間に存在した平坦面の存在を考えあわせると，この部分に階段状に長い平坦面が形成され，その平坦面上に五輪石を立て並べたのではないかと推察される。したがって，この土壇の主目的はこの部分にあると考えられ，その前方の平坦面は，この五輪石を供養する拝所のようなものではなかったかと考えたい。山側列石と東辺東端との間の空白部分はこの平坦面に入る登り口のようなものであったのであろう。なおもう一点，南辺と東辺との角の石積み下端から北東方向へ直線的に伸びる石列を確認しているが，その性格は明らかにしえなかった。

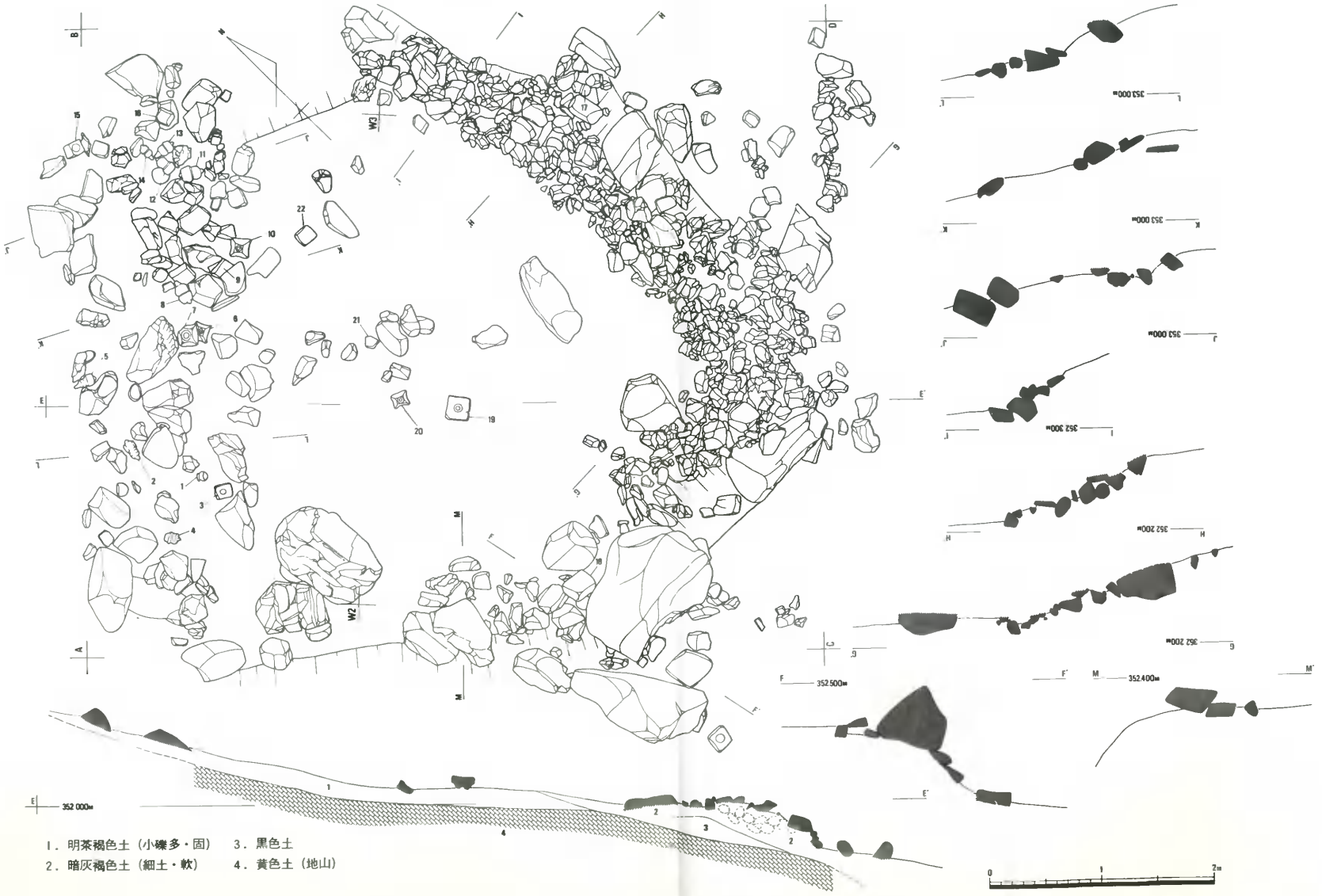
土壇遺構から出土した遺物は前述のとおりである。備前焼片口小壷は口径44㎜，最大腹径77㎜，器高69㎜を測る。口縁部は軽く外反し，一ケ所をつまみ出し，いわゆる〝スズメロ〟をつくっている。胴部は肩が張るが，高さはあまりなく，全体に鈍重な感じを受ける。底部は糸切り底であるが，指紋がかなり付着している。全体に暗褐色の色調を呈するが，口縁部と肩部に灰緑色の釉が付着している。底部内面にもこの釉がみられ，自然釉と考えられる。器表には鈍い光沢がある。



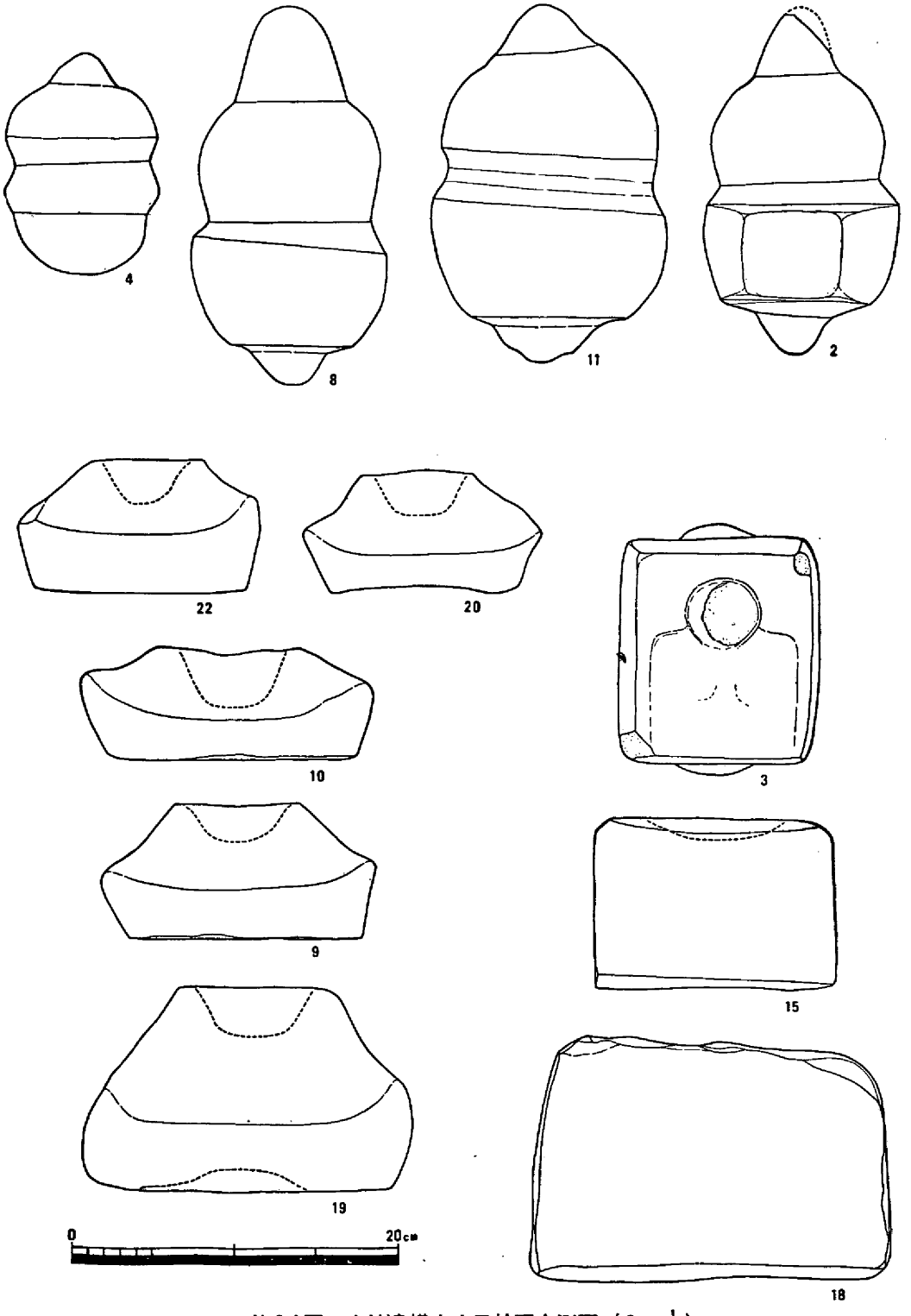
第32図 土壇遺構出土古銭 (S=1/2)

古銭が四枚出土している。1は景徳元寳（初鋳年1005年)。2は元豊通寳(初鋳年1072年)，3は皇宋通寳(初鋳年1039年)4は大観通寳(初鋳年1107年)である。

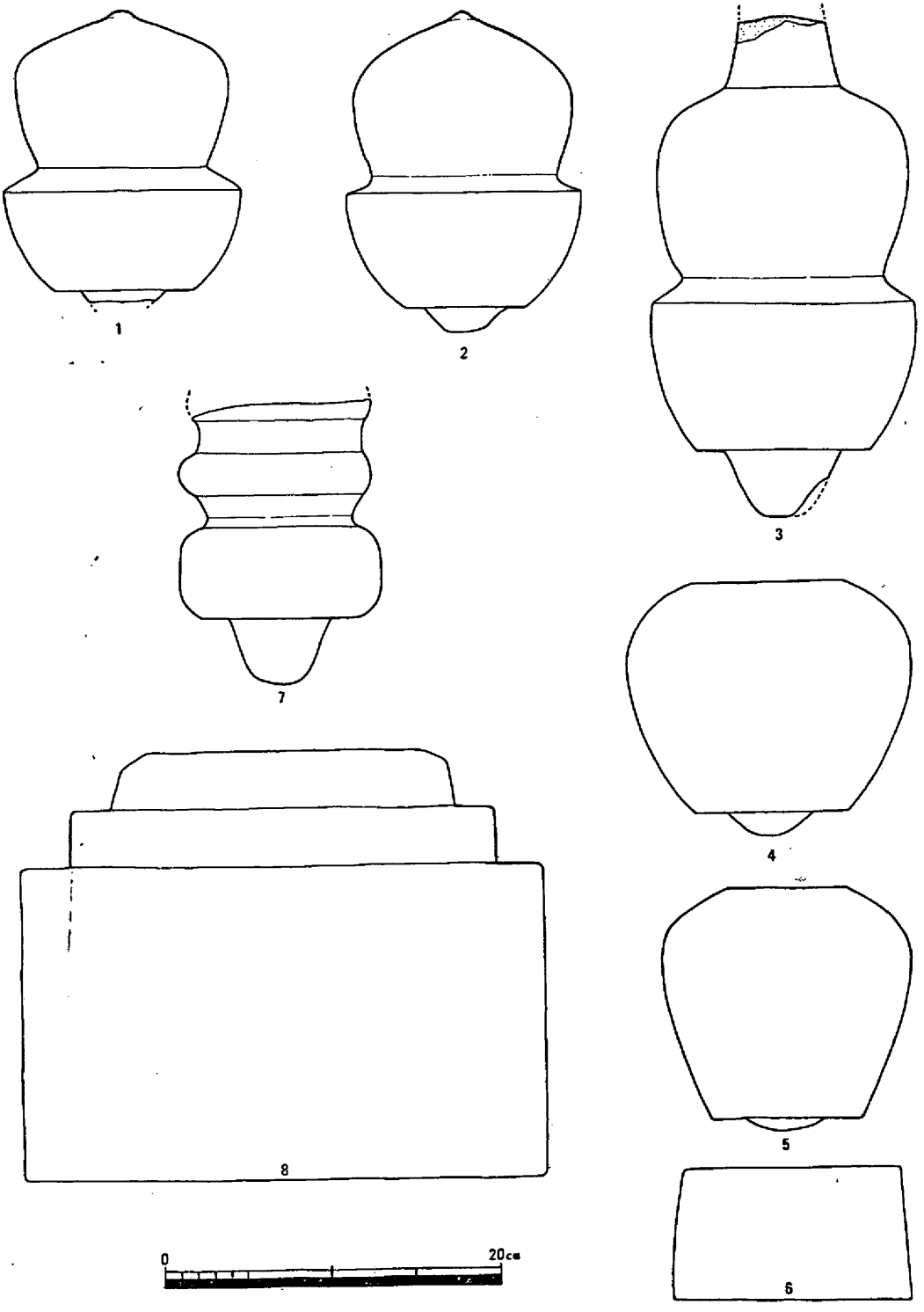
五輪石はすべて結晶質石灰岩（俗称〝こごめ石〟）を使用している。空風輪・火輪・水輪・地輪をそれぞれ作り，それらを組み立て一塔とするものである。出土量は空風輪と火輪がもっとも多く地輪はきわめて少数であった。また本来ここにあったものを用地外へ移転したものがあるので，それも併せて実測掲載した。なお，35図の7・8は宝篋印塔の部品である。いくつかの形式に分類することが可能と考えられるが，後考に委ねたい。



第33図　道上遺跡土壙遺構実測図（S＝$\frac{1}{40}$）



第34図　土壇遺構出土五輪石実測図（S＝$\frac{1}{4}$）



第35図　土壇遺構出土五輪石実測図（用地外移転分）（S＝$\frac{1}{4}$）

1．遺跡遠景（東　山根屋遺跡から）

2．遺跡遠景（中央尾根筋）（南から）

図版２

１．道上古墳発掘調査前全景（西から）

２．同上発掘調査後全景（北西から）

１．道上古墳全景（南西から）

２．同上外護列石（北西から）

図版４

１．道上古墳外護列石（北東から）

２．同上内側列石（北東から）

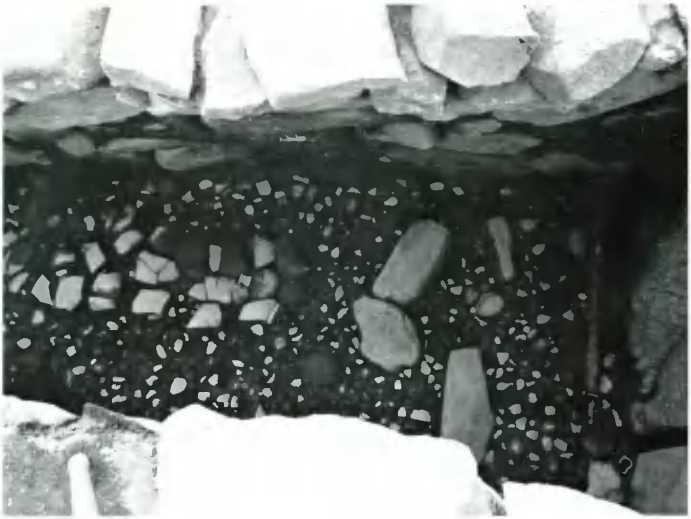
2．道上古墳石室内全景（北東から）

1．道上古墳閉塞石残存状況（南西から）

図版６

１．道上古墳遺物出土状態（南西から）

２．同上（北東から）



1．道上古墳石室内全景（南東から）

2．同上閉塞石間遺物出土状態（南西から）

図版８

１．道上古墳閉塞石下ピット及び墓道（南西から）

２．同上閉塞石下ピット（南西から）

１．道上古墳墳丘断面（北東から）

２．同上（北東から）

図版10

1．道上古墳墳丘断面（北西から）

2．同上石室掘り方（北東から）

1．1号石組土壙墓全景（南東から）

2．1号石組土壙墓と2号石組土壙墓（南東から）

図版12

1．2号石組土壙墓検出状況（南から）

2．2号石組土壙墓小礫除去後（南から）

1．2号石組土壙墓上部石組除去後（南から）

2．2号石組土壙墓墓壙完掘後（南から）

図版14

1．４号石組土壙墓と５号石組土壙墓（南東から）

2．同上（東から）

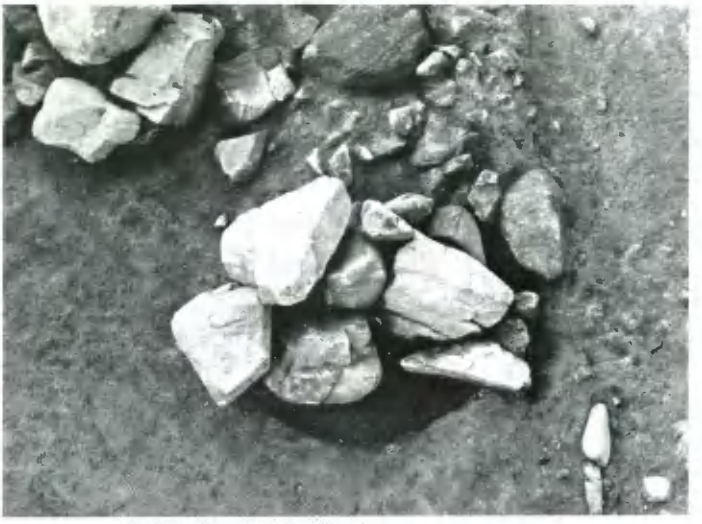
1．4号石組土壙墓（北東から）

2．4号石組土壙墓石組除去後（南西から）

図版16

1．3号石組土壙墓（北西から）

2．4号石組土壙墓（南東から）



1．５号石組土壙墓（南東から）

2．同上完掘後（南東から）

図版18

1．土壇遺構調査前全景（北西から）

2．同上調査後全景（南東から）

1．土壇遺構（南から）

2．同上（南東から）

図版20

1．土壇遺構（東から）

2．同上（北東から）

1．土壇遺構（北から）

2．同上（北西から）

図版22

4

4

17

18

19

23

21

25

32

9

道上古墳出土須恵器

11

37

36

30

1

28

2

29

5

34

道上古墳出土須恵器

図版24

道上古墳出土須恵器

39

45

46

40

31

43

42

41

道上古墳出土須恵器

図版26

15

8

16

9

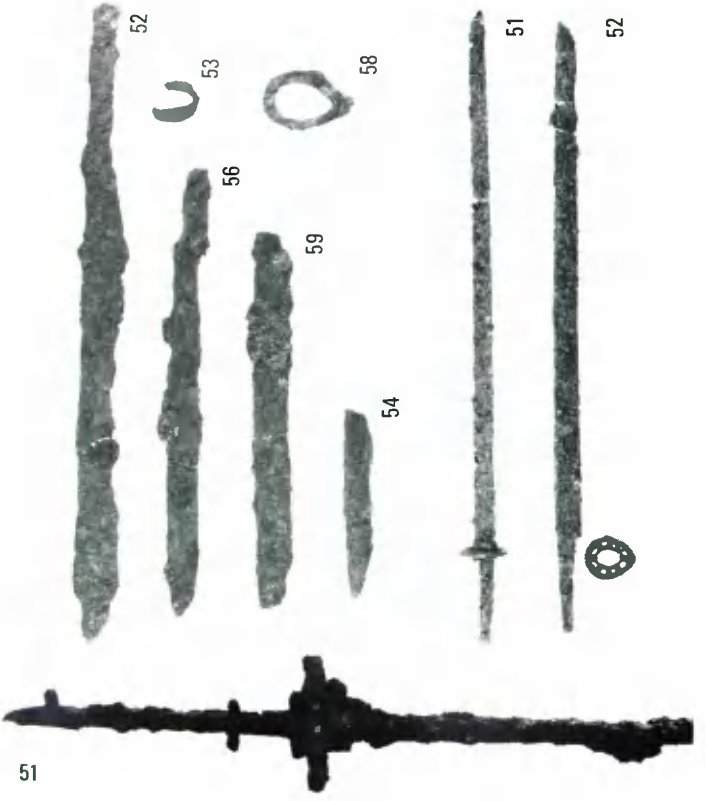
7

38

44

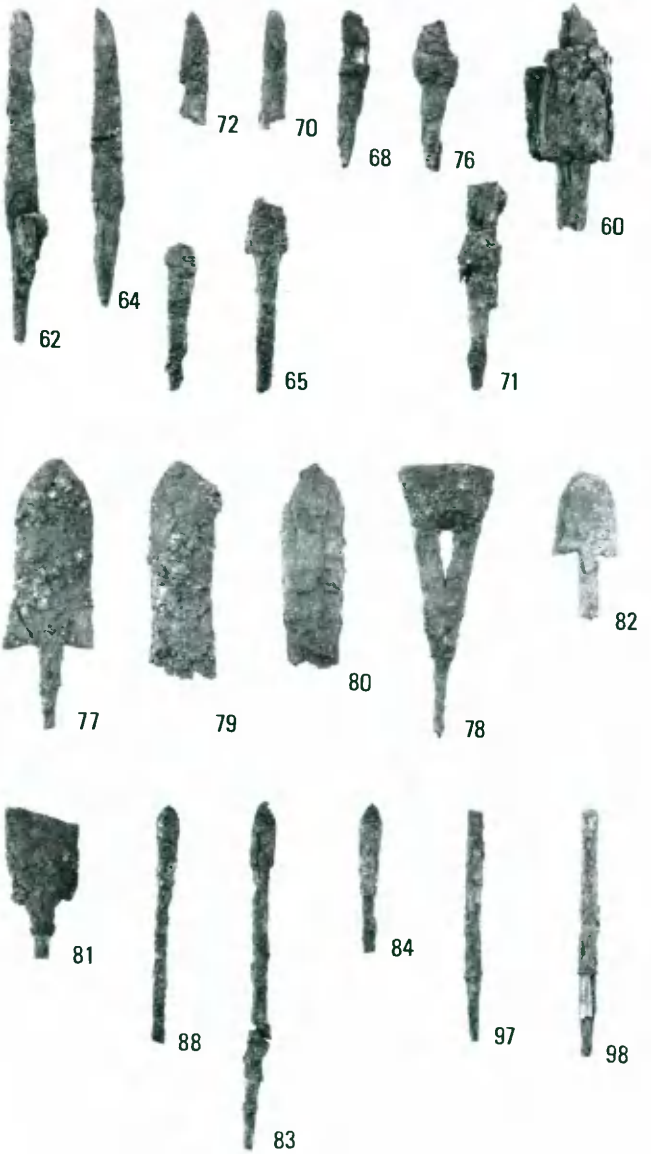
38

道上古墳出土須恵器



道上古墳出土遺物

図版28



道上古墳出土遺物

109

112

111

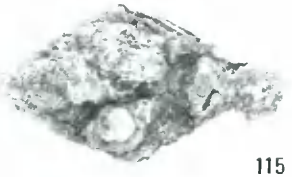
110

113

107

108

114


115

116

119

120

117

118

123

121

122

道上古墳出土遺物

図版30

1．2号石組土壙墓出土土器

2．土壇遺構出土遺物

横田東古墳群（64）

例　　言

1．遺跡名　横田東古墳群

2．遺跡の所在地　岡山県阿哲郡哲西町大字矢田字横田

3．調査期間　昭和51年5月26日～8月6日

4．調査　報告書担当者　伊藤　晃・山磨康平

5．遺物　図面等の保管場所　岡山県教育庁文化課分室（岡山市西古松265）

6．発掘調査にあたっては，清水建設株式会社には諸々の援助を受けた。文化課職員友成誠司，秀島貞康，岡田　博，浅倉秀昭，横田益代，大日南篤美，土屋民子等々のまた整理段階においては，井上弘，岡本寛久，坪井和江，細田美代子，細田美由紀，塩見康代，大沢さつき，灘波和児，近藤友子等々の援助を受けた。

目　　次

第１章　調査の経緯…… 274
第１節　調査の経緯と経過…… 274
第２節　日誌抄…… 274
第３節　立地と調査の概要…… 275
第２章　第１号墳調査の概要…… 278
第１節　古墳の構造…… 279
第２節　１号墳の出土遺物…… 279
(1)　須恵器…… 284
(2)　装身具類…… 292
(3)　鉄器類…… 297
(4)　１号墳墳丘内のその他の遺構…… 299
(5)　小結…… 300
第３章　第２号墳の調査の概要…… 301
第１節　古墳の構造…… 301
第２節　２号墳の出土遺物…… 302
(1)　須恵器…… 302
(2)　鉄器類…… 302
(3)　小　結…… 302
第４章　第１号墳と第２号墳間の小規模墳墓群…… 307
第１節　小規模土壙墓群の概要…… 307
(1)　３号墓…… 307
(2)　４号墳…… 310
(3)　５号墓…… 310
(4)　６号墓…… 310
(5)　７号墓…… 310
(6)　８号墓…… 312
(7)　９号墓…… 312
(8)　10号墓…… 314
(9)　11号墓…… 315
(10)　12号墓…… 315
(11)　13号墓…… 316
(12)　14号墓…… 316
(13)　15号墓…… 317

(14) 16号墓 …… 317
第2節 その他の遺構 …… 318
(1) 17号遺構 …… 318
第5章 まとめにかえて …… 320

図 目 次

第1図 横田東古墳群位置図および周辺の古墳群（$\frac{1}{5万}$） …… 275
第2図 横田東古墳群地形図（$\frac{1}{1000}$） …… 276
第3図 横田東古墳群地形図（$\frac{1}{200}$） …… 277
第4図 1号墳墳丘土層断面図（$\frac{1}{120}$） …… 278
第5図 1号墳石室実測図（$\frac{1}{40}$）——折りこみ——……挿図－1
第6図 1号墳出土須恵器(1)…… 280
第7図 1号墳出土須恵器(2)…… 281
第8図 1号墳出土須恵器(3)…… 282
第9図 1号墳出土須恵器(4)…… 283
第10図 1号墳出土勾玉・管玉・玉類…… 293
第11図 1号墳出土ガラス玉…… 294
第12図 1号墳出土大刀・鉄斧…… 297
第13図 1号墳出土金環・鉄器類…… 298
第14図 1号墳墳丘内イ遺構，ロ遺構…… 299
第15図 1号墳墳丘内ハ遺構…… 800
第16図 2号墳墳丘土層断面図…… 301
第17図 2号墳石室天井石実測図（$\frac{1}{40}$） …… 302
第18図 2号墳石室実測図（$\frac{1}{40}$） …… 303
第19図 2号墳石室平面図（$\frac{1}{20}$），遺物出土状況および，出土須恵器実測図…… 304
第20図 2号墳出土鉄器類…… 306
第21図 1・2号墳と土壙墓群配置図（$\frac{1}{200}$）—折りこみ—……挿図－2
第22図 3号墓（$\frac{1}{30}$） …… 307

第23図　4号墓（$\frac{1}{30}$）…… 312

第24図　5号墓（$\frac{1}{30}$）および出土遺物（須恵器（$\frac{1}{3}$），ガラス玉（現寸））…… 313

第25図　6号墓（$\frac{1}{30}$）…… 314

第26図　7号墓（$\frac{1}{40}$）および出土遺物（須恵器（$\frac{1}{3}$），鉄鏃（$\frac{1}{2}$））…… 315

第27図　8号墓（$\frac{1}{30}$）…… 316

第28図　9号墓（$\frac{1}{30}$）および出土須恵器（$\frac{1}{3}$）…… 317

第29図　10号墓（$\frac{1}{30}$）および出土遺物（須恵器（$\frac{1}{3}$），鉄器（$\frac{1}{2}$））…… 318

第30図　11号墓（$\frac{1}{30}$）…… 319

第32図　12号墓（$\frac{1}{30}$）…… 319

第33図　13号墓（$\frac{1}{20}$）…… 320

第33図　14号墓（$\frac{1}{30}$）および出土鉄器（$\frac{1}{2}$）…… 320

第34図　15号墓（$\frac{1}{30}$）…… 321

第35図　16号墓（$\frac{1}{30}$）および出土鉄器（$\frac{1}{2}$）…… 321

第36図　17号遺構（$\frac{1}{30}$）…… 322

第37図　2号墳墳丘内出土弥生式土器（$\frac{1}{4}$）…… 322

第38図　17号遺構周辺出土和鏡（御正体）…… 323

表　目　次

第1表　1号墳出土須恵器観察表…… 286

第2表　1号墳出土勾玉・管玉計測表…… 294

第3表　1号墳出土金環計測表…… 294

第4表　1号墳出土玉類計測表…… 297

第5表　2号墳出土須恵器観察表…… 807

第6表　5号墓出土ガラス玉計測表…… 313

図　版　目　次

図版１　東田東古墳群　周辺航空写真（$\frac{1}{10,000}$）
図版２－１　横田東古墳群　樹木伐採後の遠景（南から）
２　横田東古墳群　遠景（南から）
図版３－１　横田東古墳群　遠景（南から）
２　横田東古墳群　近景（北から）
図版４－１　横田東古墳群　近景（北から）
２　横田東古墳群　近景（南から）
図版５－１　１号墳　近景（東から）
２　１号墳　石室（南から）
図版６－１　１号墳　石室全景（南から）
２　１号墳　石室全景（北から）
図版７－１　１号墳　石室全景（南から）
２　１号墳　石室全景（南から）
図版８－１　１号墳　遺物出土状況（東から）
２　１号墳　羨道閉塞石除去後（南から）
図版９－１　１号墳　地山面土壙イ（弥生？）
２　１号墳　地山面土壙ハ（弥生？）
図版10－１　２号墳　近景（北から）
２　２号墳　墳丘盛土及び天井石出土状況（西から）
図版11－１　２号墳　天井石除去前全景（西から）
２　２号墳　天井石除去前全景（西から）
図版12－１　２号墳　天井石（南から）
２　天井石控石除去状況（南から）
図版13－１　２号墳　天井石除去状況（南から）
２　２号墳　天井石除去状況（北から）
図版14－１　２号墳　遺物出土状況（南から）
２　２号墳　遺物出土状況（北から）
図版15－１　２号墳　大刀，須恵器出土状況（東から）
２　２号墳　須恵器，鉄鏃出土状況（西から）
図版16－１　２号墳　掘り方（東から）
２　17号遺構　（東から）
図版17－１　１・２号墳間小規模墳墓群　蓋石除去前（南から）

図版17—2　1・2号墳間小規模墳墓群　蓋石除去後（南から）
図版18—1　1・2号墳間小規模墳墓群　蓋石除去前（東から）
　　2　1・2号墳間小規模墳墓群　蓋石除去後（東から）
図版19—1　3号墓（南から）
　　2　3号墓（東から）
図版20—1　4号墓　天井石を残した状況（南から）
　　2　4号墓　天井石を除去した段階（西から）
図版21—1　5号墓　蓋石の状況（西から）
　　2　5号墓　須恵器出土状況（北から）
図版　—3　5号墓　須恵器出土状況拡大（北から）
　　4　5号墓　掘り方（西から）
図版22—1　6号墓（南から）
　　2　6号墓（東から）
　　3　6号墓（西から）
図版23—1　7・8号墓　蓋石除去前（東から）
　　2　7・8・13号墓　蓋石除去後（東から）
図版24—1　7号墓　蓋石（東から）
　　2　7号墓　蓋石（南から）
図版25—1　7号墓　横穴部（東から）
　　2　7号墓　横穴部（東から）
図版26—1　8号墓（北側から）
　　2　8号墓（上側が第12号墓，東から）
図版27—1　8号墓　蓋石除去後（上方第12号墓東から）
　　2　8号墓　横穴部（東から）
図版28—1　9号墓全景（東から）
　　2　9号墓蓋石（東から）
図版29—1　9号墓蓋石（上から）
　　2　9号墓横穴部（東から）
図版30—1　10号墓　蓋石（東南から）
　　2　10号墓（南から）
図版31—1　10号墓横穴部（東から）
　　2　10号墓須恵器出土状況（東から）
　　3　10号墓　鉄器出土状況（南から）
図版32—1　9・10・11号墓全景（北東から）
　　2　11号墓全景（東から）

図版33—1　12号墓（北から）
2　12号墓（北から）
3　12号墓（西から）
図版34—1　13号墓と8号墓（下）の関係（東から）
2　13号墓　蓋石（南から）
3　13号墓土壙（東から）
図版35—1　14号墓（西から）
2　14号墓（西から）
3　14号墓（南から）
図版36—1　15号墓（西から）
2　15号墓（東南から）
図版37—1　16号墓（西から）
2　16号墓（南から）
図版38　1号墳出土須恵器（1）
図版39　1号墳出土須恵器（2）
図版40　1号墳出土須恵器（3）
図版41　1号墳出土須恵器（3）
図版42　1号墳出土須恵器（4）
図版43　1号墳出土装身具類（最下段6個は5号墳出土）
図版44　1号墳出土鉄器類
図版45　2号墳出土遺物
図版46—1　2号墳出土鉄器
2　5号墓（5—1・2）9号墓（9）出土須恵器
図版47—1　7号墓（7—1・2）10号墓（10—1・2）出土須恵器
2　各土壙出土鉄器類
図版48　17号遺構周辺出土和鏡（御正体）

第１章　調査の経緯

第１節　調査の経緯と経過

昭和51年５月25日岸本下遺跡の調査を終了した伊藤，山磨の両名は引きつづいて，新発見された二本松遺跡の調査を開始した。しかしながら，二本松遺跡調査途中から標記の横田東古墳群と併行して調査を進めざるを得ない状況に追いこまれていた。二本松遺跡は新発見の遺跡でその処理を急がれており，また横田東古墳群は昭和50年度調査完了の予定であったが，各遺跡における調査範囲の拡大，延長などによりその年度内に調査を着手することができなかった。昭和51年度になり，縦貫の調査員も10名から14名と増大したけれども，新見～哲西間で当初８遺跡だったものが32遺跡に増加し対応することができない状況であった。このため，昭和51年４月以降にデスクで対応することになったのであるが，相次ぐ新発見遺跡の処理に追い回され，仲々着手することができなかった。工事を受け請った清水建設も大量の作業員を大倉遺跡等へ投入し，そこの調査が終了次第横田東古墳群にまわってもらう約束であった。一方では地崎工業の応援を受け二本松遺跡を，また横田東古墳群は清水建設の応援を受け，併行して調査を行わざるを得ない状況に追いこまれていたのである。

業者に委託していた地形測量が終了した５月26日から，１・２号古墳とも四区画に分け表土除去，大きな木の切株の抜き取りから始め，８月６日に調査を終了するまで行った。その間１・２号墳を調査対象にしていたものが１・２号墳間の狭い場所から特殊な遺跡が続出し調査期間も延長せざるを得なくなり，横田遺跡の事務所に泊りこんで各現場を担当していた調査員には諸々の援助を受けやっと終了することができた。

第２節　日　誌　抄

○５月20日～25日　測量会社に測量委託し，25cmコンタで墳丘地形測量を行う。

○５月26日（水）　墳丘清掃，写真撮影。

○５月27日～29日　１・２号墳を４区画に分け表土除去作業。

○５月31日（月）～６月５日（土）　掘り下げ続行，２号墳は木棺直葬の可能性あり数cmずつ掘り下げる。

○６月７日（月）～12日（土）　掘り下げ続行，２号墳天井石らしき石組み検出，清掃，４区画ともこの面まで掘り下げを急ぎ，清掃，写真撮影。

○６月14日（月）～19日（土）　１号墳横穴式石室上面検出，天井石，左側壁は完全に抜かれているようである。２号墳，天井石までの縦横断写真，実測。２号墳，天井石実測。

○６月21日（月）～23日　周溝部掘り下げ，２号墳天井石。

○6月24日（木）　2号墳天井石除去，竪穴式石室である。石室内にはほとんど埋土がなく，人頭骨，須恵器などそのままの状態でも見れるほどである。

○6月25日～26日　1号墳石室内埋土除去，上面からも遺物が見られ撹乱を受けているのですべての埋土を唐箕でふるい玉類等の小さいものの検出。2号墳石室内清掃。

○6月28日（月）～7月2日　1号墳石室内掘り下げ，2号墳石室内清掃，写真実測割付け，実測。

○7日5日（月）～10日　数人で1号墳石室内埋土ふるい続行，石室床面清掃，羨道閉塞石がきれいに残されている。1号墳北側，および1号墳と2号墳の間から石組遺構が検出されはじめ，すでに除去してしまった石も一部あったが1・2号墳間を全面的に掘り拡げる。

○7月12日（月）～17日（土）　1号墳石室写真撮影，割付け，実測開始，蓋石土壙群清掃，写真を順次取っていく。箱式石棺状になるものあり，単なる土壙のみのもの，周溝を持つものなど種々あり，横から石を塞いだすものは横穴状になる。1・2号墳間に10ケ所以上あるようである。

○7月19日（月）～31日（土）　1・2号墳間の墓壙群の清掃，写真，実測，蓋合除去を順次行う。

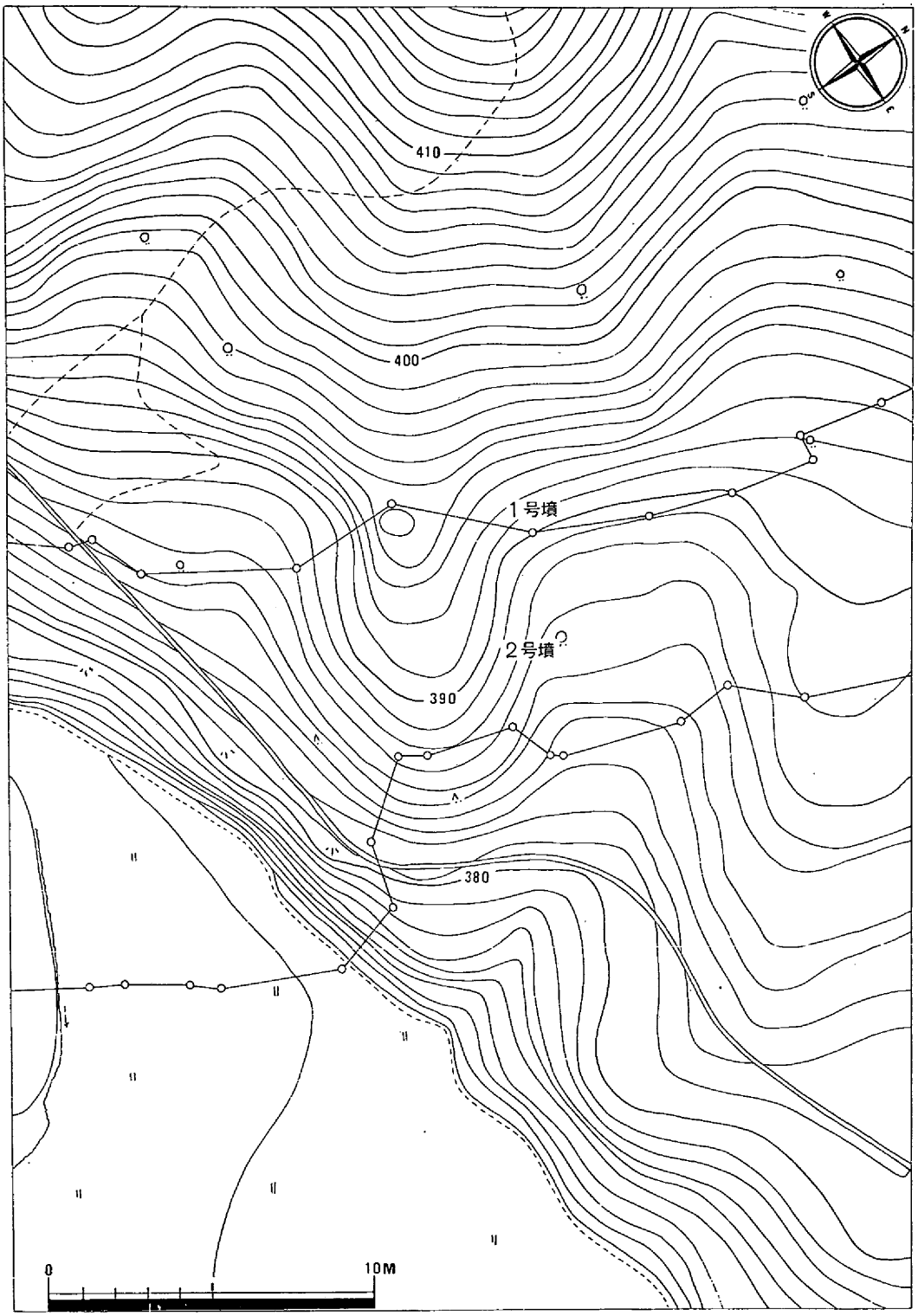
○8月2日（月）～6日（金）　墓壙群の写真撮影，割付け，実測，続行。一部補修実測部分を残して作業員の人達は御供川遺跡へ移ってもらい，残務を秀島，友成両名に託し，伊藤，山磨両名も帰岡し，一応の調査を終了する。

○昭和53年1月5日～3月20日まで縦貫道関係の最後の報告書に掲載予定のため文化課分室にて報告書作成のため整理作業を行う。

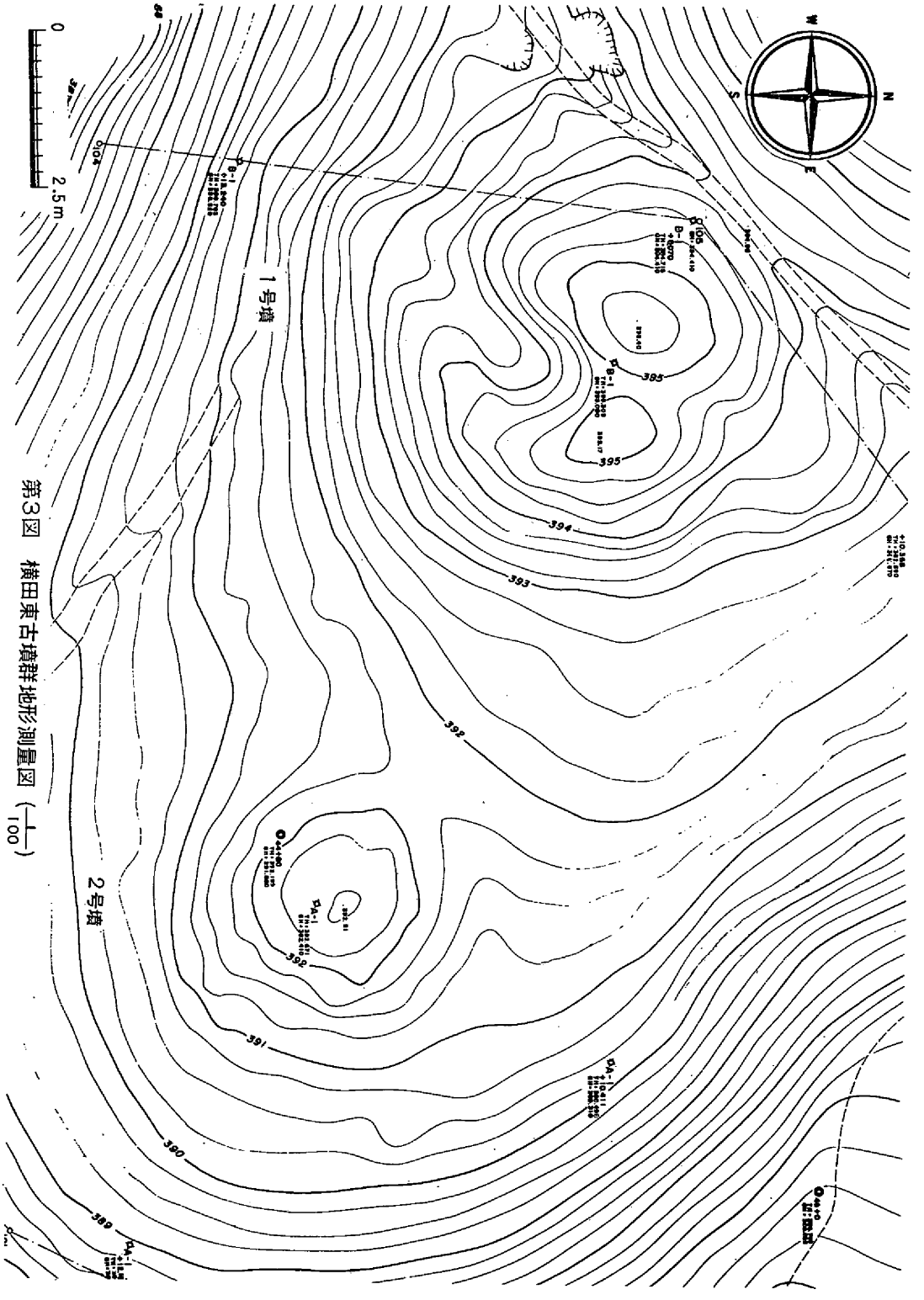
第3節
立地と調査の概要

哲西町を貫流する神代川は狭い谷に沿って南から北に流れる。神郷町下神代で西川と合流し，親見市正田で高梁川に合流し蛇行しつつ南流する。この神代川に沿うようにして芸備線，国道181号線が走る。中国縦貫道もこの左(西)岸の山沿いに縦断して計画されている。横田東古墳群

第1図　横田東古墳群位置図および周辺の古墳群（1/50000）



第2図　横田東古墳群地形図（$\frac{1}{1000}$）



第3図　横田東古墳群地形測量図（1/100）

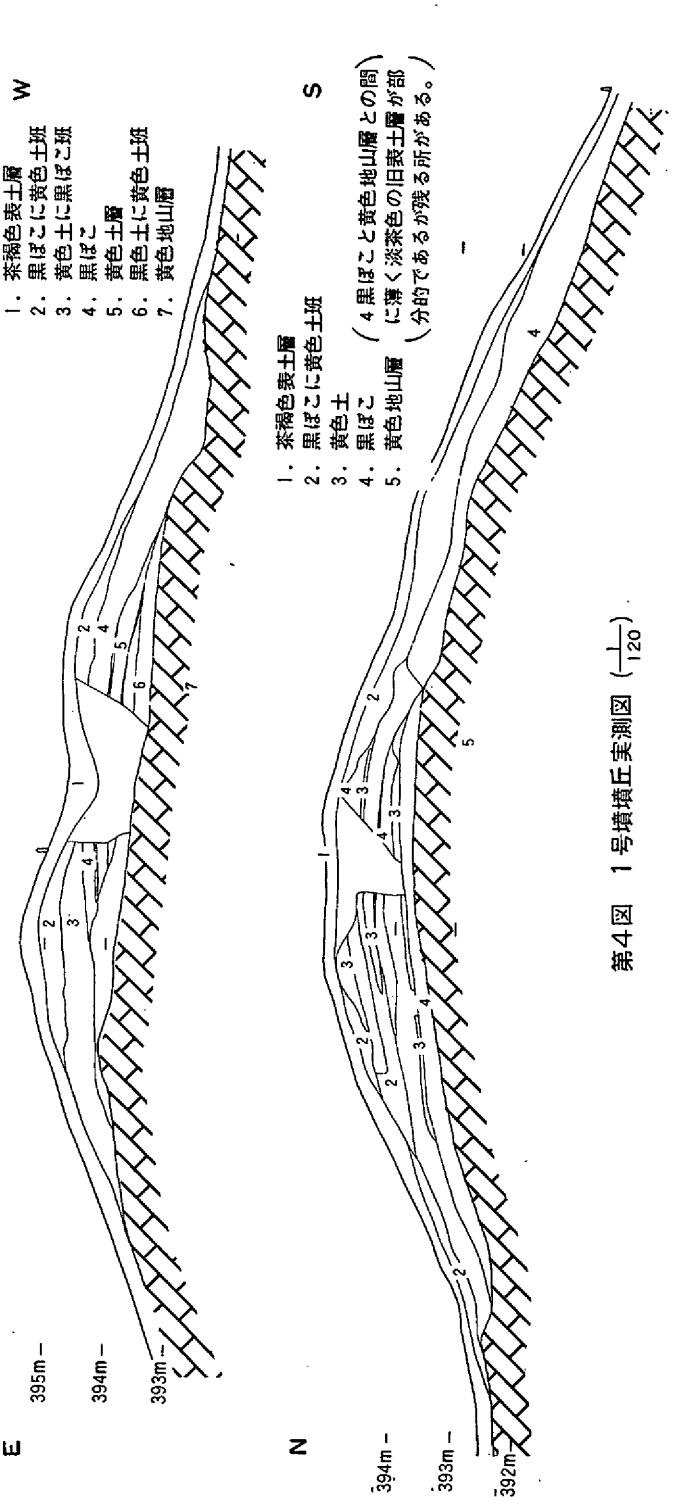
は哲西町大字矢田字横田に存し，縦貫道に係る分布調査の際，あるいはその後の昭和49年度に行った路線内分布調査においてもブッシュ等で山に入ることができず発見されていなかった。縦貫道関係の工事が随所で始まり，樹木が伐採された50年４月段階に新たに２基の古墳が発見された。

横田東古墳群の西側の山塊は標高 500m前後からなり突出する多くの支丘上には現在まで多くの横穴式石室を主体とする古墳群，横穴を主体とする古墳群などが多数確認されている。この古墳群は東へ突出した１つの小支丘上に位置し，１号墳が標高 395m付近に位置し，２号墳は１号墳より３m低く 392m付近に位置する。

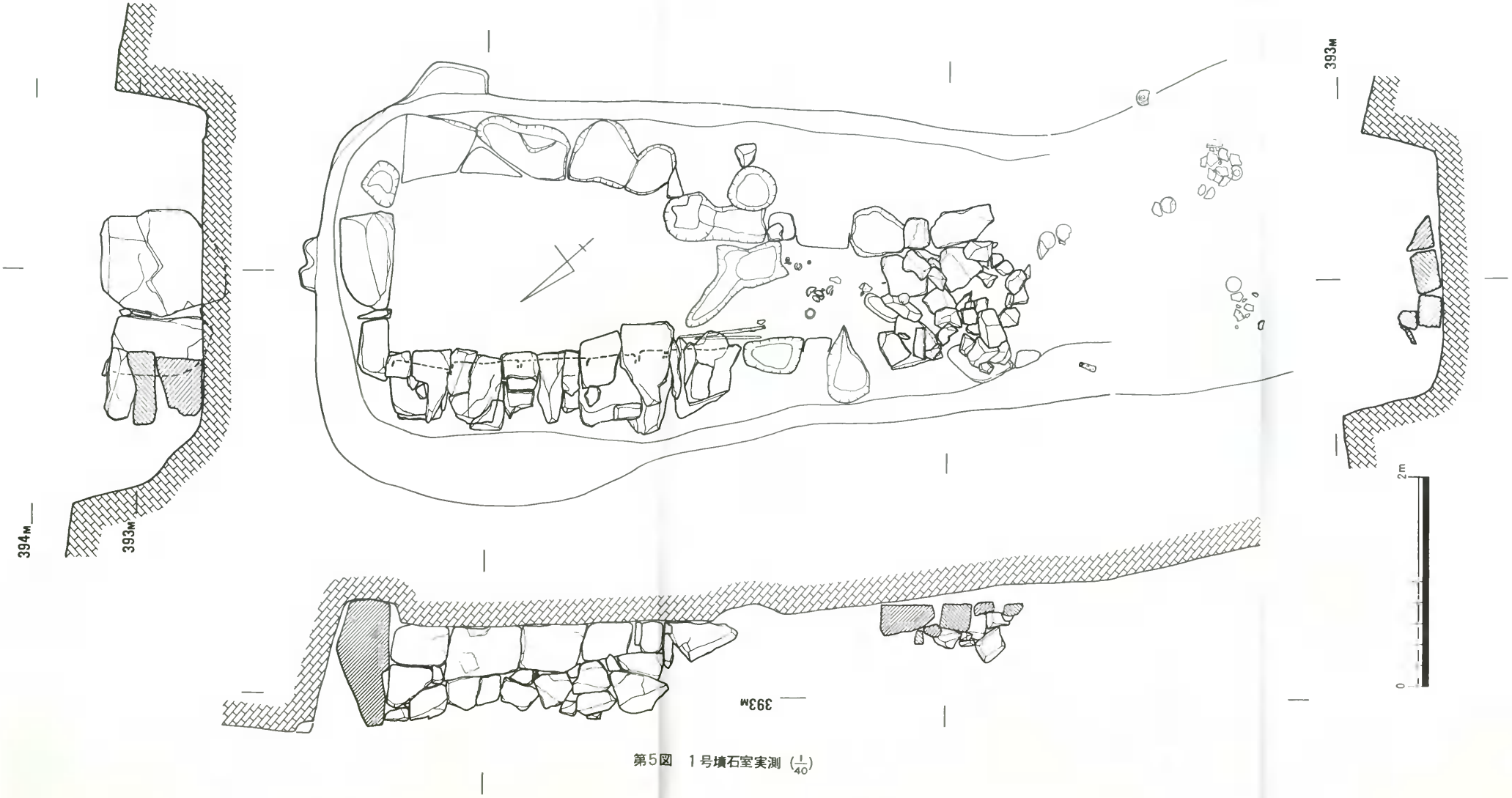
第２章 第１号墳の調査の概要

第１節 古墳の構造

墳丘測量時において直径15～16m，高さ約３m程を呈していた。内部主体は横穴式石室と考えられ頂部はかって石



第４図　１号墳墳丘実測図（1/120）



第5図　1号墳石室実測 ($\frac{1}{40}$)

室石材を取り出したためラクダの背こぶ状に２つに別れ，南の方（開口部）が凹んでいた。西側２～４ｍは用地外で調査を行っていない。

頂部は標高 395.4ｍをはかり２号墳より約３ｍ近く高くなっている。

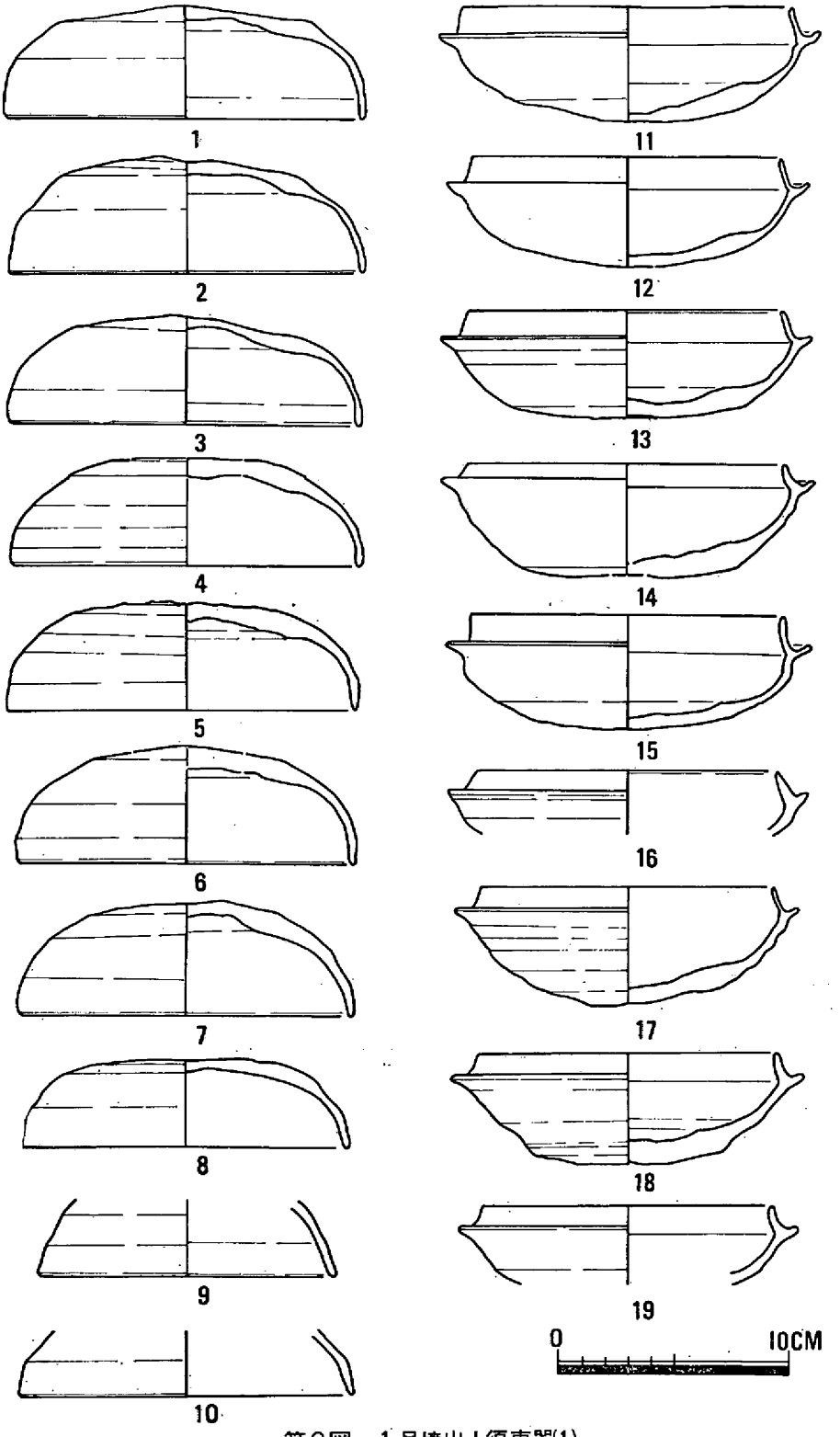
調査結果，周溝も含め直径16ｍでほぼ中央部南寄りに略南北方向に主軸をもち，南に開口する横穴式石室である。石室は天井石および左側壁は玄室，羨道部ともほとんど抜き取られており，わずかに西よりの奥壁一枚と，右側壁が１～３段残存していたのみである。石材抜き取り痕跡により左片袖式であることが判明した。掘り方は幅約４ｍ，東側で４ｍ，西側で７ｍ残存している。奥壁部で黄色地山層を1.2ｍ掘り下げている。北側から東側にかてけ幅１ｍ，深さ40㎝の周溝を持つが南側でははっきりしない。

玄室奥壁部で1.7ｍ，羨道部との境で1.5ｍ，長さ2.1ｍ，羨道部幅1.0ｍ，長さ3.2ｍ残存している。側壁は右側側壁が三段残存しているのみで，羨道部では一段の所もあった。羨道には羨道閉塞時の角礫が一かたまりになって残存しており，遺物もこの周辺が荒されない状態では最も多く残存していた。閉塞石下からも多く出土している。

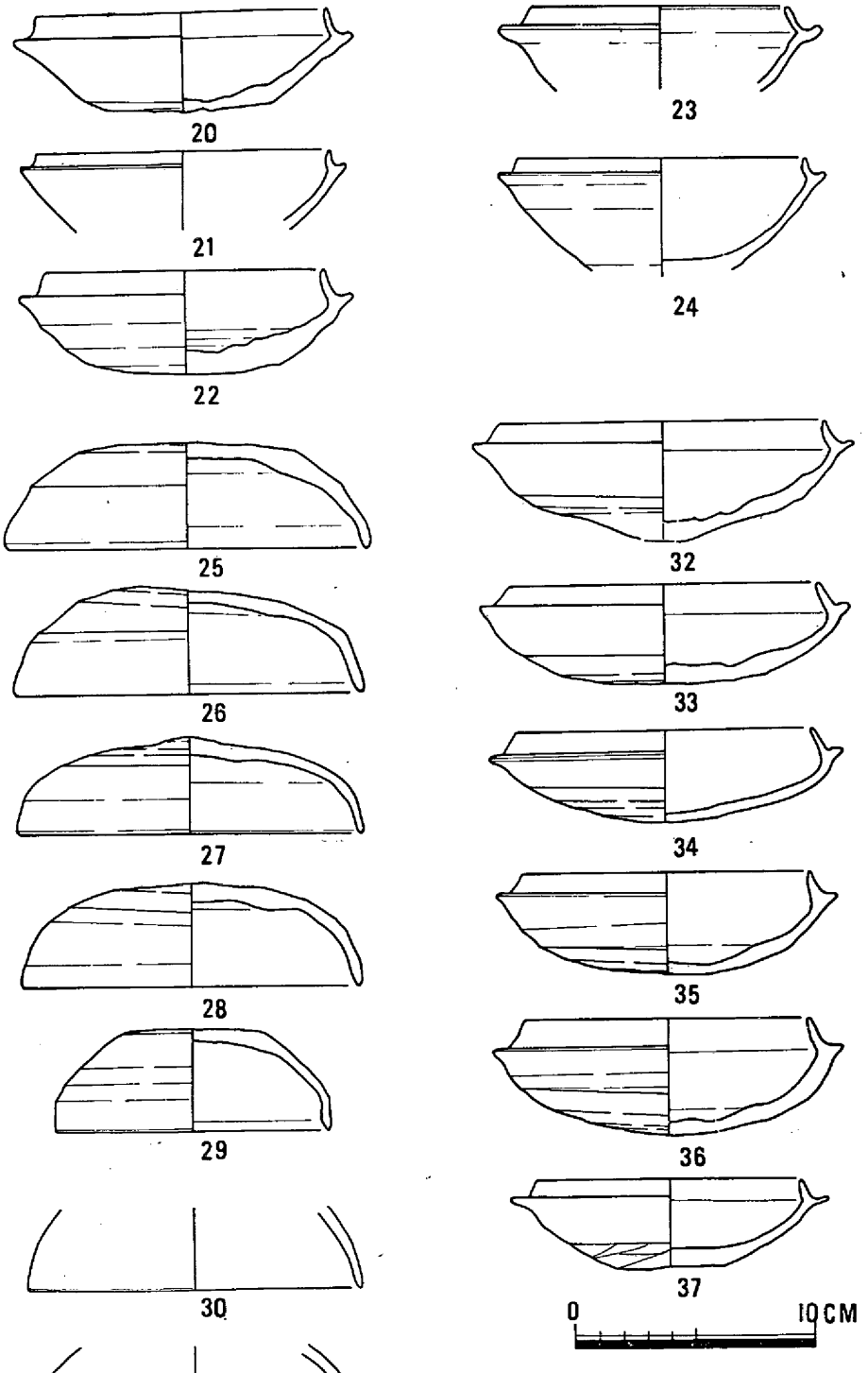
第２節　第１号墳の出土遺物

玄室内において生きている状態で出土した遺物はほとんどなく大刀二振のみである。あとは羨道閉塞石下から須恵器数点とガラス玉数点が出土しているのみでほとんどの遺物は，追葬の時点で中のものを羨道部前方へかき出しており，その地点からの出土が最も多く，近世以降において石室材を抜き取る時点に乱された埋土中からも出土している。個々の須恵器については一覧表に付すが，特徴的なことは，古墳の築造時と思われる６世紀中葉に含まれるもの何点かあり，それ以降杯蓋に宝珠つまみがつく７世紀中頃まで連続はしていないが追葬が行われている。又この地方のみの例かどうかわからないが，杯蓋天井部外面，杯身底部外面には篦削りを施すものと全く施さないものが見られる。横田東１号墳出土の須恵器杯蓋身の中には両者が混在して見られ時期的な差であるのか，地域的な特色であるのか興味深い点である。

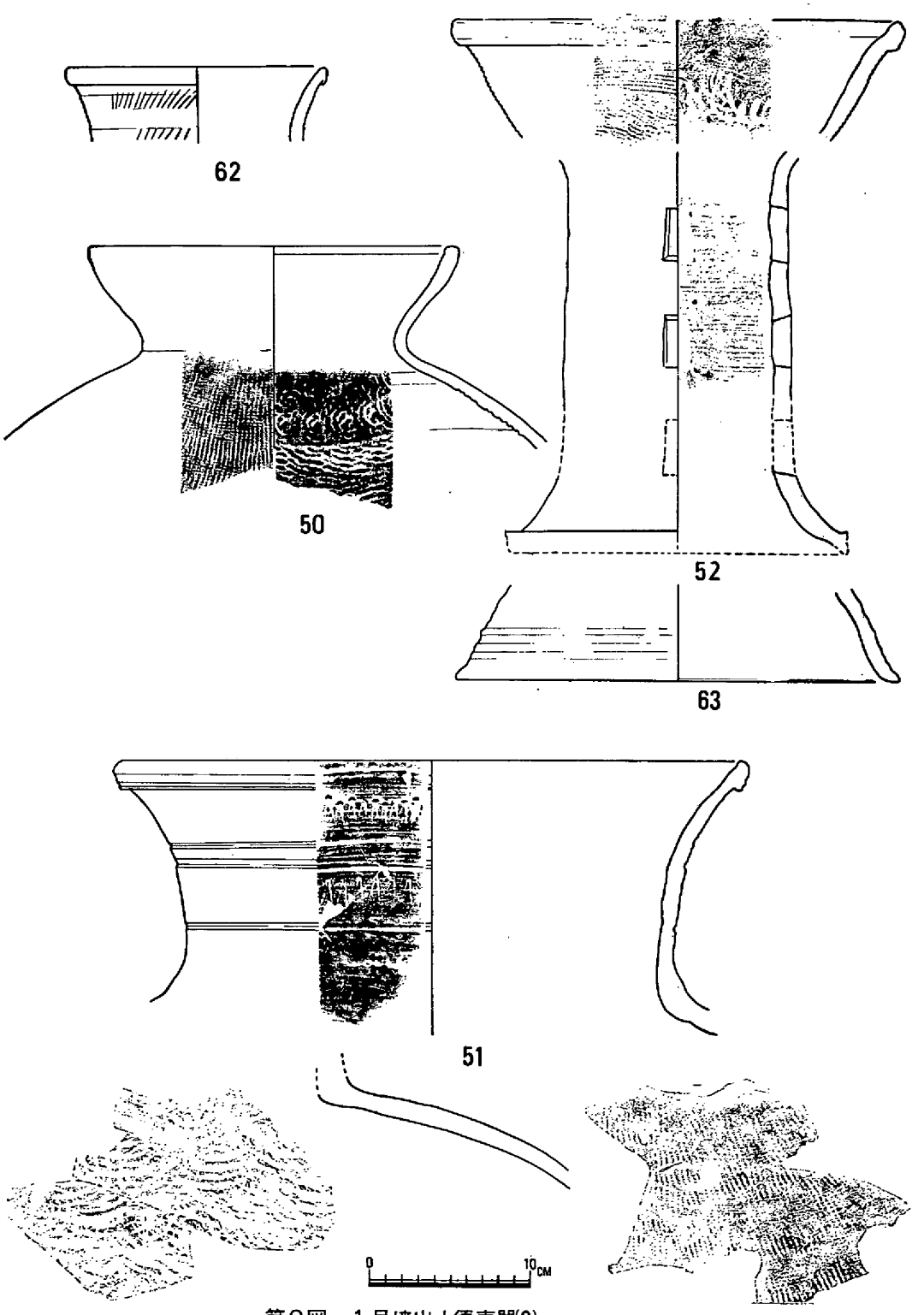
須恵器以外の出土品としては，金環，勾玉，管玉，石玉，ガラス玉などの装身具類，大刀，鉄鏃，刀子，鉋などの鉄器類の出土がある。



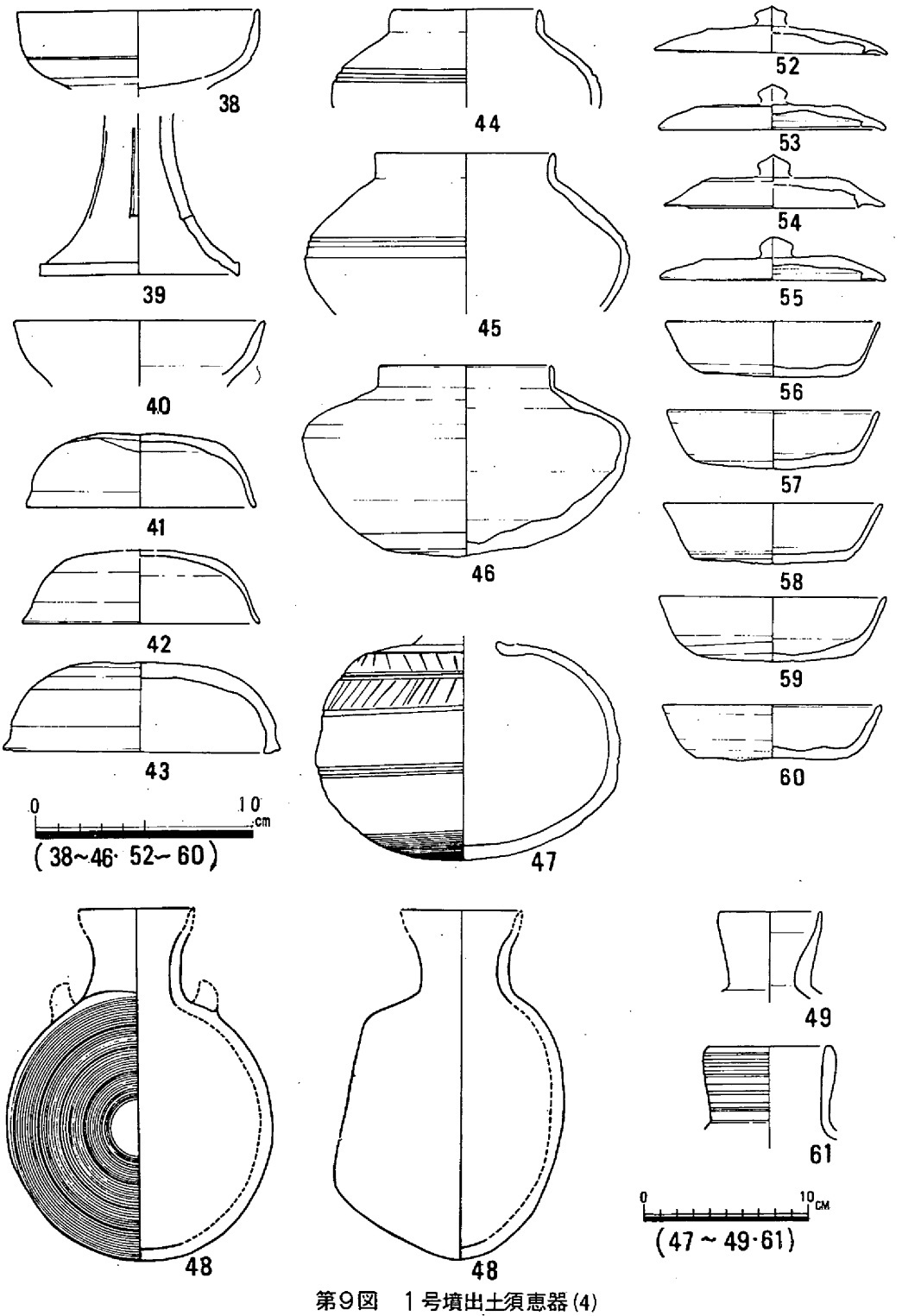
第６図　１号墳出土須恵器(1)



第7図　1号墳出土須恵器2)



第８図　１号墳出土須恵器(3)



第9図　1号墳出土須恵器(4)

(1) 須　恵　器

第1表　1号墳出土須恵器観察表　（単位・cm）

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
1	杯蓋	15.1	4.85	天井部は平坦面をなし，粘土紐の凹凸がわずかに残る。内外面平坦部は刷毛状工具による仕上げを行い，外面に篦削りは見られない。小砂粒を多く含む。	暗灰色	灰色	羨道部前方　口縁 1/2 残
2	〃	15.0	5.0	わずかに丸味をもつ天井部から口縁部にいたる。内外面とも粘土紐の凹凸が残り，強くなでているが，篦削りは見られない。小砂粒を多く含む。	黒～青灰色～灰黄色	暗灰色	羨道部前方　口縁 1/4 欠
3	〃	14.8	4.7	天井部は平坦になるが，中央部がわずかに突出する。縁色の自然釉がかかっているが，ほとんど剝離している。口縁部は丸くおさめる。	灰色	淡灰色	羨道部前方　ほぼ完形
4	〃	14.7（?）	4.5（?）	内外面とも天井部と体部境が段を成す。口縁部は強く内彎し，端部はおさめる。	灰色		羨道部前方　1/8
5	〃	14.7（?）	4.6（?）	天井部内外面とも粘土紐の凹凸がより残る。内面は丁寧なでを行っているが，天井部は篦状工具による刺し込み跡が見られる。	灰白色	灰白色	羨道部　1/8
6	〃	14.2（?）	4.7	天井部内外面とも粘土紐の凹凸が残り，丸味をもって口縁部にいたる。	淡灰茶色	暗灰色～灰色～灰黄色	羨道前方　1/8 強残
7	〃	14.0～14.2	4.9	天井部外面は荒く，内面は一段指頭圧痕によって凹んでいる。全体にぶ厚い感じである。内面ほぼ全域と外面口縁部4cmぐらいまで，なで仕上げを行う。	暗灰黄色	暗灰色	玄室　ほぼ完形　セットB
8	〃	14.0（?）	3.7（?）	平坦な天井部から途中で稜を持って口縁部にいたる。天井部に平行たたきを残す。内面は丁寧なでを行う。	灰色	灰黒色	羨道部　口縁 1/8

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
9	杯蓋	14.0(?)	3.4(?)		灰色	灰白色～灰黒色	羨道部前方 $\frac{2}{3}$
10	〃	13.7(?)	4.25		灰色	灰白色～灰黒色	羨道部前方 $\frac{2}{3}$
30	〃	12.4(?)	3.25		灰黒色		$\frac{1}{3}$強残
31	〃	14.0～17.0	2.8		暗灰色	灰黒色	小破片 ひずみあり
11	杯身	14.2	4.8	口縁部は薄く垂直に近いが，わずかに内傾して 1.2cm程立ち上がる。受部はやや斜め上方向きに内彎する。底部は粘土紐の凹凸が残り，ぶ厚い。	暗灰色	灰黒色	羨道部
12	〃	13.3	4.7	口縁部は薄く，わずかに内傾して立ち上がる。受部はやや斜め上方を向く。天井部は丸味を持っている。胎土内に小砂粒が多く混入し，荒い感じがする。内外面ともなでによる仕上げを行う。	灰色	灰色	盗掘土 $\frac{1}{2}$残
13	〃	13.6	4.6	口縁部は薄く，わずかに内傾して立ち上がる。受部はやや斜め上方に向く。底部は平坦になり，なでによって仕上げている。小砂粒を多く含む。	青灰色	青灰色	羨道部 $\frac{1}{3}$残
14	〃	13.6	4.8	口縁部は内傾し，わずかに外反する。受部はやや斜め上方に向く。底部は平坦になり，体部はなでを施すが，凹凸を残し受部にいたる。	淡灰色	灰色	羨道部 $\frac{2}{3}$残
15	〃	13.4	4.9	口縁部はわずかに外反して立ち立がる。受部は上方に向く。底部は篦起し後，刷毛で仕上げを行う。	灰色	青灰色	羨道部 $\frac{1}{2}$残
16	〃	13.0	—	口縁部はきつく内傾する。受部は斜め上方に向く。	淡青灰色～灰色		羨道部前方 $\frac{1}{3}$弱
17	〃	12.7	5.0	口縁部は内傾するが，わずかに外反ぎみである。受部は斜め上方に向く。底部は平坦になり，体部外面は小さな凹凸を残して受部にいたる。	淡灰色	青灰色	羨道部前方 $\frac{2}{3}$残

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
18	杯身	12.9	4.7	口縁部はやや外反して立ち上がる。受部はほぼ水平に近い。底部外面は篦起し後そのままで残し，ぶ厚く凸部をなしている。底部内面は羅線状に粘土紐なでの凹凸を残す。	暗灰色	灰色	玄室 ほぼ完形 セットB
19	〃	12.5（？）	—	口縁部立ち上がりは外反しつつ内傾する。受部はやや斜方に出，少し内彎し先端は丸くおさめる。	灰色	灰色	羨道部 $\frac{1}{2}$残
20	〃	12.2	4.1	口縁部立ち上がりは内傾し，途中で垂直に立つ。受部は稜を持って丸くつまみ出している。底部は篦起しのままで残り土が付着している。	灰色	淡灰色	羨道部 ほぼ完形
21	〃	12.3（？）	—	口縁部立ち上がりは短く，外反する。受部も短く，斜め上方にのびる。	灰黒色		羨道部前方 $\frac{1}{3}$残
22	〃	11.8	4.3	口縁部立ち上がりは内傾し，わずかに外反する。受部は斜め上方へのびる。底部は篦起しのままで残り，平坦である。内面はなでによって羅線状に凹凸がつく。	灰白色	灰白色	生焼け品である。$\frac{1}{3}$強残 と対を成すか。
23	〃	10.6（？）	—	口縁部立ちが上りは内傾し，端部は丸くおさめる。受部は斜上方に内彎しつつのび，端部は丸くおさめる。外面全面に自然釉が付着している。	灰色	灰白色	羨道部前方 $\frac{1}{3}$残
24	〃	9.0十（α）（？）	—	口縁部立ち上がりは短く外反する。受部は斜上方に出，端部を丸くおさめる。	灰黒色		羨道前方 $\frac{1}{3}$弱残
25	杯蓋	15.0	4.4	口縁部はすんなりと引き上げ，天井部は丁寧な篦削り（左回り）を行い，丸く仕上げる。	暗灰色	暗灰色	羨道前方 $\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$残
26	〃	14.5～54	4.5	天井部から口縁部にかけては稜をもたずすんなりしているが，天井部全面にわたって丁寧	暗灰色	暗灰色	羨道部ほぼ完形

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
				な篦削り（左回り）を行っている。内面は指頭圧痕による凹凸が残り，なでによる調整を行う。			
27	杯蓋	14.4	4.0	天井部は雑な篦削り(左回り)を行い，凹部は削り残している。内面は，粘土紐の凹凸，残粘土が貼り付いたりしている。口縁部は丸くおさめ，なでによる仕上げ調整を行う。	灰色	淡青灰色	羨道部 $\frac{2}{3}$強残
28	〃	14.15	4.3	天井部は丁寧な篦削り（左回り）を行い丸く仕上げている。内面は粘土紐の凹凸が残る。	暗灰色	暗灰色	羨道部 ほぼ完形
29	〃	11.5(？)	—	口縁部は短く，垂直になる。天井部は平坦になり篦起し後なでているが荒い。			羨道部前方 $\frac{1}{3}$強残
32	杯身	13.6	4.9	口縁部は内傾し，外反する。受部は斜上方に突出する。底部中央が突出する。底部から体部にかけて2条程の篦削り（左回り）を行うが，底部は削り残す。小砂粒が多く砂っぽい。	淡灰色	淡灰色	羨道部 $\frac{1}{2}$強残
33	〃	12.8	4.1	口縁部は内傾し，受部は水平に近く丸く突出する。底部から受部にかけて2回の篦削（左回り）を行うが，底部中央は削っていない。	灰色	灰紫色	羨道部 $\frac{1}{3}$残
34	〃	12.4	3.8	口縁部は内傾し，受部は水平に近く突出する。底部は篦削（左回り）を行う。底部には濃緑色の自然釉がかかり剥離している。	淡青灰色	淡灰色	完品
35	〃	12.0	4.2	口縁部立ち上がりは内傾し，わずかに外反する。受部は水平になり突出する。底部は丁寧な篦削り（左回り）を行う。内面には同心円紋スタンプが見られる。	灰色	暗灰色	完品

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
36	杯	11.8	4.7	口縁部は鋭く，内傾して立ち上がる。受部は水平になる。底部は丁寧な篦削（左回り）を行う。全体に厚手で鈍いつくりである。	灰色	淡茶灰色	盗堀土 ほぼ復元完形
37	〃	11.2	3.7	口縁部立ち上がりは内傾し，受部はわずかに斜め上方に向く。底部は平坦になるが，底部から受部にかけ何条にも別れて篦削り（左方向）を行う。	暗青灰色	淡灰黒色	口縁$\frac{1}{8}$弱
38	〃	11.1(?)	—	無蓋高杯口縁部小破片である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。底部はなであるいは篦削りにより砂粒が動いている。	灰(黒)色	淡灰色	羨道部　小破片
39	高杯脚部	脚径9.2	—	長方形の透かしを四箇持つ長脚一段あるいは二段の脚部片である。全体的に丁寧なつくりである。	淡灰色	淡灰色 ～黒色	羨道部　$\frac{1}{2}$～$\frac{2}{3}$残
40	甕	11.4(?)	—	口縁部は稜を持たず，外開きする。甕の口縁部と思われる小破片である。	灰白色	黒色	羨道部前方　$\frac{1}{8}$残
41	薬壷蓋	10.5	3.3	天井部からなだらかに口縁部にいたり，口縁端部がわずかに外に張り出す。天井部は一周しないが左方向の篦削りを行って調整している。内外面とも丁寧ななでを行う。小砂粒が多く含まれる。	灰色～ 灰黄色	灰黒色	羨道部　口縁$\frac{1}{2}$欠
42	薬壷蓋	10.8	3.3	天井部は平坦に近いが，指頭圧痕で調整している。口縁部が少し外に張り出す。内外面とも丁寧ななでを行う。	灰色～ 灰黄色	暗灰色	羨道部 口縁部，天井部一部欠
43	〃	11.8	4.0	やや丸味を持った天井部から口縁部にいたり，口縁部がわずかに外に張り出す。口縁端部は0.7cmあるが内側で少し高くなっている。天井部は一周しないが左方向に篦削りを行い調整している。内外面とも丁寧ななでを行う。	灰黄色	淡灰黄色	羨道部　口縁$\frac{1}{8}$残 天井部有

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
44	薬壷	6.8（?）	—	1㎝程の直立する口縁部を持ち，肩部がよく張り，肩部と体部境に2条の沈線をもつ。	淡灰色	淡灰色	羨道部前方　口縁$\frac{1}{8}$残
45	〃	8.2（?）	—	1.3㎝程の直立する口縁部を持ち，肩部が張り，肩部と体部境に2本の沈線をもつ。	暗灰色	暗灰色	羨道部前方　口縁$\frac{1}{8}$残
46	〃	8.0	8.7	1㎝程の直立する口縁部をもち肩が張り，最大径は15㎝を測る。底部は篦削りを行ない内面底部は篦削りで削り過ぎたのか外から補修を行い，その部分に窯壁片が付着している。蓋と重ね焼きした部分のみを除いて肩部に濃緑色の自然釉がほぼ全体にかかる。	淡灰色	淡灰色	口縁部　一部欠
47	壷		(残13.5)	焼成が悪く灰白色を呈する。口縁部を欠くがあとは残存している。肩部に篦状工具による刻目文が2列めぐる。胴部最大径19㎝程で，高さが少し短いがほぼ球形を呈する。	灰白色	灰白色	
62	〃			口縁部は外に開き短い。端部は玉縁状に折り曲げている。口縁部外面に櫛状工具による刻目文がめぐる。	淡灰色～灰色		
48	提瓶	?	21㎝前後	口縁部は不明である。横にした状態ででつくられ天井部までつくり，その穴を塞ぎ，横方向に口縁部を取り付けている。そのため造られた時の底部は平坦で，天井部は丸くなっている。天井部に櫛状工具による沈線文がきれいにめぐっている。	灰色～灰黒色	灰色～青灰色	
49	〃	6.2（高4.5）	—	口縁部は外に開き丸くおさまる。あとは体部残片多数である。	青灰色	淡青灰色	
61	〃	7.5～8.0（高5.0）	—	口縁部は直立し，端部は水平面をなす。外面に櫛状工具による沈線がめぐる。胴部にも同じものがめぐらされている。	淡灰色	淡灰色	

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
50	中甕	22.0		口縁部は外に開き6㎝程たちあがる。体部は外面格子状たゝき，内面には青海波文のたゝき。である。	淡灰色	淡灰色	×の窯印が口縁部内面につく。
51	大甕	37.6		口縁部は外開きし，15㎝程たちあがる。外面には篦によって雑な波状文を2段にめぐらす。口縁端部は外に折り曲げ玉縁状をなす。体部外面は格子状たゝきの上をなで仕上げを行う。内面は青海波文たゝきである。	灰色	灰色	
52	器台	27.0	(33.0～35.0)	浅い鉢状の杯部に，筒状の胴部をもち，脚部がわずかに開く。口縁部は外に折り返し玉縁状をなす。体部外面は格子目たゝきを施し，その上を荒い櫛状工具で調整する。内面は青海波たゝきでその上をなでによって仕上げる。胴部外面は荒い櫛状工具，内面は指で押えた凹凸が残りあとなでを行っている。	灰色	灰色	
63	器台？	脚部		脚部のみの破片で器台と思われるが，はっきりしない。	灰白色～淡灰色		
52	杯蓋	10.7	1.2＋つまみ	ほぼ平らな天井部に宝珠つまみがつく。口縁部にかえりを持ち，口縁よりわずかに高くなる。小砂粒を多く含みざらざらしている。	灰色	暗灰色	羨道部 $\frac{1}{2}$残 つまみ欠
53	〃	10.2	1.1＋つまみ	天井部は平坦面をなしているが，篦削りによるものかどうかは不明である。口縁内部に返りを持つ。小砂粒が多くざらざらしている。	淡灰色	灰色	つまみ欠
54	〃	10.1	1.4＋つまみ	平坦な天井部から少し折れて口縁部にいたる。口縁内部に返りをもつ。	灰色～灰黄色	灰黄色	羨道部 $\frac{1}{3}$残
55	〃	10.1	2.0	平坦な天井部中央に宝珠つまみ	淡灰色～灰黒色	淡灰色	羨道部 口縁一部欠

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
				を付ける。口縁内部にかえりをもつ。小砂粒を多く含む。			
56	杯身	9.7	2.55	平坦な底部からやや外開きに口縁部が立ち上がる。小砂粒が多い。	暗灰色	暗灰色	羨道部 口縁一部欠
57	杯身	9.9	2.55	〃	〃	〃	〃 〃
58	〃	9.9	2.75	〃 底部に取り残りの粘土が付着する。	灰色	灰黒色	玄室 $\frac{1}{3}$欠
59	〃	10.25	3.0	底部は回転しない左方向の篦削りによってやや丸味を持っているが56～58と同じつくりである。	灰色	灰色	玄室 ほぼ完形
60	〃	9.8	2.4	底部は篦切り離し（左回）りを行い，平坦ではあるが，切り残しの粘土が貼りついている。小砂粒を多く含む。	淡灰色	灰色～灰黒色	羨道 口縁 $\frac{1}{3}$欠

（2） 装 身 具 類

勾玉――5点出土しているが，すべてふるいにかけ出土したものである。1の原材は碧玉，2は硬玉，3はめのう，4・5は土製である

管玉――8点出土している。大小混在しているがすべて碧玉製品である。以下計測表をかかげる。

第2表　勾玉管玉計測表

番号	重さ(g)	直径(mm)	孔径（mm）（図の上）	孔径（mm）（図の下）	長さ(mm)	原材	色
勾玉 1	5.92		1.8	2.75～2.90		碧玉	濃緑色
2	9.83		1.65	2.7～3.2		硬玉	淡緑色
3	8.2		2.7	5.8～6.7		めのう	淡褐色
4	1.0		1.3～1.65	1.55 ―		土製	黒色
5	0.84		1.6	―		〃	〃
切子玉	4.75		3.05	3.65～4.6 1.5		水晶	白透色
管玉 1	8.25	11.4～12.0	2.7	1.55	32.5	碧玉	濃緑色
2	2.16	7	3.2～3.35	1.25	25.65	〃	〃
3	2.08	7.25～7.4	1.0	3.0～3.65	21.55	〃	〃
4	1.8	6.75～6.8	2.05	1.15	21.65	〃	〃
5	1.92	7.15～7.45	2.35	1.3	18.45	〃	〃
6	1.16	6.05～6.45	1.05	2.35	16.0	〃	〃
7	1.25	6.35	1.65	1.5	16.05	〃	〃
8	0.21	3.4	1.55	1.75	11.05	〃	〃

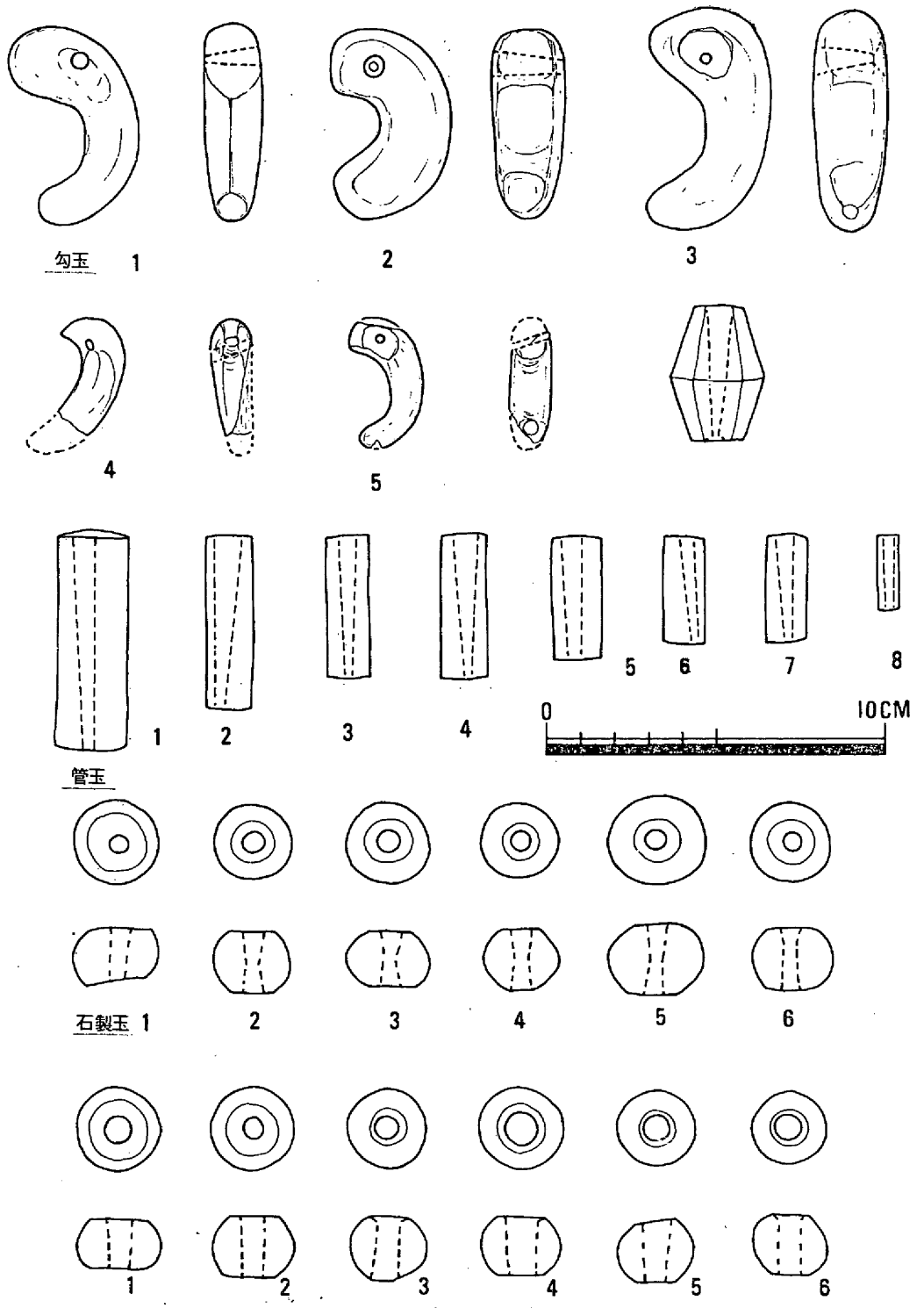
金環――2対4個出土している。1・2，3・4（第13図）が対をなす金張りであるが1以外は金張りがほとんど剝離している。詳細は下表のとおりである。

第3表　1号墳出土金環計測表

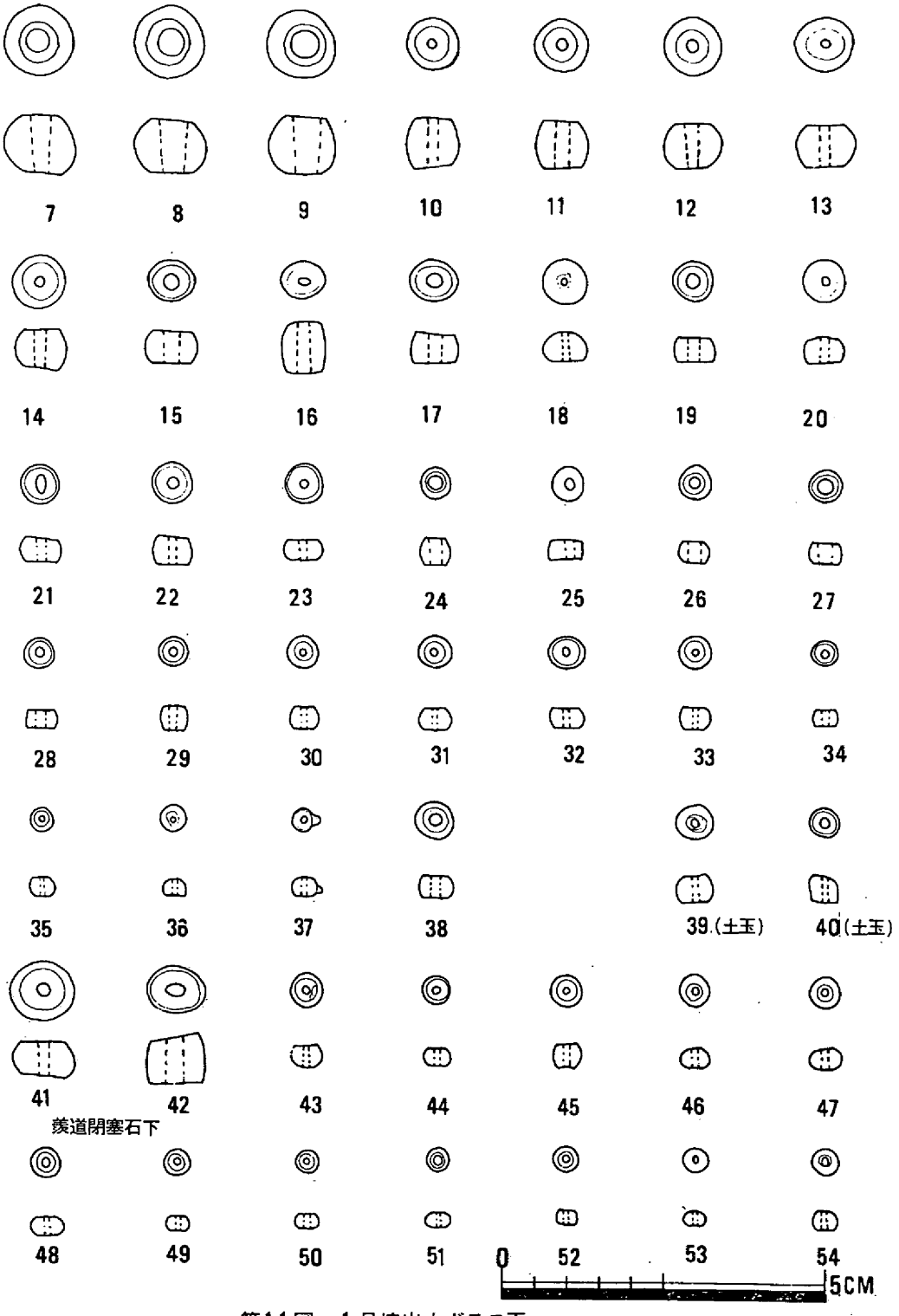
番号	縦径	横径	厚み	小口の開き幅	重量	備考
1	4.4	4.5	1.2～1.5	0.3～0.5	10.66	完存
2	4.4	4.3	1.0～1.2	0.4～0.8	8.16	金張り内傾のみ残存
3	5.7	5.9	1.3～1.4	0.3～0.6	16.2	金張りほとんど剝離
4	5.4	5.4	1.0	0.5～0.4	9.25	〃

飾り金具（留め金具）―5～7（第13図）の3点出土している。鉄地金張りである。直径 1.9cm～2.0cmの丸味を持った円版の中央から留先が出るが何に使用されていたか不明である。

玉――1～6はガラス玉以外の石製玉で6以下がガラス玉である。41～54は羨道閉塞石下からでそれ以外はふるいにかけ検出したものである。



第10図　1号墳出土装身具類



第11図　1号墳出土ガラス玉

第４表　１号墳出土玉類計測表

項目／番号	径（㎜）	孔径（㎜）		厚さ（㎜）	重さ（g）	色彩	備考
1	12.5	2.7	2.5～2.7	8.8	2.16	淡黄透色 斑緑色文	大理石？
2	11.0	2.5～2.9	3.0	8.6	1.16	淡黄褐色	かっ石製？
3	11.4	2.8	2.8	8.5～8.9	1.58	灰色	？
4	11.4	2.8	2.5～2.7	9.0	1.75	黒灰色	？
5	13.4	2.8	3.0	10.5	3.8	幻黒色	ガラス？
6	11.5	2.9	2.8	9.3	1.83	淡緑色	
1	12.7	3.4～3.65	2.6～2.7	7.6	1.25	濃青色	
2	12.35	2.65	3.1	9.25	1.92	〃	
3	11.9	2.8	3.25	9.55	1.84	淡青色	
4	12.0	3.45	4.25	9.60	1.75	濃青色	
5	11.3	3.25	2.65	9.85	1.50	〃	
6	11.1	2.85～3.15	2.6	8.65	1.42	〃	
7	10.5～1.08	2.0～2.5	2.4～2.5	8.5～8.8	1.50	淡青色	
8	10.9	3.35	2.9	8.55	1.58	〃	
9	10.7	3.2	3.4	8.5	1.66	〃	
10	6.3	1.15	1.1	4.2	0.25	青色	
11	8.5	1.8	1.8	7.3	0.8	〃	
12	6.3	1.25	1.2	4.15	0.25	〃	
13	8.55	1.4	1.45	6.45	0.75	〃	
14	8.1	1.7	1.75	6.35	0.67	〃	
15	6.9～7.4	2.5	2.4	5.2	0.38	〃	
16	5.5～6.3	1.2～1.6	1.1～1.65	7.6	0.5	淡青色	
17	7.15～6.6	1.75～2.0	1.8～2.0	4.5	0.34	青色	
18	6.65	1.25	1.1	4.5	0.25	〃	
19	6.4	1.70	1.60	3.7	0.25	〃	
20	6.3	1.15	1.1	4.2	0.25	淡青色	
21	4.8	1.0	1.2	3.2	0.17	青色	
22	6.0					〃	
23	6.0	1.3	1.25	2.95	0.25	淡青色	
24	4.7	1.75	1.85	3.95	0.25	青色	
25	5.1	1.1	1.2	3.2	0.17	淡青色	

横田東古墳群（64）

項目 / 番号	径（㎜）	孔径（㎜）		厚さ（㎜）	重さ（g）	色彩	備考
26	5.1	1.25	1.2	3.25	0.25	青色	
27	5.3	1.95	2.15	3.15	0.17	〃	
28	4.8	1.3	1.25	2.95	0.13	〃	
29	4.8	1.1	1.1	3.7	0.17	〃	
30	4.8	1.0	1.2	3.2	0.17	〃	
31	4.95	1.2	1.25	2.9		〃	
32	4.85～5.45	1.2	1.15	2.95	0.13	〃	
33	4.7	0.75	1.15	3.15	0.09	〃	
34	4.0	1.4	1.05	2.4	0.05	〃	
35	4.1				0.09	〃	
36	4.05	1.0	0.85	2.9	0.05	〃	
37	4.1			2.85	0.09	淡青色	
38	5.2	1.8	1.75	3.35	0.13	灰青色	
39	5.2～5.6	1.5	1.35	3.8	0.17	黒灰色	土玉
40	4.2	1.35	1.2	3.8	0.09	〃	土玉
41	8.9～9.8	2.0～2.4	1.95～2.35	5.1	0.67	青色	
42	4.1	0.95	1.4	2.45	0.05	〃	
43	5.0	1.1	1.2	3.35	0.17	〃	
44	4.7	1.1	1.2	2.9	0.09	〃	
45	4.85	0.85	1.1	3.4	0.13	〃	
46	4.75～4.95			3.15		〃	
47	4.75	1.0	1.3	3.0	0.09	青色	
48	4.2	1.0	1.0	2.3	0.09	〃	
49	4.0	1.15	1.15	2.4	0.05	〃	
50	4.1	0.95	1.4	2.45	0.05	〃	
51	3.7	0.9	0.9	2.65	0.05	〃	
52	3.65	1.2	1.2	2.2	0.05	〃	
53						青色	
54							

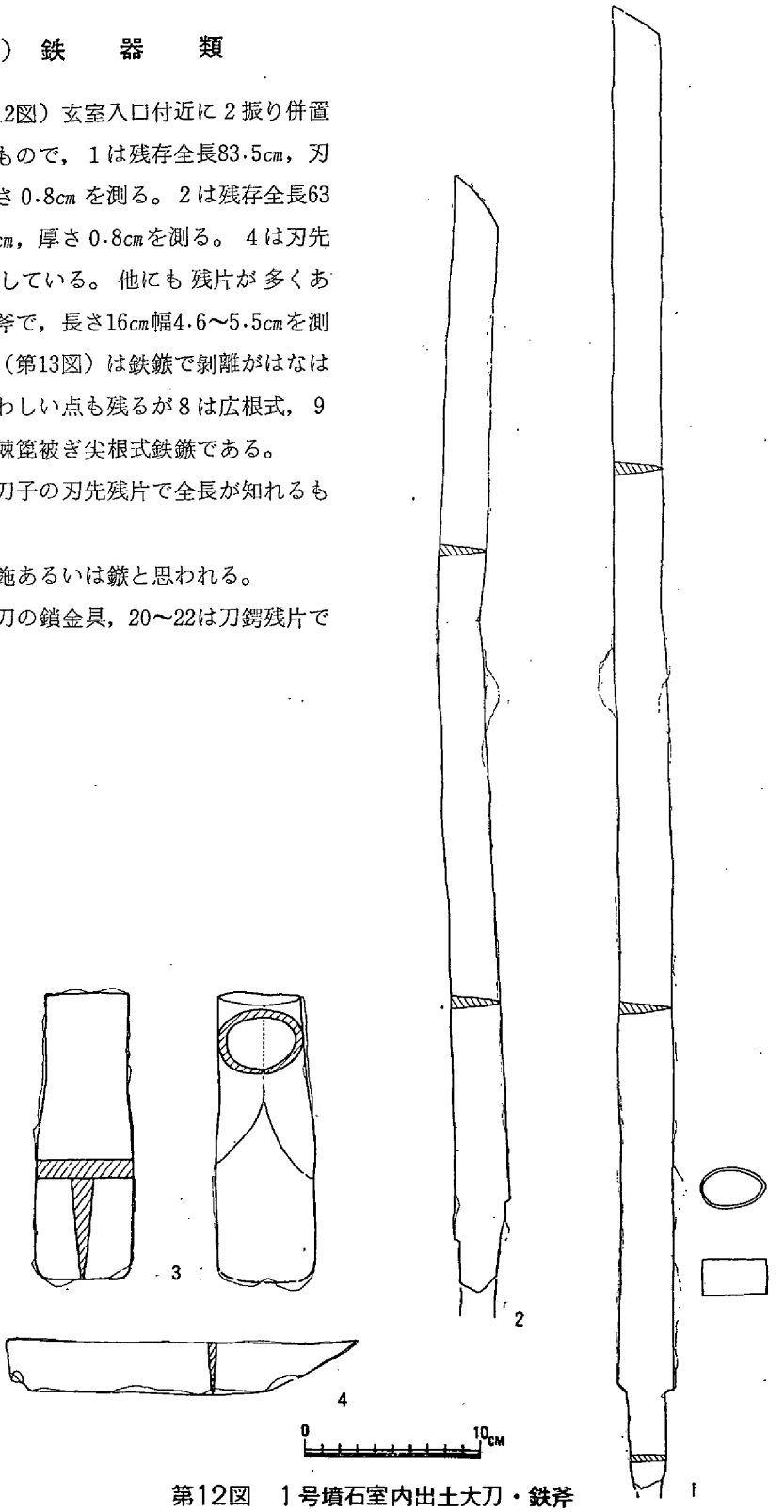
（3） 鉄　器　類

大刀（第12図）玄室入口付近に２振り併置してあったもので，１は残存全長83.5cm，刃部76cm，厚さ0.8cmを測る。２は残存全長63cm，刃部55cm，厚さ0.8cmを測る。４は刃先20cmが残存している。他にも残片が多くある。３は鉄斧で，長さ16cm幅4.6～5.5cmを測る。８～11（第13図）は鉄鏃で剝離がはなはだしく，疑わしい点も残るが８は広根式，９～11・16が棘篦被ぎ尖根式鉄鏃である。

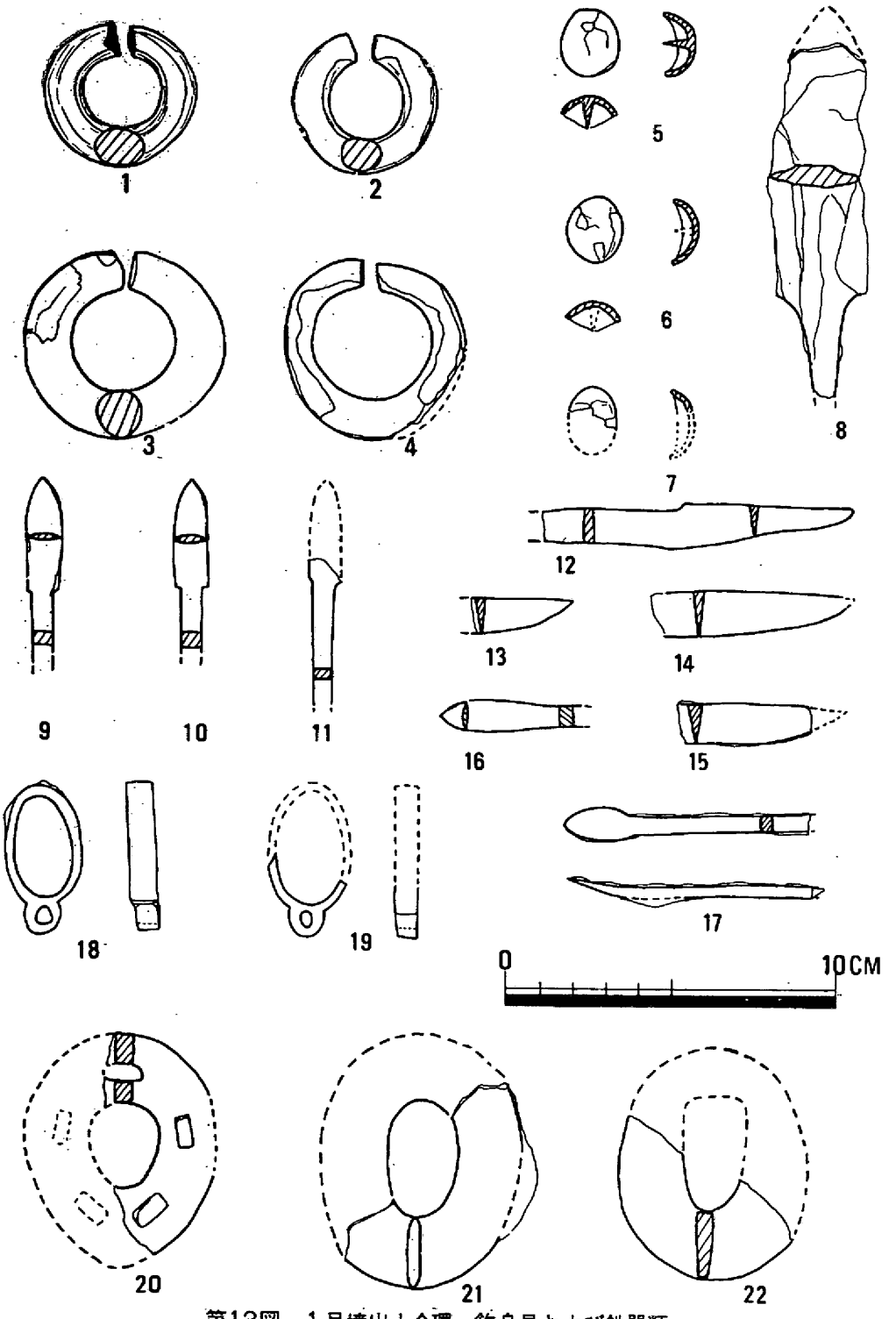
７～15は刀子の刃先残片で全長が知れるものはない。

16・17は鉇あるいは鏃と思われる。

18・19は刀の鎖金具，20～22は刀鍔残片である。



第12図　１号墳石室内出土大刀・鉄斧



第13図　1号墳出土金環・飾身具および鉄器類

（4） 1号墳墳丘内のその他の遺構

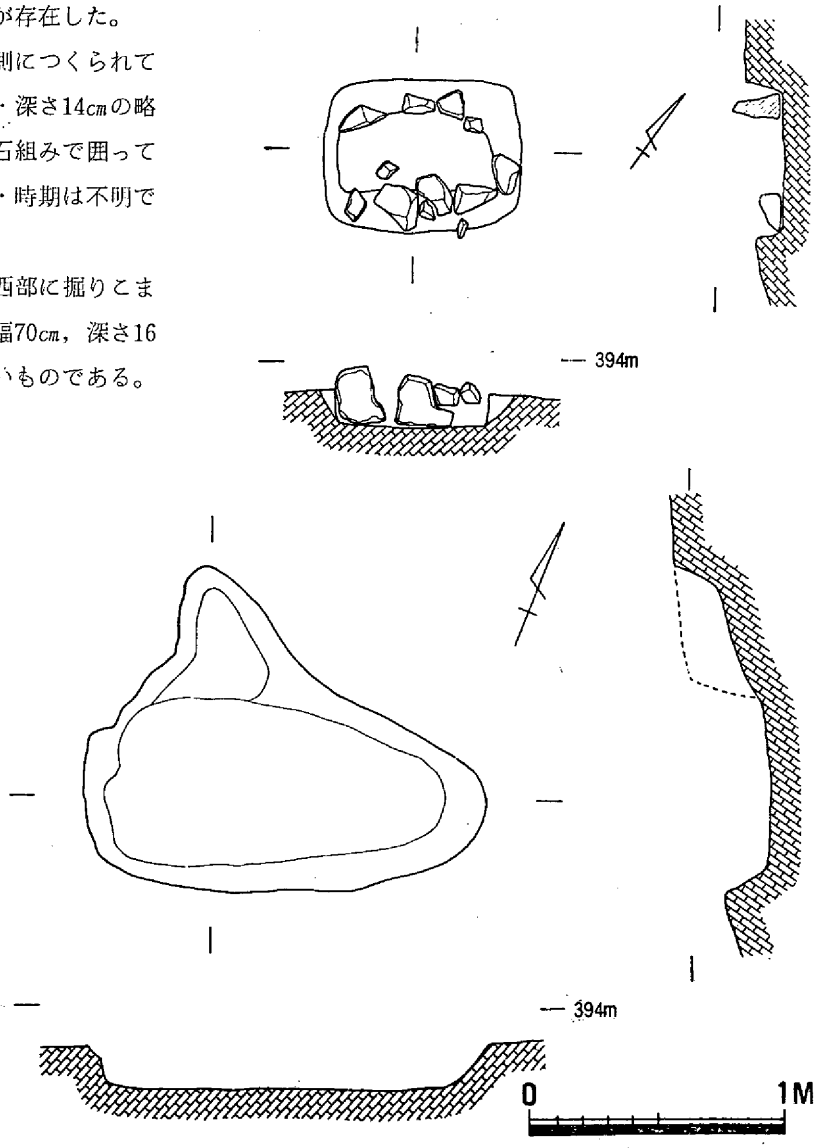
この他に2号墳墳丘内の地山層を掘り込んだ遺構が存在した。

イ遺構は石室北側につくられている。60cm×80cm・深さ14cmの略方形を呈し周りに石組みで囲っている。遺構の性格・時期は不明である。

ロ遺構は石室北西部に掘りこまれた長さ1.6m，幅70cm，深さ16cmの長楕円形の浅いものである。遺構の性格時期は不明である。

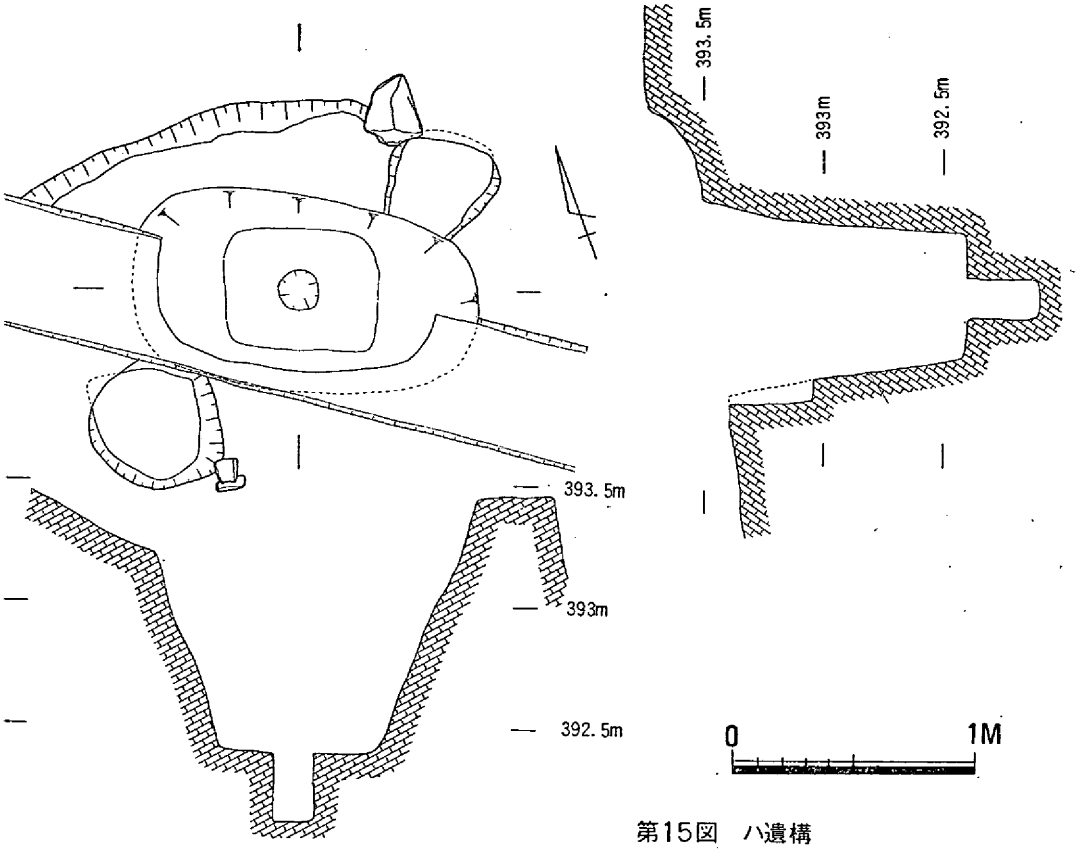
ハ遺構は，石室の西側に掘りこまれている。

長径1.44m短径80cmの円形をなし，深さ1.4mをはかり，底部では50×60cmをはかる。掘りこみ中央部近くにさらに径15cmの柱穴状ピットが30cm近く掘りこまれている。



第14図　1号墳丘内イ遺構（上）およびロ遺構（下）

このような掘り込みは山陽町門前池遺跡（註－1），落合町旦の原遺跡（註－2），北房町桃山遺跡（註－3）など見られ，ここでは出土遺物は見られないが弥生時代に属するものと考えられる。



第15図　ハ遺構

（5）小　　結

1号墳は前述のとおり東側の石列・天井石は抜き取られてた横穴式石室であるが，羨導部および羨導部前面から多量の出土遺物が見られた。須恵器についていえば杯蓋，杯身の杯部，天井部に篦削りが行われるものと行われないものの二種が混在する。また内部が荒されていたとはいえ高杯，瑞がそれぞれ破片であるが一点づつしか出土していない。またその時期は6世紀中葉から7世紀中頃にいたるまで追葬が行われていることなどがあげられる。他の遺物についていえば馬具が見られないことも一つの特徴であろう。

<註>

註－1　池畑耕一，新東晃一，松本和男，枝川陽『門前池遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（9），1975

註－2　山磨康平，高畑知巧『旦の原遺跡』岡山県埋蔵文化財報告(14)，1977

註－3　田仲満雄，二宮治夫，竹田勝，福田正継『桃山遺跡』，岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)，1976，他に県内では山陽団地内の惣図遺跡，津山市草加部遺跡（安川豊史氏の教示による）で，また鳥取・青木遺跡でも多数が検出されているが，これはすべて縄文時代の落し穴とされている。

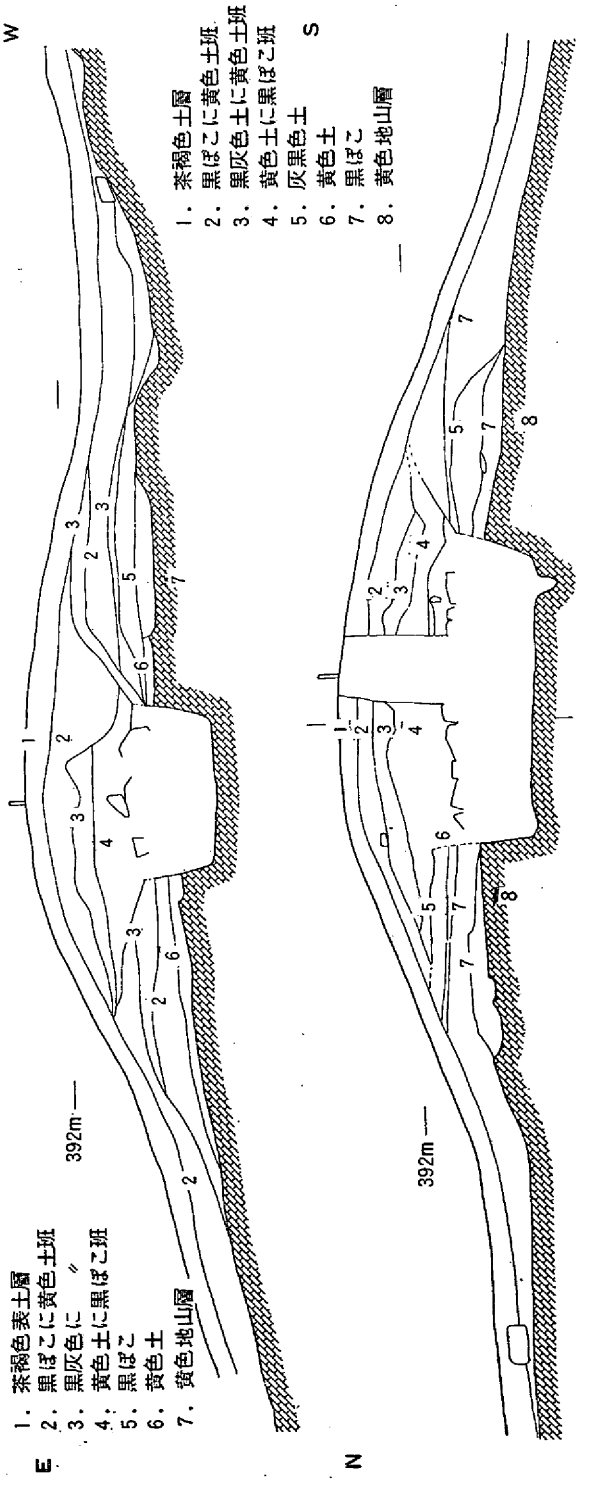
第３章　第２号墳の調査概要

第１節　古墳の構造

第２号墳は第１号墳に接し同一丘陵上の南に位置し，墳頂は標高392.4mをはかり1号墳頂に比べ約３m低い位置に築造され，規模は少し小さ目である。墳丘測量時の直径約８m，高さ約１m前後と考えられた。墳丘も良く残存しており，盗掘も受けていない。横穴式石室あるいは木棺直葬墓と想定して掘り進めた。

調査結果２号墳は，直径約10mを呈し，北側から西側にかけて１号墳との間に幅２m，深さ40cmの周溝を持つ。

内部主体はほぼ中央部に略南北方向に主軸をもつ竪穴式石室である。天井石をほとんど残しており，掘り方は天井石検出面で長さ4.1m，幅1.9m，地山面で3.3×1.7mの中に，長さ2.7m北側幅60cm，南側40cmで南側が幅狭く造られている。北側が頭部にあたり，須恵器，鉄器類が集中して副葬されていた。床面から天井石までの高さは60cm前後を測る。床面は黄色自然層の上に小礫が敷きつめられ床面としている。



第16図　２号墳墳丘断面図（$\frac{1}{120}$）

石室内から須恵器蓋杯３点，杯身３点，短頸壺１点，鉄鏃12点，鎖金具足金物の部分を鉄地に銀張りした大刀１振，刀子，鉇等がまた，人骨頭部片がほぼ中央から出土している。

第２節　２号墳の出土遺物

（１）須　　恵　　器

須恵器７点の内訳は杯蓋３，杯身３，薬壺１である。杯蓋，杯身は頭部と思われる北側にすべてが伏せた状態で短頸壺は石室中央付近に副葬されていた。杯の３組はそれぞれ焼質胎土などにより１・２，３・４，５・６，はそれぞれセット関係を示している。細部の記述については一覧表にゆずるが，すべての杯蓋天井部外面，杯身底部外面には篦削りが行われ，篦削りの行われていないものはない。１号墳においては篦削りの行われているものといないものが混在しているのに比べこの両者に時期的な差がうかがえる。

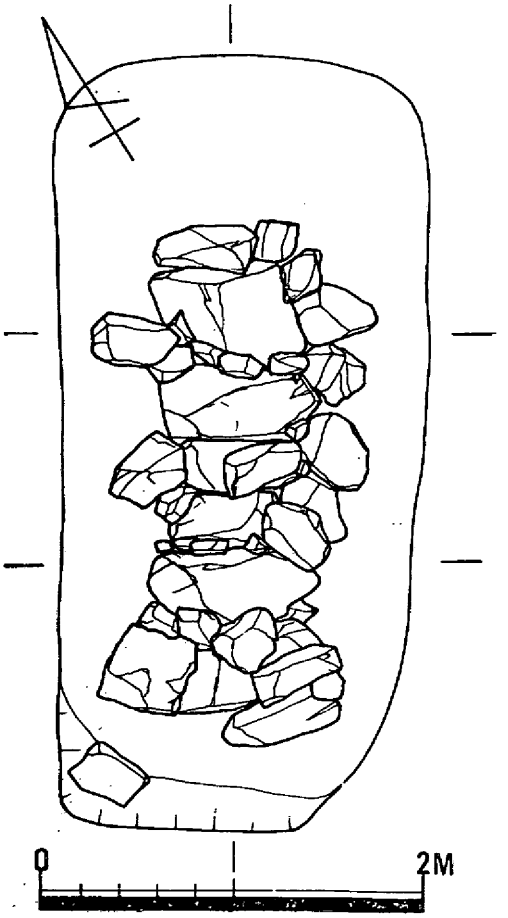
（２）鉄　　器　　類

１は大刀で切先を南に向けて出土した長さ61cm，幅2.6cmをはかる直刀である。２は握手部に取り付いていた鞘金具で鉄地銀張りで，３は足金物になり刀先のすぐ南から出土し，２と同じく鉄地銀張りである。

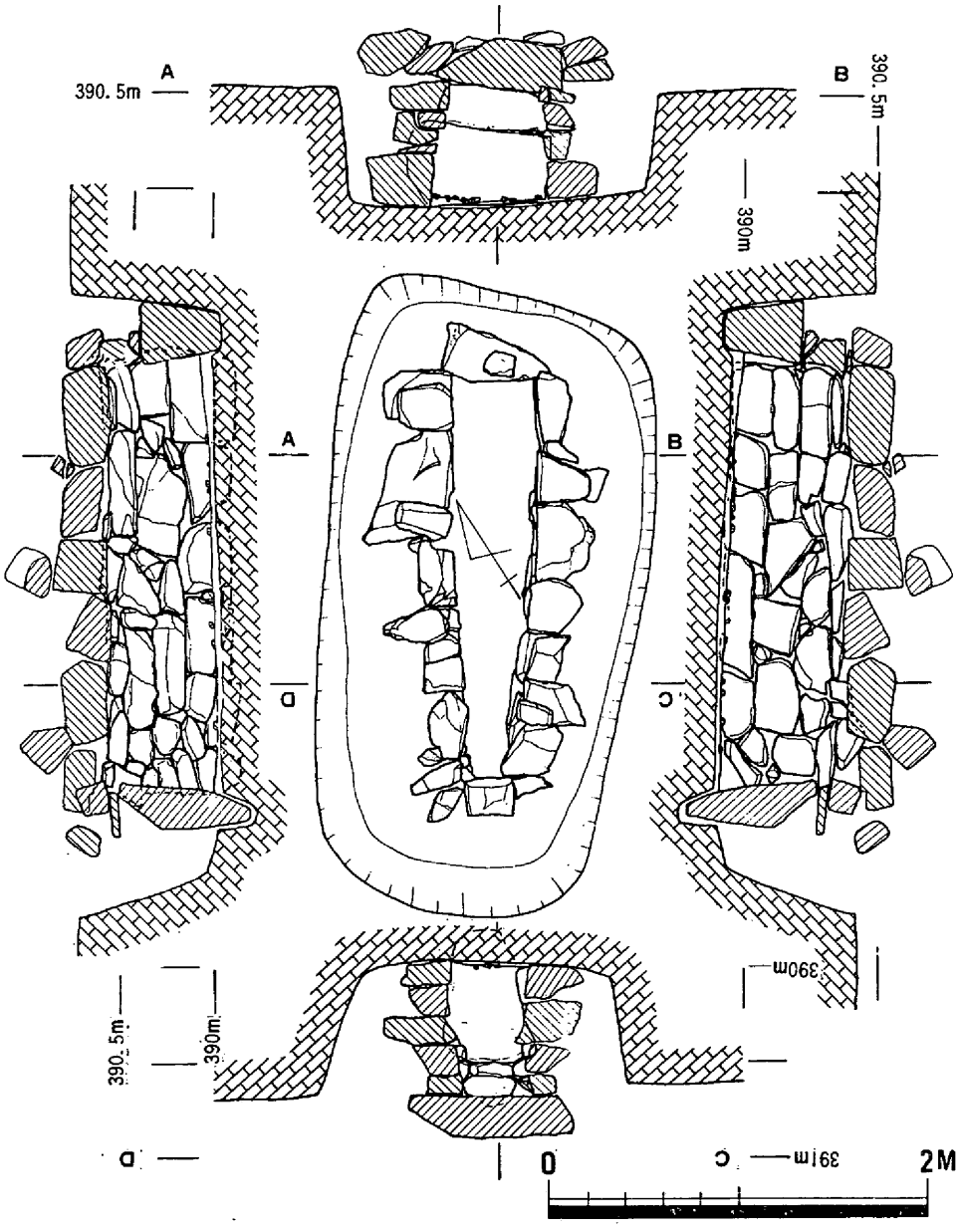
２～13は石室北部東側手から一括して出土した鉄鏃である。２は平根式で３以下は棘篦被ぎ尖根式のものである。これは矢柄と取り付けるための糸巻き痕が見られ，木質部を残すものもある。14は刀子で全長26cm，刀部長８cm，中央部での幅2.2cmを測る。

（３）小　　結

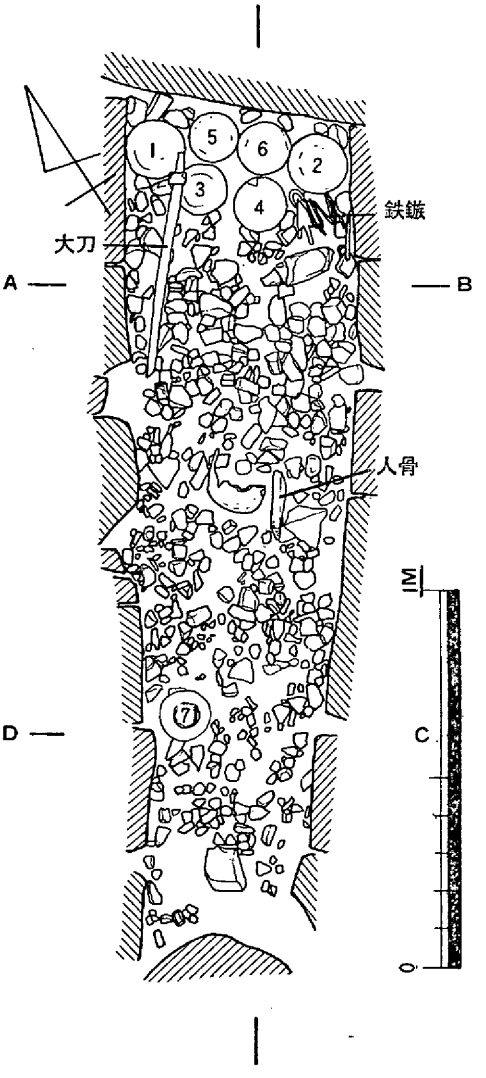
２号墳は１号墳の横穴式石室と異り竪穴式石室である。内部も全く荒されずに遺物もそのままの状態で残存していたが，１号墳と同じく馬具がみられないこと。竪穴式石室という性格からか，１号墳が１世紀近く後においても追葬されているのに比べそれがなく築造時の埋葬だけである。

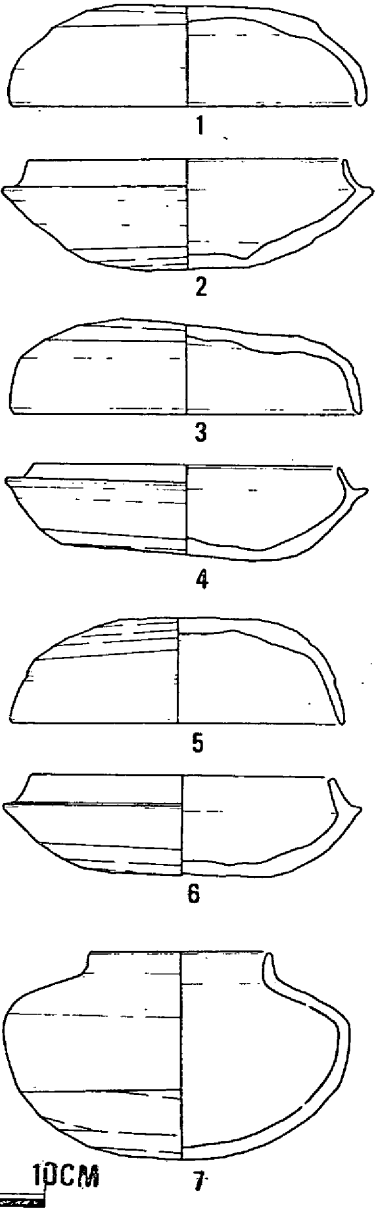


第17図　２号墳石室天井石実測図（1/40）



第18図　2号墳石室実測図（$\frac{1}{40}$）





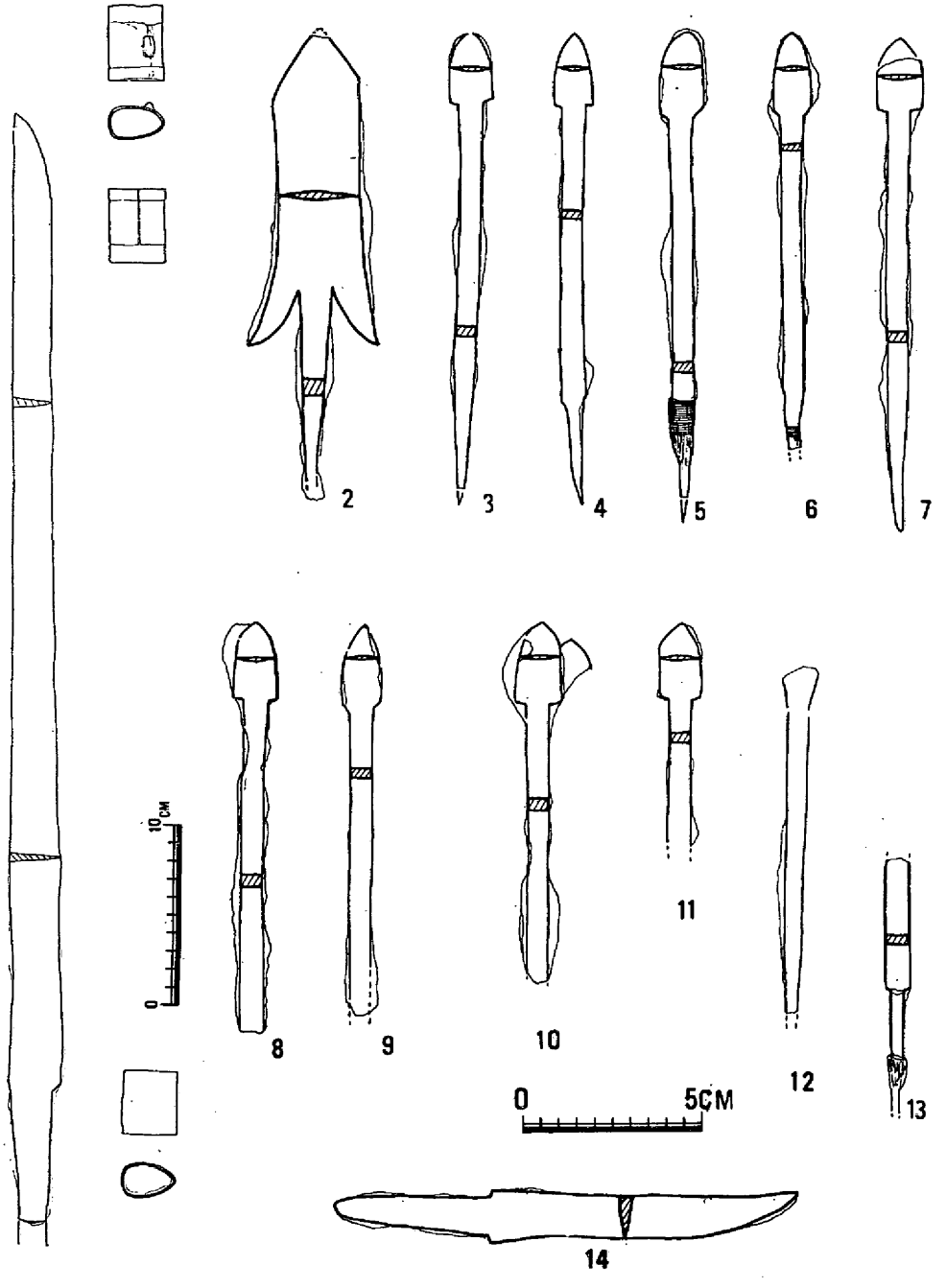
第19図　2号墳石室平面図

遺物出土状況（$\frac{1}{20}$）および出土須恵器実測図（$\frac{1}{3}$）

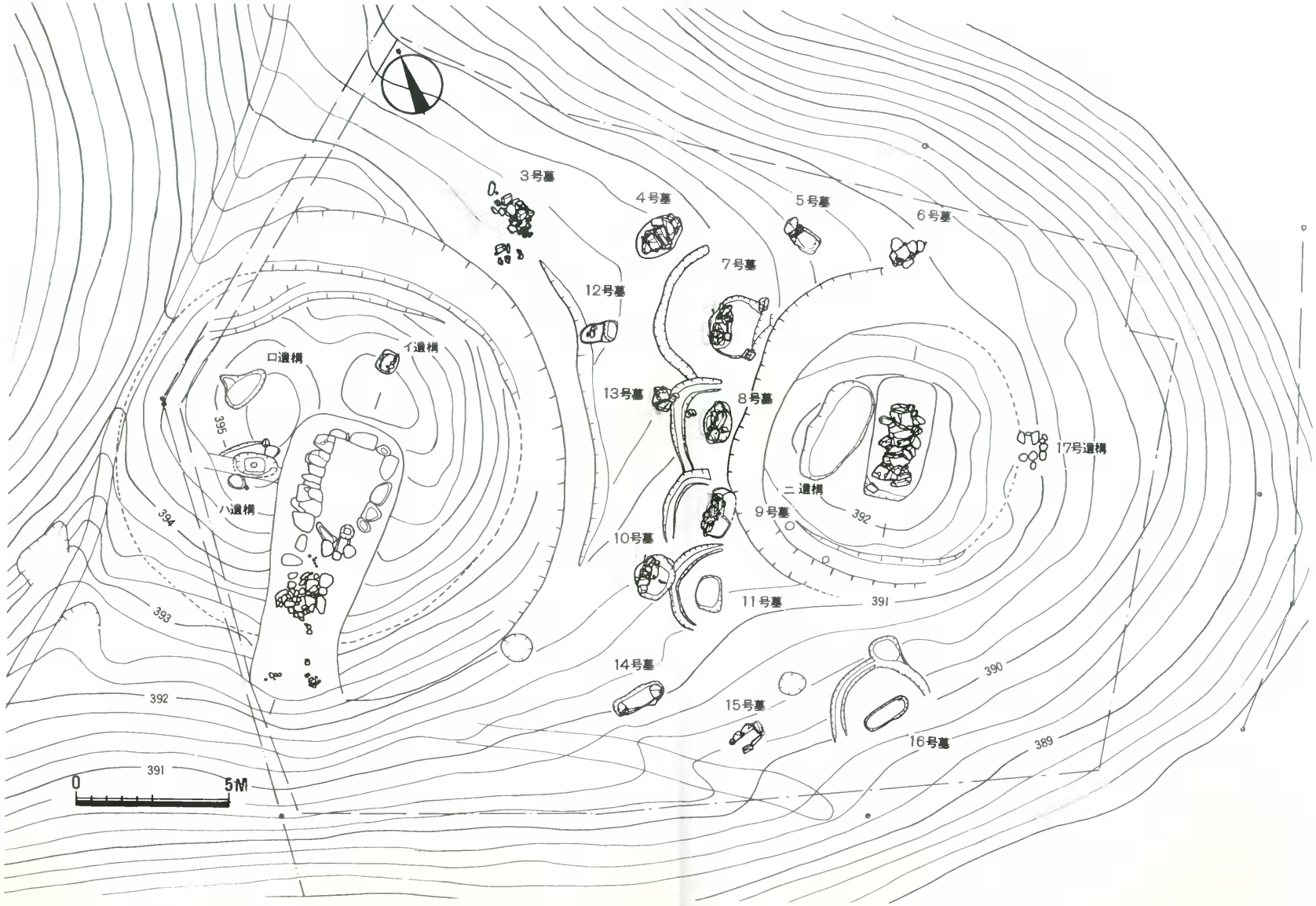
第５表　２号墳出土須恵器観察表

（単位・cm）

番号	器形	口径	器高	形態・製作技法の特徴	色調 内	色調 外	備考
1	杯蓋	13.85	3.95	口縁部は丸くおさめ内側に突出する。天井部は羅線状に篦削り（左回り）を行うが削り残し部分がある。	淡灰色	淡青灰色	２とセットをなす完形品
2	杯身	12.6	4.35	口縁部立ち上がりは，わずかに外反しつつ内傾する。受部は水平に近く突出する。内面は粘土紐巻き上げの凹凸が残る。底部外面は篦起時の突出した部分のみに篦削(左回り)を行う。１～４㎜の黒色石粒を多く含む。	淡青灰色	青灰色	１とセットをなす完形品
3	杯蓋	13.75	3.75	ややふくらみを持った天井部から肩に少し稜をもって口縁部にいたる。天井部は１㎝を残して篦削り（左回り）を行う。１～10㎜の石英粒，細かい砂粒が多く含まれる。	青灰色	青灰紫色	少し焼けひずみ４とセットをなす完形品
4	杯身	12.1～12.3	3.7	口縁部立ち上がりは８㎜程で内傾する。受部はわずかに上方に向く。底部は丁寧な篦削り（左回り）を行う。	青灰色	灰色	内面から焼け割れが有り，少しひずんでいる。３とセットをなす。完形品
5	杯蓋	13.2～13.5	41.5	外面体部，天井部に沈線が回り，天井部に篦削り（左回り）を行う。内面は粘土紐の凹凸が残り，中央部にわずかに青海波状のたたきのあとが認められる。相当大きな砂粒が入り込んでいる。	青灰色	青灰色	６とセットをなす完形品
6	杯身	12.0	3.9～4.1	口縁部立ち上がりは内傾する。受部は短く水平に突出する。底部内面は粘土紐による凹凸がよく残り，中央部に青海波状にたたき跡を残す。外面は篦削り（左回り）を行うが中央部は削り残している。小豆大の小石が混じる。	青灰色	青灰色	５とセットをなす完形品
7	短頸壷	7.1	8.1	口縁部は１㎝程直立する。肩は良く張るが稜を持たずに底部に向かう。体部最大径14㎝を測る。底部は篦削り（左回り）を行うが，中央で削りすぎ，内部から補修を行っている。	濃青灰色	青灰色	完形品



第20図　2号墳石室内出土鉄器類（$\frac{1}{2}$）



第21図　1・2号墳と土壙墓群配置図 ($\frac{1}{150}$)

第４章　１号墳と2号墳間の小規模墳墓群

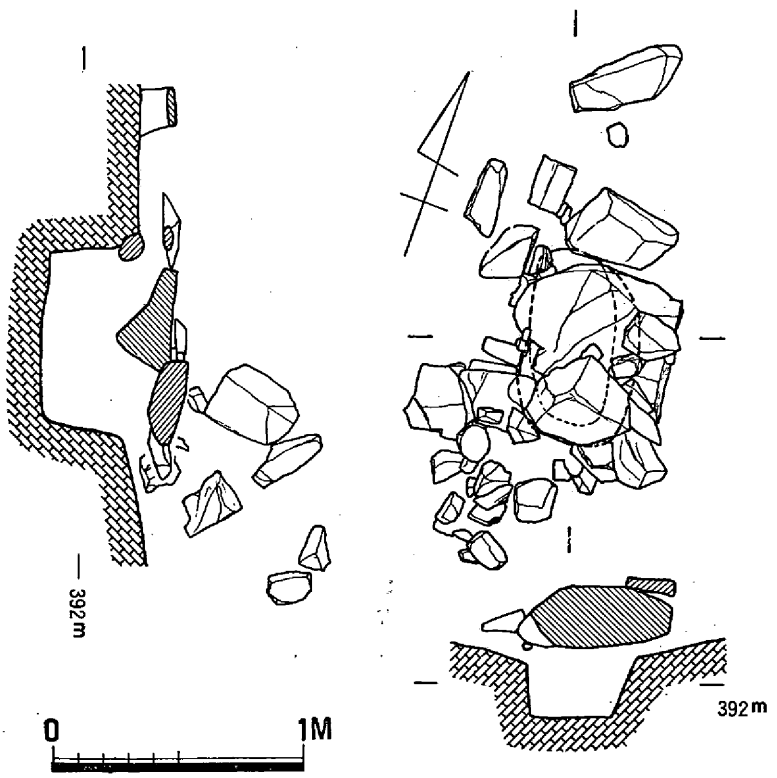
第１節　小規模土壙墓群の概要

１号墳東側周溝から２号墳の西側周溝までの中央の狭い所で４ｍ，南北の広い所で９ｍ前後の幅で東へわずかに傾斜し，南側あるいは東側はそれぞれ蓋石土壙，小石室，土壙，横穴状蓋石土壙など合せて傾斜をもった斜面になり，この南北に開いた帯状の場所に計16個が検出された。そしてこれらの小土壙群は１号墳，２号墳の周溝をもほとんど侵すことなく，又それでれの墓壙を傷つけることなく独立した形で造られている。またこの中には遺物を持っているものが半数近くあり，築造の時期を知る上で貴重なものであった。以下各墓壙ごとに概略してみたい。

（１）第　３　号　墓

第１号墳北側の墳端部から斜面にかけてつくられた蓋石土壙である。長軸（南北）75㎝，短軸（東西）45㎝，深さ40㎝近くの楕円形の土壙を掘り，蓋石に40×60㎝，40×40㎝の大きなものを２個おき周辺に角礫を数多く配置している。

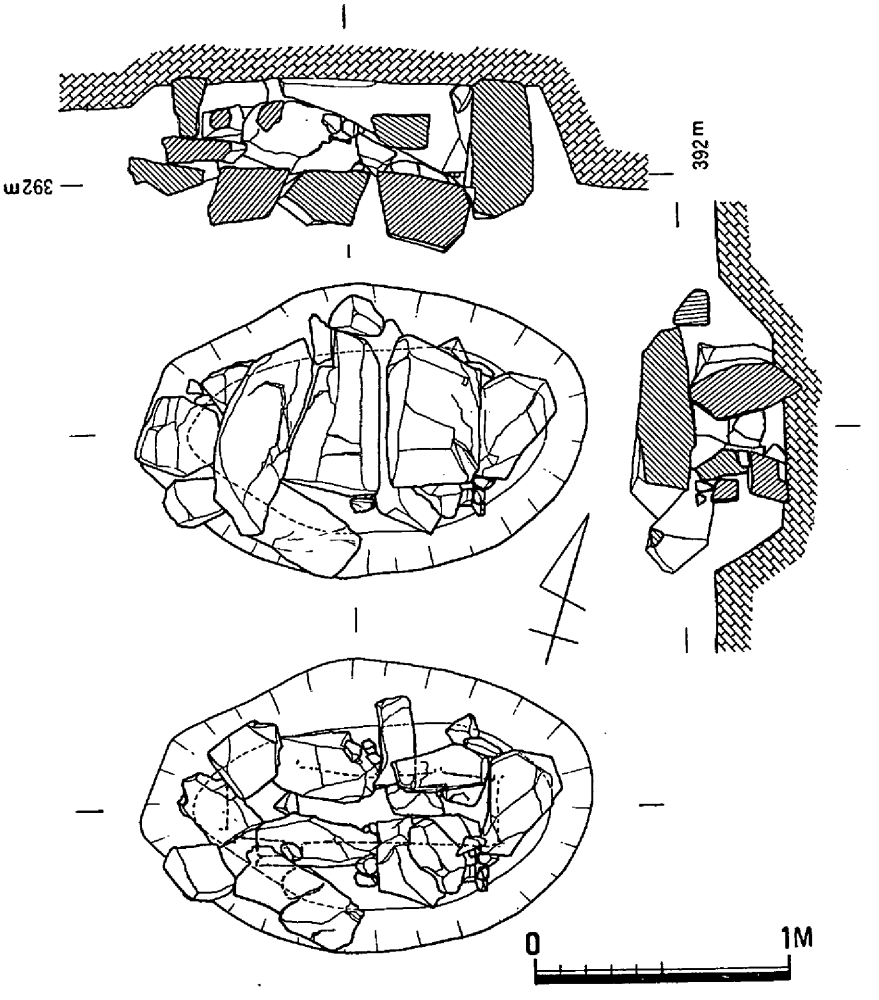
土壙内からの出土遺物は見られなかった。



第22図　３号石蓋土壙墓

（2） 第4号墓

第1号墳と第2号墳の間のわずかな平坦地の北側に位置する。掘り方は楕円形で東西1.75m，南北1.2cmを測る。この掘り方内に箱式石棺状に小石室を造り，天井石4枚で蓋をしている。石室の床面での幅30m弱，長さ1.05m，床面からの高さ35cmを測る。石室内からの出土遺物は見られない。



第23図　4号石組土壙墓

（3） 第5号墓

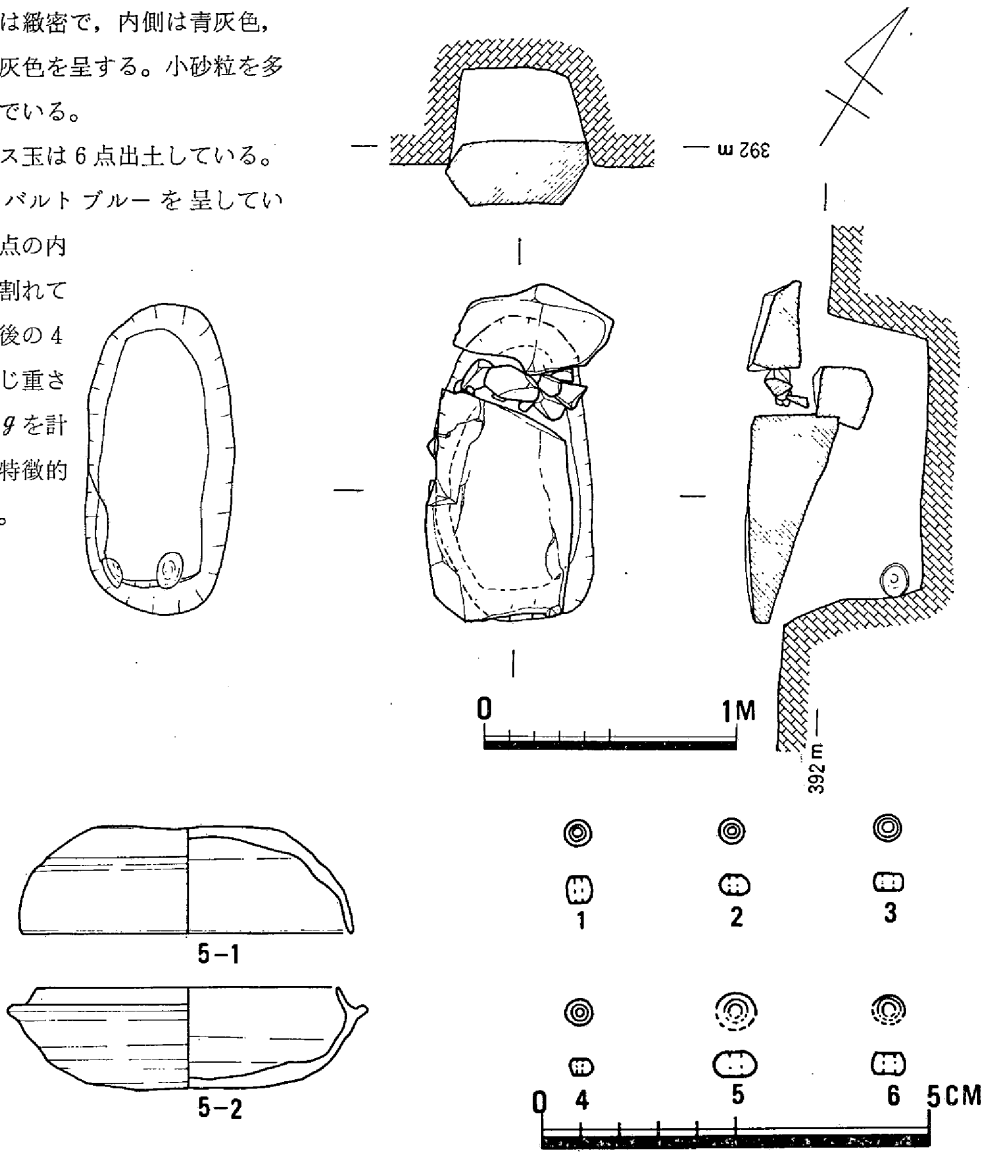
第2号墳の北側わずかな平坦部につくられている。北側はすぐ急傾斜をもつ谷になる。

この墓壙は楕円形を呈し長軸1.20m，短軸60cmになり，60×80cm，35×60cmの2個の蓋石を置く。

土壙内から須恵器2点（杯蓋・杯身）が墓壙前側手の両サイドに，ガラス玉6点とともに出している。この須恵器の杯蓋は口径13.1～13.45cm，高さ4.2cmの完形品である。天井部は7cm程が平坦で，ややふくらみをもって口縁にいたる。口縁端部は丸くおさめている。天井部外面は篦起し，後稜線部分に1～2条の篦削りを行っているがあまりはっきりしない。内面は指頭圧痕を残しその上に刷毛をかけている。体部から口縁にかけては内外面ともなで調整を行っている。胎土は密緻で内外面とも淡青灰色を呈する。1cm大の小石が入り内外に通じ張れ割れを生じている。杯身は口径12.0cm，高さ4.0cmをはかり口縁立ちあがりは内傾しわずかに外反する。受部は斜上方に突出する。底部外面は平坦になり部分的に篦削りを行っているようである。底部内面は丁寧で余り凹凸もみられず，刷毛をかける。体部から口縁にかけては内外面ともなで調整を行う。

胎土は緻密で，内側は青灰色，外側淡灰色を呈する。小砂粒を多く含んでいる。

ガラス玉は6点出土している。色はコバルトブルーを呈している。6点の内2点は割れているが後の4点は同じ重さで0.09gを計るのが特徴的である。



第24図　5号石蓋土壙墓（1/30）および出土遺物（須恵器1/3）ガラス玉（現寸）

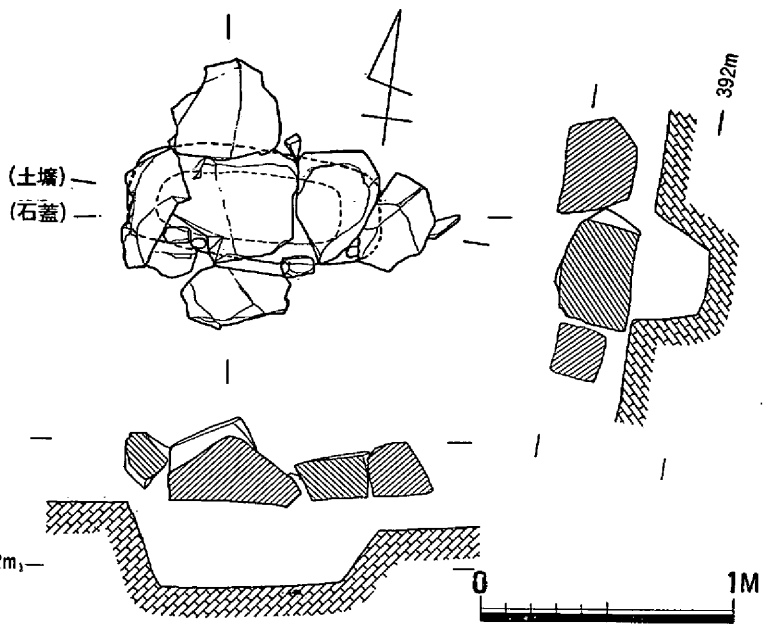
第6表　5号墓出土ガラス玉計測表

番号	直径（mm）	孔径（mm）	厚さ（mm）	重さ	色彩	備考
5－1	3.4	1.05	1.05	3.2	0.09	淡青色
2	3.6	0.8	0.8	2.4	0.09	〃
3	3.2	0.9	0.9	2.3	0.09	〃
4	3.35	1.0	1.0	1.95	0.09	〃
5	4.7	—	—	3.0	—	〃 半分のみ
6	?	—	—	2.45	—	〃 〃

（4） 第6号墓

第2号墳の北側，第5号墳の東側に位置する。この墓壙も長楕円形を形成し，長軸（東西）1.0m，短軸（南北）45cm，蓋石までの深さ30cmを測り，5ケの蓋石で覆っている。

墓壙からの出土遺物は見られない。



第25図　6号石蓋土壙墓

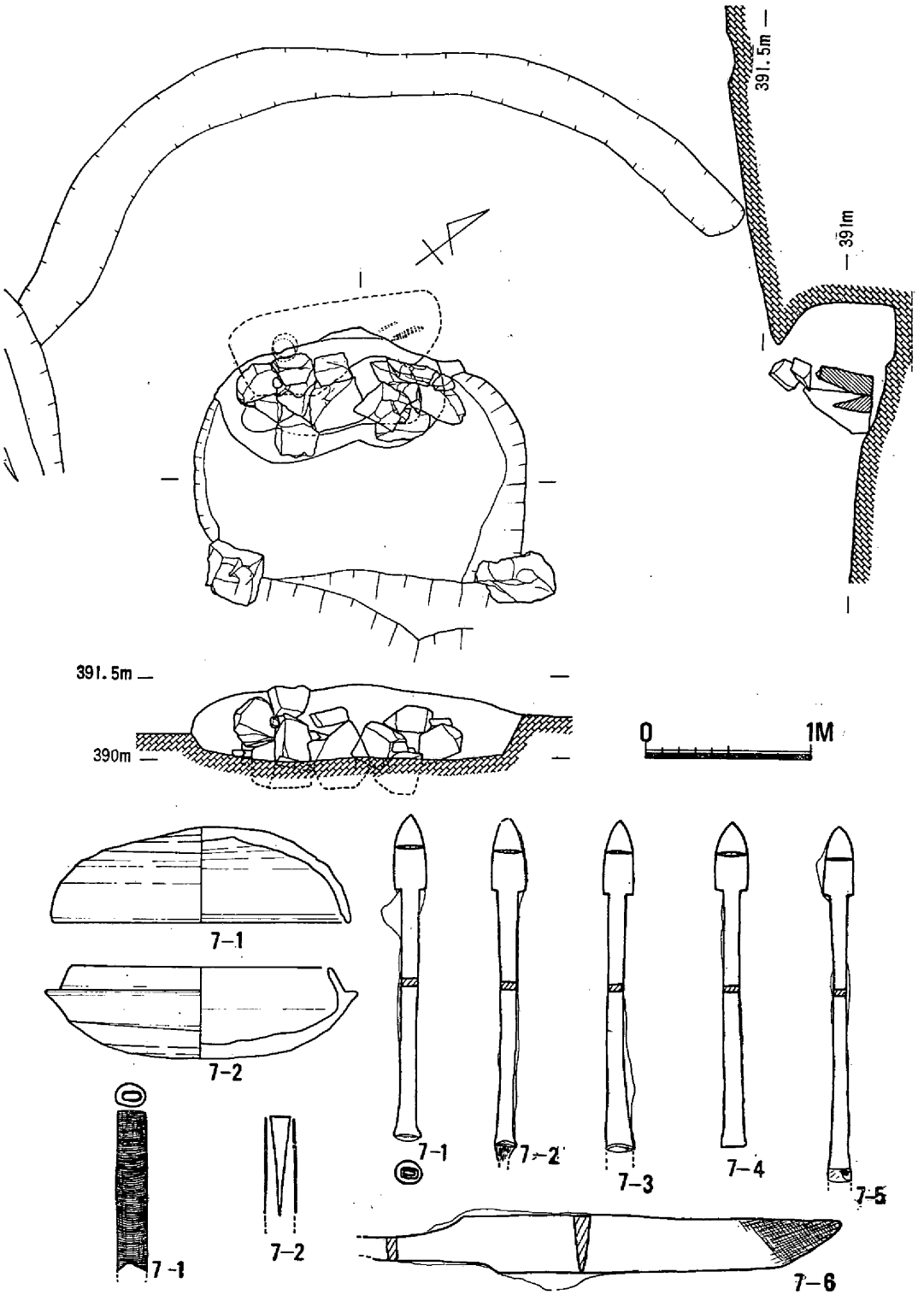
（5） 第7号墓

第7号墓は，第1号墳と第2号墳の北墳端線上に位置し，わずかな平坦地につくられている。これは，いったん斜面を数十cmか掘り下げ，平坦地をつくり，さらに横穴状に斜面に奥行約40cm，長さ100cmの横方向に長く掘りこんで棺床をつくっている。棺を埋置した後，大小の石でその入口を閉じさらに上に土をかぶせ1つの墳墓をつくっている。西側の山側に三ケ月状に深さ5.6cmの周溝を持つ。これは出雲あるいはその影響を強く受けたと思われる。備中北部，備後北部等々を中心に分布が見られる横穴墳に似てはいるがこれとは異なる特徴を持っている。

内部から須恵器（第26図，図版—47）杯身蓋の一組が南側から，鉄鏃（第26図，図版—47）が5本刀子一点が北側から出土している。

須恵器杯蓋は口径 13.75m，高さ4.4cmの完形品である。天井部は篦削り（左回り）を行い，そのせいか少し丸味をもって口縁部にいたる。口縁部内側はわずかに段をもつ。非常に良く焼成されており，内面青灰色，外面青灰色～灰色を呈し，一部に自然釉がかかり，剝離している。杯身は口径12.0cm高さ，4.15cmをはかり，口縁部たちあがりはわずかに内傾してたちあがる。受部はほぼ水平で突出する。受部に重ね焼の割れ残りが付着しているが，これは先述の杯蓋と一致し一諸に焼成している。さらに底部外面全体に灰黒色の自然釉がかかり一部が剝離していることから見れば，逆（杯身が上で杯蓋が下）に置いて焼成している。底部外面は篦削り（左回わり）を行っている。焼成は堅緻で，内面は青灰色を呈する。

鉄鏃は棘篦被ぎ長三角形（柳葉）式のものが5本出土している。矢先部の幅1cm，長さ2.4cm前後，頸部長さ7.50～8.0cm，厚さは0.5×0.3cm前後で矢柄との取り付き部は三角形になって3cm程突出し，

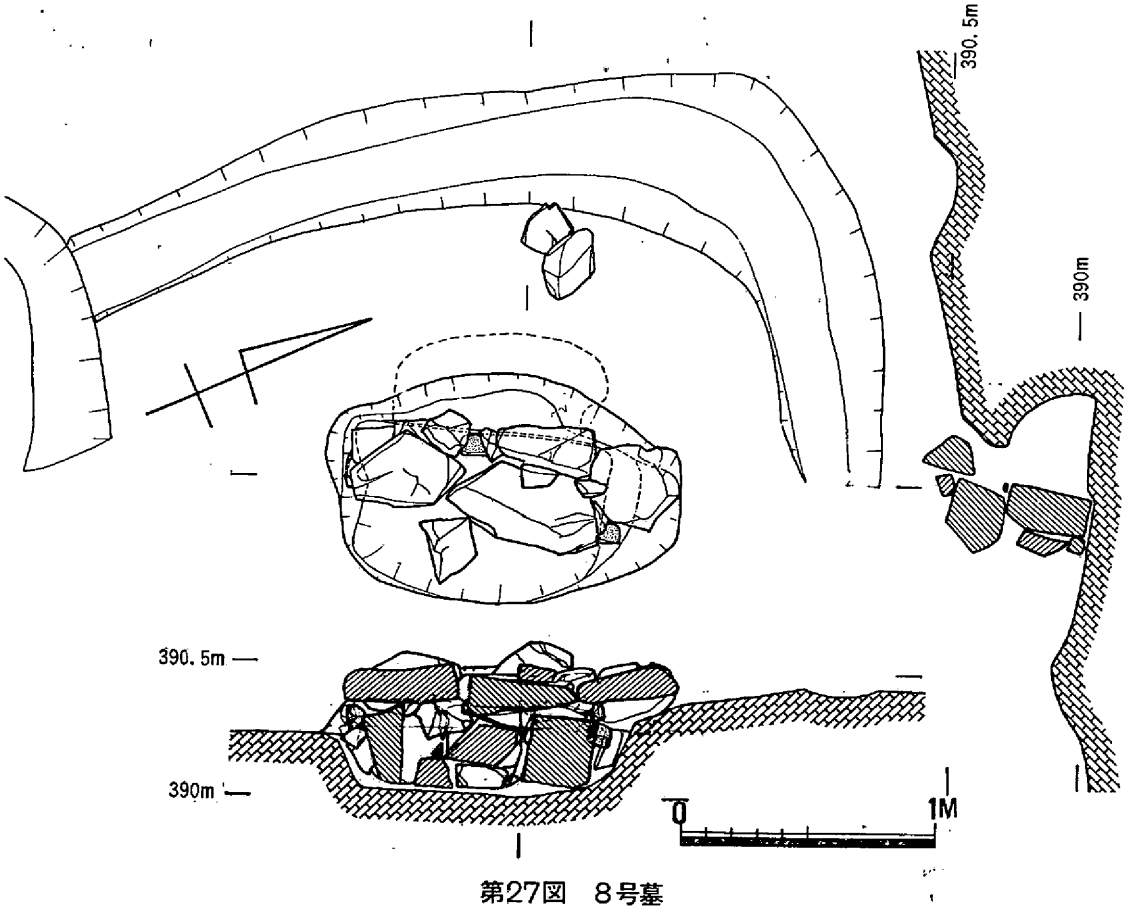


第26図　7号墓（$\frac{1}{40}$）および出土遺物（須恵器$\frac{1}{3}$・鉄器$\frac{1}{2}$）

木質部が残り，その上に桜皮を巻きさらにその上に糸を巻いて取り付けている。刀子は残存長15cm，刀部11cm，幅0.5cmをはかる，刀先に布目の圧痕が残る。

（6） 第 8 号 墓

第７号墓のすぐ前側につくられ７号墓と同じ構造であるが，７号の蓋石が一段であるのに対し，２段～３段になっている。遺物は何も出土していない。まず140cm×90cm中央部で深さ30cmの土壙を掘り，さらに奥行，幅20cm長さ80cmの墓室をつくっている。西側から北側にかけて半月状に幅50cm深さ10cm前後の周溝をもつが南側部で隣接する９号墓周溝に切られている。



第27図 8号墓

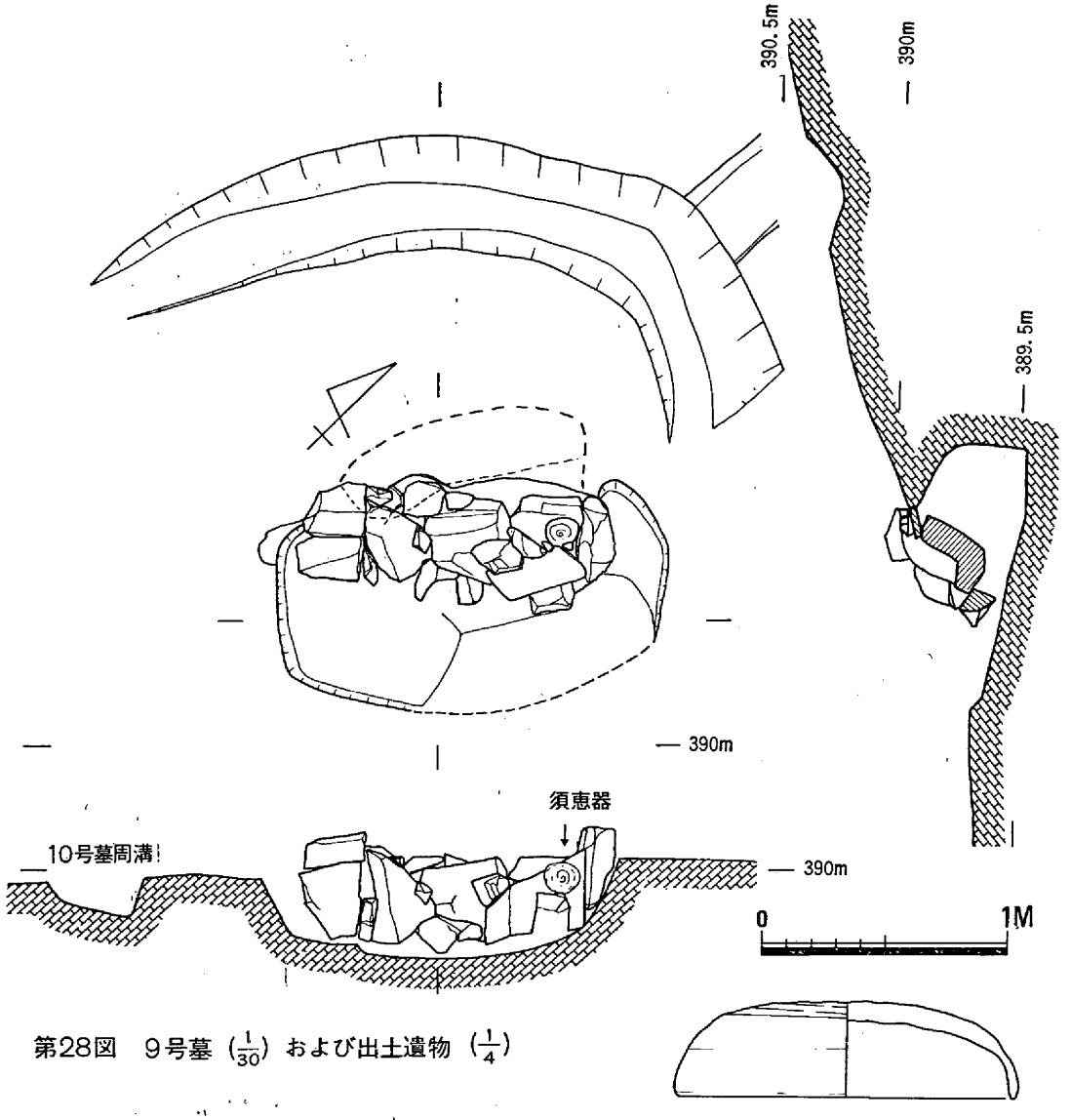
（7） 9 号 墓

８号墳の南側に位置する。７・８号墳と同じ構造であり，長径1.6cm， 短径80cmの楕円形の穴を中央部で約20cm程掘り下げ，更に奥に長さ1.0m， 幅30cmの墓室，床を掘り込んでいる。

屍体を安置したのち石で蓋をしている。石蓋をする時須恵器杯蓋を一点一諸に副葬しているが内部からの出土遺物はない。

山側に半月状に幅50cm深さ10cm前後の周溝をもっている。

石蓋と一諸に出土した須恵器は，杯蓋で口径13.55～1.40cm，器高3.85mの完形品である。天井部からすんなりと口縁部にむかう。端部は丸味をもつ。天井部は篦削りを行っている。内外面とも淡青灰色を呈してよく焼成されている。砂粒が多く含まれている。

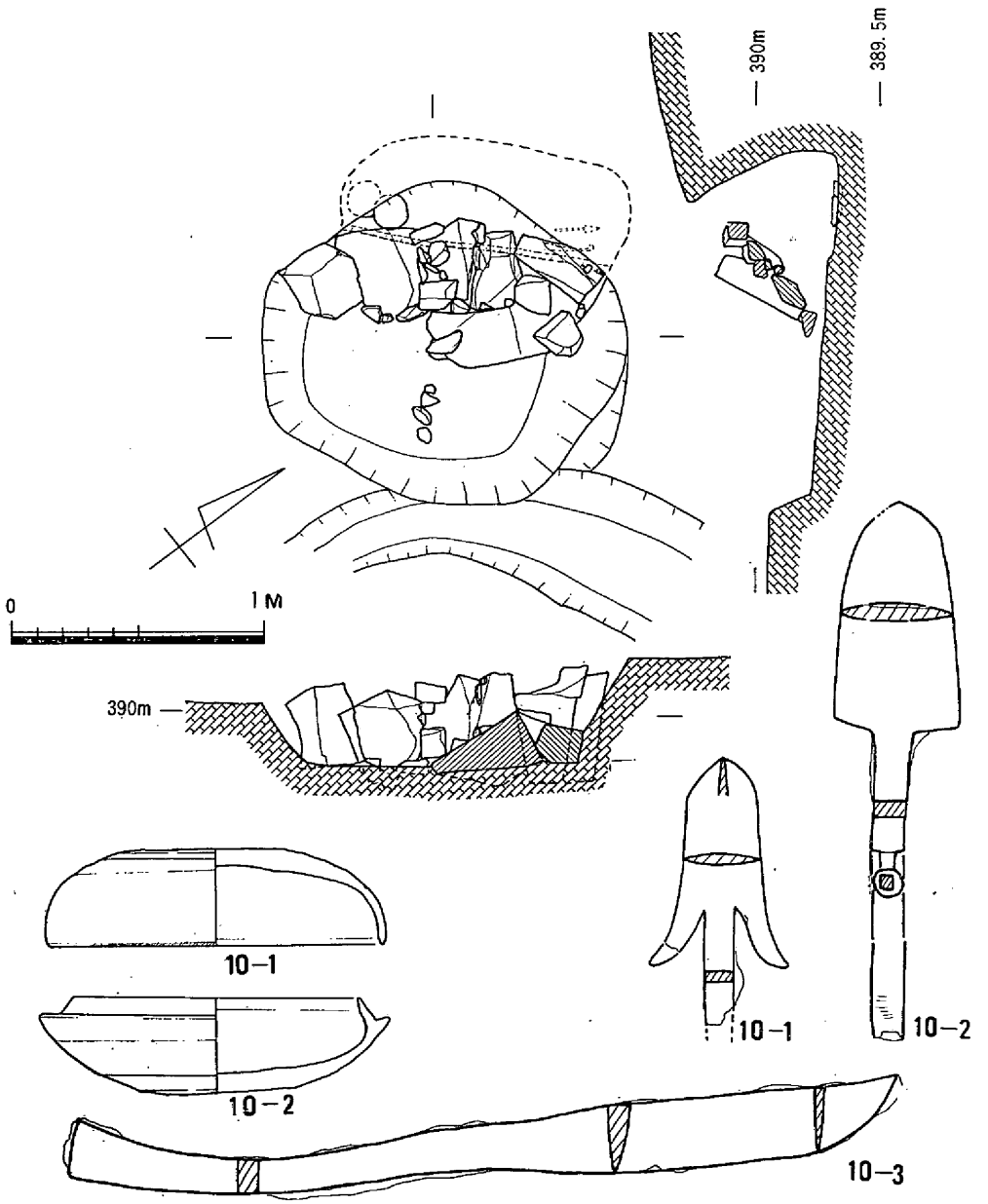


第28図　9号墓（$\frac{1}{30}$）および出土遺物（$\frac{1}{4}$）

（8） 10　号　墓

9号墳のさらに南側に造られている。7～9号と同じ構造をもつものがある。1.4～1.5mの不整円形の掘り方をつくり奥に屍床を掘りこみ石で蓋をする。床面の北東部に鉄鏃，刀子などの鉄器を，南西部に須恵器杯蓋杯身の二点の副葬を行っている。周溝はもたない。

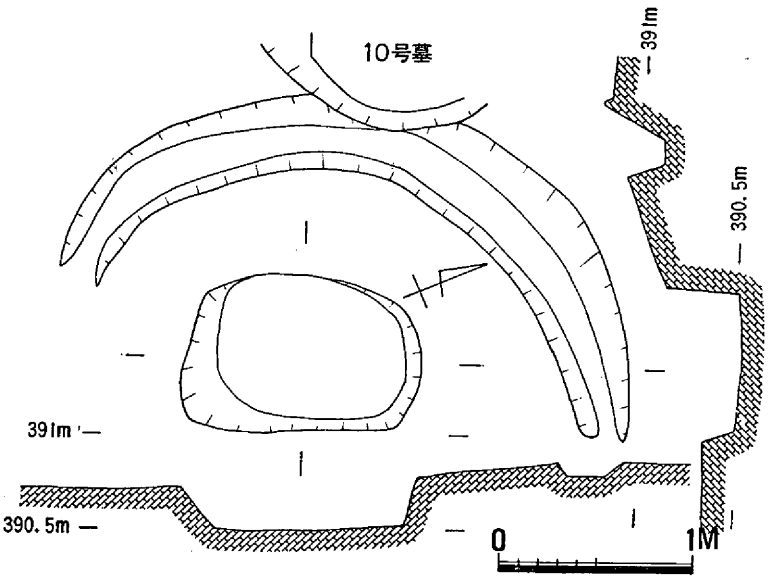
須恵器杯蓋は，口径13.4～13.8cm，器高3.9cmの完形品である。口縁部から丸味をもって天井部に



第29図　10号墓（$\frac{1}{30}$）および出土遺物（須恵器$\frac{1}{3}$・鉄器$\frac{1}{2}$）

向い，天井部は篦削り（左回わり）を行っているが，頂部に 2·5cm程の篦の刺し込みあとと思われる凹みが残っている。口縁端部内側にわずかに段をもち，外面には斜め方向の細かい刻目が一周する。胎土は緻密で内外面とも青灰色を呈する。杯身は，口径11·5～12·0cm器高 3·9cmの完形品である。口縁部たちあがりは内傾し，受部はわずか斜上向く。底部外面は篦削り(左回わり)を行う。胎土は緻密で，内面青灰色を呈しているが，砂粒を多量に含んでいる。底部内面には赤色顔料が付着している。

鉄鏃10—1は平根式，刀幅 2 cm，長さ1·5cm，頸長 3 cmが残る。10—2は平根式，刀幅 3 cm，長さ 6 cm，頸長約 8 cmが残る。10—3の刀子状鉄器は，全長22·5cm，刀部12cm，厚さ 0·6cmをはかる。梶部が上にそっている。



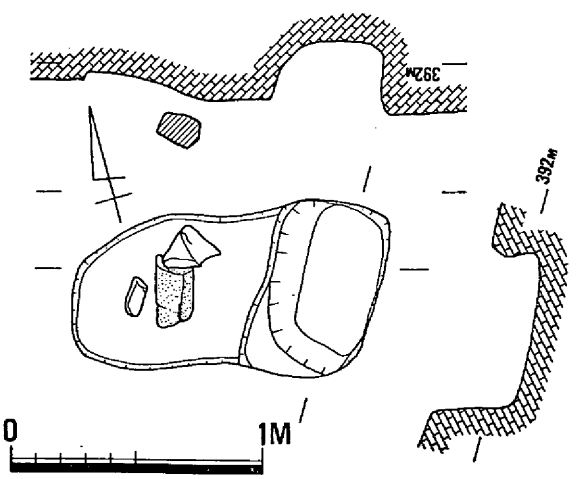
第30図　11号墓

（9） 第11号墓

10号墓の東側に位置する。幅65cm，長さ92cm深さ20cmの長方形の素掘りの土壙である。山側の西～北にかけて半月状に幅30～40cm，深さ20cm前後の周溝をもつ。出土遺物は見られない。

(10) 第 12 号 墓

1号墳の東側周溝近くに掘られた長径 1·2 m，短径60mの素掘りの土壙である。東側部分はさらに，30cm近く深く掘りこんでいる。出土遺物は見られない。



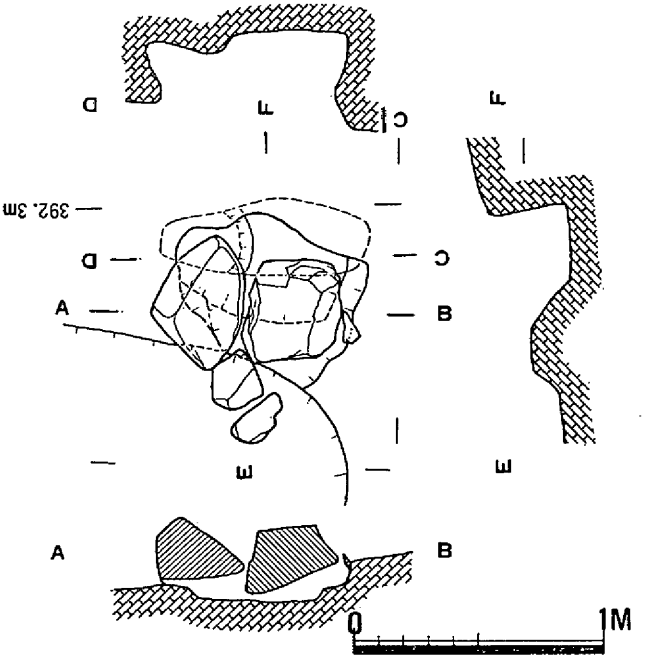
第31図　12号墓

（11） 第13号墓

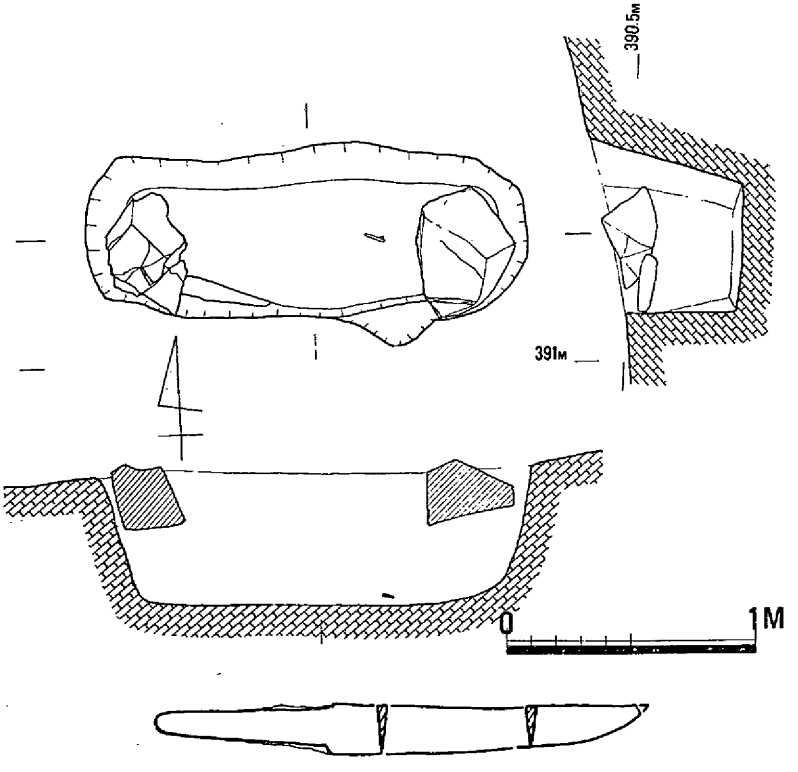
8号墓周溝に接しすぐ西側につくられている。長径0.9cm，短径50cmの楕円形を呈し深さ30cmの土壙に2ケの石で蓋をしている。この墓壙からの出土遺物は見られない。

（12） 第14号墓

略東西方向をむき，長さ1.74m，幅68cmの長方形の掘り方を持つ土壙である。西端に30～50cmの大きな石を1個ずつ配置している。墓壙内より刀子が1点出土している。この刀子は破損しているが推定全長13cm前後，刃部8.0cm，厚さは0.3cmをはかる。



第32図　13号墓



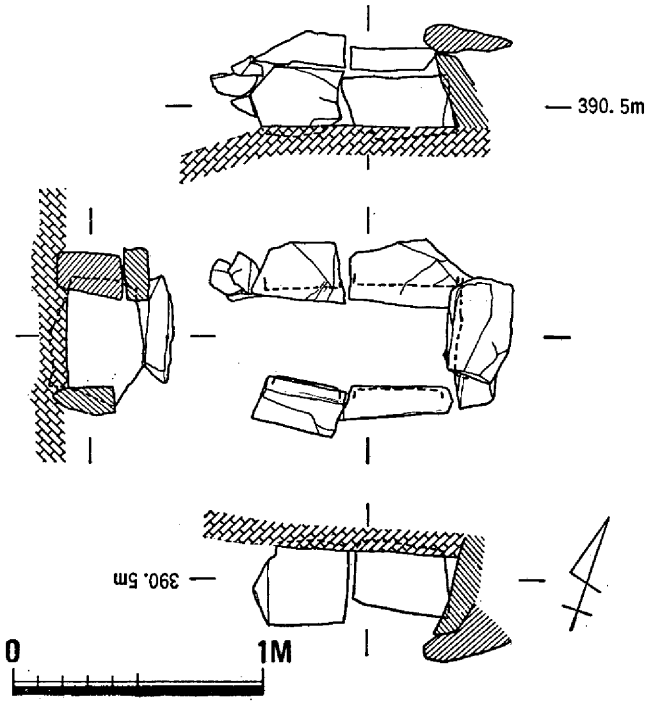
第33図　14号墓および出土遺物（$\frac{1}{2}$）

（13） 第15号墓

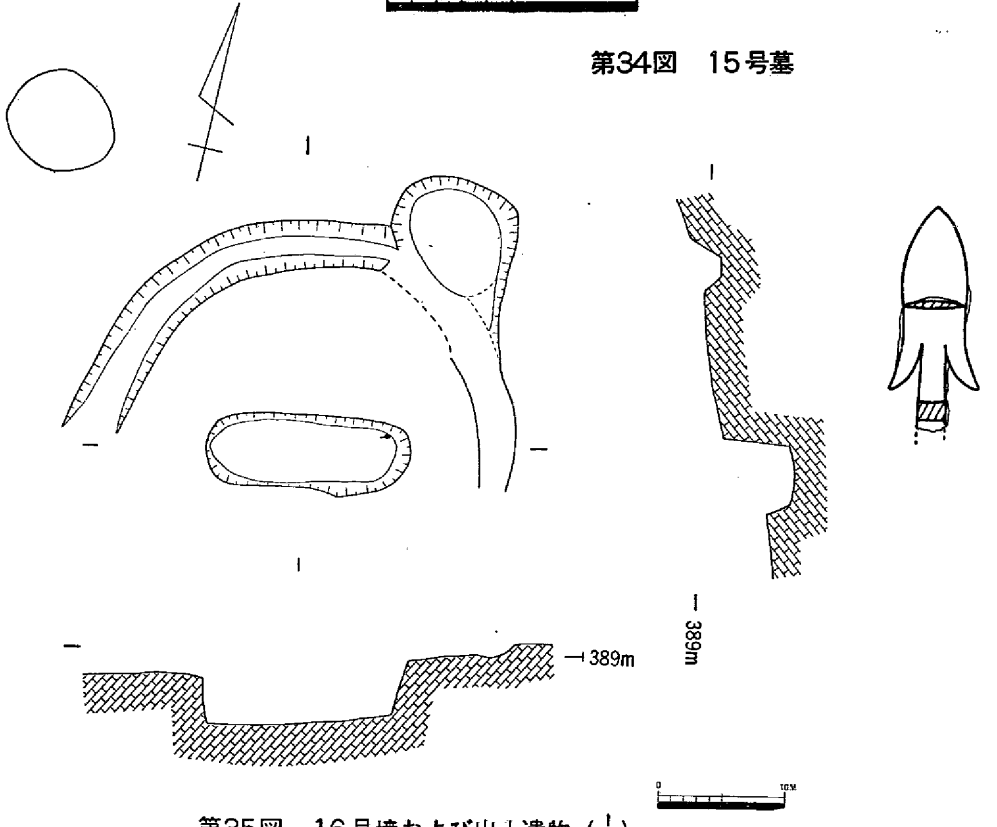
1号墳の東側，2号墳の西側にあたり，すぐ西手から南側の斜面に入る。幅40cm長さ80cmの箱式石棺で東側約½が残存し，北側側壁は2列2段，南側側壁2列1段，蓋石は最東部の奥壁部の1個が残っている。高さも30cm前後でこの上に蓋石がのる程度のものと考えられる。掘り方も不明で遺物も検出されなかった。

（14） 第16号墓

2号墳の南側に位置する。長さ82cm，幅30cm，深さ40cm程の土壙で，北側に半円形に幅20cm，深さ20cm前



第34図　15号墓



第35図　16号墳および出土遺物（$\frac{1}{2}$）

後の周溝を持つ。墓壙床面から鉄鏃が一点出土している。この鉄鏃は平根式に属するもので残存長さ6㎝幅3㎝厚さ0.2㎝，頸部の厚さは07×0.4㎝をはかる。

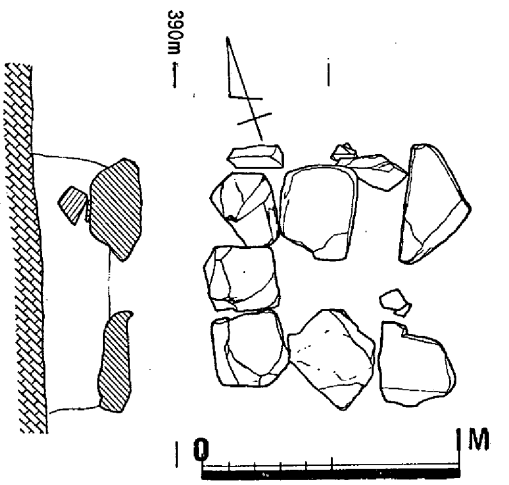
第2節　その他の遺構

これまで記述してきたものの他に直径45～50㎝の円形を成し浅いもの，柱穴状のピットなどを検出しているが，土壙になるのかどうかはっきりしない。又，弥生式土器（前期）も検出されており，これらに伴う遺構の存在も考えられるが今回の調査範囲では検出することはできなかった。

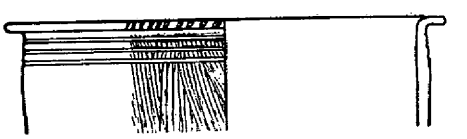
（1）17号遺構

これは2号墳の東墳端部で検出されたものであるが，当初は1～2号墳間で見られたものが2号墳の東側にも存在し，土壙かも知れないと考えていた。コ字状に並んだ7個の石の上部を平坦面をなし地山面まで黒ボコが20㎝堆積しており，古墳の盛土上につくられていることなどから，2号墳とは直接関係がなく，時期的に新しいものであろうと考えたのである。又，この石組みのすぐ近くから和鏡と銅銭が出土し，和鏡は平安末～鎌倉時代の秋草双雀流水紋鏡で，鏡面に墨書種子があり，蓮の台座の上に凡字で𑖀を表わし両側に草花をいけた花瓶を絵いている。これは秋草双雀流水紋本来の位置から見ば左へ90°振った方向になる。これは大日本如来を表し，宗教的意味あいを持っているものである。そしてこの鏡は二次的に懸仏（御正体）として利用されていたものである。銅銭は摩滅しているが熙寧通寶と判読でき，これは1068年鋳造の宋銭である。これらのことからこの匚字状の石組みも，上部が平坦になることなどから考えると小さな祠的なものが建てられその中にこの鏡が御正体として祭られていたものと考えることができる。これらの事により，この遺構遺物は，古代末～中世における1つの信仰上のものである。

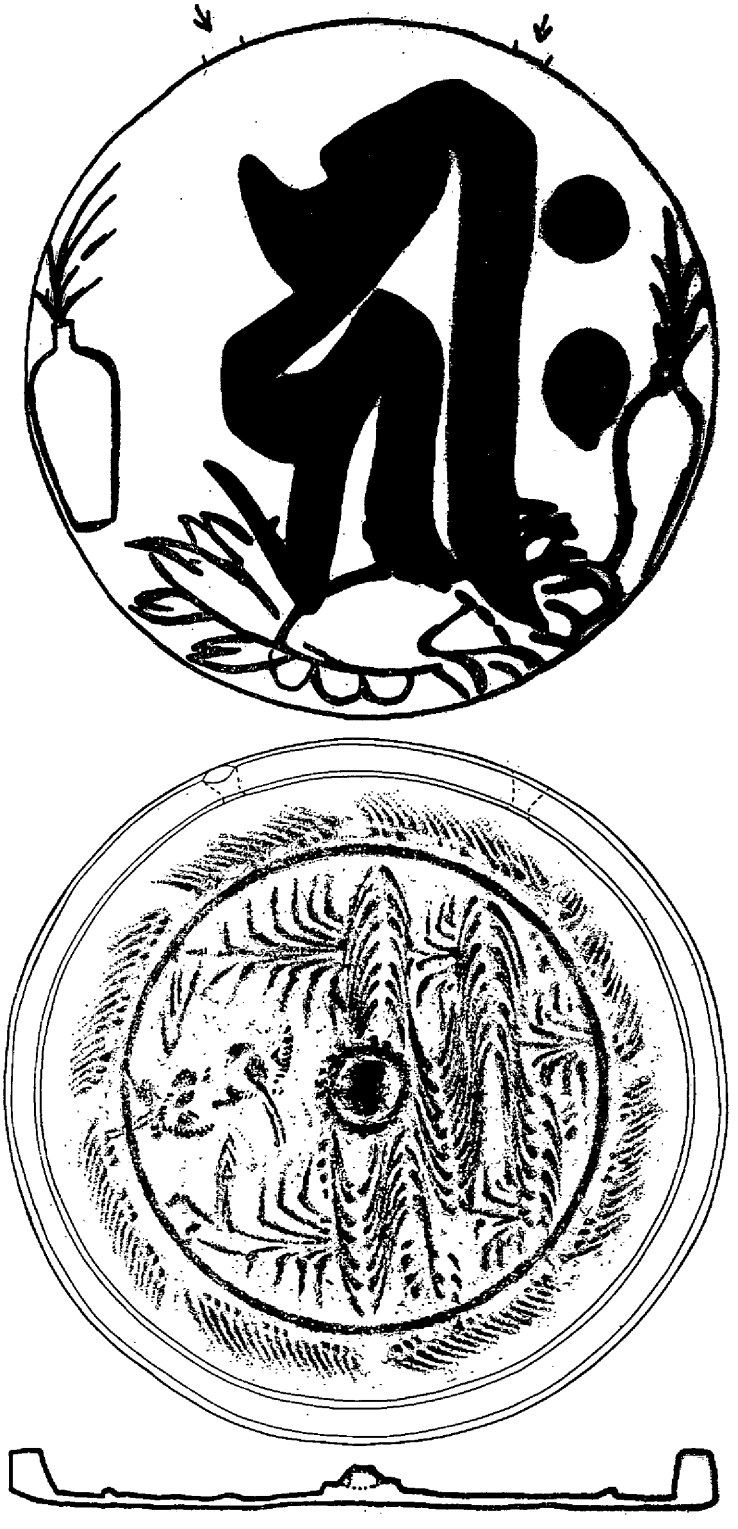
（御正体に関しては岡山県立博物館三好基之氏のまた凡字に関しては文化庁水野正好氏の御教示を得た。）



第36図　2号墳南17号遺構



第37図　2号墳墳丘内出土弥生式土器（$\frac{1}{4}$）



第38図　17号遺構周辺出土和鏡（御正体一現寸）

第５章　まとめにかえて

中国縦貫道建設に伴う調査以前において，哲西町内で古墳が発掘調査された例は少なくない。報告されたものは1957年の寺畝横穴墓，1960年の家坂の横穴墓の調査で示すように横穴墓の調査が主である。このように備中西北部は，備後北部地域とともに出雲を中心に分布する横穴墓が分布することで特異性が見られる地域である。横穴墓はその後の縦貫道建設に伴う調査において土井城南斜面からも２基発見されており，現在哲西町内で20基以上が確認されている。しかし他の大多数は横穴式石室を主体にした古墳群であることに変わりはない。

横田東古墳群，（土壙墓群と言った方が適当かも知れないが），内容的には，１号墳が横穴式石室，２号墳が竪穴式石室，３・５・６・13号墓が石蓋土壙，４・15号墓が小竪穴式石室，７・８・９・10号墓が横穴状蓋石土壙，11・14・16号墓が掘り込みの土壙であり，１・２号墳を主体にしてその周辺に数多く造られた一つの古墳群である。

単独あるいは数基の土壙・石蓋の土壙・石蓋土壙が見られる場合はあるものの，このように一つの古墳の周辺にこれ程多くの墓群を伴った古墳はかって調査された例は皆無である。

このように種々の型の墓壙群が，１・２号墳間の狭い範囲に14基も造られ，小さいながらも周溝を持ち墓を区画するものもあり，直接墓壙を切り合うものはなく，あっても周溝の一部を切っているだけである。それぞれが造られる時は意識してつくられていることがうかがえる。

また７～10号墓のような構造のものはかって調査された例もないが，いわゆる横穴墓に近いが，規模，棺体の埋置方法，石蓋の方法などは異る点の方が多い。しかしこれは，横穴墓を略式化したものと考えたい。そして２号墳は竪穴式石室という性格状，追葬は行われていないが，１号墳は須恵器の形式編年から見れば約 100年近く後においても追葬が行われている。そして1・2号墳間の土壙墓群はこれら二つの古墳の周溝をも含めてその墓域を侵すことなく造られており，追葬とは又別の意味を持ちそれぞれの墓に主体性があることをうかがわせるのである。

築造された時期はどうであろうか。すべての墓壙に遺物が伴って副葬されていないが，５号墳墓から須恵器杯蓋，杯身，ガラス玉，７号墳からは須恵器杯蓋，杯身，鉄鏃，刀子，９号墓からは須恵器杯蓋，10号墓からは須恵器杯蓋，杯身，14号墓からは刀子，16号墓からは鉄鏃が出土しており，何も出土が見られないのは３・４・６・８・11・12・13・15号墓である。半数が出土遺物が見られない。しかし，造り方などに相似性のあるものがあり遺物を伴うものとほとんど同じ時期に造られている可能性が強い。そしてまた，５・７・９・10号墓から出土している須恵器から見れば，１号墳よりは少し遅れるが，２号墳とはほとんど同時期に属し相前後して造られていると考えられる。２号墳に追葬できなかったので別に墓域を定めたとも思えず，古代家族における主系列以外の人達を葬っていると考えることもできるのではなかろうか。

以上のように非常に特異な形で検出されたこれらの墓壙群の検出は今後の類例を待ちたいが，これまでの石室内あるいは墳丘の調査だけでなく，墓道をも含め，古墳群間を広く掘り広げる必要性を問いかけるものでもあろう。

横田東古墳郡周辺航空写真（$\frac{1}{10000}$）

図版２

１．横田東古墳群樹木伐採後の遠景（南から）

２．横田東古墳群遠景（南から）

１．横田東古墳群遠景（南から）

２．横田東古墳群近景（北から）

図版４

１．横田東古墳群近景（北から）

２．横田東古墳群近景（南がら）

１．１号墳近景（東から）

２．１号墳石室（南から）

図版６

１．１号墳石室全景（南から）

２．１号墳石室全景（北から）

1．1号墳石室全景（南から）

2．1号墳石室全景（南から）

図版８

１．１号墳遺物出土状況（東から）

２．１号墳羨道閉塞石除去後（南から）

１．１号墳地山面土壙イ（弥生？）

２．１号墳地山面土壙ハ（弥生？）

図版10

1．2号墳近景（北から）

2．2号墳墳丘盛土および天井石出土状況（西から）

1．2号墳天井石除去前全景（西から）

2．2号墳天井石除去前全景（西から）

図版12

1．2号墳天井石（南から）

2．2号墳天井石ひかえ石除去状況（南から）

1．2号墳天井石除去状況（南から）

2．2号墳天井石除去状況（北から）

図版14

1．2号墳遺物出土状況（南から）

2．2号墳遺物出土状況（北から）

1．2号墳大刀須恵器出土状況（東から）

2．2号墳須恵器、鉄鏃出土状況（西から）

図版16

1．2号墳堀り方（東から）

2．17号遺構（東から）

1．1・2号墳間小規模墳墓群蓋石除去前（南から）

2．1・2号墳間小規模墳墓群蓋石除去後（南から）

図版18

1．1・2号墳間小規模墳墓群蓋石除去前（東から）

2．1・2号墳間小規模墳墓群蓋石除去後（東から）

1．3号墓（南から）

2．3号墓（東から）

図版20

1．４号墓天井石を残した状態（南から）

2．４号墓天井石を除去した段階（西から）

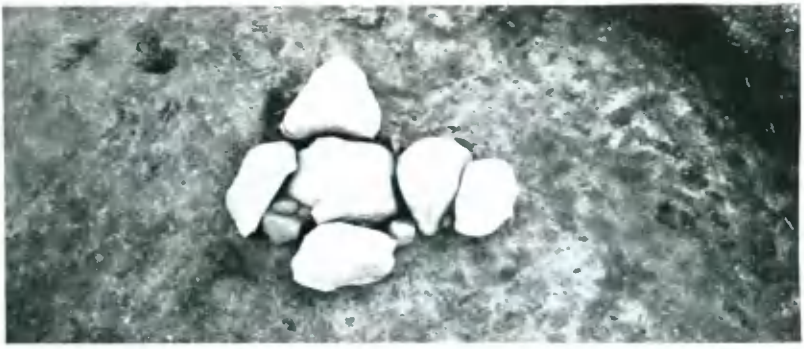
1．5号墓蓋石の状況（西から）

2．5号墓須恵器出土状況（北から）

3．5号墓須恵器出土状況拡大（北から）

4．5号墓掘り方（西から）

図版22



1．6号墓（南から）

2．6号墓（東から）

3．6号墓（西から）

1．7・8・13号墓蓋石除去前（東から）

2．7・8・13号墓蓋石除去後（東から）

図版24

1．7号墓蓋石（東から）

2．7号墓蓋石（南から）

1．7号墓横穴部（東から）

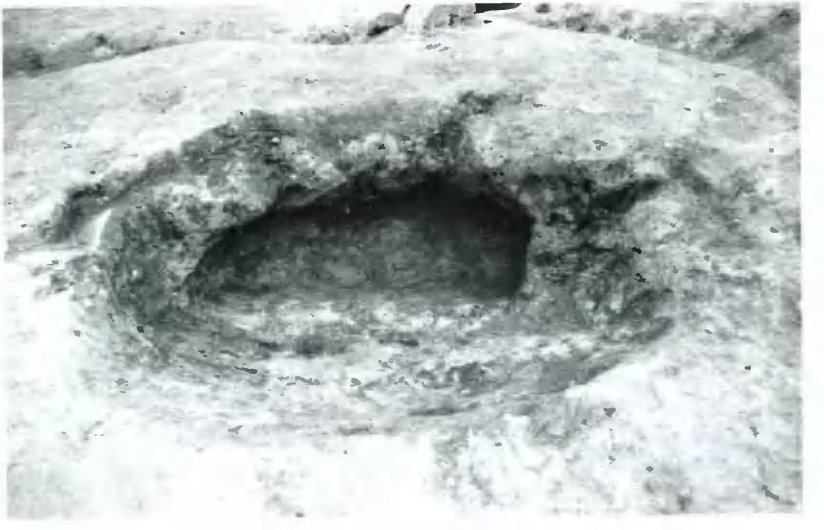
2．7号墓横穴部（東から）

図版26

1．8号墓（北東から）

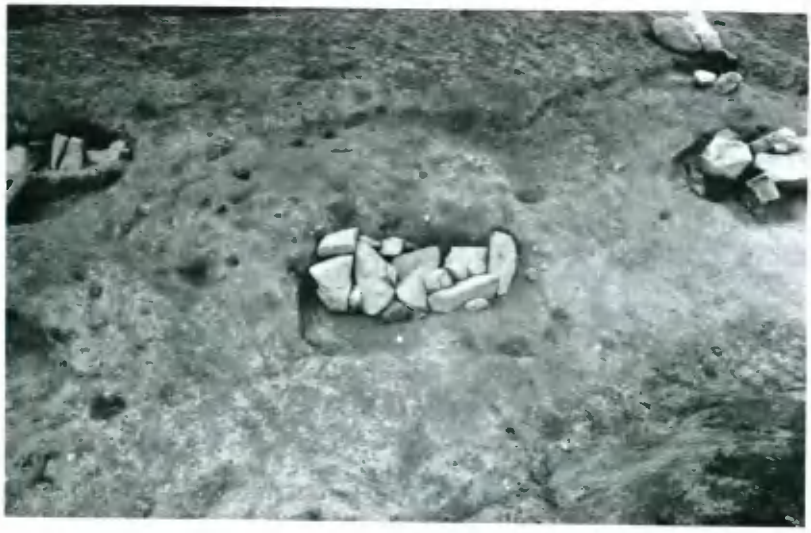
2．8号墓（上側が第12号墓、東から）

1．8号墓蓋石除去後（上方第12号墓、東から）



2．8号墓横穴部（東から）

図版28



1．9号墓全景（東から）

2．9号墓蓋石（南から）

1．9号墓蓋石（上から）

2．9号墓横穴部（東から）

図版30

1．10号墓（東南から）

2．10号墓（南から）

1．10号墓横穴部（東から）

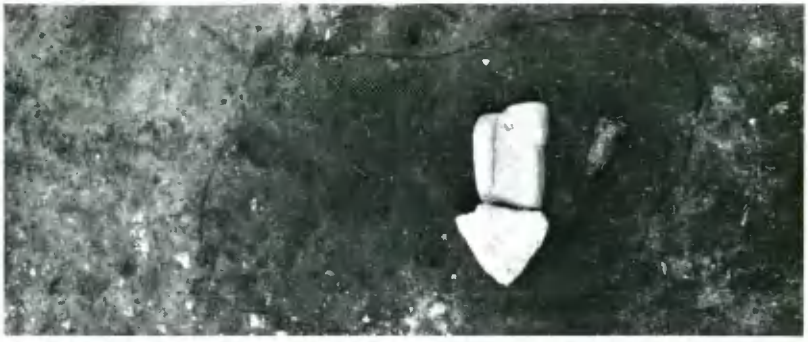
2．10号墓須恵器出土状況（東から）

3．10号墓鉄器出土状況（南から）

図版32

1．9・10・11号墓全景（北東から）

2．11号墓全景（東から）



1．12号墓（北から）

2．12号墓（北から）

3．12号墓（西から）

図版34

1．13号墓と8号墓(下)の関係（東から）

2．13号墓蓋石（南から）

3．13号墓土壙（東から）

1．14号墓（西から）

2．14号墓（西から）

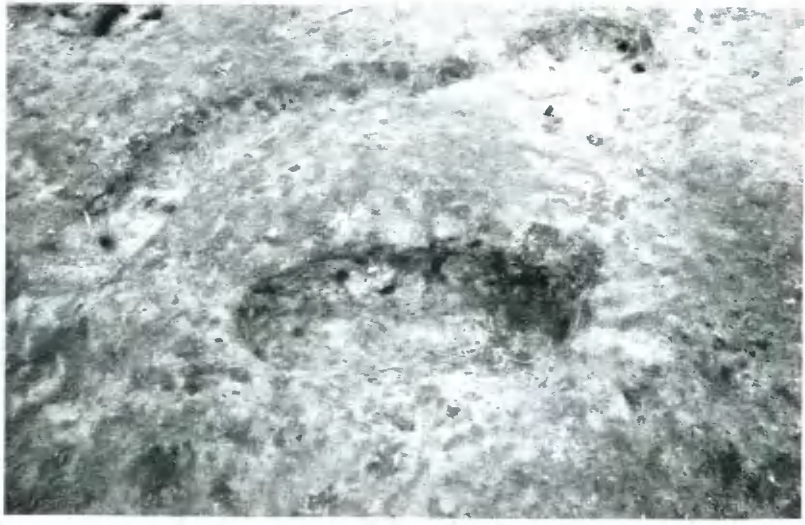
3．14号墓（南から）

図版36

1．15号墓（西から）

2．15号墓（東南から）

1．16号墓（西から）



2．16号墓（南から）

図版38

1

11

3

12

5

13

7

14

8

15

1号墳出土須恵器（1）

17

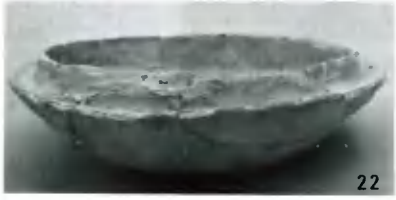
26

18

27

20

28


22

32

25

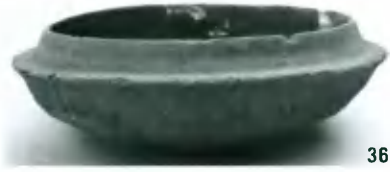
33

1号墳出土須恵器（2）

図版40

34

31


36

42

35

41

37

43

39

46

1号墳出土須恵器（3）

50

52

51

1号墳出土須恵器（4）

図版42

53

54

52

55

56

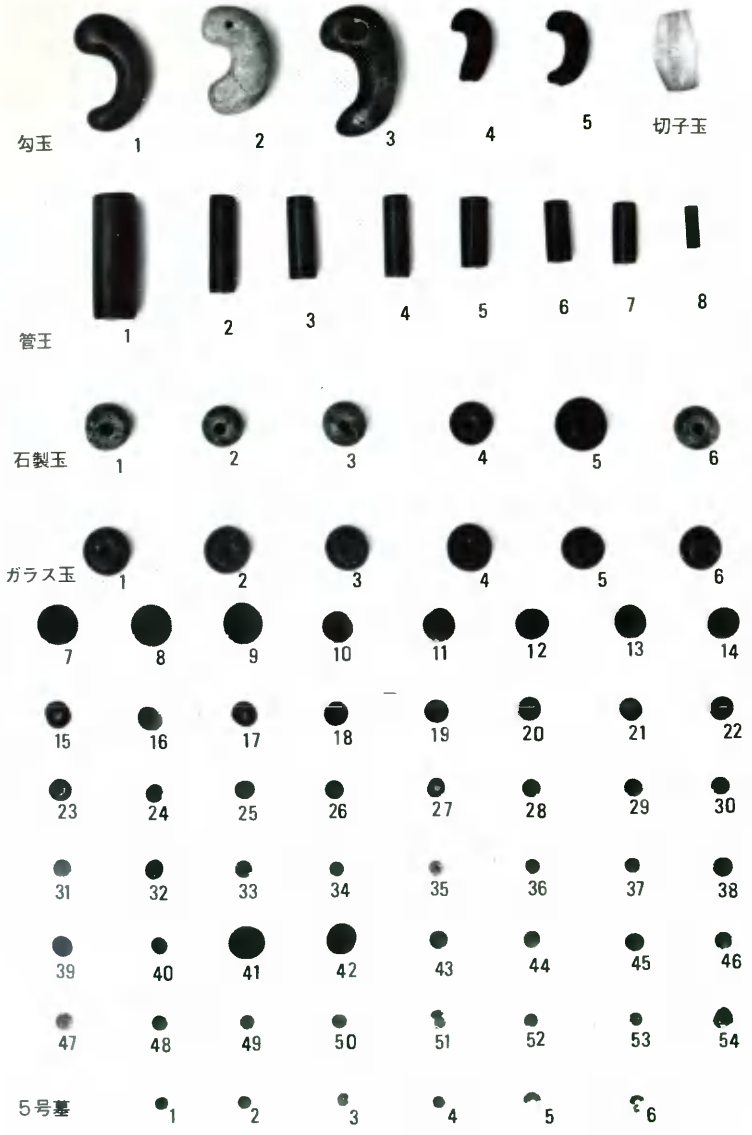
59

57

60

58

1号墳出土須恵器（5）



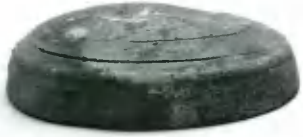
1号墳出土装身具類（最下段6個は5号墓出土）

図版44

1号墳出土鉄器類

1

2


3

4

5

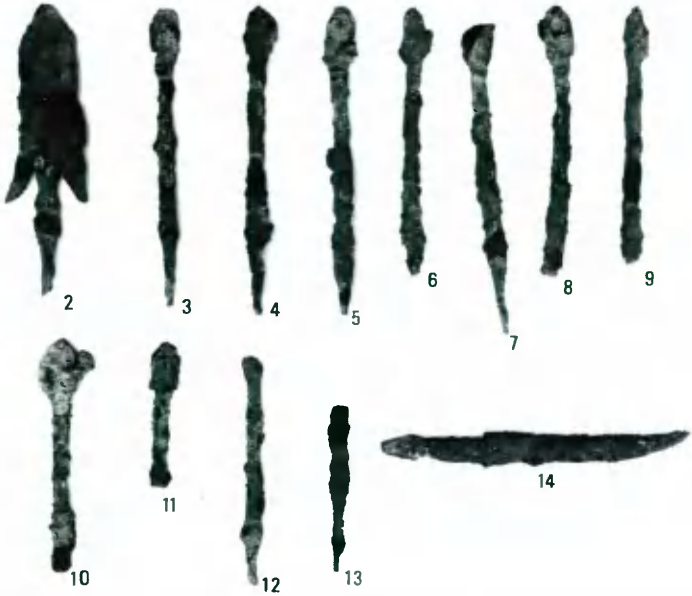
6

7

1

2号墳出土遺物

図版46



1．2号墳出土鉄器

2．5号墓（5−1・2）
9号墓（9）出土須恵器

1．7号墓（7−1・2）10号墓（10−1・2）出土須恵器

2．各土壙出土鉄器類

図版48

17号遺構周辺出土和鏡（御正体）-現寸大 -

横田遺跡(65)

例　言

1. 本書は中国縦貫自動車道建設に伴って，事前調査後破壊されることになった，阿哲郡哲西町大字矢田横田（あてつぐん　てっせいちょう　やた　よこた）所在の横田遺跡発掘調査報告である。
2. 発掘調査は昭和51年5月22日から10月29日にかけて実施した。現地発掘調査の実施にあたっては岡田　博・秀島貞康が担当し，一部の調査区については福田正継・中野雅美が担当した。また，発掘調査の後半，9月・10月には下沢公明・浅倉秀昭・竹田　勝・岡本寛久・井上　弘・内藤善史の各調査員の援助を得た。なお現地では哲西町教育委員会をはじめ下記の方々の御協力をいただいた。記して深甚の謝意を表する次第である。

〈現地発掘作業員〉

井上秀磨　遠藤哲男　定岡平吉　赤木晃久　田藤久満一　田辺一郎　藤岡謙太郎　大中卓二
黒笹秀一　笹川剣一　吉井龍吾　土屋勝治　芳賀正治　清水　勝　秋田安江　酒木ヨシエ
三谷竹代　岡崎信子　青木加代野　三谷　香　原田浜代　清水菊枝　白築早苗　森島栄子
逸見佐登美　定岡豊子　荻原宮子　田辺志津子　麻月千代　生熊寿子　井上嘉弥代　小田艶子
川上初子　立川一重　土屋トヨ子　三上愛恵　村上高代　森島幹子　安田三四子　横田愛子
横田益代　横山勅恵　横山道子　土屋民子　大日南篤美　（以上哲西町在住）　木下絹子
千原康代　西川マスヨ　（以上神郷町在住）　梅林政市　梅林邦男　（以上新見市在住）

3. 出土遺物・写真・実測図等は昭和52年11月から3月にかけて文化課分室（岡山市西古松）にて整理を行ない，すべて同所に保管している。
4. 遺構図・地形図等の作成については下記の分担によっている。

1区　岡田・秀島　　2区　岡田・秀島・井上・岡本・内藤
3区　岡田・秀島・福田・中野・井上・下沢・岡本・浅倉
4区　秀島・下沢・竹田・浅倉・井上

5. 現地での写真撮影は岡田・秀島・福田・中野があたり，遺物写真については井上が担当した。
6. 報告書に掲載した遺物実測図の作成にあたっては，岡田・秀島・下沢・竹田・福田・中野が担当し山尾真由美・浜本早苗の援助をうけた。各章の執筆分担は下記によっている。

第1章　岡田
第2章　岡田
第3章
　第1節　岡田（1～10号，13・14号）福田・中野（11・12号，16～23号）
　第2節　岡田・中野
第4章
　第1節　秀島・竹田
　第2節　竹田
　第3節　秀島・竹田・岡田

7. 第1図横田遺跡位置図は国土地理院発行の地形図を使用した。（承認番号　昭53中複第29号）

目　　次

本文目次

第１章　調査の経過と概要…… 379
第１節　遺跡の位置と環境…… 379
第２節　調査の経過…… 381
第３節　調査区の設定と概要…… 383
日誌抄
第２章　１区・２区の調査…… 385
第１節　１区の調査…… 385
第２節　２区の調査…… 388
第３章　３区の調査…… 398
第１節　竪穴住居址の調査…… 398
第２節　その他の遺構・遺物…… 417
第４章　４区の調査…… 429
第１節　検出遺構の概要…… 429
第２節　土壙墓・溝状遺構の調査…… 430
第３節　古墳の調査…… 452
第４節　その他の遺構・遺物…… 456
結語…… 459

付表　４区土壙墓計測表…… 432

図　目　次

第１図　横田遺跡位置図（$\frac{1}{50000}$）…… 379
第２図　周辺地形図（$\frac{1}{2000}$）…… 380
第３図　発掘区域図（$\frac{\quad}{2000}$）…… 382
第４図　１区第１・２トレンチ土層断面図（$\frac{1}{50}$）…… 386
第５図　１区第３トレンチ土層断面図（$\frac{1}{50}$）…… 387
第６図　１区第１・２トレンチ４検出柱穴実測図（$\frac{1}{30}$）…… 385
第７図　２区遺構全体図（$\frac{1}{300}$）……388—389

第8図　2区土層断面図 ($\frac{1}{50}$) …… 389
第9図　2区土壙実測図 ($\frac{1}{40}$) …… 391
第10図　2区建物Ⅰ実測図 ($\frac{1}{60}$) ……390—391
第11図　2区建物Ⅱ実測図 ($\frac{1}{50}$) …… 392
第12図　2区建物Ⅲ実測図 ($\frac{1}{50}$) …… 393
第13図　2区出土弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$) …… 396
第14図　1・2区出土須恵器・土師器実測図 ($\frac{1}{3}$) …… 397
第15図　3区遺構全体図 ($\frac{1}{400}$) …… 399
第16図　1号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 401
第17図　2号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 401
第18図　1号住居址出土弥生式土器 ($\frac{1}{60}$) …… 402
第19図　3号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 403
第20図　5号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 403
第21図　7号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 405
第22図　7号住居址出土鉄器実測図 ($\frac{1}{3}$) …… 406
第23図　7号住居址出土須恵器・土師器実測図 ($\frac{1}{3}$) …… 407
第24図　2・3・9・10号住居址及び3区南斜面出土須恵器・土師器実測図 ($\frac{1}{3}$)…408
第25図　6号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 409
第26図　8号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 409
第27図　9号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 409
第28図　9号住居址及び周辺出土土師器実測図 ($\frac{1}{3}$) …… 411
第29図　10号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 412
第30図　11号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 416
第31図　12号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 417
第32図　13号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 418
第33図　14号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 419
第34図　16・17号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 420

第35図 18号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 422
第36図 19・20号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 423
第37図 21号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 424
第38図 22号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 425
第39図 23号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 426
第40図 16・19・21・23号住居址出土遺物実測図 ($\frac{1}{3}$) …… 427
第41図 不整形土壙実測図 ($\frac{1}{60}$) …… 428
第42図 3区北西方高所出土弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$) …… 428
第43図 4区遺構全体図 ($\frac{1}{200}$) ……430—431
第44図 4区南西地区遺構配置図 ($\frac{1}{100}$) ……430—431
第45図 1号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 430
第46図 4区1号土壙墓出土遺物 ($\frac{1}{4}$) …… 431
第47図 4区2・3号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 434
第48図 4区丘陵中央部土壙墓配置図 ($\frac{1}{100}$) ……434—435
第49図 4区 土層断面図 (J—I, G—H) …… 435
第50図 4区4・5号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 436
第51図 4区6・7号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 437
第52図 4区8・10号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 438
第53図 4区11～13号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 439
第54図 4区14～16号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 441
第55図 4区17・18号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 442
第56図 4区19～21号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 443
第57図 4区22～24号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 444
第58図 4区25～28号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 445
第59図 4区29・30号土壙図実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 446
第60図 4区溝Ⅱ・Ⅲ断面図 ($\frac{1}{30}$) …… 448
第61図 土器溜りA実測図 ($\frac{1}{30}$) …… 449

第62図　土器溜りA出土土器実測図（1/3）…… 449
第63図　溝Ⅴ・土器出土状態実測図（1/30）…… 450
第64図　溝Ⅴ出土土器実測図（1/3）…… 450
第65図　土器溜りB実測図（1/30）…… 451
第66図　土器溜りB出土土器実測図（1/3）…… 451
第67図　4区1号墳墳丘・周溝断面図（1/40）…… 452
第68図　4区1・2号墳墳丘実測図（1/100）……452—453
第69図　4区1号墳主体部実測図（1/30）…… 453
第70図　1号墳主体部出土直刀（1/4）…… 454
第71図　4区2号墳墳丘断面図（1/80）…… 455
第72図　4区出土石器実測図（1/2）…… 456
第73図　4区出土の弥生式土器（1/4）…… 457
第74図　4区出土珠文鏡（1/1）…… 458
第75図　円形土壙実測図（1/30）…… 458

図 版 目 次

図版1—1　遺跡遠景（北東から）
2　1区・2区遠景（3区から）
図版2—1　2区検出柱穴群（南から）
2　柱穴・溝状遺構検出状況（南から）
図版3—1　1号土壙検出状況（北から）
2　1号土壙（東から）
図版4—1　2区全景（3区から）
2　2区出土遺物
図版5—1　3区発掘着手前全景（2区から）
3区発掘着手前全景（4区から）
図版6—1　1号住居址（北東から）
2　3号住居址（北東から）
図版7—1　2号住居址検出状態（東から）
2　2号住居址（南から）

図版８－１　５～７号住居址調査風景（南西から）
　　２　５号住居址検出状況（南から）
図版９－１　５号住居址（西から）
　　２　６号住居址　（東から）
図版10－１　調査風景（南から）
　　２　７号住居址検出状況（南から）
図版11－１　７号住居址上面遺物出土状態（南から）
　　２　７号住居址上面遺物出土状態（南から）
図版12－１　７号住居址床面遺物出土状態（南から）
　　２　７号住居址（西から）
図版13－１　８・９号住居址（西から）
　　２　８・９号住居址（東から）
図版14－１　９号住居址壁体溝と須恵器（東から）
　　２　須恵器出土状態（南から）
　　３　９号住居址西方出土ミニチュア土器（南から）
図版15－１　10号住居址（南西から）
　　２　３区上方調査風景（南東から）
図版16－１　３区発掘調査風景　（南から）
　　２　３区住居址群全景（南から）
図版17－１　13・14号住居址付近発掘風景（東から）
　　２　９・11・12号住居址検出状況（北西から）
図版18－１　13・14号住居址周辺（北西から）
　　２　15号住居址（南東から）
図版19－１　15号住居址（東から）
　　２　18号住居址（南東から）
図版20－１　19・20号住居址検出状況（南から）
　　２　19・20号住居址（南から）
図版21－１　20号住居址　（南から）
　　２　不整形土壙（西から）
図版22－１　３区上段住居址群（南西から）
　　２　６・７号住居址および３区遠景（北東から）
図版23－１　21号住居址（南から）
　　２　22号住居址（南から）
図版24　　出土遺物
図版25　　出土遺物

図版26—1　4区発掘着手前遠景（3区から）
2　4区遠景（藤木城址から）
図版27—1　1号墳および土壙墓群（西から）
2　土壙墓群（南東から）
図版28—1　1号土壙上面供献土器出土状態（南から）
2　1号土壙検出状態（南から）
図版29—1　2号土壙墓（北西から）
2　2号土壙墓（北から）
図版30—1　3号土壙墓（北西から）
2　3号土壙墓（南西から）
図版31—1　1・2号土壙墓・溝Ⅰ・溝Ⅱ（北西から）
2　溝Ⅰ検出状況（東から）
図版32—1　6・7号土壙墓（北から）
2　8号土壙墓（北から）
図版33—1　10・11・4・5号土壙墓（南西から）
2　6・7号土壙墓周辺（北から）
図版34—1　12号土壙墓（北西から）
2　13号土壙墓（北西から）
図版35—1　15号土壙墓（南から）
2　16号土壙墓（南西から）
図版36—1　17号土壙墓（南東から）
2　18・19・20・24号土壙墓（南東から）
図版37—1　21号土壙墓（南から）
2　22号土壙墓（南東から）
図版38—1　23号土壙墓（南から）
2　20・24号土壙墓（南西から）
図版39—1　25号土壙墓（東から）
2　26号土壙墓（南東から）
図版40—1　27・28号土壙墓（北東から）
2　29・30号土壙墓（東から）
図版41—1　出土遺物
図版42—1　3区丘陵中央部割石出土状態（南西から）
2　土器溜りB（北東から）
図版43—1　溝Ⅳおよび29・30号土壙（東から）
2　溝Ⅳ内石斧出土状態（北から）

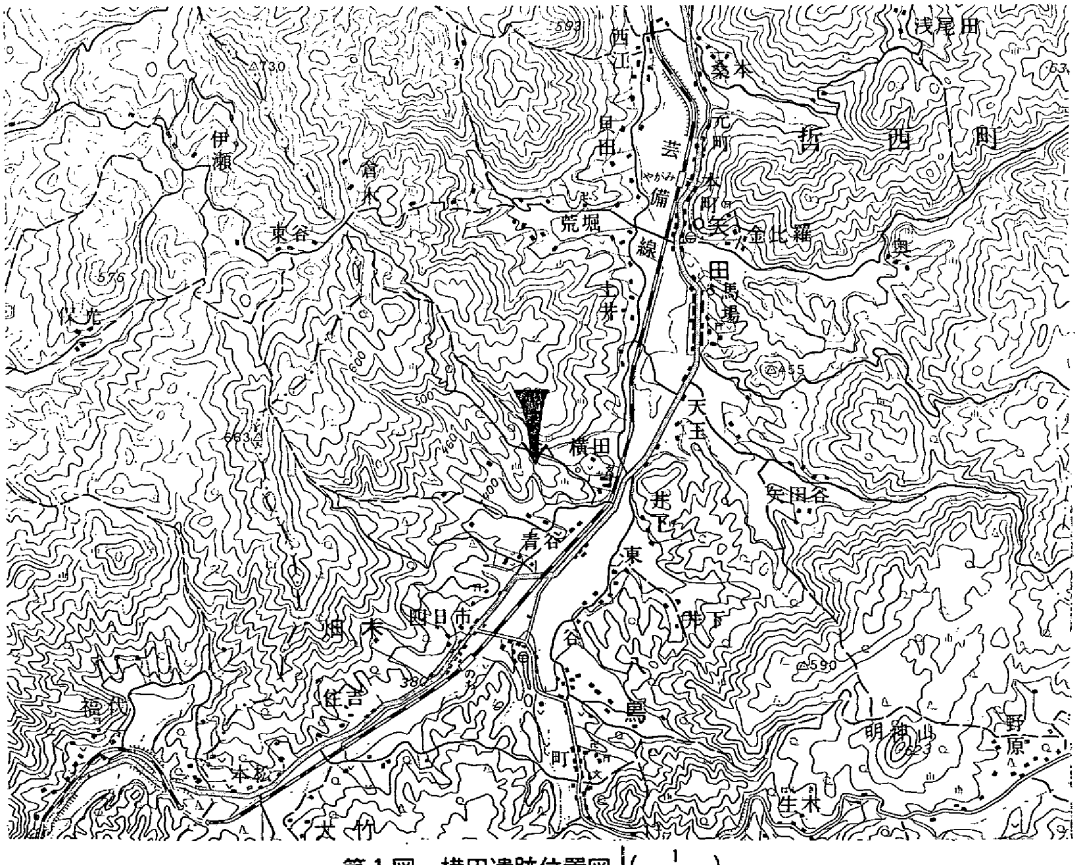
図版44—1　溝V検出状況（北から）
　　2　溝V出土土師器出土状態（南から）
図版45—1　1号墳遠景（藤木城址から）
　　2　1号墳近景（南西から）
図版46—1　1号墳墳丘上集石（南西から）
　　2　1号墳主体部検出状況（北から）
図版47　出土遺物
図版48　出土遺物

第1章 調査の経過と概要

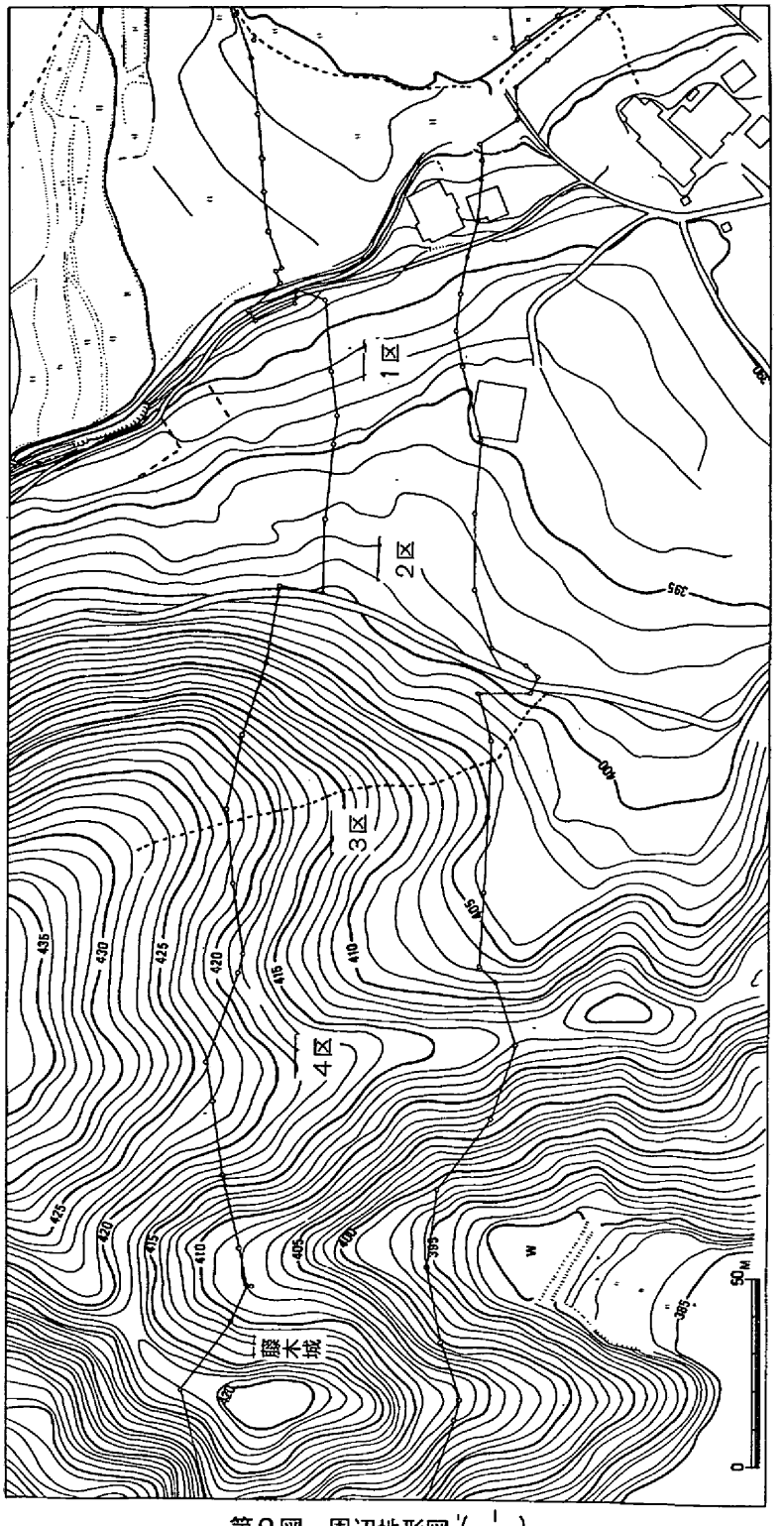
第1節 遺跡の位置と環境

横田遺跡は，ほぼ南北にのびる丘陵上および丘陵よりひろがる台地上に位置する主として弥生時代から古墳時代末期・奈良時代前期にかけての複合遺跡である。調査地点は主丘陵が，支丘陵・台地に移行する部分で台地東端より，西端の狭長な丘陵までを4区の調査地区に分割し，中国縦貫道路線に沿う全長約250mの範囲である。該当する面積は約15000㎡であるが，発掘調査実施面積は約6000㎡である

遺跡そのものの範囲は現在，南方台地部分のほぼ全体が学校および付属運動場の建築・建設のため旧状を広くは残していないが，3区背後西方丘陵を含めて，かつては広大なものであったことが推定される。このことは発掘区の南方宅地・畑地で弥生式土器片等が出土していることや，背後西方丘陵に竪穴住居遺構が連続して拡がる可能性が強いことからも裏付けられよう。特に後者の地点では，縦貫道買収用地外にのびる弥生時代の竪穴住居址に伴う溝状遺構（壁体溝）を検出している。一方，4区支丘陵の南約20mには墳形は不明であるが明瞭な封土・葺石を残す古墳が存在しており，今回の調



第1図 横田遺跡位置図 (1/50000)



第2図 周辺地形図 (1/2000)

査対象となった2基の古墳を加えて，丘陵尾根筋に占拠する古墳群が存在したことも特筆しておかなければならない。

遺跡よりの景観は1～4区の調査区によって異なるが，1区・2区からは北東方台地直下の谷水田をはさんで約200mの地点に存在する横田東古墳群をのぞむことができ，さらに東方の狭小な水田や南方丘陵を見下ろす。3区は前後植林地のためやや眺望に恵まれないが本遺跡のなかでも最高所に位置し，1区・2区を見下ろし，4区を眼前にのぞむ。4区支丘陵の南西方約80mには藤木城が存在するが，眼下に谷部を整地した推定館址を見下ろす。この藤木城址の存在する丘陵は，4区支丘陵と主丘陵を共有するものである。更に南西方には広島県境まで続く沖積平野の一部を望むことができる。

第2節 調 査 の 経 過

2名の調査員から成る横田遺跡調査パーティーが，神郷町での岩屋経塚・岩屋城の調査を終え，本遺跡に移動したのは5月22日のことである。本遺跡には，宗金・西江両遺跡と同様，宿泊設備・電話等設備を完備した調査事務所が置かれ，発掘資材・出土遺物・図面・写真等が保管できる施設として哲西町西半の遺跡調査に関わる，調査員の拠点であった。以上の点は本遺跡を調査する場合，発掘器材の運搬・収納，出土遺物の管理等，極めて好便であったが，哲西町でもっとも遅れて調査に着手したため，従来，特定の作業員を確保し，担当遺跡を継続的に移動調査していた他パーティとは異なり，新規に作業員を募集しなければならないという問題を抱えていた。当時，縦貫道の工事も遺跡調査地区以外はかなりの速度で進渉しており，働き盛りの地元「中高年層」の労働力は何らかの形（たとえば下請け）でその建設工事に従事する人が多く，相対的に重労働であるとしても，比較的高賃金が支払われていた。加えてマイクロバスの送迎等条件面で遺跡調査作業員のそれとはかなり好条件で，再三の有線放送による作業員募集の呼びかけも，大幅な作業員の増加には至らず，このことは9月・10月の調査の追い込み時期に大きな影響をもたらしたのである。したがって，本格的に調査を開始した6月上旬の時点では作業員はわずか10名であった。更にベルトコンベアーの不足——むろん少人数では運搬・設定・稼動は危険を伴って不可能であるが——もあり，作業員数が20名近くに達し，ベルトコンベアーも到着，実質的に調査が開始可能となったのは7月上旬のことであった。

以上の諸問題を，わずかながら改善しつつも，広大な調査対象面積を年次当初計画に上程された9月末完了は全く非現実的な目標であったため，短期間でしかも少人数の作業員，2名の調査員によって最大限の調査成果をあげるため，下記の結論に達したのである。

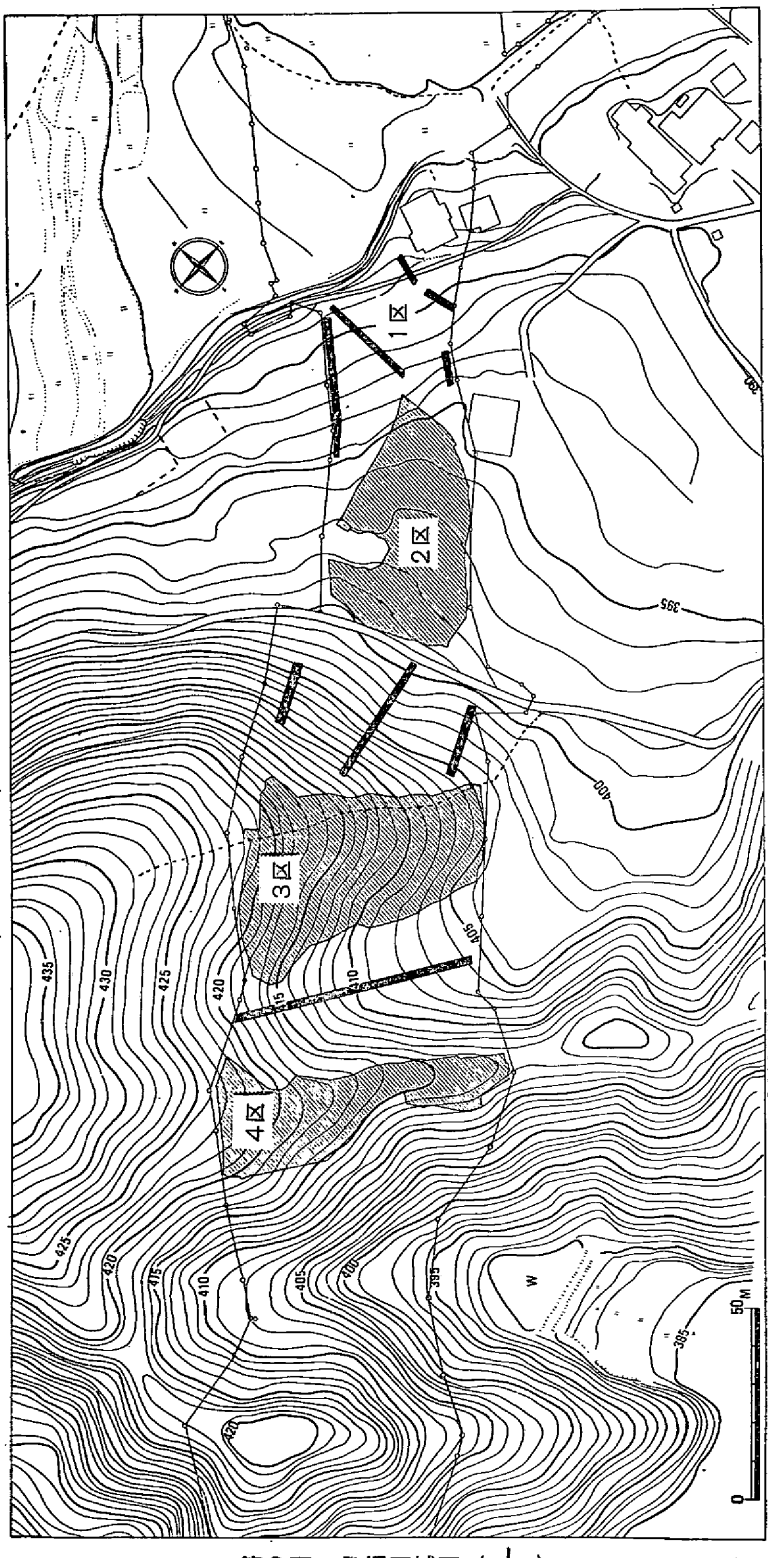
(1) 1区の全面調査はトレンチ調査後，終了とする。

(2) 2区・3区はブルドーザ導入により表土・樹木の切株等を除去する。

(3) 3区は他の調査パーティが担当する。

(4) 他の遺跡調査が終了すれば，調査員はほぼ全員，本遺跡調査を応援する。作業員も可能な限り調査員に順ずる。

以上の諸点のうち(3)は，スムーズに実限せず，ブルドーザによる表土除去後，遺構検出面を放置で



第3図　発掘区域図 ($\frac{1}{2000}$)

きず，下段を本遺跡調査パーティが担当，上段を忠田山遺跡を担当していた福田・中野の両調査員によって分担することとなった。また(4)については9月下旬より10月末の調査終了時まで6名の来援が実現した。しかしながら，夏期のアルバイト学生が作業員として増加した時期以外は，常に作業員総数が，発掘対象面積に対して少なかった。むろん調査員数も同様であるが，検出遺構を時間をかけて観察，検討・評価する余裕がなかったことが，調査担当者の最大の苦渋である。

第3節　調査区の設定と概要

前節で述べたように，調査区はほぼ地形的な位置を考慮して分割したもので，遺跡東端から1～4区としている。1・2区は調査区の東端から遺跡のほぼ中央にある林道までの範囲とする台地で，平面的には2区が一段高い面を成しているため，1区緩斜面との境界となる小径をもって分割線としている。1区の北東端は急崖をなしており，その直下には谷川が流れている。この東端では遺構検出面（地山面）までは約0.6～1.5mを測る包含層・黒ボク土堆積層が認められたが，この調査区は全面調査を行うには至らなかった。遺構としては，トレンチ調査によって横穴・段状遺構などを確認している。また遺物は弥生～近世に至る土器片が多数出土している。

2区は1区より小径を隔ててやや高所となり，3区丘陵の北東方丘陵の延長部にあたる。平面的には南東方へ緩かに下降しつつ平坦面が拡がり発掘着手前には遺構・遺物の良好な遺存・出土が期待されたが，意外に後世の破壊を甚しくうけ旧状を完全に遺存する遺構は少なく，柱穴，土壙，溝状遺構等も上部を削平された状態で検出された。遺構検出面（地下面）までは2区南方高所で約40cm，東方で約60cmを測る。先に述べた削平に加えて，植林による穴掘りが目立ち柱穴とまぎらわしい穴が随所でみられた。

3区は長大な丘陵の主丘陵ともいうべき広大な範囲を占めている。調査区内は丘頂平坦部より緩斜面に移行する地点で，北方はやや急斜面となっている。一方，南西方はかなり緩かな斜面で深い谷部に至る。3区は全体的に表土より遺構検山面までは，上方で約50cm，下方で約70cmを測るが，樹木の切株や・雑木が全面を覆っており，やむを得ずブルドーザの使用を行なったが排土場所は南方・北方斜面に限られたためこの谷部はトレンチ調査後，埋没した。この谷部は，黒ボク土，黒褐色包含層の厚い堆積が認められ，3区で検出した竪穴住居址と同一時期の土師器・須恵器片，鉄滓あるいは弥生式土器片が多量に出土している。

4区は，3区の存在する主丘陵より派生する狭長な丘陵であるが，上方は扇形に緩斜面がひろがり，中央部より急に狭まる。この上方緩斜面では時期不明の円形ピットが存在するのみで遺構は全くみられなかったが，やや下方では2基の著しく原形を損ねた古墳を確認することができた。中央部より北東方の狭い尾根筋では土壙墓・溝状遺構が検出された。この部分の遺構検出面は，表土下約20～30cmで達する剝離性に富む風化花崗岩である。

〈日誌抄〉

昭和51年5月26日（水)～29日（土） 遠景・全景写真撮影。横田東古墳群調査応援。

5月31日（月)～6月5日（土） 1区試掘。発掘区部分写真撮影。横田東古墳群・野田畝遺跡，実測・遺構検出応援。 6月5日（土） 対策委員会開催。

6月7日（月)～12日（土） 事務所周辺伐採。休憩小屋建築予定用地試掘。トレンチ調査，1区より始める。

6月14日（月)～19日（土） この頃より作業員数増加。トレンチ調査続行。岡田・秀島は各々塚の峯遺跡・横田東古墳群へ応援にでかける。休憩小屋完成，発掘予定地草木伐採範囲をひろげる。

6月21日（月)～26日（土） トレンチ調査・草刈り続行。岡田，津山田邑収蔵庫へ遺物整理・6月26日ベルトコンベアー搬入。

6月28日（月)～7月9日（金） 1区・2区トレンチ調査続行。発掘区設定，平面調査への移行を徐々に進める。ベルコン運搬，設定。7月10日 調査員会議，発掘計画をまとめ，1区全面調査不可能を明らかにする。

7月12日（月)～17日（土） 2区グリッド調査を進める。実測・写真撮影。

7月19日（月)～24日（土） 2区・3区の一部を，ブルドーザによる表土除去作業を行う。植林地であった3区は樹木の切株が多く，作業難行。グリッド発掘作業続行，柱穴・ピット検出。実測・写真撮影。

7月26日（月)～31日（土） 2区遺構検出作業に重点を置く。柱穴のまとまり等，遺構の精査につとめる。実測・写真撮影続行。

8月1日（日)～14日（土） 学生アルバイト希望者多く，作業員増加。2区遺構精査。4区トレンチ調査および平面調査を平行して行なう。4区表土除去作業中，10日，4区南西端近くで珠文鏡出土。14日，調査員会議。

8月16日（月)～28日（土） 2区実測・写真撮影。4区表土除去作業ならびに地形測量。20日～27日，ブルドーザによる3区表土除去，ほぼ全面にわたって行なう。

8月30日（月)～9月11日（土） 2区全面実測，測量。4区遺構検出作業ならびに精査。台風来襲，9日から13日までは全く作業不可能。

9月13日（月)～18日（土） 農繁期のため作業員減少，8～10数人。2区掘立柱建物の柱穴断面図作成。3区遺構検出作業，15日～17日にかけてはさらにブルドーザによる表土・切株除去。4区遺構精査・写真撮影。

9月20日（月)～25日（土） 2区調査すべて終了，3区より写真撮影。3区・4区遺構検出，精査作業を続行。

9月27日（月)～10月2日（土） 3区・4区に遺構調査，実測図作成に全力を注ぐ。29日より藤木城址作業員来援。応援調査員も続々と合流，援助をうける。

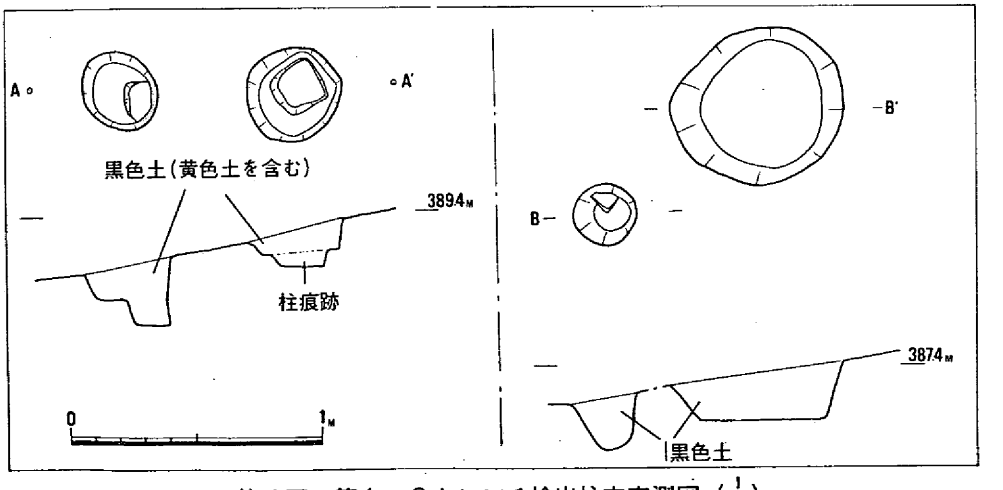
10月3日（日)～29日（金） 3区，竪穴住居址掘り上げ作業，平行して実測図・全体測量図，写真撮影を行なう。4区土壙墓，古墳等の調査に調査員3名専従，藤木城址に縦貫道工事のブルドーザが進入，削平始まる。27・28日両日中に応援調査員は岡山へ引き揚げ，調査員数名残留，調査事務所の電話線切断工事，電灯線切断工事終る。29日，専従調査員2名残留， ブルドーザの走行する中，3区・4区の全体写真撮影を行ない，これをもって予定されたすべての調査を終る。

第2章 1区・2区の調査

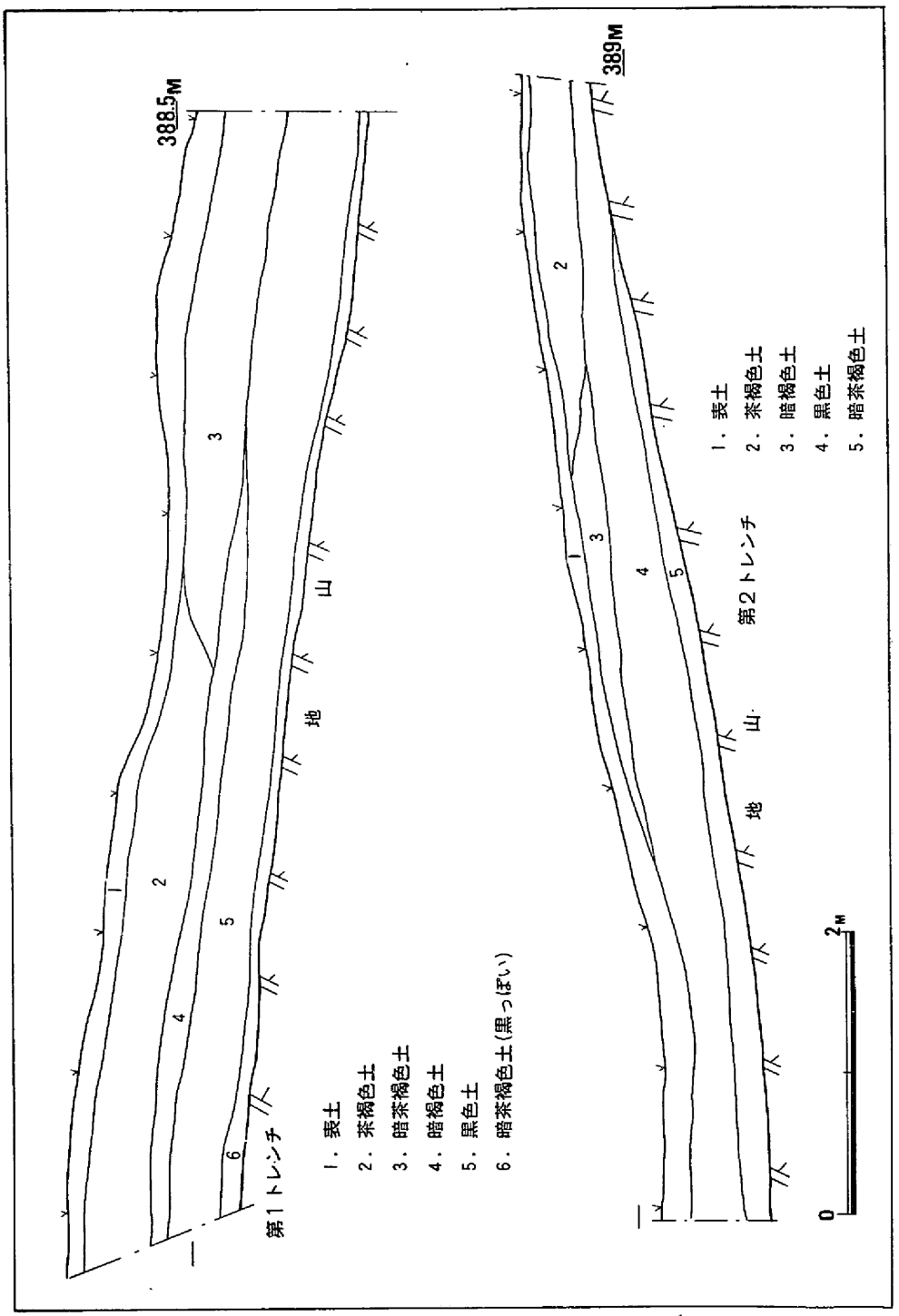
第1節 1区の調査（第4～6・14図，図版1）

本調査区は前章第2節で述べたように，全面調査を実施しなかった地点である。その最も大きな理由は，物理的に限られた人員での遺跡全体調査が不可能であるということであるが，加えて，北方崖下に農業用水路があり，排土作業ができないという問題もあったのである。第1～第5トレンチの調査結果によると，遺構面は表土より約0.5m～1.2mの深さで達する緩かな傾斜をもつ粘質の黄褐色土面で認められ黒褐色土，あるいは茶褐色土を呈する柱穴のプランが検出できた。第4図に掲げる柱穴は，第1・第2トレンチの地山面で検出したものである。第3トレンチに於ても同様な柱穴が10数個検出できたが，いずれも6世紀後半～8世紀にかけての時期に比定される。この地区の出土遺物は弥生式土器片が最も古く，若干の出土が認められるが，弥生時代の遺構の存在は確認できなかった。最も多く出土した土師器片は主として7世紀代のものと思われ，後述の3区出土遺物，検出遺構と関連が深い。また備前焼をはじめ中世～近世にかけての陶磁器片もみられるが，未整理であるため報告できない。全調査区に共通することであるが，鉄滓の出土が顕著で，各々について時期を明らかにすることはできないにしても，この地域が鉄生産地であったことを示唆する貴重な遺物である。

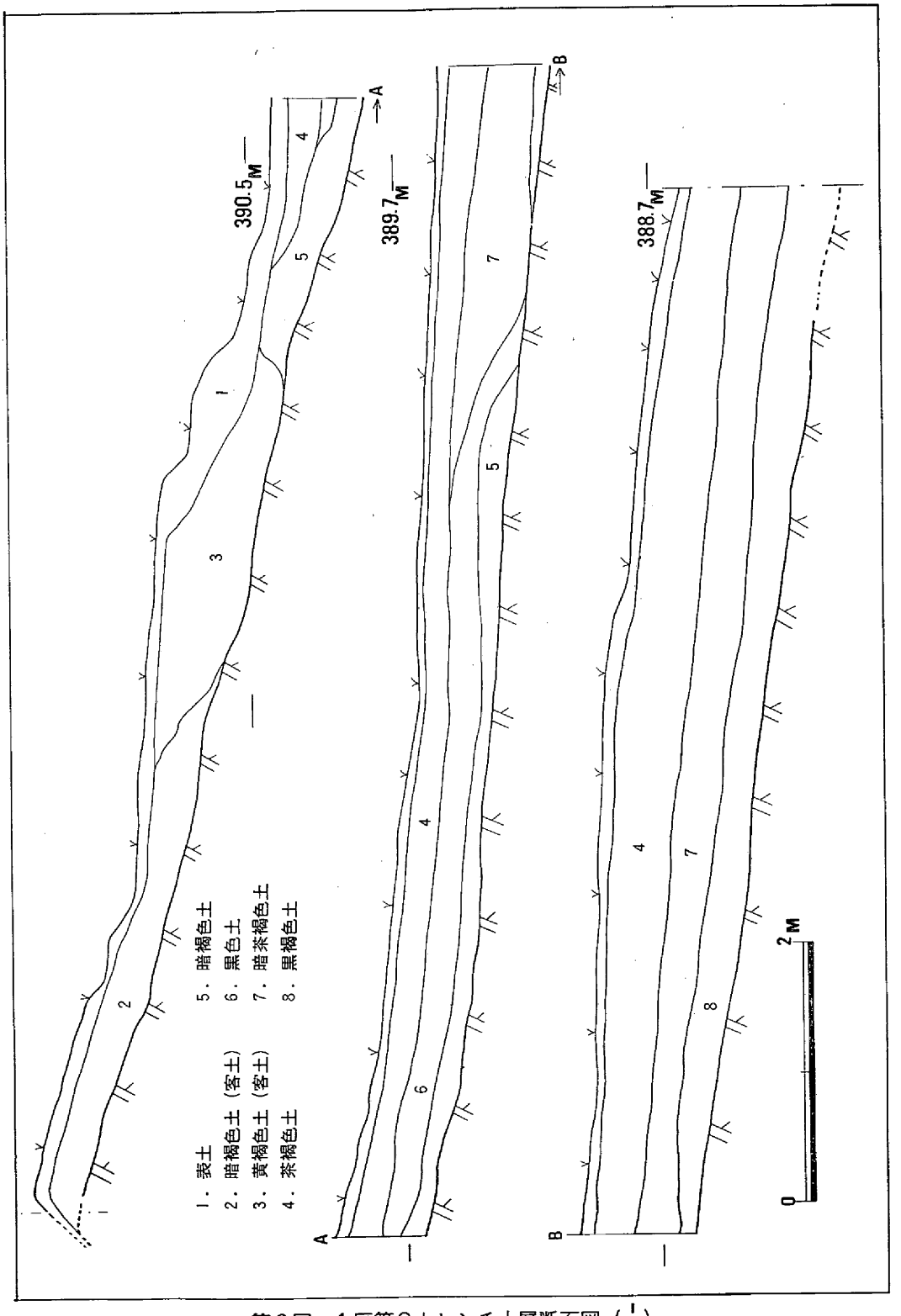
第14図―7に掲げた土師器は甑である。把手部分からやや上方から下半を欠いているが，器体の調整痕をよく残す。口縁部は横ナデ調整を施し下半にかけては縦方向の篦ケズリを行っている。内面口縁部は外面と同様，横ナデ調整を施し，横方向の篦ケズリ，縦方向の荒いナデ調整で仕上げている。一見，甑の下端と思われるが，以上の調整痕の観察から，口縁部とするのが妥当であろう。



第4図 第1・2トレンチ検出柱穴実測図 ($\frac{1}{30}$)



第5図　1区第1・2トレンチ土層断面図 $(\frac{1}{50})$



第6図　1区第3トレンチ土層断面図（$\frac{1}{50}$）

第2節　2区の調査（第7～14図・図版1～4）

発掘区は北西方3区丘陵に連なる台地上を占める。遺跡の中でも比較的平坦な地形を呈する地区である。1区との境界を便宜的に小径をもって区画したが，本来2区の北東方は緩やかな傾斜をもって1区に至る状況を示しているといえる。

発掘調査は，7月上旬のベルコン到着を期しての全面調査を目的として開始し，一部ブルドーザの使用によった部分もある。排土場所を調査区内で選択限定するために，路線内の全面表土・包含層除去は極めて困難で，第7図に示す約1800㎡を発掘，遺構検出が可能となった。

検出遺構の多くは，柱穴・土壙(ピット)・溝状遺構・掘立柱建物などで，弥生時代中期から近世にかけての遺構・遺物が確認された。しかし，前述の如く，平坦面をなす部分のほとんどは，後世の削平・土取りのために遺構面の上部は失われ，遺物の出土量も発掘面積に比べれば少なく，小片が多いのもそのためかと考えられる。明確に残存するもっとも古い時期の遺構としては，第9図の袋状ピット（1号ピット）などであるが，他に住居址の壁体溝の一部と推定される細長い溝状遺構も検出しており，後出する遺構，すなわち掘立柱建物や，その他の柱穴群が出現する時期に削平され消滅したものと解されよう。弥生式土器片の出土は，発掘区の全面で少なからず小片の出土が認められたが，林道に沿う発掘区南端部で集中的に出土もみられた。本節では，まず主要な遺構について説明を述べ，出土遺物について概要を記しておきたい。

（1） 土壙

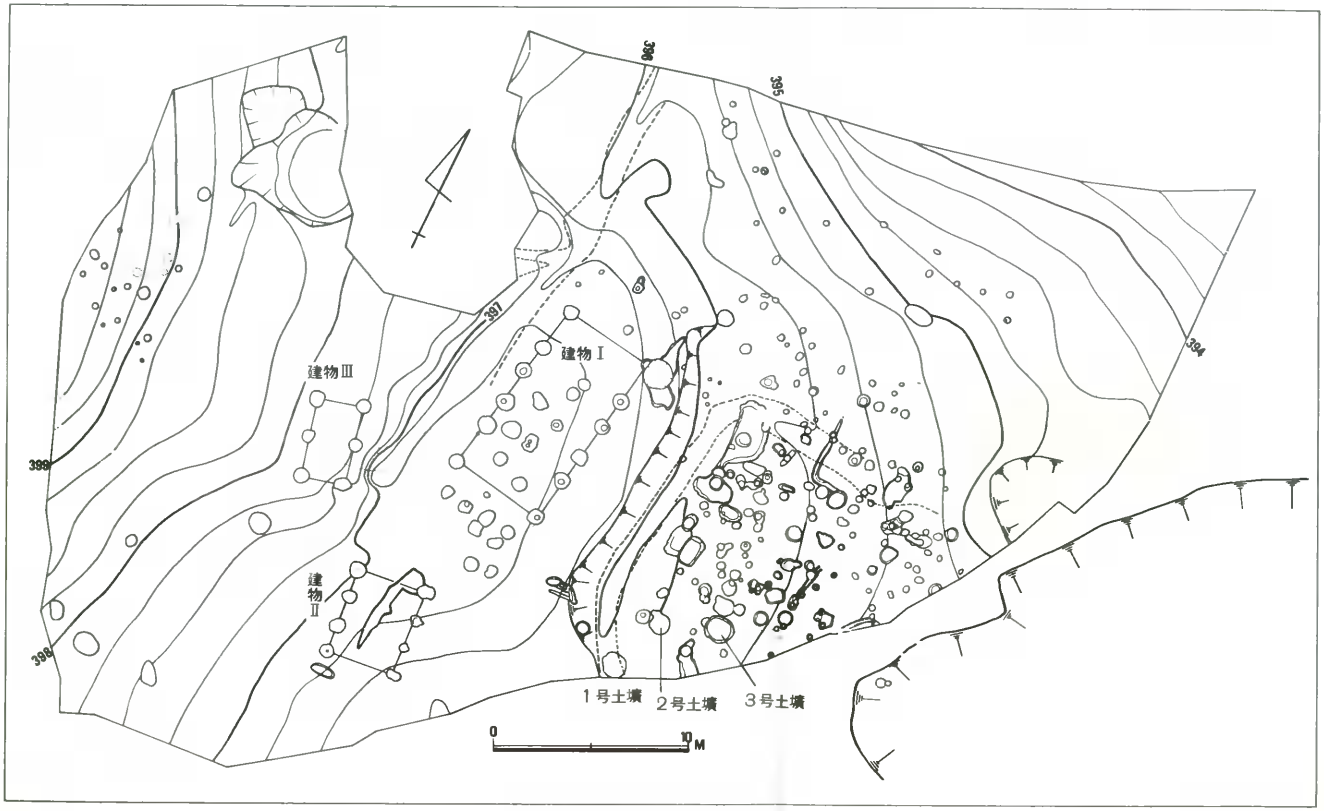
1号土壙（袋状ピット）（第9図―1，図版3）

3区発掘区の中央部南端で検出された土壙で，いわゆる袋状ピットの下端部を残している。削平により上部は失っているが，フラスコ状に掘方から垂直に下降する部分が，当初は存在したのではないかと推定される。プランは径約1.2mを測る円形を呈し，ほぼ水平な底面に至る。深さは約60cmを測る。出土遺物は弥生式土器小片が約20点みられるが，後述の用地外出土弥生式土器片（第13図―16）とほぼ同時期の弥生時代中期末と比定されよう。なお，この袋状ピットが貯蔵穴とする確実な遺物・痕跡は認められなかった。

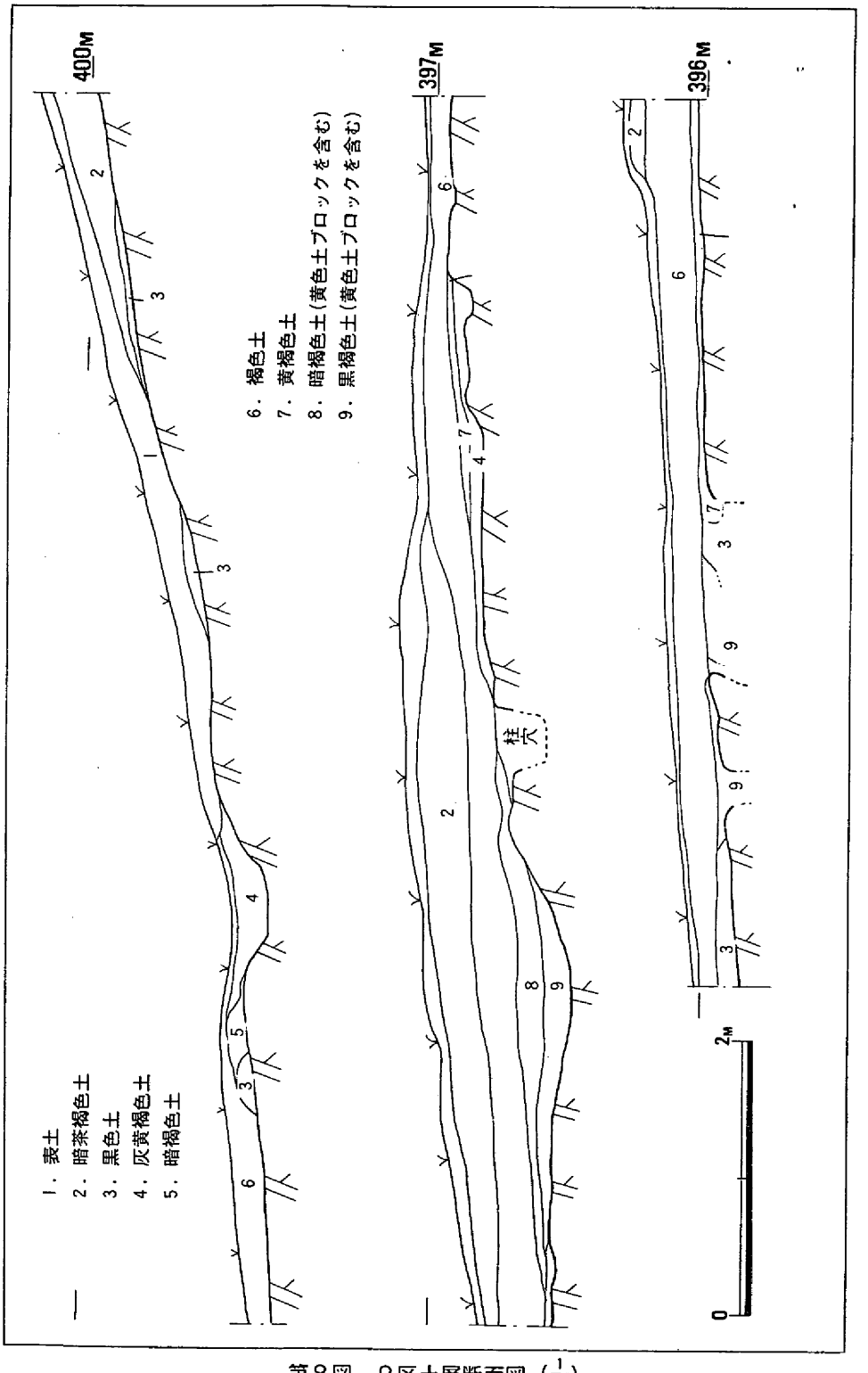
2号土壙（第9図―2）

1号土壙の北方約2mに位置する円形土壙である。径1.35m，深さ40cmを測り，壁はやや垂直もしくはわずかに袋状をなす部分もみられる。出土遺物は，弥生式土器小片が10数点出土しており，甕形土器口縁部小片の観察によれば1号土壙と同時期，つまり2区出土および隣接する用地外出土遺物とほぼ同一時期を示すと考えられる。

3号土壙（第9図―3）



第7図　2区遺構全体図（$\frac{1}{300}$）



第8図　2区土層断面図 ($\frac{1}{50}$)

2号土壙の東方約2mに位置する。平面形はやや長円形を呈し，長径2m，短径 1.8m，深さ30cmを各々測る。1号・2号と比較すると底面は水平とならず中央部に向かって徐々に深くなる。層序は単純であるが，やはり後世の削平によって上部を失っていると考えられる。出土遺物は皆無であるため時期は不明であるが，前述の1・2号よりは時期的に後出する土壙であろう。

(2) 掘立柱建物

建物Ⅰ (第7・10図)

棟方向を磁北より真北に近い東振10度を測る掘立柱建物と推定される。桁行は変則5間で全長9m84cm (32尺7寸) を測り，柱心心距離は長短があるが，長い梁間よりで2m30cm，短かい桁行中央部で1m60cmを測る。梁間は変則2間であるが，棟持柱と思われる柱掘方の遺存はみられない。心心距離5.1m (17尺) を測る。検出した柱掘方は垂直に掘りこまれずやや傾斜をもち，すべての柱穴に柱痕跡を残さないが残存するものでは柱痕径は約30cm～40cmを測る。掘方埋土は黄褐色を呈する遺構検出面地山土が大半用いられ，部分的に黒褐色土・茶褐色土がブロック状に混入している。掘方内，柱痕跡茶褐色土中よりの遺物の出土は全くみられず，建築・使用・廃絶時期は明らかではない。

建物Ⅱ (第11図)

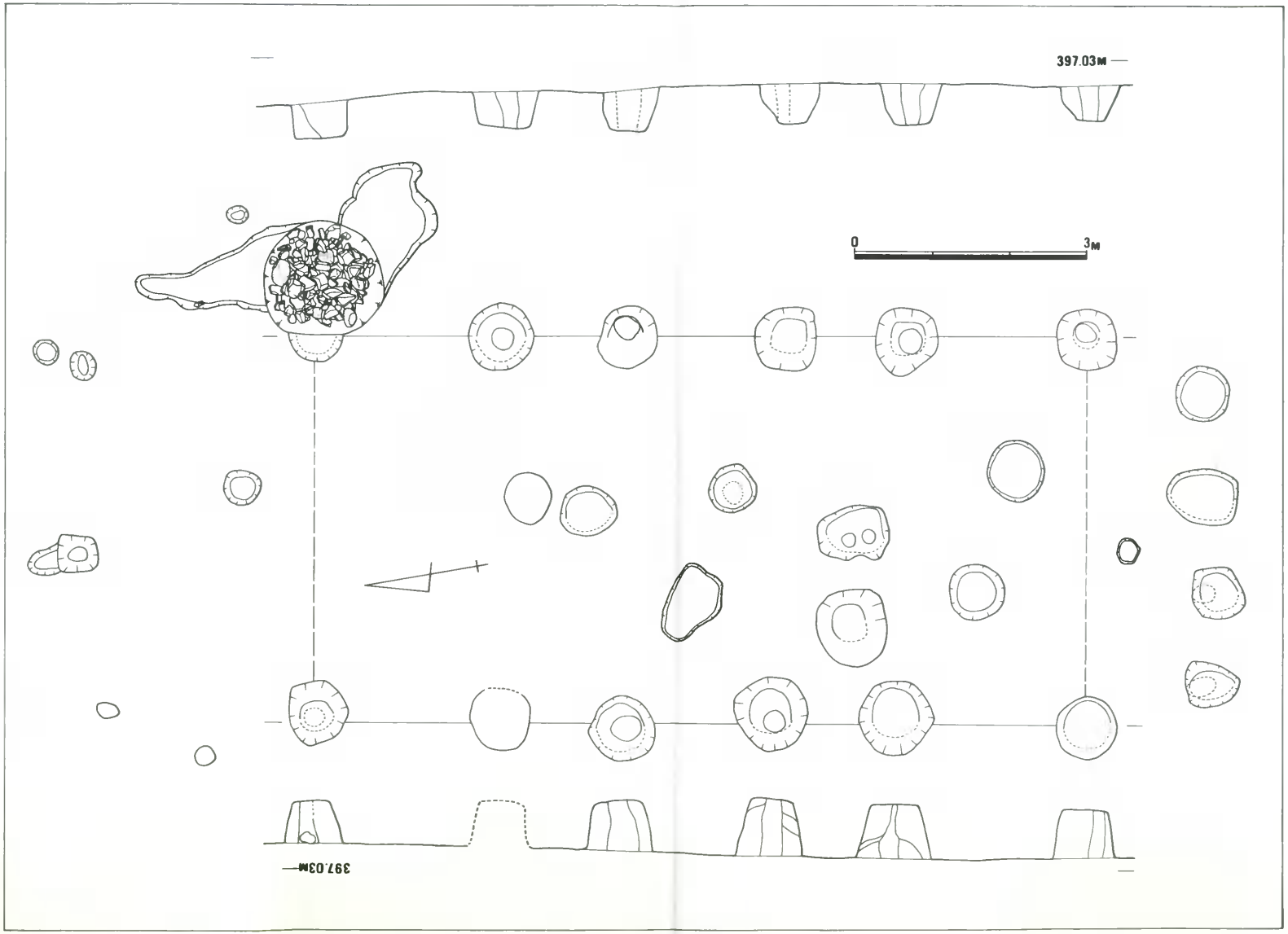
建物Ⅰの南方約 6.5mに位置する。棟方向を磁北よりやや西振する掘立柱建物である。桁行は3間で全長4m60cm (約15尺3寸)，柱心心距離は1m40cm～60cm (約5尺) を測る。建物Ⅰと同様梁間は棟持柱が存在せず，共通する特色をもつ。梁間心心距離は3m65cm (約10尺2寸) を測る。柱掘方は円形を呈し，黄褐色土が混入，ブロック状をなす黒色土が埋められている。柱痕跡は暗茶褐色土を呈するが，1部の柱穴には柱根が腐蝕し，その樹皮が遺存していたためさほど古くはない建物と推定している。樹皮の遺存については柱の加工仕上げに手斧が用いられていないことをも示している。また，柱根が存在する部分が1部空洞化している部分もありその新しさを示しているが，住民の記憶にはないようである。

建物Ⅲ (第12図)

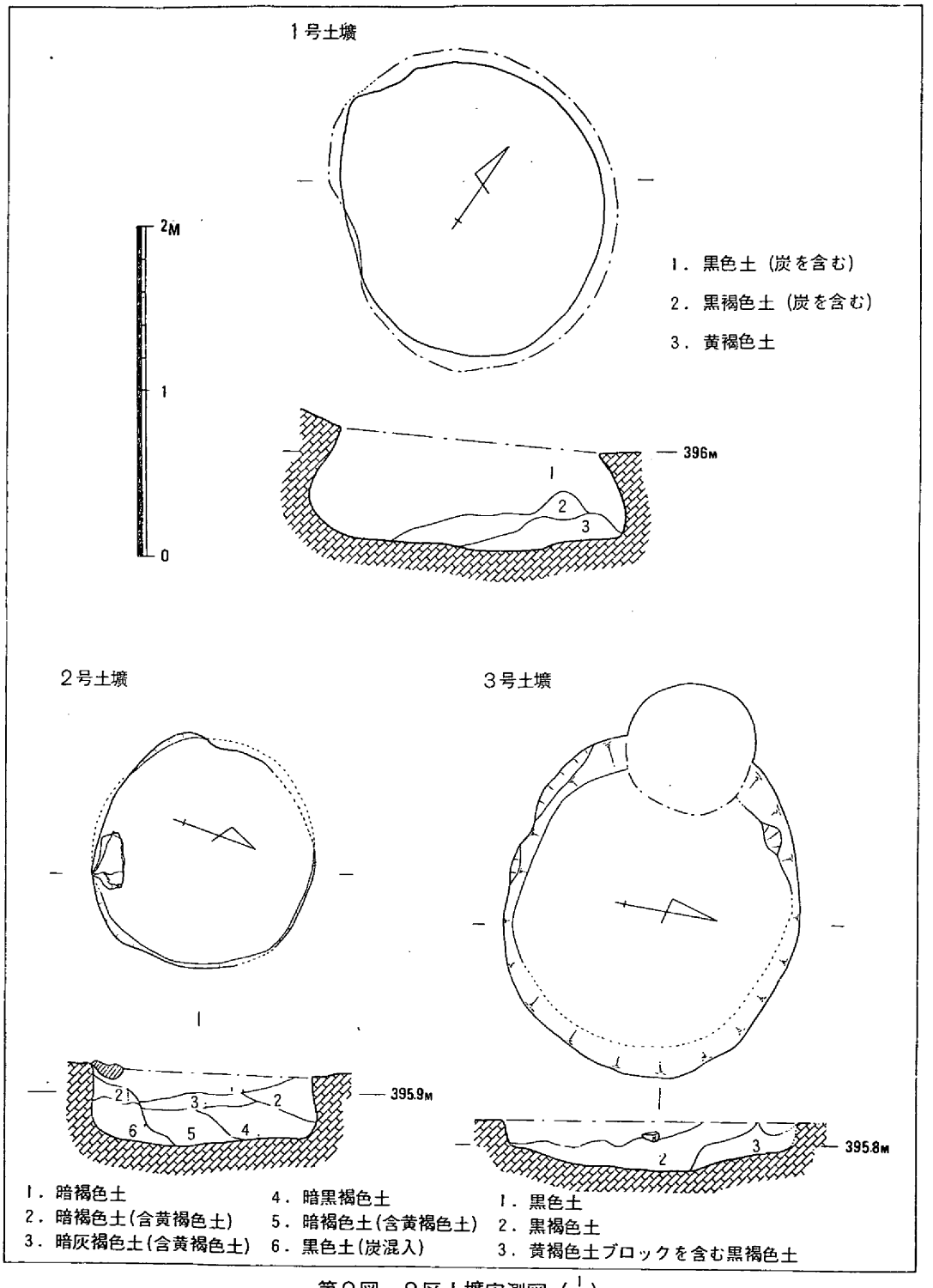
建物Ⅰの西方約6m，建物Ⅱの北方約5mに位置する，掘立柱建物（あるいは構造物）の一部である。現存する柱穴は6本で，建物と想定すれば2間×2間の束柱を有する倉庫と考えられ，1間ほど東方にのびると考えれば納得できる。柱穴掘方は黄褐色を呈し，柱痕跡を残すものは，その部分が茶褐色土と黄褐色土が混在する土が埋まっていた。また，黒褐色を呈するものもみられる。柱間心心距離は約2m50cm(約8尺3寸) を測る。柱穴掘方は建物Ⅰと同様，垂直に底面に至らず，擂鉢状を呈するものもみられる。柱穴内よりの遺物出土は皆無で，建築・使用・廃絶いずれの時期も不明である。形状から推定すれば建物Ⅰとほぼ同時期と考えられよう。

(3) 出土遺物

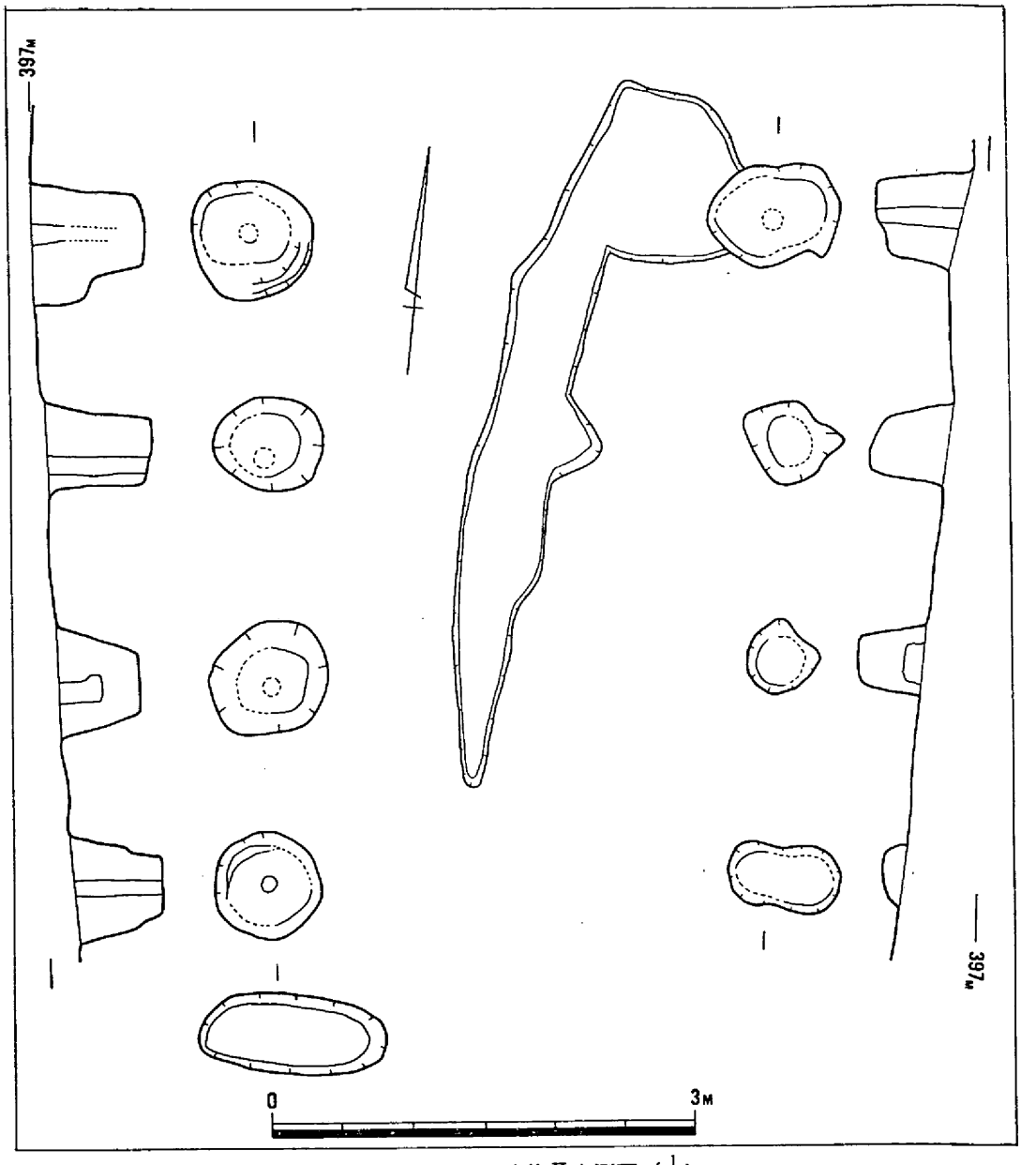
2区第5トレンチ　弥生式土器 (第13図―1～5)



第10図　2区建物Ⅰ実測図 ($\frac{1}{60}$)



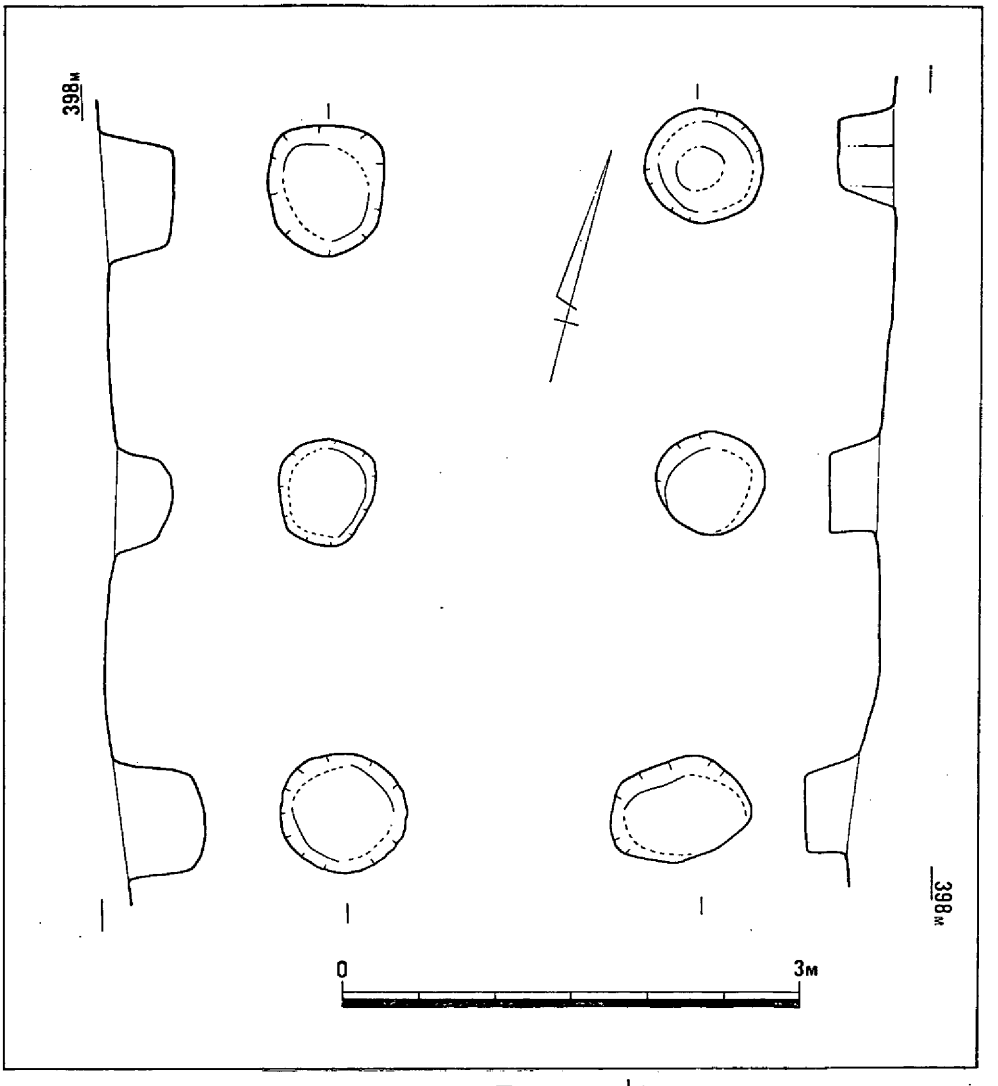
第9図　2区土壙実測図 ($\frac{1}{40}$)



第11図　2区建物Ⅱ実測図 ($\frac{1}{50}$)

黒色土層の中より出土したもので，土師器なども若干混在している。

1は甕で，口縁端部を上下，特に上方に拡張し，その端面に凹線文をめぐらすものである。2は肩の部分に櫛描による波状文と平行線文が認められ，内面はナデられている。3は口縁端部を上下に拡張し，端面に凹線文をめぐらし，さらに円形浮文で飾る。口縁部には紐穴が認められる。調整は胴部上半が刷毛目，下半は篦磨きで仕上げられる。内面はナデと刷毛目が認められる。4は高杯で，口縁端部上面に僅かながら凹部がめぐる。5は脚台で，拡張された脚端には凹線がめぐる。外面は櫛状工



第12図　2区建物Ⅲ実測図 ($\frac{1}{50}$)

具で横位と縦位に文様が施される。

これらの土器は2が中期中葉とやや古様相を呈するが，その他は中期末から後期初頭である。

2区南端　出土弥生式土器(第13図 6～10)

2区の南端にある林道に近い位置から出土したもので，黒色土に含まれていた。

6は上下に拡張された口縁端面に退化した凹線文をめぐらすもので，胴部外面上半は刷毛目，下半は篦磨きによって仕上げられている。胴部内面は頸部まで篦削りで仕上げられる。7の甕は肩に篦失による刻目がめぐる。胴部内面は篦削りで仕上げられている。8・9は底部で，外面には篦磨きが認められる。10は高杯で，口縁端部は内外に拡張され，その上端面には凹線がめぐる。

これらの土器は，甕の胴部内面篦削りが頸部に達し，凹線も退化するなど，後期前半の特徴をよく

表わしている。

3区北斜面　出土弥生式土器(第13図11～15)

3区の北斜面から出土したものであるが，2区と隣接しており，遺跡を理解する上においてもここで説明を加えることにする。

11は上方に拡張された口縁端面に退化した凹線がめぐる。肩には篦先による斜行する刻目が施される。12は長頸の壷で，頸部下端に沈線がめぐる。頸部から胴部へ移行する所に列点文が施される。口縁部内面には櫛描の波状文が施され，頸部内面は指頭圧痕としわが認められる。13～15は甕で，口縁端部を上下に拡張し，その端面に退化した凹線がめぐる。

これらの土器は中期的な様相を呈するものもあるが，後期初頭に比定されるものである。

2区路線外表採遺物（第13図—16）

路線外であるが，2区に近接した位置で表採したものである。頸部には貼付の刻目凸帯がめぐり，胴部は内外面とも刷毛目と荒い篦磨きが認められる。時期は中期後半と考えられる。

須恵器　（第14図—1～6）

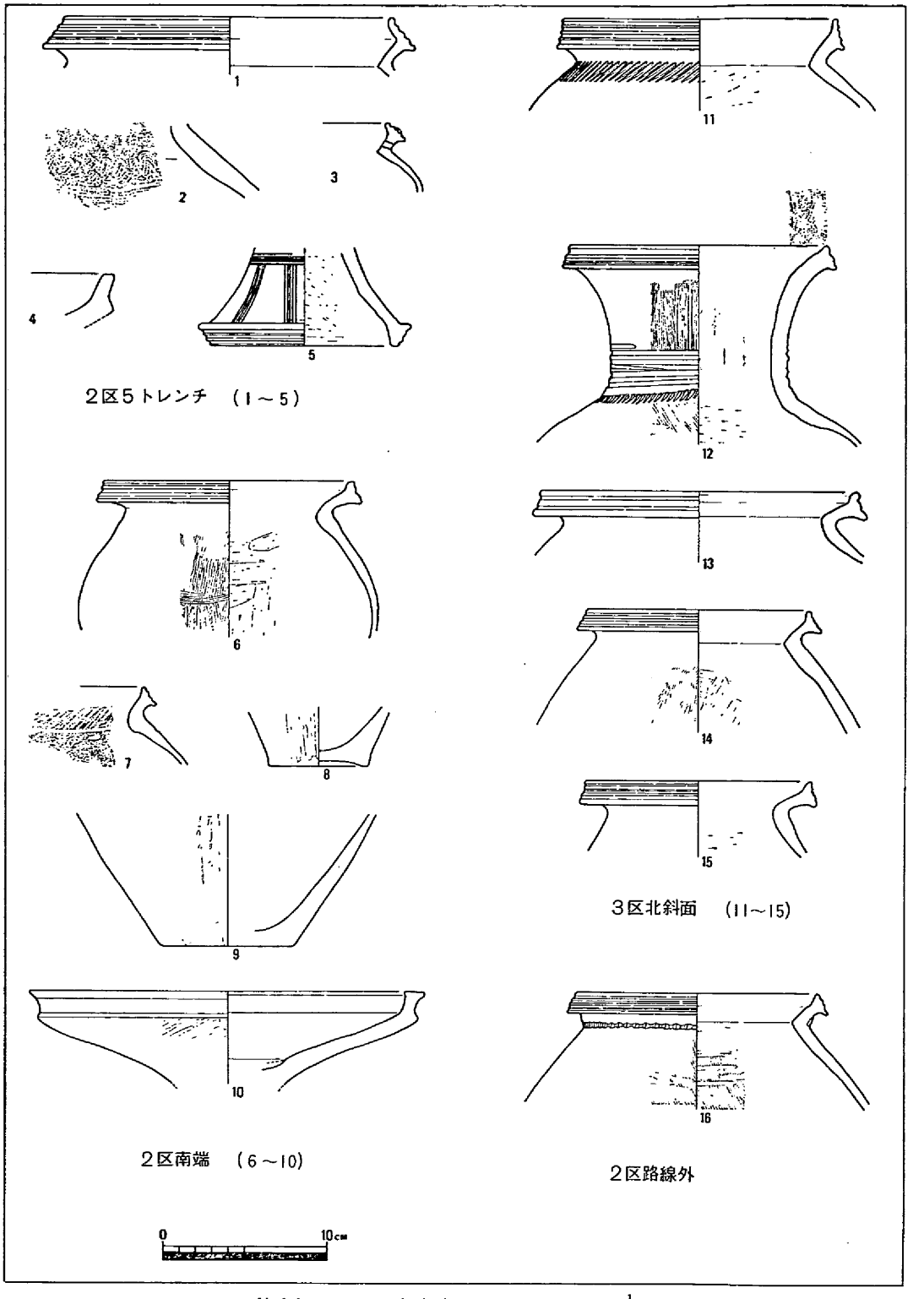
トレンチ調査出土遺物および全面調査移行時点で，土師器に次いで多く出土した。破片が多いため図化できるものは極めて少ない。1・2はいずれも小形の蓋である。1は径9.4cm，復元推定器高3.3cmを測る。天井部は篦ケズリの後，ナデ調整で仕上げ口縁部に至る。口縁端部はやや肥厚し，わずかに外反する。胎土中には石英微砂を多く含み，雲母をわずかに含む。焼成は比較的良好で，内外面共にくすんだ暗青灰色を呈する。2は発掘区の黒色包含層より出土したもので，径9.2cm，器高3.3cmを測り，ほぼ完形である。体部上半より天井部にかけては篦ケズリ痕をよく残し，体部下半より端部までは横ナデ調整で仕上げている。口縁端部は直線的に外方する。胎土は石英・長石微砂を含み，焼成良好で内外面共に淡青灰色を呈する。3は蓋とも考えられるが，いずれとも断定しがたい。径9.8cm，復元推定器高3.1cmを測る。体部下半より底部にかけては篦ケズリ後，ナデ調整で仕上げられ，ゆるく外方する口縁部に至る。口縁端面は巾約1mmの平坦面をなす。胎土中には石英微砂を含み，焼成良好，内外面共に淡青灰色を呈する。以上3点は，いずれも口径・器高ともに近似値を測り，蓋・杯(身)とも断定し難い小形器種である。4は高杯で，杯部上半を欠失する。焼成の不十分さ，あるいは二次的焼成を受けたものか，器壁は土師質を呈しきわめてもろい。脚端径9.8cm，残存高約7cmを測る。脚部の内外面は共に横ナデ調整で仕上げられ，下方に肥厚するくせをもつ脚端に至る。胎土は比較的良好で，微砂をわずかに含み，全体的に淡灰黄色を呈する。5・6はいずれも蓋で，天井部のほぼ中央にツマミを有する器種のものである。5は2と同様黒色土中より出土した須恵器で，径16.9cm，器高2.3cmを測り，天井部のほぼ中央に径2.9cmのやや扁平なツマミがつく。天井部には2条の沈線にはさまれた文様帯があり，ほぼ放射状に刺突列点文が施されている。天井部は篦ケズリのまま調整はなされず，外側の沈線から口縁部にかけての体部にのみ横ナデ調整が施される。内面は比較的平滑な器壁を呈し，全面横ナデ調整が施されている。身受け部となる口縁端部はやや肥厚するのみで，カエリ状の突出はみられない。胎土は石英・長石微粗砂を多く含み，焼成はさほど良好ではないが整った形態を呈する。内外面共に灰褐色を呈する。6はやはり，黒色土中より出土したものでツマミ部および

体部より口縁部を失った天井部の一部である。5と同様2条の沈線にはさまれた文様帯がみられ，形態は櫛歯文に近い櫛描き波状文がその間にめぐる。外面は天井部の中心に近い部分は篦ケズリ調整を残し，口縁部にむけて横ナデ調整が施されている。内面は不規則なナデ調整で仕上げている。胎土は1㎜前後の石英・長石微砂を含み，焼成良好，内外面共に暗灰青色を呈する。5・6いずれも天井部に文様帯がめぐることが注目され，新見市上市所在の横見古墳群出土遺物の中にも類例がみられ，備中北部の装飾手法的特徴として注目される。

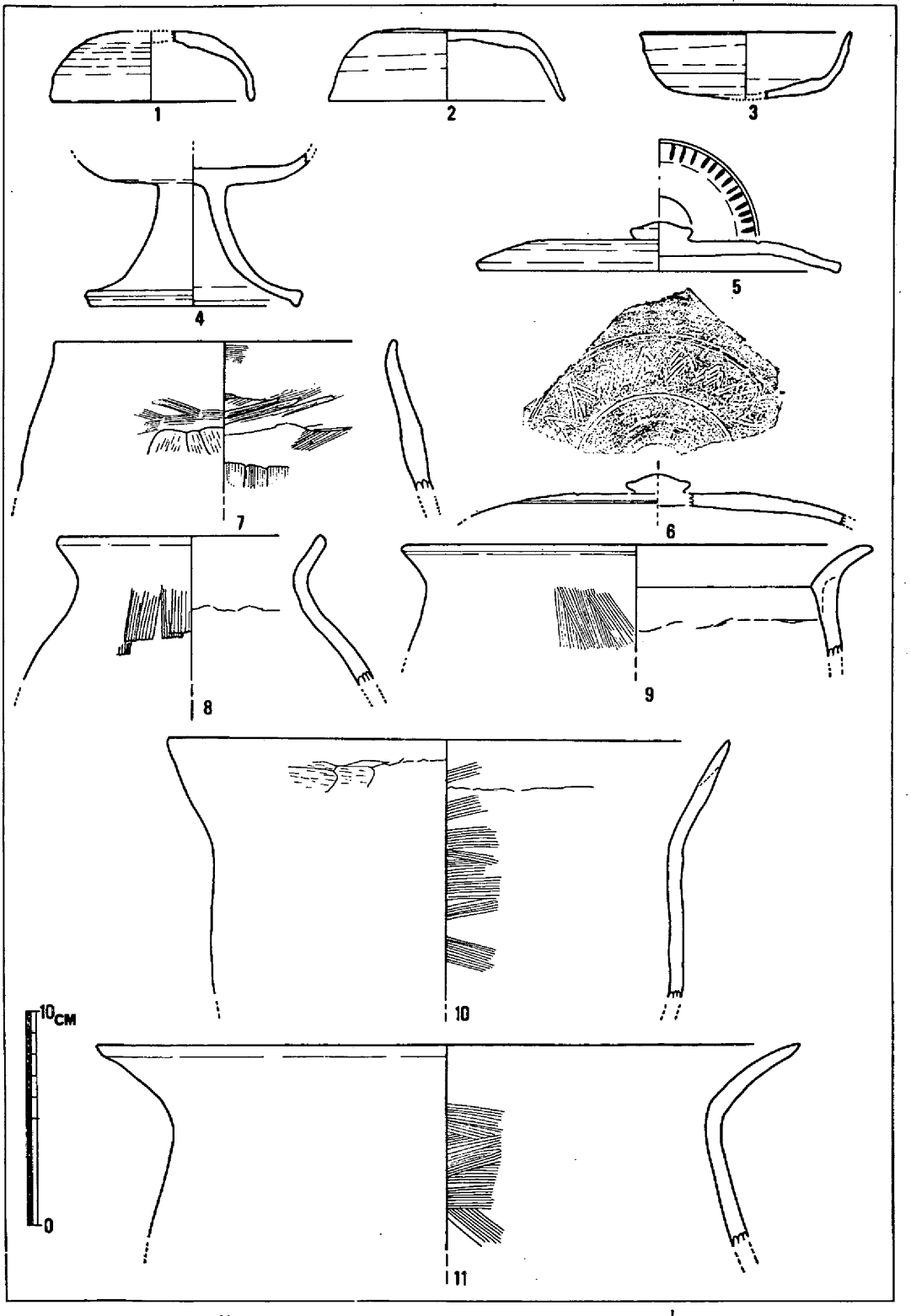
土師器（第14図—8～11）

8～11はいずれも土師器甕で若干の形態的差異は認められるものの使用目的の大きな違いを示しているものとは考えられない。8は復元口径16.6㎝を測る。比較的小形な甕で外方する口縁端部は丸くおさまる。口縁部の内外面は横ナデ調整で仕上げられ，体部外面は縦方向の刷毛状工具による調整を施している。体部内面は荒く粗雑な縦方向のナデ調整で仕上げている。胎土中には石英・長石粗砂，雲母を含む。焼成はやや良好で赤褐色を呈する。9は復元口径22.2㎝を測り口縁部はやや粗雑なヨコナデ調整で仕上げられ，体部外面は8と同様，縦方向の刷毛状工具による調整を施している。体部内面は粗雑な横ナデ調整で仕上げられ，粘土接合痕をよく残す。胎土は石英・長石粗砂を含み，焼成は比較的良好，明るい赤褐色を呈する。10は口縁部はわずかに外方する形態を示し，復元口径26.5㎝を測る。体部はほとんどふくらみをもたず，底部に至ると推定される。口縁部より体部にかけての外面は極めて粗雑なナデ調整で仕上げられ，内面は同様な横ナデ調整で仕上げられている。胎土中には1～2㎜前後を測る微砂を含み，焼成良好，内面暗褐色，外面淡黄褐色を呈する。11は，復元口径33.2㎝を測る大形甕である。鋭く外方する口縁部をもち，端部は扁平である。外面は荒い刷毛状工具による調整の後，粗雑なナデ調整で仕上げている。口縁部内面は横ナデ調整で仕上げ，頸部より体部上半にかけては刷毛状工具による横ナデ調整を経て，徐々に縦方向の横ナデ調整仕上げに移行する。胎土は微砂を多く含み，焼成良好，赤褐色を呈する。

以上，概略を述べた須恵器・土師器は概ね，6世紀末から7世紀中葉前後にかけての使用時期が比定され須恵器では5・6が下限の目安となろう。土師器については形態の変遷が，須恵器のそれと比べて極めて緩慢な時期であるので，個々についての絶対年代の比定は今後の研究課題であるが，総じて6～7世紀の年代的範疇におさまるものと考えて大過なかろう。



第13図 2区出土弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)



第14図　1・2区出土須恵器・土師器実測図（$\frac{1}{3}$）

第3章 3区の調査

発掘調査初期において，竪穴住居址の存在を確信した発掘区で，ことに弥生時代の生活遺構の検出が期待された。まず丘陵の中央部にトレンチを設定したところ，比較的浅い地山面で黒色土が堆積する遺構上面に達し，竪穴住居址上面，あるいは柱穴等を検出した。この結果，最上部では弥生時代中期末の土器片が出土し，更にほぼ全面にわたっては古墳時代末期（6世紀末～7世紀）に比定される，須恵器・土師器・鉄滓片の出土が目立った。調査区全体は伐採が終了していたとはいえ，植林地であったため樹木の切株や雑木が立錐の余地もなく存在し，やむを得ず小型ブルドーザを導入して遺構面までの表土除去を行なった。当然のことながら，ブルドーザ走行・掘削による遺構面あるいは遺物の若干の損傷は避けられず，諸に竪穴住居址に達したことも一部ではみられた。斜面であるためブルドーザのみの力では全面の除土は無理で，最終的には相当の人力・ベルコンを用いて莫大な土量を丘陵両側の裾部に運搬することとなった。作業員の寡少・調査期限の切迫等，広大な調査面積に加えて更に困難状況をうみだす要因が存在したため，目標とする十分な成果をあげるには至らなかった。

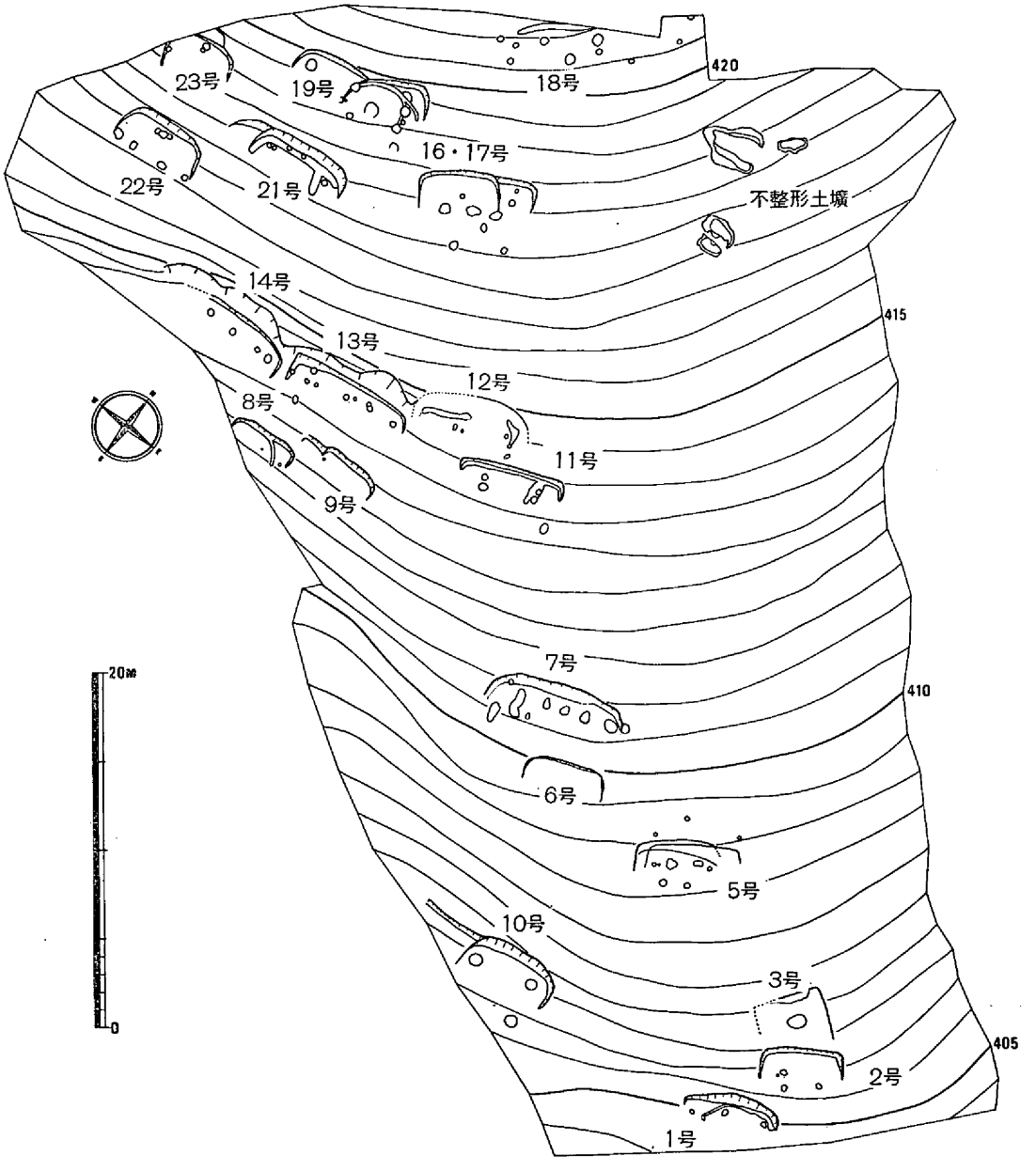
検出遺構としては，竪穴住居址がもっとも多く，重複等を考慮すると，25軒余を数える。当初の推定とは異なり大半は7世紀代の竪穴住居址群であり，一部には弥生時代と考えられる住居址も1軒が検出が可能となった。これらの竪穴住居址は便宜的に丘陵最下部から上部に向けて1号～23号と呼称しているが4号・15号は欠番である。また，竪穴住居址の周辺には柱穴が検出され，調査時点ですでに削平消滅した竪穴住居址に伴うものともみられる。一方，黒色土が埋積した弧状あるいは円形を呈する土壙が3基検出されているが，従来ドーナツ状遺構あるいは風倒木痕と仮称されているもので，丘陵上部より集中して検出された遺構である。

以上が3区調査の概略であるが，発掘の状況はまれにみる厳しいものであったため現地調査の成果は，不充分な点が多々散見するが，個々の遺構および遺物の一部についての所見を述べることとする。

第1節 竪穴住居址

1号住居址 （第16・18図，図版6－1）

丘陵中央部はほぼ北西→南東方向に設定した初期トレンチ調査によって検出した。残存状態は極めて悪く，床面となる風化岩盤地山面は削平が及んでいた。高所の壁体一辺5.4mを残すが，東西辺は曲折部よりわずかに残存するに過ぎない。平面形は復元推定すると，隅丸方形もしくは方形となろう。柱穴は4本検出可能となったが上部構造を明らかにできるものではない。壁体溝は比較的残存良好で巾15cm，深さ約7cmを測る。出土遺物としては第18図の弥生式土器片がある。1は甕形土器で，口縁端部は上下に拡張され，その端面には横ナデによる凹部が認められる。胴部は外面が刷毛目，内面は篦削りで仕上げられる。2は1の胴部とも考えられるが，篦削りの方向が異なっていることから別個体の可能性が強い。両者とも色調は暗褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含むため，やや粗雑な感じ



第15図　3区遺構全体図（1号～23号：竪穴住居址）（$\frac{1}{400}$）

を受ける。時期は弥生時代後期前半に比定されよう。このほか，土師器小片・弥生式土器小片が出土しているが，前者は混入の可能性が強く，本住居址は弥生時代後期前半と比定するのが妥当であろう。

2号住居址 （第17図，図版7）

1号住居址の北約1.5mに存在する。1号住居址と同様，発掘初期トレンチ調査によってその存在を確認した住居址である。1辺4.5mを測る高所壁体の残存は良好で，曲折して南方向の東西壁体に連なる。プランは方形で，床面より検出した柱穴は西側の2本が壁体方向とほぼ合致する。壁溝は，一部途切れる部分もあるが壁体に沿い，巾約10cm，深さ約5cmを測る。出土遺物は覆土中より多数の土師器片が出土した。土師器片の多くは甕・甑で，他に須恵器高杯脚部片・鉄滓の出土が認められる。第24図—9・10はいずれも土師器甕の上部片である。9はゆるやかに外反する口縁部片で外面はナデ調整によって仕上げている。内面は粘土接合痕を残すが，横ナデ調整によって仕上げている。胎土は1～3mmの砂粒を少量含み，わずかな雲母も認められる。焼成は比較的良好で，外面には煤が付着するが，内外面ともに赤味を帯びた茶褐色を呈する。復元推定口径は19.9cmを測る。10は同様，土師器甕で体部中央部まで残存する。口縁部は頸部より直線的に外方し，外面には斜方向の刷毛目を残し，頸部より下半にかけては縦方向の刷毛調整を行なっている。やや薄手なつくりの口縁部の内面は横方向の刷毛調整を行ない，体部は荒いナデ調整で仕上げている。胎土は2～3mmの砂粒を含み，9と同様雲母をわずかに含む。焼成は比較的良好で赤味を帯びた茶褐色を呈する。復元推定口径29.4cmを測る。いずれも7世紀初頭と推定される遺物と考えられ，本住居址の使用・廃絶期を示唆している

3号住居址 （第19図，図版6—2）

2号住居址の北側に接して存在する，やはり方形プランを呈する復元推定，一辺約406mを測る住居址と考えられる。柱穴・壁体溝は残存せず，径1×0.7m，深さ約15cmを測る長円形の使途不明の土壙が存在する。

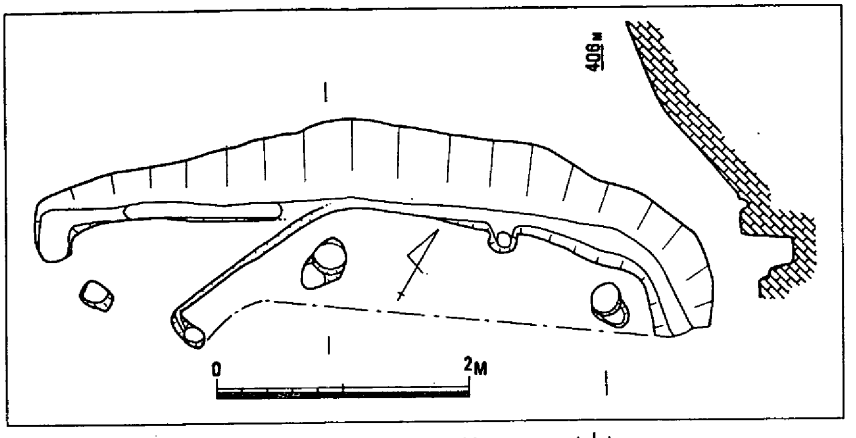
出土遺物には弥生式土器片・須恵器甕片・土師器（甕・甑）片が認められ，更に2号住居址と同様，鉄滓が出土している。使用・廃絶期は2号住居址と相前後する時期と考えられる。

5号住居址 （第20図，図版8・9—1）

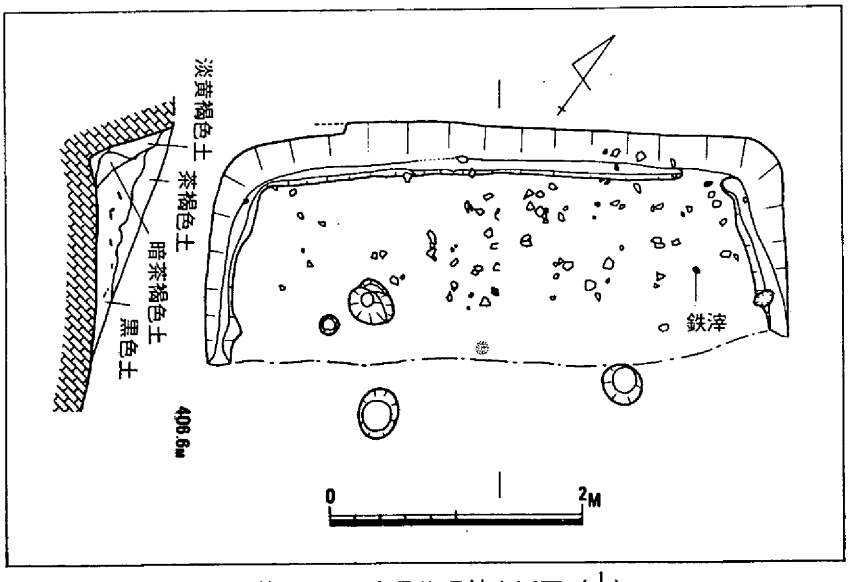
3区最下段の1～3号住居址群より北西約10m上方に位置する。4軒の竪穴住居址が重複し，相次ぐ建て替えの後，最終期と考えられる住居址の壁体は南西→北東方に約4.6m残存する。他の住居址の形状はやはり方形と考えられるが壁体溝をかろうじて残すにとどまる。柱穴は周辺および床面から多く検出されたが，個々の住居址の原状を完全に復元推定することは不可能である。出土遺物は，土師器片がもっとも多く壺・甕・甑の破片が目立つ。他に須恵器壺片・鉄滓小片がわずかに出土している。第24図—4は住居址の北側から出土した須恵器広口壺口縁部片である。口縁部は径13cmを測り，内外面ともに横ナデ調整によって仕上げられる。体部内面には青海波叩き目文を残す。全体的に淡灰色を呈し，胎土・焼成共に良好である。時期的には6世紀末～7世紀初頭と比定でき，重複して存在する複数の住居址もこの時期に近いと推定される。

6号住居址 （第25図，図版9—2）

5号住居址の西方約4mの高所に位置する。高所壁体一辺4.1mを測る方形プランを呈する住居址



第16図　1号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



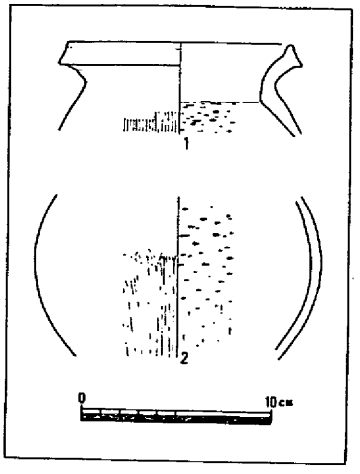
第17図　2号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

である。壁溝の残存は比較的良好であるが，床面において柱穴の存在は認められなかった。出土遺物としては土師器小片，鉄滓片が床面より出土しているが，本住居址の時期を明確にし得るものではない。

7号住居址　(第21～23　図，図版11・12)

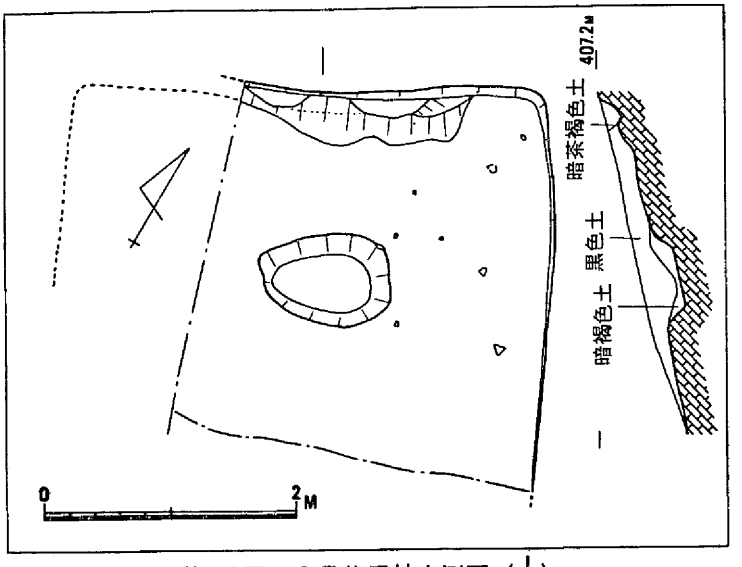
6号住居址の上方約2mに位置する，上方壁体一辺7.5mを測る住居址である。床面の残存状態は良好であったが，壁溝の明瞭な検出は不可能で，高所壁体は傾斜をもちつつ床面に至る。一辺7.5mを測る長大な住居址と想定されるが，覆土検出時のプランからは，2軒の住居址の重複をうかがわせ，東半・西半とわずかながら埋積土の土質が異なっていた。しかし，床面の一列に並ぶ5本の柱穴はまとまっており，柱痕跡の残存状態から同規模の建て替えが行なわれたことを推定させる。出土遺物は比較的多く，ことに黒色覆土中からは鉄器・鉄滓・須恵器・土師器が出土している。第22図は本

住居址西半部を中心に覆土中より出土した鉄器である。1は平面的には鉈あるいは鉄鏃を思わせるが先端部・側面には明瞭な刃部がみられず，断面は厚さ2㎜，巾9㎜を測る長方形を呈す。茎部はやや厚く，厚さ4㎜，巾6.5㎜を測る。鉈あるいは鏃の未製品とも考えられる。2はゆるやかな円弧を描き，端部をやや折り曲げた手鎌状の鉄器片である。中央部断面は円弧の内側に刃部があり，鋭角をなす。残存巾9㎜を測る。3は鉄器の茎部の一部で上端・下端を残さない。鉄製工具・利器の茎部と考えられ，中央部断面は巾9㎜，厚さ3.5～8㎜を測るややいびつな方形を呈し，下端は巾7㎜，厚さ4㎜を測る。4は上端・下端が二股に開く異形鉄器である。残存全長6.5㎜，左上方部巾7㎜，厚さ約1㎜を測る断面凸レンズ状を示す。中央部断面は巾約8㎜，厚さ2.5㎜を測る長方形を呈し，左下方は巾6.5㎜，厚さ約1㎜を測るややいびつな凸レンズ状を呈する。原形・使途については不明である。5は残存長8.3㎝，巾1.8㎝を測る手鎌と考えられ，残存する端部は折り曲げている。刃部は円弧の内側と考えられるが，断面に図示したように，明確に鋭利な刃がつけられず，未製品と推定される。6～10は鉄斧である。いずれも鍛造で木製柄を挿入するための銎は鉄板を扁平にうちのばした後，内側に折り曲げてつきあわせている。銎はいずれも楕円形を呈するが，10はやや円形に近く，小形である。また1は短冊形を呈し，他の刃部がやや広くなるものと若干異趣である。いずれも刃部は鋭利に研磨された状態を示すが，丸味あるいは面をなす。更に銎の内面には木質の遺存は認められず未使用の段階と推定される。いずれにせよ，多量の鉄滓の出土と共に周辺での製鉄・鍛冶が行なわれた可能性を強く示唆する重要な遺物である。重量は6…99g，7…168g，8…94g，9…100g，10…52gを量る。

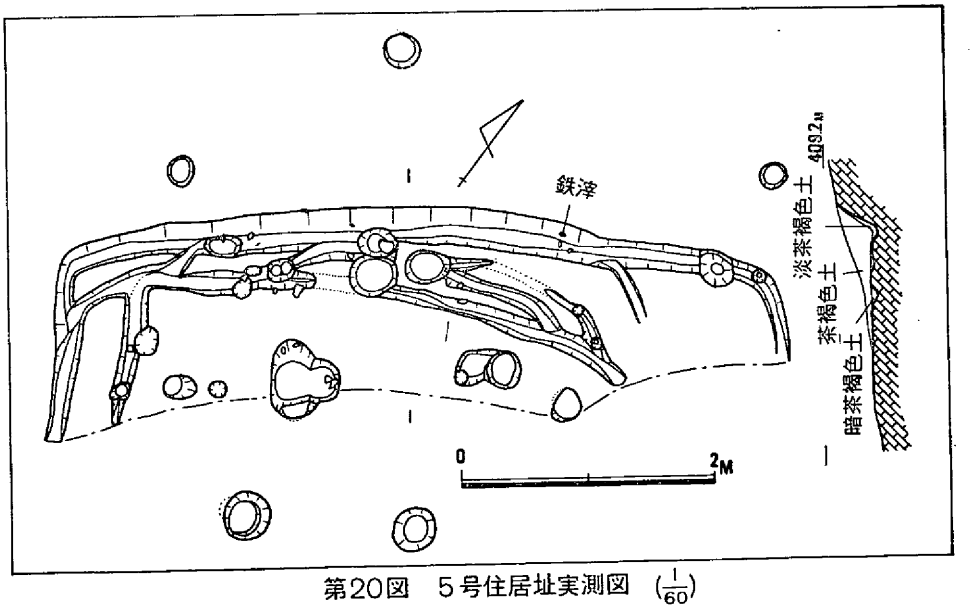


第18図　1号住居址出土
弥生式土器（1/4）

第23図は本住居址覆土中・床面あるいは周辺から出土した須恵器・土師器である。1は第22図－3の鉄器片出土地点付近で出土した，須恵器口縁部片で外面に数条の櫛描き波状文を施す。上端は扁平な面をなし，壺あるいは甕の口縁部片と推定される。2は住居址の西斜面から出土した須恵器甕の頸部片で，3条からなる櫛描き波状文を施す。1・2いずれも暗青色を呈する焼成良好なる須恵器片である。3は住居址東半床面より出土した須恵器蓋で器高2.25㎝，径16㎝を測る。ツマミは径3.25㎝を測る扁平なもので，天井部のほぼ中央部に貼り付けられている。ヘラケズリ痕をよく残す天井部には2本の沈線がめぐる。体部から口縁部にかけては横ナデ調整で仕上げられ，身受けとなるカエリは丸味をもち，奈良時代の蓋に比べると明確なカエリをもたない。内面は全面指頭横ナデ調整で仕上げている。天井部は灰白色，内面はくすんだ淡灰色を呈する。胎土は石英・長石粗砂を多く含むが焼成は良好である。4は1と共伴して出土した杯片で体部下半から底部にかけての破片である。体部は上半を欠くが，下半は荒い刷毛状工具による横方向の調整痕をよく残す。高台は典型的な貼付け高台で，大きく外方する端部は丸味をもっておさまる。高台部径は11.5㎝を測る。外底部は高台貼付け後，荒い刷毛状工具による回転調整を施している。胎土は1～2㎜の砂粒（石英・長石）を含み，焼成は比較



第19図　3号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



第20図　5号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

的良好で全面灰青色を呈する。5は壁体に近い覆土中より出土した盌と推定される須恵器である。口径13.6cm，復元器高5.6cmを測る。体部下半より底部にかけては篦ケズリ調整痕を明瞭に残す。体部上半は口縁部まで横ナデ調整によって仕上げられ，内面も同様手法によっている。胎土は1㎜前後の砂粒を含み，焼成良好，くすんだ暗灰青色を呈する。6は住居址南端床面に近い黒色覆土中より出土した甕あるいは壷の体部破片である。外面は斜方向の平行叩き目文を残し横方向のカキ目がその上をめぐる。内面は同心円状を呈する青海波叩き目痕を明瞭に残す。同様の破片が集中して出土し，いずれも同一個体のものと考えられたが復元器形の全容は不明である。胎土は石英・長石を含み，焼成良

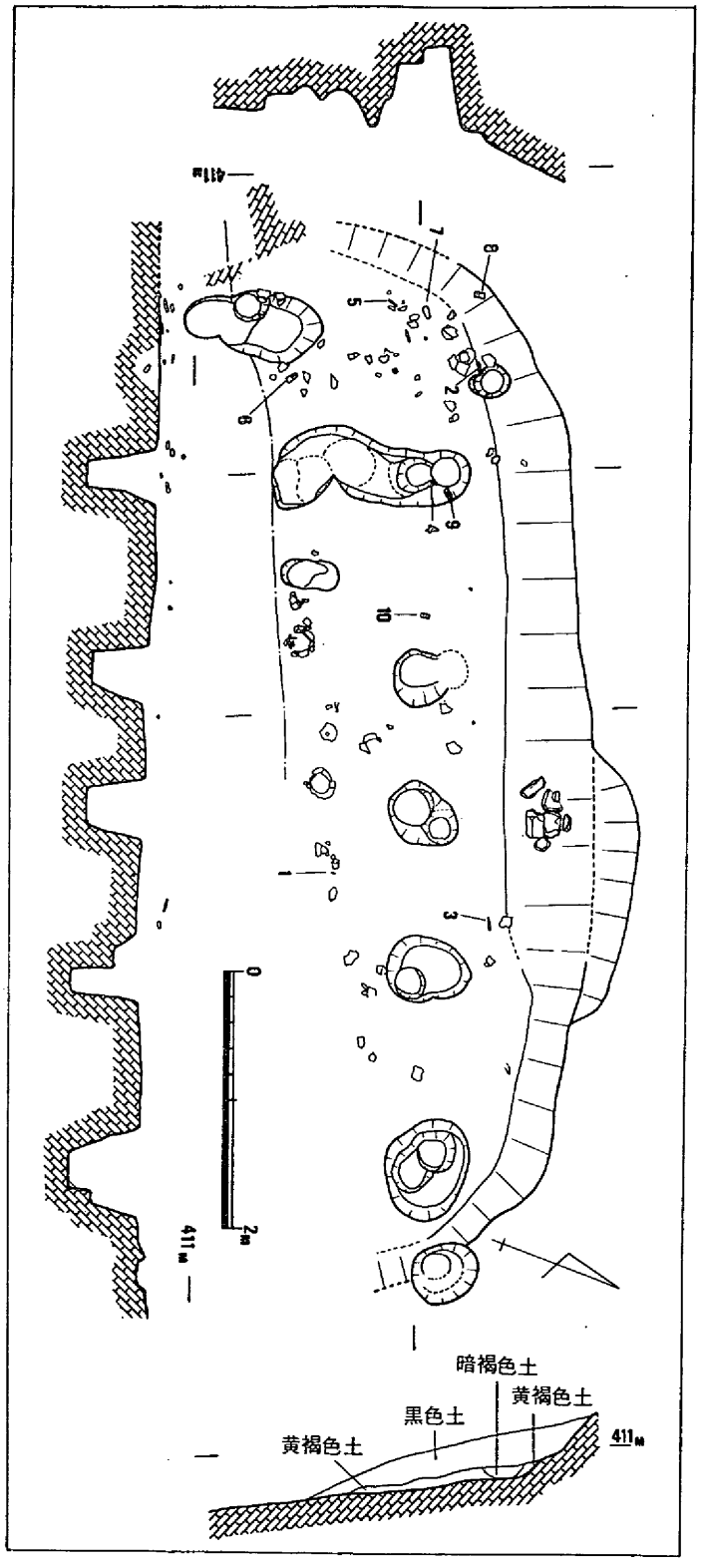
好，内面は灰青色，外面は青色を呈する。7～10はいずれも土師器甕で，床面から口縁部を下にして出土したものである。3と確実に共伴し，住居址使用時期のメルクマールとなる。7は口径22.3cmを測り，口縁部より体部外面にかけては縦方向の刷毛状工具によるナデ調整で仕上げ，全面に煤が付着している。内面口縁部は粘土接合を残す頸部屈曲部から上方に任意のナデ調整を施し，頸部より体部下半にかけては横方向の刷毛状工具による調整で仕上げている。胎土は微砂を多く含み，焼成は比較的良好，内外面共に明褐色を呈する。8は口径20.5cmを測り，相対的に長くわずかに外方する口縁部が観察される。口縁端部はいわずかに肥厚し，丸くおさめる。口縁部は縦方向の刷毛状工具による調整で仕上げ，体部は磨滅が甚しいが粗雑なナデ調整で仕上げられていると思われる。内面は全面刷毛状工具による横方向の調整で仕上げられ，胎土中には3mm前後の石英・長石をわずかに含む。焼成は良好で，内外面共に茶褐色を呈する。9は，口径26cmを測り，口縁部外面は横方向の横ナデあるいは，刷毛状工具による縦方向の調整痕を残す。体部は同種工具による斜方向の調整で仕上げられている。口縁部内面は上部がわずかに横ナデ調整が施されたほか，体部にかけては刷毛状工具による横方向の調整の後，篦状工具による仕上げが施されている。胎土中には微砂を多く含み，焼成良好，全体部的に暗茶褐色を呈し，外面にはわずかながら煤が付着し黒ずんでいる。10は，口径30.3cmを測り，外方する口縁部をもち端部を薄く，丸味をもっておさめる。口縁端部は横ナデ調整，下方から体にかけては縦・斜方向の刷状工具による調整で仕上げられている。口縁部内面は任意のナデ調整，頸部より体部にかけては篦状工具による粗雑な調整が施されている。胎土中には2～3mmの石英・長石を含み，焼成は比較的良好，内外面共に茶褐色を呈する。外面には煤が付着している。

以上概略を述べた出土遺物のうち，住居址使用時に確実に共存するものとしては，1・3～5・7～10をあげることができる。ことに1・3～5は7世紀中葉前後の時期を比定することができ，7～10の土師器甕の時期をも示しているといえる。覆土中の遺物，とりわけ鉄器については，その質・量の点において，鉄滓の出土ともあわせ注目されるが，この住居址に確実に伴うものであるか否かについては明らかではない。ただ，付近に存在した遺構から流出・廃棄の契機は同一時期であったことは確実であろう。

8号住居址 (第26図，図版13)

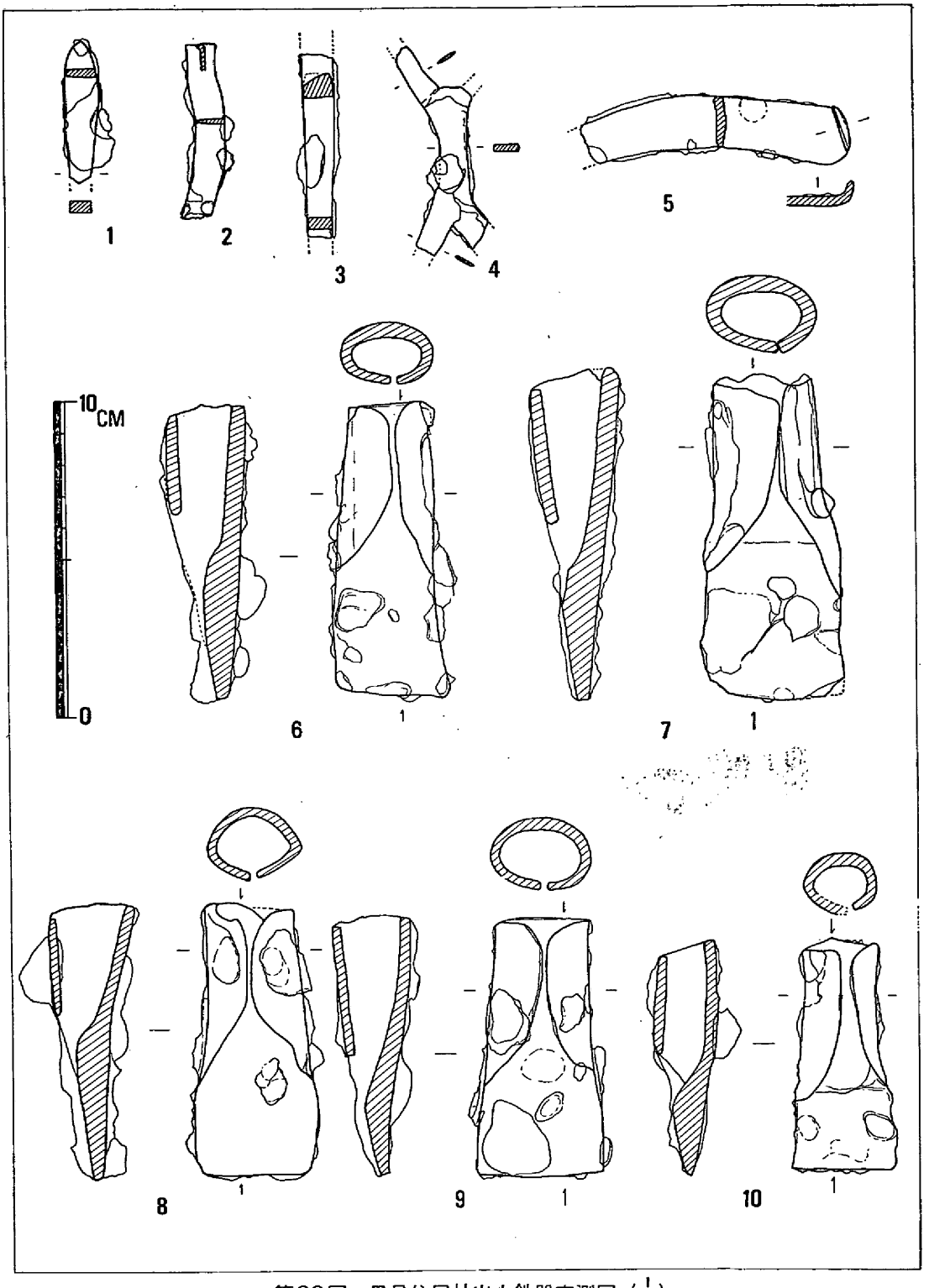
丘陵の中復西方に9号住居址と並んで位置する。残存する壁体の形状から推察すると，やはり形方プランを呈するものとみられ，復元推定1辺約3.5mを測る。壁体溝は約2.6m残存し，巾約　cm，深さ約　cmを測り，東方で途切れる。柱穴は検出できず，全容は明らかではない。壁体の肩は西方に延びるが，別の住居址の存在した可能性もある。出土遺物には土師器甕片，鉄滓片がわずかにみられるが，壁体の延長線上約1.5mの位置で第24図－6のミニチュアの手捏ね土器が出土している。これは口径4.3cm，器高約6cmを測るほぼ完形の土師器で極めて器壁の厚い，いびつなミニチュア土器である。体部外面は概ね，任意ナデ調整あるいは，刷毛状工具による任意調整で仕上げられているが，内面は指頭調整によっている。胎土は微砂・黒雲母を含み，土師器としては焼成普通，明るい赤褐色を呈する。

9号住居址 (第27図，図版13・14)

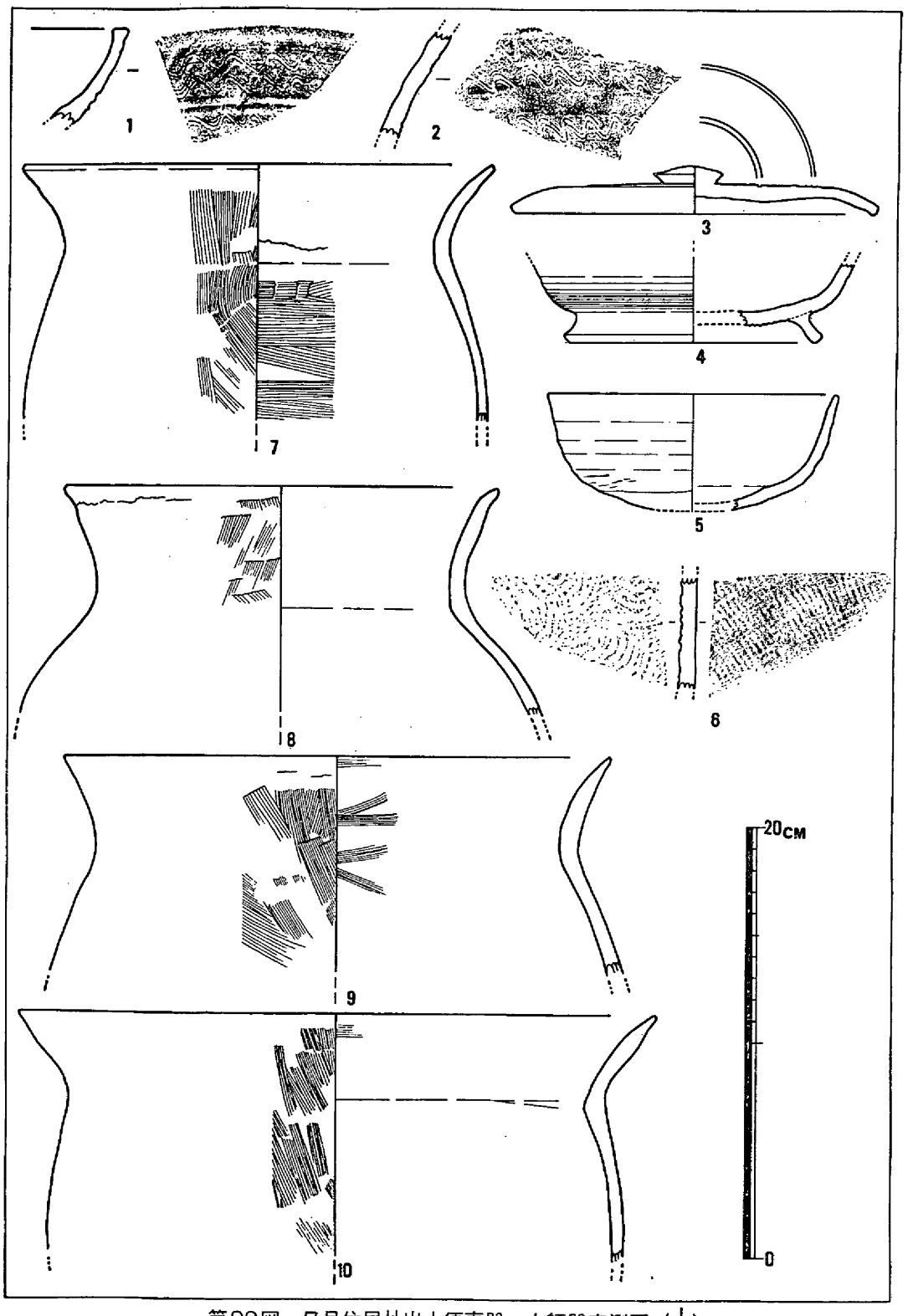


第21図　7号住居址実測図（1～10：鉄器番号）（$\frac{1}{60}$）

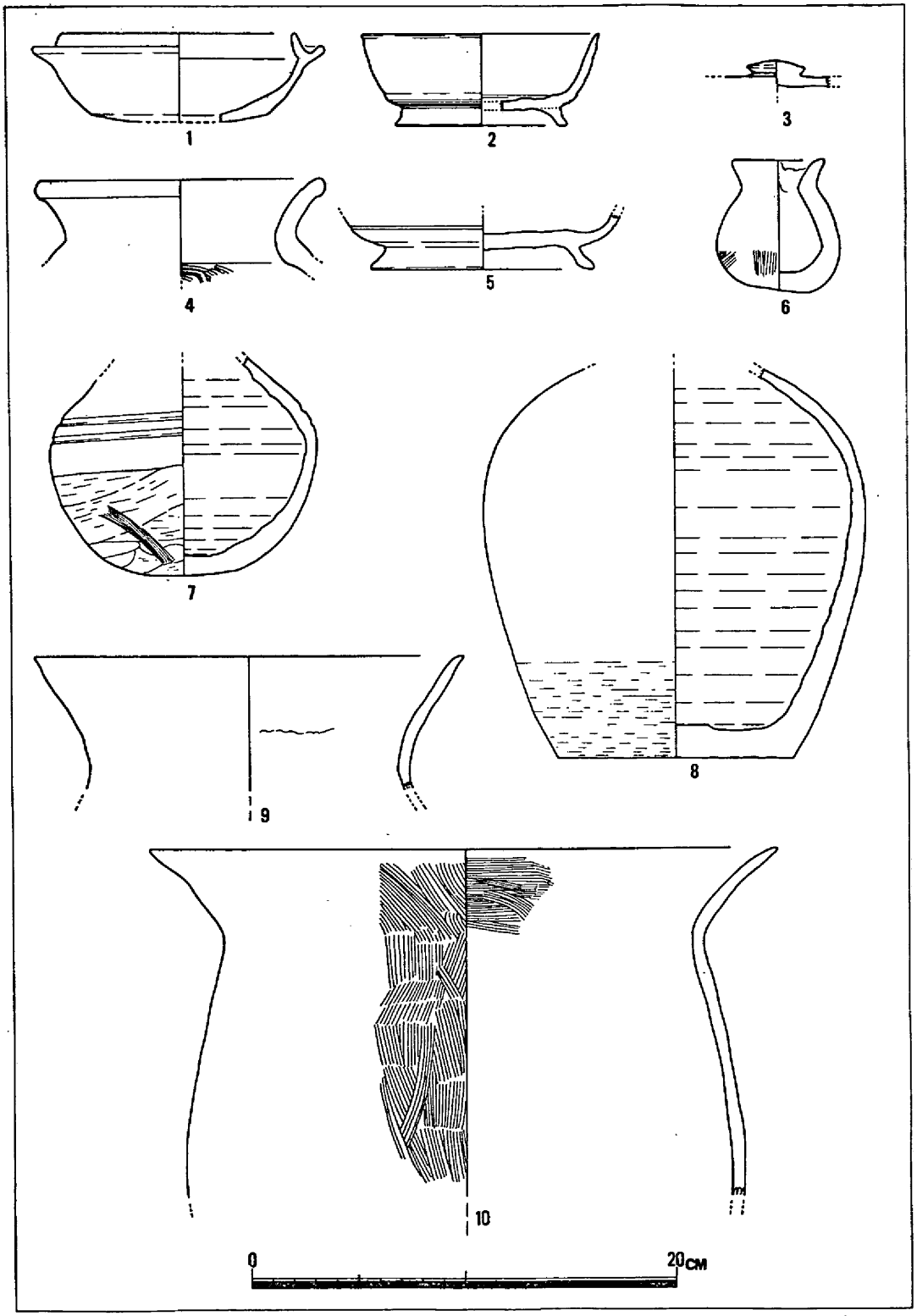
8号住居址のやや下方の西約1.5mに位置する。8号同様南面する住居址である。残存する北側壁体は約3.7mを測り，形状から方形住居址と考えられる。壁体溝は3本みられ2～3時期にわたって使用されたことを示唆している。中央部のやや東よりから検出した壁体溝はやや弧を描く。また外側壁体とプランを並行するもう1体の壁体溝は西方にのび，わずかな曲折部を残して消滅している。出土遺物は須恵器・土師器がみられ，前者には壁溝より出土した壷・甕片・杯片があり，後者には甕片がみられる。第24図―7は壷で頸部より上半を欠く。残存高10cm，最大体部径12.4cmを測り，肩部には2条の凹線がみられる。体部外面は，中央部より上方を横ナデ調整によって仕上げ，下半は荒い篦ケズリ痕を残し，部分的に刷毛状工具を用いてわずかな調整を施している。胎土中には粗砂(石英・長石)を多く含み，焼成良好，全体的に暗灰青色～灰青色を呈する。第28図―1・3はいずれも床面で出土した土師器甕である。1は口径21cmを測り，外方し，薄く丸味をもっておさまる口縁部をもつ。口縁部下半より体部にかけては，縦方向の刷毛状工具による調整を施し，口縁部上半よ



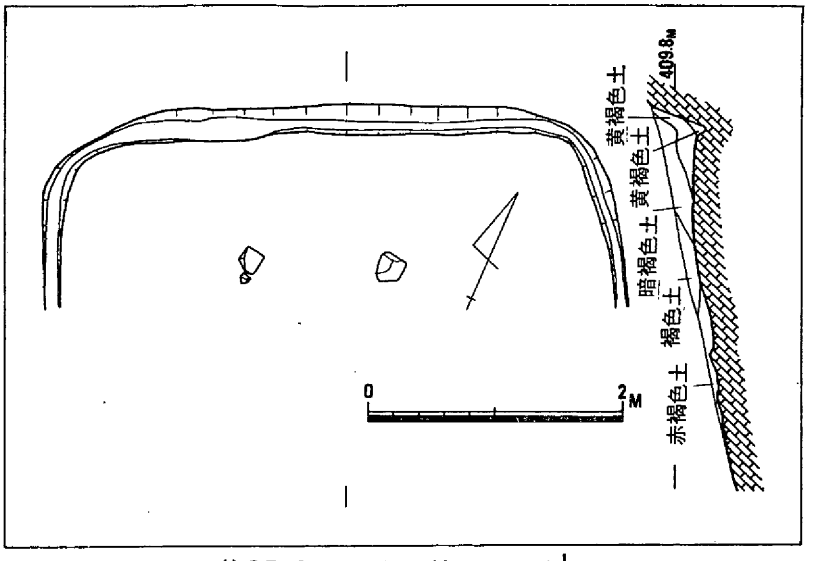
第22図　7号住居址出土鉄器実測図 ($\frac{1}{2}$)



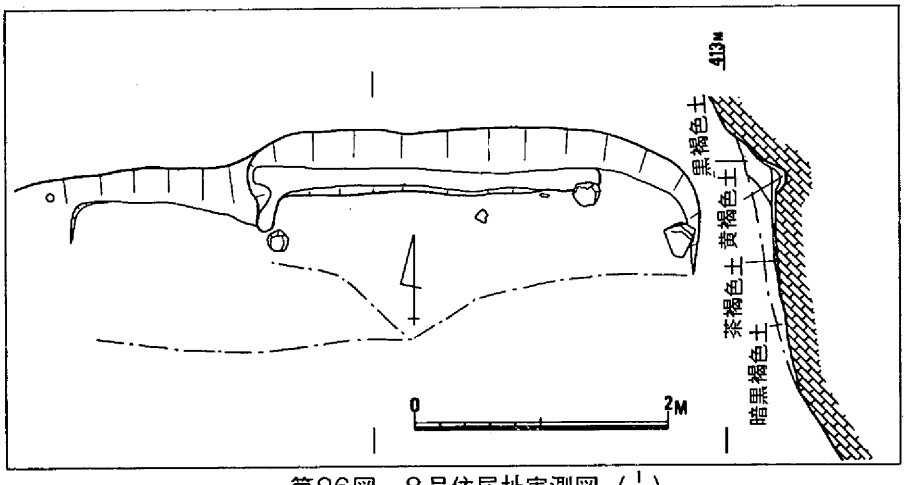
第23図　7号住居址出土須恵器・土師器実測図 ($\frac{1}{3}$)



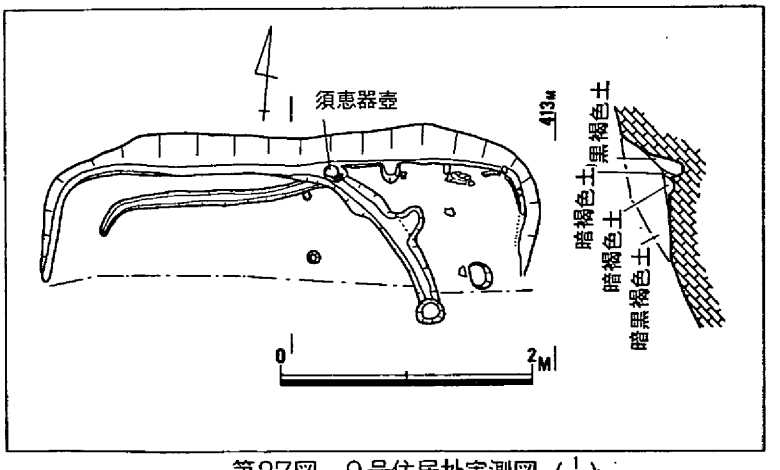
第24図　2・3・9・10号住居址および3区南斜面出土須恵器・土師器実測図（$\frac{1}{3}$）



第25図　6号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



第26図　8号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



第27図　9号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

を内面にかけては横ナデ調整を施している。体部内面は篦ケズリ痕を残す。胎土中には1～2㎜の砂粒を含むが焼成良好，内面は暗褐色，外面は淡褐色を呈する。3は，1に比べるとやや長い口縁部を呈し，他の出土土師器の中にも，この二つのタイプが存在するようである。口径22㎝を測り，口縁部は緩かに外反し，端部は丸くおさまる。口縁部外面は刷毛状工具による任意調整を行い，その後ナデ調整によって仕上げている。頸部外面は縦方向，体部外面は横あるいは，斜方向の刷毛状工具による調整を施している。口縁部から頸部内面にかけては横方向の刷毛状工具による調整を施し，体部は，荒く粗雑なナデ調整で仕上げている。胎土中には石英・長石を多く含みわずかな黒雲母も認められる。焼成は比較的良好で，内面黄褐色，外面は暗灰褐色を呈する。

以上の遺物の時期は，同様な他の住居址出土遺物と大きな差異はなく，やはり7世紀代に比定されよう。

10号住居址 （第29図，図版15--1）

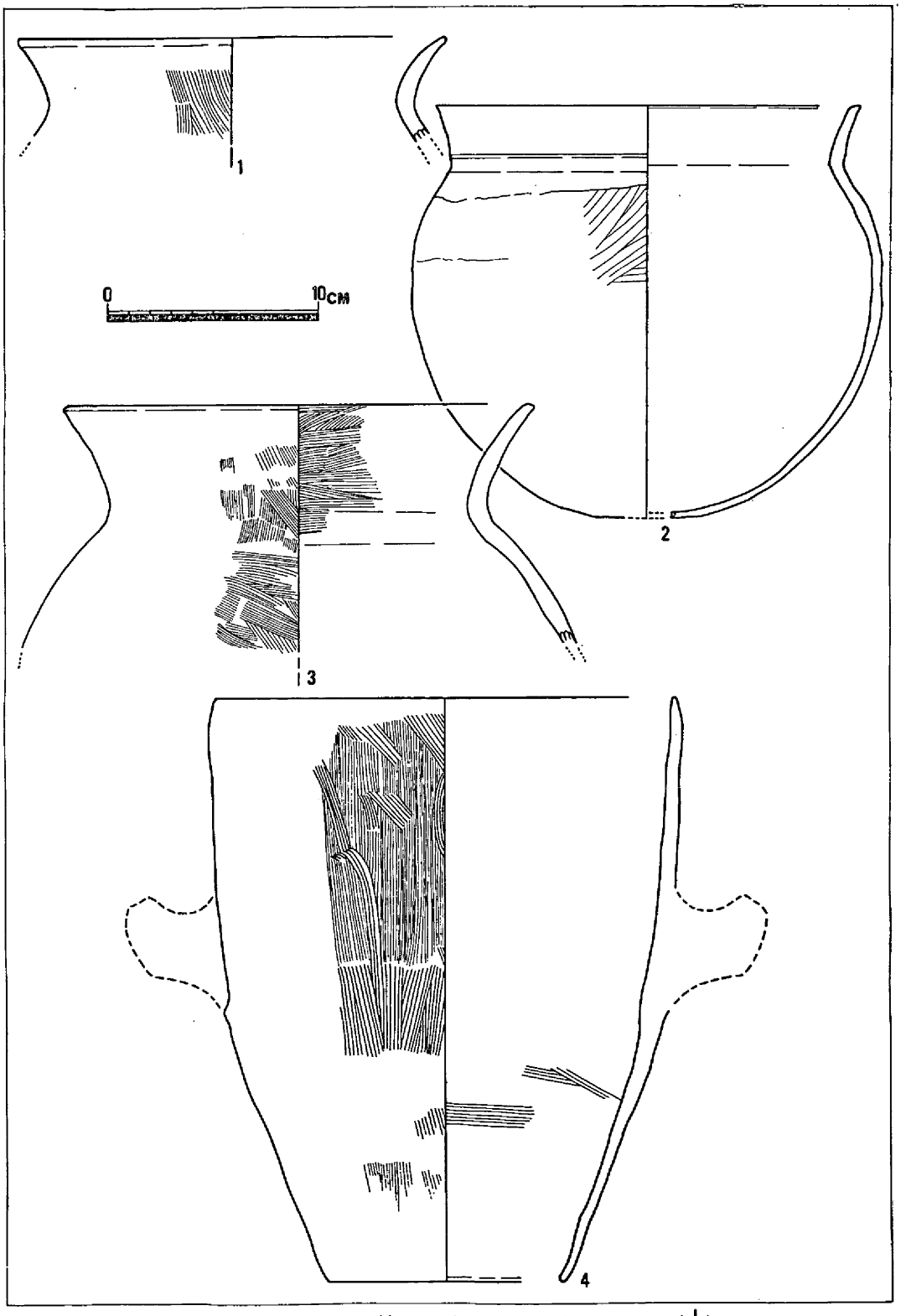
本調査区最下部の2号住居址とほぼ同一等高線上に位置し，5号住居址の南方約8ｍの発掘区南端で検出した。比較的残存良好な住居址で南面する壁体は約5ｍを測る。壁体溝も壁体に沿って検出され，更に柱痕跡を明瞭に残す柱穴3本の検出も可能となった。柱穴は壁体と並行して心心距離3.3ｍを測り，東方壁体側の南柱穴とほぼ直角をなす。東辺柱穴心心距離は約2.4ｍを測り，未検出におわった西側柱穴とあわせて4本柱を主柱とする建築構造を示している。出土遺物には土師器甕片・鉄滓小片が多くみられ，須恵器蓋片・壷片・杯片・高杯片などが少量出土している。また床面では錆化の甚しい鉄器小片が2点出土しているが用途不明である。第24図－3は須恵器蓋のツマミ部で径2.2㎝を測る扁平かつ，小形な形態を呈し，天井部は極めて薄い。胎土は精良土を用い，焼成は比較的良好・内外面共に淡灰青色を呈す。時期的には，7世紀中葉前後に比定するのが妥当であろう。

11号住居址 （第30図，図版17－2）

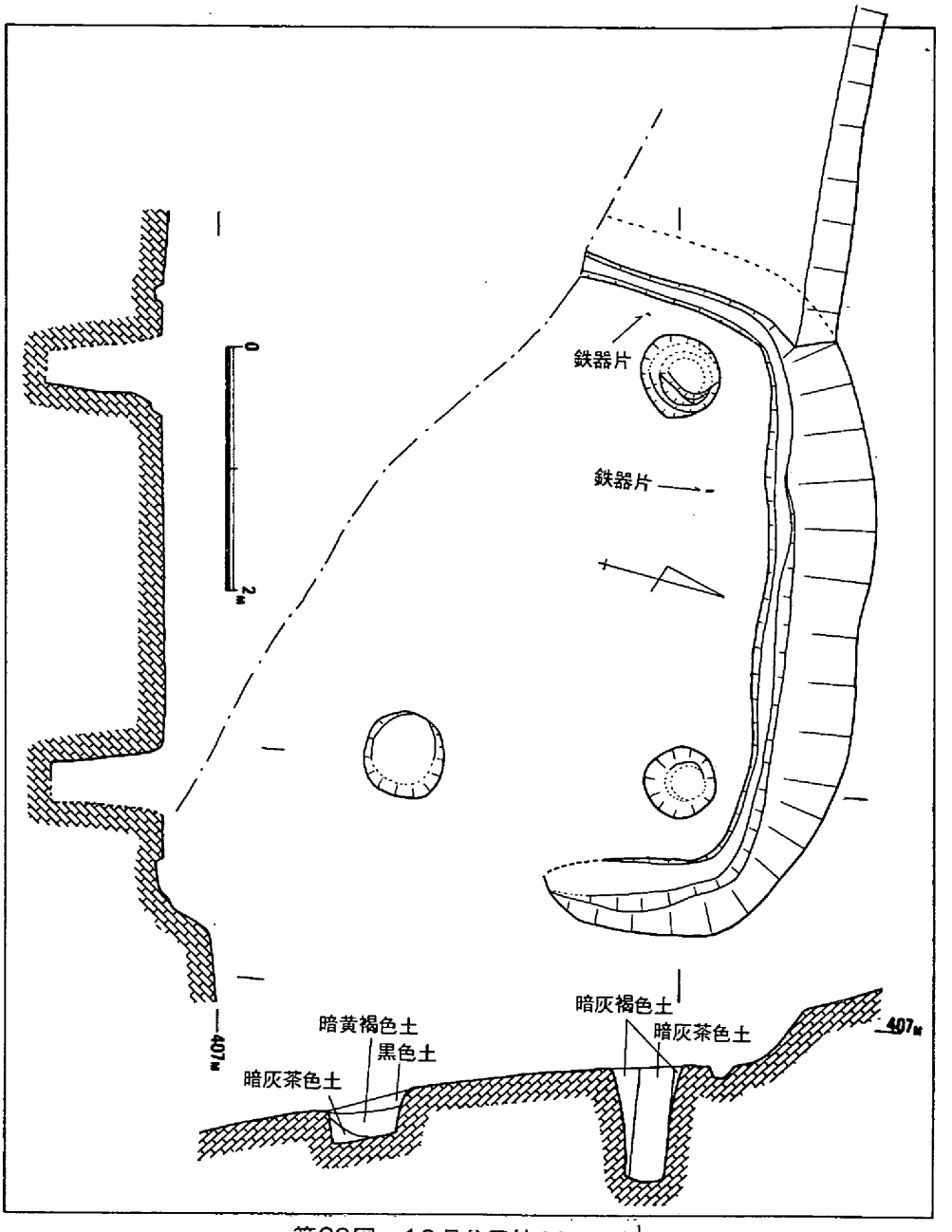
12号住居址の東側に存在する。平面形は短冊形を呈するが，斜面に位置するために残存状態が悪い。地形の高い位置に，「冂」状を呈する壁体溝が存在する。底部での幅が7～17㎝で，両隅間の距離は約570㎝を測る。床面には，4箇所の柱穴を検出した。柱穴間の距離は，P－1とP－2が315㎝，P－3とP－4が300㎝を測る。P－1とP－2の柱穴は，床面から著しく浅いため，住居址の柱穴としては不安定である。この住居址に確実に伴うと考えられる柱穴は，P－3とP－4である。この住居址は，地形の低い位置が削平されて残っていないから詳細は不明であるが，4本柱を有する隅丸方形または隅丸長方形を呈するであろう。中央ピットは検出できなかった。P－2とP－3に接して，壁体溝から南方向へ張出している溝の性格は不明である。

12号住居址（第31図，図版17－2）

11号住居址と13号住居址の中間の位置に存在する。切合い関係を検討した結果，12号住居址は，11号住居址や13号住居址よりも古いことを確認した。地形の高い位置に不整形な法面を検出したが，この住居址には関係ないであろう。この12号住居址に伴うものは，西方向に位置する三日月形を呈する溝である。これらの溝は，壁体溝になると考える。床面を精査したが，規則性を有する柱穴や中央ピットは検出できなかった。住居址の柱穴になる可能性があるのは，C－D断面に位置するP－1とP



第28図　9号住居址および周辺出土土師器実測図 ($\frac{1}{3}$)



第29図　10号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

—2である。ところがP—1の柱穴は，住居址の柱穴としては，溝との関係で妥当な位置になっていない。地形の低い部分が削平されているために詳細は不明であるが，住居址以外の遺構になるのかもしれない。遺物は，土師器甕片を数片検出した。

13号住居址　(第32図，図版17—1・18—1)

8・9号住居址より約1.5m高い位置に，東より11・12・13・14号住居址が並んで存在する。背後

は14号住居址と同様，人為的に崖面が造成され，壁体を兼ね，更に住居平面を拡大している。床面を検出した平坦面は約2·5mを測り，テラス状となって西方未掘地区へ延びる。検出した南面する壁体溝から推定すると一辺約7·3mを測る方形住居址と考えられる。西方隅には，西方へ延びる壁体溝を仕切るかのような長さ1·7mの長方形溝が存在する。検出した柱穴は明確なまとまりはなく，この床面平坦部を利用した住居址の重複を物語っている。出土遺物には，土師器片・鉄滓・須恵器片が多くみられる。第28図－4は付近で出土した土師器甑で，把手を欠失するが全容をよく残す。上端径21·8cm，下端径11cmを測り，上方より下方へ徐々に窄まる。体部上半から口縁部外面にかけては縦方向の刷毛状工具による調整を施し，上端のやや内反する口縁端部付近は一部横ナデ調整を内外面に施している。体部下半は刷毛状工具による調整の後，ナデによる仕上げを施している。内面は全面，横方向の刷毛状工具による調整の後，横ナデ調整で仕上げている。胎土は2～3mm前後の粗砂（石英·長石）を含み，焼成比較的良好，内外面共に明茶褐色を呈する。

14号住居址 （第33図，図版17－1・18－1）

13号住居址の西方約70cmに南方向にのびる壁体溝の一部を検出できたが，西方にのびる北辺壁体溝は約5·5mの部分のみの確認にとどまった。調査期限で発掘を断念せざるを得ず，西側柱穴の2本は未掘である。壁体は13号住居址より連なる人工的崖面と重複すると考えられ壁体溝は一定した巾と深さをもたない。検出柱穴は5本であるが，他の住居址との切り合い重複を示唆する以外，構造については明らかではない。出土遺物には，土師器片・須恵器片をはじめとして鉄滓の出土が顕著であった。覆土中からの遺物出土は多く，上方住居址群からの流入が考えられる。

16号住居址 （第34図）

17号住居址と重複して存在する。この住居址は，17号住居址よりも古い。地形の高い位置に「コ」状を呈する壁体と壁体溝が残存している。溝の底部の幅は，2～5cmを測る。2の住居址は斜面に位置し，しかものちになって17号住居址に切られているから，残存状態が悪いとはいえ，柱穴4と中央ピットを検出した。柱穴間の距離は，P－1とP－2が283cm，P－2とP－3が265cm，P－3とP－4が288cm，P－4とP－1が280cmを測る。P－1とP－2の柱穴は，断面形が部分的に袋状を呈している。中央ピットは円形を呈し，検出面での直径が約40cmを測る。この中央ピットの深さは，柱穴に比して浅い。柱穴や壁体溝の配置から推察して，この16号住居址の本来の形態は，隅丸方形を呈すると考える。床面から，甕の口縁が出土している。

17号住居址 （第34図）

16号住居址と重複して存在する。この住居址は，16号住居址よりも新しい。平面形は短冊形を呈するが，斜面に位置するために残存状態が悪い。地形の高い位置に，「冂」状を呈する壁体と壁体溝が存在する。溝の底部の幅は2～8cmで，両隅間の距離は約440cmを測る。床面には柱穴2（P－6，P－7）を検出したが，中央ピットは存在しない。柱穴間の距離は160cmを測る。16号住居址の柱穴に比して，規模が大きい。柱穴の間に位置する床面には，焼土を検出した。この住居址は，地形の低い部分が削平されているために詳細は不明であるとはいえ，柱穴や壁体溝の配置から推察して，本来の形態が2本柱を有する隅丸長方形になると考える。遺物は，土師器数片と鉄滓10点が出土した。

18号住居址 (第35図，図版19—2)

3区の調査予定地内では，最も地形の高い位置に存在する。検出面での幅が最も広い位置で約40cmを測る溝が存在するだけで，壁体は確認できなかった。また規則的に並んだ柱穴も検出できなかった。精査したにもかかわらず，遺物は出土していない。

19号住居址 (36図，図版20)

20号住居址と切合って存在する。調査の結果，20号住居址よりも新しいことを確認した。この住居址は，3軒が重複している。「コ」状を呈する壁体を有する住居址（19—1号住居址）が最も古く，逆U字形を呈する壁体溝を有する住居址（19—3号住居址）が最も新しい。19—1号住居址の壁体と19—3号住居址の壁体溝の中間の位置に，彎曲して張出した壁体溝を有する住居址（19—2号住居址）が，中間の時期に属すると考える。

19—1号住居址は，壁体が残存するだけで壁体溝は存在しない。P—3とP—4の柱穴が，この住居址に伴うと考える。柱穴間の距離は，380cmを測る。この住居址の本来の形態は，隅丸方形または隅丸長方形を呈するであろう。

19—2号住居址は，19—1号住居址の床面にわずかに壁体溝が残存するだけである。P—5とP—6の柱穴が，この住居址に伴うと考える。柱穴間の距離は，348cmを測る。この住居址に伴う柱穴は，19—1号住居址や19—3号住居址に伴う柱穴に比して，規模が著しく小さい。壁体溝がわずかに残存しているだけであるから，この住居址の平面形は不明である。

19—3号住居址には，P—7とP—8の柱穴が伴うであろう。逆U字形を呈する壁体溝を有するとはいえ，P—8の柱穴は壁体溝内に位置している。この3区で検出した住居址には，特殊な柱穴の配置になっている22号住居址を除いて，壁体溝内に柱穴が存在するものは確認されていない。壁体溝と柱穴の位置関係が，不自然になっているのである。ところがP—7とP—8の柱穴の規模はほぼ同じで，底部のレベルも揃っているから，両柱穴は同じ住居址に伴うものと考えたい。このように，19—3号住居址については不明な点を残している。

この住居址からは，砥石（第40図）が出土している。石質は半花崗岩で，扁平な形を呈する。欠損しているために，全体を知ることは不可能である。欠損面を除外した3面とも，著しい使用痕が認められる。この使用痕から推察して，金属器の研磨に使用した砥石と考えられる。

20号住居址 (第36図，図版20)

19号住居址と重複して存在する。この住居址は，19号住居址よりも古い。半面形は短冊形を呈するが，斜面に位置するために残存状態が悪い。地形の位置に，「冂」状を呈する壁体と壁体溝が存在する。溝の底部の幅は，20～30cmを測る。床面には，柱穴2を検出した。P—1とP—2である。柱穴間の距離は，283cmを測る。どちらも柱穴の規模が大きく，床面から深く掘開している。壁体溝と柱穴の位置関係は，22号住居址と酷似している。中央ピットは検出できなかった。この住居址は，地形の低い部分が削平されているために詳細は不明であるとはいえ，柱穴や壁体溝の配置から推察して，本来の形態が4本柱を有する隅丸方形または隅丸長方形になると考える。この住居址から，遺物は出土していない。

21号住居址 (第37図，図版23－1)

17号住居址と22号住居址の中間の位置に存在する。この住居址の両方向の地点には壁体2を検出しているから，2軒の住居址が重複していると考える。彎曲して西方向に張出している壁体を有する住居址が，東側に存在する住居址よりも古い。この古い時期に属する住居址には，壁体溝が検出できなかった。柱穴や中央ピットは不明である。新しい時期に属する住居址は，地形の高い位置に「冂」状を呈する壁体と壁体溝を検出した。壁体溝の底部の幅は24～35cmを測り，3区で検出した住居址の壁体溝では，幅が最も広くなっている。両隅間の距離は，約540cmを測る。この住居址に確実に伴う柱穴は，P－1とP－2である。柱穴間の距離は，385cmを測る。ほかの住居址に比して，柱穴の位置が壁体溝に近接した位置になっている。中央ピットは検出できなかった。この住居址は，地形の低い部分が削平されているために詳細は不明であるとはいえ，柱穴や壁体溝の配置から推察して，本来の形態が4本柱を有する隅丸長方形になると考える。

出土遺物（第40図）は，床面から須恵器杯，高杯，大甕片，土師器甕を数個体検出した。

22号住居址 (第38図，図版23－2)

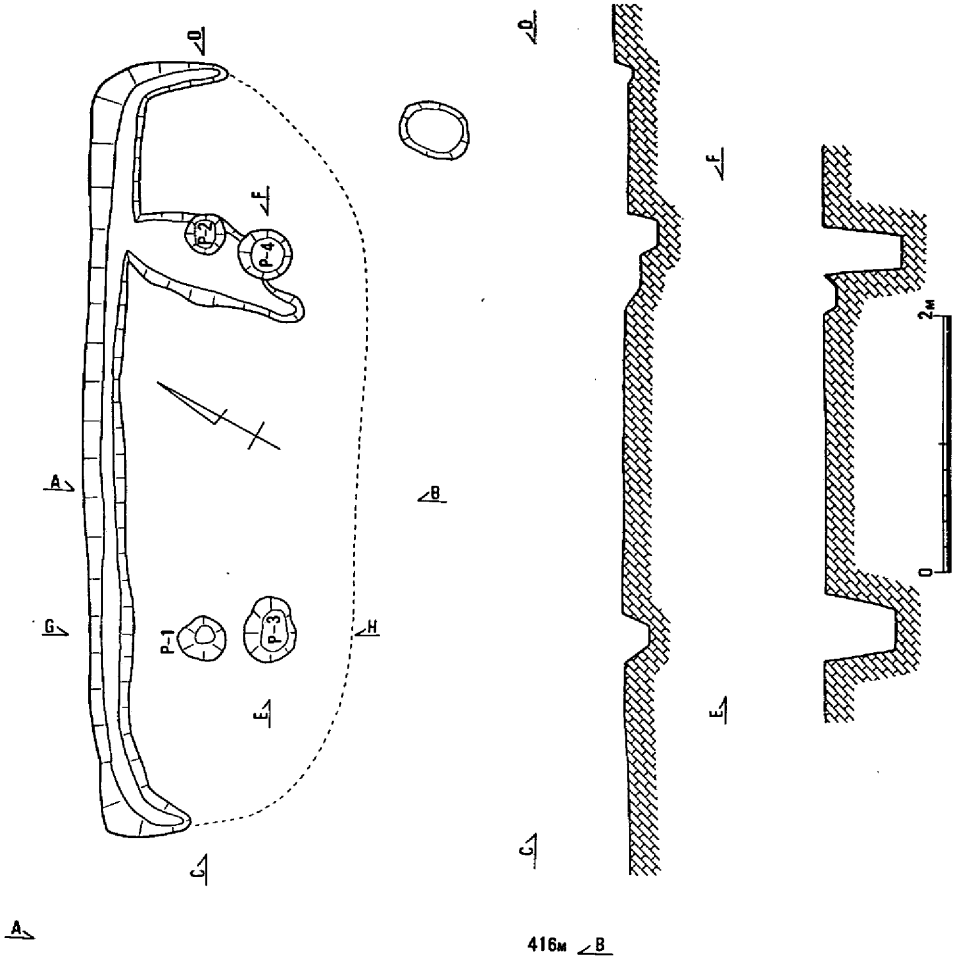
21号住居址と23号住居址の中間の位置に存在する。平面形は短冊形を呈するが，斜面に位置するために残存状態が悪い。地形の高い位置に，「冂」状を呈する壁体溝が存在する。溝の底部の幅は4～10cmで，両隅間の距離は約450cmを測る。床面に柱穴4を検出したが，P－1とP－4は壁体溝内に存在して，断面形が住居址の外側へ張出した袋状を呈するから，柱が斜め方向になる。P－2とP－3が上部構造を支える中心の柱になるであろう。P－2とP－3の柱穴間の距離は，212cmを測る。P－2とP－3の中間部分の床面には，焼土を検出した。この住居址は，地形の低い部分が削平されているために詳細は不明であるとはいえ，柱穴や壁体溝の配置から推察して，本来の形態が隅丸方形になると考える。この住居址の床面からは，鉄滓が多数出土している。

23号住居址 (第39図)

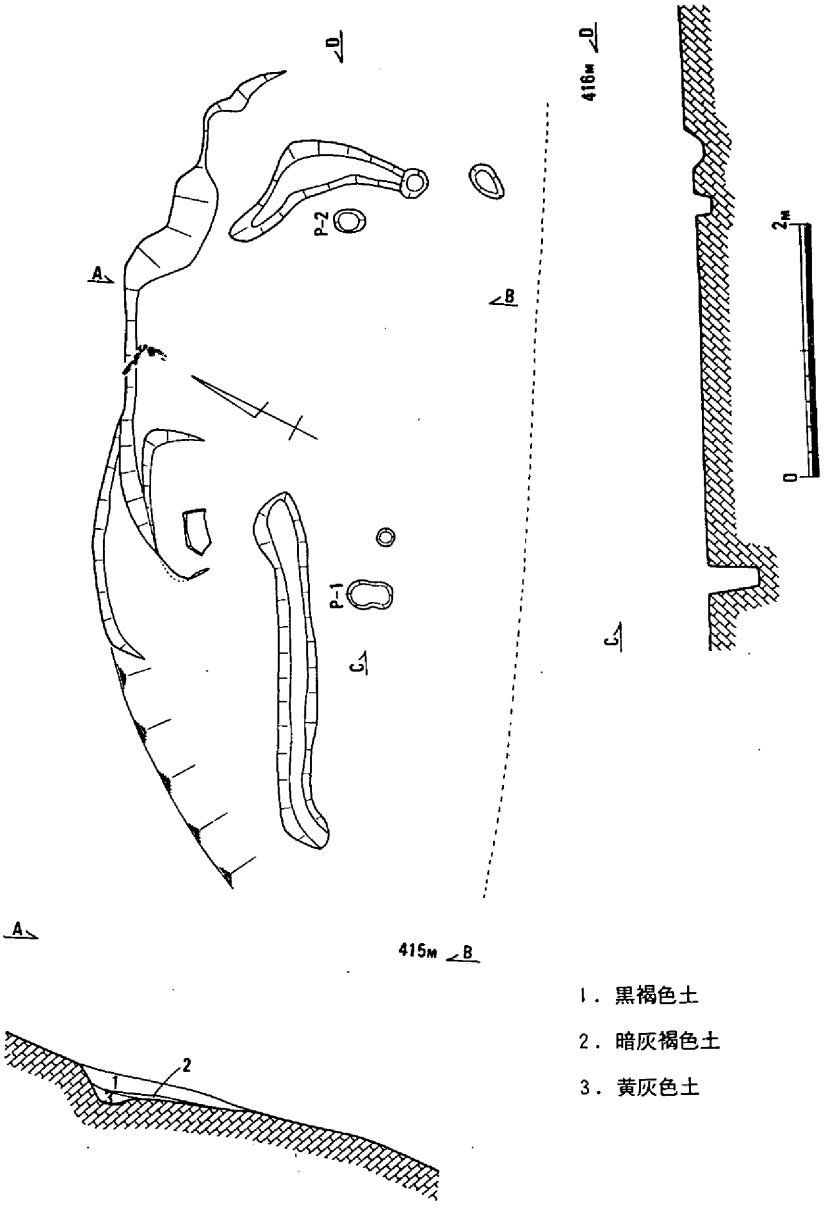
21号住居址の両方向に存在する。調査予定地の境界に位置しているため，全形を把握することができなかった。この住居址は，2軒が重複している。土層断面を観察した結果，壁体溝を有する住居址が古く，床面全体に焼土面が認められた住居址が新しい。

古い時期に属する住居址は，平面形は短冊形を呈するが，斜面に存在するために残存形態が悪い。地形の高い位置に，「冂」状を呈する壁体と壁体溝が存在する。溝の底部の幅は4～8cmで，両隅間の距離は約360cmを測るであろう。床面を精査したが，この住居址に伴う柱穴や中央ピットは検出できなかった。この住居址は，地形の低い部分が削平されているために詳細は不明であるとはいえ，壁体や壁体溝の残存形態から推察して，1辺が約360cmを測る隅丸長方形になるであろう。

新しい時期に属する住居址は，前述した住居址の地形の高い位置に存在する壁体を削平して構築していた。両方向は，調査予定地外の範囲になるため，詳細は不明である。壁体が残存するだけで，壁体溝は検出できなかった。床面全体に，焼土を確認した。古い時期に属する住居址の床面に存在するP－1が，この住居址に伴う柱穴になると考える。この住居址は，壁体や柱穴の残存形態と，床面で確認した焼土の分布状態から推察して，2本柱で隅丸長方形を呈すると考える。遺物は，土師器甕片



第30図　11号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



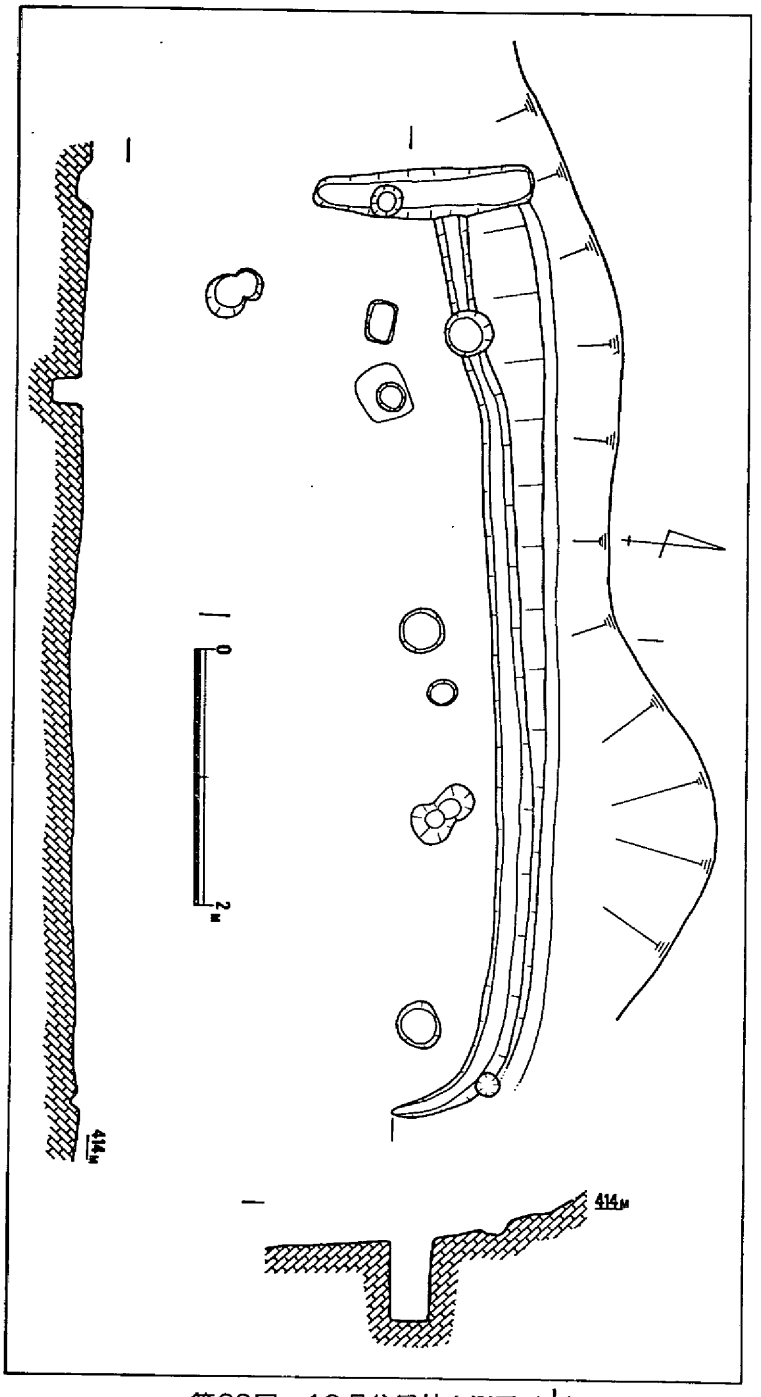
第31図　12号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

が数点出土した。

第2節　その他の遺構・遺物

(1) 不整形土壙 (第41図, 図版21－2)

1～3号土壙と呼称するこれらの不整形土壙は丘陵北東部の斜面に位置する。1号土壙は3.5×2.5



第32図　13号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

mを測りもっとも大きい。2号土壙は1.75×0.85mを測り，一部のみ残存している。3号土壙は，2.1×2.1mを測る。以上の土壙は，従来風倒木痕あるいはドーナツ状土壙と解され，呼称されているものである。

(2) 丘陵北西方（最上部）出土弥生式土器

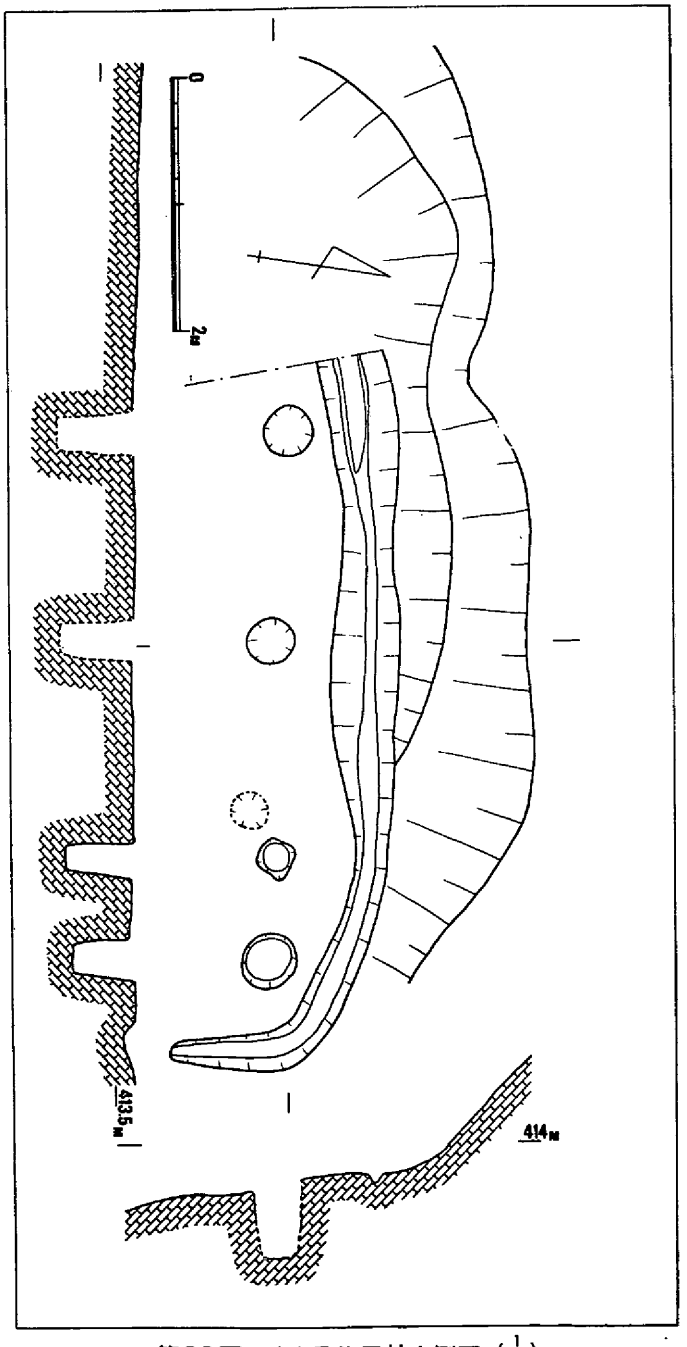
（第42図）

いずれも丘陵最上部の黒色包含層より出土した弥生式土器で，同時代の住居址の存在を示唆する重要な遺物である

1は口縁端部を拡張し，その端面に退化凹線をめぐらす甕形土器である。胴部内面は頸部に近い位置まで篦削りが認められる。2は頸部に貼付刻目凸帯がめぐるもので，口縁端部は著しく上下に拡張されている。3は小形器台の可能性が強く，上下に拡張された口縁端部に退化凹線と刻目がめぐる。4は大形の高杯形土器か台付の鉢形土器と考えられ，内外とも丁寧なつくりである。5は高杯の口縁部で，上端面に退化した凹線がめぐる。6は高杯の脚台部で，4本単位の垂下する条線が施される。

これらの土器は(2)がやや古く弥生中期末に属するが，その他は後期前半と考えられる。

(3) 丘陵西斜面出土遺物（第24図—1・2・5・8，第28図—2）

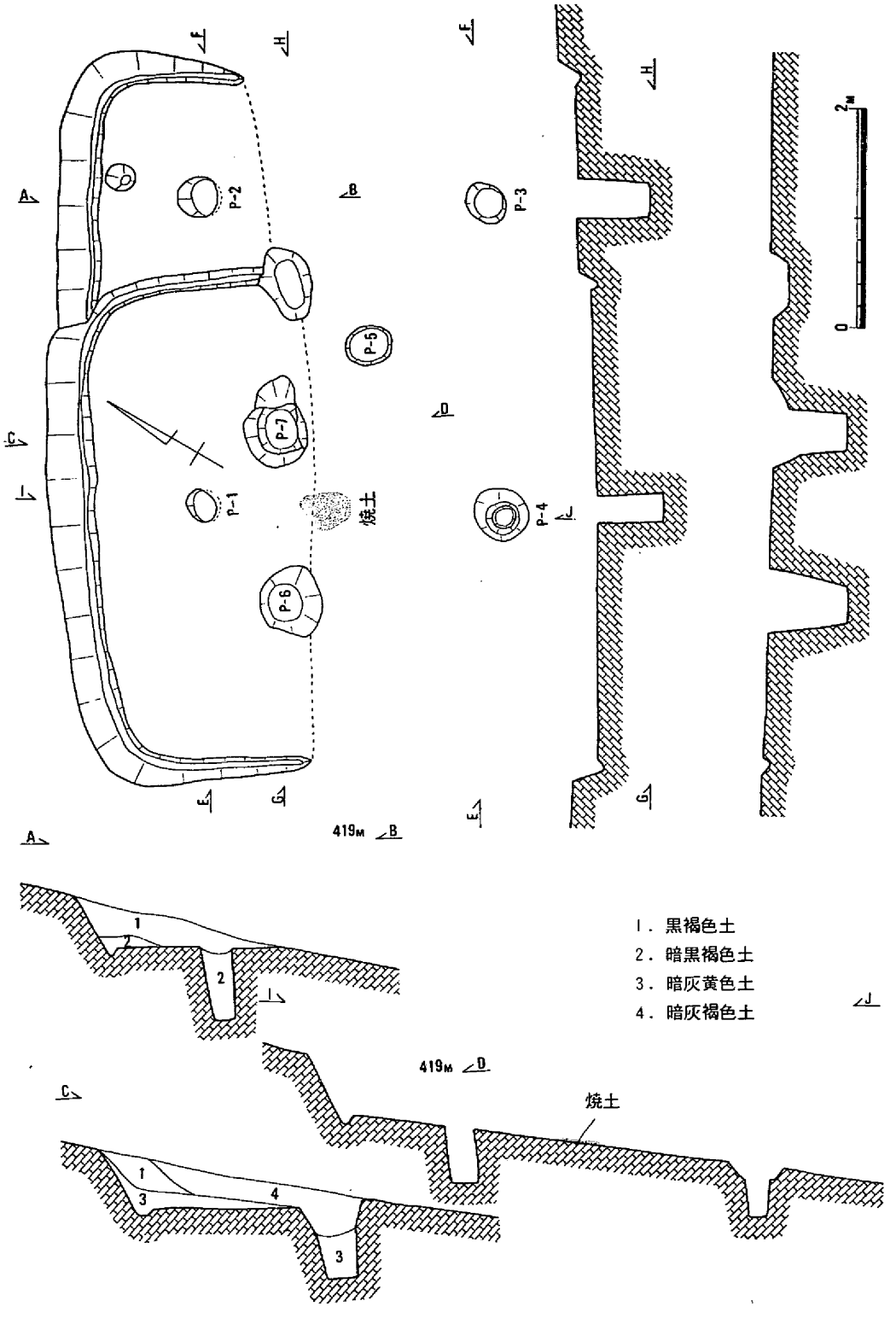


第33図　14号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

丘陵が西方に下降し，谷部に至る緩斜面からは，多量の遺物が出土し，住居址群からの流出堆積を示すものが多くみられる。住居址遺構に伴うものについては先に述べたので，これらの遺物について概略を記しておく。

1・2・5・8はいずれも須恵器である。1は立ちあがり部径10.8cm，受け部径13.6cm復元推定器高4.1cmを測る須恵器杯である。やや上方する受け部より，内傾する低い立ちあがりがあり，端部は丸くおさめている。立ちあがり部から体部下半にかけては横ナデ調整を施し，やや平坦面をなす底部は篦ケズリの後，荒く粗雑なナデ調整を施している。内面は立ちあがり部から体部下半にかけては横ナデ調整を施し，底面は，恣意的なナデ調整を施して仕上げている。胎土中には長石微砂を多く含むも，比較的良好な粘土を用い，焼成良好，外面は自然釉がみられくすんだ淡灰色～淡灰青色，内面は灰青色を呈す。時期的には，本調査区出土遺物の中では弥生式土器についで古く，6世紀末期に比定され，この時期の住居址が存在した可能性が十分に考えられる。

2は小形杯で，口径11.1cm，器高4.2cm，高台径7.9cmを測る。口縁部より体部下半にかけては横ナデ調整で仕上げられ，体部下端には横方向のカキ目がみられ，わずかな凹凸が観察される。高台は貼付け高台で外方する端部は平坦面をなす。底部外面は高台貼付け後ナデ調整を施している。内面は全面横ナデ調整で仕上げている。胎土中には石英・長石微砂を比較



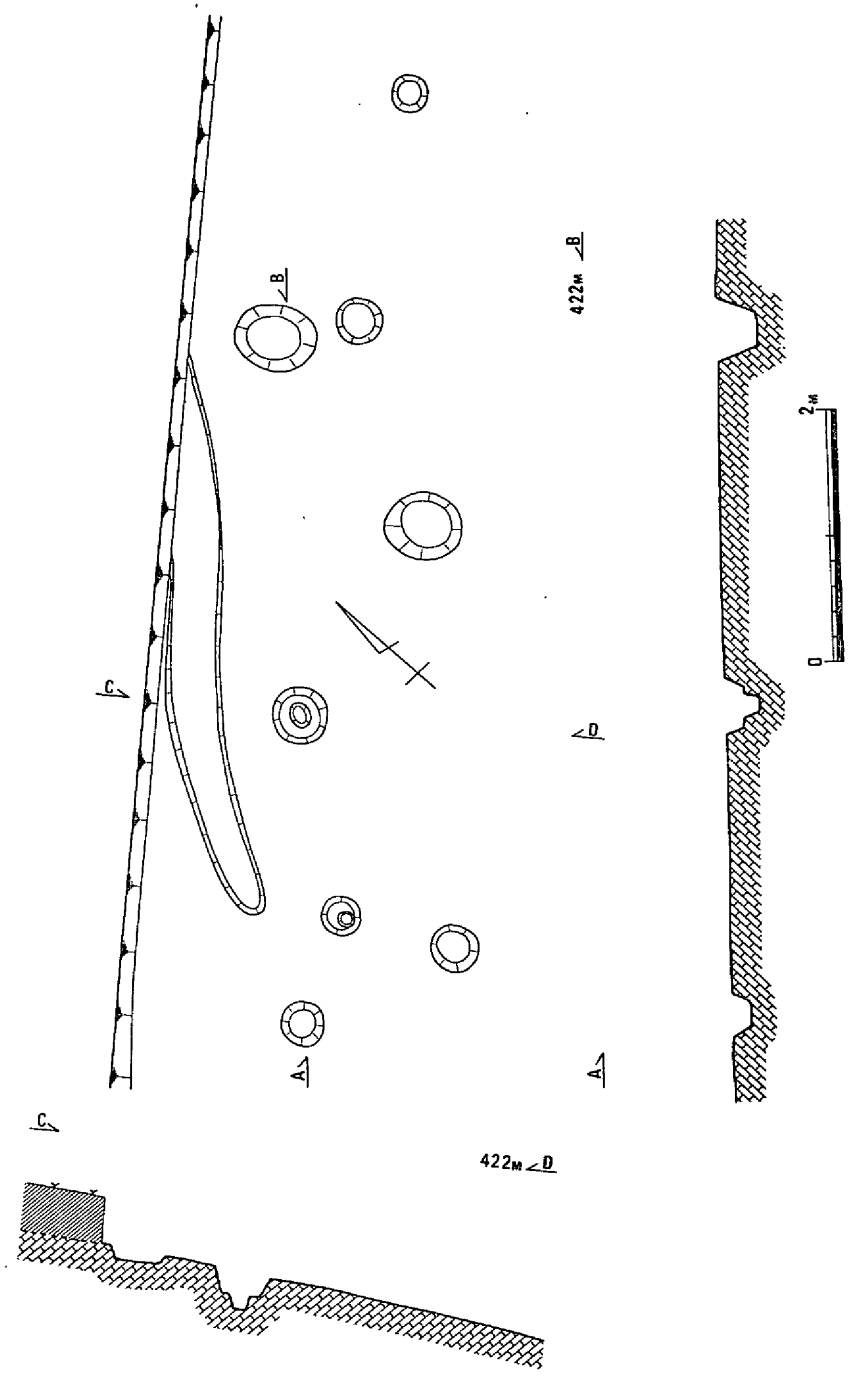
第34図　16・17号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)

的多く含み，焼成良好，内面には自然釉がみられる。内面は，暗緑色～灰緑色を呈し，外面は淡灰青呈色をする。7世紀中葉前後の時期に比定される。

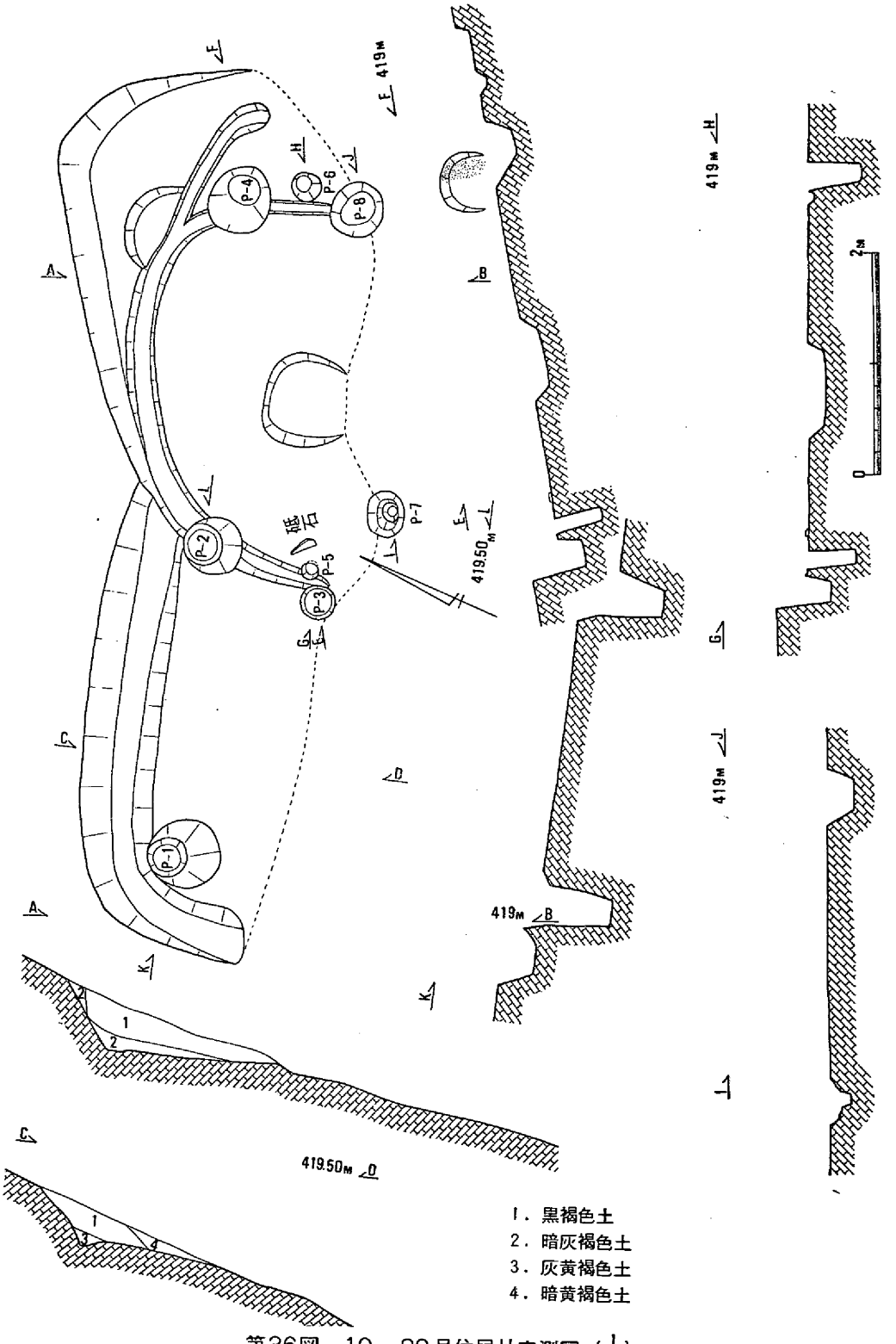
5は，やや大形の杯の体部下半から高台部の全体を残す破片で，残存する高台径は10.4cmを測る。体部下半から貼付け高台外面にかけては横ナデ調整，内面は恣意的なナデ調整によって仕上げられている。高台は大きく外方し，端部は丸くおさめ，外底部にかけて内面を横ナデ調整で仕上げている。胎土中には石英・長石微砂を含み，焼成良好，内外面共に暗青色～灰青色を呈する。時期的には2と大きな隔たりはないものと推定される。

5は壺で体部上半の一部と頸部を欠く。残存高17.9cm，最大体部径18cm，底径11.1cmを測る。体部の最下半部をのぞく外面は丁寧な横ナデ調整で仕上げられ，下半には横方向の回転篦ケズリ痕を明瞭に残す。内面は凹凸がみられ，回転を利用した横ナデ調整が施されている。外底部は不調整で，ほとんど平滑な面をなすが，灰塵等付着物がみられざらついている。胎土中には長石・石英粗砂を含むが，焼成は極めて良好で，内外面共に淡灰色を呈する。時期は，2・5などよりは若干後出的な趣が強い。

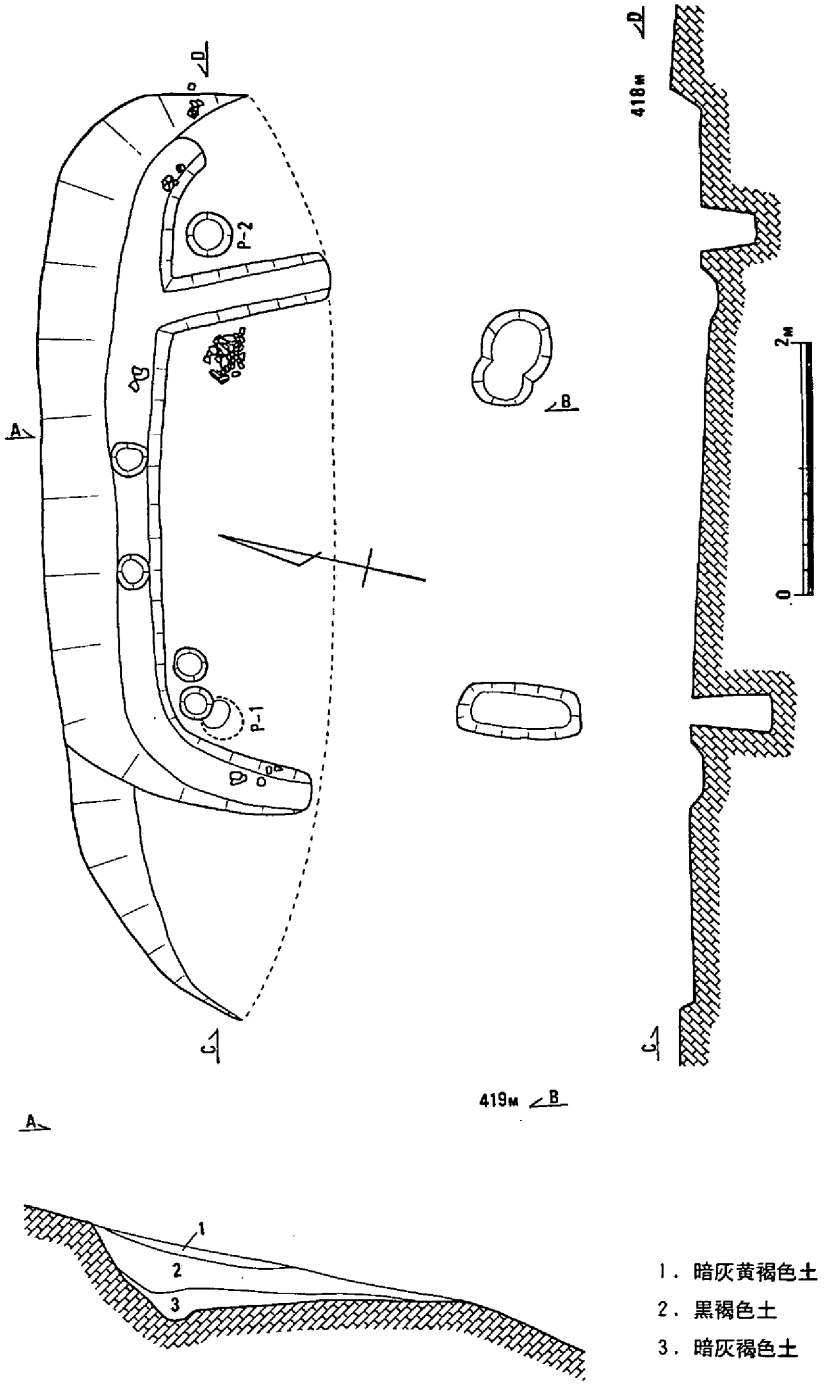
第28図—2は土師器甕で，底部の一部を欠くがほとんど完形に復元することが可能となった。口径19.9cm，器高19.2cmを測り，球形に近い体部から，丸底の底部を観察することができる。口縁部立ちあがりは，やや肥厚して段がつく頸部より緩かに外方し，端部は薄く突出する。口縁部より頸部にかけては横ナデ調整が施され，体部全面には，粗雑な横・斜方向の篦ミガキ状の調整が施されている。内面は全面，恣意的なナデ調整を施しているが，口縁部は外面同様横ナデ調整で仕上げられている。胎土中には微砂を多く含むが，焼成は比較的良好である。内外面共に，明るい茶褐色～赤褐色を呈する。時期的には，7世紀代に比定することができる。



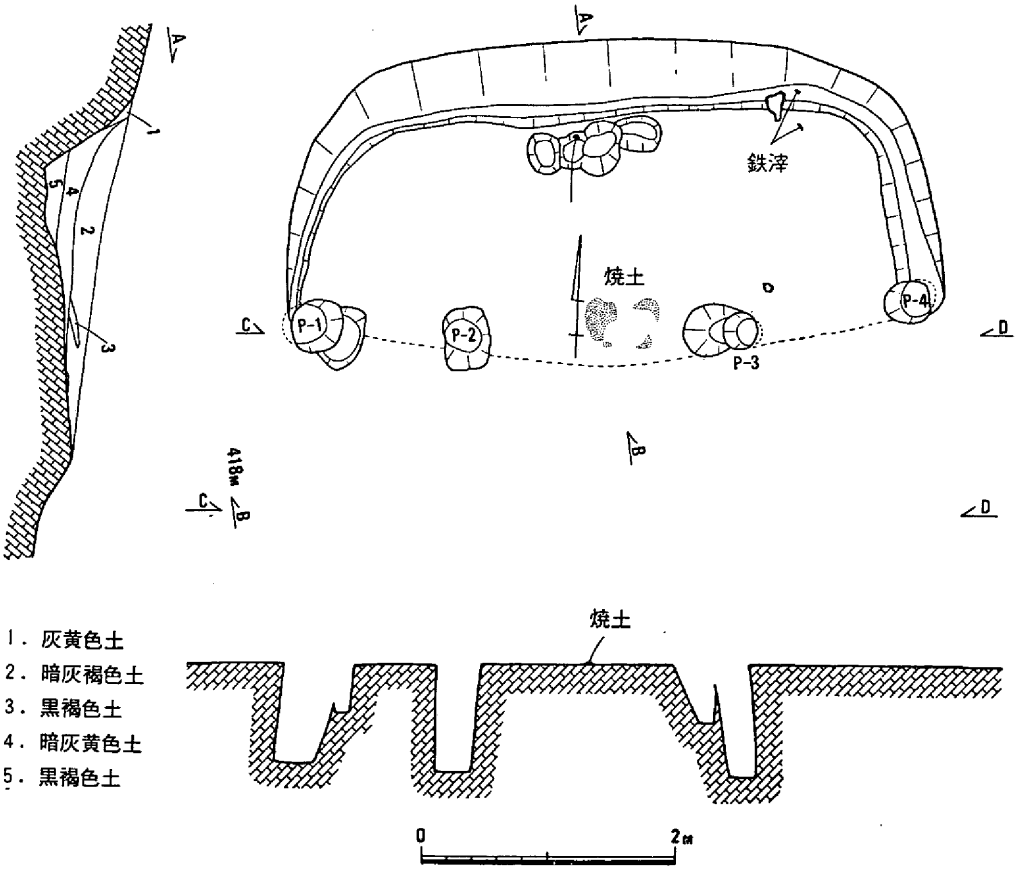
第35図　18号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



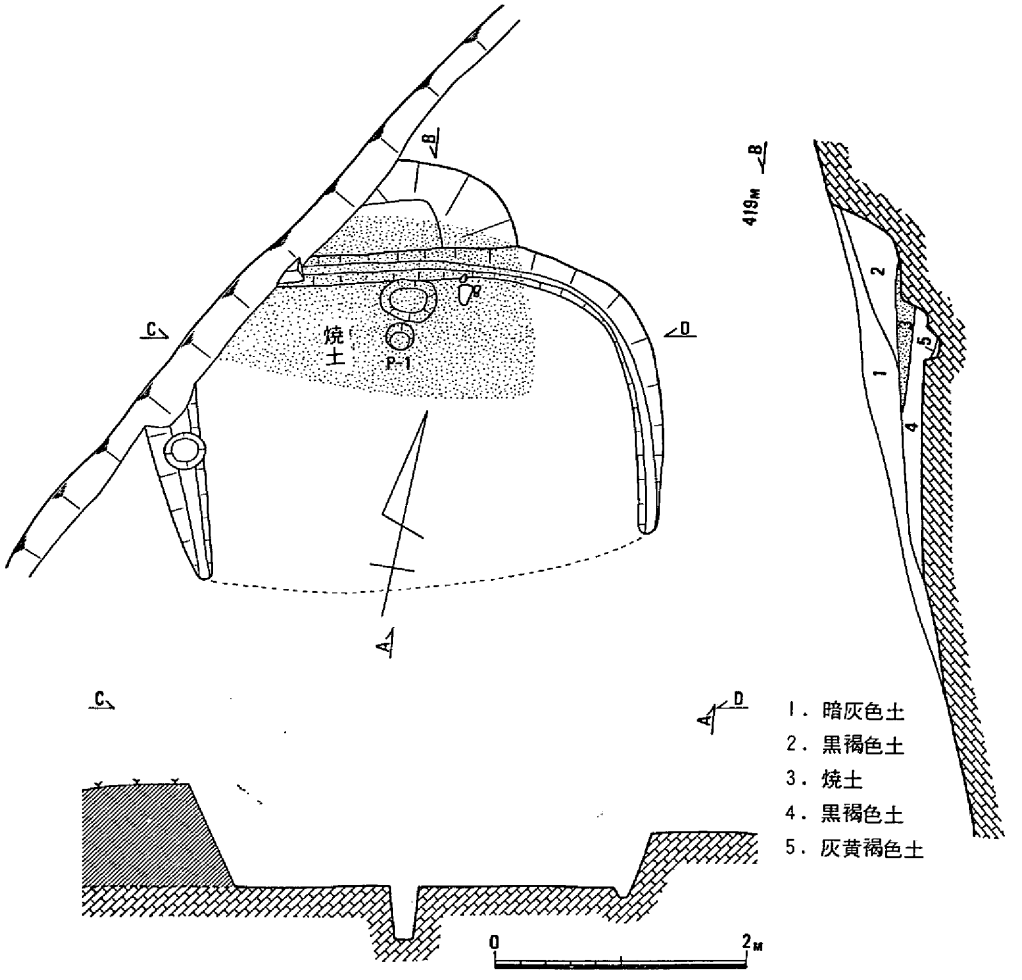
第36図　19・20号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



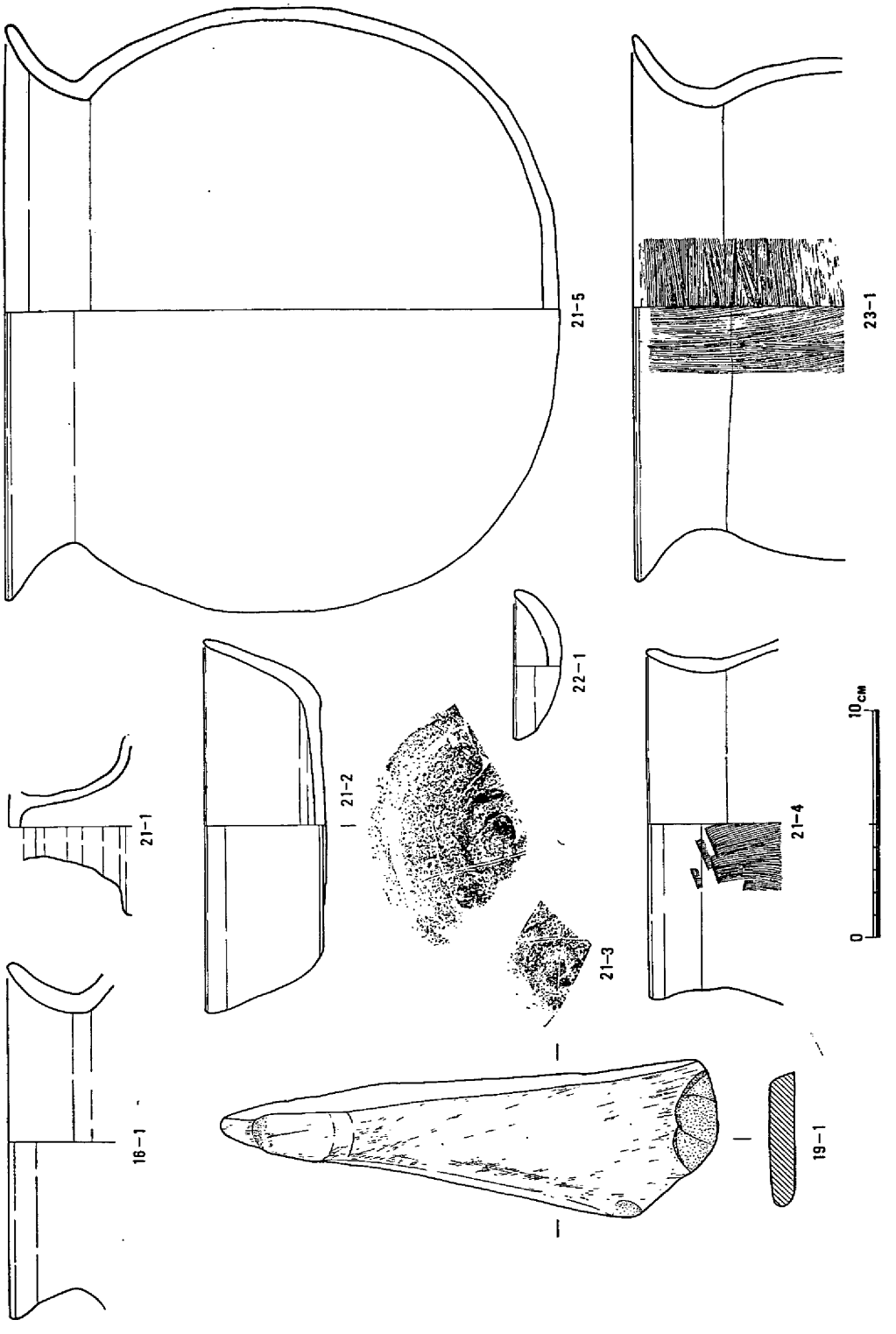
第37図　21号住居址実測図（$\frac{1}{60}$）



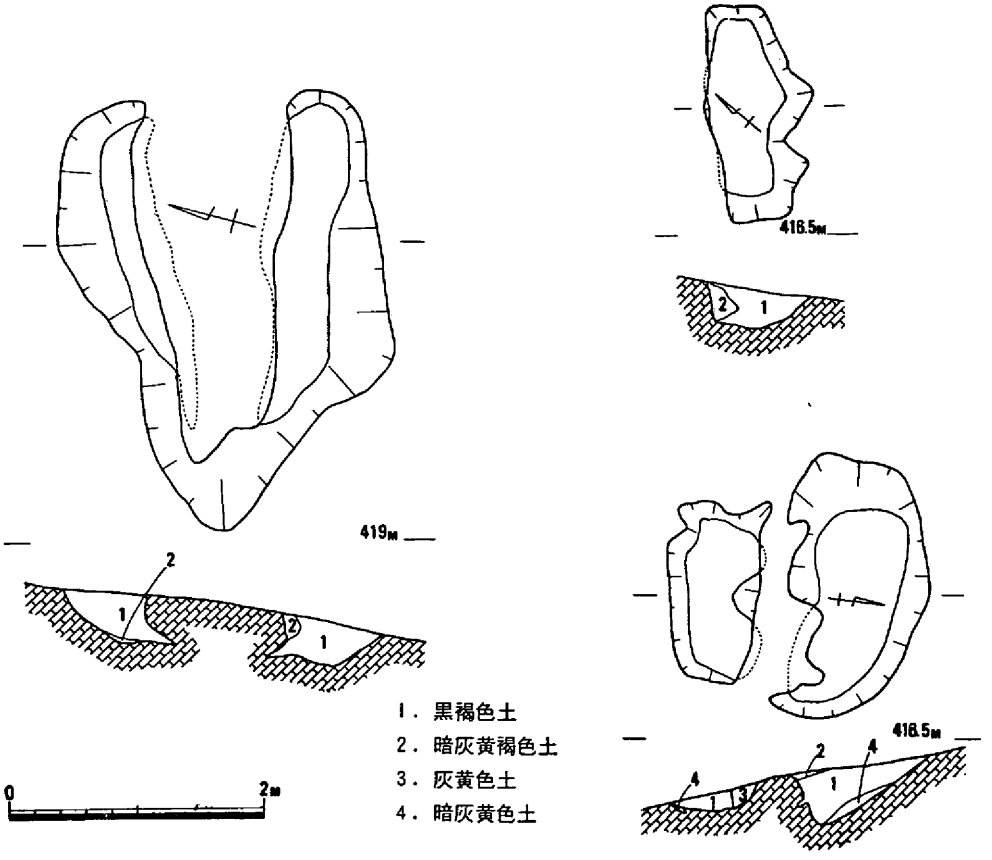
第38図　22号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



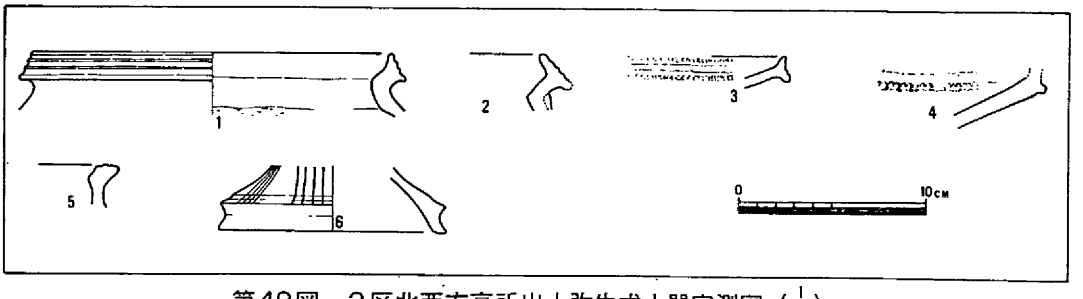
第39図　23号住居址実測図 ($\frac{1}{60}$)



第40図 16・19・21・23号住居址出土遺物実測図 ($\frac{1}{3}$)



第41図　不整形土壙実測図 ($\frac{1}{60}$)



第42図　3区北西方高所出土弥生式土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

第4章 4区の調査

第1節 検出遺構の概要

横田遺跡南端のほぼ西から東へと傾斜する一支脈の痩尾根を4区と呼称する。当区において墳墓の存在が予測されたのは，表面観察時2か所の石材散乱部の存在と，弥生式土器及び土師器破片の採集がなされたこと，そして後述する古墳（1号墳）を予想させる低平な高まりの存在と相俟って，3区丘陵～谷部～4区丘陵に亘って延々と設定したトレンチにおける土師器及び溝状遺構(後述の溝Ⅴ)の検出が，その存在を決定的なものとした。

また，当区用地外東方低位にも，数基の低平な盛土を有する古墳の存在が既に確認されており，用地内にも古墳が存在するであろうことは当然予想されていたことであった。

調査は既述の溝周辺より開始し，順次東西に拡張して行くという方法をとった。しかし，当丘陵のベースは第三紀層でそれに掘り込んだ土壙墓のプランの検出は，土壙墓埋土が地山風化土によって充塡されていたため困難を極めた。このようにして，29基の土壙墓と5本の溝状遺構及び土器溜り2か所を検出した。又，当区西方には，低平な高まりを有つ部分が看取され，且つ表土には石材の散乱が認められたので，十字に土層観察用畦を残して掘り下げた。その結果，略々東北一南西に主軸を有つ木棺土壙墓及び木棺脇に納置された直刀一振を検出した。これが後述する1号墳である。当墳は，丘陵のより高い部分，つまり主体部より西側に半円形を呈す幅約1.5mの周溝を有している。この周溝及び主体部を基準としてその墳丘規模を算出すると径約12m内外を計る円墳である。1号墳の西方にその周溝のみが確認されたのが2号墳である。当初はその存在に気づかなかったが，尾根頂を縦走する小径を清掃している段階でその存在が明白となった。1号墳と同様の調査方法で表土層より漸次掘り下げて行ったにも拘らず，主体部の検出がなされないまま地山面に到達した。後世に削平されてしまったものと思われる。当墳の周溝は，幅1.1mを測り，半円形を呈している。周溝を基にその墳丘規模を算出すると，大略10m内外の円墳であったと思われる。

以上が当区の概要である。当4区の調査は，先述のトレンチによる調査を除けば実質上8月より実施しており，10月27日の調査終了までの約2ケ月間を貫して実施されたものである。この期間内に実施された調査範囲は，東西約80m，南北は広い所で約20m，狭い所で約10mを測り，この範囲に，古墳2基，土壙墓29基，溝状遺構5本，土器溜り2ケ所，不明土壙1を検出した。しかし，その分布はより南に拡大するものと思われるが，10月27日を以って打ち切らざるを得なかったのは誠に遺憾であった。

以下節を追って各遺構の説明を行なう。

第2節　土壙墓と溝状遺構の調査（第45～66図）

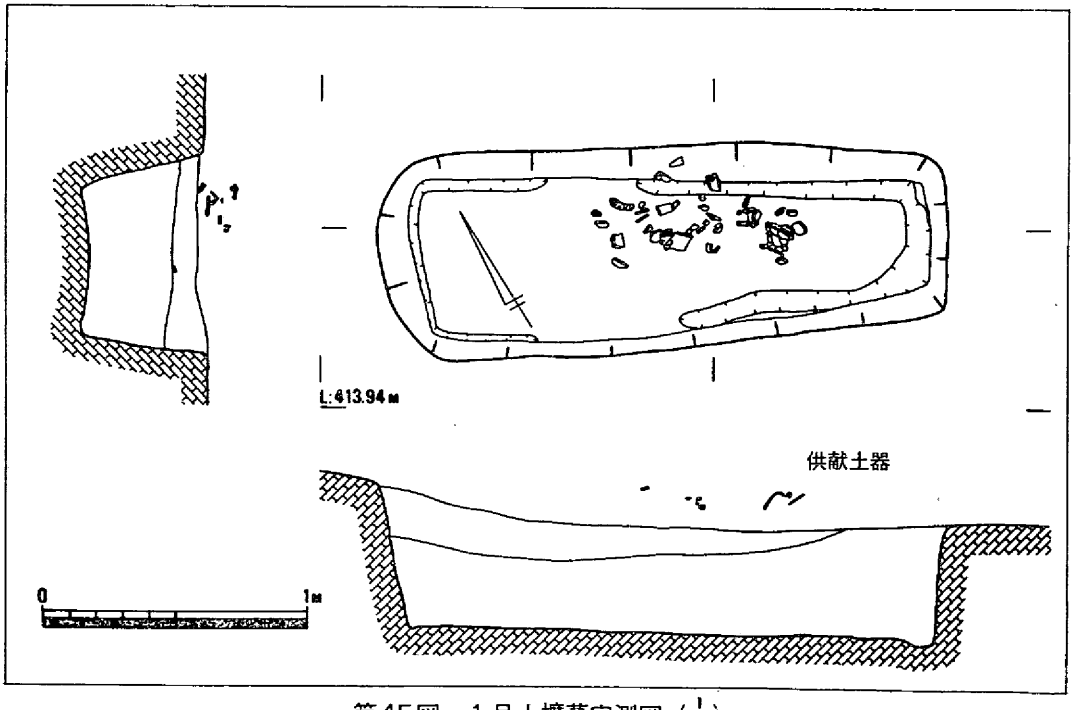
4区丘陵上に於て，29基の土壙墓と5本の溝状遺構が検出・調査された。

以上，各遺構の概略とその法量を示す（付表）。

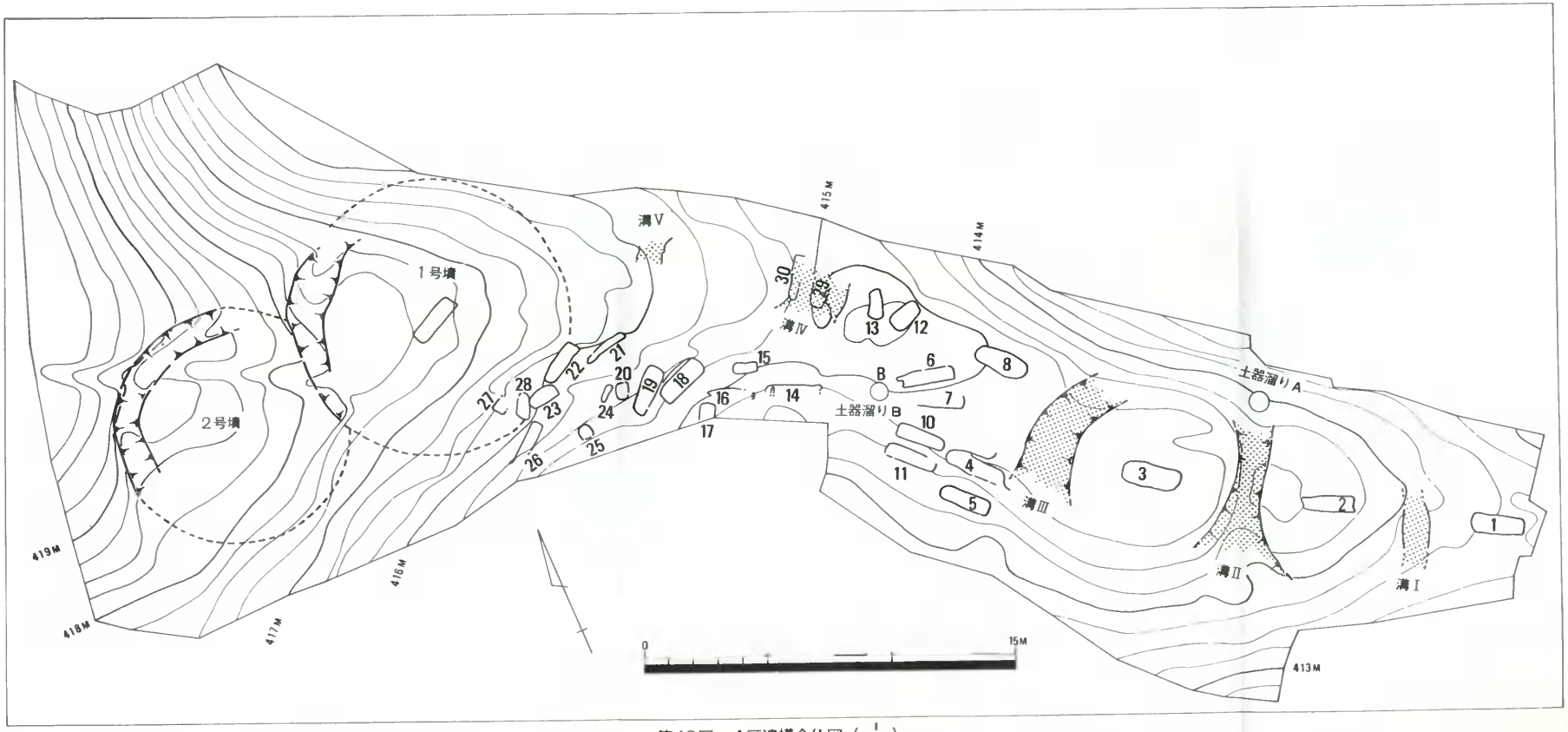
（1） 土 壙 墓

1号土壙墓（第44・45図，図版28）

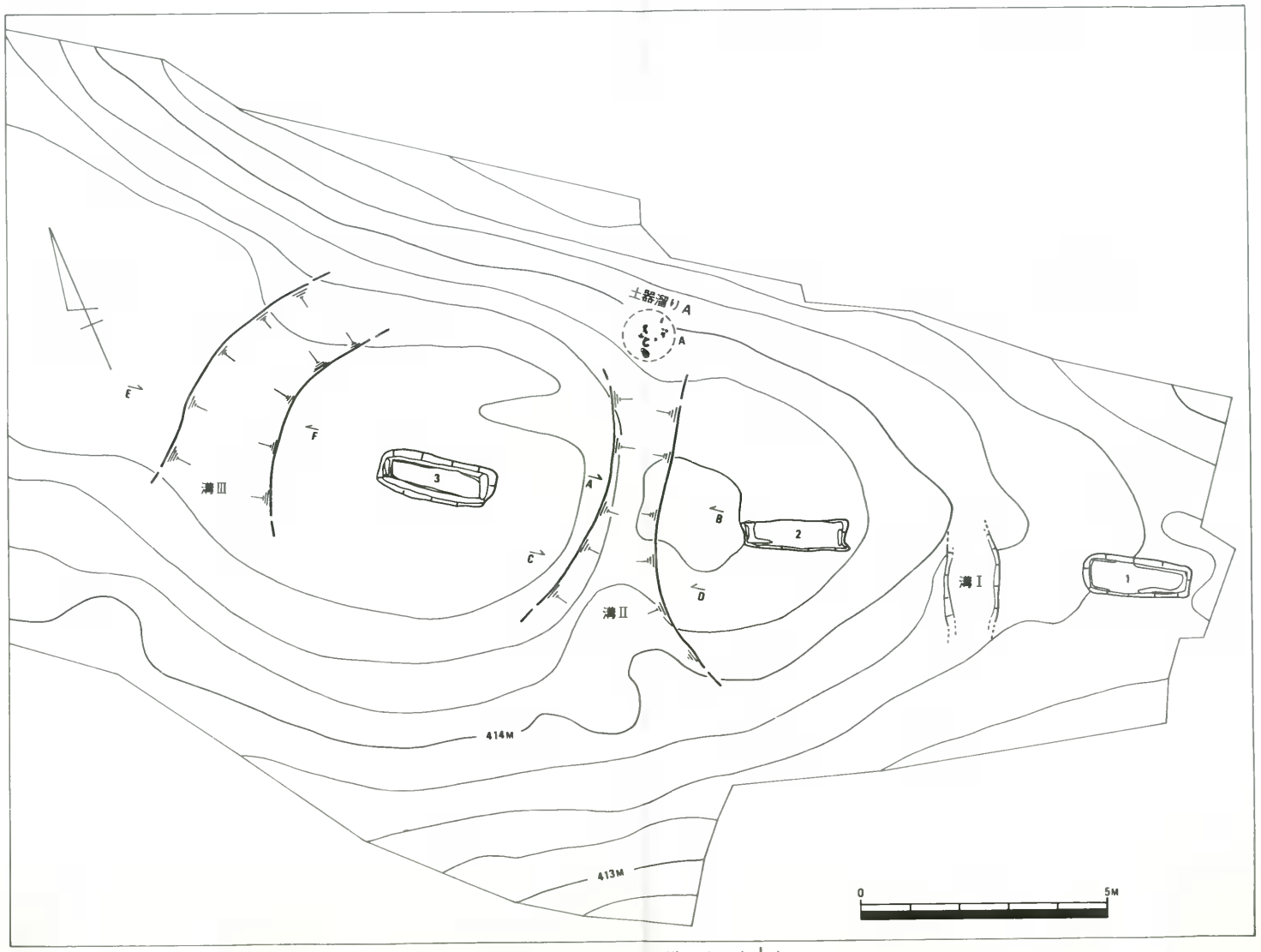
1号土壙墓は丘陵東限に位置し，主軸はN－59°－Wである。稜線上にあり主軸もほぼ平行している。掘り方は隅丸を呈す長方形で，四壁はほぼ垂直に立ち上がり且つ深い。床面の四周には小口溝，側板溝を穿っているが極浅のものである。また，床面はほぼ水平に保たれており西小口部が若干広くなっている。木棺の規模は，長さ191cm，巾は55～36cmである。当土壙墓の存在は弥生式土器の出土によって知られた。供献土器は破砕されたような状況で，掘り方上縁よりも高位で出土し始め，厚い所で約20cm程あった。又，供献土器の保存状態は極めて不良で器表の観察が困難な程であり，或る期間風雨にさらされていたものと思われる。そのためか，器形を完全に復するものはない。若しくは当初より破砕したものを供献したのかとも考えられる。出土土器より当土壙墓は弥生時代後期前半の所産と思われる。



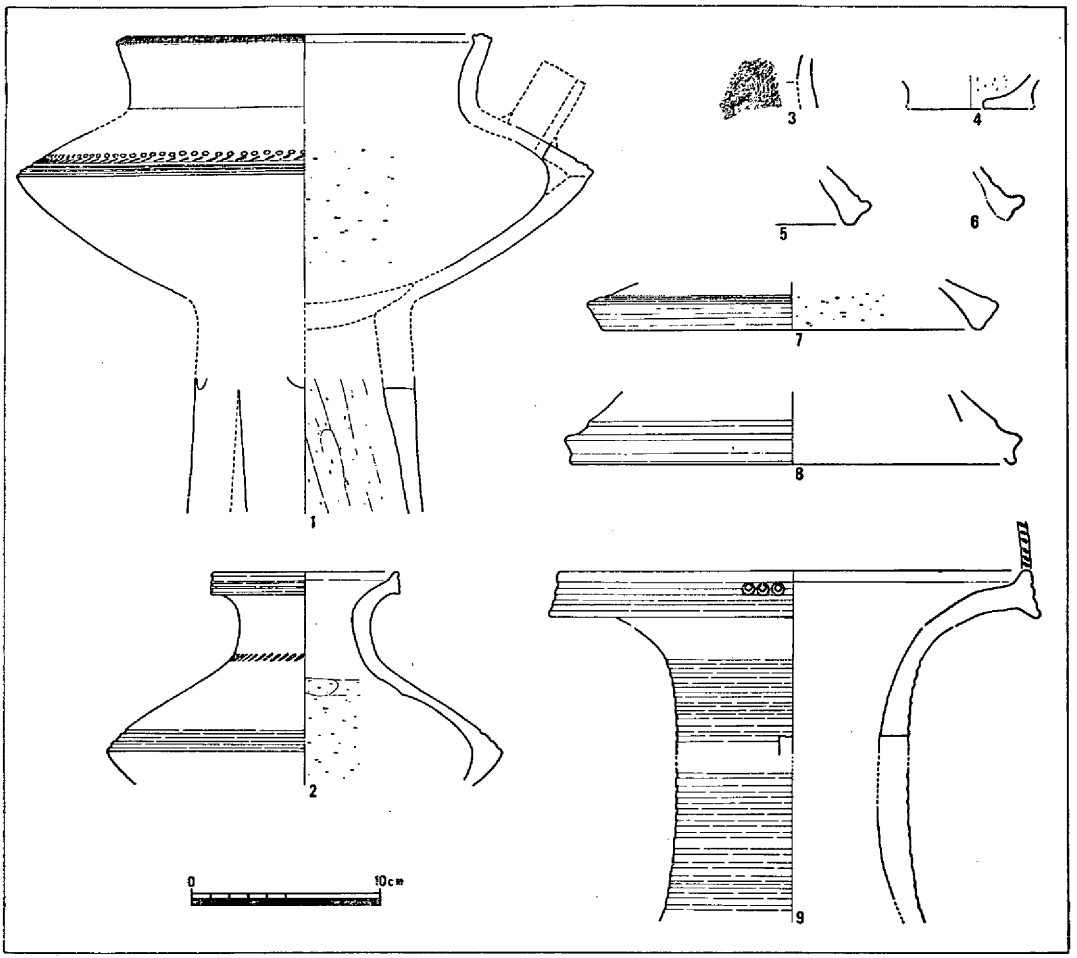
第45図　1号土壙墓実測図（$\frac{1}{30}$）



第43図　4区遺構全体図（$\frac{1}{200}$）



第44図　4区南西地区遺構配置図（$\frac{1}{100}$）



第46図　4区1号土壙墓出土遺物（$\frac{1}{4}$）

〈遺物〉（第46図）

1は脚台のつく丹塗りの壷形土器である。口縁部は外反ぎみに立上り，その上端部に退化した凹線と，外端部には刻目を施している。胴部はソロバン玉状と呈し，注口がつく。肩部には円形刺突文，列点文，沈線文をめぐらす。脚台は柱状部しか残存せず，脚端の形状は不明である。柱状部には円形と長三角形の透孔が認められる。内面は縦方向の篦削りで仕上げられる。

2も脚台がつくと考えられる壷形土器である。胴部はソロバン玉状を呈し，肩部には沈線，頸部に接する所に列点文をめぐらす。胴部内面は篦削りで仕上げられる。

3は(1)や(2)の破片である可能性もあるが，細片のため判断できない。丹塗りの土器で，形状不明の線刻が施されている。

4は底部に穿孔が認められるもので，内面は縦方向の篦削りで仕上げられている。

5～8は脚台である。高杯の杯部が全く認められないことから，(1)や(2)の脚端部の可能性も考えられる。

付表 土壙墓計測表 (単位：cm)

No	主軸	掘り方 長	掘り方 巾	深さ	床面 長	床面 巾	等高線に対して	稜線に対して	備考
1	N- 59°-W	218	79	41	187	44	直	平	小口溝，側板溝あり，弥生中期末～後期の供献土器あり
2	N- 65°-W	198	62	22	165	57	直	平	小口溝，西小口南側辺をより長く穿つ
3	N- 53°-W	233	92	44	177	44	直	平	小口溝，側板溝あり
4	N-40.5°-W	230	68	33	214	59	平	平	
5	N- 48°-W	203	63	30	191	49	平	平	
6	N- 78°-W	223	56	37	163	46	平	斜	2と相似る小口溝，側板溝あり，西小口北側辺をより長く穿つ②
7	N- 54°-W			26			平	斜	
8	N- 45°-W	219	90	50	165	40	直	平	2段掘り，木蓋か？土器片有
9									欠番
10	N- 45°-W	199	58	40	183	42	平	平	
11	N- 44°-W	211	56	26	191	44	平	平	
12	N- 69°-E	128	73	68	103	48	直	平	土壙墓であるのか不明
13	N- 27°-E	115	57	19	80	39	直	直	土壙墓であるのか不明
14	N- 71°-W	207			166		平	平	2と相似る小口溝(皿)あり，東小口北側辺をより長く穿つ弥生式土器有？②
15	N- 74°-W	97	41	8	78	26	斜	平	小口溝，側板溝あり弥生式土器有②
16	N- 68°-W				149		斜	斜	小口溝あり，西小口北側辺をより長く穿つ②
17	?		62	14		50	斜	直	
18	N-68.5°-E	207	96	37	200	69	平	斜	割竹形木棺≒156×35cm
19	N- 47°-E	205	67	70	196	58	斜	斜	
20	N-12.5°-E	70	50	43	63	25	斜	直	2段掘り
21	N- 73°-E	176	33	45	166	31	斜	斜	
22	N- 60°-E	184	56	45	170	51	斜	斜	
23	N- 78°-E	107	56	32	96	51	斜	斜	
24	N-43.5°-E	76	24	18	71	21	斜	斜	
25	N-8.5°-W	?	103	10	?	47	直	斜	
26	N- 50°-W	?	49	24	?	35	平	斜	
27	N- 76°-W	?	51	32	?	41	平	斜	
28	N-70.5°-E	109	52	33	104	47	斜	直	
29	N- 44°-E	?	69	6	?	64	平	直	直上に石斧(4)溝によって切られている
30	N- 39°-E	?	33	14.5	?	29	平	直	

9は器台である。受部はラッパ状に開き，口縁端部は上下に拡張され，その端面に退化した凹線がめぐる。その上に3個一単位の二重円形刺突文が施される。また拡張された上端面には刻目がめぐる。筒の部分には浅い沈線が多数めぐり，長方形の透孔がある。

2号土壙墓 (第44・47図，図版29)

2号土壙墓は，1号土壙墓の西約7mの稜線上に位置し，溝1を挟んでいる。主軸はN—65°-Wである。掘り方は横長の糸巻形を呈す。つまり小口部両端をより長く掘り込んで小口板と共に側板傾伏防止の機能を果していたものと思われる。床面は東小口部が広く，約8cm程低くなっている。周壁は垂直に近く立ち上がっている。又，西小口部は，約5cm巾の傾斜した段を更に掘り凹めて小口溝を作っている。

3号土壙墓 (第44・47図，図版30)

3号土壙墓は，溝2を挟んで，2号土壙墓の西約7.5mの稜線上に営まれており，主軸はN—53°—Wである。掘り方は隅丸の長方形を呈し，四壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は四周に小口溝，側板溝を有しており，床面のレベルは東小口部は約6cm程低くなっている。2号土壙墓同様，西小口部には緩かな傾斜の段を作り出している。木棺の規模は長さ177cm，巾は広い所で47cm，狭い所で34cmを計る。土壙覆土中には一片の土器片すら含んでいなかったが，遺存状態良好な土壙墓である。

4号土壙墓 (第50図，図版33—1)

4号土壙は，溝3の西の丘陵南斜面に存在し，主軸はN—40.5°—Wである。掘り方は西小口部が隅丸の長方形を呈す。床面はほぼ水平を保っており四壁は緩かに立上がる。東小口部が若干幅広くなっている。

5号土壙墓 (第50図，図版33—1)

5号土壙墓は，4号土壙墓の南に営まれている。主軸はN—48°—Wで稜線とほぼ平行している。掘り方は西小口部が若干隅丸の長方形を呈す。床面は，東小口部が約10cm程高くかつ小口部も幅広である。周壁は緩かに立ち上がる。

6号土壙墓 (第51図，図版32—1・33—2)

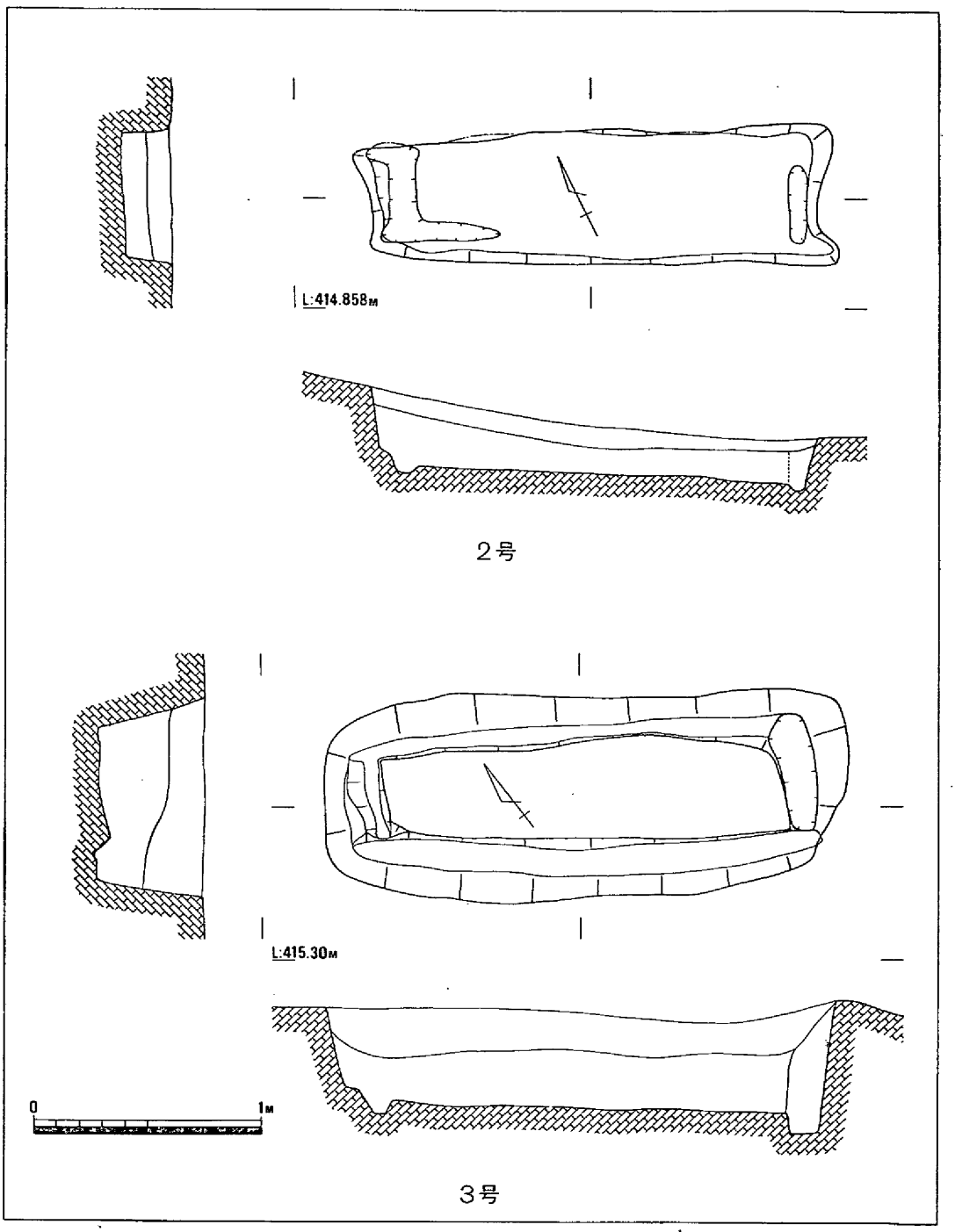
6号土壙墓は，3号土壙墓より溝3を挟んで，西約10mの稜線上に位置し，主軸はN—78°—Wである。掘り方はやや歪んでいる。床面は東小口部が高くなっており四周には小口溝，側板溝を廻らし，四壁はほぼ垂直に近く立ち上がる。北及び南側板溝は東小口部より各々約70cm，約140cmで消失しておりそれと対応するかのように西小口部は，北側縁で25cm，南側縁で10cmとより長く掘りんでいる。小口溝及び側板溝より算出される木棺の規模は，長さ163cm，巾約37cmである。

7号土壙墓 (第51図，図版32—1・33—2)

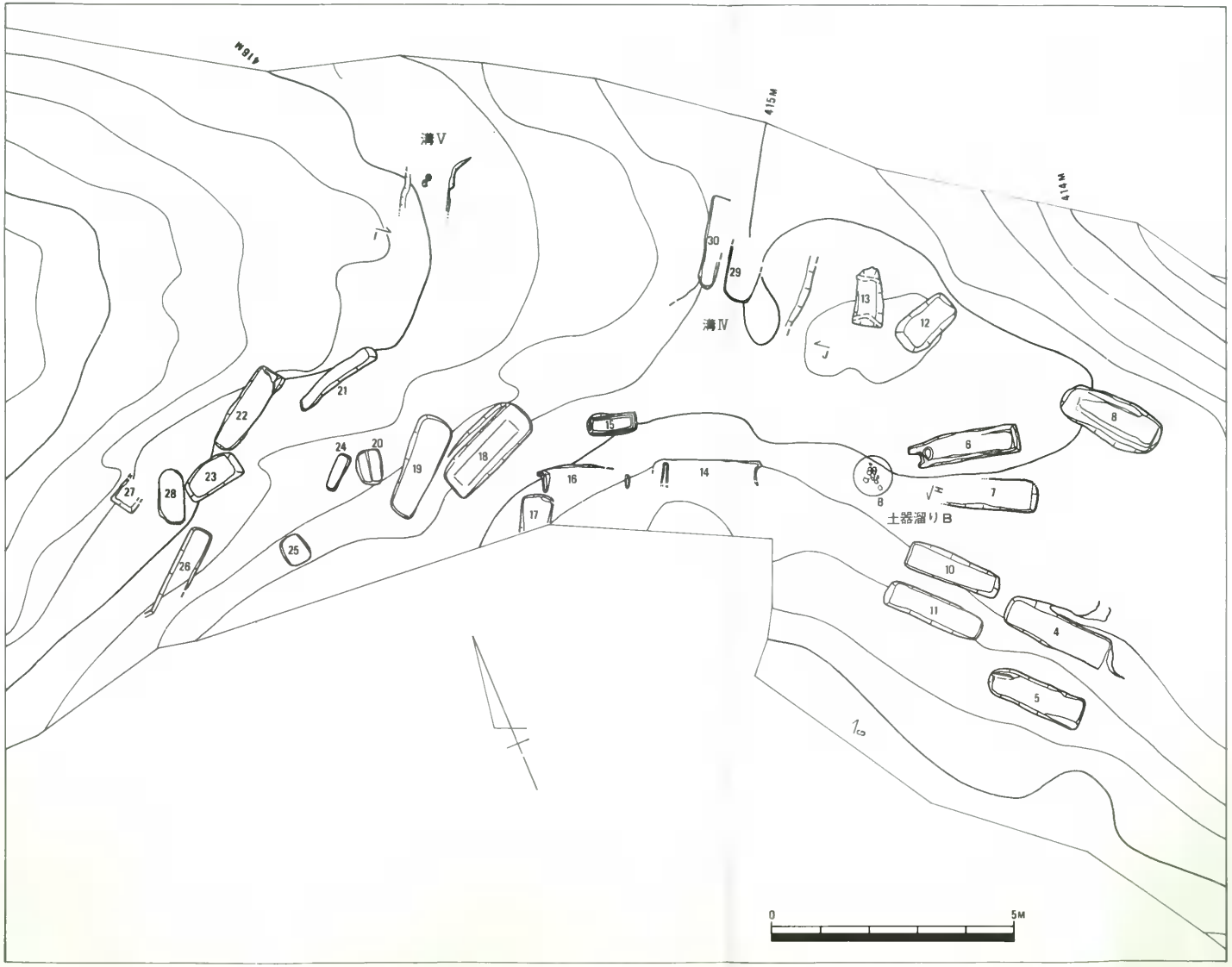
7号土壙墓は，6号土壙墓の南に存在し，主軸はN—54°—Wである。遺構の残りが悪く西・南壁をのみ確認した。

8号土壙墓 (第52図，図版32—2)

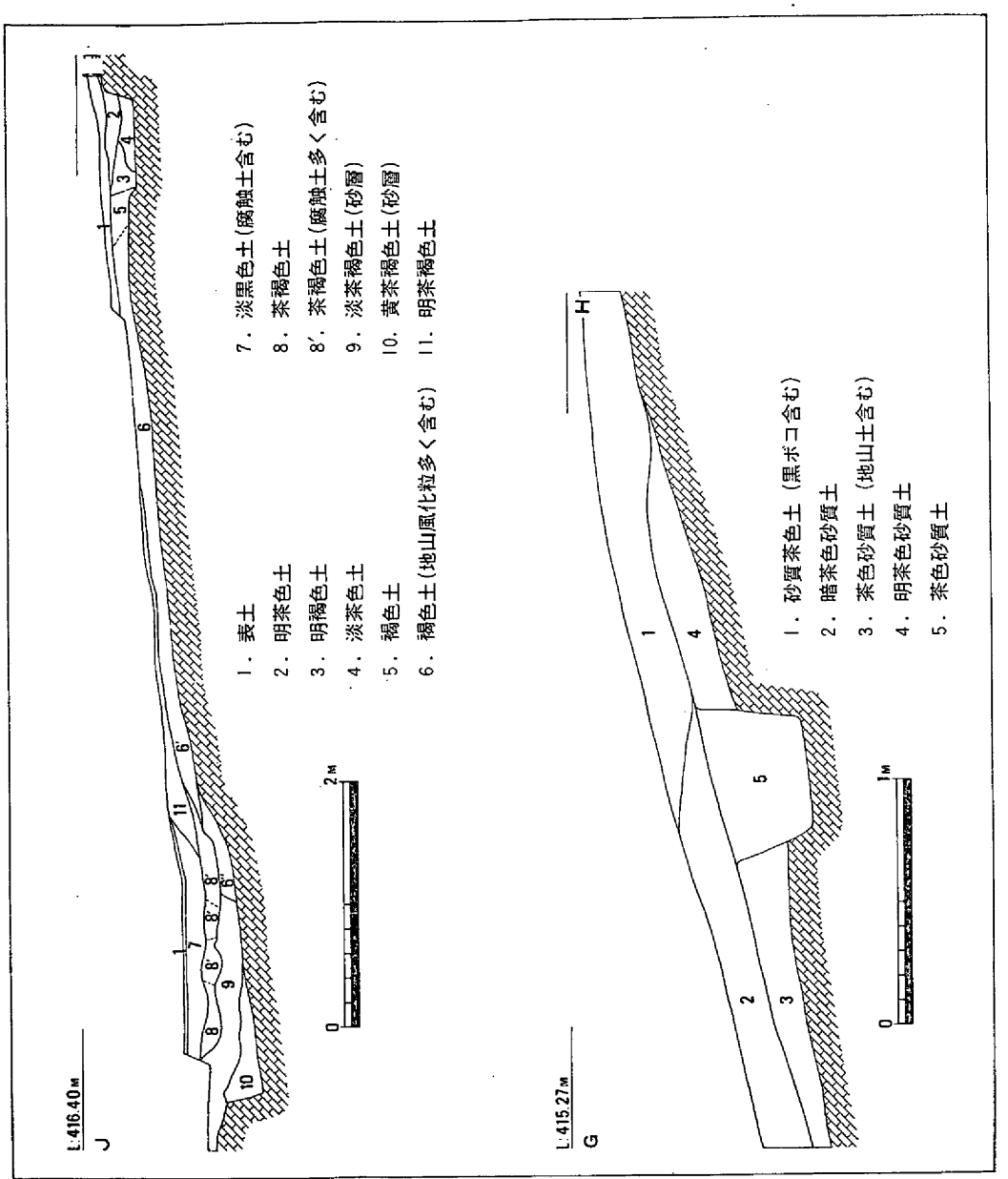
8号土壙墓は，稜線より北側の斜面に営まれている。主軸はN—45°—Wで，稜線にほぼ平行して



第47図　4区2・3号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)



第48図　4区丘陵中央部土壙墓配置図（$\frac{1}{100}$）



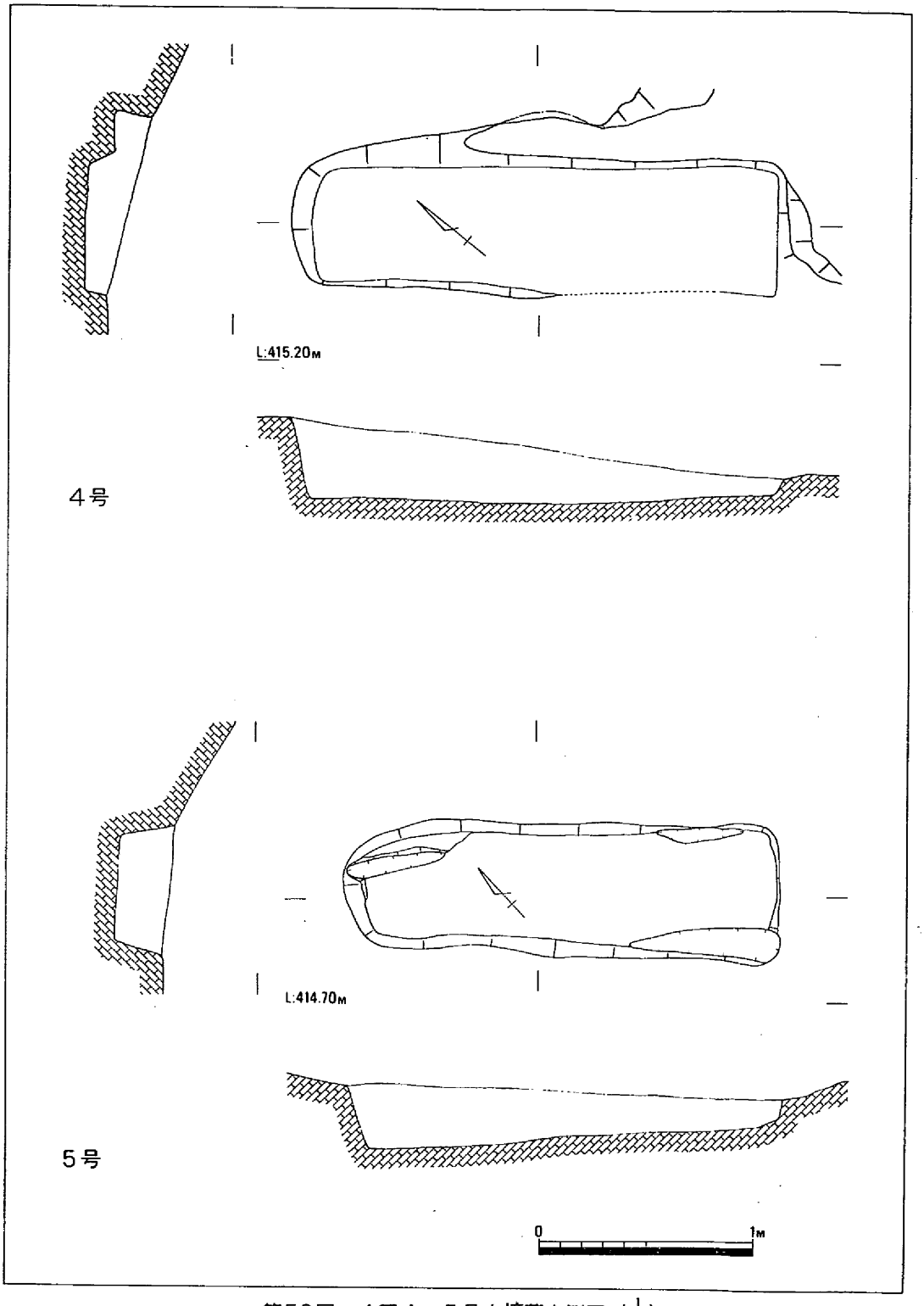
第49図　4区土層断面図（J－I，G－H）（$\frac{1}{30}$）

いる。掘り方は2段になっており，中段には巾約10cm～25cmの平坦面を残し更に掘り込んでいる。床面は東側が広く且つ約10cm程高くなっている。覆土中より時期不明の土器片を採集した。

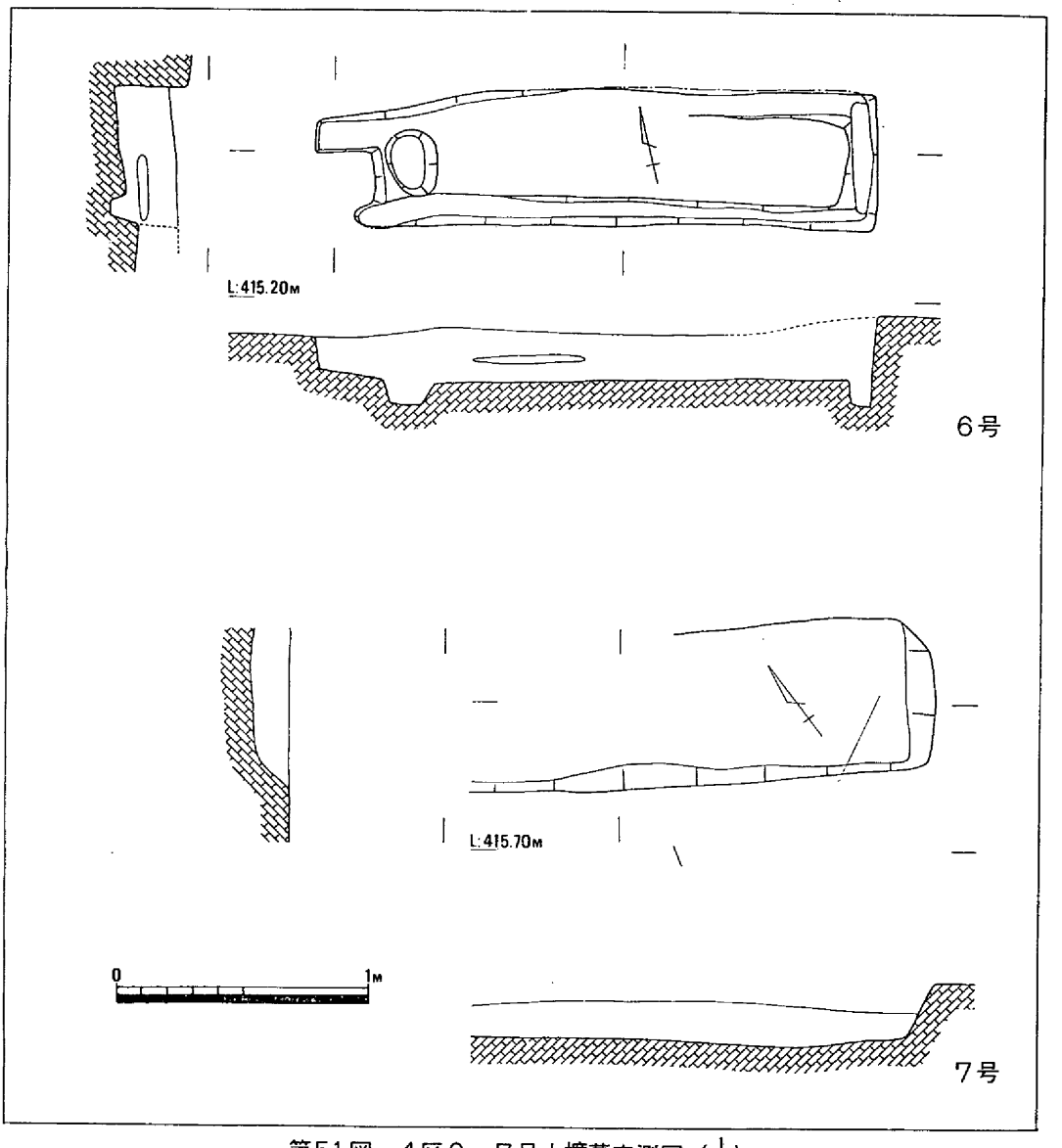
10号土壙墓　（第52図，図版33－1）

10号土壙墓は，4号土壙墓の西に営まれており主軸はN－45°－Wである。掘り方は，東小口部が隅丸を呈す長方形で，床面は西小口部が幅広になっている。周壁は緩かに立ち上がる。

11号土壙墓　（第53図，図版33－1）



第50図　4区4・5号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)



第51図　4区6・7号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)

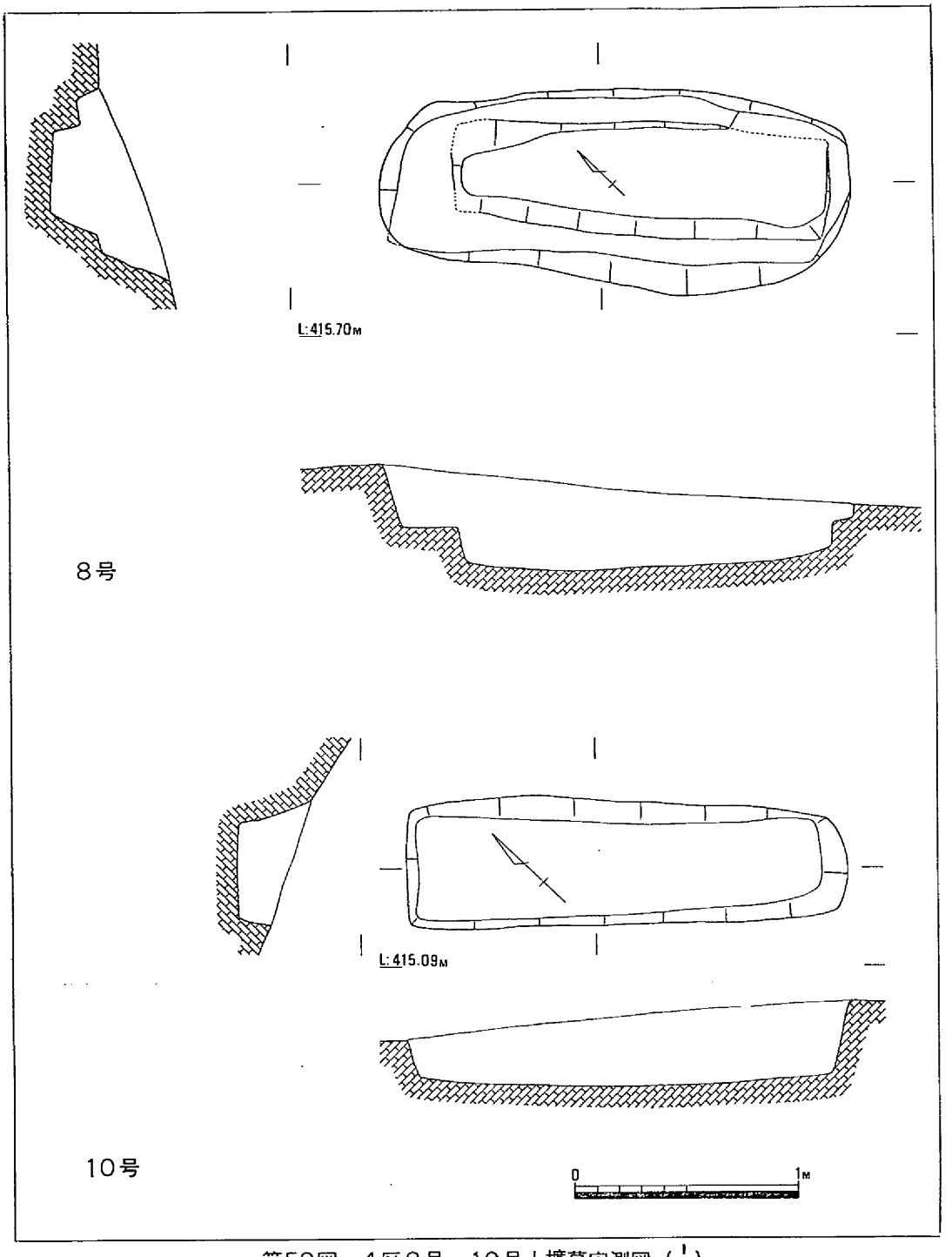
11号土壙墓は，10号土壙墓の南に位置し，主軸はN—44°—Wである。掘り方は，東小口部が若干隅丸の長方形を呈す。床面は水平に保たれており，周壁は緩く立ち上がっている。

12号土壙墓　(第53図，図版34—1)

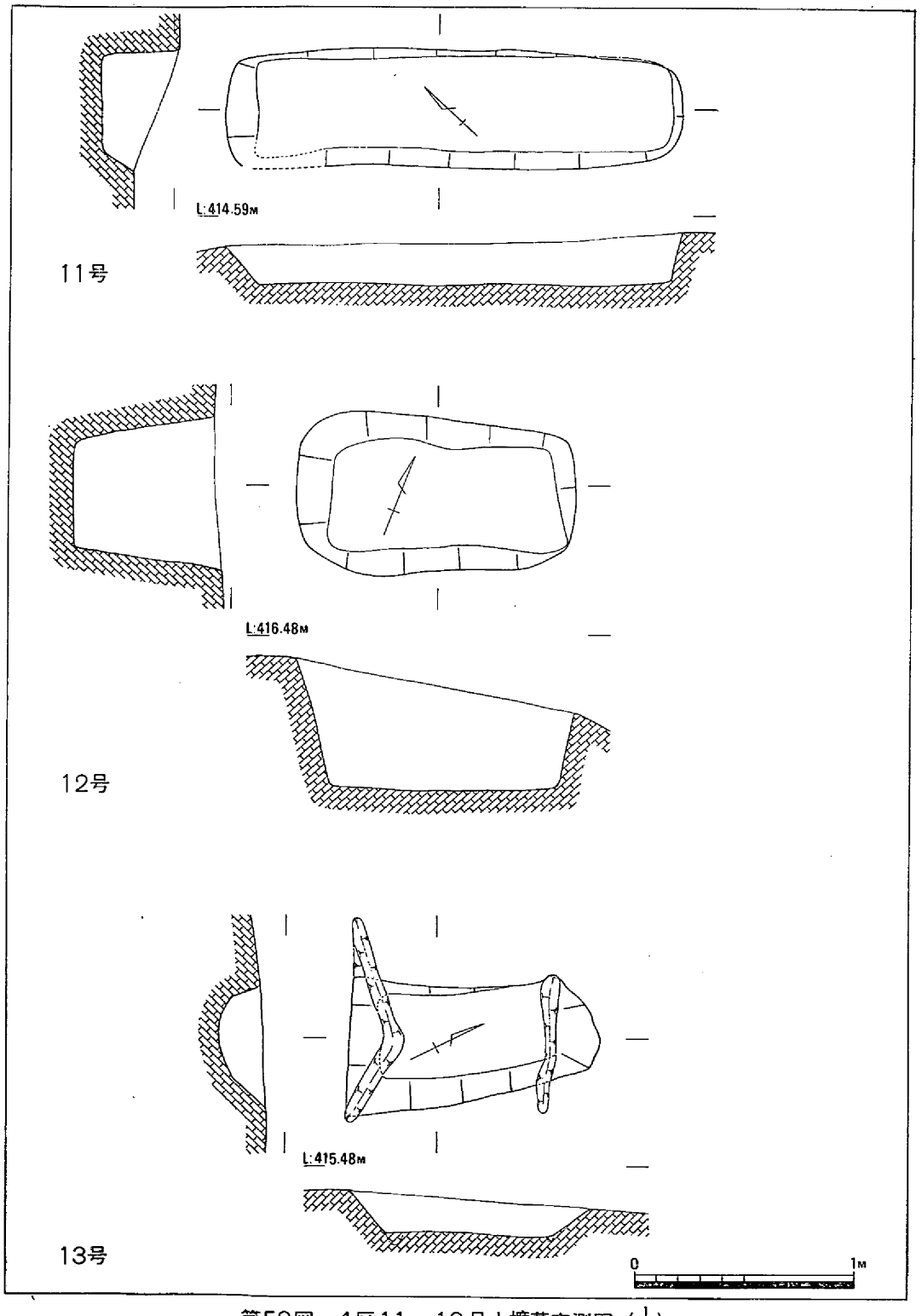
12号土壙墓は，北斜面に位置し，8号土壙墓より西約4.5mに存在する。主軸はN—69°—Eを計り稜線と直行する。掘り方は隅丸を呈す長方形である。床面はほぼ水平に保たれ周壁は垂直に近く立ち上がる。

13号土壙墓　(第53図，図版34—2)

13号土壙墓は，12号土壙墓の西に位置し，主軸はN—27°—Eを指し，稜線を直行する。掘り方



第52図　4区8号・10号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)



第53図　4区11～13号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)

は不整形で，周壁は緩く立ち上がる。床面は水平に近く保たれており，断面舟底状を呈する。

14号土壙墓 （第54図）

14号土壙墓は，丘陵南斜面に営まれており，10号土壙墓の西約5.5mに位置する。主軸はN—71°—Wである。 14号土壙墓，16号土壙墓の近傍は 撹乱を受けていたためその遺存状態は良好ではなかった。当土壙墓もその北半部を検出したにすぎない。掘り方は，西小口部隅丸の長方形を呈し，東小口部は糸巻き状に掘り込んでいる。西側には小口溝を有している。覆土中より弥生式土器が検出されたが，撹乱を受けていたため確実に伴うものかどうか不明である。

15号土壙墓 （第54図，図版35— 1 ）

15号土壙墓は，14号土壙墓の北約 2 mに位置し，主軸はN—74°—Wを計る。 遺存状態が悪くその床面近くのみを検出したにすぎない。 床面は四周に小口溝，側板溝を有し，ほぼ水平に保たれている。木棺の規模は，長さ約78cm，巾26cmを計る。又，覆土中より弥生式土器が採集された。

16号土壙墓 （第54図，図版35— 2 ）

16号土壙墓は，14号土壙墓の西にあり，主軸はN—68°—Wを測る。 稜線にほぼ平行するものである。撹乱，削平を受けていたためその北半部のみしか検出できなかった。床面は西小口部が約18cm程高くなっている。又，西小口部北側縁は一部糸巻き状に掘り込んでいる。

17号土壙墓 （第55図，図版36— 1 ）

17号土壙墓は，16号土壙墓の南にあり，主軸はN— —Eである。稜線にほぼ直行している。調査範囲南限に於いて，その一部が検出されたのみで全容を窮い得ないが，16号土壙墓同様，床面の比高がかなりある。又，掘り方は北小口部隅丸を呈す。

18号土壙墓 （第55図，図版36— 2 ）

18号土壙墓は，16号土壙墓の西約 2 mに位置する。主軸はN—68.5°—Eを測り， 稜線に斜行し，等高線に平行している。掘り方は隅丸の長方形を呈す。周壁は垂直に近く立ち上がる。床面は東小口部が約 5 cm程近くなっており，又，断面は舟底状を呈す。割竹形木棺が埋置されたものと推される。木棺規模は掘り方により算出すると，長さ約156cm， 巾約36cmを計る。

19号土壙墓 （第56図，図版36— 2 ）

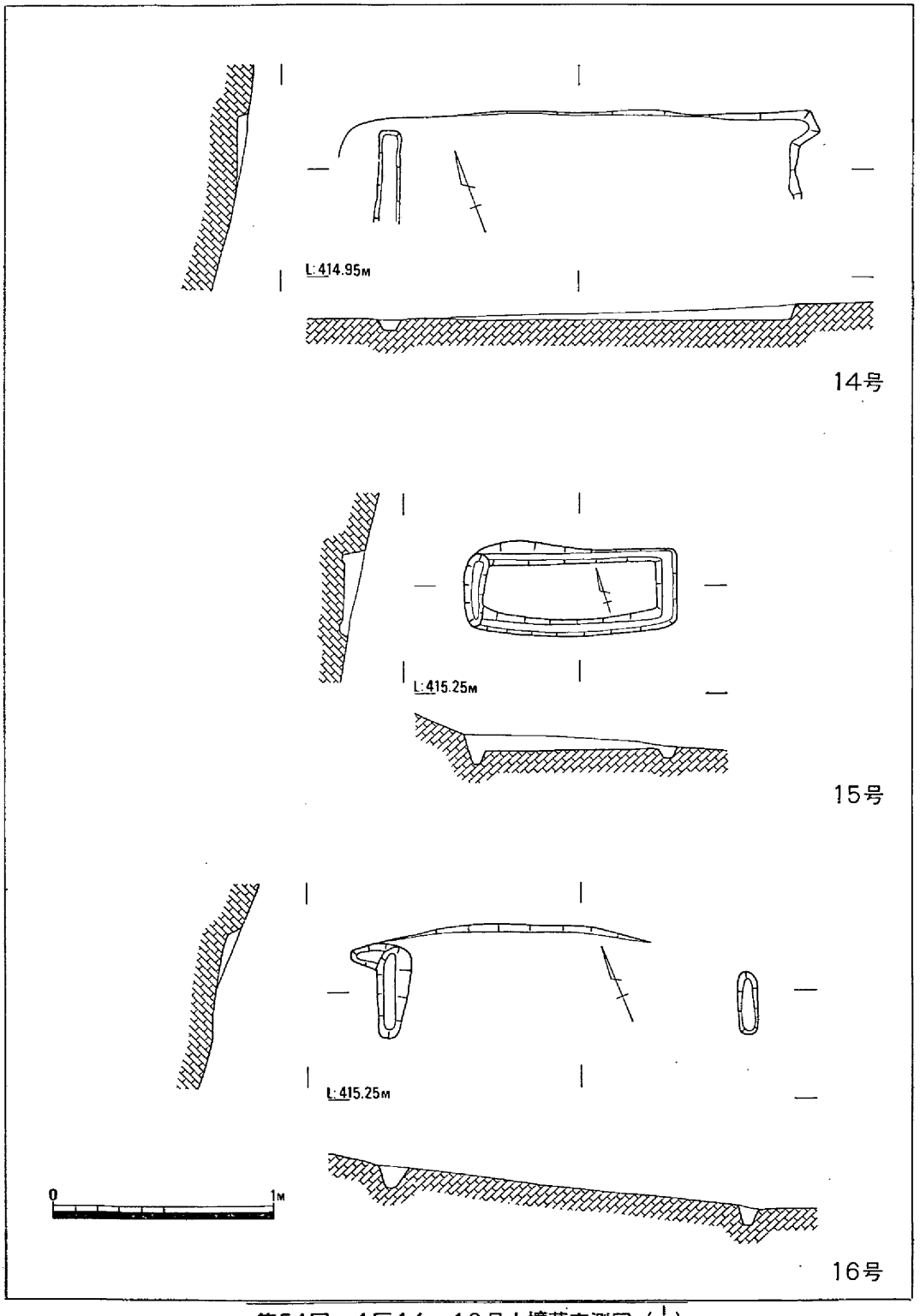
19 号土壙墓は， 18 号土壙墓の北にあり， 主軸はN—47°—Eを計る。 掘り方は隅丸の長方形を呈す。床面はほぼ水平に保たれており， 東小口部が幅広になっている。周壁は ほぼ垂直に近く立ちがる。

20号土壙墓 （第56図，図版36— 2 ・38— 2 ）

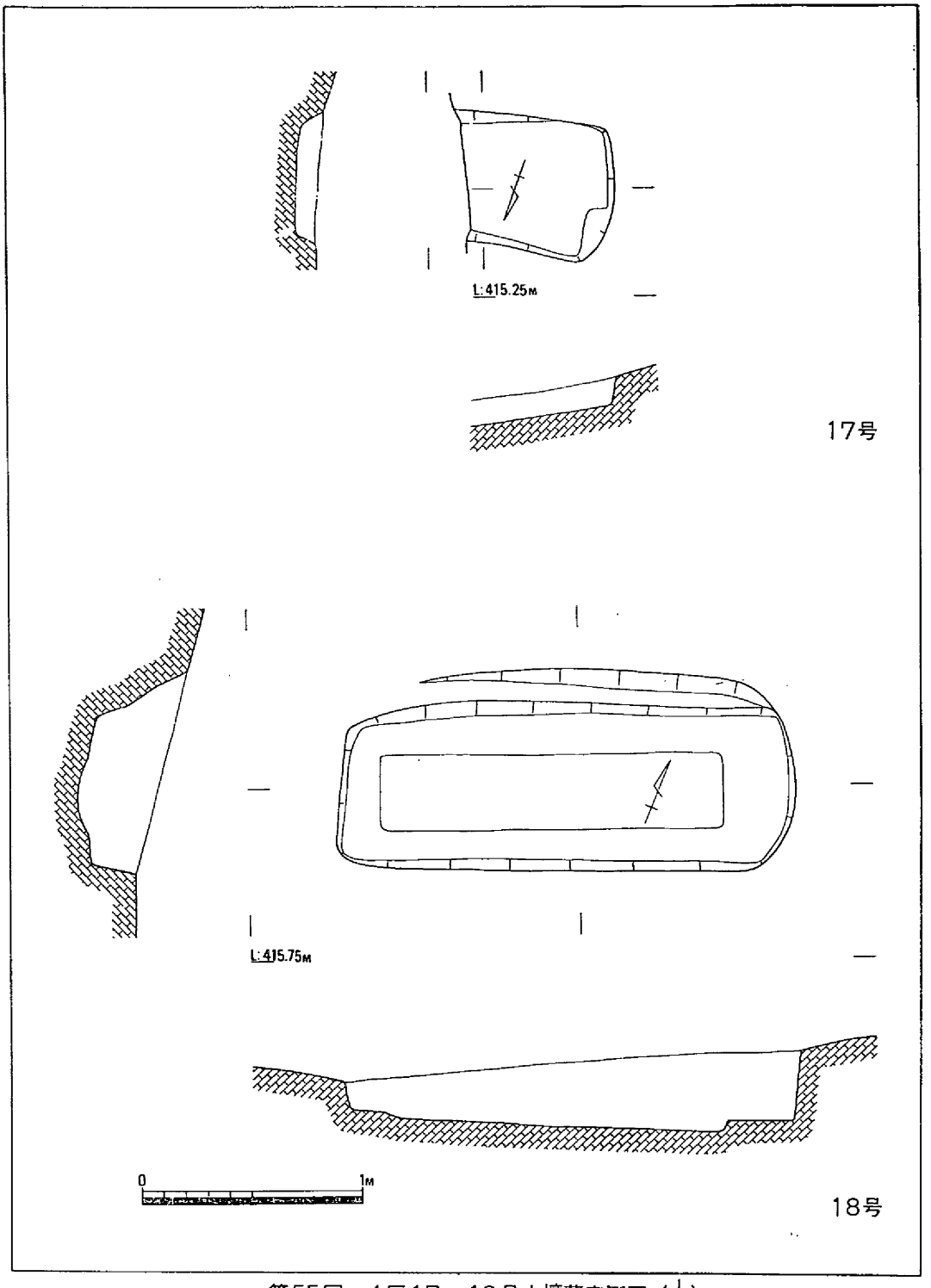
20号土壙墓は， 19号土壙墓の西に位置し， 主軸はN—12.5°—Eを計る。 掘り方は隅丸方形に近く 2 段掘りである。床面も掘り方同様隅丸の長方形を呈す。内法は63×25cmを測る。周壁は垂直に近く立ち上がっている。

21号土壙墓 （第56図，図版37— 1 ）

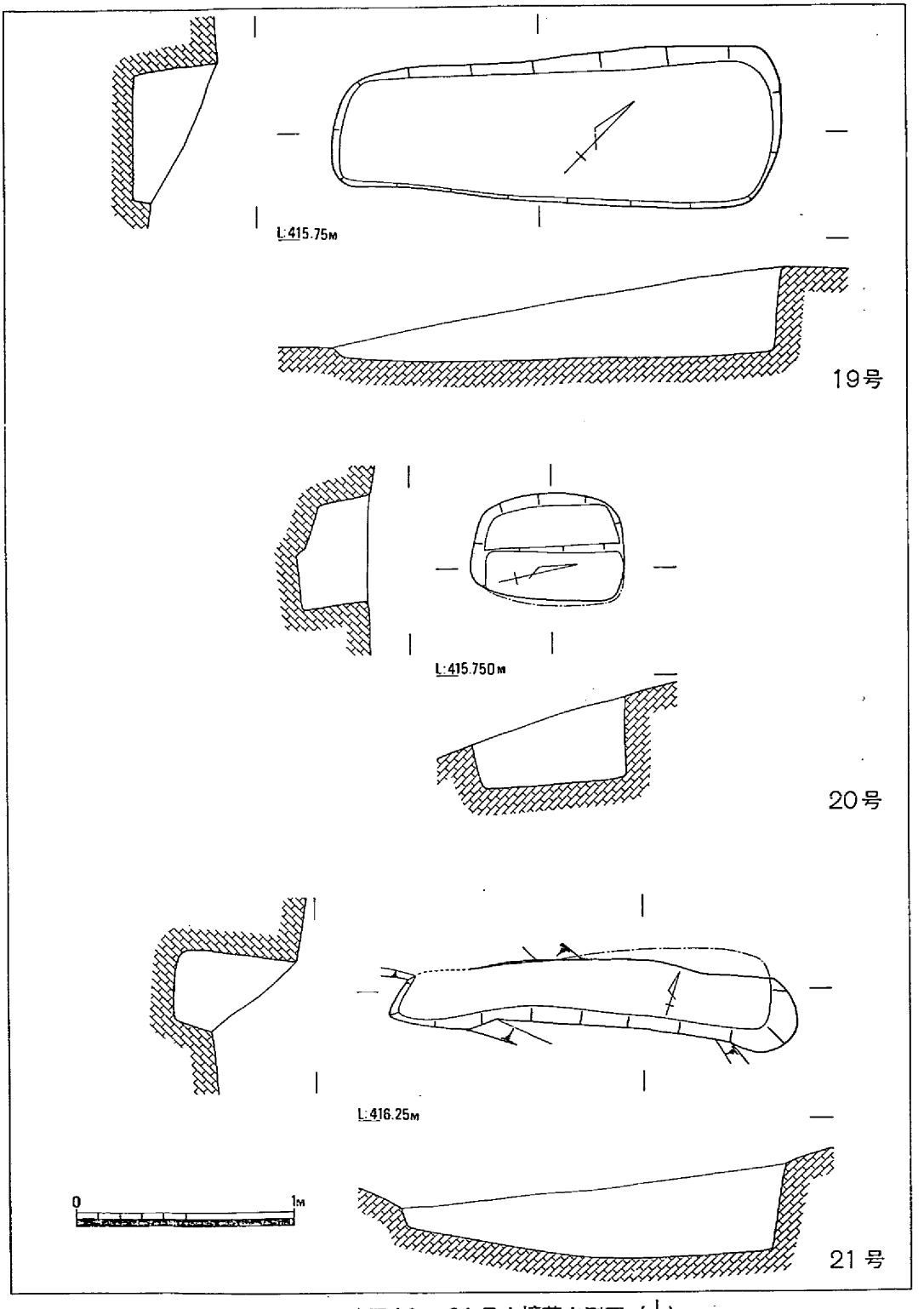
21号土壙墓は，20号土壙墓の北約 2 mに位置し，主軸はN—73°—Eである。 掘り方は不整形で隅丸の長方形を呈している。北壁は掘り込んである。床面は東小口部が若干低く，且つ幅も広く作られ



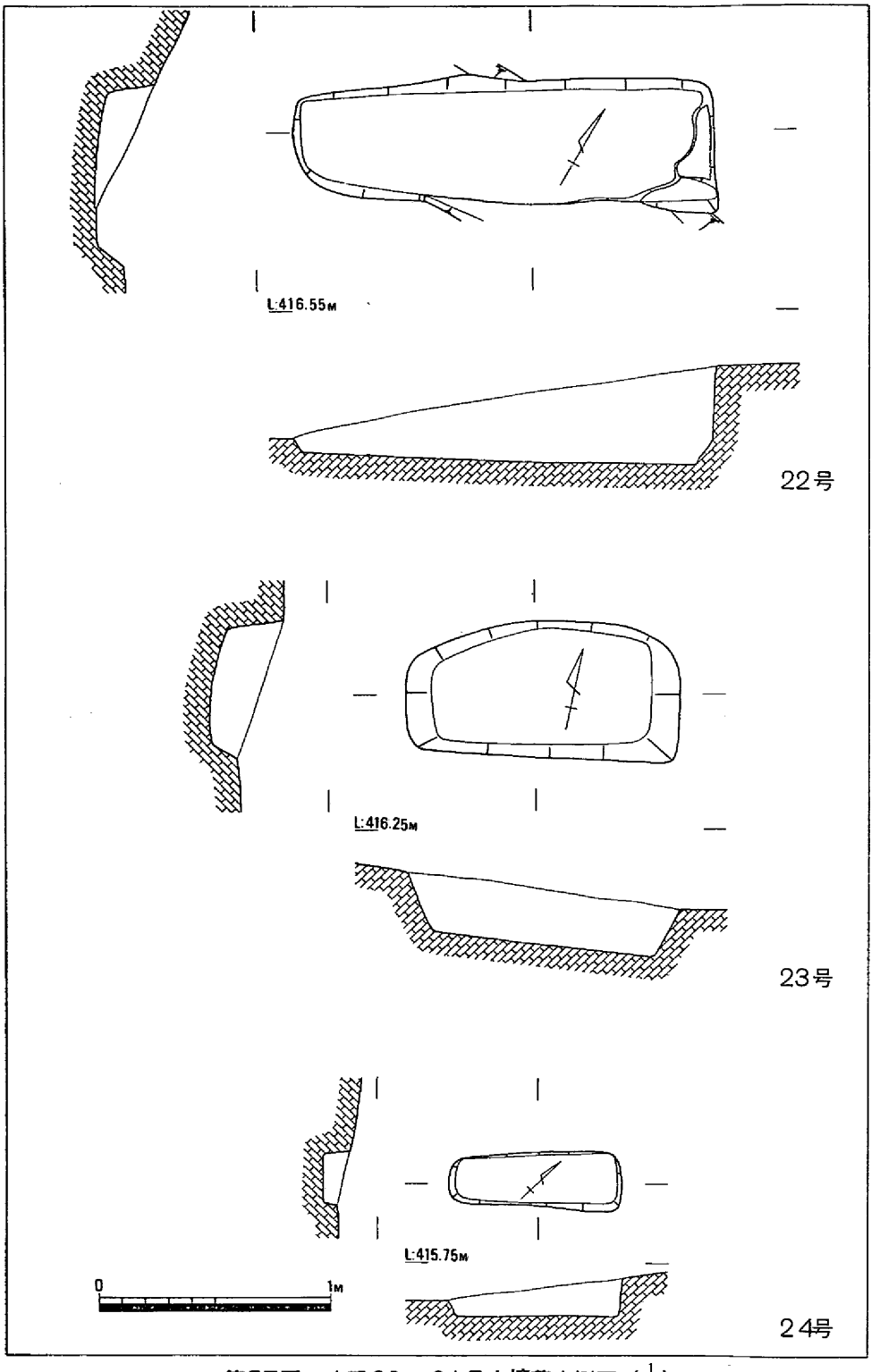
第54図　4区14～16号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)



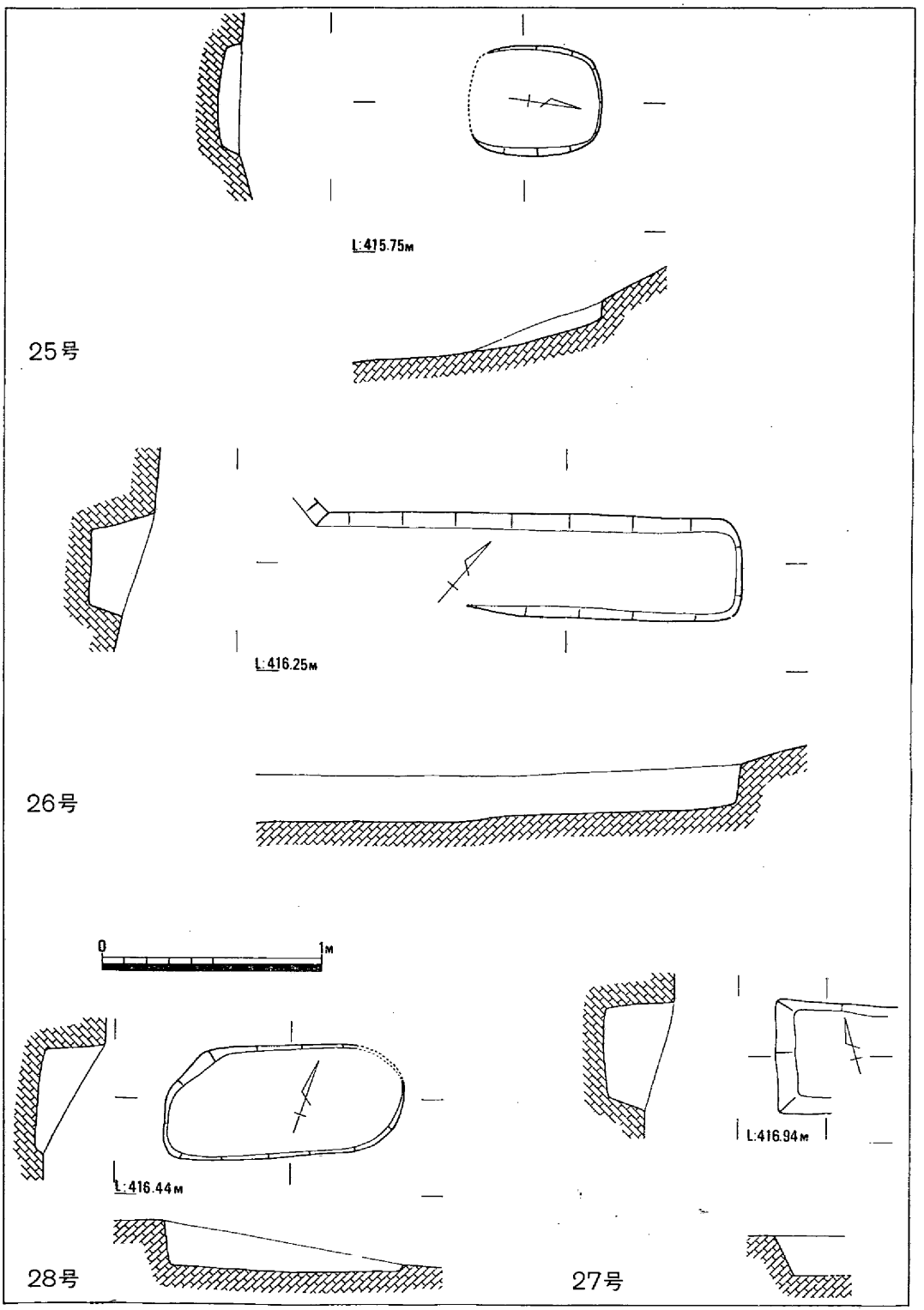
第55図　4区17・18号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)



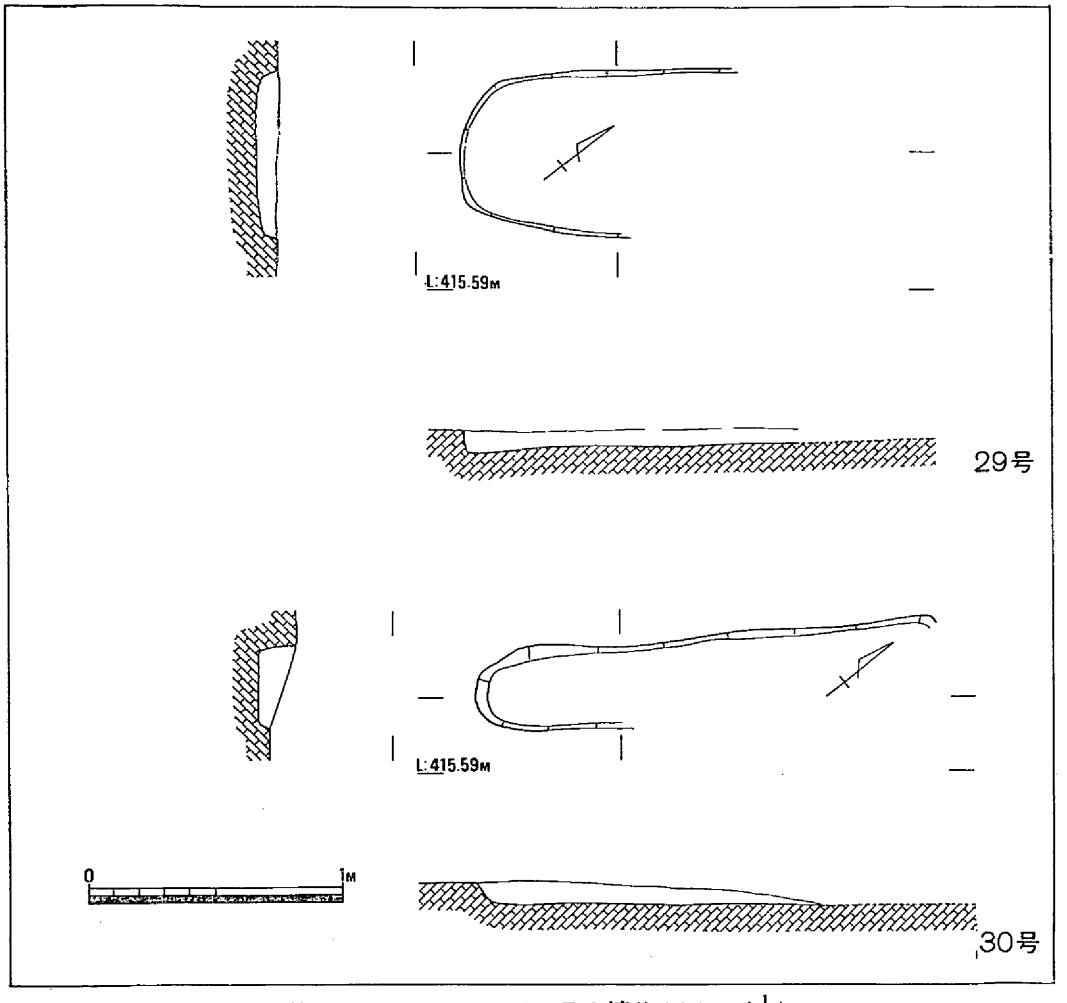
第56図　4区19～21号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)



第57図 4区22～24号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)



第58図　4区25～28号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)



第59図　4区29・30号土壙墓実測図 ($\frac{1}{30}$)

ている。現在の小径直下にあるため西小口部へ方は若干削平されている。

22号土壙墓　(第57図，図版37—2)

22号土壙墓は，21号土壙墓の西に位置し，主軸はN—60°—Eを測る。稜線に対して斜行する。掘り方は西小口部が隅丸の長方形を呈す。床面は東小口部が若干低く且つ幅も広く掘られている。当土壙も小径直下に位置している。

23号土壙墓　(第57図，図版38—1)

23号土壙墓は，22号土壙墓の西に位置し，主軸はN—78°—Eを測る。掘り方は北側縁が膨んだ長方形を呈している。床面は，東小口部が約10cm程近く，幅も若干広い。周壁は緩く立ち上がっている。

24号土壙墓　(第57図，図版38—2)

24号土壙墓は，20号土壙墓の西にあり，主軸はN—43.5°—Eを測る。掘り方は長方形を呈し，

東小口部が若干幅広くなっている。床面はほぼ水平に保たれ周壁は垂直に近く立ち上がっている。

25号土壙墓 (第58図，図版39—1)

25号土壙墓は，19号土壙墓の西約3mに位置し，主軸はN—85°—Wである。掘り方は隅丸方形を呈すが，南小口部は不分明となっている。床面は南北方向でかなりの傾斜を有している。

26号土壙墓 (第58図，図版39—2)

26号土壙墓は，25号土壙墓の西約2.5mに位置し，主軸はN—50°—Wを測る。掘り方は長方形で西小口部は消失している。床面は西小口部に向って漸次低くなっている。周壁は垂直に近く立ち上がる。

27号土壙墓 (第58図，図版40—1)

27号土壙墓は，主軸をN—76°—Wにとり，等高線に平行し，稜線に斜行している。掘り方は東小口部が小径のため削平され不分明となっている。

28号土壙墓 (第58図，図版40—1)

28号土壙墓は，27号土壙墓の東に接し，主軸をN—70.5°—Eにとる。隅丸長方形の土壙墓である。床面は東小口部が若干低くなっており，周壁は垂直に近く立ち上がっている。

29号土壙墓 (第59図，図版40—2・43—1)

29号土壙墓は，溝Ⅳに切られている。主軸はN—44°—Eで稜線，等高線に直行している。掘り方は隅丸を呈す長方形を推される。遺存状態が悪いため詳細不明である。当土壙上より乳棒状石斧が出土した。

30号土壙墓 (第59図，図版40—2・43—1)

30号土壙墓も溝Ⅳに切られている。主軸はN—39°—Eである。掘り方は南小口が隅丸を呈する長方形であろう。床面はほぼ水平に保たれている。

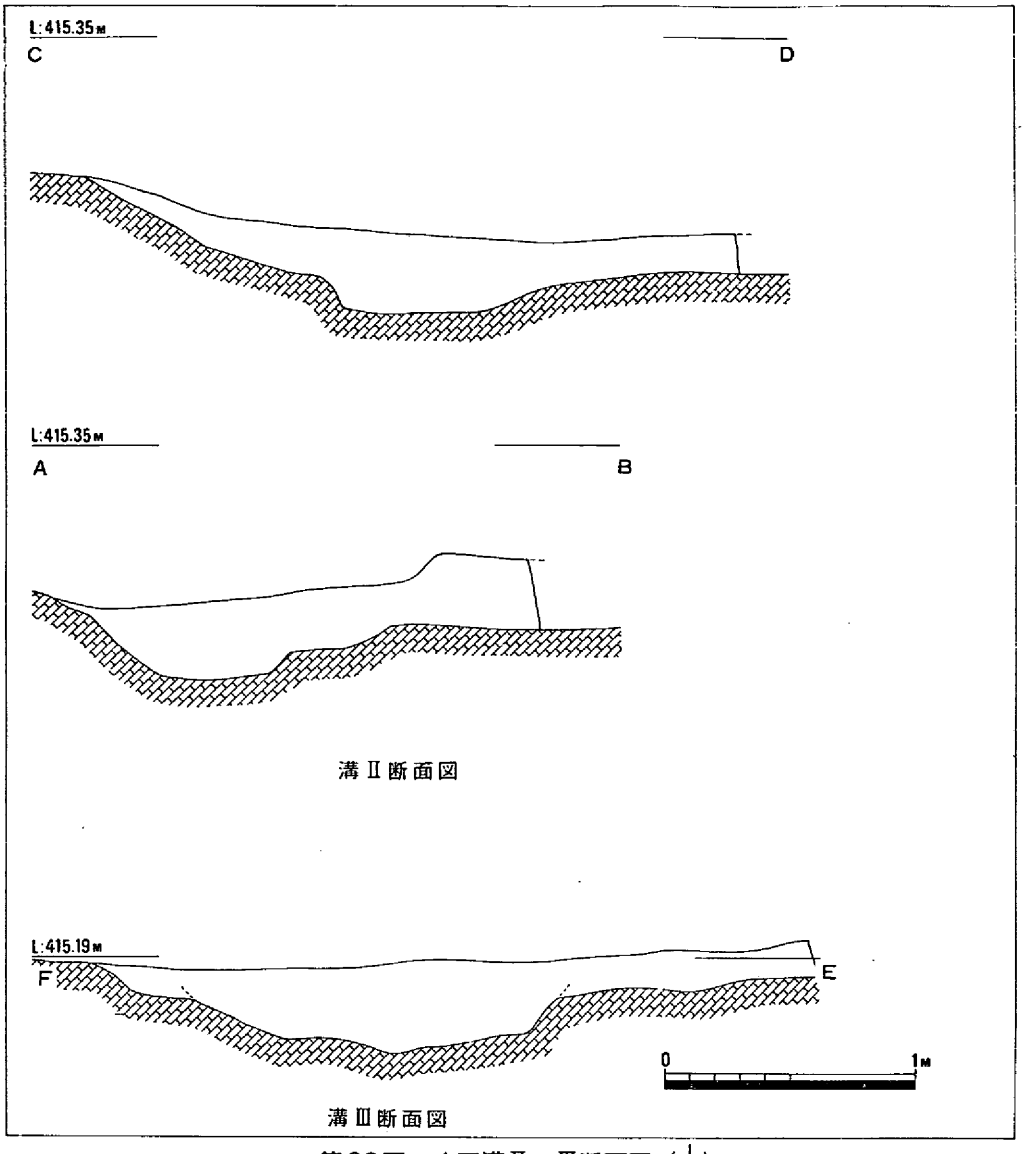
(2) 溝 状 遺 構

溝Ⅰ (第44図，図版31)

溝1は，1号土壙墓と2号土壙墓のほぼ中程に尾根を切断するように掘られている。幅は約1.1m程で，北及び南の溝尻は漸次不明瞭となって消滅している。溝の断面は浅いU字状をなす。溝内より遺物等の出土は見られなかった。

溝Ⅱ (土器溜りA) (第44・60～62図，図版31—1)

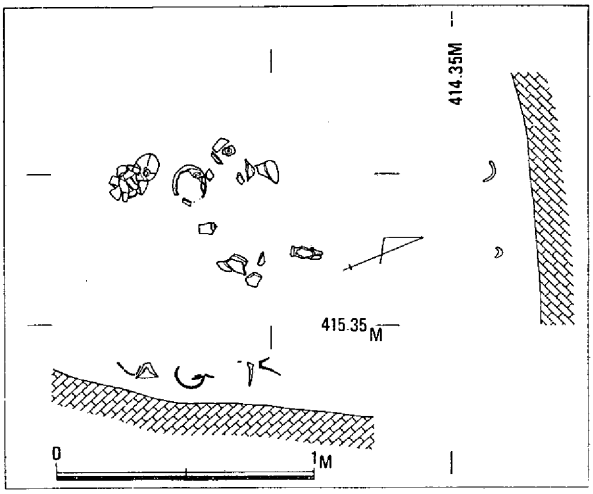
溝Ⅱは，2号土壙墓と3号土壙墓のほぼ中程に溝Ⅰと同様尾根を切断するように掘られている。幅はほぼ中央で約1.1mを測り，溝尻は南北共に末広がりを呈しつつ消滅している。溝の断面は浅いU字状をなす。溝中よりの遺物等の出土は見られなかったが，当溝上表土に於いて珠文鏡（第4節に詳説）が一面出土している。また，当溝北約1mの場所より土師器の集積地点が確認されている。器種は坩，高杯で合計約5個体分であったが，実測可能個体のみ図示した。



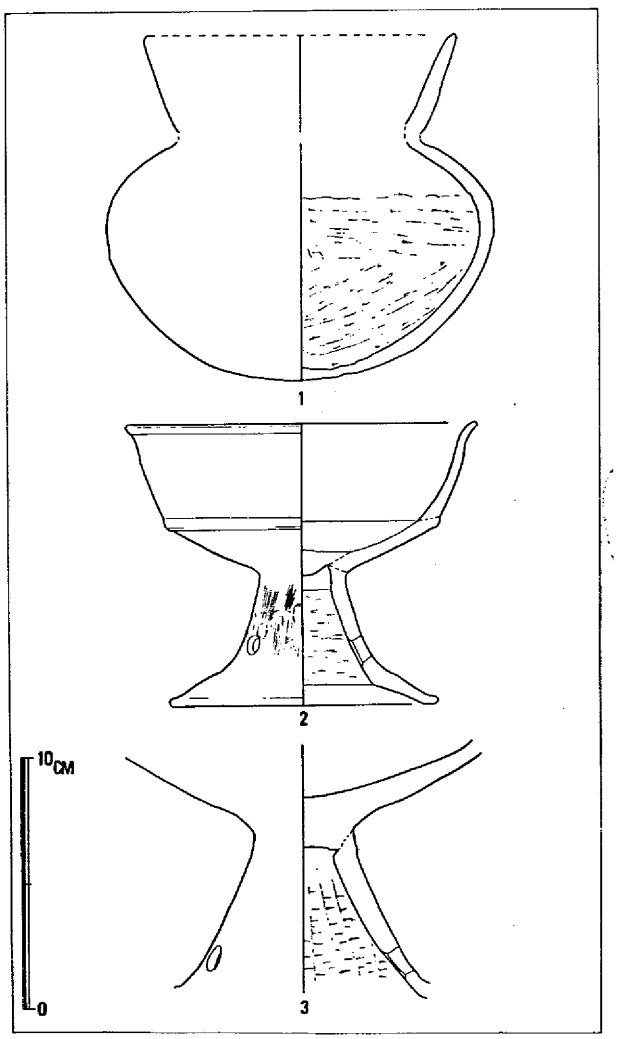
第60図　4区溝Ⅱ・Ⅲ断面図 ($\frac{1}{30}$)

〈出土遺物〉（第62図）

1は高杯形土器で杯部は深く，上半部は高く小さく外反し，脚部は若干屈曲している。口脚13.7cm，脚柱状部3.4cm，脚端部10.6cm，器高11.2cmを測る。杯部内外面共にナデを施し，上半部はナデによって生じた凹凸が見られ，口唇部は丸くおさめる。接合部は段を有す。脚部は三孔を穿ち，屈曲部位より上位内面が棒状の工具によって横方向にケズリが施され，外面は細い刷毛によって仕上げられている。また，屈曲部位より脚端まではナデによって調整されており，脚端部は丸くおさめられている。



第61図 土器溜りA実測図 ($\frac{1}{30}$)



第62図 土器溜りA出土土器実測図 ($\frac{1}{3}$)

脚と部杯部の接合は枘式になっており，脚頭部にヘソ様の突起が出ている。色調は赤黄色を呈し，胎土精良，焼成良好である。

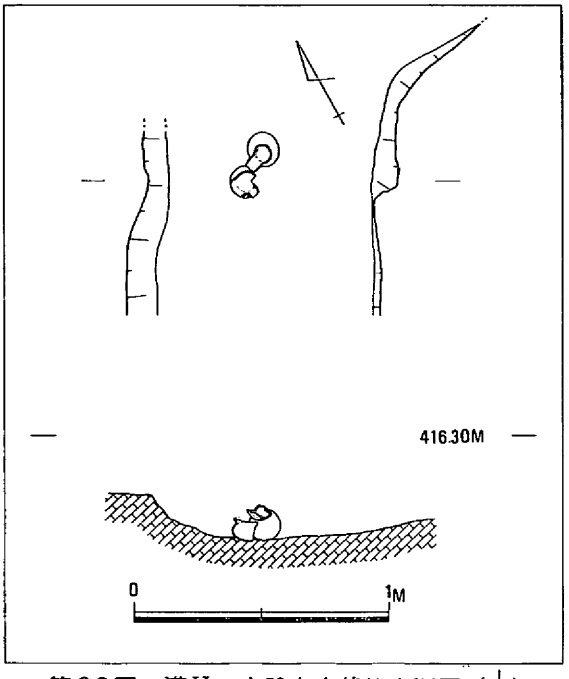
2は高杯形土器で杯上半部及び脚端部を欠失する。杯部内面は荒い刷毛調整後篦磨きが施され，外面は不明，脚柱部内面は棒状の工具で削り取るように仕上げる。外面は不明。脚柱部には3孔？を穿つ。杯部と脚柱部の接合は1と同様枘式になっている。色調は褐色を呈し，胎土には細砂粒を含み，焼成は良好である。

3は球形の胴部に内彎気味に外上方に立上がる口縁部を有つ坩形土器である。口径10.3cm，胴部最大径13.8cm，器高15.1cmを測る。口縁部は内外面共に横ナデを施し，調整時の凹凸を残している。頸部との接合部は若干凹み，口縁部中程は膨み，口唇下部は再び凹み口唇部は丸くおさめている。胴部内面は篦ケズリを施し，底部付近には指頭圧痕が残る。また，外面は粗密2種のハケを用いて調整している。色調は淡褐色を呈し，胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好，堅緻である。

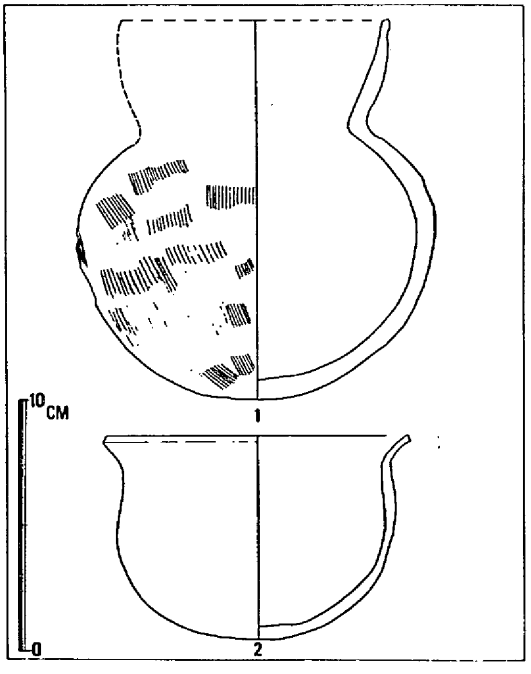
これらの土器は，4世紀末～5世紀初頭のものと考えられ，その出土状態等より当溝に伴なうものと考えられる。

溝Ⅲ (第43・48・60図)

溝Ⅲは，3号土壙墓の西約4mに尾根を切断するように掘られている。プランは3号土壙墓を取り巻くように半円形に掘られており，幅約1.8mを測る。溝尻はあまり幅を変化させずに消滅する。断面は浅いU字形をなす。溝中より遺物等



第63図 溝V・土器出土状態実測図 ($\frac{1}{30}$)



第64図 溝V出土土器実測図 ($\frac{1}{3}$)

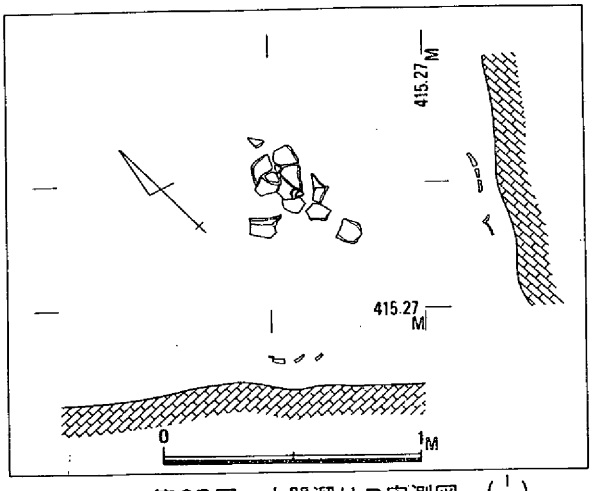
の出土は見られなかった。

溝IV (第43・48図, 図版43)

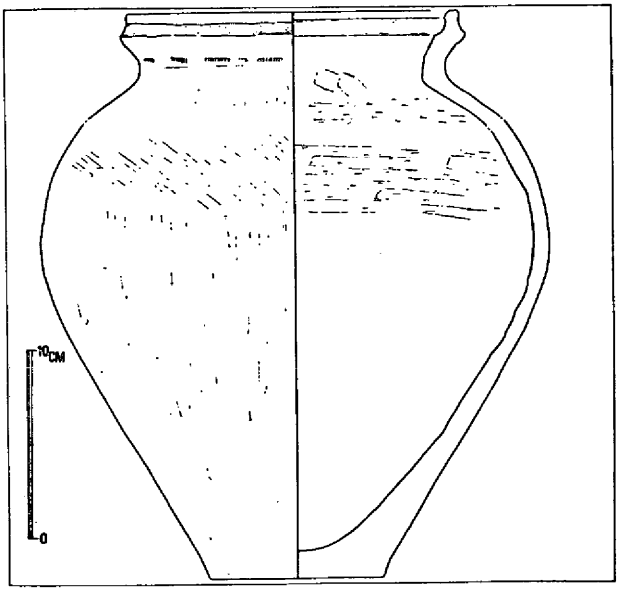
溝IVは,29号・30号土壙墓上に掘られており稜線に直行している。幅は2.2mを測り北溝尻は漸次消滅しているが, 南溝尻は小径によって不明瞭となっている。断面は浅い悌形をなし, 深さ約12.3cmを測る。当溝より乳棒状石斧が検出されているが,当溝に伴うものとは考えられない。

溝V (第43・48・63・64図, 図版44・48—3・4)

溝Vは, 3区丘陵裾部～谷部～当丘陵に亘って設定したトレンチによって検出されたものである。当初は坩形土器のみ検出され, 土壙墓かと思われたが, 面的調査及び掘り下げの段階で溝であることが判明した。又, 掘り下げ途時において坩形土器の傍に, 共に口縁部を上にした状態で, 鉢形土器が検出された。検出された土師器は風化のためか器表が観察困難な程であり, 据置したままの状態で, 長期間放置されていたものと考えられる。坩形土器(第64図—1図版48)は, 扁球形の胴部に外上方へ延びる口縁部を有し, 底部は完全な丸底をなしている。器高12.2cm, 口径12.2cm, 胴最大径15.2cmを測る。口縁部は内面篦磨きを施すが, 外面は器表が荒れているためその調整手法は不分明である。口唇部は丸くおさめている。胴部内面は頸部より約⅓下位まではナデによる仕上げ, それ以下は横方向及び下方へのヘラ削りが施されている。又, 外面は荒い刷毛による仕上げが施されている。色調は褐色を呈し, 胎土は細粒を含むも精良で焼成は良好であ



第65図 土器溜りB実測図 ($\frac{1}{30}$)



第66図 土器溜りB出土土器実測図 ($\frac{1}{4}$)

る。鉢形土器（第64図—2図版48—3・4）は，半円形の胴部に外反する口縁部を有すもので口径11·9cm，器高8·1cm，胴部最大径10·8cmを測る。口縁部は内外面共にナデを施し，口唇部は平らにおさめる。胴部は外面に荒い櫛による調整が認められるが，器表が荒れているため詳細は不明と言わざるを得ない。色調は淡褐色を呈し，胎土は細砂粒を含むも精良で，焼成は良好である。

（3） 土器溜り

土器溜りA （第61・62図，図版41）

土器溜りAは，前項溝Ⅱにおいて述べた如く北側斜面に位置し，その関係より見れば溝中のものと推定される。出土土師器は高杯，坩のみで地山より約7・8cm浮いた状態で出土している。図には示さなかったがその分布範囲はもう少し広く，レベル的にもより比高があり散在していた。

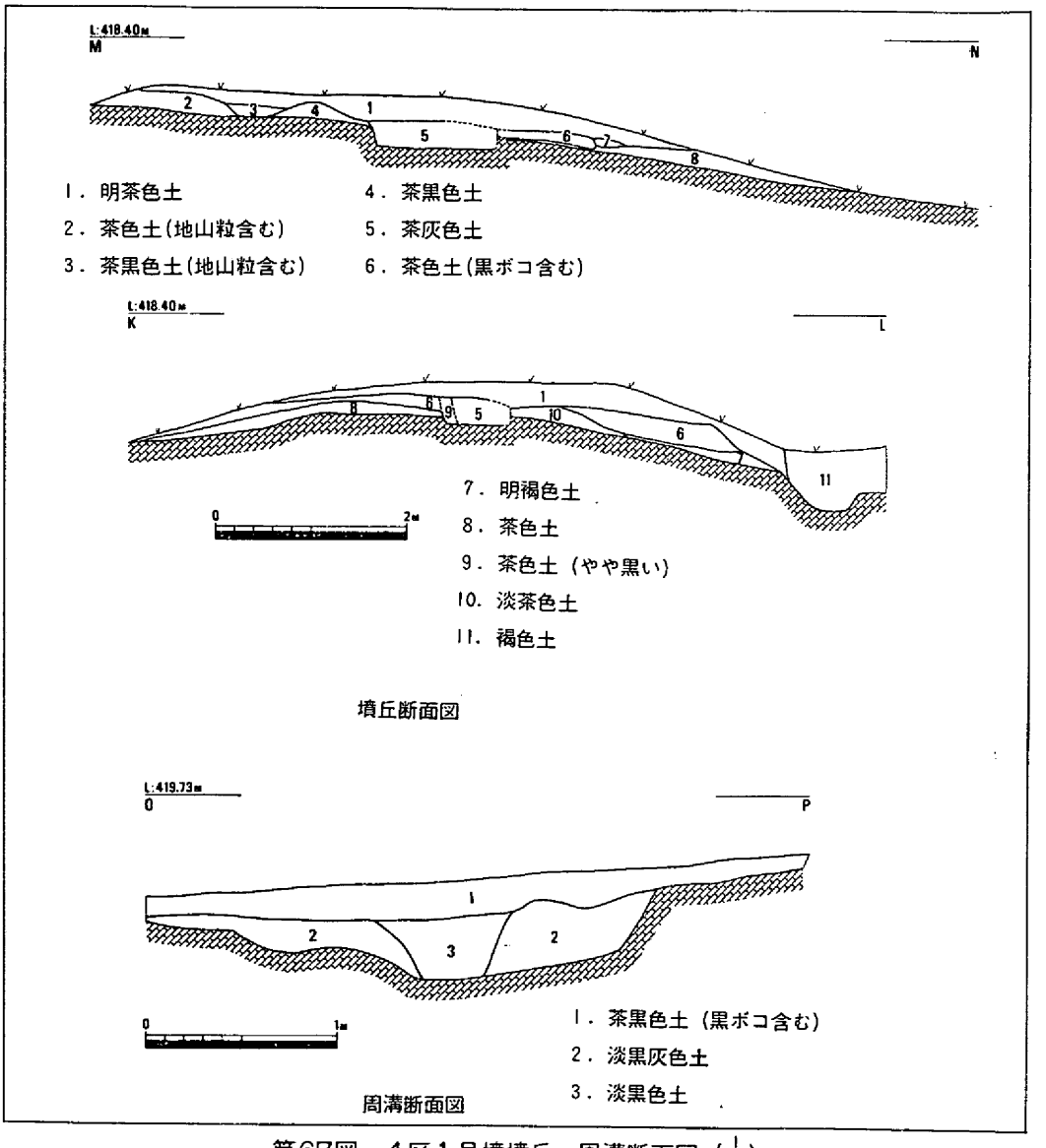
土器溜りB （第65·66図，図版42-2）

土器溜りBは，6・7・10・11・14号土壙墓に取り巻かれるような部位に存在する。当初，土器片の存在等より住居址かと思われ，土層観察用畦を残し，順次掘り下げた処，弥生式土器，須恵器，土師器を含む撹乱部分であることが判明した。深さは約50cm程に及び，土壙墓の削平を少なからず行なっていた。図示したのは，纏まって出土した弥生式土器（第66図）1個体である。口径17·3cm，胴部最大径26·5cm，器高（推定）29·9cmを測る。口縁部は頸部より外反して更につまみ上げられたように立ち上がる。外面はナデを施し，頸部との変換点より肩上部までは荒い櫛による調整，内面は口唇部直下を堀るように篦削りを施す。又，胴部外面は斜及び縦の篦磨き，内面はその上半部が横位の篦削り，下半部は器表が荒れているので不分明である。弥生後期後半の所産と考えられる。

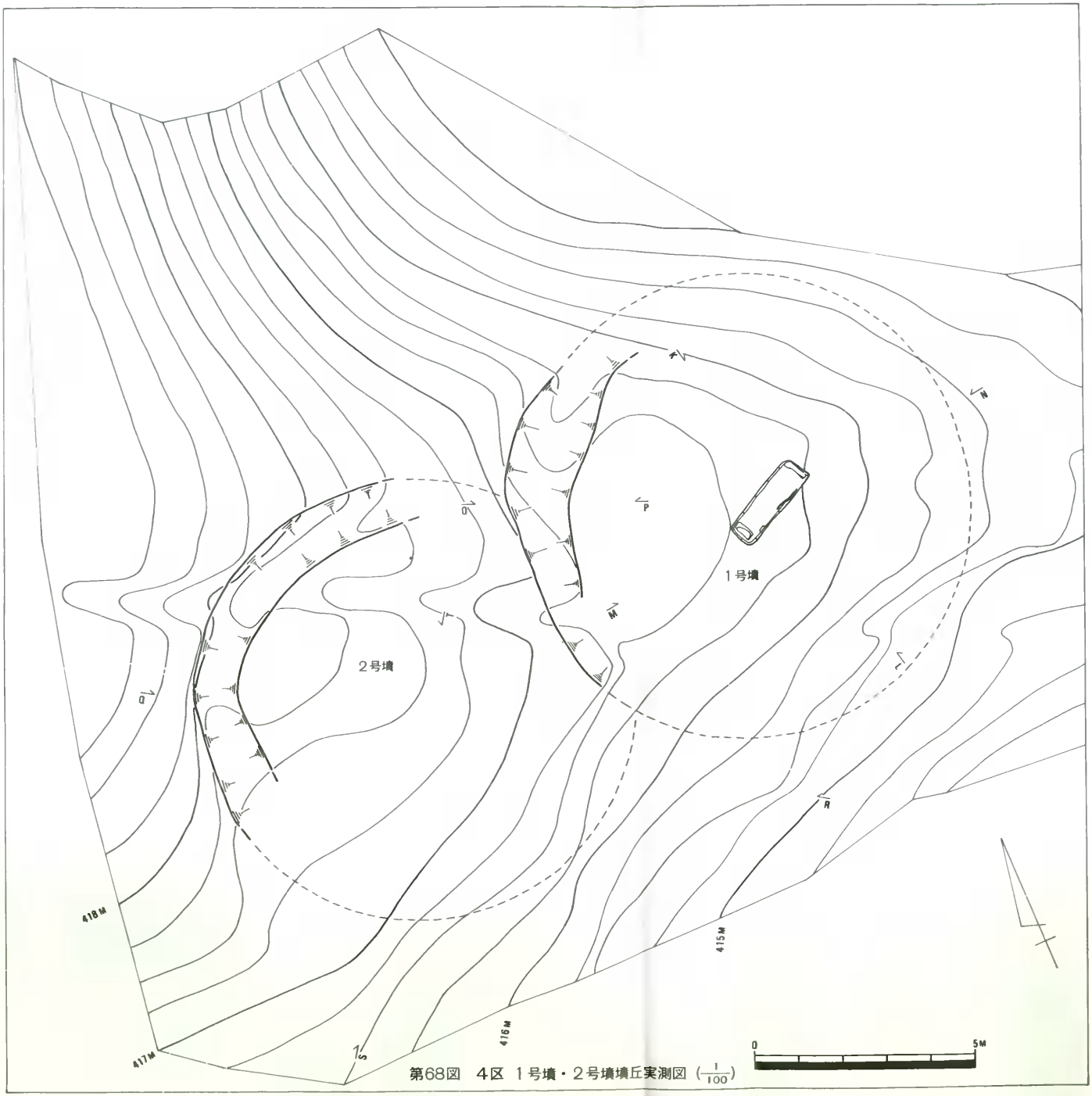
第3節 古 墳 の 調 査 (第67～71図，図版45・46)

(1) 1 号 墳 (第67～70図，図版45・46・48—5)

1号墳は4区の西端，丘陵がやや傾斜を強める所に位置する。調査前の表面観察において低い高ま



第67図 4区1号墳墳丘・周溝断面図 ($\frac{1}{40}$)



第68図　4区　1号墳・2号墳墳丘実測図（$\frac{1}{100}$）

りが認められ，また石材が散乱することなどから古墳の存在が予想されていたものである。調査は墳丘と考えられる低い高まりに，ほぼ南北（L－K）と東西（N－M）に土層観察用の畦を残して地山まで掘り下げる方法をとった。

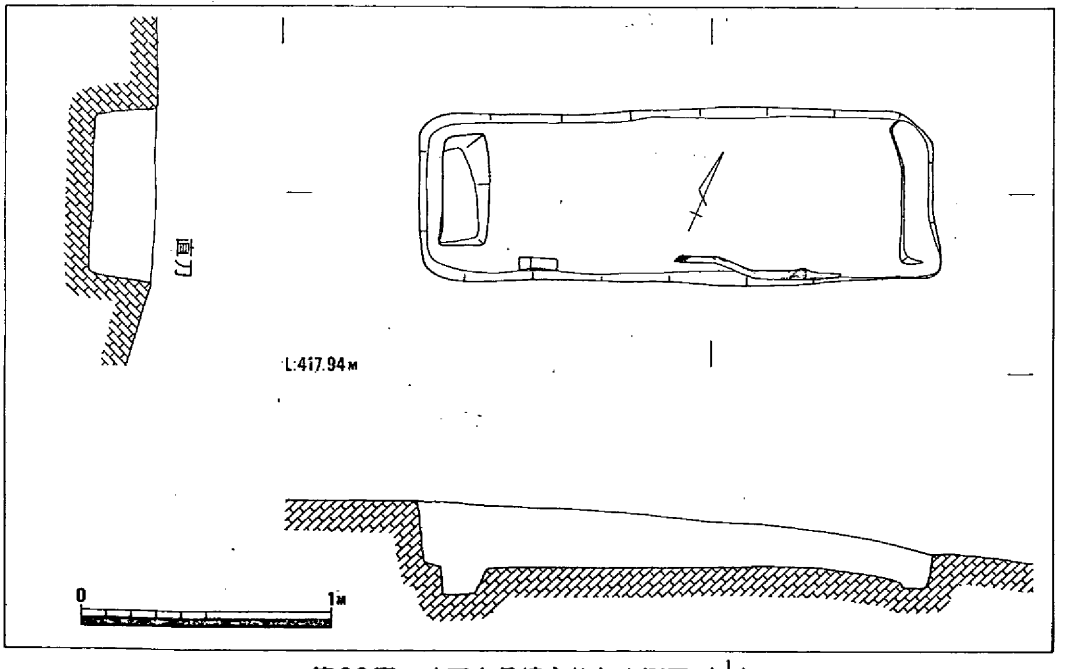
墳丘はかなり流失していると考えられるが，第三紀層の上に40cm程度の盛土が残存していた。墳丘の平面プランは周溝の形状から推察してほぼ円形を呈するようであり，その規模は周溝を含めて約10mである。周溝は墳丘の北西側に尾根を切断するようにつくられており，幅は広い所で1.6m，狭い所で0.9mを測る。断面をみると底部はほぼ平坦で，溝上端において急峻に立上る。この周溝は古墳の立地する場所から考えて，古墳を全周していたとは思われない。

主体部（第69図，図版46—2）

主体部の土壙は墳丘盛土の完成後に掘り込まれており，さらに第三紀層へも達する深さにつくられている。平面プランは長方形を呈し，長さ2m，幅0.7mを測る。内部に木棺が納置されていたと考えられ，両端には小口板痕跡がある。北側の壁に接して板石が置かれており，木棺を固定していたものであろう。副葬品は土壙上の北側において，折れ曲った直刀が一振置かれていた以外には認められなかった。

〈遺物〉（第70図，図版48—5）

図示した直刀は折れ曲って出土したものであるが，図化する段階において真直にした。直刀は平造で全長67cm，刀幅3cmを測り，先端に近い部分が一部失損しているが，保存状態は良好である。刀身は先端部分は幅が狭く，関に近くなるにしたがい幅を増す。木質が先端部と関に近い部分に残存して



第69図　4区1号墳主体部実測図（1/30）

いる。茎の部分は錆が多く目釘孔の有無は確認できない。

(2) 2 号 墳 (第68・71図，図版45)

2号墳は4区の西端，1号墳の西側に接してつくられている。調査前にはその存在に気づかなかったが，表土剝ぎの段階で周溝が検出され，古墳であることが明らかになった。調査は表土を剝いだ後に，墳丘と考えられる位置に北西から南東（Q－R）方向と，北東から南西（T－S）方向の畦を残して地山面まで掘り下げた。

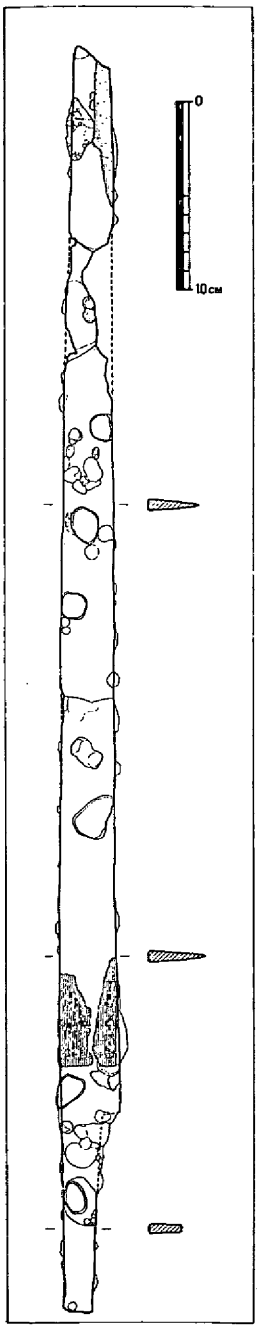
〈墳丘・周溝〉（第71図）

墳丘と考えられる位置に設定した土層観察用の畦を検討しても墳丘盛土と考えられるような状況はなく，すでに流失してしまったものと思われる。残存している周溝から古墳の規模を推定すると約10mの円墳が考えられる。しかし直径が10mであれば当然1号墳と墳丘が重なり合うことになり，その前後関係が問題となる。しかし，どちらの古墳も詳細な時期を決定するだけの資料に欠け，また土層観察による方法も墳丘の残存状態がわるく，決め手に欠くものである。

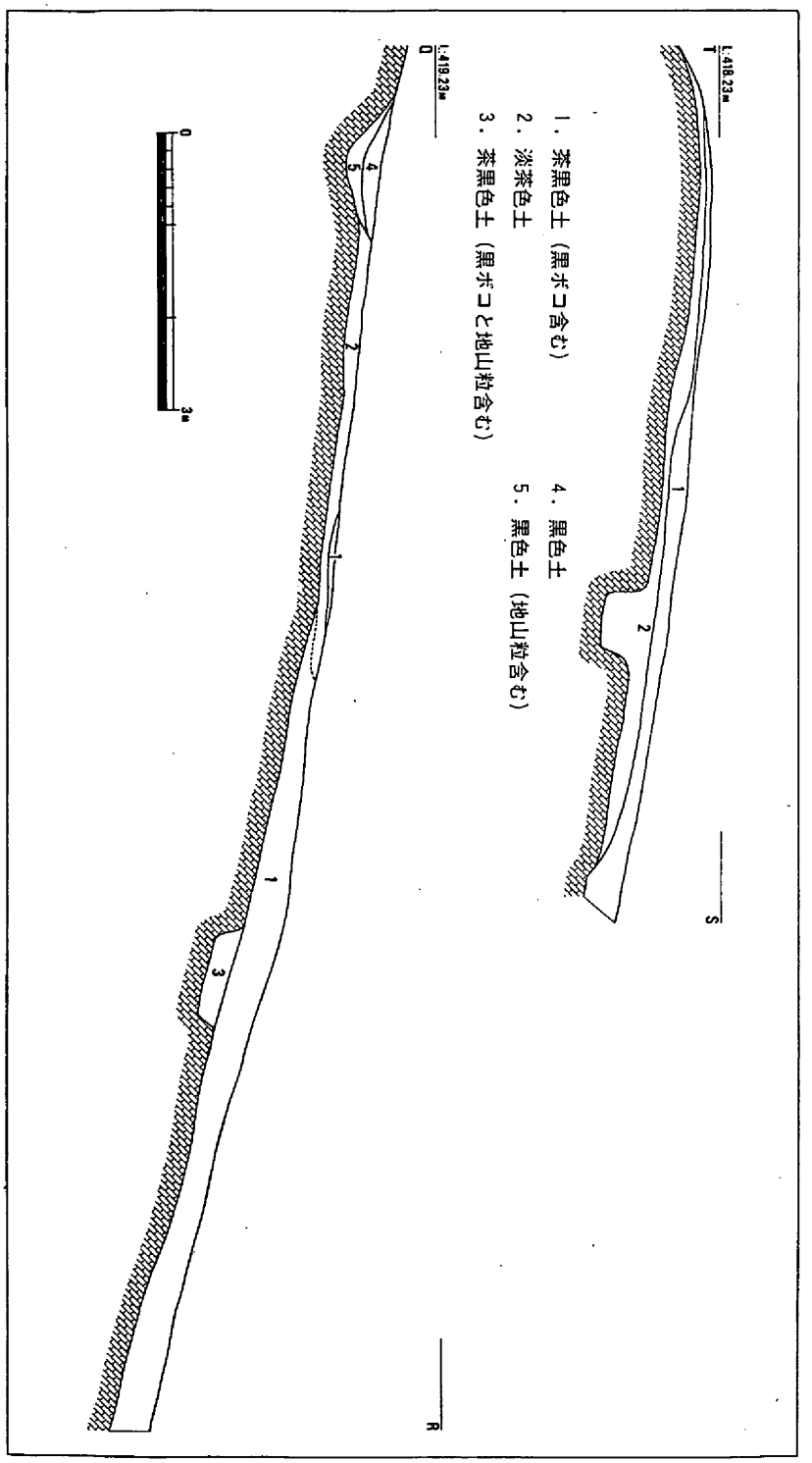
周溝は墳丘の北西側に尾根を切断するような状態でつくられている。幅は一定しており，約1.2m，深さ約40cmを測る。断面の形状は中華ナベ状の緩やかな傾斜で，黒色土が充塡していた。

主体部については墳丘全面にわたって精査をおこなったがついに検出できなかった。すでに流失してしまった可能性が強い。

さてこの4区の尾根上においては，概述した2基の古墳以外にも，調査区域外ではあるが，1号土壙墓の南東方向には低い墳丘を有する古墳が認められ，細い尾根上に並ぶ，一系列の古墳群として考えられる。調査区域内では2基しか検出できなかったが，溝Ⅱ周辺において珠文鏡が出土しており，さらに溝Ⅳ周辺にもスペースがあり，もう2基前後は存在した可能性がある。これらの古墳は横穴式石室をもたず，低い墳丘に主体部は木棺であり，さらに丘陵南端部出土の珠文鏡，あるいは土器溜りの土師器などから4世紀後半より，5世紀代にかけて形成された古墳群と推察される。



第70図
1号墳主体部出土直刀 ($\frac{1}{4}$)



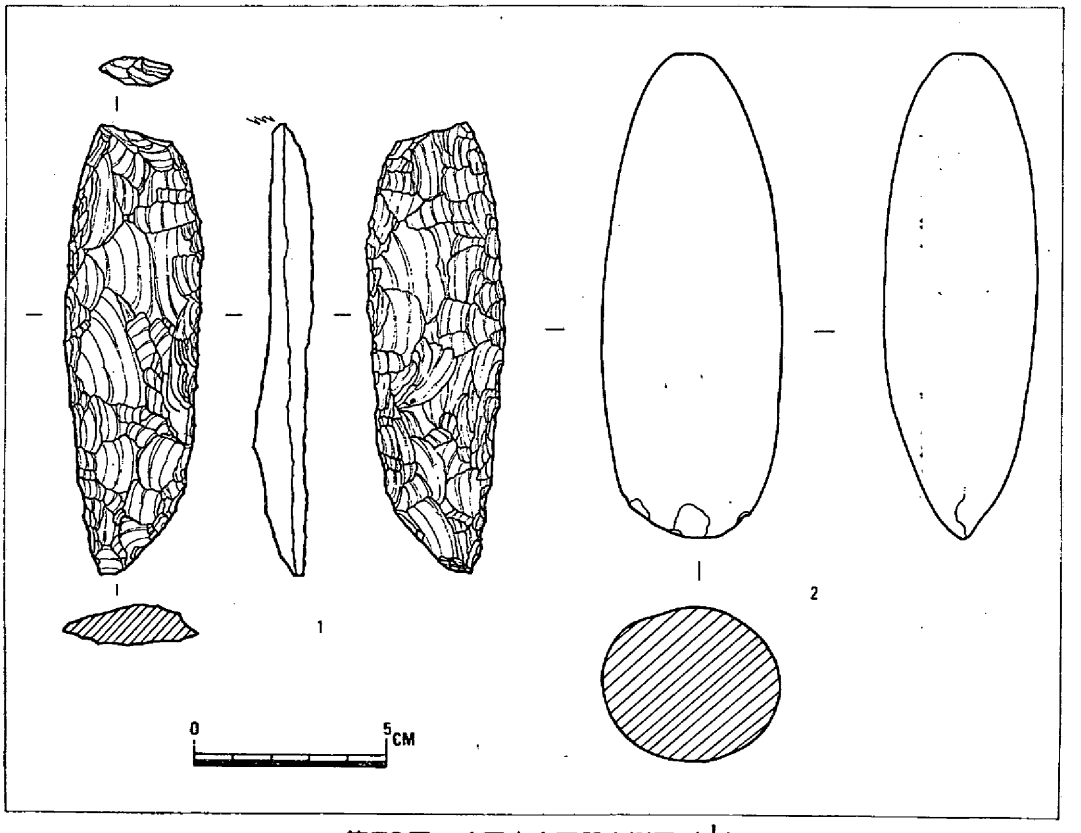
第71図　4区2号墳墳丘断面図（1/80）

第4節　その他の遺構・遺物

先の第1～3節で概略を述べた3区検出遺構・出土遺物の他に円形土壙，および遺構に伴わない遺物について説明を加えたい。

（1） 円形土壙 （第73図）

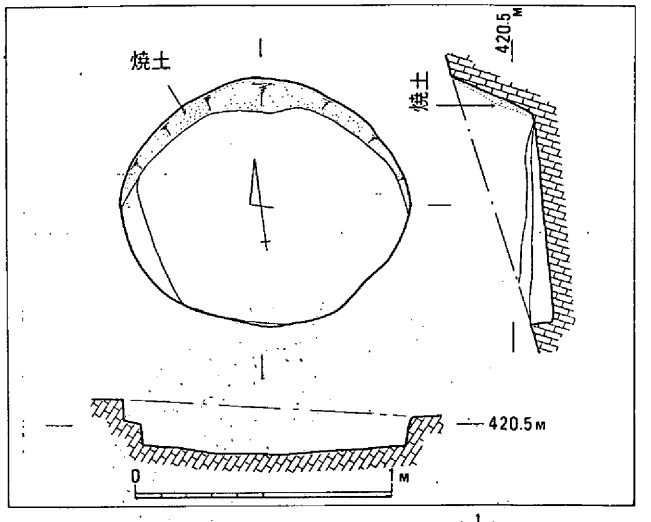
3区丘陵上方の扇形に拡がる緩斜面両端で検出した径1.1～1 mを測るやや楕円形を呈する土壙である。深さは北側で約30cm，南側で約10cmを測る比較的浅い土壙である。北側掘方壁面には焼土が遺存し，底面はほぼ平坦面をなし，黄褐色土および木炭片を多量に含む黒褐色土が埋積している。遺物の出土は，混入とみられる弥生式土器あるいは土師器の小片を認めるが，付近からは近世陶磁器片が出土しており，さほど古い時期の遺構とは考えられない。用途・機能共に不明であるが，焼土・木炭片の検出から「焚き火」跡とも推定される。いずれにせよ，火に関わる遺構であることが考えられよう。



第72図　4区出土石器実測図 ($\frac{1}{2}$)

(2) 石 器

(第72図—1・2，図版48—1·2)



第73図 円形土壙実測図 ($\frac{1}{30}$)

1は丘陵西端部より出土した。サヌカイトを素材とする石槍である。尖頭部を欠失しているが,現存長11·8cm，巾6·3cm厚さ1·1cm， 重量60gを各々はかる。体幹は尖頭部に近づくにしたがいその巾を漸増しており，左右シンメトリーに作出されているが，基部は左側縁が緩かなカーブを示すのに対し右側縁は直線的に折れ曲っており左右対称となっていない。刃部は交互剝離によって仕上げられており，両面共に二次加工面によって覆いつくされている。また厚みを減ずるために，一部ステップ・フレーキングを施している。断面は若干右厚のレンズ状を呈している。素材は横長の剝片かと思われるがパティナの度合は浅い。以上のことから縄文時代に比定される石槍と考えられる。

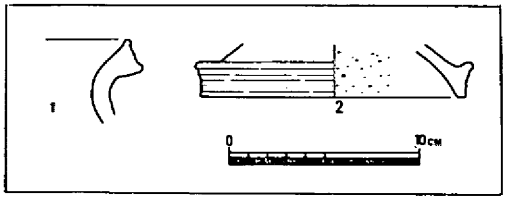
2は溝状遺構4内の29号土壙上より，あたかも土壙墓に副葬されたかのような状態で出土した硬質砂岩を素材とする乳棒状石斧である。全長12·7cm，巾4·8cm，厚さ4cm，重さ350gを各々はかる。刃部には使用痕跡が認められ，頭部には若干平坦であることが観察される。時期的には1と同様縄文時代に比定することができよう。

(3) 弥 生 式 土 器(第74図)

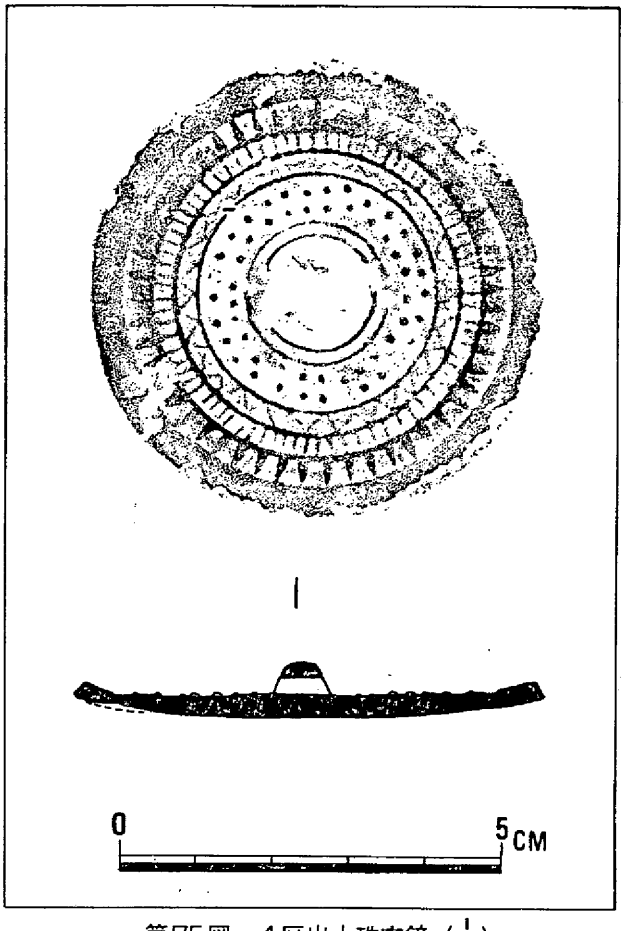
弥生式土器は4区中央部南斜面より若干出土したものである。これらの土器が土壙墓の集中する地域から出土したことは，土壙墓の時期を推定する手がかりとなるが，直接関係するような出土状態でないため推測の域を出ないものである。1は口縁端部を上下に拡張し，その端には横ナデによる凹部が認められる。頸部の形状から考えて壺形土器と思われる。2は脚台で，脚端は上下に拡張され，その端面には退化した凹線がめぐる。内面はヘラ削りで仕上げられる。これらの土器の示す時期は後期前半が考えられる。

(4) 珠 文 鏡(第75図，図版47)

4区丘陵南端区の，溝1と2号土壙の中間付近の表土除去作業中鏡背を上にして出土した小形仿製鏡である。銹化はさほど進行しておらず，鏡面・鏡背ともに暗緑色を呈し青銅特有の鈍い光沢を放つ。鏡縁の残存状態はやや悪く，銹化剝落して完全な円弧を描かないが鏡径6·18～6·21cmを計測する。鏡縁は平縁で厚さ2·7mm，鈕部分の厚さ6·85mmを測る。鏡面は凸面を呈し，部分的に鏡面が剝離して消失し，その部分が凹んでいる。鏡背は，平縁の鏡縁から外圧文様帯に移り，鋸歯文・櫛歯文・単線鋸歯文から構成されている。内区は2重に珠文がめぐり，鈕座との間を円を描く2本の界線を



第74図　4区出土弥生式土器（$\frac{1}{4}$）



第75図　4区出土珠文鏡（$\frac{1}{1}$）

もっておわる。外区鏡縁よりの鋸歯文部分の1部は鋳上がりが悪く，更に「手ずれ」とも思える磨耗がみられる。鏡背にはわずかに朱の遺存が認められる。出土状況から推定すると，付近に古墳が存在した可能性も考えられ，後世の破壊によって副葬原位置を移動したものと理解されるが，2号土壙に伴うものであるかどうかは明らかではない。いずれにせよ，この鏡は所有あるいは副葬時期を5世紀代と比定できる。

以上，主要な点について補足説明を加えたが，他に須恵器，土師器，鉄滓の出土もみられ，3区と共通する時期も示している。須恵器については，主として6世紀代に比定される高杯片や，壷・甕片が1・2号墳の墳丘裾部で出土しており古墳が破壊もしくは損傷を受けた際の出土品の可能性もある。土師器・鉄滓はいずれも3区出土遺物と共通点が多く，前者は煮沸容器としての甕・甑片の出土が顕著である。3区同様，4区にも6世紀後半～7世紀代にかけての生活遺構が存在したことをうかがわせる。

結　　語

横田遺跡の発掘調査の経過については第1章に述べたとおり，遺跡の規模に対して，調査期間や調査従事者数は短期・少数であった。物理的にも期間的にも切迫した状況で，発掘予定調査区の全面調査は不可能で，1部の調査区については，発掘の実施を中途断念せざるを得なかった。表土除去，遺構検出，精査，写真撮影，実測という発掘のパターンも十分には実行できず，検出遺構の現地での精査・検討も満足にできない状況であった。報告書の作成も，現地調査と同様に行うこととなったため，調査成果を十分に述べ尽せたわけではない。割愛せざるを得なかった実測図・写真等，機会あれば公表する責任を負うことを記しておこう。

検出した遺構群で特に注意を要するものは，3区竪穴住居址群と4区墳墓群である。前者は6世紀末期から7世紀代にかけて営まれた住居址群の一部で，当時の集落の在り方を端的に示している。同時に，存在する住居址を平面的には把握抽出できないが，適当な間隔をおいて住居址が存在することがわかる。平面形は方形を呈し，おそらく高所壁体を削って住居址面を拡張する方法をとったものと考えられ，構造的には弥生時代のそれと大差ない。周辺および住居址内の鉄滓出土は，鉄器製作あるいは，鉄生産に関わる集落である可能性が十分に指摘できる。7号住居址より出土した鉄斧等鉄製利器の製作，あるいは鍛冶工房に供給する鉄素材の生産に，密接に関連する集落と考えられよう。更に，鉄器製作に不可欠な，燃料としての材木あるいは木炭供給の地理的条件を考慮にいれることができる。従来，岡山県内では古代鉄生産の中心として，美作地方の歴史的事実が周知，論じられているが，備中北部においても中国縦貫自動車道に関わる埋蔵文化財発掘調査を契機として，古代における鉄生産地としてわれわれの認識を深めることとなった。地理的にも出雲地方山間部との交渉が推定され，伯耆東部山間部とあわせ巨視的な，中国地方山間部の経済的かつ文化的な交流の研究を深めることが今後の研究課題である。集落としての思考を深めれば，7世紀中葉に始まる律令体制の最小行政単位である房戸，あるいは郷戸との関わりが無視できない可能性があることを書き添えておこう。

一方，4区における土壙墓群・古墳群の存在は，この丘陵が共同の墓域として弥生時代後期以来，5世紀に至るまで利用されていたことをもの語る。土壙墓の築造時期は，1号土壙墓に副葬されたと考えられる土器などから，弥生時代後期前半と推定され，他の土壙墓群も近い時期と思われる。しかし1号～3号土壙墓のように尾根に平行し，単独で形成されるものと，4区中央部の群集するものとでは性格が異なるものであろう。1号から3号土壙の間に存在する溝は尾根を切断し，これらの土壙墓を区画するような状態を呈している。弥生時代後期前半にこのような墓域の中に単独の主体部を有するような墳墓がすでに出現しているのは注目されるものである。

古墳は丘陵上に順次形成されていったものと考えられるが，今回の調査によって2基が確認された。しかし中央部と1号～3号土壙墓の周辺においても存在した可能性が強い。これらの古墳は4世紀から5世紀代にかけて系列的にこの尾根上に古墳を形成したと推察される。

以上2点の注目すべき事実を要約し，今後の研究課題として指摘しておきたい。

1．遺跡遠景（北東から）

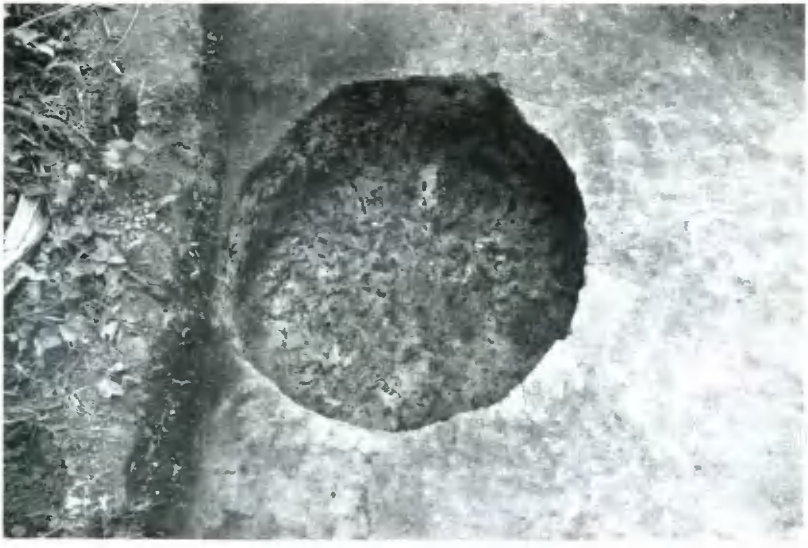
2．1区・2区遠景（3区から）

図版２

１．２区検出柱穴群（南から）

２．柱穴・溝状遺構検出状況（南から）

１．１号土壙検出状況（北から）



２．１号土壙（東から）

図版４

１．２区全景（３区から）

２．須恵器蓋

３．土師器杯

３．土師器甑

４．土師器甕

（２区出土遺物）

１．３区発掘着手前全景（２区から）

２．３区発掘着手前全景（４区から）

図版６

１．１号住居址（北東から）

２．３号住居址（北東から）

1．2号住居址検出状態（東から）

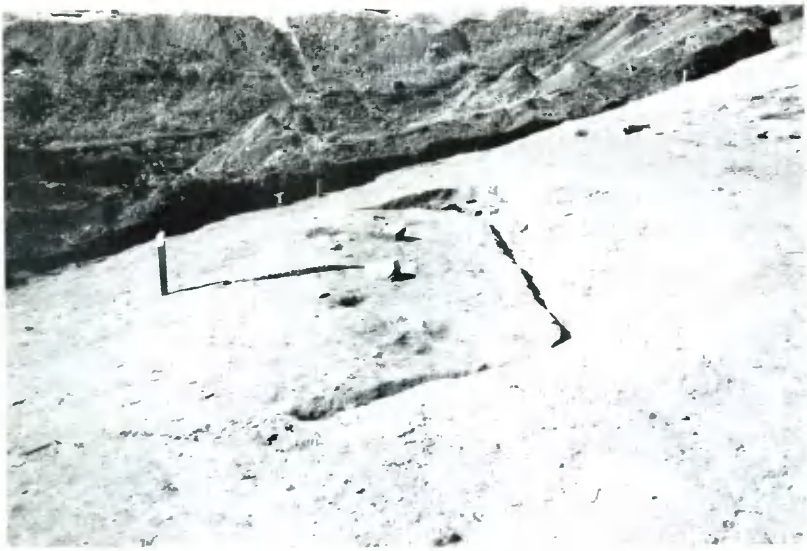
2．2号住居址（南から）

図版８

１．５～７号住居址調査風景（南西から）

２．５号住居址検出状況（南から）

１．５号住居址（西から）



２．６号住居址（東から）

図版10

1．調査風景（南から）

2．7号住居址検出状況（南から）

1．7号住居址上面遺物出土状態（南から）

2．7号住居址上面遺物出土状態（南から）

図版12

1．7号住居址床面遺物出土状態（南から）

2．7号住居址（西から）

1．8・9号住居址（西から）

2．8・9号住居址（東から）

図版14

1．9号住居址壁体溝と須恵器（東から）

2．須恵器出土状態（南から）

3．9号住居址西方出土ミニチュア土器（南から）

1．10号住居址（南西から）

2．3区上方調査風景（南東から）

図版16

1．3区発掘調査風景（南から）

2．3区住居址群全景（南から）

1．13・14号住居址付近発掘風景（東から）

2．9・11・12号住居址検出状況（北西から）

図版18

1．13・14号住居址周辺（北西から）

2．15号住居址（南東から）

1．15号住居址（東から）

2．18号住居址（南東から）

図版20

1．19・20号住居址検出状況（南から）

2．19・20号住居址（南から）

1．20号住居址（南から）

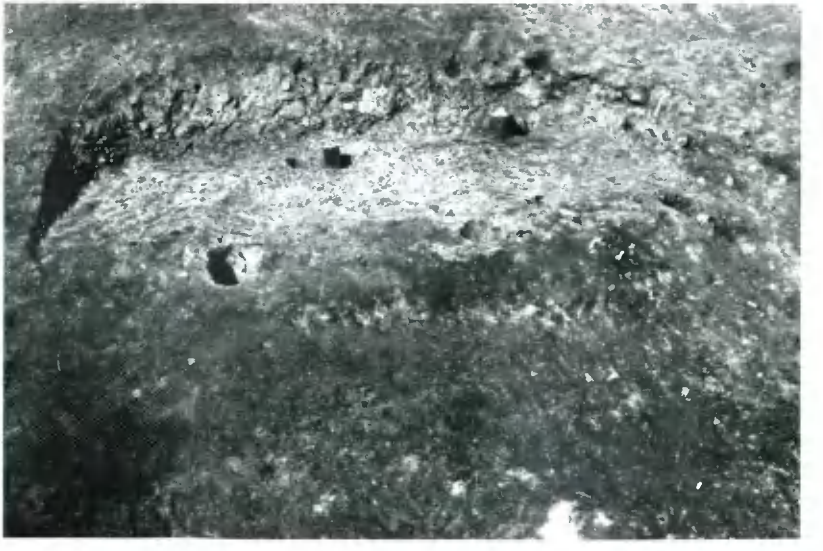
2．不整形土壙（西から）

図版22

1．3区上段住居址群（南西から）

2．6・7号住居址および3区遠景（北東から）

1．21号住居址（南から）



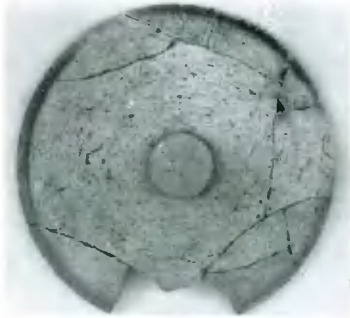
2．22号住居址（南から）

図版24

1．須恵器壺

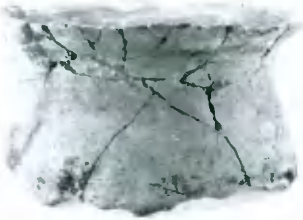
2．須恵器杯片

3．須恵器盌



4．須恵器蓋

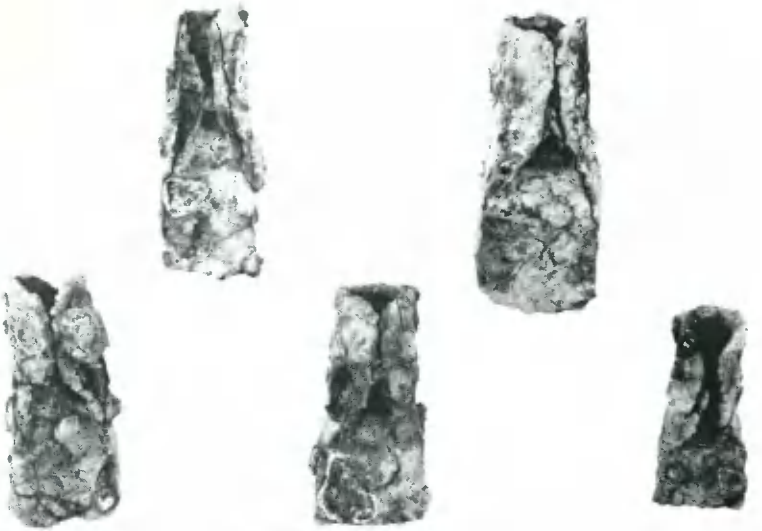
5．土師器甕



6．土師器甕

7．土師器甕

7．土師器甕



1．7号住居址出土鉄斧（×$\frac{1}{2}$）

2．須恵器杯（×$\frac{1}{3}$）

3．ミニチュア土器（$\frac{1}{3}$）

4．須恵器壺（×$\frac{1}{3}$）

5．土師器甕（×$\frac{1}{3}$）

6．土師器甕（×$\frac{1}{3}$）

7．土師器甕（×$\frac{1}{3}$）

図版26

1．4区発掘着手前遠景（3区から）

2．4区遠景（藤木城址から）

1．1号墳および土壙墓群
（西から）

2．土壙墓群（南東から）

図版28

1．1号土壙上面供献土器出土状態（南から）

2．1号土壙検出状態（南から）

1．2号土壙墓（北西から）

2．2号土壙墓（北から）

図版30

1．3号土壙墓（北西から）

2．3号土壙墓（南西から）

1．1・2号土壙墓・溝Ⅰ・溝Ⅱ（北西から）

2．溝Ⅰ検出状況（東から）

図版32

1．6・7号土壙墓（北から）

2．8号土壙墓（北から）

1．10・11・4・5号土壙墓（南西から）

2．6・7号土壙墓周辺（北から）

図版34

1．12号土壙墓（北西から）

2．13号土壙墓（西北から）

1．15号土壙墓（南から）

2．16号土壙墓（南西から）

図版36

1．17号土壙墓（南東から）

2．18・19・20・24号土壙墓（南東から）

1．21号土壙墓（南から）

2．22号土壙墓（南東から）

図版38

1．23号土壙墓（南から）

2．20・24号土壙墓（南西から）

1．25号土壙墓（東から）

2．26号土壙墓（南東から）

図版40

1．27・28号土壙墓（北東から）

2．29・30号土壙墓（東から）

▲ 土器溜り A（北東から）

細部 ▼

高杯（×$\frac{1}{3}$）

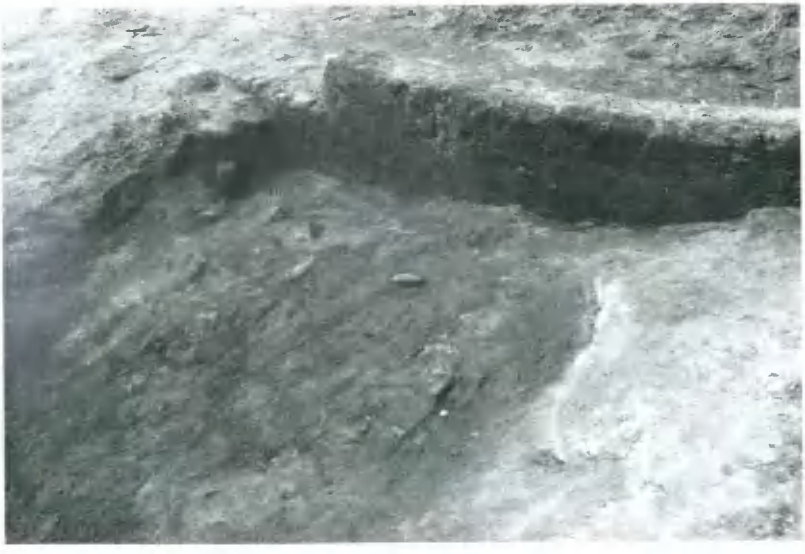
坩（×$\frac{1}{3}$）

図版42

1．3区丘陵中央部割石出土状態（南西から）

2．土器溜りB（北東から）

1．溝Ⅳおよび29・30号土壙（東から）



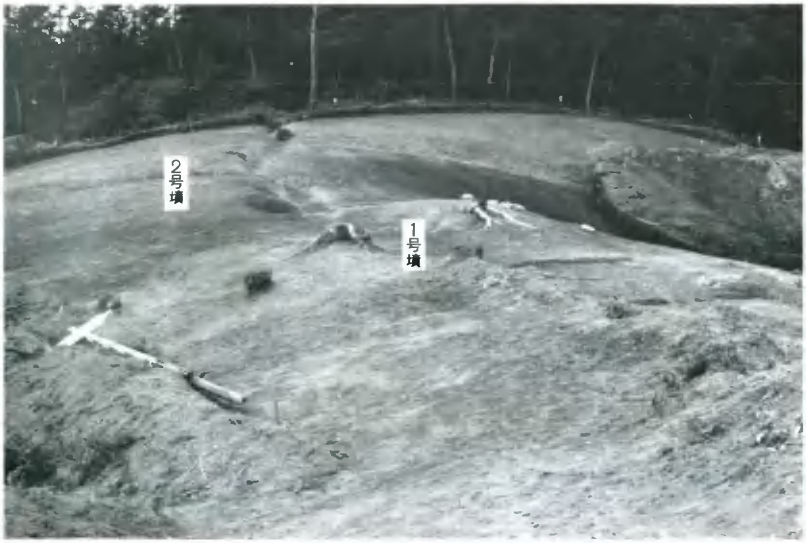
2．溝Ⅳ内石斧出土状態（北から）

図版44

1．溝V検出状況（北から）

2．溝V出土土師器出土状態（南から）

1．1・2号墳遠景（藤木城址から）



2．1・2号墳近景（南西から）

図版46

1．1号墳墳丘上集石（南西から）

2．1号墳主体部検出状況（北から）

1．珠文鏡出土状態（東から）

2．鏡背（実物大）

3．鏡面（実物大）

図版48

1．石槍

2．石斧

3．溝Ⅴ出土鉢形土器

4．溝Ⅴ出土坩形土器

5．1号墳出土直刀

6．昭和51年10月29日　3区遠景写真撮影

藤木城址（66）

例　　言

遺　跡　名　　藤木城址

所　在　地　　岡山県阿哲郡哲西町畑木

調査　期間　　昭和51年６月２日～同51年10月20日

調査担当者　　下澤公明・浅倉秀昭

報告書担当者　　下澤が主に当り，浅倉の援助を得た。

遺物図面保管場所　　岡山県教育庁文化課西古松分室

遺物は３分の１，他は個々にスケールを付した。

第１図は，建設省国土地理院の承認を得て，同院発行の50,000の１の地形図を複製したものである。
（承認番号）昭和53中複，第29号

調査中には下記の作業員の協力を得た。

黒笹義雄・藤村利雄・胡重寿美雄・横山万郎・実原慧喜雄・石迫操・村上整・西川道証・藤村吉久・原田忠一，橋本茂・児玉態雄・西川英一・佐々木薫・藤間登美子・西川愛子・藤村富枝・藤枝ヒサヨ・藤村艶子・胡重富貴子・藤原喜代子・土屋民子

目　　次

例　言
第１章　調査の概要…… 515
　第１節　遺跡の位置…… 515
　第２節　調査の概要…… 516
　第３節　日　誌　抄…… 516
第２章　藤木城址の調査…… 518
　第１節　斜面部の調査…… 518
　　１　南斜面…… 518
　　２　北斜面…… 523
　　３　東斜面…… 523
　　４　西斜面…… 524
　第２節　頂部の調査…… 524
　　１　土塁…… 524
　第３節　北谷部の調査…… 524
　　１　土塁…… 524
　　２　建物Ⅰ…… 527
　　３　建物Ⅱ…… 527
　第４節　出土遺物…… 528
第３章　城址以外の調査…… 529
　第１節　遺構…… 529
　　１　横口式石蓋土壙墓…… 529
　　２　土壙墓…… 530
　　３　不明遺構Ⅰ…… 531
　　４　不明遺構Ⅱ…… 531
　　５　貯蔵穴…… 532
　第２節　出土遺物…… 532
第４章　まとめにかえて…… 533

図　目　次

第１図　周辺城址分布図…… 515
第２図　藤木城址地形図…… 519
第３図　藤木城址遺構配置図…… 520
第４図　藤木城址グリッド設定図…… 521

第５図　第３トレンチ土層断面図…… 522
第６図　藤木城址トレンチ設定図……522—523
第７図　第1.8トレンチ（Ａ—５～Ｋ—５）土層断面図 ……522—523
第８図　第2.9トレンチ土層断面図 ……522—523
第９図　第５トレンチ（Ｈ—２～Ｈ—６）土層断面図…… 523
第10図　第６トレンチ土層断面図…… 523
第11図　第11トレンチ土層断面図…… 524
第12図　北谷部遺構配置図…… 525
第13図　建物Ⅰ …… 526
第14図　建物Ⅱ…… 527
第15図　横口式石蓋土壙墓…… 528
第16図　土壙墓…… 529
第17図　不明遺構Ⅰ …… 530
第18図　不明遺構Ⅱ …… 531
第19図　貯蔵穴…… 531
第20図　出土遺物…… 532
第21図　出土遺物…… 532

図　版　目　次

図版１—１　藤木城址遠景（南西より）
　　２　〃　〃　〃
図版２—１　藤木城址近景（北東より）
　　２　〃　〃　〃
図版３—１　第１トレンチ（南西より）
　　２　〃　〃　（北東より）
図版４—１　第２トレンチ（南西より）
　　２　第２・３トレンチ拡張区（南西より）
図版５—１　第９・10トレンチ（南西より）
　　２　〃　〃　（北西より）
図版６—１　第１トレンチ土層断面
　　２　第３トレンチ土層断面
図版７—１　第10トレンチ土層断面
　　２　第４トレンチ土層断面
図版８—１　北谷部調査前（北東より）
　　２　北谷部調査後（　〃　）

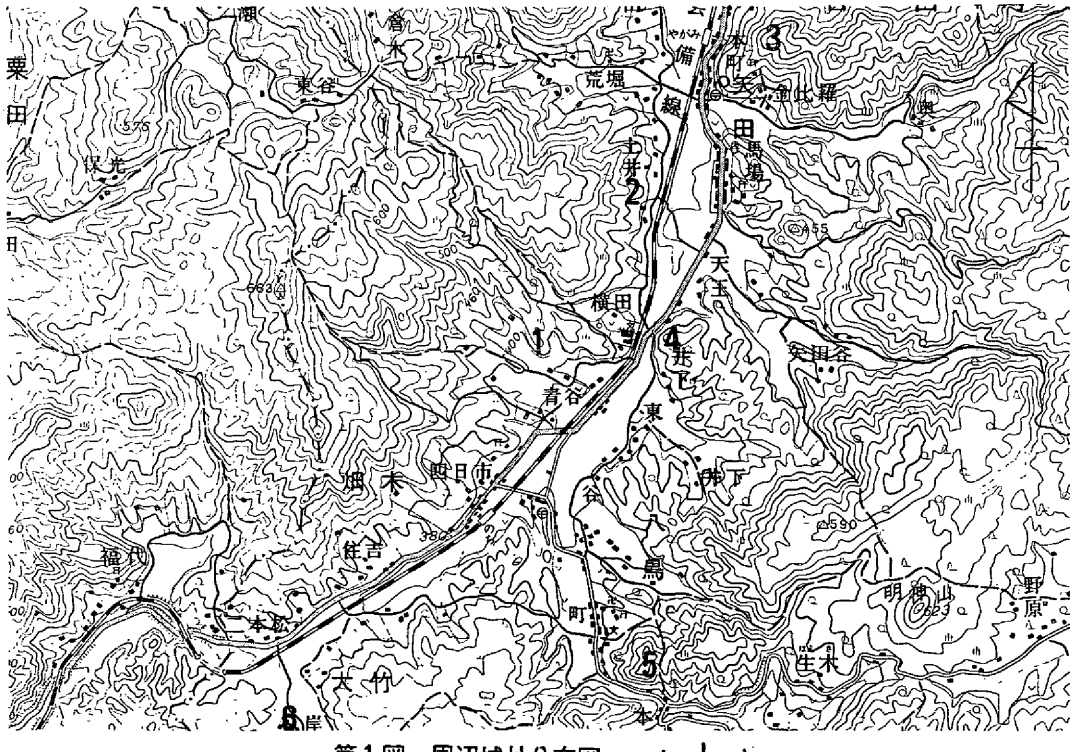
図版 9 －1　北谷部建物Ⅰ（南より）
　　2　北谷部建物Ⅰ（北より）
図版10－1　北谷部建物Ⅱ（南より）
　　2　〃　〃　（　〃　）
図版11－1　北谷部土塁
　　2　北谷部土塁断面
図版12－1　横口式石蓋土壙墓
　　2　〃　〃
図版13－1　〃　〃
　　2　土壙墓
図版14－1　不明遺構Ⅰ
　　2　〃
図版15－1　〃
　　2　出土遺物
図版16－1　昭和51年 6 月下刈り
　　2　昭和51年10月横田遺跡 4 区より

第１章　調査の概要

第1節　遺跡の位置

藤木城址は，岡山県阿哲郡哲西町畑木に所在する。中国縦貫自動車道路においては，ＳＴＡ―39＋00～ＳＴＡ40＋00の100m間である。

神代川沿いの狭長な沖積地に向って樹枝状にのびる第三紀層の丘陵上に占地する。藤木城址の占地する丘陵は，西北から東南へのびる独立丘陵を人工的に造成することによって築かれている。城址西側は比較的広く奥行のある谷水田となり，その比高は39mあまりを測る。東側は，幅15mほどの谷が入り込んでいる。北側は，北から連続する丘陵の狭い鞍部を削平し，城址頂部との連続を断っている。このように藤木城址は，東・南・西は自然地形を利用し，北は削平することにより周辺との隔絶



第１図　周辺城址分布図　$\left(\frac{1}{50000}\right)$

1．藤木城址　　2．土井城址　　3．万石城址

4．豆木城址　　5．西山城址　　6．岸本城址

をはかっている。

第１図に示した横田の丘陵部分は東から張り出す丘陵と伴に神代川の流路が最も狭まる地形となっている。この東側の丘陵上に豆木城址が占地する。この地点より約700ｍ西へ入ったところに藤木城址が占地するのである。藤木城址頂部からは，哲西町内において最も広い沖積地を形成し，さらに緩やかな丘陵斜面が続く野馳地区を眼下に眺めることができるのである。

第2節　調査の概要

藤木城址は，丘陵頂部と西側鞍部において造成がみられ，このほか南・北・東については何らの造成をおこなっていない状況を示していた。このような現状観察から，南・北・東の各斜面についてトレンチ調査を主体におこない，頂部については遺構の存在が考えられたので全面表土剝ぎをおこなう方向で調査に入った。

南斜面には３本のトレンチを設け，そのうちの２本は北斜面と連続させ縦断面とした。第１トレンチにおいては，Ｂ－５グリッドの中央部分に黒色土上面に人為的に固められた面が確認された。第２トレンチでは，第１トレンチで確認された人為的に固められた面が２ケ所について認められた。さらに第３トレンチでは，第１・２トレンチとは異なり第三紀層面を若干削ることによりフラットの面を造り出している部分が３ケ所において認められた。

北斜面の２本のトレンチにおいては，造成面は認められなかった。

北谷部については，グリッド５のラインから北と南とで５ｍほどの高低差があり，さらにほぼ垂直に北から南へ落ち込んでいる。そしてこの南部分は，かなり広い平坦部を造成していることをうかがわせるのに十分な地形を示していた。このことから第７トレンチを設け遺構の確認にあたり，その結果，建物２棟と土塁を検出した。

城址頂部については，全面の表土剝ぎをおこない遺構の検出につとめたが，城址に伴う遺構は調査前に観察されたＬ字状に存在する土塁のみが認められただけである。他は，古墳時代関係の遺構が認められたにすぎない。

第3節　日　誌　抄

昭和51年６月２日（水）～７月８日（金）　外部委託の地形測量を予定していたので，事前に立木の伐採を完了しておく必要があった。このため，清水谷遺跡の調査の見通しが立ったので立木の伐採を主に調査に入る。

７月９日（金）　立木伐採がほぼ終了したので，城址の全景写真撮影後，南斜面にトレンチを設定し本格的調査に入る。

７月12日（月）～17日（土）　第１トレンチのＣ－５～Ｄ－５にかけて第三紀層が２ｍあまり下が

って行くため，その土層断面の中間に水分を含むと崩壊しやすい黒色土層（黒ボコ）が堆積する。そのためその周辺を若干拡張し掘り下げ，D－5において造成面を確認する。

第2トレンチを設定し，掘り下げ。

7月19日（月）～24日（土）　第1トレンチ掘り下げ完了。土層断面写真撮影。拡張部分が崩壊する危険がおこり，E－5～C－5の間の土層断面図を作成する。

第2トレンチ掘り下げ完了，写真撮影

第3トレンチ設定し，掘り下げる。下方部分で柱穴らしきものを確認したので，A－3およびC－3グリッドを拡張する。

7月26日（月）～31月（土）　A－3およびC－3グリッドを掘り下げた結果，人為的な遺構は検出されなかった。また第1トレンチで観察された黒色土層の上面まで造成するが，黒色土層（黒ボコ）そのものには手を加えていないことが第3トレンチにおいても認められた。

8月2日（月）～7日（土）　H－5・3のグリッド線上に幅50cmの土層観察用の畔を残し，城址頂部の全面調査をおこなう。

8月9日（月）～14日（土）　城址頂部表土ハギ。岸本城址の調査が始まり作業員の不足から，6名に藤木城址より行ってもらうことになった。

8月16日（月）～21日（土）　城址頂部の遺構検出作業

北斜面に第9トレンチ及び北谷部に第10トレンチを設け，掘り下げる。

8月23日（月）～28日（土）　G－4グリッドにおいて，横口式石蓋土壙墓を検出する。写真撮影，実測完了。

第9トレンチの谷部北よりに袋状の Pit を検出する。

第10トレンチ掘り下げ。

8月30日（月）～9月4日（土）　H－4グリッドにおいて土壙墓2基検出する。

第8トレンチを設定し掘り下げ。

9月6日（月）～11日（土）　第10トレンチ北側部分を拡張する。

9月13月（月）～18日（土）　第7トレンチから，釘，青磁などを検出する。

9月20日（月）～25日（土）　第7トレンチにおいて，柱穴が検出されたためこの平坦部を全面排土をすることにした。

9月27日（月）～10月2日（土）　北谷部表土剝ぎ。

10日4日（月）～9日（土）　北谷部の表土剝ぎを完了し，遺構検出をおこなう。

10月11日（月）～16日（土）　遺構検出の結果，建物2棟を認める。

10月18日（月）～20日（水）　柱穴の実測，建物の西南隅に確認された土塁の実測をもって藤木城址の調査を終了する。

第２章　藤木城址の調査

第1節　斜面の調査

1　南　斜　面

南斜面は，等高線のほぼ400ｍラインで丘陵斜面の角度を強くしている。そのライン下方での角度が18°～20°，そして上方の角度は32°～35°を測ることから知られよう。

第１トレンチは，Ａ－５～Ｆ－５にかけての長さ60ｍのものである。Ｃ－５およびＤ－５にかけ造成面が確認された。この造成面は，明らかに自然堆積土層と考えられる第７層黒色土層（黒ボコ）の部分においておこなわれている。したがって，この第７層は，この上面で第15層灰褐色粘質土層がほぼ水平に叩きしめられ，さらに，Ｄ－５＋６ｍより上方の堆積土について，その堆積状態から当然存在する第７層がみられない。このような土層の観察からＤ－５半ばにおいて，第３紀層近くまでの自然堆積土を除き，あらたに第７層上面に平坦面を造成していることが理解されたのである。

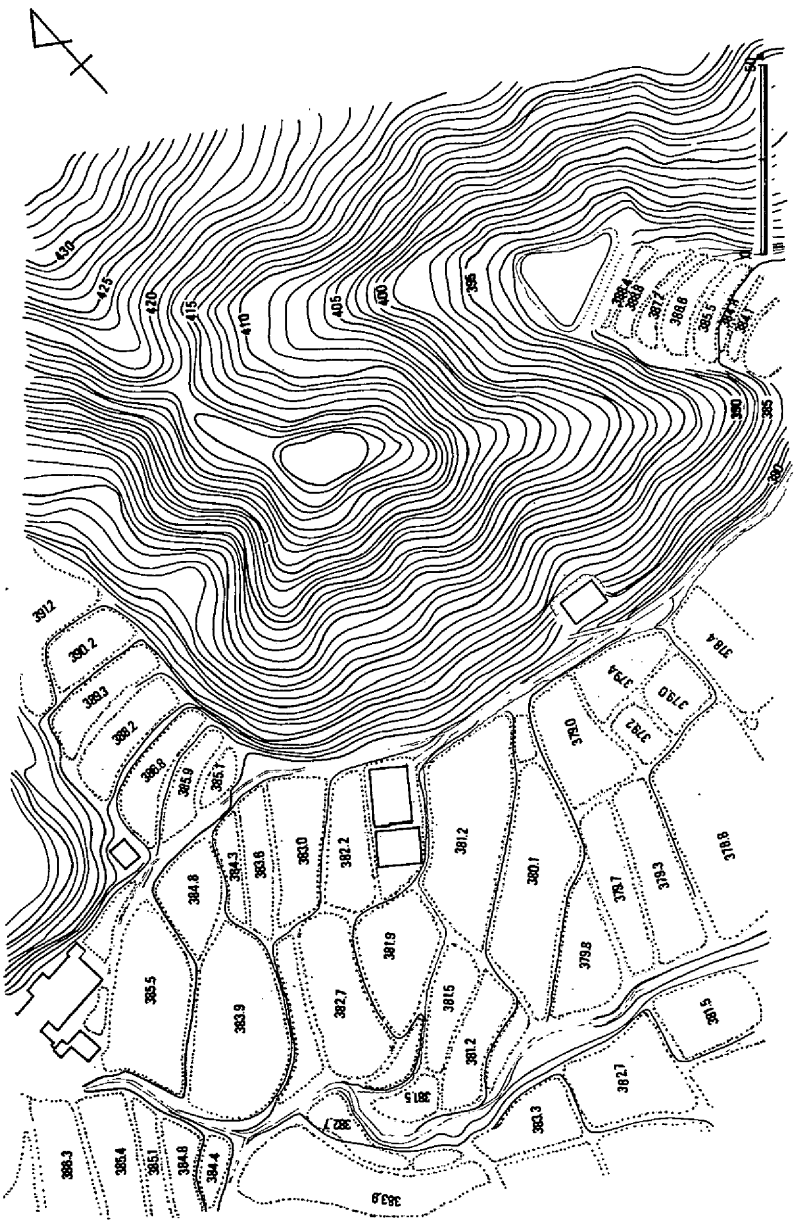
なお，第３紀層の断面がＣ－５＋２ｍ～Ｄ－５＋６ｍにかけて凹状となり，図においても大きな掘を想定される。しかしながら，この部分の土層断面の状態から人工的なものとは考えられない。この南斜面の第１トレンチから東北にかけて低くなってゆく地形を示していることと対応するものと考えられるのが妥当であろう。

第２トレンチは，斜面の等高線の流れからＡ－４とＧ－３グリッドにかけて，斜めに設定した。このトレンチにおいては，第１トレンチで観察された状態の版築状の面は認められなかった。しかしながら，第３紀層を削平し平坦部を造り出した所が３ケ所認められた。この３ケ所は，幅50㎝～60㎝ほどであり遺存状態はよくないが下方の２ケ所については比較的良く遺存している。

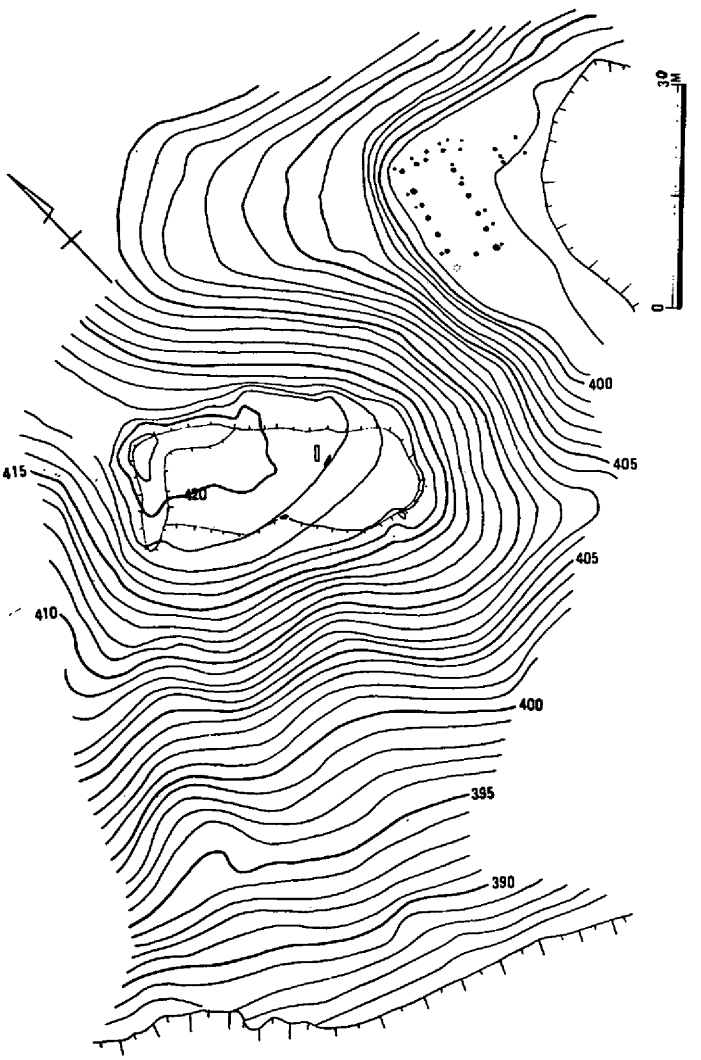
第３トレンチは，２ケ所において第１トレンチと同様な方法によって平坦部を造っている。上方の平坦部はＤ－２グリッドに認められるもので，第７層黒色土（黒ボコ）を排土し，第４・５層によって固めている。下方の平坦部はＣ－２グリッドに認められ，やはり第７層を取り除くことにより造成している。この２ケ所とも第７層の途中から上方の堆積部分が明らかに排土されていることが観察された。

この他に，下方の平坦部より３ｍほど南のＣ－３グリッドポイント近くに幅２ｍ，深さ１ｍ余りの溝が確認された。この溝は，第２・３トレンチ間のＣ－３グリッドを拡張した際には確認されなかった。土層断面に検出された層序から藤木城址に伴うものと考えるが，具体的な内容は不詳である。

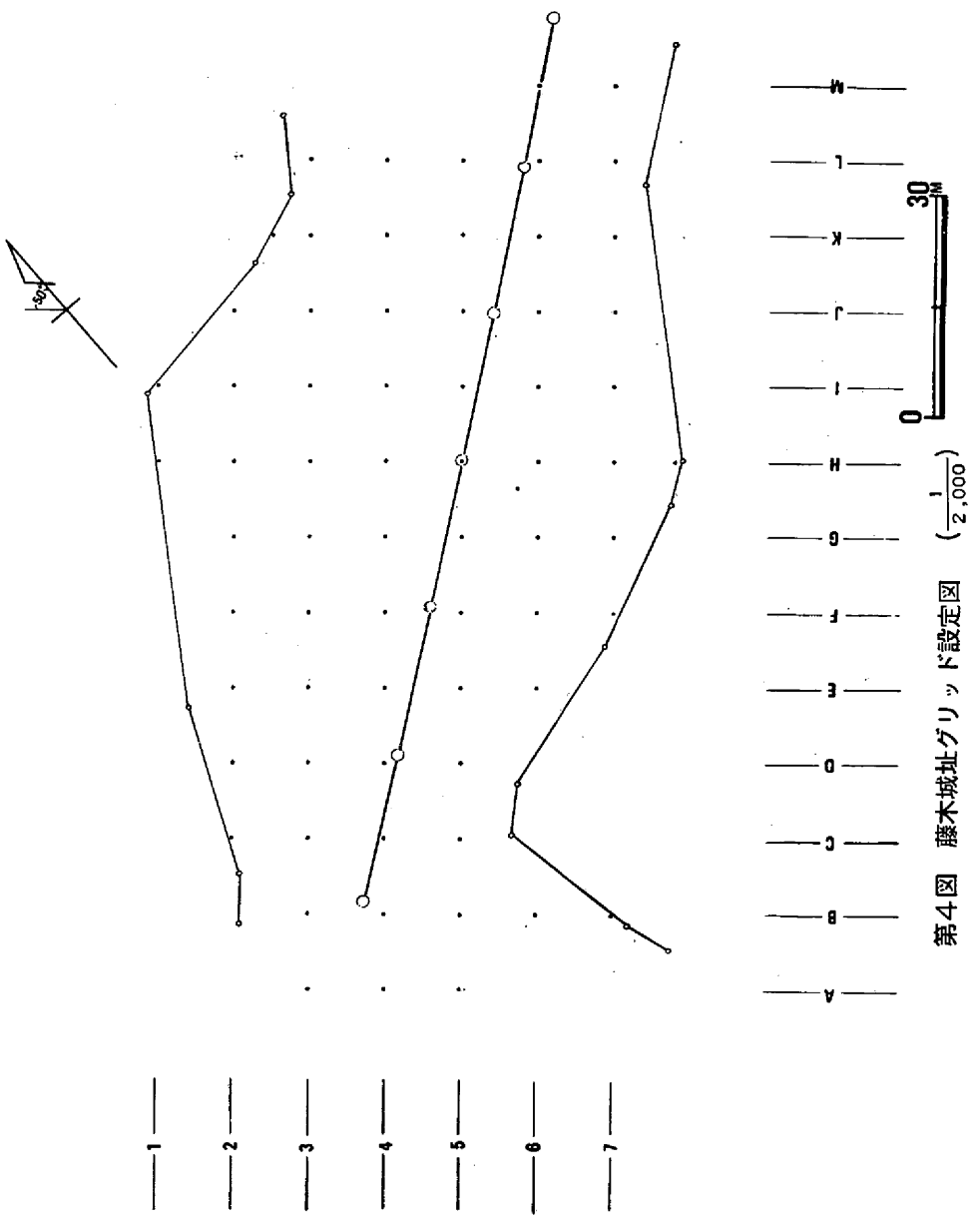
なお，第７層下にみられる溝状のものは，その層序から明らかに藤木城址に伴うものではない。しかしながら，溝の状態は砂の互層となり，水の流れた状況を示しており，藤木城址以前の遺構というより自然の流水により形成されたものとして考えた方がより妥当であろう。



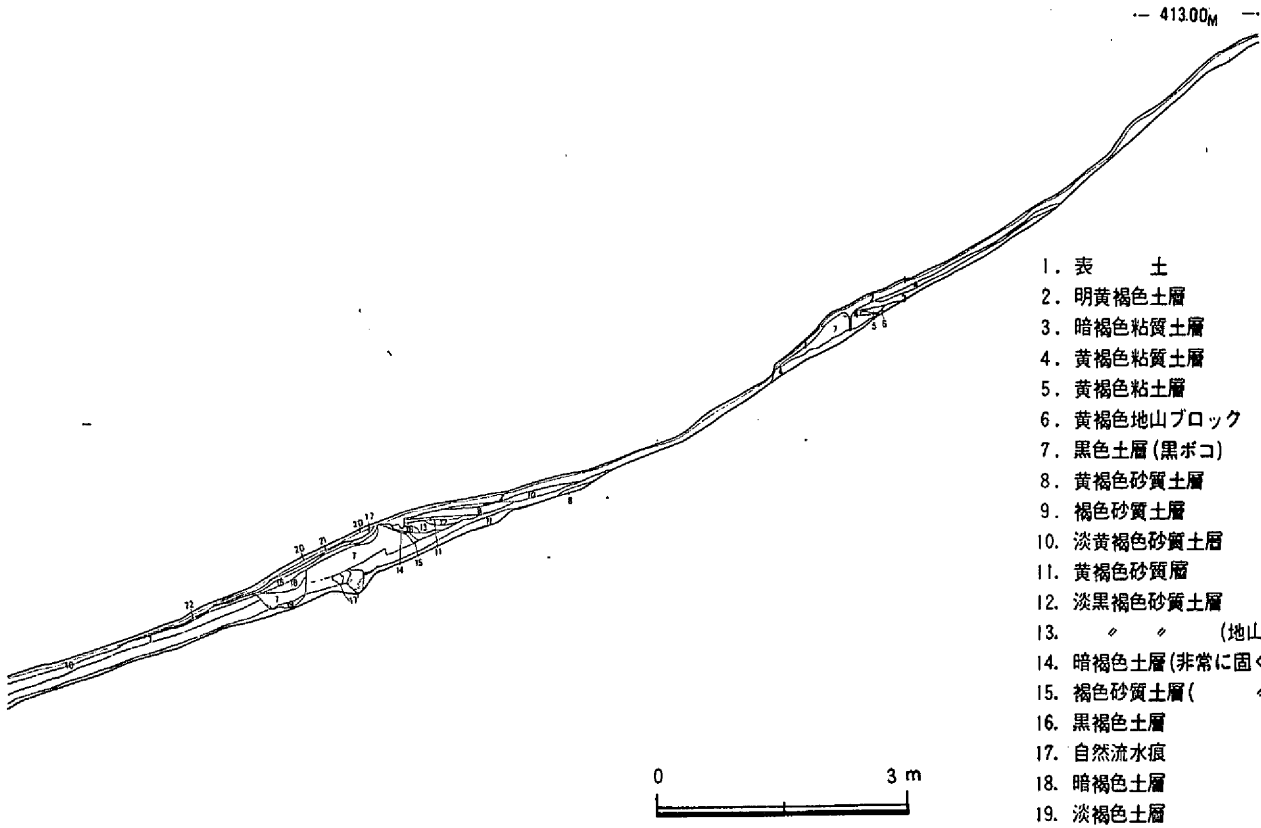
第2図　藤木城址地形図　（1/2,000）



第３図　藤木城址遺構配置図　$\left(\frac{1}{1,000}\right)$

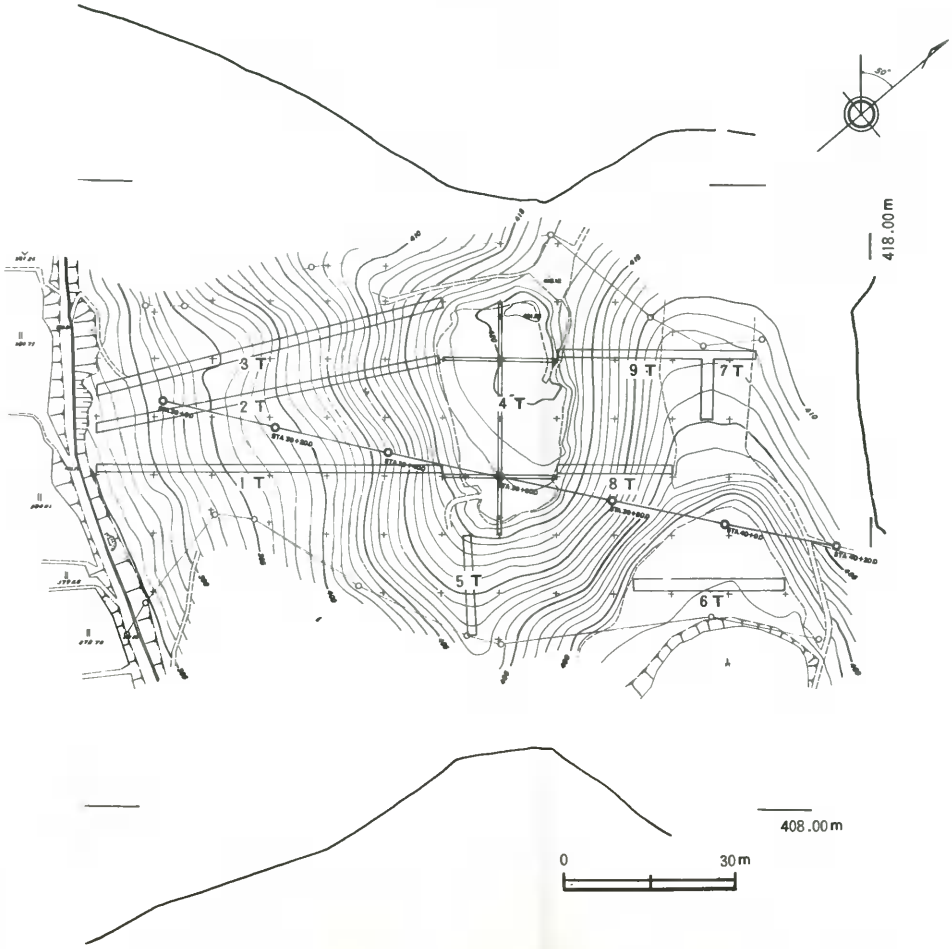


第４図　藤木城址グリッド設定図　（1/2,000）



1．表　　土
2．明黄褐色土層
3．暗褐色粘質土層
4．黄褐色粘質土層
5．黄褐色粘土層
6．黄褐色地山ブロック
7．黒色土層(黒ボコ)
8．黄褐色砂質土層
9．褐色砂質土層
10．淡黄褐色砂質土層
11．黄褐色砂質層
12．淡黒褐色砂質土層
13．　〃　〃　　(地山ブロックを含む)
14．暗褐色土層(非常に固くシメられている)
15．褐色砂質土層(　　〃　　〃　)
16．黒褐色土層
17．自然流水痕
18．暗褐色土層
19．淡褐色土層
20．淡黒褐色粘質土層
21．黄色土層（地山粒を多く含む)
22．淡黒褐色土層（　〃　〃　)

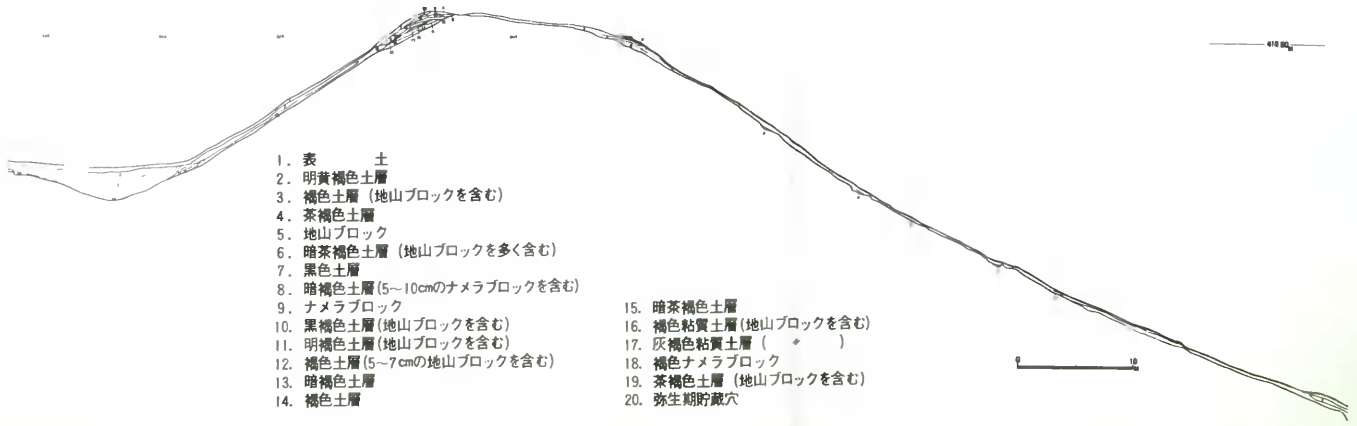
第８図　第３トレンチ土層断面図



第6図　醸木城址トレンチ設定図（$\frac{1}{2,000}$）

1．表　　土
2．明黄褐色土層
3．暗黒褐色土層
4．暗黄褐色粘質土層
5．茶褐色土層（粒子が荒い）
6．褐色土層（叩きシメられている）
7．黒色土層
8．暗黒褐色砂質土層
9．褐色ブロック
10．茶褐色土層（暗褐色土のブロックを含む）
11．褐色砂礫層
12．褐色土層（石粒を多く含む）
13．暗黄褐色粘質土層（石粒を多く含む）
14．暗茶褐色粘質土層
15．灰褐色粘質土層（黒色ブロックを含む）
16．〃　　〃
17．淡黒褐色土層
18．淡茶褐色粘質土層
19．暗茶褐色土層
20．褐色粘質土層
21．淡黒色土層
22．暗茶褐色砂質土層
23．地山ブロック
24．暗黒褐色土層（地山粒を含む）
25．暗褐色粘質土層（　〃　）
26．〃　　〃　（　〃　砂を含む）
27．褐色粘質土層（　〃　）
28．礫層
29．淡黄褐色土層（地山粒を多く含む）
30．黄褐色粘質土層

第7図　第1・8トレンチ（A・5～K・5）土層断面図



1．表　　土
2．明黄褐色土層
3．褐色土層（地山ブロックを含む）
4．茶褐色土層
5．地山ブロック
6．暗茶褐色土層（地山ブロックを多く含む）
7．黒色土層
8．暗褐色土層（5～10cmのナメラブロックを含む）
9．ナメラブロック
10．黒褐色土層（地山ブロックを含む）
11．明褐色土層（地山ブロックを含む）
12．褐色土層（5～7cmの地山ブロックを含む）
13．暗褐色土層
14．褐色土層
15．暗茶褐色土層
16．褐色粘質土層（地山ブロックを含む）
17．灰褐色粘質土層（　〃　）
18．褐色ナメラブロック
19．茶褐色土層（地山ブロックを含む）
20．弥生期貯蔵穴

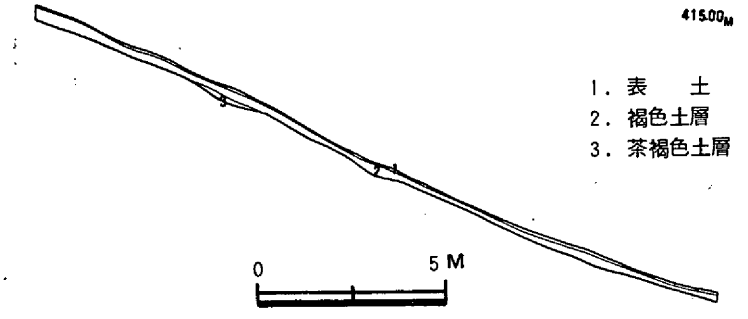
第8図　第2・9トレンチ土層断面図

2 北　斜　面

第８トレンチはＩ－５～Ｊ－５の20m，第９トレンチはＩ－３～Ｌ－３＋５mの35mの２本のトレンチを設定する。２本のトレンチとも，２層～３層の堆積を示し，南斜面で観察された造成面は確認されなかった。このことは，南斜面が中腹まで比較的緩やかな傾斜を持つのに対し，北斜面の第８トレンチでは35°そして第９トレンチでも30°というきつい角度を有している。したがって人工的防禦の造成は必要でなかったことが知られる。

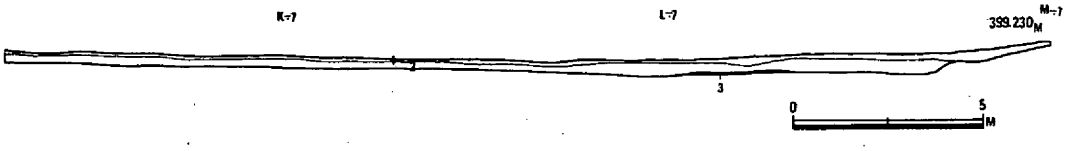
3 東　斜　面

城址頂部の平坦部から東南に向かって次代に高さを低くするにつれて鞍部の幅がより狭さを増してゆく。この部分に第５トレンチを設け調査をおこなったが，基本的堆積土は２層であり，人工的な造成は認められなかった。



1．表　土
2．褐色土層
3．茶褐色土層

第９図　第５トレンチ土層断面図



1．表　土
2．暗茶褐色土層
3．黒色土層（地山粒を含む）

第10図　第６トレンチ土層断面図

城址頂部に造成された平坦部の西北隅に連続する鞍部を幅７ｍほどに旦って平坦に削り出している。長さは15ｍほど北西へ続くが，それより先については自然の鞍部が緩やかに下がって行き横田遺跡（註）の丘陵に連なって行く。

この平坦部の表土剝ぎをおこなったが，表土下10㎝ほどで第３紀層に達し，精査をおこなったが遺構は認められなかった。

註　岡田博，秀島貞康『横田遺跡』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告23」岡山県教育委員会　1977年３月

第２節　頂部の調査

城址頂部は，西北と北東にかけて「Ｌ」字状に存在する土塁を認めるのみである。平坦部の造成は，第７図および第９図に土層断面図に示される如く，頂部を平坦に削平する過程において発生する残土を用いてより広く平坦部を造り出していることが観察された。このようなことから規模は，西北一東南は33ｍ，南西一北東14ｍを測るものである。

４　西　斜　面

西北から北東にかけてＬ字状に幅３ｍ，高さ60㎝ほどのものが存在する。西北辺については，緩やかに稜線が下がる所から４ｍほど水平に延長させて造られている。土塁に用いられている堆積土は，いずれも第三紀層のブロックを多く含む層よりなっている。このことから，頂部の削平により発生した残土により造られたことがうかがわれる。

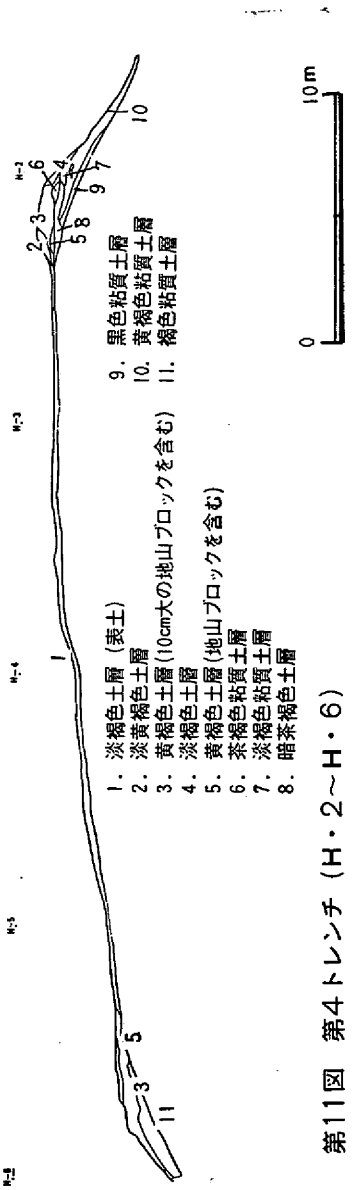
第３節　北谷部の調査

谷部は，グリッドの５の線上の西と東でその様相が大きく異なる。西側部分は，緩やかな傾斜を示す谷部特有の自然地形を示すのに対し，東側部分については，西との高低差が３ｍあまりありほぼ垂直に斜面を切って平坦部を造成している。

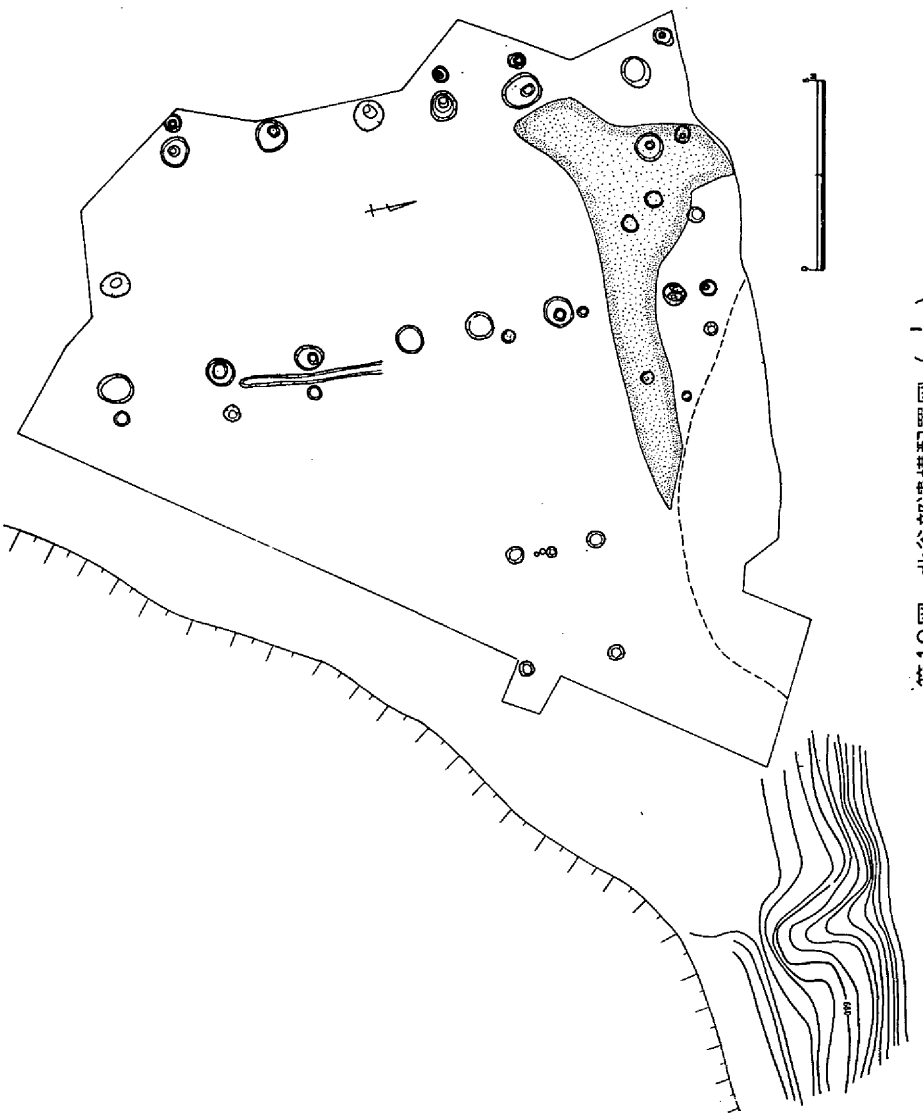
１　土　　塁

谷部の北東隅に南北に沿って長さ５ｍ・幅１ｍ，高30㎝あまりの小規模な土塁である。

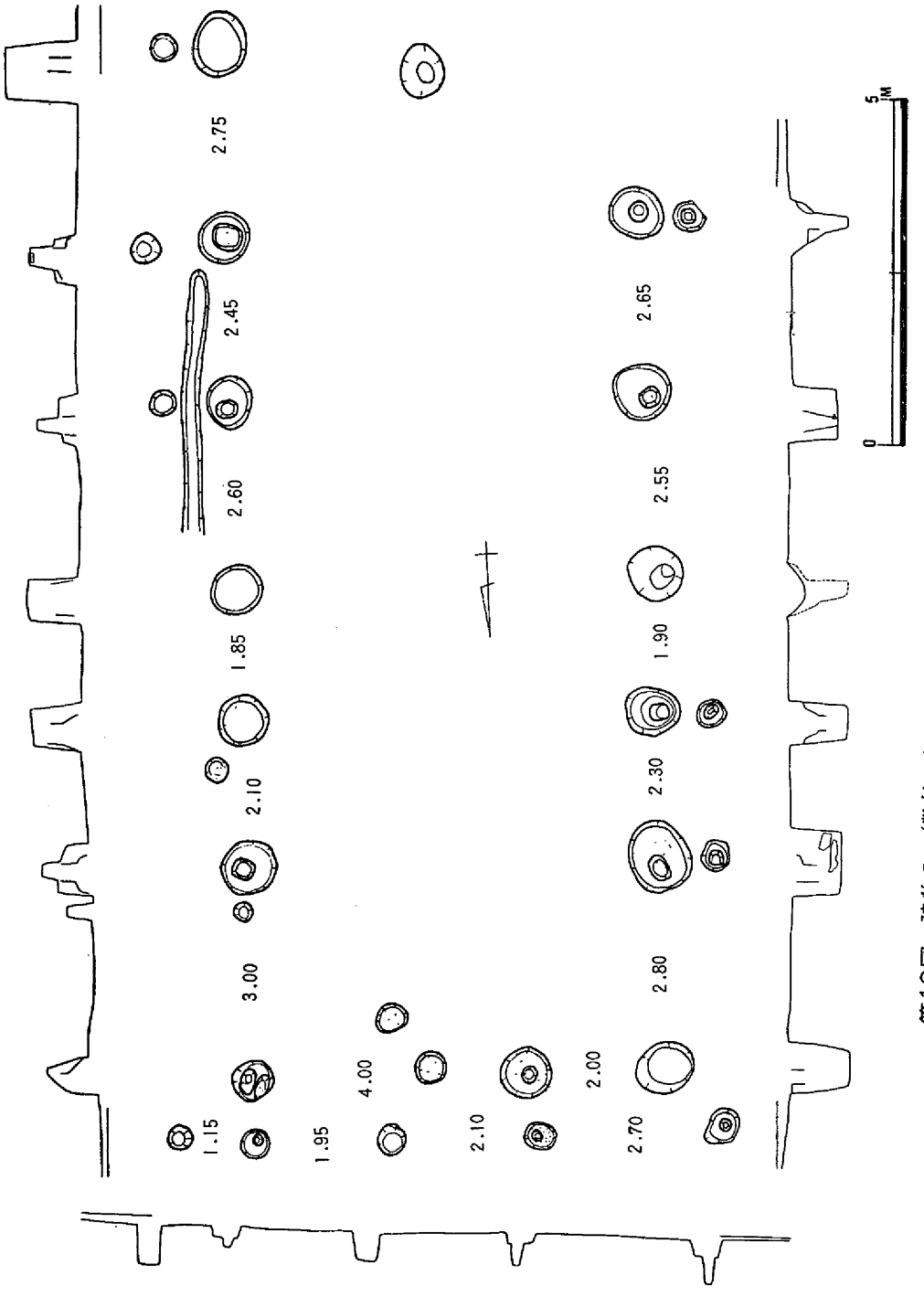
断面観察により，旧地表の上に50㎝ほどの褐色土を用いて土塁



第11図　第４トレンチ（Ｈ・２～Ｈ・６）



第12図　北谷部遺構配置図（$\frac{1}{200}$）



第13図　建物Ⅰ（数値は柱間距離）

としている。

2 建　　物 Ⅰ

西側の谷斜面を垂直に切り落した所に建てられたものであり，規模は2間×6間のものである。方位はN—0.5°—Eをとる。

北梁は2m—4mを測り，南梁は2.70mを測るが，未掘があり推定値である。西桁は2.80m—2.30m—1.90m—2.55m—2.65mである。東桁は3m—2.10m—1.85m—2.60m—2.45m—2.75mをそれぞれ測る。

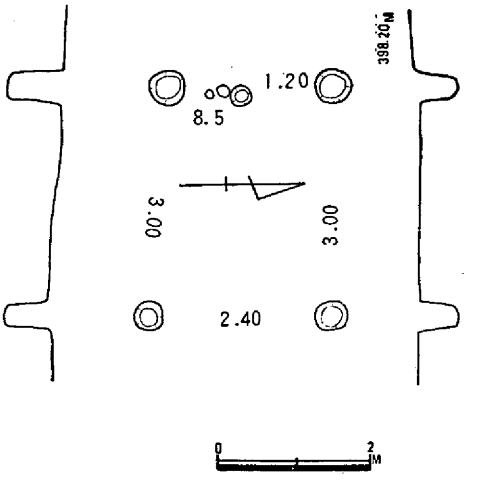
柱穴の掘り方は，二段掘りと素掘りの2通りがみられ，中には石がおかれているものも存在する。

西・北・東に建物を囲むように小規模の柱穴が存在する。西桁に並行する柱穴のうち2ケ所欠落しているが，調査の排土の関係からそれ以上の追求が不可能であった部分である。したがってこの部分においても柱穴が存在していることは容易に推定される。北梁に並行するものは2.70m—2.10m—1.95m—1.15mの4間のものである。東桁は，南よりの3本が並行するが，北よりの2本については建物の柱穴に接するようにうがたれている。この2本の柱穴は，北東よりに2本の柱穴があることから，何らかの施設が考えられよう。

3 建　　物 Ⅱ

建物Ⅰと土塁とのほぼ中間に位置し，規模は1間×1間のものである。西2.15m，東2.40mで南北はいずれも3mを測る東西に長い建物である。柱穴の掘り方は，いずれも素掘りである。

この建物は，その内容から一般的な用途に用いられた建物ではなく，別な目的として建られたものと考えるのが妥当である。建物Ⅰとの関係は，建物の東桁の柱穴と建物Ⅱとのその距離は20尺を測る。



第14図　建物Ⅱ（数値は柱間距離）

第4節　出　土　遺　物

ここでの出土遺物は，城址関係に伴うものについて述べる。藤木城址に伴う遺物は非常に少く，第9トレンチ出土の土師質土器，北谷部の建物周辺より出土した青磁片・楔・釘などがある。

土師質土器（第20図－1）は，口径13.7cm，底部径7cm，器高3.7cmを測るものである。ロクロは右回転を示し，底部からの立ち上がり部分にヘラ削りが観察された。内面底は，刷毛のナデがみられる。色調は灰白色，焼成は良好であり，胎土は砂質を多く含んでいる。

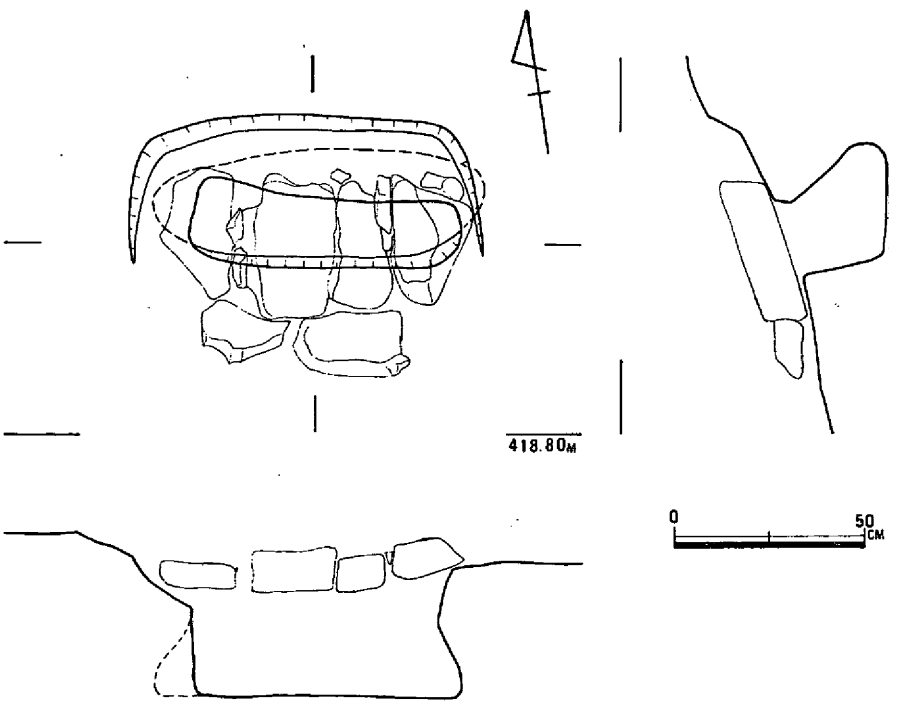
火舎（第20図－2）と考えられるものである。推定径10cmを測る。口縁部近くに沈線と沈線の間に菱形のスタンプ文を施している。

釘（第21図－1）は，建物Ⅰの柱穴より出土したものである。断面形は方形を呈し，頭部は平らたくのばし，その部分を折り曲げて造っている。

釘（第21図－2）は，上記のものと同様に建物Ⅰの柱穴より出した。その形態は，前者のものと同じである。

不明鉄器（第21図－3）は，直径3.1cm，厚さ9cm～10cmを測る円形のものである。

楔（第21図－4）は，長さ7cm，幅2cm～1.9cm，厚さ1cm～3cmを測るものである。遺存の状態は極めて良い。



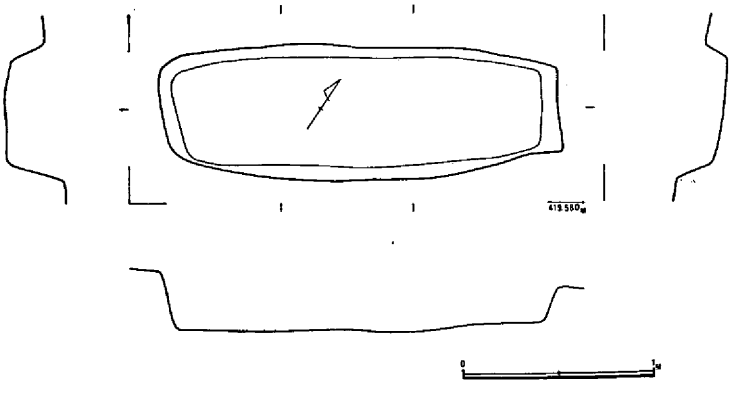
第15図　横口式石蓋土壙墓

第３章　城址以外の調査

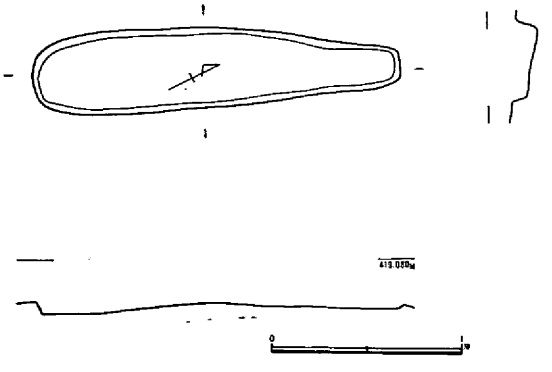
第1節　遺　　構

1　横口式石蓋土壙墓

H－5グリッドにおいて検出されたものである。規模は，掘り方0·91m×0·37m，墓壙上端0·69m



1号土壙墓



2号土壙墓

第16図　土壙墓

×0.19m，墓壙床面0.86m×0.29m，深さ0.48mを測るものである。

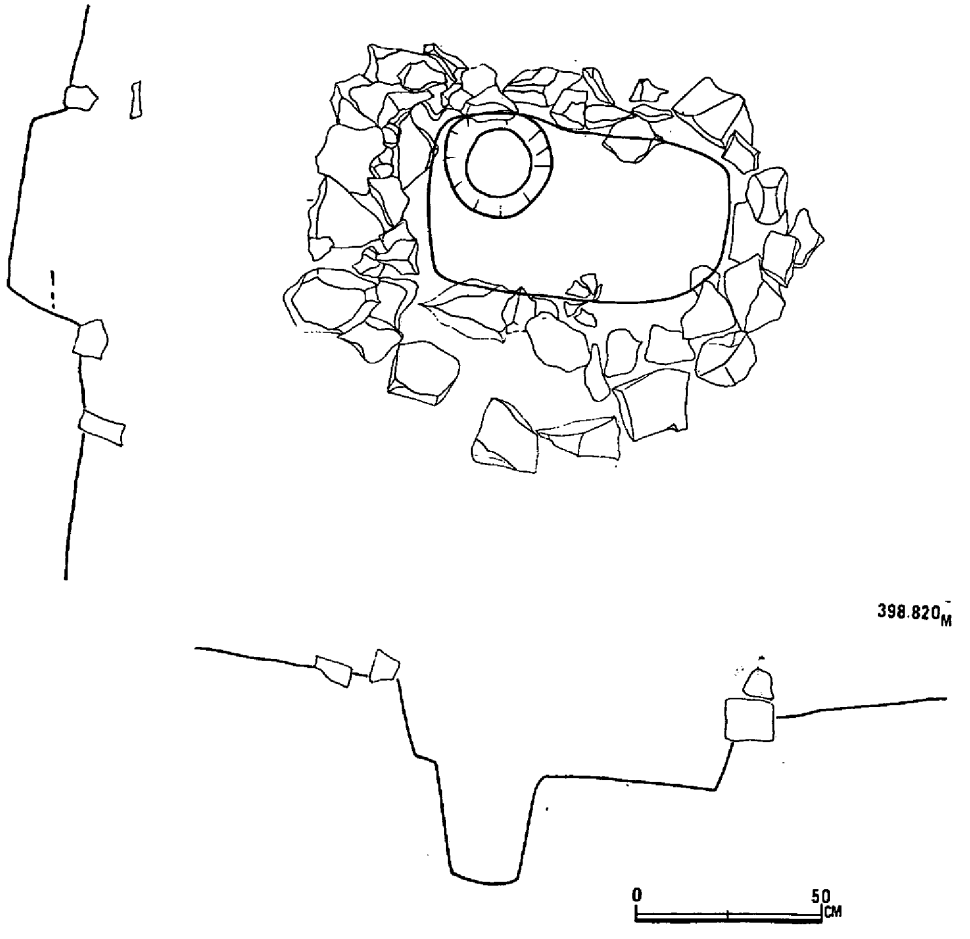
城址頂部の南斜面にかかる位置にあり，北を一段掘り込んで掘り方としている。したがって掘り方は「コ」字状を呈する。蓋石は，長さ35cm～32cm，幅19cm～23cm，厚さ11cm～7cmの比較的整った4個の石を墓壙上においている。さらにその南に2個の石が並行する形でならべられていた。

墓壙は垂直に掘り下げて床面を造っておらず，南辺を除き他は，墓壙掘り方よりも6cm～14cmほど内に入りこんでいる特異な形態を呈するものである。

2 土　壙　墓

I－4グリッドにおいて2基検出されたものである。

1号土壙墓は，規模2.07m×71cm，深さ25cmを測るものである。土壙内には黄褐色ブロックが入っ



第17図　不明遺構I

ており，木棺痕跡は認められなかった。

2号土壙墓は，規模1.96m×42cm，深さ18cmを測るものである。形態は両短辺とも円味を有するが，特に北短辺については城址造成の際に削平された可能性が考えられる。土壙内の状態は1号土壙墓と同じであった。

3　不明遺構Ⅰ

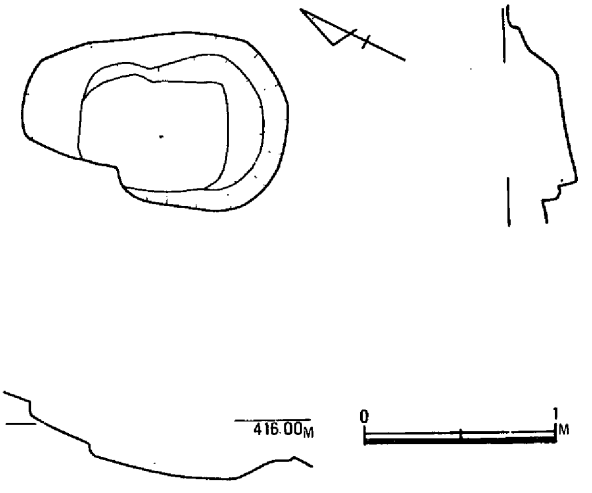
北谷部の建物調査中に，調査にきている作業員より，過去にⅠ—7グリッド附近において五輪塔があり，その下を掘ったところ土器などが出さしたとのことであった。このことから，一応この部分について地表観察をした結果，石の露出が認められ上記の話しの如く，何らかの遺構の存在が考えられる為一応の調査をおこなった。

遺構は，掘り方の周辺に角礫を巡ぐらしており，16cmほど掘り下げた所でコーナーよりに深さ30cmほどの穴を掘っている。出土遺物は角礫とほぼ同一レベル附近で皿を一点出土している。

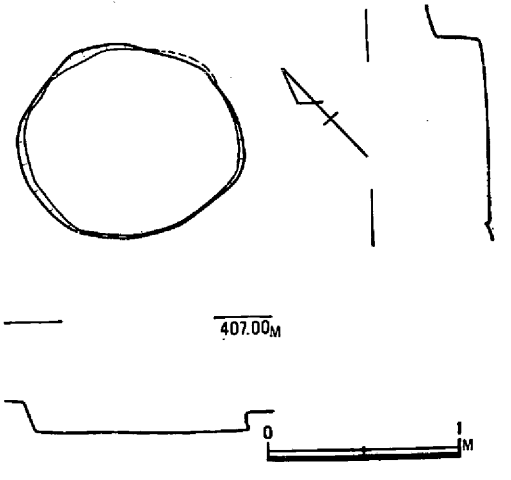
五輪塔の存在から，当城址に関係する遺構と考えられ，墓と考えるのが妥当であろう。

4　不明遺構Ⅱ

G—5グリッドにおいて，城址頂部の稜線検出作業中に検出したものである。規模は1.30m×90



第18図　不明遺構Ⅱ

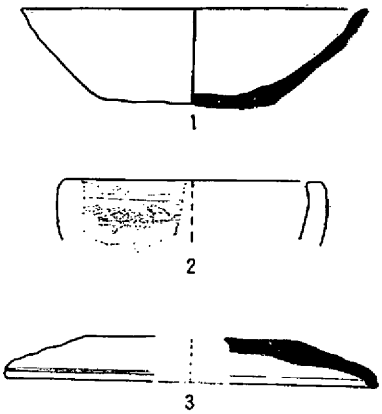


第19図　貯蔵穴

cm，深さ25cmほどを測る楕円形のものである。西北辺を除いて二段の掘り方を呈している。遺物など検出されず時期の判断は出来ないが，城址造成時に発生した地山ブロックを除去した後に検出していることから，城址よりも時期的に遡ることがいえる。

5 貯　蔵　穴

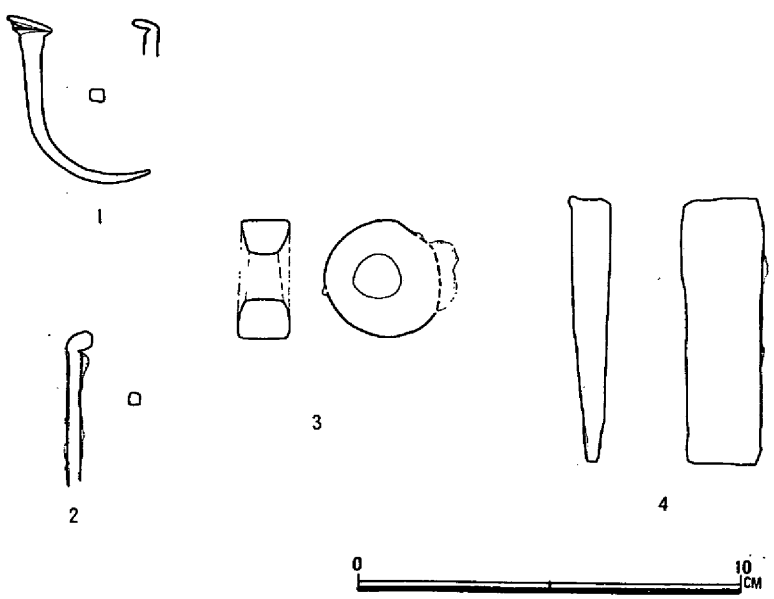
第9トレンチの北谷部端に検出されたものである。規模は1.20mの円形を呈するもので深さは遺存状態の比較的良い北東側で20cmなどである。東側でやや袋状の形態を示すが，全体の遺存状態がよくなく判断をしかねる。



第20図　出土遺物（1・3：$\frac{1}{3}$，2：$\frac{1}{2}$）

第2節　出　土　遺　物

第20図―3は，第1トレンチ表土中より出土したものである。ほぼ3分の1の破片であり，ツマミなどは欠失している。ロクロ回転方向は左である。



第21図　出土遺物　（$\frac{1}{2}$）

第４章　まとめにかえて

藤木城址は，その時期を判断する出土遺物が極めて少ない。城址に伴うと考えられるものは土師質土器，青磁片，釘だけである。したがって遺物からの時代の判断は困難である。しかし青磁は，その特徴から元～明代のものと考えられる（註）ことから，おおよその年代が推定することが可能である。

文献における藤木城址は，その名は見あたらない。ただ，畑木村に所存する城址として「藤林城」という名がみえる。この藤林城が今回調査した藤木城址と同一のものであるとどうかについて判断する資料をもっていない。

この問題を明確にするため阿新地域の戦国期の様相をみておきたい。

阿新地域における戦国期の支配は，大永年間～享禄年間（1521～1531）の尼子氏の美作備中進出により大きな影響を受けた。この進出は，安芸における毛利氏の備中進出と相い対するものであった。しかしながら，永録９年（1566年）毛利氏が尼子義久を敗ることにより両者の政争に終止符をうった。このような状勢から，永禄11年（1568年）毛利氏の援けにより三村氏が新見荘を押領したことから三村氏の阿新地域の経営が始まるのである。

三村氏は本拠を備中松山城におき，実質的支配を樋城においたものと考えられる。したがって，この時期において阿新地域における城址は，三村氏の支配下におかれたものと考えるのが妥当であろう。

以上が第１期の動乱であったとすれば，続く第２期は，三村氏の毛利氏への逆心であり，織田氏と毛利氏との中国地方支配をかけての展開であったことがいえよう。三村氏の毛利氏への叛は，毛利氏の備中地方の直接支配に乗り出す契機をつくったことになる。

三村氏と毛利氏との戦いは，天正三年正月阿新地域の拠点である樋城が落ち，続いて同年６月に三村氏の備中支配の拠点である松山城を陥す。ここにおいて，三村氏の阿新支配は終りをつげ，毛利氏による支配がおこなわれる。

阿新地域におけるこのような戦国期の展開は，藤木城址とどうかかわったであろうか。文献にみられる阿新地域の支配は三村氏によることから一つの目安になることがいえよう。何故ならば，藤木城址の出土遺物からその創建の時期を導き出すことはまず不可能である。したがって，戦国期の様相と遺構の内容からその廃絶期を推定することは可能である。

藤木城址と同じ地にある藤林城主が天正元年の備中松山城が陥ちた際に籠城していたことが見られる。このことから，三村氏に属していたと考えられる阿新地域の城は備中松山城陥落以前に毛利方に陥されていたであろう。さらにゆえば，天正三年正月の樋城陥落以前といえるであろう。

藤木城址は調査の結果から，戦いにより火を受けたという状況ではなく，城を引き払ったと考えるほうがよさそうである。前述した出土遺物の状況がいえるであろう。

今回調査した藤木城址と藤林城とはいかなる関係にあるのであろうか。両者とも同一地域にあり時

期も大差がないと考えるのである。藤木城の西北に続く丘陵斜面を三段に造成したと見られる城址が存在している。この城址については，地元の人には全く知られていないということであった。規模内容からすれば藤木城址より抽んでいる。このようなことから推測すれば，本来の藤木城址の奥に所存するものであったのが，丘陵先端部に位置し，周辺からの眺望が可能な藤木城として，奥の城址と全く別ものとしてみられた結果によるものであったと考える。

したがって，文献にみられる藤林城は藤木城址と一体のものと考えられ，両者とも同じ城郭の内に含まれるものと推測するのである。

註　青磁の年代は，京都国立博物館美術室長河原正彦氏による。

1．藤木城址遠景（南西より）

2．藤木城址遠景（南西より）

図版２

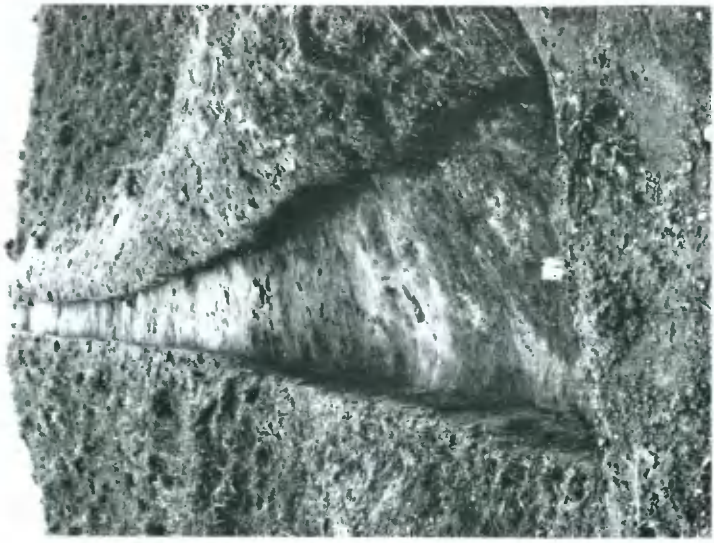
１．藤木城址近景（北東より）

２．藤木城址近景（北東より）

1．第1トレンチ（北東より）

2．第1トレンチ（南西より）

図版４



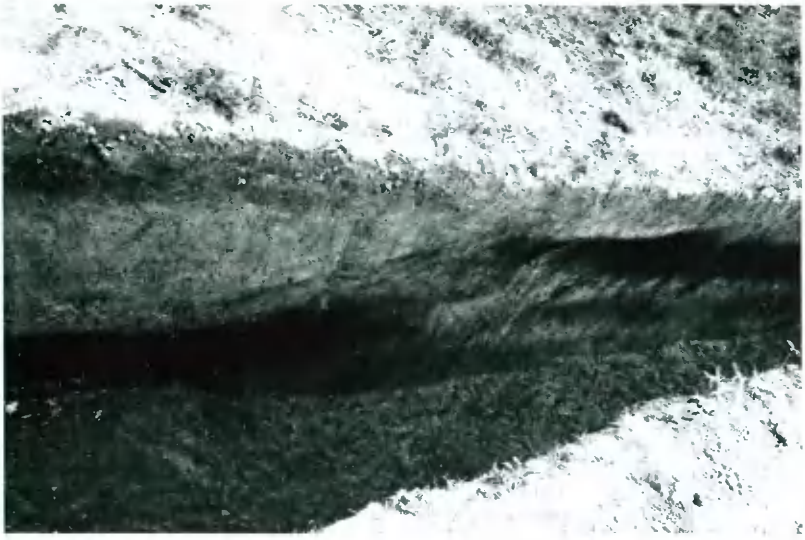
1．第２トレンチ（南西より）

2．第２・３トレンチ拡張区（南西より）

1．第9・10トレンチ（南西より）

2．第9・10トレンチ（北東より）

図版６



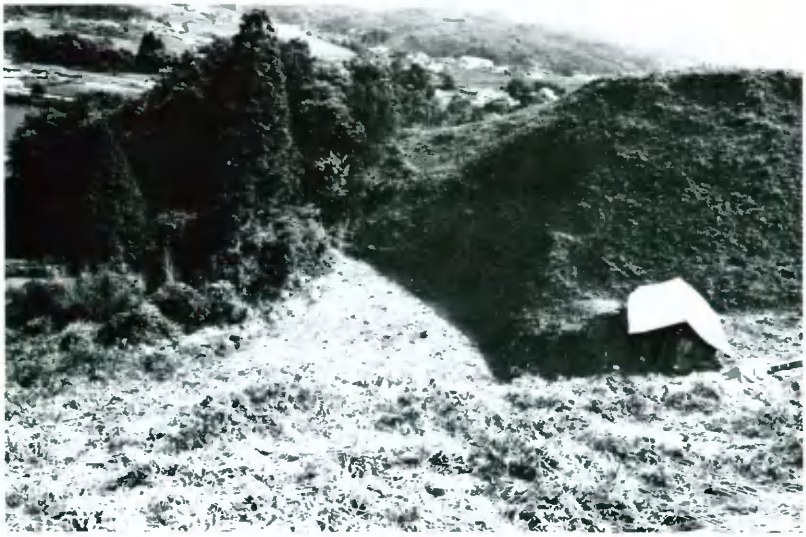
１．第１トレンチ土層断面

２．第３トレンチ土層断面

1．第10トレンチ土層断面

2．第4トレンチ土塁断面

図版８



１．北谷部調査前（北東より）

２．北谷部調査後（北東より）

１．北谷部建物Ⅰ（南より）

２．北谷部建物Ⅰ（北より）

図版10

1．北谷部建物Ⅱ（南より）

2．北谷部建物Ⅱ（南より）

1．北谷部土塁

2．北谷部土塁土層断面

図版12

1．横口式石蓋土壙墓

2．横口式石蓋土壙墓

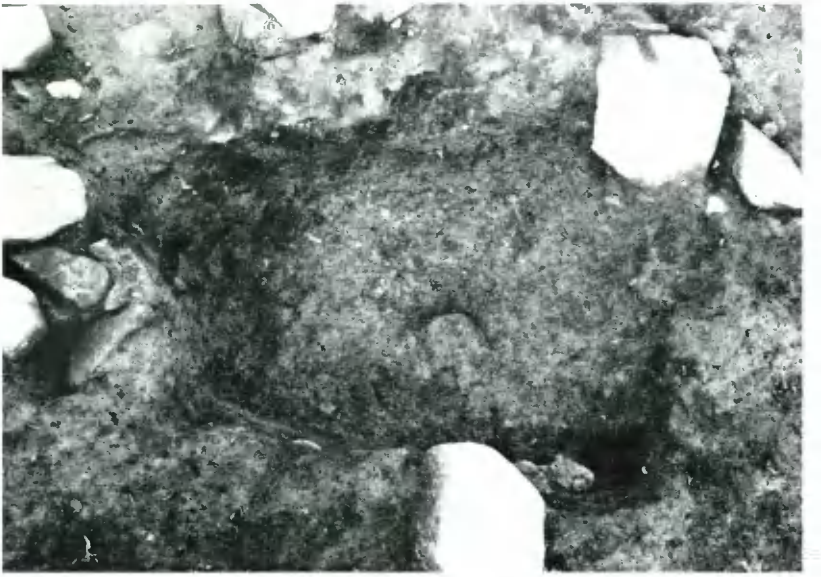
1．横口式石蓋土壙墓

2．土壙墓

図版14

1．不明遺構

2．不明遺構



1．不明遺構

2．出土遺物

図版16

1．昭和51年6月　下刈り

2．昭和51年10月　横田遺跡4区より

忠田山遺跡（68）

例　　言

遺跡の所在地　岡山県阿哲郡哲西町大字畑木字四日市

調査期間　昭和51年6月15日～昭和51年10月20日

調査期間の前半は，塚の峯遺跡の調査に並行して発掘作業を実施した。

調査期間の後半は，横田遺跡の調査に並行して発掘作業を実施した。

調査担当者　福田正継・中野雅美

発掘調査面積　2775㎡

発掘調査予定地内の町道部分は，調査できなかった。

報告書担当者　福田正継・中野雅美

第1・2章は福田が執筆した。第3章は，第1節を主として中野が執筆し，そのほかを福田が執筆した。第4章は，第1節を中野が執筆し，そのほかを福田が執筆した。№1住居址からは土器が多量に出土したため，観察表で説明を行った。

中野は，岡山市の旭川放水路改修工事に伴って発掘調査が実施されている百間川遺跡を担当しながら，報告書の作成を行った。

遺跡，遺物の考察では，伊藤　晃・葛原克人・高橋　護・竹田　勝・正岡睦夫各氏から有意義な御教示を得た。

遺構の製図では，浜本早苗氏に手伝っていただいた。

土器の拓本は，難波和児氏にお世話になった。

遺物の整理復原・原稿の清書では，主として横田益代・平井和江・細田美代子・近藤友子・山尾真由美各氏にお世話になった。

図面遺物管理　岡山市西古松265　岡山県教育庁文化課分室にて保管している。

調査参加者　麻月千代・生熊武夫・生熊寿子・井上和夫・井上嘉弥代・小川恒雄・小田艶子・川上好友・川上初子・佐々木文一・渋川雅雄・竹本法文・竹本久人・立河一重・田辺浄二・津田正志・土屋トヨ子・南部誠吉・三上愛恵・村上高代・森島幹子・安田一之・安田三四子・山本美夫・横田愛子・横田益代・横山勅恵・横山正美・横山道子各氏にお世話になった。

なお遺跡の調査中には，特に地元の川上好友・深井喜佐美・横田高男各氏に御支援をたまわりました。

哲西町教育委員会には種々の点でお世話になった。

総　目　次

第１章　遺跡の地理的環境…… 557
第２章　調査の経過…… 559
第３章　遺構・遺物について…… 563
　第１節　住居址…… 563
　第２節　建物・柵…… 577
　第３節　井戸…… 589
　第４節　溝・溝状遺構…… 590
　第５節　土壙…… 594
　第６節　集石遺構…… 600
　第７節　そのほかの遺構…… 601
　第８節　不明土壙…… 602
　第９節　遺構に伴わない遺物…… 603
第４章　まとめにかえて…… 609
　第１節　住居址と出土遺物について…… 609
　第２節　建物について…… 610
　第３節　溝について…… 611
　第４節　土壙について…… 613
　第５節　不明土壙について…… 613

表　目　次

表－１　遺構一覧表……561～562
表－２　№１住居址出土土器観察表……564～567
表－３　忠田山遺跡検出建物規模一覧表…… 585

図　目　次

第１図　忠田山遺跡周辺地形図…… 558
第２図　忠田山遺跡遺構配置図……560・561
第３図　№１住居址…… 563
第４図　№１住居址出土遺物（１）…… 564
第５図　№１住居址出土遺物（２）…… 568
第６図　№１住居址出土遺物（３）…… 569
第７図　№２住居址…… 570
第８図　№２住居址出土遺物…… 571

第９図　№３住居址…… 572
第10図　№３住居址出土遺物…… 573
第11図　№４住居址…… 574
第12図　№４住居址出土遺物…… 575
第13図　忠田山遺跡建物・柵配置図…… 577
第14図　№11建物…… 578
第15図　№12建物…… 579
第16図　№13建物…… 580
第17図　№14建物…… 580
第18図　№15建物…… 580
第19図　№16建物…… 581
第20図　№17建物…… 582
第21図　№18建物…… 583
第22図　№19建物…… 584
第23図　№19建物出土遺物…… 586
第24図　№20建物…… 586
第25図　№21柵…… 587
第26図　№23井戸…… 588
第27図　№24井戸…… 588
第28図　№23井戸出土遺物…… 589
第29図　№24井戸出土遺物…… 589
第30図　№９溝…… 591
第31図　№10溝…… 591
第32図　№22溝…… 592
第33図　№５土壙…… 595
第34図　№６土壙…… 595
第35図　№７土壙…… 595
第36図　№28集石土壙…… 596
第37図　№29集石土壙…… 597
第38図　№29集石土壙出土遺物…… 598
第39図　№26集石遺構…… 600
第40図　№27集石遺構…… 600
第41図　№25古道断面図…… 601
第42図　№35鍛冶炉…… 601
第43図　不明土壙分布図…… 602

第44図　遺構に伴わない遺物（１）…… 604
第45図　遺構に伴わない遺物（２）…… 606
第46図　遺構に伴わない遺物（３）…… 608
第47図　風倒木痕形成模式図…… 612

図　版　目　次

図版１－１　忠田山遺跡遠景
　　２　忠田山遺跡遠景
図版２－１　忠田山遺跡土層断面
　　２　２区土層断面
図版３－１　忠田山遺跡全景
　　２　忠田山遺跡１区全景
図版４－１　№１住居址土層断面
　　２　№１住居址遺物出土状況
図版５－１　№１住居址遺物出土状況
　　２　№１住居址
図版６－１　№２・３住居址
　　２　２区Ａ地点全景
図版７－１　№４住居址土層断面
　　２　№４住居址
図版８－１　№11建物
　　２　№14建物
図版９－１　№13建物
　　２　№14・15建物
図版10－１　№16建物
　　２　№16建物
図版11－１　№20建物
　　２　№19建物遺物出土状況
図版12－１　№23井戸
　　２　№24井戸
図版13－１　２区Ａ地点近景
　　２　№28集石土壙
図版14－１　№29集石土壙
　　２　№29集石土壙の溝
図版15－１　№26集石遺構
　　２　№27集石遺構
図版16－１　№25古道
　　２　№35鍛冶炉
図版17－１　№46・47不明土壙
　　２　№46・47不明土壙
図版18－１　№57不明土壙
　　２　№58不明土壙
図版19－１　№59不明土壙
　　２　№63不明土壙
図版20－１　№70不明土壙
　　２　№72不明土壙
図版21　№１住居址出土遺物（１）
図版22　№１住居址出土遺物（２）
図版23－１　№１住居址出土遺物（３）
　　２　№４住居址出土遺物
　　３　№29集石土壙出土遺物
　　４　№23井戸出土遺物
　　５　№19建物出土遺物
図版24　遺構に伴わない遺物

第１章　遺跡の地理的環境

忠田山遺跡は，岡山県阿哲郡哲西町大字畑木字四日市に所在する（註１）。

遺跡の所在する哲西町は，神郷町，哲多町，備中町に境を接して，中国山地の分水嶺に位置しており，西方向は広島県比婆郡東城町になる。分水嶺から高梁川に流れる神代川が，蛇行しながら哲西町内を横断して，流域周辺にわずかな水田が存在している。農業を主体にした地域であるとはいえ，険しい山が多いために，林業も行われている。

哲西町は，哲西中学校の地点を境にして矢神地区と野馳地区に別れているが，忠田山遺跡は，野馳地区に古くから存在している長谷寺の北方向に位置する（第１図）。国道182号線が国鉄芸備線と交差する地点に張出した舌状丘陵の斜面の地点であるから，この忠田山遺跡と同様に中国縦貫自動車道建設に伴って発掘調査が実施された横田遺跡（註２），藤木城址（註３），大倉遺跡（註４），御供川遺跡（註５）を望むことができる。北方向には谷水田が広がり，南方向は丘陵の間の深い谷地形になっている。東方向の丘陵正面には，野馳地区の肥沃な沖積平野を望むことができ，西方向は山麓の緩斜面になっている（図版１）。このように忠田山遺跡の所在する位置は，沖積平野に面した舌状丘陵の斜面であるから，比較的立地条件に恵まれた場所であると考える。

発掘調査を実施する範囲の中央部分には，遺跡を分断する東西方向の町道があり，北東端は町道と青谷川によって隔絶されている（第１・２図，図版３）。南西端には長谷寺の壇家の墓地が造成されて，地山面が露出していた。調査予定地内の地目は畑地で，主として菜園に利用されていた。

発掘調査に着手する以前に行われた現地踏査によって，青磁や須恵器の破片と鉄滓が採集され，また遺跡周辺の農家の屋号に鍛冶に関係した名称が多い（註６）ことなどから，中世の鍛冶集団の集落址が存在することが推察された。

註

（１）田仲満雄「阿哲郡哲西町の地理的歴史的環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（15）岡山県教育委員会　1977年

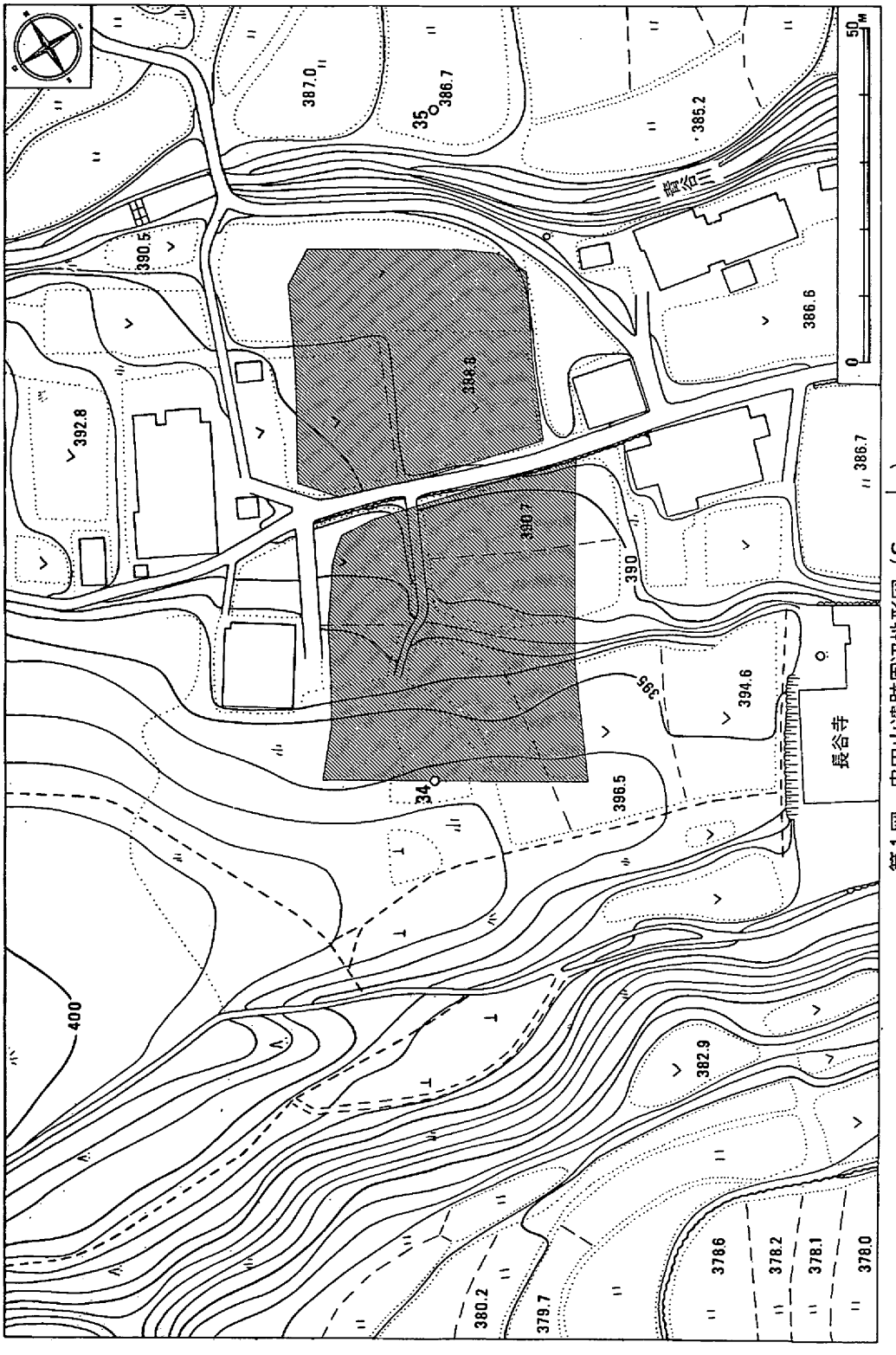
（２）岡田　博・秀島貞康他「横田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（23）岡山県教育委員会　1978年

（３）下澤公明・浅倉秀昭「藤木城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（23）岡山県教育委員会　1978年

（４）松本和男・友成誠司「大倉遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（20）岡山県教育委員会　1977年

（５）松本和男「御供川遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（21）岡山県教育委員会　1977年

（６）地元の横田　正氏の御教示による。



第1図　忠田山遺跡周辺地形図（S＝1/1000）

第２章　調査の経過

発掘調査以前に行われた遺跡の分布調査によって，『丘陵末端の緩斜面に青磁・須恵器・鉄滓の散布がみられ，中世の集落址が予想される。』という結果が示され，中国縦貫自動車道予定地内のセンター杭ＳＴＡ34＋00～34＋80の延長80ｍが，調査範囲に決定された。

哲西町大字大竹字塚の峯に所在する塚の峯遺跡（註１）の調査中に，調査員２人で忠田山遺跡の現地に行き，調査範囲を確認するとともに，調査の進め方を検討した。調査範囲に接する部分の地権者と地元の住民の人々に挨拶まわりを行い，調査の目的を理解していただき，協力をお願いした。

調査範囲内の南西端には，墓石やテレビのアンテナが移転されずに残っており，畑には収穫期を目前にした野菜やお茶の木が植えられたままであったから，関係者を尋ねて，調査開始前に移転または移植してもらうように要請した。

塚の峯遺跡の調査が終末になると，人手に余裕ができたので，作業員の人達を２組にした。そして男性の作業員の人を主体にした班が，発掘調査の作業に必要な道具や器材の運搬を行い，休憩小屋と道具小屋を建てながら，忠田山遺跡の下草刈りに着手した。したがってしばらくの期間は，塚の峯遺跡と忠田山遺跡の調査を並行して行わなければならないから，２人の調査員が２箇所の遺跡を別々に担当することになったのである。

なお忠田山遺跡周辺の中国縦貫自動車道路線内には，休憩小屋や道具小屋を建てる適地がなかったので，横田高男氏にお願いして，忠田山遺跡の発掘調査が完了するまで，遺跡に隣接した空地を利用させていただくことになった。また川上好友氏には，測量器材や写真機等を預かってもらい，毎日の飲料水をいただいた。横田氏と川上氏の御厚意に感謝したい。

下草刈りの作業を進めていたときに，調査範囲内に町道と平行して，２本の簡易水道が埋設されていることを知らされた。山麓で自然の湧水を溜て，遺跡周辺の農家へ生活用水として送っているものであるから，発掘作業で切断しないように，掘出して表面に露出させた。

忠田山遺跡周辺は，中国縦貫自動車道路線の境界部分がなかなか決まらなかった地点であるため，日本道路公団の図面を参考にしても，理解できない部分が多かった。したがって中国縦貫自動車道関係の地元代表者である深井喜佐美氏に現地へ来ていただき，境界部分の地権者の立会いのもとに，決定している正しい境界を線引きしてもらった。

下草刈りの作業を終了したのちに，道路予定地内のセンター杭ＳＴＡ34＋00とＳＴＡ34＋80を結ぶ線を基準にして，遺跡全体に20×20ｍのグリッドを設定した。調査の過程で必要があれば，さらに４×４ｍのグリッドに分割することにした。また調査予定地が広範囲な緩斜面であるから，海抜高を求めるのが困難であると判断されたので，調査範囲の北東端に388ｍから396ｍまで，１ｍごとにレベルポイントを設定した。

調査範囲を便宜的に１区から３区まで分割した（第２図）。１区は，遺跡を南北に分断している町道の北側部分である。ここは川上好友氏宅の北東方向になる。２区は，町道の南側部分で１区に続く

緩斜面になる。ここは横田高男氏宅の東方向である。3区は，長谷寺北西方向の丘陵上である。各区とも道路予定地内のセンター杭を結ぶ基準線を境にして，北東側をA地点，北西側をB地点にした。

忠田山遺跡の調査と並行して調査を継続していた塚の峯遺跡は，作業員の人が半減したこともあって，なかなか調査を完了させることができなかった。したがって忠田山遺跡では，男性の作業員の人達を主体にした班で，1区から3区までを結ぶ基準線方向（第2図のA—B）のトレンチと，各調査区で基準線に直交する方向（第2図のC—D，E—F，G—H）のトレンチを掘開した。その結果，1区では柱穴群と溝を検出した。2区では柱穴群と土壙を検出した。3区では溝と井戸を検出した。このように各調査区とも全面に遺構が存在している可能性があるから，2人の調査員で協議を行い，調査予定地の全体を全面調査しなければ遺跡の性格が判明しないという結論に達した。

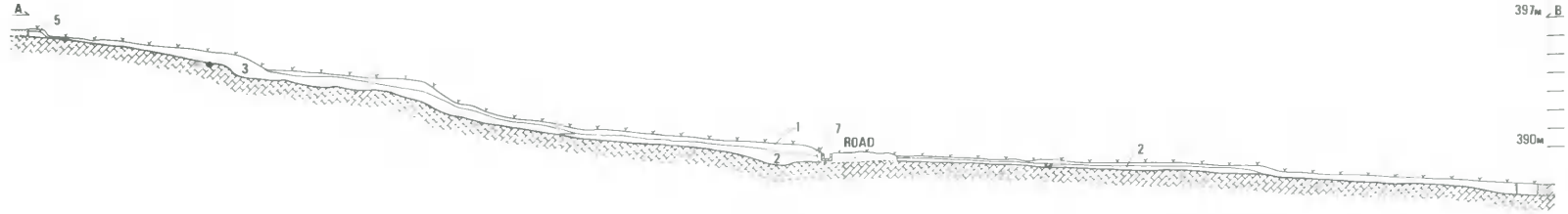
中国縦貫自動車道建設の工事工程によって，忠田山遺跡の北端に位置する青谷川の架橋工事が，この遺跡の調査期間中に進められることになった。ところがこの忠田山遺跡の調査は，塚の峯遺跡の調査と並行して行っていたから，作業員の人数が半減しているうえに，2区の調査区では遺構面までの堆積土が厚かった（図版2—2）ので，人力だけで調査を進めると長期間が必要であると考えられた。それで，この遺跡の所在する区間の工事を行うことになっている清水建設株式会社にお願いして，重機の力を借りて2区の表土除去作業を行った。

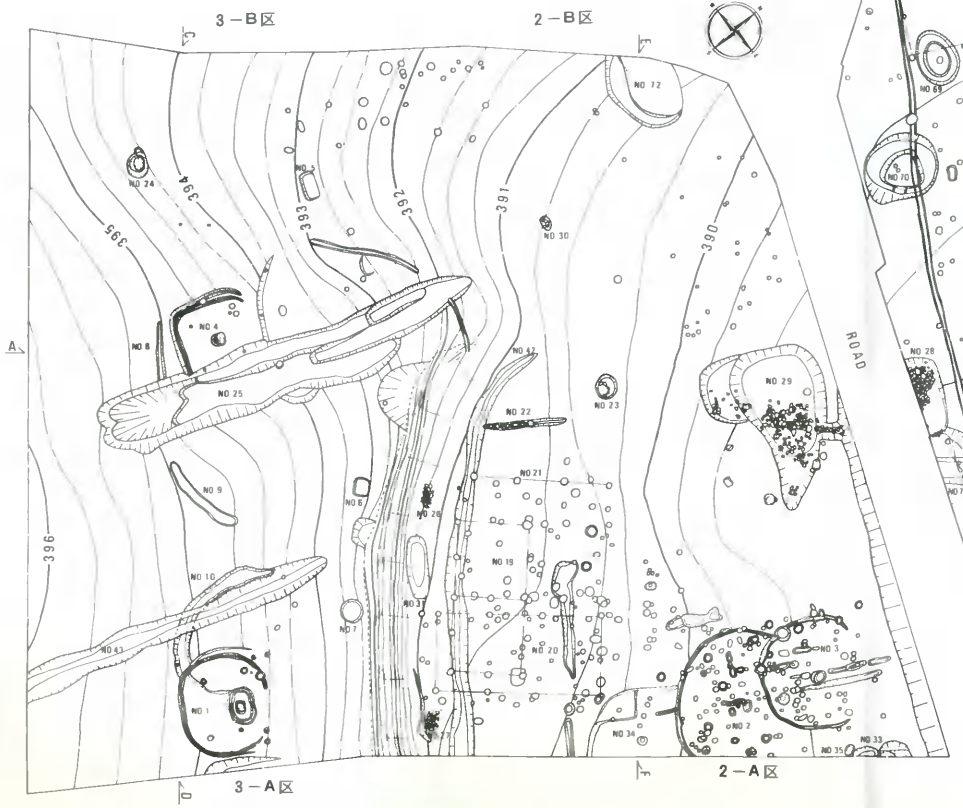
塚の峯遺跡の調査が完了し，調査員と作業員が忠田山遺跡に合流することができた時点で，遺跡全体の遺構検出を行った。その結果，トレンチを掘開した段階では確認できなかった建物群，不明土壙群，竪穴住居址等を新しく検出した。

検出した各遺構の細かい調査を実施しようとした矢先に，不測の事態が発生した。つまり，哲西町大字大竹字岸本に所在する岸本城址（註2）の発掘調査が開始されたにもかかわらず，作業員の人がいなかったので，この忠田山遺跡の発掘調査に従事していた男性の作業員の人達が行くことになった。また女性の作業員の人達のうちで矢神地区から来ている人は，哲西町大字矢田字横田に所在する横田遺跡（註3）の発掘調査に加わることになり，調査員1人も横田遺跡の3区の調査を担当することになった。したがってこの忠田山遺跡は，調査員1人と野馳地区から来ている人達で，発掘調査を継続することになったのである。

忠田山遺跡は，中国縦貫自動車道建設に伴って発掘調査が実施された遺跡のうちでも，最終段階に該当していたから，忠田山遺跡の発掘調査が終末に近づくと，将来の生活に不安を感じた作業員の人が，中国縦貫自動車道の建設工事現場へ転出するようになった。忠田山遺跡の発掘調査は，作業員の人が少なくなって人手が著しく不足していたから，建設工事現場へ転出せずに留まってもらうようにお願いをしなければならなかった。

昭和51年10月5日に行われた中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会で，忠田山遺跡で検出した不明土壙の性格と，集石土壙に伴う出土遺物について質問したところ，対策委員から有意義な御教示た得た。また忠田山遺跡は，道路建設工事の設計によると，1区と2区は盛土部分になるため，対策委員から調査完了後に砂を入れて保存するようにと指示があり，その旨を工事関係者に伝えて善処してもらった。





0　10M

1．褐色土
2．黒褐色土
3．暗黄褐色土
4．暗褐色土
5．淡黄褐色土
6．黄褐色土
7．攪乱土

第2図　忠田山遺跡遺構配置図（S＝1/300）

忠田山遺跡は，町道部分を除外して全面調査を実施したから，排土置場の確保に苦慮した。発掘調査期間中に，雨水によって排土が調査範囲外へ流入し，地元の地権者や哲西町教育委員会から苦情が届き，陳謝したことがある。今後に全面調査を実施するときは，排土処理については厳重な注意を払わなければならないと，反省している次第である。

なお出土遺物の水洗いは，雨が降って野外作業ができないときに，調査員と作業員の人で行った。出土遺物の注記および復原作業は，岡山市西古松の文化課分室で行った。

報告書作成にあたっては，担当者の１人である中野雅美が，岡山市の旭川放水路改修工事に伴って発掘調査が実施されている百間川遺跡の調査を継続中であるから，やむをえず仕事を分担して行い，必要に応じて協議を行った。

註

（１）高畑知功・福田正継・中野雅美「塚の峯遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（22）岡山県教育委員会 1977年

（２）松本和男「岸本城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（22）岡山県教育委員会　1977年

（３）岡田　博・秀島貞康他「横田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（23）岡山県教育委員会　1978年

遺構一覧表　（表－１）

番号	種類	地区	図番号	図版番号	出土遺物	時代	備考
1	住居址	3－A	3	4・5	土器・鉢	古墳時代初頭	土器が多量に出土している。
2	住居址	2－A	7	6	土器	弥生時代後期終末	大型の円形を呈する。
3	住居址	2－A	9	6	土器	古墳時代初頭	No.２住居址と重複する。
4	住居址	3－B	11	7	土器	弥生時代後期終末	４本柱で隅丸方形を呈する。
5	土壙	3－B	33	3－1	――	――	浅くて隅丸長方形を呈する。
6	土壙	3－A	34	3－1	――	――	歪んだ隅丸長方形を呈する。
7	土壙	3－A	35	3－1	――	――	部分的に袋状になっている。
8	溝	3	2・11	7－2	――	――	排水溝になる可能性が強い。
9	溝	3－A	30	3－1	土器	弥生時代後期終末	No.８溝と接続するであろう。
10	溝	3－A	31	3－1	土器	弥生時代後期	彎曲した弧を描いている。
11	建物	1－B	14	8－1	――	――	調査範囲の北端に位置する。
12	建物	1－B	15	9－1	――	――	No.18建物とほぼ直交する。
13	建物	1－B	16	9－1	――	――	調査範囲外へ張出している。
14	建物	1－B	17	8－2	――	――	小規模の建物である。
15	建物	1－B	18	9－2	――	――	No.11建物に酷似する。

番号	種　類	地　区	図番号	図版番号	出土遺物	時　代	備　考
16	建　物	1－A	19	10	――	――	棟持柱が張出している。
17	建　物	1－A	20	3－2	――	――	No18建物とほぼ直交する。
18	建　物	1－A	21	3－2	――	――	増築された可能性が強い。
19	建　物	2－A	22	13－1	青磁碗	室町時代	柱穴から青磁碗が出土している。
20	建　物	2－A	24	11－1	――	――	No19建物と重複する。
21	柵	2－A	25	13－1	――	――	No19建物とほぼ直交する。
22	溝	2－A	32	13－1	――	――	底面に多数の石が存在する。
23	井　戸	2－A	26	12－1	土　器	室町時代	底面に石の配置が存在する。
24	井　戸	3－B	27	12－2	土　器	室町時代	素掘りで湧水面が低い。
25	古　道	3	2・41	16－1	――	――	No 4 住居址とNo 8 溝を切る。
26	集石遺構	2－A	39	15－1	――	――	石が不規則に多数存在する。
27	集石遺構	2－A	40	15－2	――	――	石が不規則に多数存在する。
28	集石土壙	1－A	36	13－2	鉄　滓	――	内部に石が多数存在する。
29	集石土壙	2－A	37	14	土器・羽口	室町時代	内部に石が多数存在する。
30	集石土壙	2－B	2	3－1	――	――	小規模の土壙である。
31	土　壙	2－A	2	13－1	――	――	長大な隅丸長方形を呈する。
32	土　壙	1－B	2	9－1	――	――	浅くて楕円形を呈する。
33	土　壙	2－A	2	6	――	――	土壙３が複雑に重複する。
34	土　壙	2－A	2	6	――	――	No 2 住居址と重複する。
35	鍛冶炉	2－A	42	16－2	――	――	焼土・炭化物が存在する。
36	溝状遺構	1－B	2	3－2	――	――	住居址の壁体溝かもしれない。
37	溝	1－B	2	3－2	――	――	細くてほぼ直線を呈する。
38	溝	1－B	2	3－2	――	――	No11建物とNo37溝に重複する。
39	溝	1－A	2	3－2	――	――	建物の雨落溝の可能性が強い。
40	溝	1－A	2	3－2	――	――	１区Ｂ地点を縦貫している。
41	溝	1－A	2	3－2	――	――	No37溝と接続するであろう。
42	溝	2－A	2	13－1	――	――	法面に平行して存在する。
43	溝	3－A	2	3－1	――	――	No10溝と重複する。

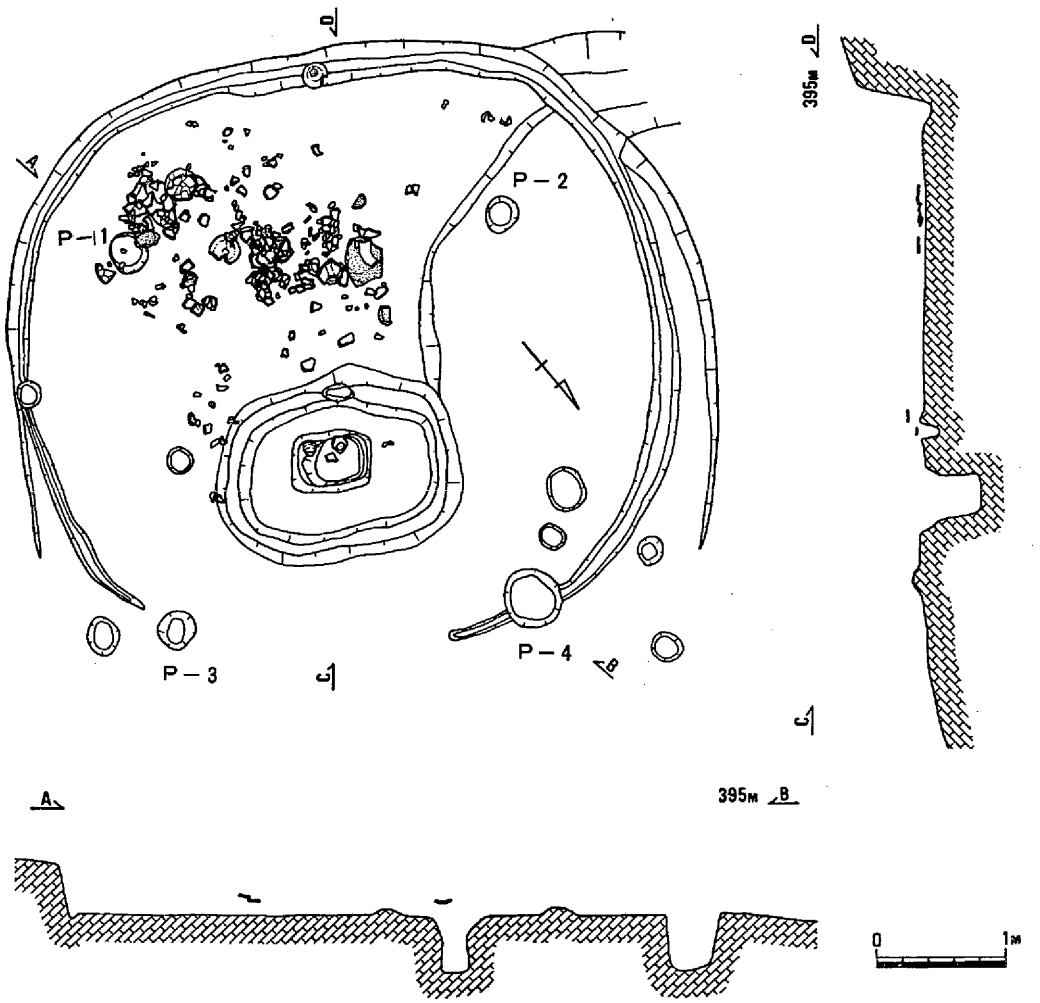
以上のほかに不明土壙を検出したが，遺構とは性格が異なるから除外した。

第３章　遺構・遺物について

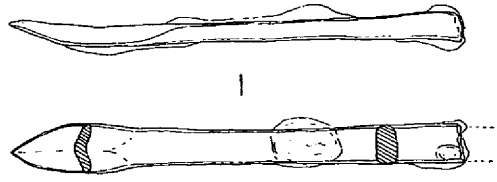
第1節　住　　居　　址

No.１住居址（第３図，図版４・５）

この住居址は，３区Ａ地点の丘陵斜面に位置する。住居址の一部は，斜面の下位になるため消失し



第3図　No.１住居址（S＝1/60）



第4図　No.1住居址出土遺物(1)（S＝$\frac{1}{2}$）

ているが，直径約560cmを測る円形の竪穴住居址である。柱穴は，住居址の平面形から推察して，P－1からP－4の4本柱と考えられる。柱間は，各々300cmを測る。また，P－4の近接地点には，切られている別の壁体溝が存在している。だから，この住居址は建て替えが行われていると考えられる。中央ピットは，住居址の中央からやや北方向に寄った位置で検出した。150×190cmと北西一南東方向に長い楕円形を呈する。中央ピットの周囲は，約25cmの幅で基盤層の黄褐色土を凸状に削出している。その中央に，直径50～65cmの土壙を掘開しているのである。中央ピット内の堆積土中には，少量の焼土と炭化物が認められた。中央ピットの南側は，床面が低くなっている。その低くなっている床面には，30～40cmを測る偏平な板石を確認した。この板石は，作業台（工作台）として使用されたのではなかろうか。このNo.1住居址からは，中央ピット内および中央ピット南側で完形品を含む多量の土器が出土した。これらの一括土器（第5・6図）は，甕形土器と鉢形土器（台付を含む）が大半を占め，壷形土器と高杯形土器は数点にすぎない。また，一括土器に共伴して鉇を1本検出した。

No.1住居址出土遺物（第4・5・6図，図版21・22・23－1）

鉇（第4図）は，刃部および基部の一部が残存しているだけである。残存長8.5cm，幅1.0cm，厚さ0.6cmを測り，身部に長さ3.0cm，幅1.8cm，厚さ0.3cm以上の蜂部をつくり出している。中央には稜線を有し，先端および両縁はやや薄くなって刃をつけている。刃部には彎曲する反りが認められる。

土器は，出土量が多いばかりでなく，種々の器種が認められるから，一括土器として良好な資料と考える。個々の土器を比較対照するために，観察表を作成して説明を行った。

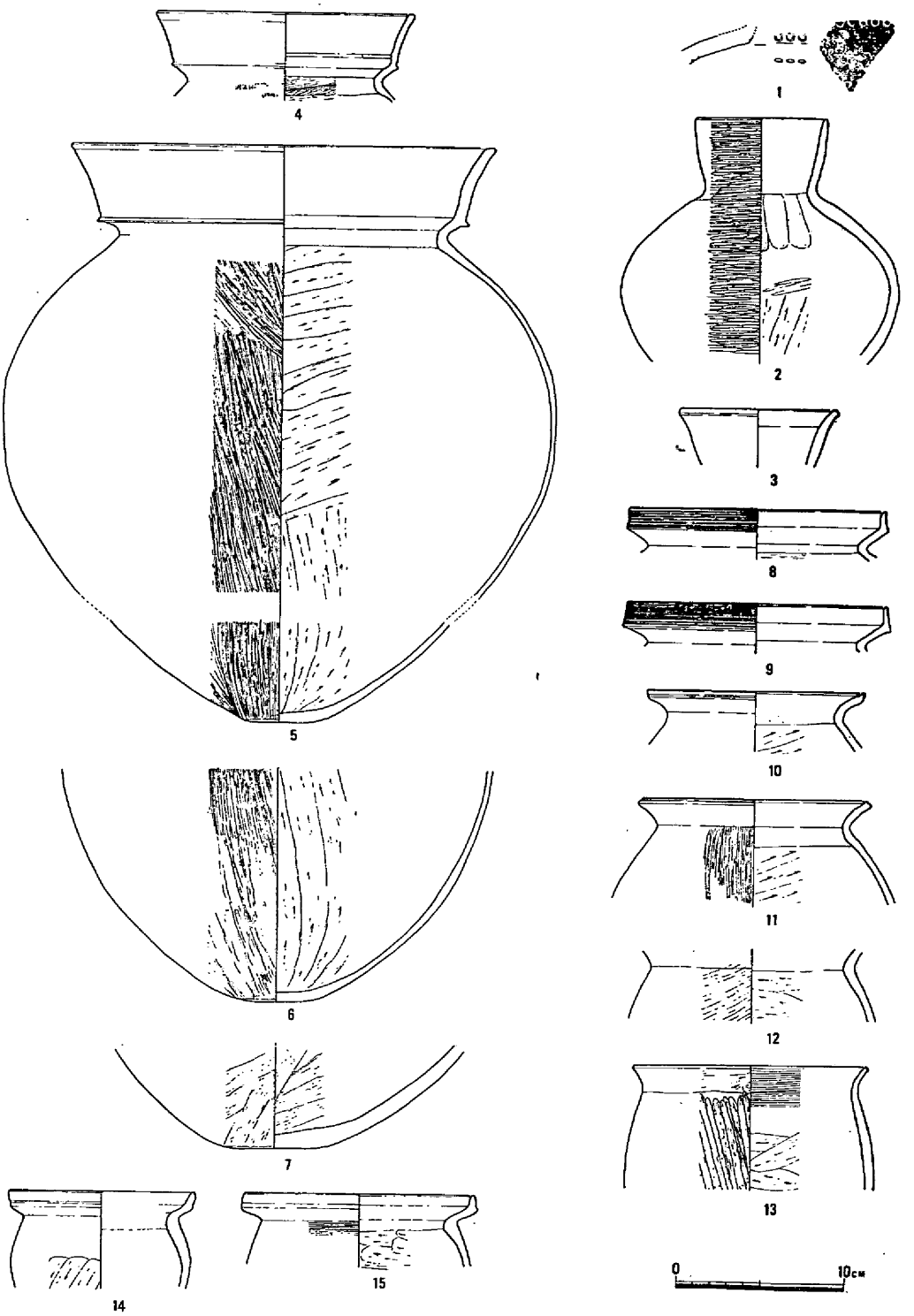
No.1住居址出土土器観察表（表－2）

類	土器番号	法量	形態	手法	色調	備考
壷	1		庄内式系の複合口縁の一部と考えられる。	内外面には，丹が塗られている。外面には，竹管文を施す。	内外 赤茶褐色	胎土が他の土器と異なる。精良。
直口壷	2	口径 7.6cm	口縁部は，やや外に開く。胴部は，玉ネギ状を呈す。	外面および口縁部内面は，丁寧な横方向のヘラ先の押圧。さらにナデで調整。	内外 褐色	胎土に水簸し粘土を使用。精良。
小型壷	3	口径 9.0cm	小型の坩になると考えられる。	口縁部は横ナデ。	内外 暗褐色	胎土：0.5mm以下の砂粒を含む。
甕	4	口径14.8cm	いわゆる複合口縁で，口縁部はやや外面に拡張する。	口縁部内外面は横ナデ。外面の頸部下位は，縦方向の刷毛目を施す。	内外 淡黄褐色	胎土：2.0mm以下の砂粒を含む。外面にススの付着。

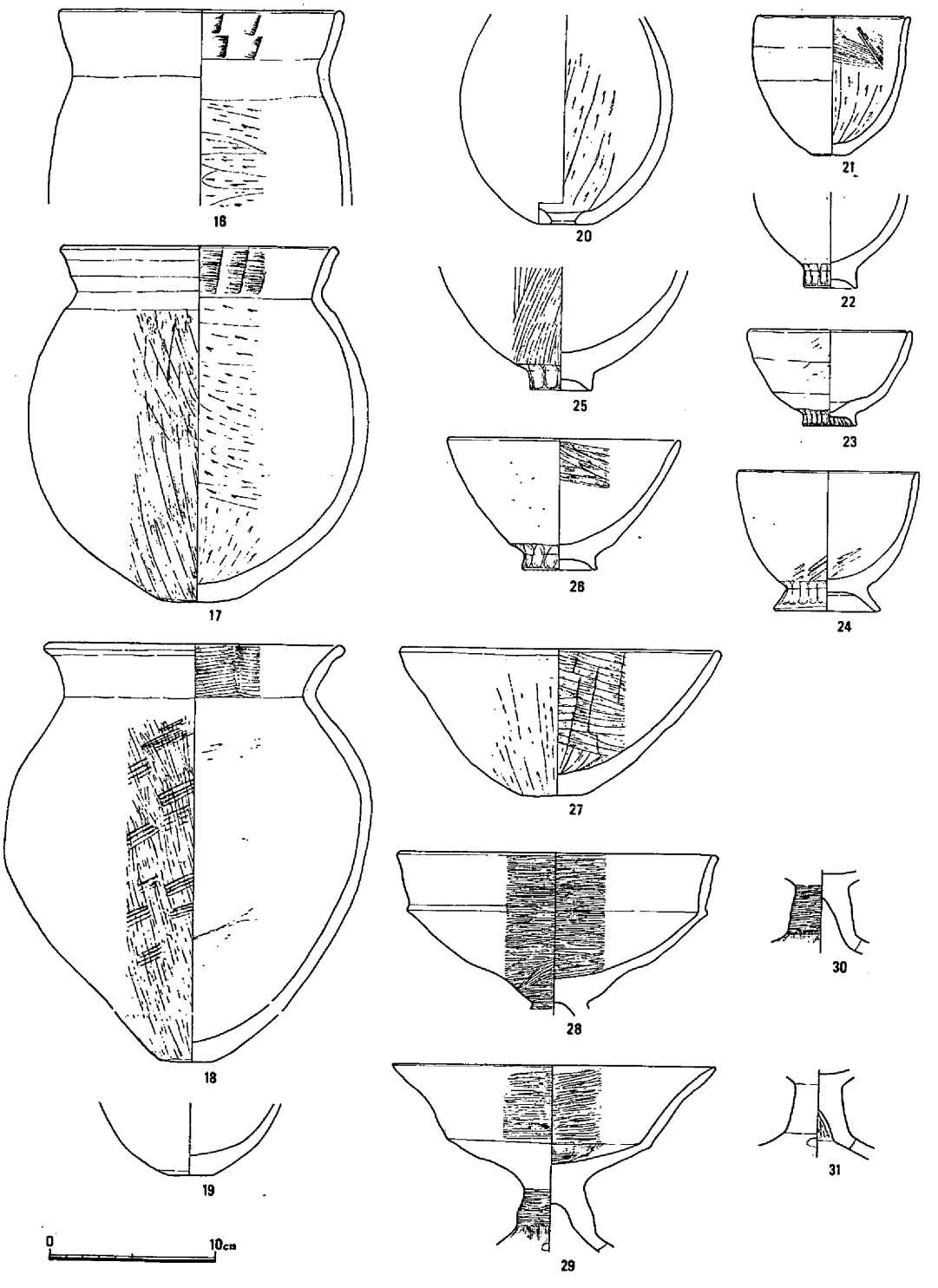
類	土器番号	法量	形態	手法	色調	備考
甕	5	口径24.4cm 器高 (推定35.0cm前後)	4よりも大型の複合口縁で口縁端部に面をもち，外側にやや拡張する。	口縁部内外面は，横ナデ。外面は丁寧な縦方向の刷毛目を施す。内面は，ヘラ削り。	内 淡褐色 外 灰褐色	胎土：4と同じ。外面にススの付着。
甕	6		不安定な底部から胴部への移行は，5よりも広がらずに上方へ立上がる。	内外面とも5と同じ。	内外 淡黄灰褐色	胎土：4・5と同じ。
甕	7		不安定な底部をもち，全体に歪んでいる。	外面は刷毛目の上面をナデている。内面は刷毛状工具による調整。	内 乳褐色 外 褐色	胎土：1.5mm以下の砂粒を含む。胴部下半に黒斑。
甕	8	口径15.0cm	口縁部は，く字状に屈曲して，さらに外反する。7よりやや小さい。	口縁部には，7条の櫛描沈線文を施す。	内 淡茶褐色 外 暗灰褐色	胎土：9～11に類似する。外面にススの付着。
甕	9	口径15.2cm	口縁部は，く字状に屈曲して，内傾しながら上方に拡張する。	口縁部には，9条の櫛描沈線文を施す。	内外 暗茶褐色	胎土：0.5mm以下の砂粒を含む。外面にススの付着。
甕	10	口径12.8cm	口縁部は外反し，端部はやや拡張する。	口縁部は横ナデ。内面は，ヘラ削りを行っている。	内外 淡黄褐色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。外面にスス付着。
甕	11	口径13.2cm	口縁部は外反し，端面に凹みをもつ。端部は，内側につまみ出す。	外面の頸部下位には，縦方向の刷毛目。口縁部は，横ナデ。内面の頸部下位はヘラ削り。	内外 淡茶褐色	胎土：8・9と同じ。外面にススの付着。
甕	12		口縁部はく字状に外反するであろう。	胴部外面には，粗い刷毛目。	内 淡黄褐色 外 淡赤褐色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。
甕	13	口径13.8cm	口縁部は，頸部からゆるやかに外反する。	外面はヘラ削り。頸部は横ナデ。内面は，頸部まで横方向に刷毛目を施す。その下位は，ヘラ削り。	内 淡灰褐色 外 黒灰色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。
甕	14	口径10.6cm	口縁部はく字状に外反し，さらに外上方へ拡張する。	外面は，口縁部から胴部中央まで横ナデ。胴部下位はヘラ削り。	内外 淡褐色	胎土：0.5mm以下の砂粒を含む。
甕	15	口径13.4cm	口縁部は，く字状に外反し，さらに上方に拡張する。	外面の頸部および肩部に刷毛目。口縁部を横ナデ。内面は，頸部下位をヘラ削り。	内外 淡褐色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。外面にススの付着。
甕	16	口径16.8cm	口縁部は，頸部からゆるやかに外反する。 胴部は，やや拡張する。	内面の口縁部を刷毛目。胴部をヘラ削り。	内外 淡黄褐色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。

類	器番号	法量	形態	手法	色調	備考
甕	17	口径16.6cm 器高21.8cm	口縁部はく字状に開く。胴部は，球形を呈する。	外面の口縁部は横ナデ。外面をヘラ状工具で調整。	内外 淡灰茶褐色	胎土：1.5mm以下の砂粒を含む。外面にススの付着。
甕	18	口径17.8cm 器高25.5cm	口縁部は，く字状に外反する。胴部の最大径は上位にあり，ゆるやかに底部へ移行する。	外面は，最初に右上り叩きで整形している。そののちに，口縁部は横ナデ，胴部はヘラ磨きを施す。さらに肩部は，ヘラ状工具で調整。口縁部内面は，粗い刷毛目を施す。胴部内面は，刷毛状工具のナデによって調整。	内 淡茶褐色 外 暗灰褐色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。
甕	19		不安定な底部をもつ。	外面は7と同じ。内面は，粗いヘラ削りののちにナデによる調整。	内外 暗灰色	胎土：0.5mm以下の砂粒を含む。外面にススの付着。
甑	20		胴部中央に最大径をもつ。甑に使用されたものと思われ，底部に径1.0cmの孔を有する。	外面はヘラ磨き。内面はヘラ削り。	内 褐色 外 黒灰色	胎土：2.0mm以下の砂粒を含み粗い。外面にススの付着。
鉢	21	口径 9.0cm 器高 8.5cm	口縁部は歪んでいるため，内彎したり外反したりする。底部は小さい。	外面は，指圧とナデによる。内面はヘラ削りののち，刷毛による調整。口縁部は横ナデ。	内外 淡黄褐色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。胴部に黒斑1箇所。
鉢	22		不安定な底部から内彎して，直立気味に上方へ立上がる。	外面は，26・27と同様に，ヘラで削上げている。内面はナデによる調整。	内外 淡黄褐色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。
鉢	23	口径 9.5cm 器高 5.9cm	23・24～26と同様につまみ出した台をもつ。口縁部は，肥厚気味で，端部は，丸くおさめる。	外面は，刷毛状工具で調整したのちにナデ。内面も外面と同じである。	内 黒灰色 外 淡黄褐色	胎土：0.5mm以下の砂粒を含む。
鉢	24	口径10.6cm 器高 8.6cm	他に比して裾広がりの台をもち，内彎しながら直立気味に立上がる。	外面は，右上りの叩きで整形したのち，ナデをおこなう。内面は，底部周辺をヘラ先で調整。上部は横ナデ。	内 黒灰色 外 淡黄褐色	胎土：1.0mm以下の砂粒を含む。口縁部に黒斑。
鉢	25		大型の鉢になると考えられる。器壁は全体に厚い。	外面は粗い刷毛目。内面は，ナデによる調整。	内 暗茶灰褐色 外 黒灰色	胎土：2.0mm以下の砂粒を含む。

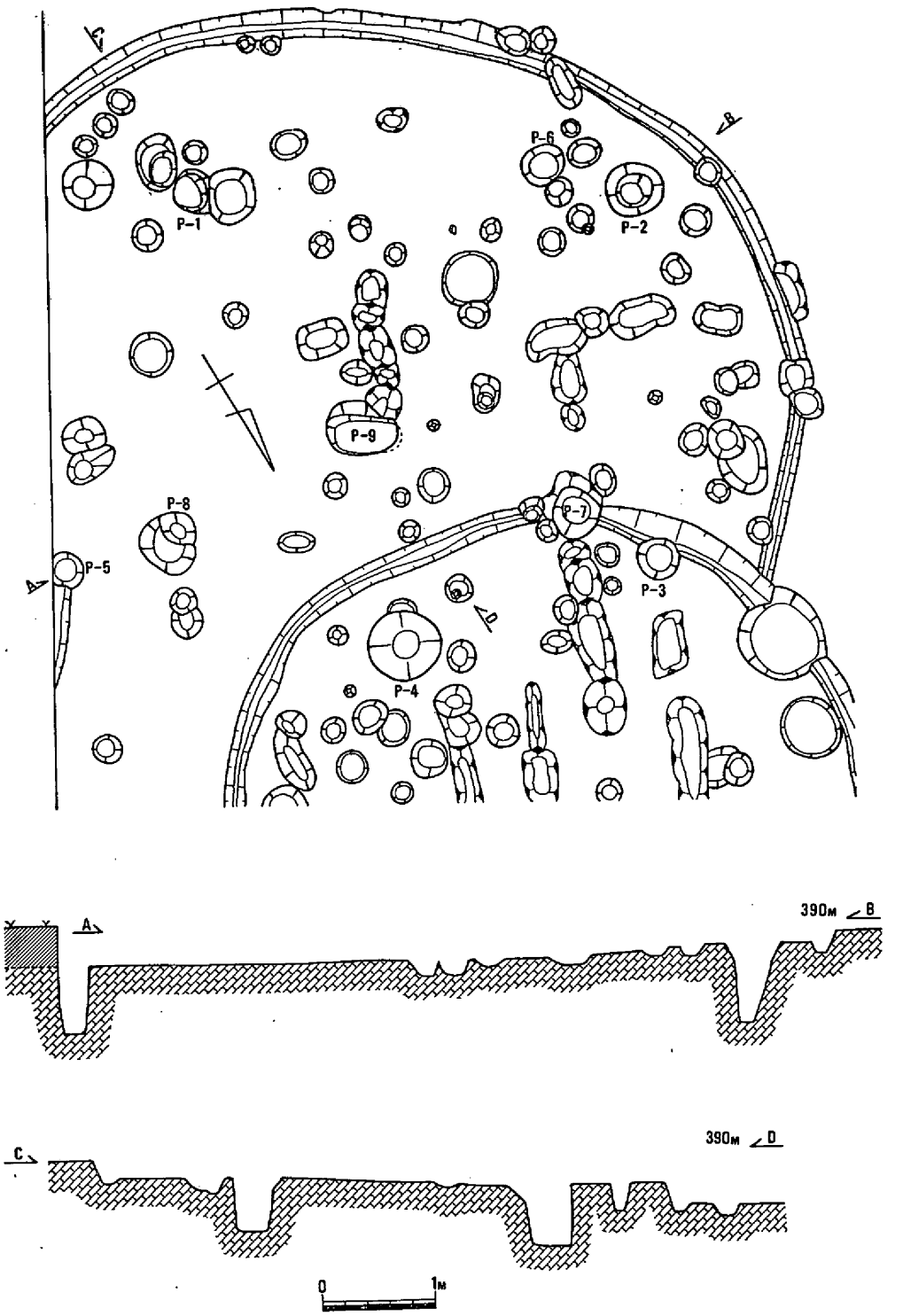
類	土器番号	法量	形態	手法	色調	備考
鉢	26	口径13.9cm 器高 8.2cm	つまみ出した不安定な台から，やや内彎気味に上方に立上がる。台の部分を除去すると27に類似。	外面はヘラ削り。口縁部は横ナデ。 内面は27と同様に，年輪差の大きい板状工具による調整。	内　外 淡黄褐色	胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。
椀	27	口径19.0cm 器高 9.1cm	不安定な底部から，内彎しながら外上方に立上がる。口縁部は，丸くおさめている。	外面は，ヘラ削りを行い，口縁部は，横ナデを施す。 内面は，26と同様の工具を使用。	内　外 淡黄褐色	胎土：26と類似。 口縁部に黒斑。
高杯	28	口径19.0cm	杯部に明瞭な段をもち，上方に立上がる。 脚部は欠損しているが，短脚と考えられる。	内外面とも，丁寧なヘラ磨きを施す。	内　外 赤褐色	胎土：堅緻。全面に丹塗り。
高杯	29	口径19.4cm	杯部は，ゆるやかな稜線をもち，外反する。脚部は短脚で，裾部がハ字状に広がる。	杯部は，内外面とも刷毛による調整。 脚部の柱状部をヘラ磨き，裾部を刷毛で調整。	内 淡褐色 外 淡灰黄褐色	胎土：0.5㎜以下の砂粒を含む。 口縁端部に黒斑2箇所。
高杯	30		短い脚柱部から屈曲してハの字状に開く。	杯部内面は，ヘラ磨きを施す。脚柱状部は，横方向のヘラ磨き。裾部は，内外面とも刷毛による調整。	内　外 赤褐色	胎土：精良。28と同様に全体に丹塗りを施す。
高杯	31		30と同じ。	脚部内面にしぼり痕跡。	内　外 淡褐色	胎土：1.0㎜以下の砂粒を含む。



第5図　No.1住居址出土遺物(2)（S＝1/4）



第6図　No.1 住居址出土遺物(3)（S＝$\frac{1}{4}$）



第7図 No.2住居址（S＝1/60）

No. 2 住居址 （第７図，図版６）

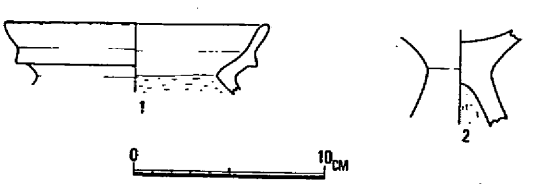
２区のＡ地点に，No. 3 住居址と重複して存在している。この住居址は，のちになってNo. 3 住居址に北部分の床面が切られている。東方向は調査予定地外の範囲になるため，調査することができなかった。地形の高い位置に壁体溝が残存しているだけで，壁体は著しく削平されている。壁体溝の幅は，下部で５～10cmを測る。床面は後世の耕作によって撹乱されているから，浅い凹みが多数存在して，住居址に伴う柱穴との識別が困難であった。底の部分が床面から深くて，覆土に撹乱された土砂を含まないものが住居址に伴う柱穴になるであろうと考えて精査したが，何本柱の住居になるのか確実に把握することができなかった。すなわち，Ｐ－１からＰ－５が住居址に伴う柱穴であれば，５本柱を有する住居になり，Ｐ－１とＰ－６からＰ－８が住居址に伴う柱穴であれば，４本柱を有する住居になるのである。５本柱と４本柱の住居では，構造が著しく異なるとはいえ，明確に柱数を断定できる結論は得られなかった。５本柱を想定した柱穴間の距離は，Ｐ－１とＰ－２が395cm，Ｐ－２とＰ－３が320cm，Ｐ－３とＰ－４が240cm，Ｐ－４とＰ－５が305cm，Ｐ－５とＰ－１が350cmを測る。４本柱を想定した柱穴間の距離は，Ｐ－１とＰ－６が320cm，Ｐ－６とＰ－７が305cm，Ｐ－７とＰ－８が355cm，Ｐ－８とＰ－１が300cmを測る。また柱穴の床面からの深さは，平均60cmを測る。Ｐ－９は中央ピットと考えた土壙である。平面形は32×63cmを測る楕円形で，部分的には袋状を呈している。床面からの深さは50 cmを測る。この中央ピットの位置は，地形の低い北東方向へやや片寄っている。この住居址はNo. 3 住居址と重複し，しかも東方向には調査することができなかった部分を残すとはいえ，壁体溝や柱穴の配置から推察して，直径約７mの歪んだ円形を呈する大型の住居址になると考える。ところが，精査したにもかかわらず何本柱になるのか不明であった。

No. 2 住居址出土遺物（第８図）

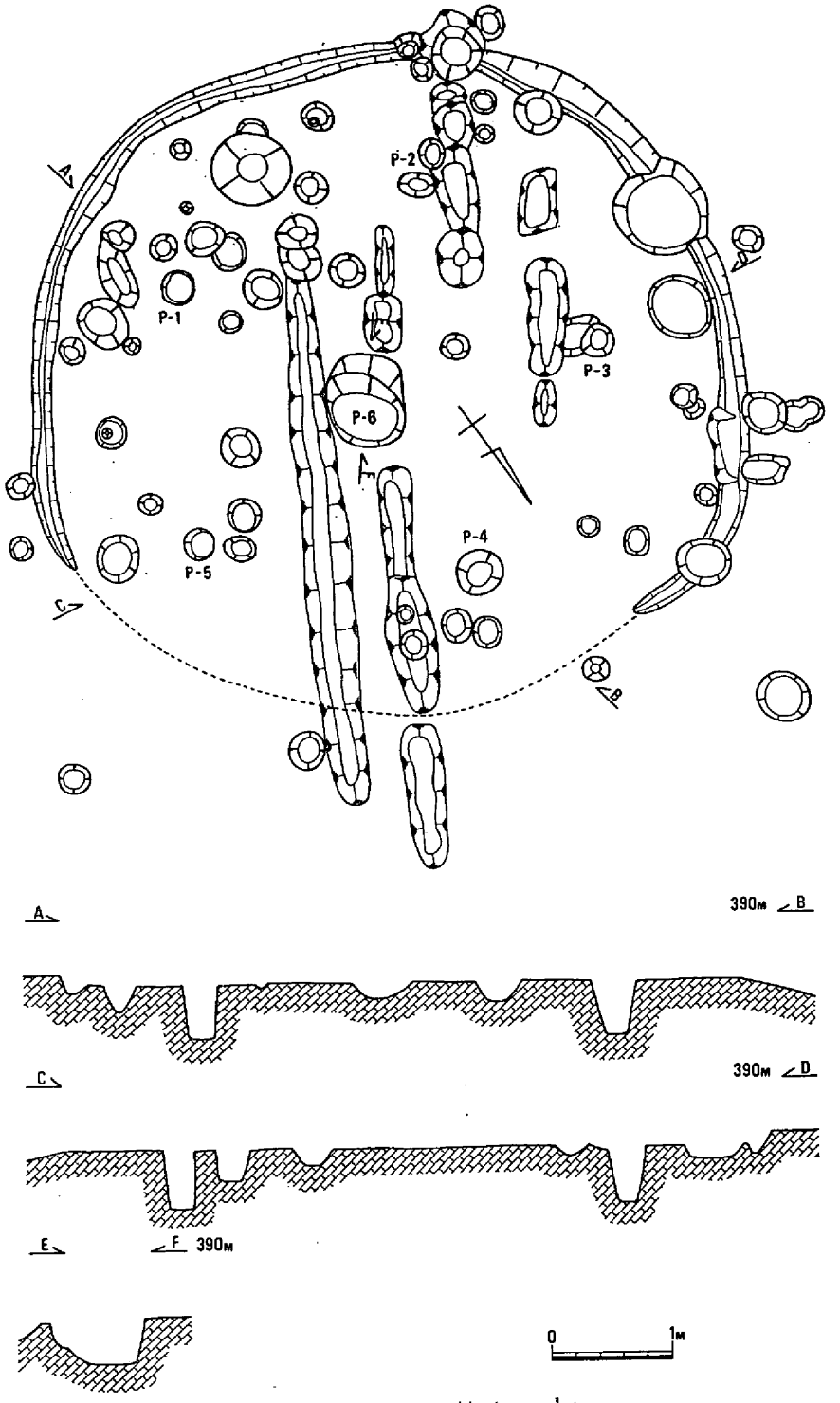
１は甕形土器の口縁である。く字状に屈曲した頸部は，彎曲して口縁端部へ移行する。口縁端部は，わずかに肥厚して丸く仕上げられている。口縁部の外面下位には，断面が三角形を呈する張出しが存在する。口縁部の内面と外面全体は，横ナデを行っている。内面の頸部下位は，横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

２は，中央ピット内から出土した高杯形土器の破片である。口縁部と脚部を欠損しているため，詳細は不明である。外面の上位は横ナデを行い，下位は縦ナデを施している。杯部の内面には，短い単位で不規則な刷毛目が認められる。脚部の内面は，縦方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み焼成は良好で明るい褐色を呈する。

以上に説明したNo. 2 住居址出土の土器は，弥生時代後期終末の時期に属すると考える。



第8図 No.2 住居址出土遺物（S＝1/4）



第9図　No.3住居址（S＝1/60）

No. 3 住居址 （第９図，図版６）

２区のＡ地点にNo. ２住居址と重複して存在している。この住居址は，No. ２住居址よりも新しい遺構である。地形の高い位置に壁体溝が存在しているだけで，壁体は著しく削平されている。壁体溝の幅は，下部で３～15cmを測る。床面はNo. ２住居址と同様に後世の耕作によって撹乱されているから，浅い凹みが溝状を呈して確認された。柱穴は，Ｐ－１からＰ－５の５箇所で検出した。柱穴間の距離は，Ｐ－１とＰ－２が240cm，Ｐ－２とＰ－３が205cm，Ｐ－３とＰ－４が225cm，Ｐ－４とＰ－５が230cm，Ｐ－５とＰ－１が220cmを測る。柱穴の床面からの深さは，平均45cmを測る。また壁体溝から柱穴までの距離は，100～110cmを測る。Ｐ－６は中央ピットと考える。平面形は楕円形を呈して，床面からの深さは約40cmを測る。南西方向の掘り方は，２段掘りになっている。この住居址は，地形の低い北東方向が削平されて壁体溝が不明であるとはいえ，柱穴の配置から推察して，直径が約６mの歪んだ円形を呈すると考える。

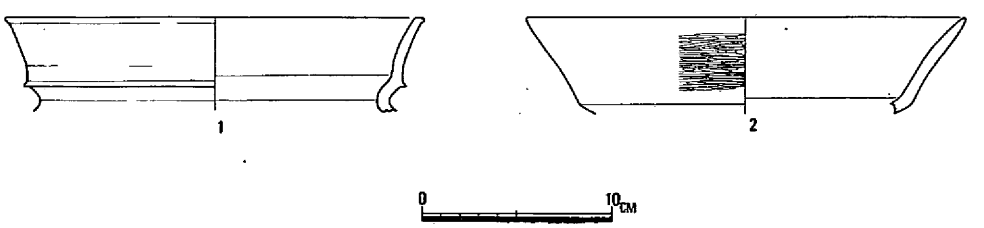
No. 3 住居址出土遺物（第10図）

図化することが可能であったのは，甕形土器の口縁と高杯形土器の口縁である。

１の甕形土器の口縁は，口径が比較的大きいものにかかわらず器壁が薄い。頸部では短く外反しているが，口縁部になるとさらに外彎して，斜め上方へ大きく立上がる複合口縁になっている。口縁端部の上面は，丸くならないで面を有する。口縁部の外面下位には，断面が三角形を呈する張出しが存在する。内外面とも全体に横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で乳褐色を呈する。外面にはススの付着が認められる。

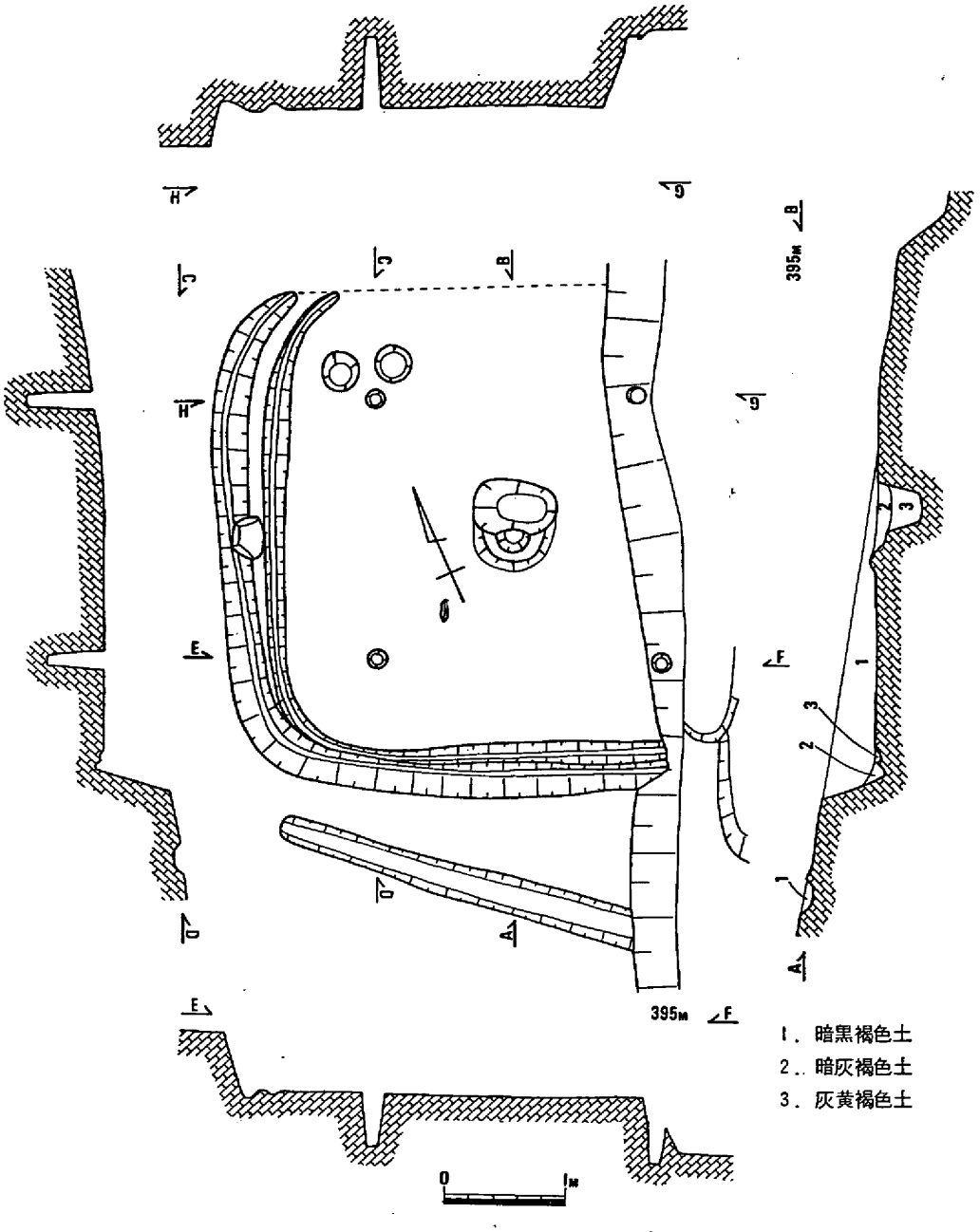
２の高杯形土器の口縁は，杯部との境目で屈曲して斜め上方へ大きく立上がる。器壁は端部へ移行するにしたがって薄くなり，上端は丸く仕上げている。外面には，ヘラ状工具の先端で横方向に施した短い単位の磨きが認められる。内面は全体に横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。

以上に説明したNo. ３住居址出土の土器は，No. １住居址から出土した一括の土器群とほぼ同時期と考え，古墳時代初頭に属するであろう。



第10図　No.３住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

No. 4 住居址 （第11図，図版７）

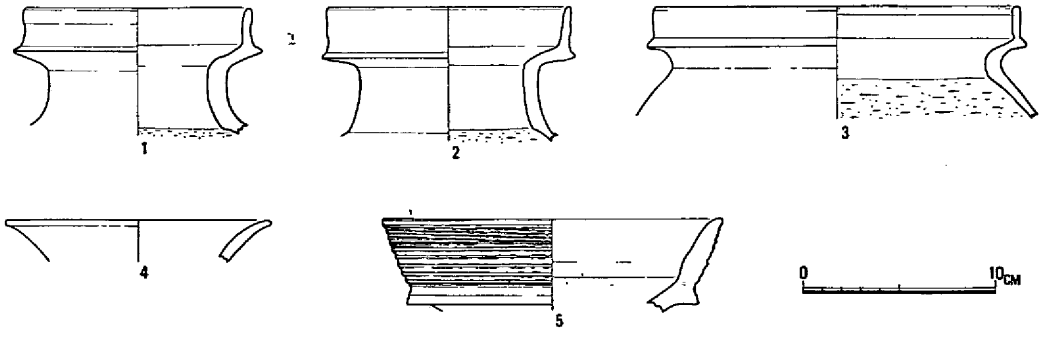


第11図 No.4住居址（S＝1/60）

3区のほぼ中央に，№25古道と重複して存在する。東部分は，のちになって№25古道が切っている。L字状を呈する2本の壁体溝を検出したが，柱穴は4箇所に存在しているだけである。この住居は建て替えを行っているにもかかわらず，柱穴はこれまでのものをそのまま利用したと考える。覆土の土層断面を観察したところ，これまでの床面を拡張していた。したがって，内側の壁体溝が古く，外側の壁体溝が新しいことになる。壁体溝の幅は，どちらも下部で3～5㎝を測る。柱穴間の距離は，C－D断面で220㎝，E－F断面で235㎝，G－G断面で215㎝を測る。なお№25古道の法面に位置するものは，約225㎝の距離を測る。柱穴の床面からの深さは，45～55㎝を測る。内側の壁体溝から柱穴までの距離は，いずれも約80㎝を測る。床面での柱穴の直径は約15㎝を測り，前述した住居址の柱穴に比して規模が著しく小さい。床面の中央部分には，中央ピットと考える45×70㎝の楕円形を呈する土壙と，直径約28㎝を測る柱穴状の土壙が切合って存在している。調査によって，楕円形を呈する土壙が柱穴状の土壙よりも新しいことを確認している。壁体溝のところで記述したように，この住居址は建て替えを行っているから，柱穴状の土壙が古い中央ピットで，楕円形を呈する土壙が新しい中央ピットと考える。柱穴状を呈する円形の中央ピットの周囲は，床面よりもわずかに高くなっている。この状況は，哲西町大字大竹字塚の峯に所在する塚の峯遺跡（註1）で，№1住居址と№2住居址にも認められた。北西方向の2本の壁体溝の中間から，床面に接して人頭大の石を検出した。精査した結果，後世に住居内へ転落したとは考えられなかったから，新しく床面を拡張した住居址に伴うものであろう。ところが，何に使用していたかについては不明である。この住居址は，東部が№25古道によって切られ，地形の低い北東方向が削平されて壁体や壁体溝が存在しないとはいえ，L字を呈して残存している2本の壁体溝と4箇所の柱穴から，本来の平面形は隅丸方形を呈すると考える。当初は1辺が380～400㎝であったと推察できるが，建て替えを行って床面をわずかに拡張しても，隅丸方形の平面形は変化していない。

なおこの住居址に近接して，地形の高い位置に№8溝が存在している。この溝は住居址と同様に，№25古道によって切断されて途中が不明であるが，本来は№9溝と接続して住居址の排水溝になるのかもしれない。

No.4住居址出土遺物（第12図，図版23－2）



第12図　No.4住居址出土遺物（S＝1/4）

1は壺形土器の頸部から口縁の破片である。器壁の厚い頸部は，ゆるやかに外彎して立上がる。頸部の上端から斜め上方へ張出した口縁部は，鋭く屈曲して外彎しながら直立する。口縁の上端は，丸く仕上げられている。口縁の屈曲部分は，断面が三角形を呈する横方向への張出しが存在する。口縁部は頸部に比して器壁が著しく薄くなっている。頸部と口縁部は，内外面とも全体に横ナデを行っている。口縁の外面には，横ナデによって生じた彎曲面が存在する。内面の頸部下位は，横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には，細かい砂粒に混在して金雲母や黒雲母の粒子が認められ，特殊器台や特殊壺の胎土に酷似する。焼成は非常に良好で，全体に丹塗りを施しているから赤色を呈する。

2も1と同様に，壺形土器の頸部から口縁の破片である。器形は，1の壺形土器に酷似している。口径が1に比してわずかに大きいにもかかわらず，器壁は薄い。口縁端部は外彎せずに直立している。内面の頸部と外面は，全体に横ナデを行っている。口縁の外面には，横ナデによって生じた凹凸が認められる。内面の頸部下位は，横方向のヘラ削りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。内外面とも全体に丹塗りを施しているから，器面は赤色を呈している。

3は，甕形土器の胴部から口縁の破片である。胴部は，肥厚しながら内彎して立上がり，頸部の器壁が最も厚くなる。頸部からく字状に外反した口縁部は，鋭く屈曲して端部が直立する。口縁の上端は，瘤状を呈して丸く仕上げられている。口縁の屈曲部分には，断面が三角形を呈する横方向への張出しが存在する。頸部と口縁部は，内外面とも全体に横ナデを行っている。胴部の外面は横ナデを行い，内面は横方向のヘラ削りを施している。胎土は1の壺形土器と全く同じで金雲母や黒雲母の粒子が認められる。焼成は非常に良好で，全体に丹塗りを施しているから赤色を呈する。

4は，く字状口縁を有する甕形土器の破片である。斜め上方へゆるやかに外彎しながら張出した口縁の端部は，丸く仕上げられている。口縁端部へ移行するにしたがって，器壁が薄くなっている。内外面とも全体に横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。全体に丹塗りを施しているが，ススの付着を有するため黒褐色を呈する。

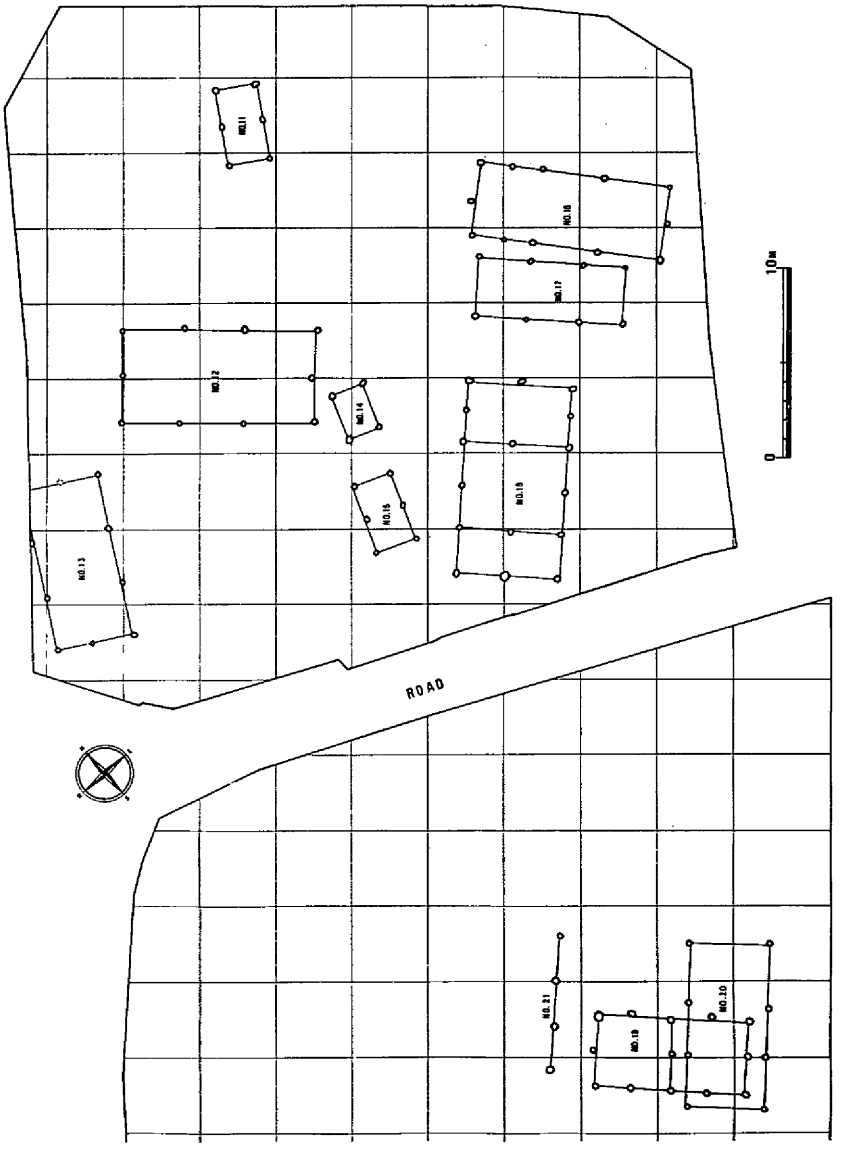
5は，壺形土器または甕形土器の口縁の破片である。口径に比して，器壁が著しく厚い。斜め上方へ立上がった口縁部は，鋭く屈曲して斜め上方へ張出している。口縁の屈曲部分には，断面が三角形を呈する横方向への張出しが存在する。外面には，ヘラ状工具の先端で描いた多数の凹線を有する。内外面とも全体に横ナデを行い，外面に存在する凹線は，部分的に稜線がつぶれている。内面には，横ナデによって生じた凹凸が認められる。胎土は，2の壺形土器に酷似している。焼成は非常に良好で，全体に丹塗りを施しているから赤色を呈する。

以上に説明したNo.4住居址出土の土器は，図化することが可能であったすべてのものが丹塗りを施している。これらの土器は，のちに床面を拡張して建て替えを行った住居址に伴うもので，弥生時代後期終末の時期に属すると考える。

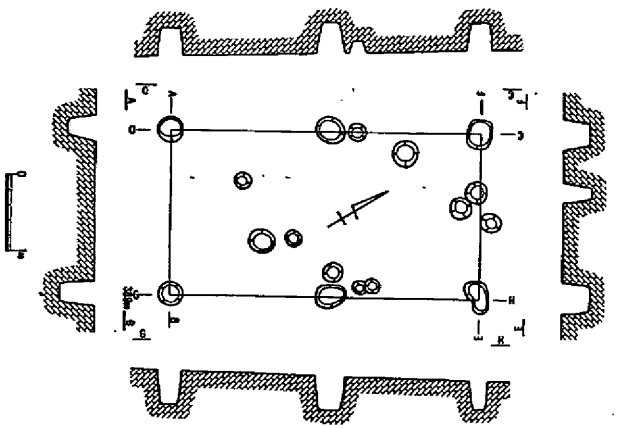
第2節　建　　物・柵

No.11　建　　物　（第14図，図版８－１）

１区のＢ地点北端に存在する２×１間の建物で，棟方向がＮ－31.5°－Ｅになる。桁行は408cm，梁行は219cmを測る。柱穴は，検出面での直径が21～40cmを測るが，北東方向に位置する柱穴２は，



第13図　忠田山遺跡建物・柵配置図（S＝1/400）



第14図　No.11建物（S＝1/100）

平面形が歪んだ楕円形を呈している。柱穴の検出面からの深さは，35～45cmを測る。底部のレベルは，一定に揃っていない。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。桁行の柱間寸法は，204～205cmを測る。このNo.11建物は，No.15建物に酷似している。精査したにもかかわらず，この建物に伴う遺物は検出できなかった。

No.12　建　　物　（第15図，図版９－１）

１区のＢ地点に存在する。No.11建物とNo.13建物の中間に位置する建物で，棟方向がＮ－47.0°－Ｗになる。桁行は1013cm，梁行は488cmを測る。最も規模の大きい柱穴は，検出面での直径が37cmを測る。棟持柱の柱穴は，検出面で直径18～30cmを測り，四隅に位置する柱穴よりも規模が小さい。北西方向の棟持柱の底部には，板石を検出した。柱穴の検出面からの深さは20～80cmを測り，底部に板石を検出した棟持柱の柱穴が最も浅い。柱穴の底部のレベルは不揃いで，一定の値になっていない。桁行の柱間寸法は，約330cmを測るものが一般的であるが，305cmを測る柱間も存在して，一定の値になっていない。Ｃ－Ｄ断面に近接する柱穴２がこの建物に伴うものであれば，その部分の柱間寸法は，平均値で156cmを測る。梁行の柱間と同様に不揃いになっているが，平均値で244cmになっている。この建物の桁行と梁行に囲まれた内側にも，多数の柱穴を検出している。これらの柱穴は，検出面からの深さが比較的浅いものが多いから，この建物の束柱の柱穴になるものも含まれているであろう。このNo.11建物は，No.17建物とほぼ平行し，No.18建物とは直交する方向になっている。精査したにもかかわらず，この建物に伴う遺物は検出できなかった。

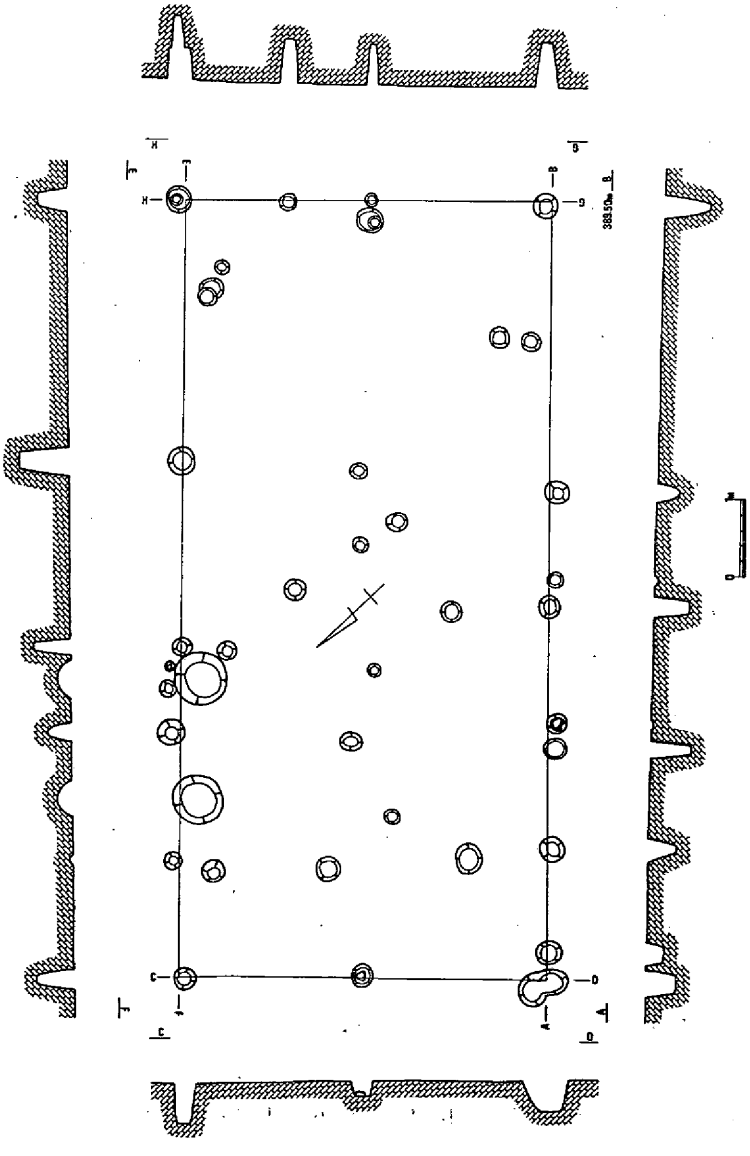
No.13　建　　物　（第16図，図版９－１）

１区Ｂ地点の西端に位置する。調査予定地の境界に位置するため，調査することができない範囲が存在する。北西方向の桁行は，調査予定地外の範囲に張出しているため，建物の規模を確実に把握することは不可能である。南東方向の桁行によると，３間になると考える。南西方向の棟持柱は存在するが，北東方向の棟持柱は，精査したにもかかわらず検出できなかった。桁行が３間以上に拡張する可能性は考えられないから，北東方向では棟持柱の柱穴が浅かったために，削平されて残っていないのであろう。したがって，梁行は２間になると考える。この建物は，検出できない不明の柱穴があるとはいえ，３×２間の規模で棟方向がＮ－30.0°－Ｅになるであろう。南東方向の桁行は875cm，南西方向の梁行は400cmを測る。柱穴は，検出面で直径40cmを測るが，平面形が楕円形を呈するものも存

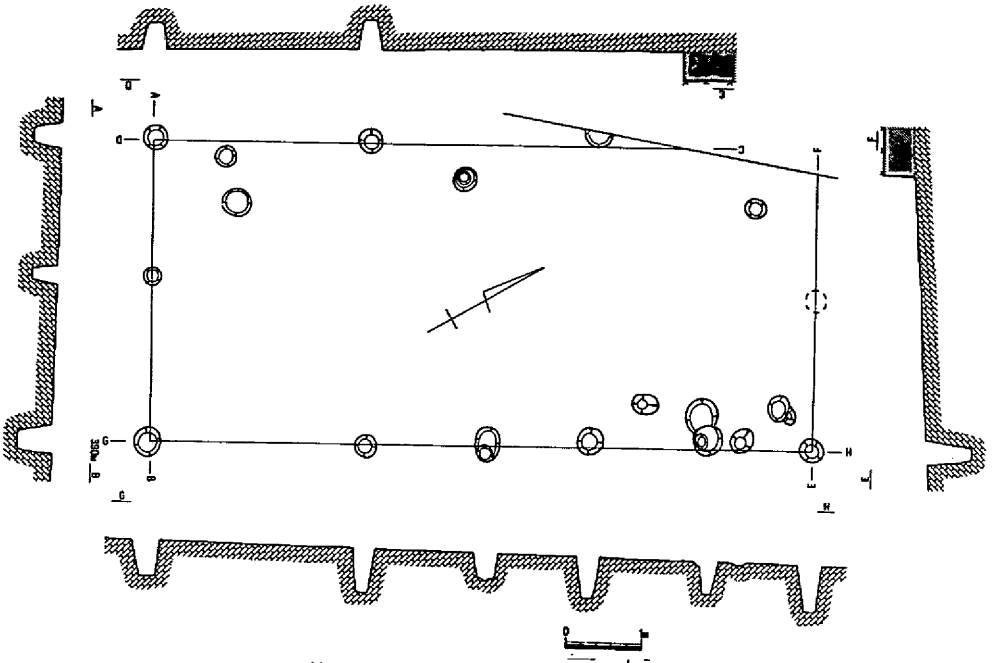
在する。東西方向に位置する棟持柱の柱穴は，検出面で直径が23cmを測り，ほかの柱穴に比して規模が小さい。柱穴の検出面からの深さは30～60cmを測り，底部のレベルが不揃いになっている。棟持柱の柱穴は，ほかの柱穴よりも浅くなっている。桁行の柱間寸法が285cmを測る。棟持柱の柱穴が存在する南西方向では，梁行の柱間寸法が200cmになっている。このNo.13建物の棟方向にほぼ類似した方向を示す建物として，No.1建物，No.14建物，No.15建物が存在する。ところが，これらの建物が同時期のものであるとは断定できない。なおこのNo.13建物では，遺物が検出できなかった。

No.14 建　　物 （第17図，図版8－2）

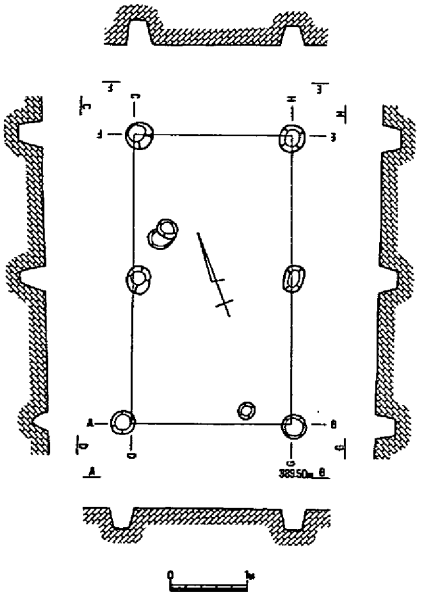
1区のB地点に存在する。No.12建物とNo.18建物の中間に位置している。棟方向がN－20.0°－Eを示す1×1間の建物で，忠田山遺跡で検出した建物では最も規模が小さい。桁行は254cm，梁行は180cmを測る。柱穴は，検出面での直径が33～47cmを測るが，いずれも歪んだ楕円形を呈している。柱穴の検出面からの深さは30～40cmを測り，ほぼ一定の値になって底部のレベルが揃っている。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。このNo.14建物の周辺からは，弥生式土器片または古式土師器片が出土している（第44図）から，弥生時代後期終末から古墳時代前期の時期に属するのかもし



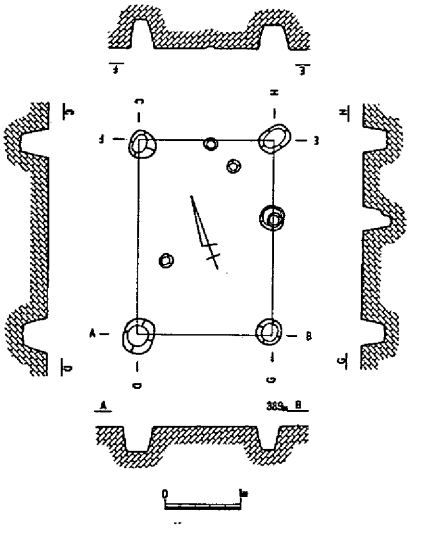
第15図 No.12建物（S＝1/100）



第16図　No.13建物（S＝1/100）



第18図　No.15建物（S＝1/100）

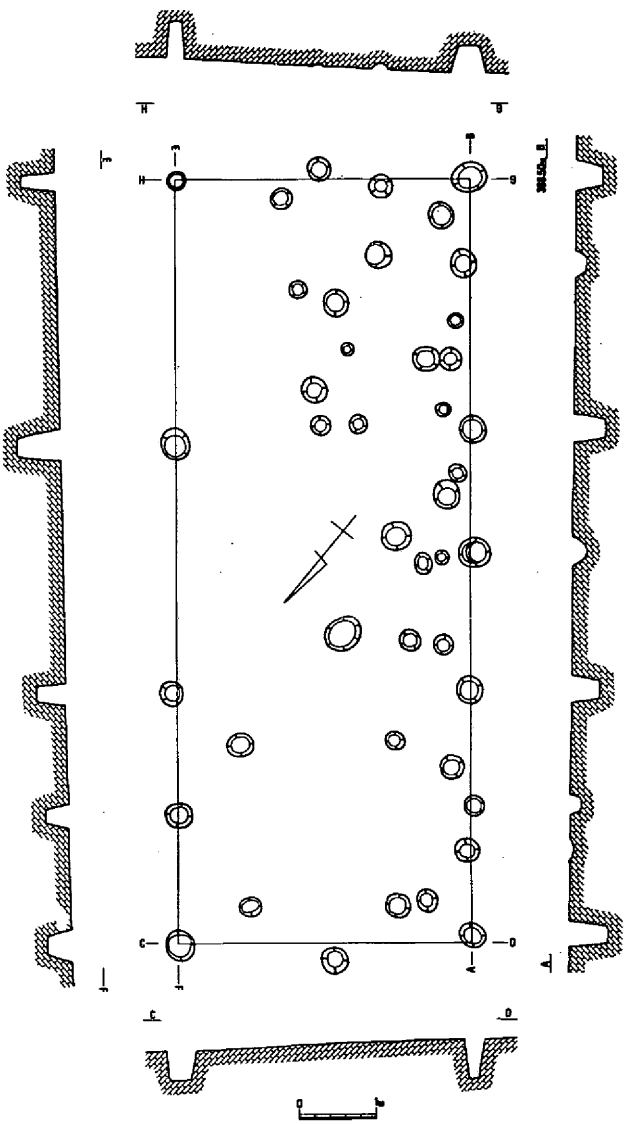


第17図　No.14建物（S＝1/100）

れない。この建物の方向は，No.13建物に酷似するとはいえ，ほかの大型建物の方向とは，著しく相違している。

No.15 建　　物（第18図，図版９－２）

１区のＢ地点に存在する，No.14建物の南側に位置している。２×１間の建物で，棟方向がＮ―21.0―Ｅになる。桁行は376cm，梁行は206cmを測る。四隅の柱穴は，検出面での直径が30～36cmを測る。桁行の中間に位置する柱穴は，平面形が楕円形を呈して，四隅の柱穴よりもやや規模が小さくなっている。柱穴の検出面からの深さは25～30cmを測り，ほぼ一定の値になって底部のレベルが揃っている。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。桁行の柱間寸法は188cmである。このNo.15建物は，前述したNo.14建物の延長上にあり，棟方向もほぼ同じである。この建物の規模は，No.１建物に著しく酷似している。



第19図　No.16建物（S＝1/100）

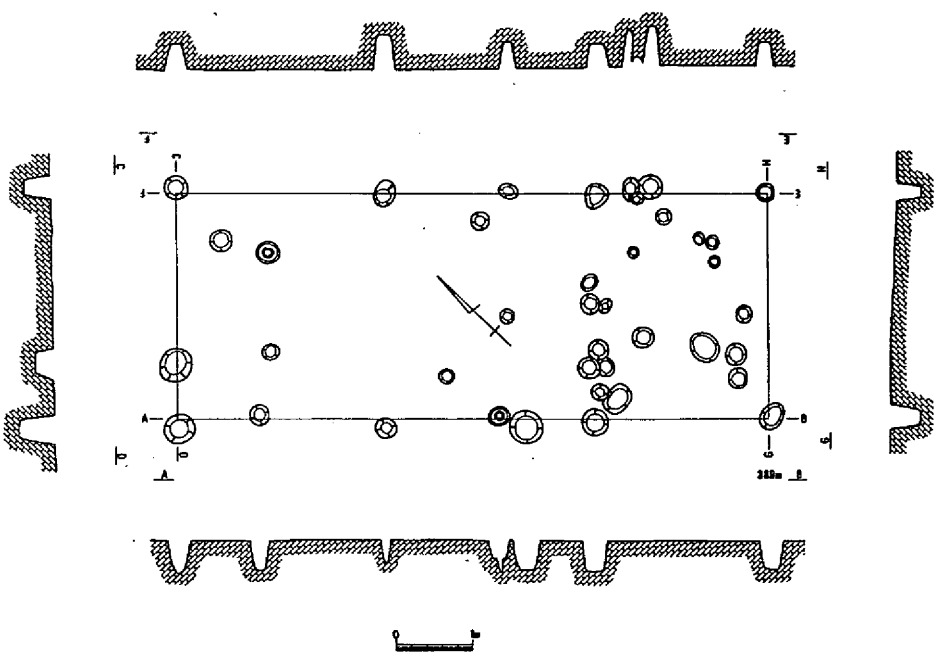
No.16 建物（第19図，図版10）

１区のＡ地点に存在する。No.17建物の北東方向に位置している。３×２間の建物で，棟方向がＮ―47.0°―Ｅになる。桁行は991cm，梁行は388cmを測る。柱穴は，検出面での直径が24～47cmを測り，規模が不揃いである。柱穴の検出面からの深さは15～58cmを測り，底部のレベルが一定になっていない。北西方向の桁行の中間に位置する柱穴の深さは，四隅の柱穴よりも浅くなっている。この建物の

特徴は，棟持柱の柱穴が，梁行よりも外に張出した位置に存在していることである。この棟持柱の柱穴は，平面形がほかの柱穴と似た形態を呈するが，検出面からの深さが，四隅に位置する柱穴と同じように深くなっている。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。この建物の桁行の柱間寸法は不揃いであるが，平均値で 328cmを測る。北西方向の桁行の中間に柱穴が存在する位置では，柱間寸法が平均値で 160cmを測る。棟持柱の柱穴が，梁行よりも外に張出しているが，梁行の柱間寸法は199cmになるであろう。この建物は，№17建物と著しく近接した位置に存在しているため，№16建物と№17建物が同時期に並んで存在することは不可能である。

No.17 建　物 （第20図，図版３－２）

１区のＢ地点に存在する，№16建物と№18建物の中間に位置している。３×１間の建物で，棟方向がＮ－45.0°－Ｗになる。桁行は765cm，梁行は298cmを測る。柱穴は検出面での直径が23～40cmを測り，規模が不揃いである。柱穴の検出面からの深さは30～47cmを測り，底部のレベルが一定になっていない。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。桁行の柱間寸法は，Ｇ－Ｈ断面の梁行に近接した位置が 215cmを測るが，Ｃ－Ｄ断面の梁行に近接した２間の柱間は，いずれも270cmを測る。棟持柱の柱穴の検出作業を行ったが，確認できなかった。梁行が298cmと短いから，棟持柱は存在しなかったのであろう。精査したにもかかわらず，この建物に伴う遺物は検出できなかった。

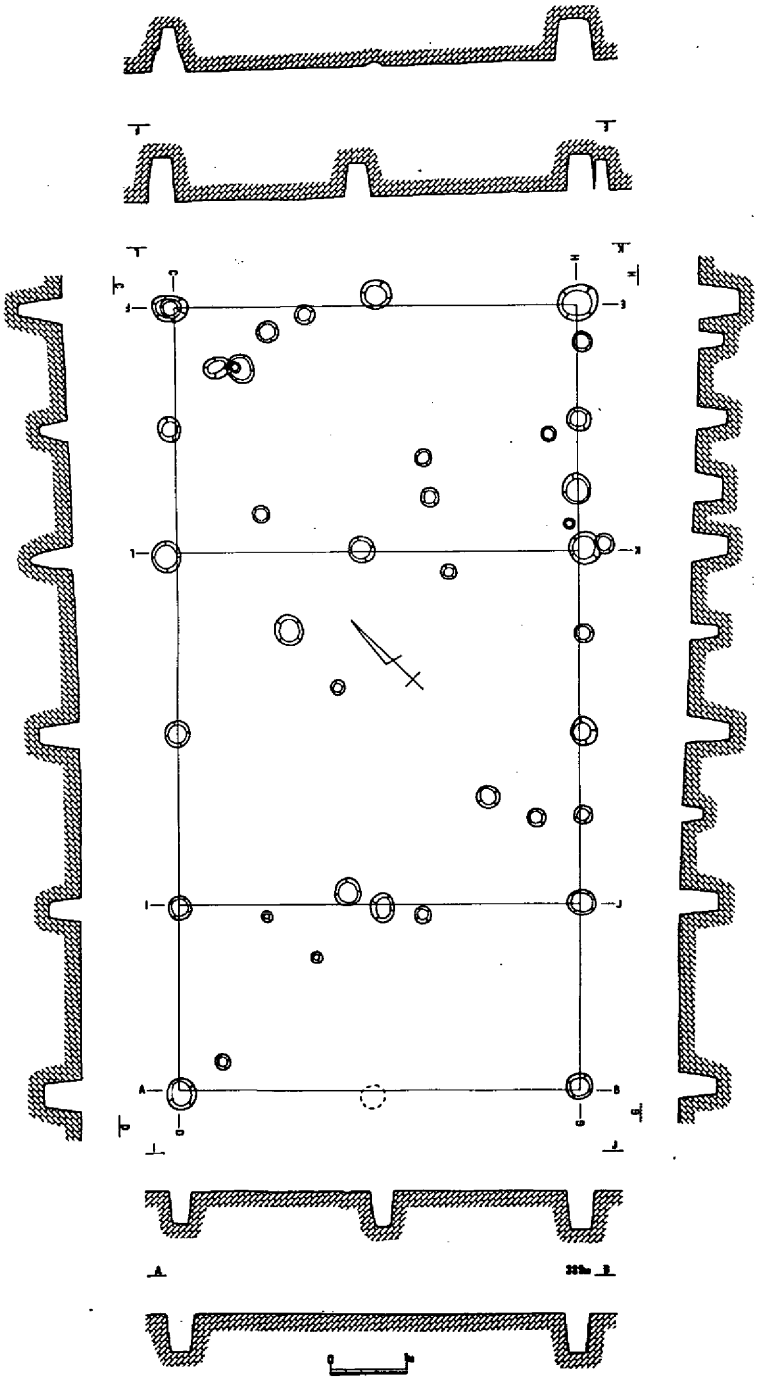


第20図 №17建物 (S＝1/100)

No.18 建　物

（第21図，図版３－２）

１区のＢ地点に存在する。町道とNo.17建物の中間に位置している。５×２間の建物で，棟方向はＮ－48.0°－Ｅになる。桁行は1021cm，梁行530cmを測る。柱穴は，検出面での直径が30～55cmを測り，規模が不揃いである。四隅に位置する柱穴と，Ｋ－Ｌ断面の両端に位置する柱穴は，比較的規模が大きいが，中間に位置する柱穴は，前者に比してやや規模が小さくなっている。柱穴の検出面からの深さは40～60cmを測り，底部のレベルが一定になっていない。四隅に位置する柱穴と，Ｋ－Ｌ断面の両端に位置する柱穴は，ほかの柱穴よりもやや深く掘開している。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。桁行の柱間寸法は，Ａ－Ｂ断面とＫ－Ｌ断面の中間部分に位置する３間の柱間が，

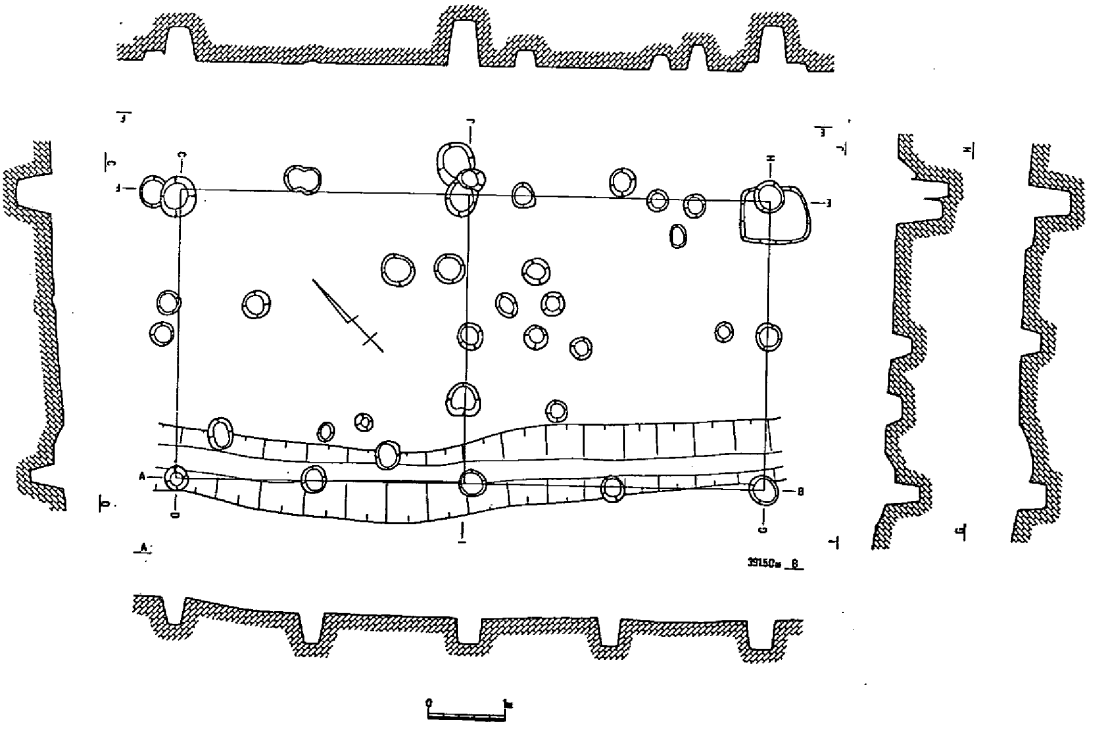


第21図　No.18建物（S＝1/100）

平均値で240cmを測る。またK－L断面とE－F断面の中間部分は，平均値で160cmを測る。K－L断面とE－F断面の中間に位置する桁行の柱間寸法が，A－B断面とK－L断面の中間に位置する桁行の柱間寸法と異なっているから，前者の範囲は，のちに増築された可能性が強い。G－H断面の桁行で，I－J断面とK－L断面の中間に位置する部分は，中間に規模の小さい柱穴が検出されて4間になっている。このG－H断面の桁行は，日当りのよい南方向に面しているから，窓が設けられていたのであろう。E－F断面の梁行には，外に張出して棟持柱の柱穴を検出した。A－B断面の梁行では，棟持柱の柱穴が存在すると考えられる位置に，現代の暗渠が深く掘込まれているから，柱穴を確認することができなかった。本来はE－F断面の梁行のように，外に張出して棟持柱の柱穴が存在したと考える。梁の柱間寸法は，E－F断面で265cmを測る。なおI－J断面とK－L断面の中間の位置には，束柱と考える柱穴を検出している。このNo.18建物は，No.17建物の棟方向と直交する方向で，C－D断面の桁行の延長がNo.17建物の梁行に一致しているから，No.18建物とNo.17建物は，同時期に建てられていたと考える。精査したにもかかわらず，このNo.18建物に伴う遺物は検出できなかった。

No.19 建　　物 （第22図，図版13－1）

2区のA地点に，No.20建物と重複して存在する。4×2間の建物で，棟方向がN－44.5°－Wになる。桁行は776cm，梁行は380cmを測る。柱穴は，検出面での直径が30～53cmを測り，規模が不揃いに



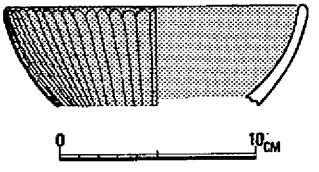
第22図 No.19建物（S＝1/100）

なっている。柱穴の検出面からの深さは25～60cmを測り，底部のレベルが一定になっていない。しかし，A－B断面の桁行に位置する柱穴5は，ほぼ同じ規模で直線的に並んでいる。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。桁行の柱間寸法は194cmを測り，A－B断面の桁行では，柱間寸法が一定の値になっている。E－F断面の桁行では，中間に位置する柱穴が外に張出している。C－D断面の梁行では，棟持柱の柱穴が外に張出して存在するが，G－H断面の梁行では，異なった様相を呈している。梁行の柱間寸法は190cmで，桁行の柱間寸法と酷似した数値になっている。I－J断面の中間の位置には，束柱と考える柱穴を検出している。

忠田山遺跡検出建物規模一覧表（表－3）

遺構番号	規模	棟方向	桁行	梁行	柱穴	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	備考
11	2×1	N-31.5°-E	4.08	2.19	0.40 0.21	2.04	2.19	調査範囲の北端に存在する。 No.15建物に酷似する。
12	3×2	N-47.0°-W	10.13	4.87	0.37 0.17	3.30 (1.56)	2.45	No.18建物とほぼ直交する。 棟持柱の柱穴に石が存在する。
13	3×2	N-30.0°-E	8.75	4.00	0.40 0.23	2.85	2.00	調査範囲外へ張出している。 棟方向が特異である。
14	1×1	N-20.0°-E	2.54	1.80	0.47 0.33	2.54	1.80	小規模の建物である。 周辺で土器片が出土している。
15	2×1	N-21.0°-E	3.76	2.06	0.36 0.25	1.88	2.06	No.14建物と並んで存在する。 No.11建物に酷似する。
16	3×2	N-47.0°-E	9.91	3.88	0.47 0.24	3.28 (1.60)	1.99	棟持柱が外に張出している。 No.17建物とは時期が異なる。
17	3×1	N-45.0°-W	7.65	2.98	0.40 0.23	2.70 2.15	2.98	No.18建物とほぼ直交する。 梁行の狭い建物である。
18	5×2	N-48.0°-E	10.21	5.30	0.55 0.30	2.40 1.60	2.65	No.17建物とほぼ直交する。 増築された可能性が強い。
19	4×2	N-44.5°-W	7.76	3.80	0.53 0.30	1.94	1.90	No.20建物と重複する。 柱穴で青磁碗が出土している。
20	3×1 (3×2)	N-44.0°-E	8.64	4.10	0.53 0.28	2.70	4.10 (2.05)	No.19建物と重複する。 棟持柱の柱穴が存在しない。

単位：m

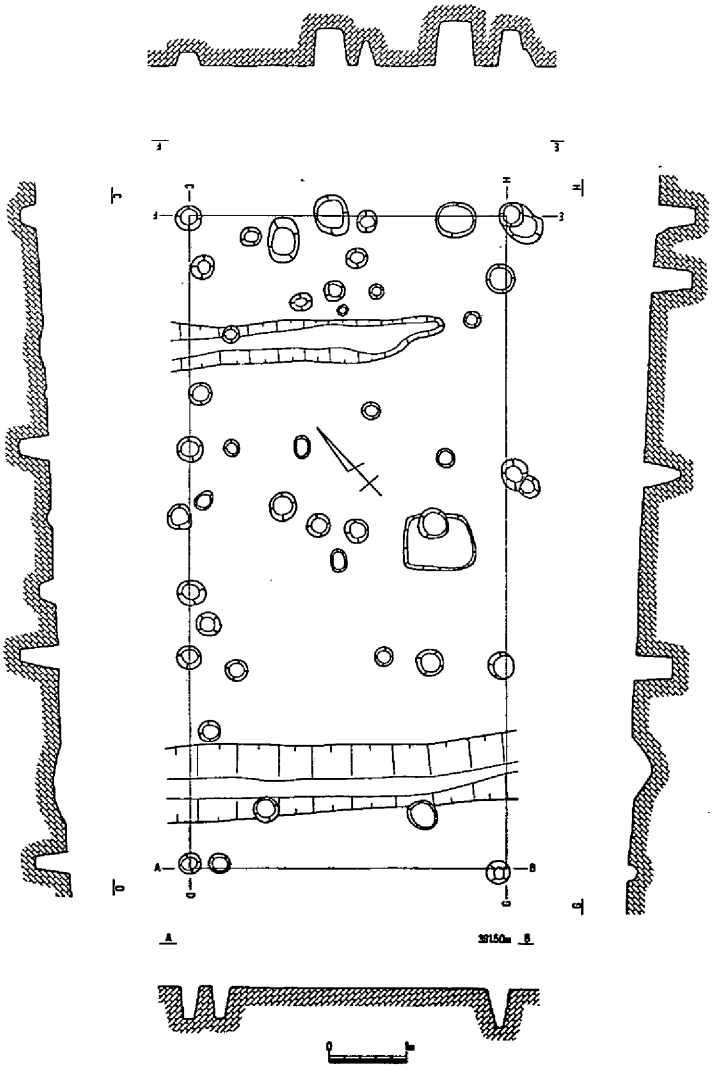


第23図　No.19建物出土遺物（S＝1/4）

No.19建物出土遺物　（第23図，図版23－5）

№19建物の西端に位置する柱穴内から出土したものである。青磁碗の破片である。底部は，欠損しているために不明である。口縁部はゆるやかに内彎して立上がり，端部は丸く仕上げている。磁胎は灰白色を呈し，胎土中には砂粒が少ない。内外面とも全体に草色を呈する半透明釉を施し，器面がガラス質になっている。外面には，花弁の文様を描いている。

この№19建物の柱穴内から出土した青磁碗は，室町時代の時期に属すると考える。



第24図　No.20建物（S＝1/100）

No.20　建　　物

（第24図，図版11－1）

2区のA地点に，№19建物と重複して存在する。この建物の棟方向は，N－44.0°－Eになる。桁行は864cm，梁行は410cmを測る。柱穴は，検出面で直径が28～53cmを測り，規模が不揃いになっている。この建物は緩斜面に位置するため，柱穴の検出面からの深さは異なっている。また柱穴の底部のレベルは，地形の低い位置に存在する柱穴が地形の高い位置に存在する柱穴よりも低くなっている。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。桁行の柱間寸法は，A－B断面の梁行に近接した2間では，両桁行とも柱間が約270cmを測るが，E－F断面に近接した部分では，両桁行とも300cm以上に

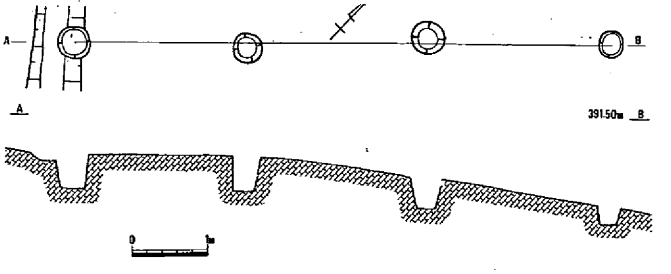
なっている。念入りに柱穴の検出作業を行ったが，この建物に伴う桁行方向の柱穴は，ほかに確認できなかった。またA－B断面の梁行方向には，棟持柱の柱穴が存在しない。ところが梁行は410cmと著しく長いから，中間に棟持柱が存在しなければ，建物が不安定であると考える。A－B断面の梁行の位置は，岩盤の地山面が露出しているから，柱をおさめる穴を掘開せずに地山面に直接設置したのかもしれない。いずれにしても詳細は不明であるが，棟持柱が存在していたならば，梁行の柱間寸法は205cmを測るであろう。精査したにもかかわらず，この建物に伴う遺物は検出できなかった。またこの建物は，No.19建物と重複して存在する建物であるが，両建物の前後関係を把握することができなかった。

No.19建物とNo.20建物が存在するのは，急勾配の法面直下の位置である。この法面は，調査を実施する以前の段階では，現代になって削平されたものと考えられた。ところが調査が進行すると，法面直下の位置は岩盤が露出して緩斜面になっているにもかかわらず，柱穴が多数検出されて建物としてまとまるものを確認した。建物以外の遺構として，柵や溝も検出した。したがって，2区と3区の境界に位置する急勾配の法面は，建物や柵を構築するために削平した当時の造成面であることが判明したのである。

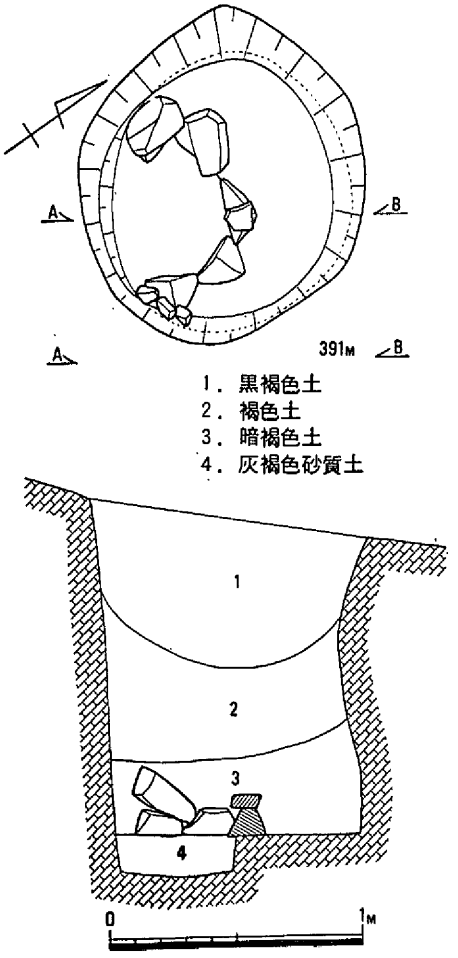
No.21　柵　（第25図，図版13－1）

2区のB地点に存在する。遺構の検出作業の段階では，建物の一部になる可能性が考えられたが，柱穴4が直線的に並んでいるだけで建物としてまとまらなかったから，柵になると理解した。この柵の方向はN－－47.0°－Eである。柱穴は，検出面での直径が31～47cmを測り，北東端に位置するものが最も規模が小さい。緩斜面に存在する柵であるから，底部のレベルは不揃いである。柱穴間の距離は，南西端が230cm，中間の部分と北東端が240cmを測る。柱根や柱の痕跡は，確認することができなかった。精査したにもかかわらず，この柵に伴う遺物は出土していない。

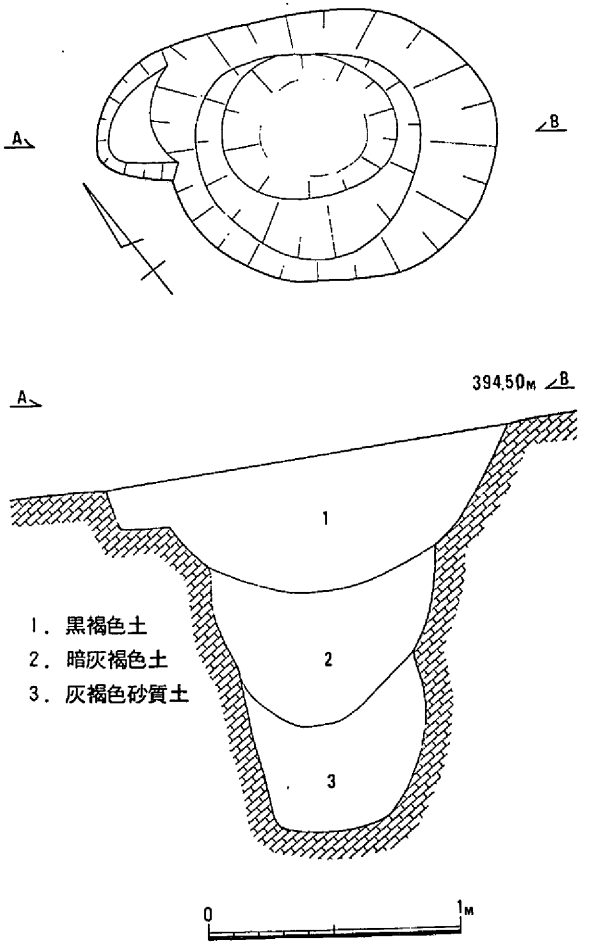
No.21柵の方向は，No.19建物の棟方向とほぼ直交する方向になっているから，No.21柵とNo.19建物は，同時期に構築されていた可能性が強い。しかもこの柵は，No.19建物とNo.23井戸の中間の位置に存在しているから，No.19建物の居住者が井戸を利用する人々を意識して目隠しのために設置したのではなかろうか。



第25図　No.21柵（S＝1/100）



第26図　No.23井戸（S＝1/30）



第27図　No.24井戸（S＝1/30）

第3節　井　　戸

No.23　井　　戸　（第26図，図版12－1）

2区のA地点に存在する。№22溝と№29集石土壙の中間に位置している。検出面での平面形は，歪んだ楕円形を呈する。直径の最大値は131cm，最小値は121cmを測る。断面の形は凵字形を呈するが，部分的には袋状になっている。検出面からの深さは，井戸の中心の位置で 124cmを測るが，南側の底面はさらに約15cmの深さに掘開している。この井戸は，素掘りであるにもかかわらず，底面をさらに掘開した部分の縁辺には，人頭大から拳大の石を配置している。この井戸は，当初の段階で凵字形に掘開して機能していたものが何らかの状況によって，底面をさらに掘開した可能性が強い。深い井戸であるにもかかわらず，幅が著しく狭く，井戸内にはたえず水が溜っていたから，発掘調査には長時間を要した。井戸内の覆土を検討した結果，4層になっているのを確認した。最下層の距形に掘開されて1段低くなっている部分には，細かい砂が厚く堆積していたから，この井戸が長期間にわたって使用されていたと考える。井戸内より，亀山焼大甕の破片が出土した。

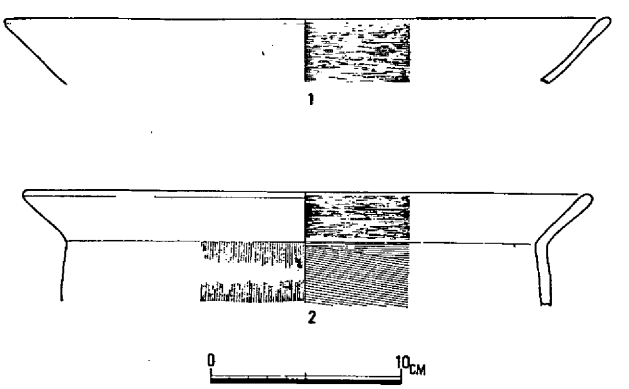
No.23井戸出土遺物

（第28図，図版23－4）

亀山焼大甕の胴部破片である。外面には，格子目の叩目が認められる。内面は，青海波の叩目を櫛状工具でナデて消している。胎土中には細かい砂粒を多く含み，瓦質である。外面は黒褐色を呈するが，一部は褐色になっている。内面は全体に褐色を呈する。

この亀山焼大甕は，室町時代に属すると考える。

第28図　No.23井戸出土遺物（S＝1/4）



第29図　No.24井戸出土遺物（S＝1/4）

No.24　井　戸

（第27図，図版12－2）

3区のB地点に存在する。この井戸の周辺では，遺構を検出していない。検出面での平面形は，約105×140cmの歪んだ楕円形を呈す

る。検出面から底面までの深さは，中心の位置で 147cmを測る。素掘りを行っているだけで，№23井戸のように石の配置等の施設は存在しない。比較的深いにもかかならず，調査の段階で水が溜っているのは，底面から約20cmまででであった。したがって，井戸以外の遺構になるのかもしれない。

No.24井戸出土遺物（第29図）

図示したのは，どちらも鍋形土器の口縁である。

1の口縁は，わずかに内彎しながら斜め上方へ張出し，端部が肥厚して丸く仕上げている。外面は横ナデを行い，内面は櫛状工具によって横方向にナデている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で乳褐色を呈する。外面にはススの付着が認められ，火にかけて煮沸具として使用したことを示している。

2は，頸部から口縁部にかけてく字状に外反し，端部は丸く仕上げている。胴部は，頸部直下の部分がわずかに残存するだけで，詳細は不明であるが，深い甕状を呈するであろう。口縁部の外面は横ナデを行い，内面は櫛状工具によって横方向へナデている。頸部直下の胴部外面は，櫛状工具によって縦ナデを行っているが，さらに上面を指頭によって横方向にナデているため，部分的に櫛状工具の痕跡が消滅している。胴部の内面は，櫛状工具によって横方向へナデている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で乳褐色を呈する。

以上に説明した№24井戸出土の鍋形土器は，室町時代の時期に属すると考える。

第4節　溝・溝状遺構

No.8　溝　（第2・11図，図版7－2）

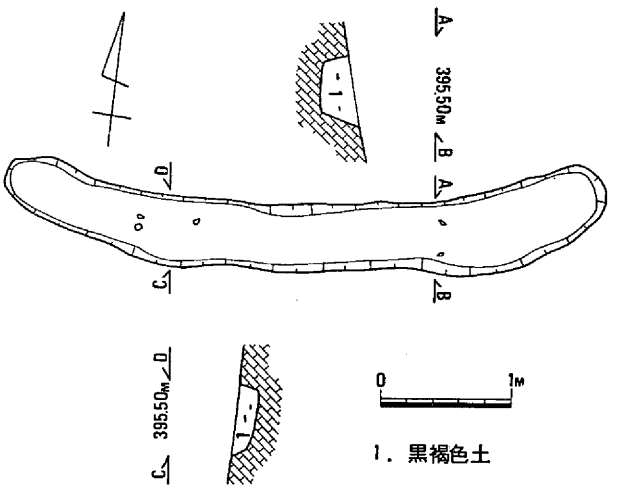
3区の№4住居址の北側に存在する。東方向は，№25古道によって切られている。№4住居址の項で記述したように，この溝は№9溝と接続していた可能性が考えられる。№4住居址との位置関係から推察して，この溝は№4住居址の排水溝になるのかもしれない。精査したにもかかわらず，遺物は検出できなかった。

No.9　溝　（第30図，図版3－1）

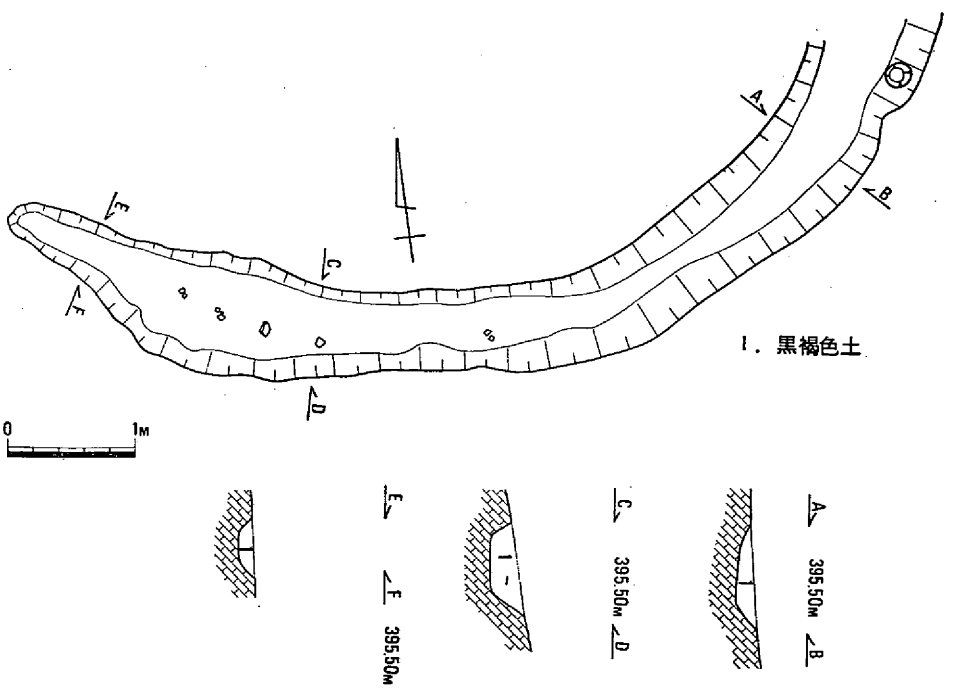
3区のA地点に存在する。№25古道と№10溝の中間に位置している。平面形は，ゆるやかに彎曲した弧を描いて，延長4.65mを測る。検出面での幅は，45～65cmを測る。底面の幅は，35～55cmを測る。検出面から床面までの深さは，最も深い位置で25cmを測る。溝内から弥生式土器片が出土したが，いずれも胴部の小破片であるから図化することができなかった。

No.10　溝　（第31図，図版3－1）

3区のA地点に存在する。№43溝と交差し，東端は№1住居址に切られている。この溝は，№1住居址や№43溝よりも古い遺構である。平面形は，№9溝とは反対方向へゆるやかに彎曲して，弧を描いている。検出面での溝の幅は，最も広い位置で97cmを測る。底面の幅は，最も広い位置で65cm，最



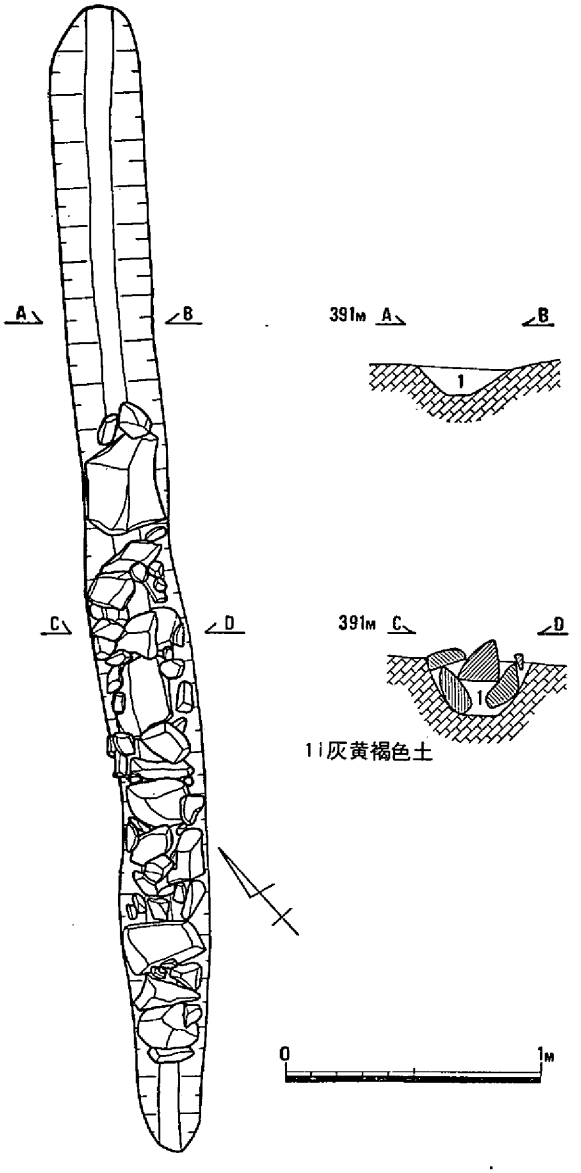
第30図　No.9溝（S＝1/60）



第31図　No.10溝（S＝1/60）

も狭い位置で15cmを測る。検出面から底面までの深さは，最も深い位置で25cmを測る。溝内から弥生式土器片が出土したが，いずれも胴部の小破片であるため，図化することができなかった。

この溝は，No.1住居址によって東端が切られているから，No.1住居址に付属することは考えられない。平面形がゆるやかに彎曲して弧を描いているから，遺構の検出作業の段階では，古墳の周溝になる可能性が考えられた。ところが，この溝はNo.1住居址よりも古い時期で，溝内より弥生式土器片が出土しているから，弥生時代に属するであろう。この溝の性格は不明である。



第32図　No.22溝（S＝1/30）

No.22　溝　（第32図，図版13—1）

2区のA地点に存在する。No.21柵とNo.23井戸の中間に位置している。溝の方向は，N—38.0°—Eである。この溝は，地形の高い位置の端部がNo.42溝と接している。緩斜面に存在するため，地形の低い位置は削平されて，延長4.44mが残存しているだけである。この溝は，地山面の岩盤を掘開して構築している。溝内には，人頭大から拳大の石を多数検出した。大きい石は溝に蓋をするようにして置かれているが，溝内の底部には空間があって，水がたえず流れる構造になっている。溝の検出面での幅は，最も広い位置で37cmを測る。溝の底部の幅は8～10cmを測り，断面がU字形を呈する。溝内を精査したにもかかわらず，遺物は出土しなかった。

この溝は，内部に人頭大から拳大の石を多数検出し，建物に近接して存在するから，雨落溝になる可能性が推察されたが，溝と建物の中間には柵が構築され，建物と溝の方向が異なるから，溝の上面に建物の庇が張出していたとは考えられない。したがって，この溝は雨落溝にはならないであろう。この溝の方向が，No.29集石土壙から町道に向って張出している溝に面しているから，当時の両溝は接続していたのかもしれない。ところが途中の地点が削平されて残存しないから，詳細は不明である。

No.36　溝状遺構　（第２図，図版３－２）

１区のＢ地点に存在する。忠田山遺跡の調査範囲内では，最も北側に位置する遺構である。ゆるやかに彎曲した細い溝が存在するだけである。検出面での幅が13～18cm，底部の幅が３～８cmを測る。検出面から底部までの深さは約５cmを測り，断面がＵ字形を呈する。溝の東方向は著しく削平されて，約25cmの高低差を有する段になっている。溝の周辺には柱穴が存在するが，柱穴内の覆土が溝内のものと異なっているから，この溝に伴うものとは考えられなかった。この溝は，住居址の壁体溝の可能性が強いが，詳細は不明である。精査したにもかかわらず，溝内から遺物は出土しなかった。

No.37　溝　（第２図，図版３－２）

１区のＢ地点に存在する。No.38溝と交差している。ほぼ直線を呈する細い溝で，延長約17mが残存している。この溝の検出面での幅は，最も広い位置で60cmを測る。底部の幅は，10～20cmを測る。検出面から底部までの深さは，最も深い位置で15cmを測り，断面がＵ字形を呈している。溝内を精査したにもかかわらず，遺物は出土しなかった。この溝は，No.41溝と接続していた可能性が強い。

No.38　溝　（第２図，図版３－２）

１区のＢ地点に存在する。この溝はNo.11建物と重複し，No.37溝と交差している。No.37溝よりも古い遺構である。この溝はほぼ直線を呈し，中間部分の幅が両端よりも広くなっている。検出面での幅は，最も広い位置で55cmを測る。底部の幅は，10～23cmを測る。検出面から底部までの深さは，最も深い位置で20cmを測り，断面はＵ字形を呈する。この溝内を精査したにもかかわらず，遺物は出土しなかった。したがって，この溝の属する時期や性格は不明である。

No.39　溝　（第２図，図版３－２）

１区のＡ地点に存在する。平面形はＬ字状を呈して，屈曲部分の幅が最も広くなっている。この溝はNo.17建物と重複し，地形の高い位置の端部はNo.40溝と接している。検出面から底部までの深さは，約10cmで著しく浅い。溝内を精査したが，遺物は出土しなかった。この溝は，No.16建物の西端に位置する隅を囲むようにして存在するから，No.16建物の雨落溝になるのかもしれない。

No.40　溝　（第２図，図版３－２）

１区のＡ地点に存在する。１区のＢ地点を縦貫している溝で，No.16建物，No.17建物，No.18建物と重複している。この溝は，No.41溝と交差している地点の幅が最も広くなっている。青谷川に面した調査予定地の境界部分では，溝の幅が狭くなっている。地形の高い位置の端部は，町道付近で不明になっているが，２区に存在するNo.29集石土壙と接続していない。検出面から底部までの深さは約10cmを測り，幅が広いにもかかわらず，著しく浅い溝である。溝内を精査したが，遺物は出土しなかった。この溝は建物群と重複しているとはいえ，溝と建物群の前後関係を把握することができなかった。

No.41　溝　（第２図，図版３－２）

１区のＡ地点に存在する。№40溝と交差している。検出面での幅は40～60cm，底部の幅は30～35cmを測る。検出面から底部までの深さは約10cmを測り，著しく浅い溝である。溝内を精査したが，遺物は出土しなかった。この溝の属する時期は不明である。この溝は，１区のＢ地点に存在する№37溝と，接続していた可能性が強い。

No.42　溝　（第２図，図版13－１）

２区のＡ地点に存在する。２区と３区の境界に位置する，急勾配の法面と平行している。この溝内には，№19建物と№21柵の柱穴が存在している。調査によってこの溝は，№19建物や№21柵よりも新しいことを確認した。検出面での幅は，30～65cmを測る。底部の幅は，10～40cmを測る。検出面から底部までの深さは，最も深い位置で32cmを測る。断面の形は，浅いＵ字形を呈している。この溝の底部のレベルは，調査予定地の境界付近と№23井戸に面した端部が低くなっているから，水は№19建物の存在する地点を境にして，両端へ流れていたと考える。溝内を精査したが，遺物は出土しなかった。この溝は，３区に位置する丘陵から流れた水を，処理するために設けられたもので，建物や柵の構築された時期よりも新しいと考える。

No.43　溝　（第２図，図版３－１）

３区のＡ地点に存在する。№10溝と交差している。調査の結果，この溝は№10溝よりも新しいことを確認した。２区と３区の境界に位置する法面に近接した地点は，削平されて不明である。検出面での幅は50～85cm，底部の幅は，15～30cmを測る。検出面から底部までの深さは約10cmを測り，断面が浅いＵ字形を呈する。溝内を精査したが，遺物は出土しなかった。この溝の性格は不明である。

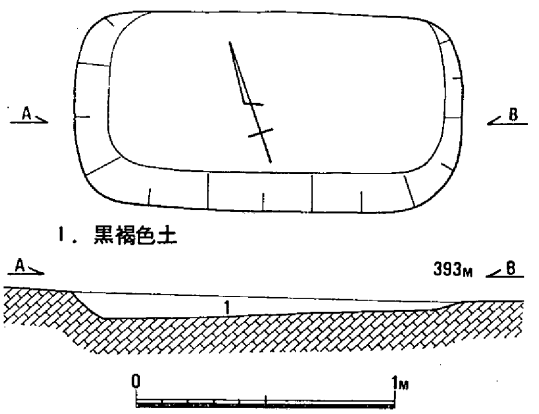
第５節　土　　壙

No.５　土　　壙　（第33図，図版３－１）

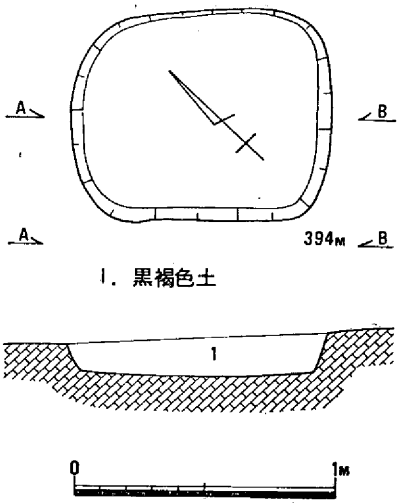
３区のＢ地点に存在する。地形の低い北方向は，壁面が削平されて残っていない。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の長軸は150cm，　短軸は80cmを測る。また床面の長軸は130cm，短軸は 64cmを測る。検出面から床面までの深さは，地形の高い部分に位置する最も深い計測値が15cmで，著しく浅い土壙である。土壙内を精査したにもかかわらず，遺物は検出できなかった。したがって，この土壙の属する時期は不明である。

No.６　土　　壙　（第34図，図版３－１）

３区Ａ地点の法面に近接して存在する。平面形は歪んだ隅丸長方形を呈する。検出面の長軸は 100



第33図　No.5土壙（S＝1/30）

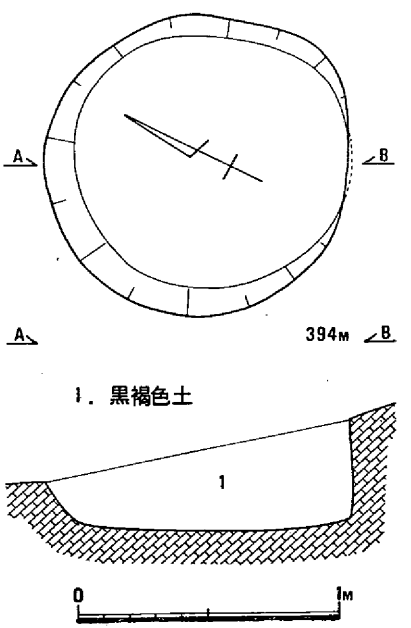


第34図　No.6土壙（S＝1/30）

cm，短軸は85cmを測る。また床面の長軸は90cm，短軸は75cmを測る。検出面から床面までの深さは，地形の高い部分に位置する最も深い所で27cmを測る。土壙内を精査したにもかかわらず，遺物は検出できなかった。したがって，この土壙の属する時期は不明である。

No.7　土　　壙　（第35図，図版3－1）

3区のA地点に存在するNo.1住居址の北方向で，法面に近接して存在する。前述したNo.6土壙と同じ等高線上に位置している。平面形は，東西方向がわずかに長い歪んだ円形を呈し，部分的には袋状になっている。検出面での直径の最大値は120cm，　最小値は151cmを測る。また，床面での直径の最大値は106cm，最小値は98cmを測る。検出面から床面までの深さは，地形の高い部分に位置する袋状を呈する所で40cmを測る。土壙内を精査したにもかかわらず，　遺物は検出できなかった。　したがって，この土壙の属する時期は，No.5土壙やNo.6土壙と同様に不明である。住居址に近接して存在するから，住居址と同時期の貯蔵穴になるのかもしれない。



第35図　No.7土壙（S＝1/30）

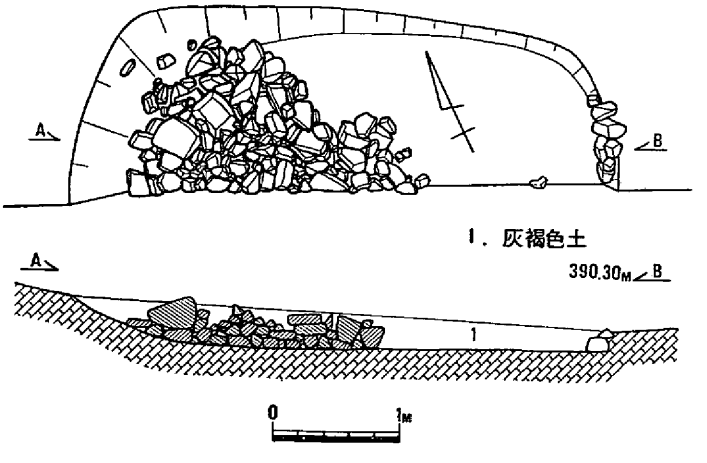
No.28　集石土壙　（第36図，図版13－2）

1区のA地点に，№71不明土壙と接して存在する。調査によって，この集石土壙は№71不明土壙よりも新しい遺構であることを確認した。南側は町道部分になるため，調査することができなかった。平面形は，歪んだ隅丸長方形を呈するであろう。検出面のA－B断面は425cm，床面のA－B断面は345cmを測る。また検出面から床面までの深さは，約40cmを測る。この土壙内には，人頭大から拳大の石を多数検出した。調査の結果，これらの石は，後世に土壙内へ転落したものではないことを確認した。また検出した状況によると，規則的に配置されているわけではなく，石が存在しない空白部分も認められる。東方向では，拳大の石が壁面に貼付けられていた。南側に町道があって，土壙全体を把握することができなかったから，土壙内に存在する多数の石の性格は不明である。なお土壙内には多数の石に混在して鉄滓が存在した。

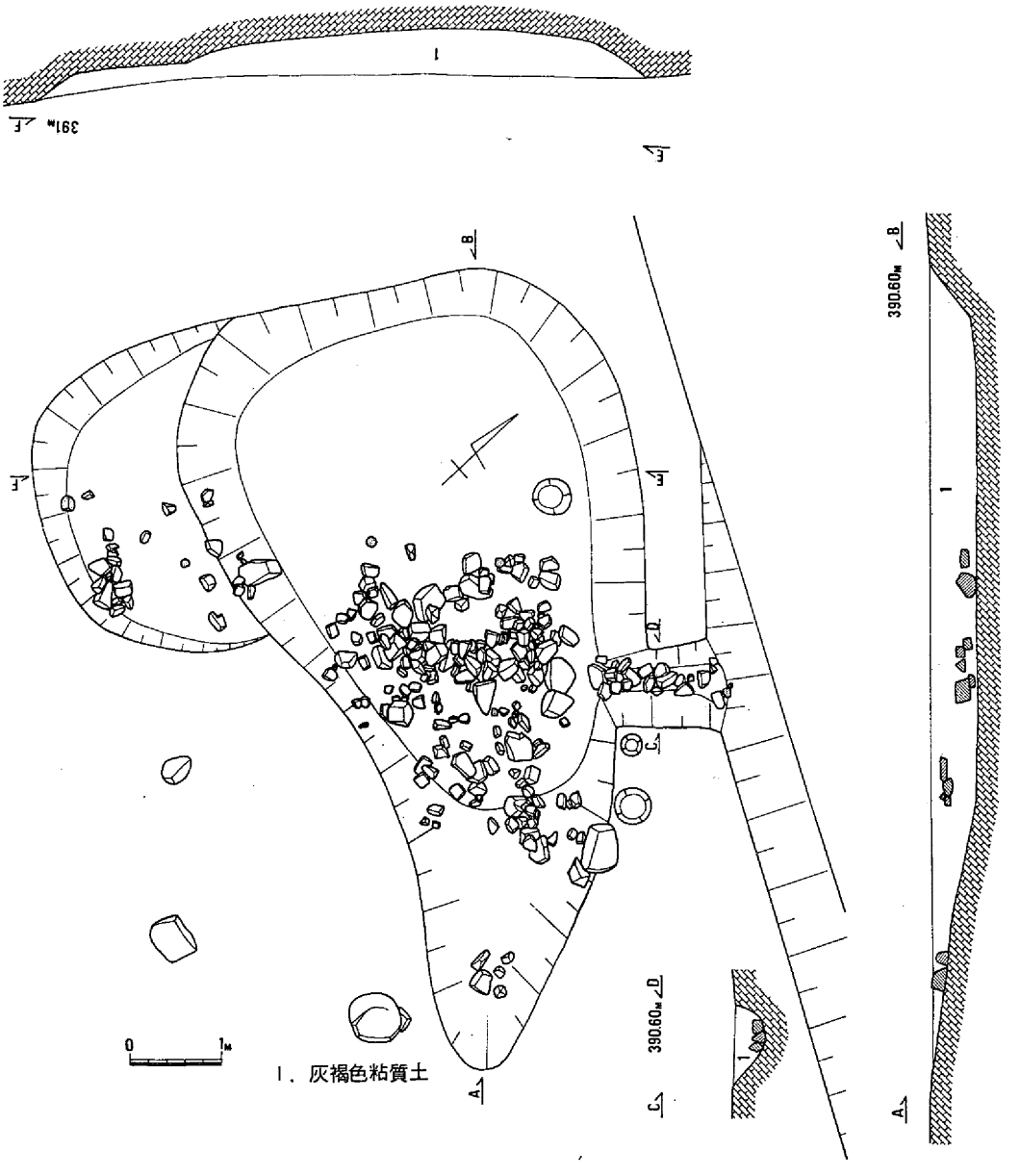
No.29　集石土壙　（第37図，図版14）

2区のA地点に町道と近接して存在する。規模が大きくて不整形な土壙が重複している。遺構の検出作業の段階では，住居址が想定されたが，周囲を調査した結果，土壙であることが判明した。この土壙が存在する位置は，2区で最も地形の低い地点であるから，雨水によって周辺の土砂がたえず流入した。また良好な日であっても，自然の湧水によって，土壙内には一定のレベルまで水が溜っていた。したがって，この土壙の調査では水の処理が困難で，調査完了までに長時間を要した。

この土壙の検出面でのA－B断面は855cm，C－D断面は665cmを測る。地形の高い位置に存在する半月形の土壙は，町道に近接して存在する大型土壙に切られている。大型土壙の床面でA－B断面は530cm，C－D断面は385cmを測る。検出面から床面までの深さは，大型土壙の中央部分で約50cmを測る。この土壙内には，前述した№28集石土壙と同様に，人頭大から拳大の石を多数検出した。これらの石は，床面から浮いているものが多いとはいえ，後世に土壙内へ転落したものではないことを確認した。また検出した状況によると，№28集石土壙と同様に規則的に配置されているわけではなく，東方向では石が存在しない空白部分が認められる。土壙内は湧水によってたえず水が溜っていたから，覆土は粘質土であった。



第36図　№28集石土壙（S＝1/60）



第37図　No.29集石土壙（S＝1/60）

大型土壙が町道に接する位置には，土壙から地形の低い北西方向へ張出した溝が存在する。検出面での幅は85cmを測り，断面はU字形を呈する。検出面から床面までの深さは，約35cmを測る。溝の床面のレベルが土壙の床面よりも低いから，土壙内の水は，たえず溝に流れていたと考える。この溝の床面には，土壙内と同様に床面に接して拳大の石を多数検出した。土壙内で検出した石と，溝内で検出した石の性格は不明である。この溝は町道によって切断されているとはいえ，町道に接して存在す

るNo.28集石土壙とは近距離の位置である。しかも溝の方向が，No.28集石土壙の東端に面して張出しているから，この溝によってNo.28集石土壙とNo.29集石土壙とは結ばれていた可能性が強い。

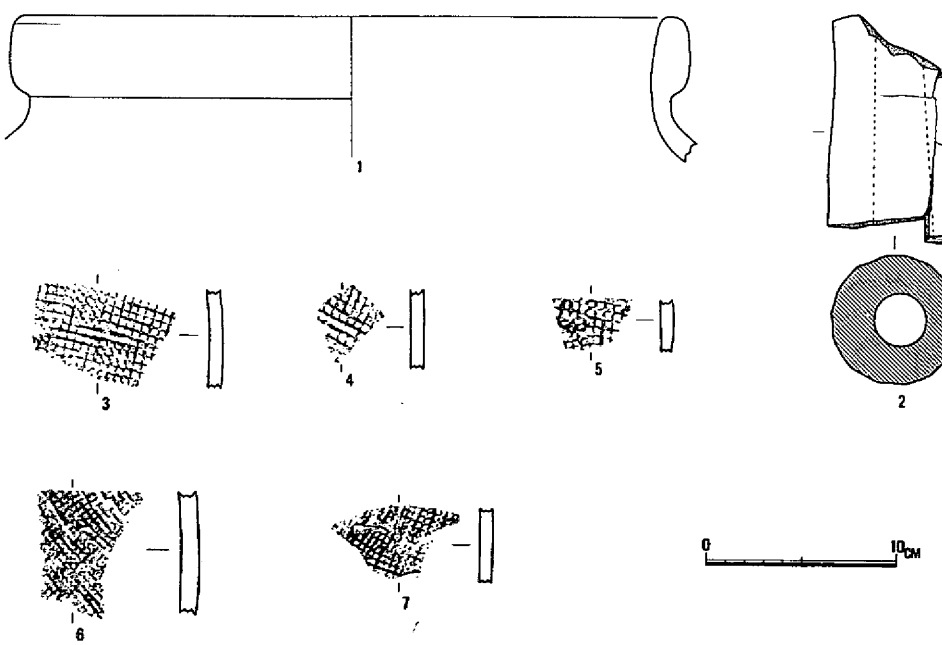
なおこのNo.29集石土壙内からは，多数の石に混在して，鉄滓以外に土器片とふいごの羽口が出土している。

No.29集石土壙出土遺物　（第38図，図版23－3）

1は，土壙から北東方向へ張出した溝の床面から出土した，備前焼大甕の口縁である。小破片であるため，詳細は不明である。口縁端部から肩部分にかけて，緑色を呈する自然釉の付着が認められる。胎土には砂粒の少ない良質の粘土を使用している。焼成は非常に良好で，堅緻になっている。色調は備前焼独特の赤褐色を呈し，器面には光沢が認められる。

2は，残存長12.2cmを測るふいごの羽口である。外面には縦方向の稜線が認められ，直径6.6～7.3cmを測る。円孔は中心よりややずれた位置で，直径2.4～3.2cmを測る。胎土中には，細かい砂粒に混在して小豆大の石も認められ，焼成は良好である。外面は黒褐色を呈するが，内面は褐色である。ふいごの羽口は，忠田山遺跡に近接した哲西町大字畑木字青谷に所在する大倉遺跡（註2）の，1区から多量に出土している。

3から7は，亀山焼大甕の胴部破片である。外面には，いずれも格子目の叩目が認められる。内面は，青海波の叩目を櫛状工具でナデて消している。3から5は灰色を呈して須恵質になっているが，6と7は褐色を呈して瓦質である。前者は外面の叩目が比較的粗くて，同一個体の破片と考える。後



第38図　No.29集石土壙出土遺物（S＝1/4）

者はやや叩目が細かいが，同一個体の破片である可能性が強い。

以上に説明したNo.29集石土壙出土遺物は，備前焼大甕の口縁の形状と亀山焼大甕の胴部破片から推察して室町時代に属すると考える（註３）。

No.30　集石土壙　（第２図，図版３－１）

２区のＢ地点に存在する。平面形は歪んだ楕円形を呈する小型の土壙である。検出面での長軸は80cm，短軸は50cmを測る。床面の長軸は55cm，短軸は30cmを測る。検出面から床面までの深さは，地形の高い位置で９cmを測る。小型の土壙であるにもかかわらず，土壙内に人頭大から拳大の石を検出した。いずれも床面に接しているから，後世に土壙内へ転落したとは考えられなかった。この土壙は，前述したNo.28集石土壙やNo.29集石土壙とは，性格が異なるものである。土壙内を精査したが，遺物は検出できなかった。

No.31　土　　壙　（第２図，図版13－１）

２区のＡ地点に存在する。No.42溝と法面の中間の位置で，長軸方向が等高線に平行している。平面形は，長大な隅丸長方形を呈する。検出面での長軸は325cm，短軸は77～117cmを測る。床面の長軸は225cm，短軸の最大値は80cmを測る。検出面から床面までの深さは，土壙の中央部分で11cmを測り，著しく浅い。土壙内を精査したが，遺物は検出できなかった。したがって，この土壙の属する時期は不明であるが，３区のＡ地点に存在するNo.６土壙やNo.７土壙の時期とは異なるであろう。

No.32　土　　壙　（第２図，図版９－１）

１区のＢ地点に存在する。No.13建物とNo.60不明土壙の中間に位置する。平面形は歪んだ楕円形を呈する。検出面での長軸は235cm，短軸は155cmを測る。検出面から床面までの深さは，最も深い位置で12cmを測り，著しく浅い。この土壙の西方向は，２段掘りになっている。土壙内には，柱穴状の小土壙が存在するが，このNo.32土壙よりも新しいことを確認した。土壙内を精査したが，遺物は検出できなかった。したがって，この土壙の属する時期は不明である。

No.33　土　　壙　（第２図，図版６）

２区のＡ地点に存在する。調査予定地の境界に位置するため，南東方向は調査することができなかった。この土壙は，No.３住居址の脇にNo.35鍛冶炉に接して存在する。土壙３が複雑に切合っているが，詳細は不明である。土壙内を精査したが，遺物は検出できなかった。この土壙の属する時期や性格は不明である。

No.34　土　　壙　（第２図，図版６）

２区のＡ地点に，No.２住居址と重複して存在する。調査の結果，No.２住居址よりも新しいことを確認した。調査予定地の境界に位置するため，南東方向は調査することができなかった。遺構の検出作

業の段階では，住居址が想定されたが，壁体溝や規則的に並ぶ柱穴が検出できなかったので，大型の土壙になると判断した。この土壙は，西方向の隅がわずかに高くなっている。また柱穴と考えられるものや，№2住居址方向へ張出した浅い溝が存在するが，性格は不明である。検出面から床面までの深さは約5㎝を測り，著しく浅い土壙である。南東方向が調査できなかったので，詳細は不明である。土壙内を精査したが，遺物は検出できなかった。

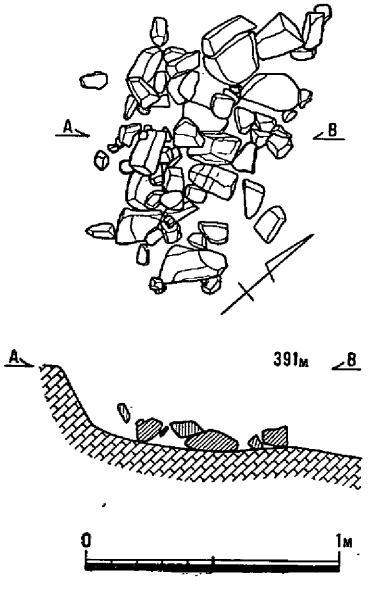
第6節　集　石　遺　構

No.26　集石遺構　（第39図，図版15—1）

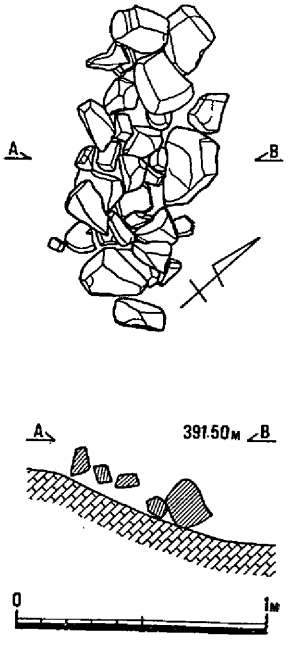
2区のA地点に存在する。急勾配の法面下端に位置している。約6×13㎝の範囲に，人頭大から拳大の石を多数検出した遺構である。調査の結果，3区の丘陵上から転落した石が堆積したとは考えられない。これらの石は，規則的に配置されているわけではなく，また地山面に接しているものも少ない。№19建物の西方向に位置しているとはいえ，性格は不明である。

No.27　集石遺構　（第40図，図版15—2）

2区のA地点に存在する。№26集石遺構と同様に，急勾配の法面下端に位置している。約10×11mの範囲に，人頭大から拳大の石を多数検出した。石の存在する範囲は，周辺よりもわずかに凹んでいる。調査の結果3区の丘陵上から転落した石が堆積したものではないことを確認した。これらの石



第39図　No.26集石遺構（S＝1/30）



第40図　No.27集石遺構（S＝1/30）

は，No.26集石遺構と同様に規則的に配置されているわけではなく，また地山面に接しているものも少ない。No.20建物の北方向に位置しているとはいえ，性格は不明である。

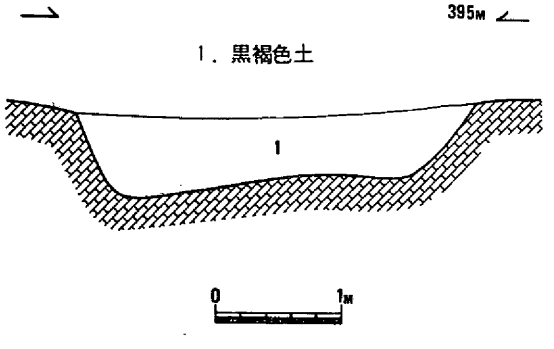
第7節　そのほかの遺構

No.25　古　　道　（第2・41図，図版16－1）

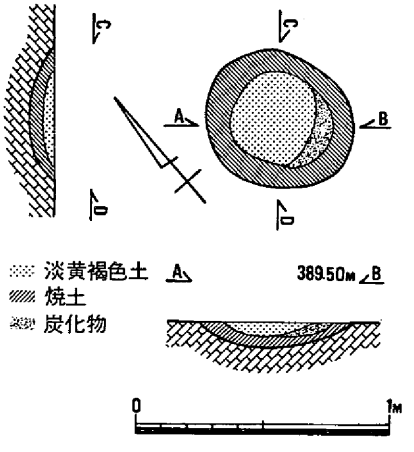
3区のほぼ中央に存在する。No.4住居址とNo.8溝に重複している。調査の結果，No.4住居址やNo.8溝よりも新しいことを確認した。遺構の検出作業の段階では，大溝の可能性が強かったが，水の流れた形跡は認められなかったので，古道と理解した。この古道はほぼ南北方向を示し，延長約21mが残存していた。最大幅は約3mを測り，地山面の岩盤を著しく削平してゆるやかな勾配にしている。道の表面には，凹凸が認められた。この古道から遺物は出土しなかったが，1区から2区にかけて存在する建物群が属する時期に関係すると考える。

No.35　鍛冶炉　（第42図，図版16－2）

2区のA地点に，No.33土壙と接して存在する。地山面を35×40cmの楕円形に，検出面から約5cm掘っただけの鍛冶炉である。炉の周辺の地山面は，ドーナツ状を呈して赤褐色に変色していた。南端の位置では，炭化物を検出した。この鍛冶炉周辺には遺物が存在しなかったが，No.29集石土壙ではふいごの羽口（第38図2）が出土している。No.35鍛冶炉とNo.29集石土壙は，約17mも離れているとはいえ，No.29集石土壙から出土したふいごの羽口は，このNo.35鍛冶炉に関係があると考えたい。



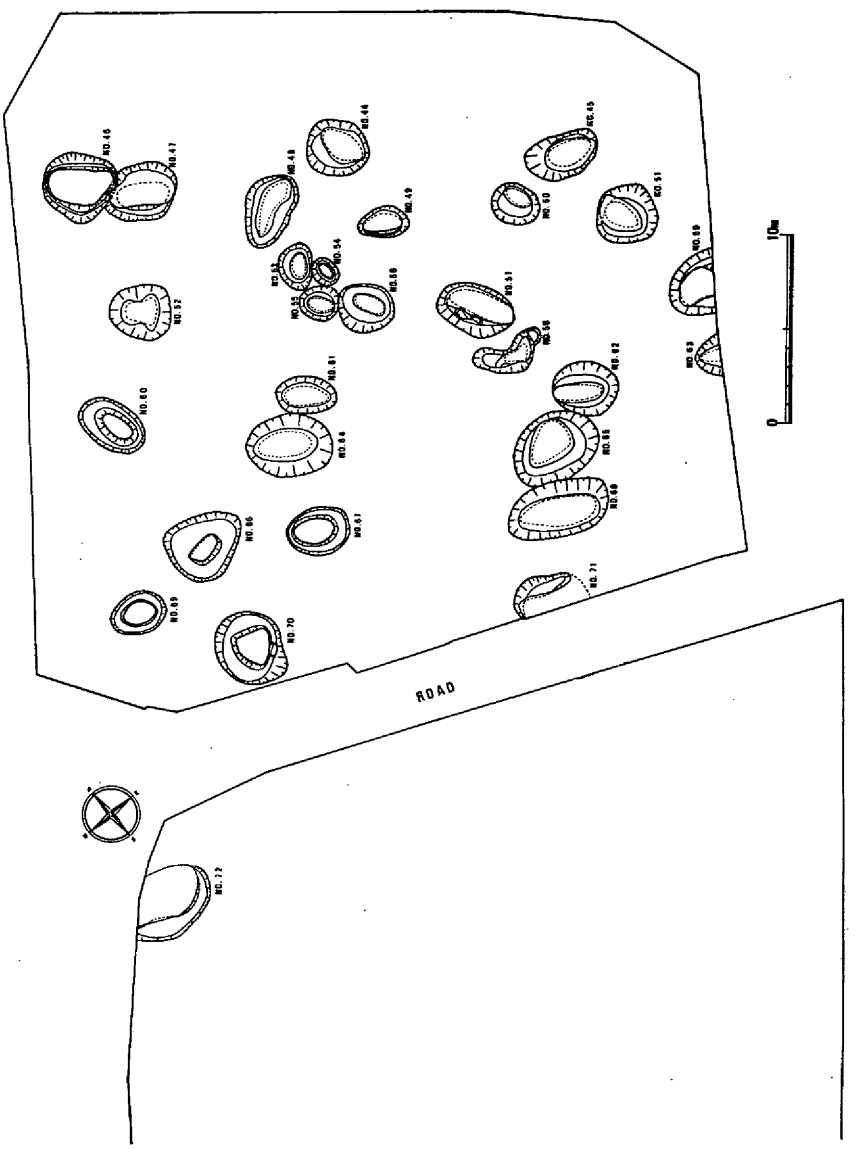
第41図　No.25古道断面図（S＝1/60）



第42図　No.35鍛冶炉（S＝1/30）

第8節　不　明　土　壙

忠田山遺跡で検出した「不明土壙」とは，平面形が不整円形または不整楕円形で，断面形が浅い擂鉢状を呈するものである。地山面で平面形を確認した場合，基盤の地山面と，不整円形または不整楕円形を呈する地山の土質に酷似した充填土の間に，黒褐色土が環状に検出されるのである。黒褐色土



第43図　不明土壙分布図（S＝1/400）

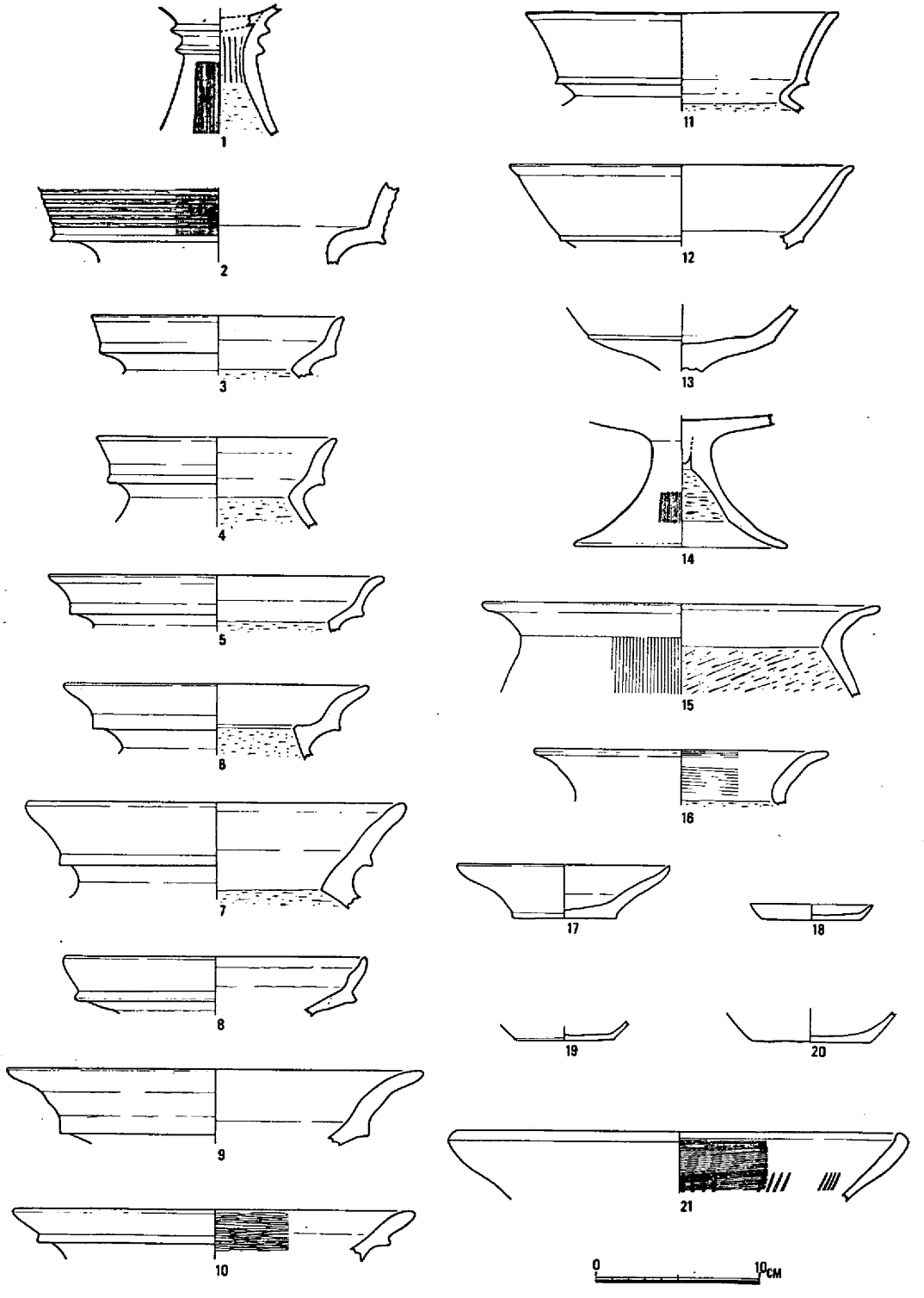
の部分を追求すると，中心方向へレンズ状を呈して抉り込んでいるものと，黒褐色土部分の断面形が浅いU字形を呈して，古墳の周溝状に全体をめぐるものとが存在している。この不明土壙は，1区を中心にして29箇所で検出した（第43図）が，精査したにもかかわらず，遺物はまったく検出できなかった。いずれも不自然な立地形態を呈し，人工の遺構とは考えられないものである。忠田山遺跡で検出した不明土壙は，不整楕円形を呈するものが多い。長軸の計測値は約400cmであるが，約150cmの小型のもの（No.54不明土壙）や400cm以上になる大型のもの（No.72不明土壙）も存在している。長軸方向は，ほとんどの不明土壙が北西—南東を示すが，No.48不明土壙とNo.53不明土壙は北東—南西になっている。黒褐色土部分に人頭大の石を検出したもの（No.70不明土壙）や，1人の人間では動かすことができない石を検出したもの（No.57不明土壙）も存在する。忠田山遺跡では，互いに接して検出された不明土壙が多いが，No.46不明土壙とNo.47不明土壙は部分的に重複している。調査の結果，No.47不明土壙が古くてNo.46不明土壙が新しいことを確認した。建物，集石土壙，溝と不明土壙の関係では，いずれも不明土壙が古い時期に属している。

第9節　遺構に伴わない遺物（第44・45・46図，図版24）

1は，高杯形土器の脚部である。柱状部がわずかに残存するだけで，脚端部や杯部は不明である。柱状部は，直径が最も小さい部分の器壁が厚くなり，弧を描いてゆるやかに彎曲している。外面の上位には2条の凸帯を有し，凸帯に平行して横ナデを行っている。凸帯部分より下位は，縦方向の刷毛目を施している。内面の上位にはしぼり痕跡が存在し，下位には横方向のヘラ削りが認められる。杯部と脚部の接点に位置する内面は，上位から粘土を充填して蓋をしている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で明るい褐色を呈する。

2は，壺形土器の口縁である。口縁端部を欠損しているため，詳細は不明である。頸部から外反した口縁部は，さらに屈曲して斜め上方へ立上がる。屈曲部の外面には，断面が三角形を呈する張出しが認められる。外面は，縦方向の刷毛目を施したのちに，数条の凹線を施している。口縁部外面の下位と内面全体は，横ナデを行っている。胎土中には，細かい砂粒に混在して金雲母や黒雲母の粒子が認められ，特殊器台や特殊壺の胎土に酷似している。内外面とも全体に丹塗りを施しているから赤色を呈し，焼成は良好である。

3から10は，複合口縁を有する土器の口縁である。頸部でく字状に外反した口縁部は，さらに屈曲して斜め上方へ立上がる。8の口縁端部はわずかに内傾しているが，そのほかの口縁はゆるやかに外彎している。口縁端部は，いずれも丸く仕上げられている。口縁部の屈曲部分には，断面が三角形を呈する張出しが認められる。口縁部の内面と外面全体は横ナデを行い，内面の頸部下位は，横方向のヘラ削りを施している。10の口縁部内面には，横方向へ短い単位にヘラ状工具の先端で磨いた痕跡が認められる。9以外の口縁は，甕形土器になると考えるが，9は壺形土器になるであろう。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。5と8から10は，全体に丹塗りを施しているために赤色を呈するが，そのほかの口縁は，褐色または黒褐色を呈する。3の外面には，ススの付着が認め



第44図　遺構に伴わない遺物(1)（S＝$\frac{1}{4}$）

られる。

11は，複合口縁を有する甕形土器の口縁である。3から10の口縁に比して，口縁部の立上がりが大きく，器壁は薄くなっている。頸部はく字状に短く外反しているが，口縁部はさらに屈曲して，ゆるやかに外彎しながら斜め上方へ立上がる。口縁部の屈曲部外面には，断面が三角形を呈する張出しが認められる。口縁の上端は，角張って面が存在する。口縁部の内面と外面全体は横ナデを行い，内面の頸部下位は，横方向のヘラ削りを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で乳褐色を呈する。

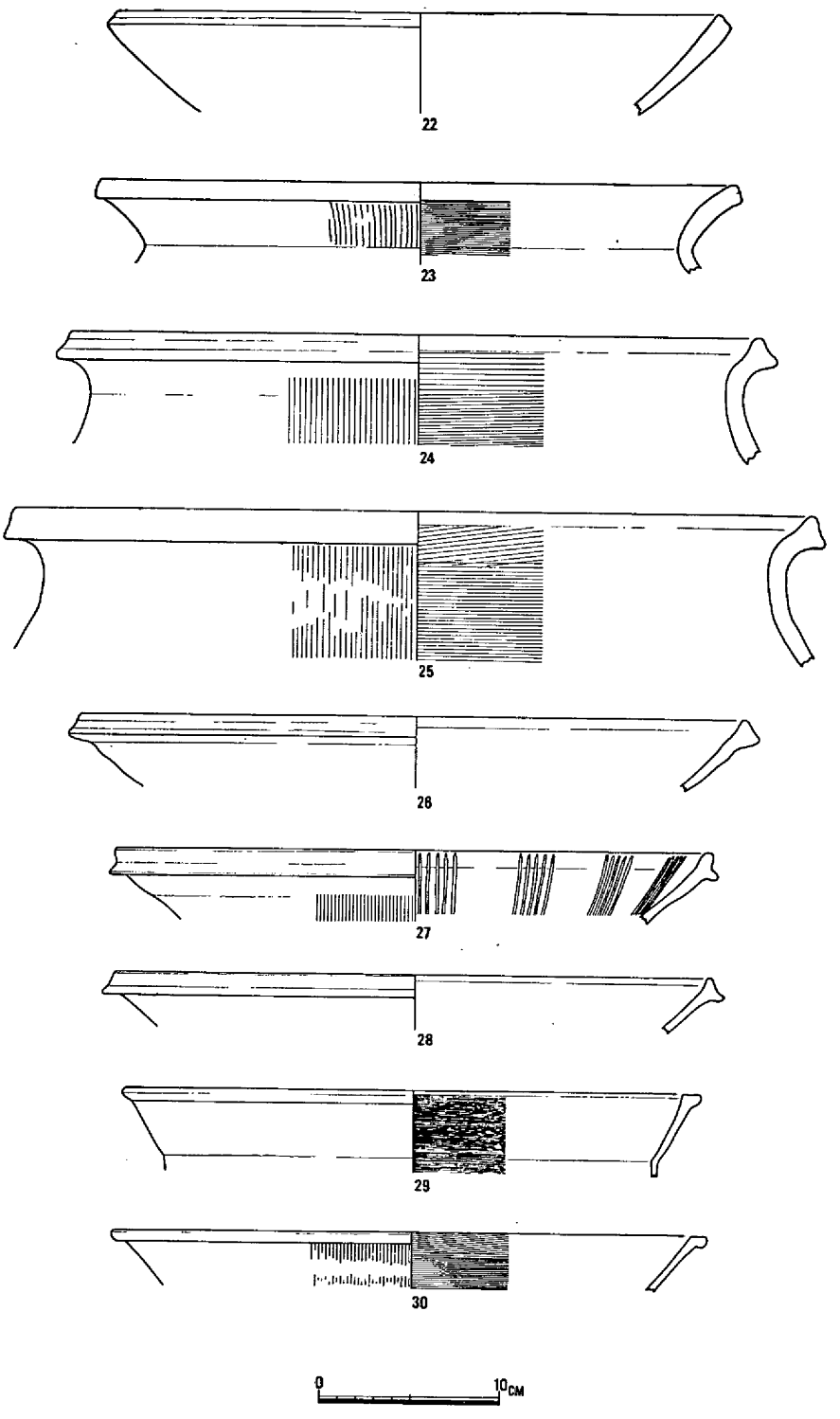
12から14は，各調査区から出土した高杯形土器である。口縁は，ゆるやかに内彎しながら斜め上方へ立上がる。口縁端部は，わずかに屈曲して丸く仕上げている。屈曲部分の外面には，短い張出しが認められる。内外面とも，全体に横ナデを行っている。脚の裾部は，ハ字状にゆるやかに広がって端部を丸く仕上げている。柱状部外面の上位は縦ナデを行い，下位は横ナデを施している。外面の中間部分には，縦方向の刷毛目が認められる。内面の上位は横方向のヘラ削りを行い，下位は横ナデを施している。これらの高杯形土器は，杯部と脚部を別々に製作して接合している。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。12は赤褐色を呈するが，13と14は明るい褐色を呈する。

15と16は，頸部から口縁部にかけてく字状に外反するだけの土器である。口縁部は，端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなり，端部は丸く仕上げている。15の口縁部は，内外面とも全体にナデを行っている。胴部の外面は，櫛状工具で縦方向に施した痕跡が認められる。胴部の内面には，斜め方向のヘラ削りを行っている。16の口縁部外面は横ナデを行い，内面は櫛状工具によって横方向にナデている。内面の頸部直下は，横方向のヘラ削りを行っている。15と16の胎土中には細かい砂粒を多く含み，どちらも焼成は良好で褐色を呈している。

17から20は，小型の皿形土器である。17は，接合によって完形品になったものである。斜め上方へ立上がった口縁端部は，わずかに内傾して丸く仕上げている。口縁端部へ移行するにしたがって，器壁が薄くなっている。18は，著しく小型の皿形土器である。19と20は，口縁端部を欠損している。いずれの土器も内外面とも横ナデを行っているが，底部の裏面にはヘラ起しの痕跡をそのまま残している。胎土中には細かい砂粒を含むが，量が少なくて良質の粘土を使用している。いずれも焼成は良好で，乳褐色を呈している。

21は，亀山焼の鉢形土器である。口縁は肥厚しながら斜め上方へ立上がり，端部は瘤状を呈して内傾する。外面の上位は横ナデを行い，下位は縦ナデを施している。内面は，全体に櫛状工具によって横ナデを行っている。また4本を単位にした縦方向の条線が，放射状に施されている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で瓦質になっている。外面にはススの付着が認められ，煮沸具に使用されたことが考えられる。

22は，21の器形に酷似した亀山焼の鉢形土器である。内外面とも上位は横ナデを行い，下位は縦ナデを施している。内面には，放射状を呈する条線が認められない。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で瓦質になっている。外面にはススの付着が認められ，21の鉢形土器と同様に，煮沸具に使用されたことが考えられる。



第45図　遺構に伴わない遺物(2)（S＝$\frac{1}{4}$）

23は，須恵質の甕形土器の口縁である。頸部から口縁部にかけてく字状に外反した口縁の端部は，角張って面を有する。口縁端部は全体に横ナデを行っている。外面には，櫛状工具で施した縦方向の痕跡が認められるが，さらにその上面を指頭によってナデているため，部分的に櫛状工具の痕跡が消滅している。内面は，櫛状工具によって横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で灰色を呈する。

24と25は，短い頸部を有する瓦質の壺形土器である。肥厚しながら斜め上方へ立上がった口縁の端部は，斜め上下へわずかに張出している。口縁端部は全体に横ナデを行い，内外面とも横ナデによって生じた浅い彎曲面が認められる。外面の頸部から胴部にかけて，櫛状工具で縦方向に施した痕跡が認められる。内面は，櫛状工具によって横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で赤褐色または黒褐色を呈している。24の内面には，有機物の付着が認められる。

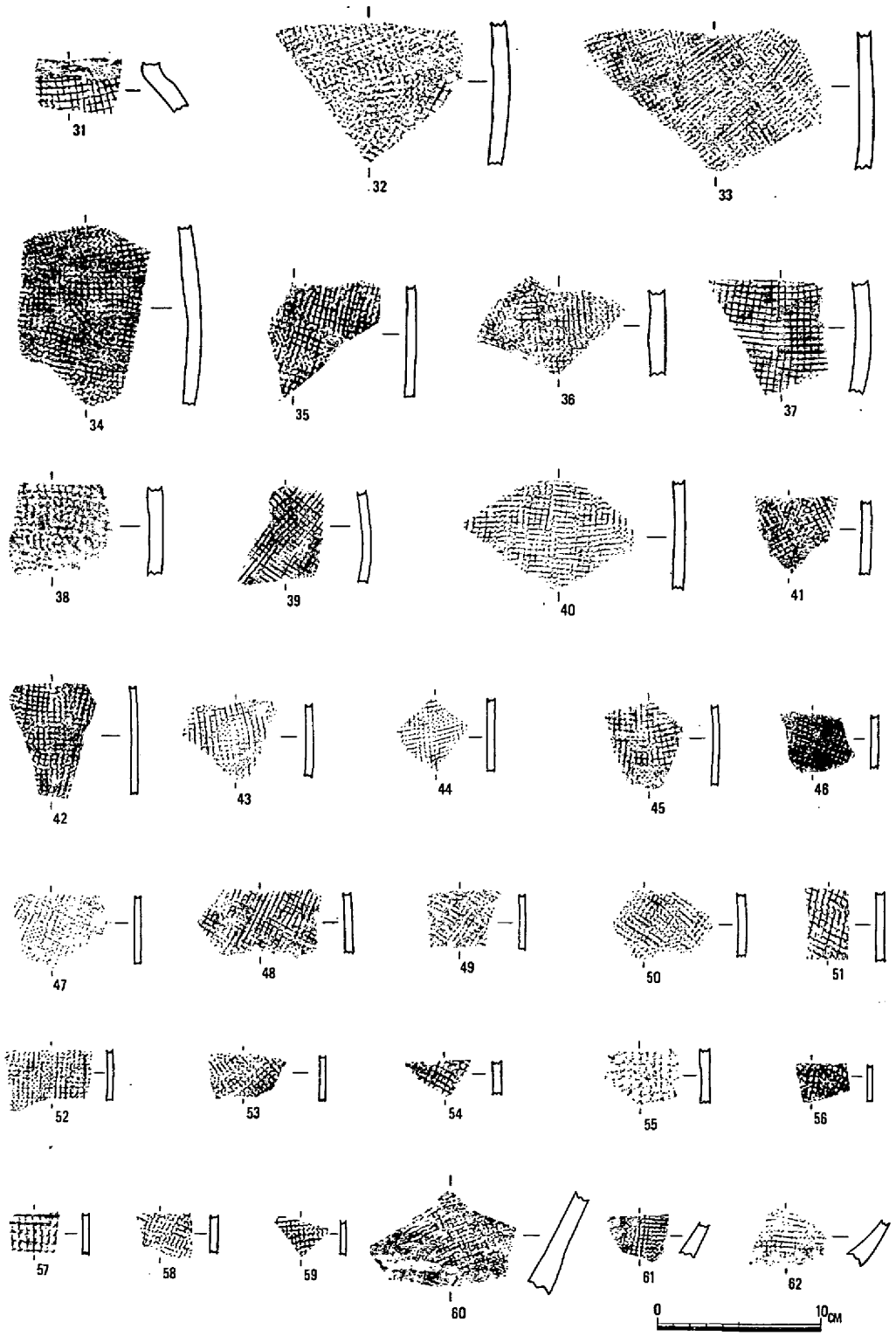
26と27は，亀山焼の鉢形土器である。21と22の鉢形土器に比して，口縁端部の拡張が著しい。内面全体と外面の上位は，横ナデを行っている。27の内面には，5本を単位にした縦方向の条線が，放射状に施されている。26の外面下位は，縦ナデを行っている。27の外面下位は，櫛状工具で施した縦方向の痕跡が認められる。26と27の鉢形土器の胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で瓦質になっている。どちらも外面にはススの付着を有し，内面には有機物が認められるから，煮沸具に使用されたこと考えられる。

28は，須恵質の鉢形土器の口縁である。斜め上方へ立上がった口縁の端部は，肥厚して斜め上方へ張出している。内外面とも全体に横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で灰色を呈する。この鉢形土器は，26と27の鉢形土器の用途とは相違するであろう。

29と30は，鍋形土器の口縁である。どちらも肥厚しながら斜め上方へ立上った口縁の端部は，瘤状を呈して横方向へ張出している。口縁端部は，全体に横ナデを行っている。29の外面の成形は，磨滅が著しいために不明である。30の外面は，櫛状工具によって施した縦方向の痕跡が認められるが，さらに上面を指頭によってナデているため，櫛状工具の痕跡が部分的に消滅している。内面は，どちらも櫛状工具によって横ナデを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。29は黒褐色を呈するが，30は乳褐色を呈する。どちらも外面にはススの付着が認められる。火にかけて煮沸具として使用されたことを示している。

31から62は，亀山焼の壺形土器または甕形土器の破片である。31は，頸部に近接した部分になるであろう。60から62は，底部に近接した部分になるであろう。外面には，いずれも格子面の叩目が認められ，内面は，青海波の叩目を櫛状工具でナデて消している。須恵質のもの（31～33，37，40，44，47 48，56，58，61），瓦質のもの（34～36，38，41，42，46，49，50，52，54，57，59，60，62），土師質のもの（39，43，45，51，53，55）がある。量的には瓦質のものが多く，須恵質のものが少ないが，同一個体の破片も含まれていると考える。叩目には，粗いものと細かいものが認められる。叩目の方向は，多種多様である。

以上が図示することが可能であった遺構に伴わない土器であるが，ここでそれらの属する時期について考えてみたい。



第46図　遺構に伴わない遺物(3)（S＝$\frac{1}{4}$）

1は，弥生時代中期後半の時期に属すると考える。2から10は，弥生時代後期終末の時期に属するであろう。11は，古墳時代前期の古式土師器と考える。12から14の高杯形土器は，須恵器が出現する直前の時期に属するであろう。15と16の甕形土器は，古墳時代後期前半の時期に属すると考える。17から62は，器種に多様性が認められるとはいえ，室町時代の時期に属するであろう。

註

（1） 高畑知功・福田正継・中野雅美「塚の峯遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（22）岡山県教育委員会 1977年

（2） 松本和男・友成誠司「大倉遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（20）岡山県教育委員会 1977年

（3） 伊藤 晃・上西節雄「備前」『日本陶磁全集』（10）中央公論社 1977年

第4章 まとめにかえて

第1節 住居址と出土遺物について

住居址

今回の調査では，丘陵の斜面に位置する円形住居址3軒（No.1～No.3），隅丸方形住居址1軒（No.4）の計4軒を検出した。出土遺物によって，4軒の住居址の属する時期を岡山県南部の上東（じょうとう）遺跡（註1）の編年にあてはめると，No.1住居址が下田所，No.2住居址は才の町Ⅱ，No.3住居住居址は下田所，No.4住居址は才の町Ⅱの各時期になるであろう。

No.1住居址から出土した一括土器

No.1住居址からは，前述したように多量の土器が出土した。これらの土器は，出土状況からみてNo.1住居址と有機的関係にあり，一括土器として取扱った。器種別では，壺形土器3，甕形土器17（＋3）高杯形土器4，鉢形土器（台付も含む）7（＋4）であった。以下，前記した土器の観察表（表－2）をもとに，各器種の様相と他地域（主として岡山県南部地方）との比較について記したい。

壺形土器：壺は3点を図示している。甕の量に比して個体数が非常に少ない。小型壺（坩），精良な水漉し粘土を使用した直口壺，庄内式土器によくみられる複合口縁に竹管文を施した土器である。この庄内式土器の影響をうけた土器は，岡山県南部地方では，才の町Ⅱ式（酒津式）および下田所式（註2）に伴出する。岡山県北部地方では，国鉄姫新線沿いに点々と確認されているが，特に上房郡北房町に所在する谷尻（たんじり）遺跡（註3）で顕著である。神代川流域を含めた阿新地方では，初めて確認されたのである。

甕形土器：一括土器の大半を占める器種である。これらの甕形土器は，5タイプに分類される。

Ⅰ・口縁端面に櫛描沈線を施すもの。2点しか出土していないが，口縁部の上方に立上がる拡張部は，やや内傾して薄くなっている。神代川流域では，新見市西方に所在する横見古墳群（註4）や阿哲郡哲西町上神代に所在する佐藤遺跡（註5）で確認されている。岡山県南部地方の才の町Ⅱ式

に比較するとやや後出的要素をもち，下田所式に相当すると考える（第４図７・８）。

Ⅱ・く字状に外反する口縁をもつ器壁の厚いもの。胴部の張りが球形に近くなる土器もある。底部は不安定ながらわずかに残存する。外面の整形段階に，叩きの痕跡も認められる（第５図16～20）。

Ⅲ・Ⅱに比してやや小型のもの。これらの器形は，Ⅱと同様に岡山県南部地方の才の町Ⅱ式～下田所式に認められるものである（第４図10～12）。

Ⅳ・く字状に外反し，さらに上方へ拡張するもの。胴部の張りは小さい。Ⅱ・Ⅲの土器とよく伴出するものである（第４図14・15）。

Ⅴ・いわゆる複合口縁を有し，器壁が著しく薄い。神代川流域においては，阿哲郡哲西町上神代に所在する西江遺跡（註６）などで出土している。この土器は，島根県大原郡加茂町に所在する神原神社古墳（註７）出土の土器と類似するものである。ところが，神原神社古墳出土の土器は丸底であるため，忠田山遺跡のNo.１住居址出土の土器は，それよりもやや先行すると考えられる。近年，岡山県北西部の中国縦貫自動車道沿線の遺跡で，弥生時代後期終末の時期から，山陰系の土器が土器組成の中にとり入れられていることが指摘されている（註８）が，その実例を確実に把握すべきである（第４図４～６）。

高杯形土器：いずれも短脚を有するものである。杯部はゆるやかな稜線をもって外反している。これらの要素からみて，岡山県南部地方の才の町Ⅱ式に相当すると考える。丹塗りの高杯は，上記のものより若干古い様相さえうかがえる（第５図28～31）。

鉢形土器（台付も含む）：甕形土器についで多く出土した器種である。底部につまみ出した不安定な高台部をつけるものと，つけないものとが認められる。高台をつけないものは２～３個体で，大半が高台部を有している。これらの特徴をもつ土器は，岡山市に所在する雄町遺跡（註９）で出土している(第５図21～26)。

以上，各器種の様相を概観したが，No.１住居址出土の土器は，ほとんど岡山県南部地方の才の町Ⅱ式ないし才の町Ⅱ式～下田所式の土器によくみられるものが多い。しかし，甕形土器のⅠタイプの土器は，才の町Ⅱ式とは言いがたいもので，下田所式に併行するものである。一括土器で最も古い様相を呈する高杯形土器の伴出は，岡山県南部地方の土器の組成関係からみた場合には疑問が生じる。しかし，Ⅰタイプの甕形土器を除外して一括土器をみると，諸要素が才の町Ⅱ式の中でも新しい時期が想定され，いままでの土器の組成関係からみて問題は生じない。このことは，忠田山遺跡が岡山県北西部に所在することから推察すると，Ⅰタイプの甕形土器が神代川流域に搬入する時期に，まだ当地方の土器の形態・手法的変化が，斬新的な形で進んでいなかったとみるべきであろう。したがって，No.１住居址出土の一括土器は，岡山県南部地方の下田所期の古い段階に比定されると考える。

第２節　建物について

忠田山遺跡で検出した建物には，桁行が３間以上になる大型の建物と，２間以下の小型の建物が認められる。

大型の建物のうち，No.19建物とNo.20建物は重複して棟方向がほぼ直交している。しかも，この２棟の建物が存在する位置は，建物を構築するために南西側の法面を大きく削除している。周辺には，井戸や柵も存在している。したがって，No.19建物とNo.20建物の存在する位置は，建物群が検出されている範囲内でも，かなり重要な場所であったことが考えられる。

No.16建物とNo.17建物は，近接した柱穴の配列状態から推察して，上部構造が交差することが考えられ，同時期に存在することは不可能である。No.17建物は，南西方向に位置するNo.18建物の棟方向とほぼ直交している。しかも，No.17建物の北西側の梁行は，No.18建物の北西側桁行の延長上に位置している。したがってNo.17建物は，No.18建物と同時期に構築されていた可能性が強い。No.16建物は，No.17建物が構築される以前のものか，No.17建物が放棄されたのちに新しく構築されたものであろう。

調査で明らかになった大型建物の配置は，No.13建物を除外すると，棟方向がほぼ平行または直交している。この大型建物の立地状況には規則性が認められ，建物群全体がまとまっている。どの建物も，ほかの建物と調和することを意識して構築されているのである。だから，建て替えが行われて重複している建物が存在しているとはいえ，群を構成している大型建物は，ほぼ同時期に属するであろう。時期を明らかにする出土遺物は皆無に等しいが，個々の建物の柱間寸法や，No.19建物の柱穴内から出土した青磁碗から推察して，室町時代の集落を形成していると考えたい。

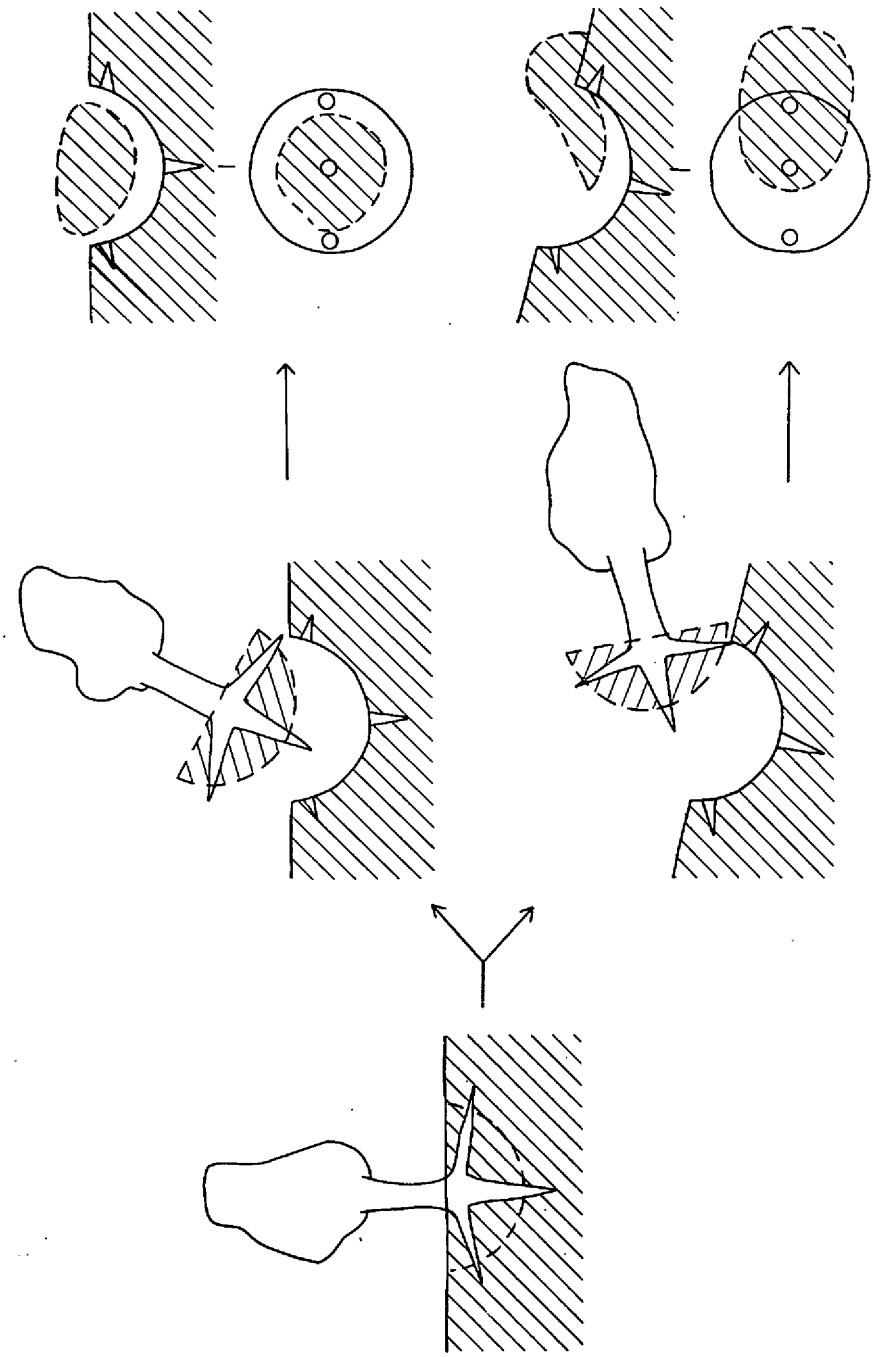
棟方向が異なるNo.13建物は，集落全体の共同利用に使用された建物であろう。またNo.18建物は，建物群の中央に存在して規模が大きいから，集落内でも中枢的な役割を果していたと考える。

小型の建物は，１区のＢ地点に存在するNo.11建物，No.14建物，No.15建物の３棟である。No.11建物とNo.15建物は，酷似した形態を呈している。３棟の小型建物の棟方向は，ほぼ同一直線上に位置して棟方向が揃っているから，同時期に属すると考えるが，No.13建物を除外した大型建物の棟方向とは相違している。No.14建物の周辺からは，弥生式土器片や古式土師器片が出土している。この土器片が建物に確実に伴うならば，３棟の小型建物の時期は，弥生時代後期終末から古墳時代初頭に属するであろう。すなわち，２区と３区に検出した４軒の竪穴住居址の時期と一致するのである。このように考えると，３棟の小型建物は，竪穴住居址群に伴う高床式倉庫になる可能性が強い。また３棟の小型建物が大型建物と同時期に属するならば，人間が居住するのは不可能な建物であるから，集落の備蓄用倉庫に使用されていたのではなかろうか。

いずれにしても，調査範囲が限定されて建物群の立地する範囲全体を把握することができなかったから，忠田山遺跡で検出した建物についての詳細は，不明な点が多く残されている。

第3節　溝について

忠田山遺跡で検出した溝のうち，３区に存在するNo.９溝は，No.４住居址の地形の高い位置に存在するNo.８溝と接続していた可能性が強い。この溝は，赤磐郡山陽町に所在する門前池遺跡（註10）の第１地点に存在する１号住居址や，松江市矢田町に所在する平所遺跡（註11）の玉作工房址で検出されている溝のように，住居址の排水施設であったと考える。



第47図　風倒木痕形成模式図（「信濃」第26巻第3号 能登 健氏論文による）

No.10溝は，No.9溝に近接した位置に存在して平面形が酷似している。しかも，No.9溝と同じように，溝内から弥生式土器片が出土している。住居址の壁体溝にしては溝の幅が広く，古墳の周溝とも考えられない。No.1住居址によって切られているから，No.1住居址よりも古い時期に属するとはいえ，この溝の性格等は不明である。

No.22溝と，No.29集石土壙から北東方向へ張出した溝の底部には，多数の石を検出している。途中の部分が削平されているとはいえ，本来は両溝が接続していた可能性が強い。No.22溝は，溝内の石の下部には空間があって，水がたえず流れる構造になっていた。雨落溝になる可能性が推察されたが，溝と建物の中間には柵が構築され，溝の上面に建物の庇が張出していたとは考えられない。集石土壙に関係した溝であるのかもしれないが，詳細は不明である。

1区に存在する溝のうち，No.39溝はNo.16建物の雨落溝の可能性が強い。そのほかの溝については，時期や性格が不明である。

第4節　土壙について

3区のA地点に存在するNo.6土壙とNo.7土壙は，遺物が出土しなかったので詳細は不明であるが，住居址に近接した地点に存在するから，住居址の時期に属する貯蔵穴と考えたい。

No.28集石土壙とNo.29集石土壙は，土壙内に人頭大から拳大の石が多数存在し，鉄滓や土器片が出土している。No.29集石土壙内には，ふいごの羽口も出土した。2区のA地点には，鍛冶炉が存在している。No.29集石土壙内には湧水が認められ，たえず水が溜っていた。このような状況から，No.28集石土壙とNo.29集石土壙は鉄生産に関係した遺構で，大型建物群と同時期の室町時代に属すると考える。

そのほかの土壙は，不整形な形態で遺物が出土していないから，時期や性格が不明である。

第5節　不明土壙について

平面形が不整円形または不整楕円形で，断面形が浅い擂鉢状を呈する不明土壙は，忠田山遺跡で29箇所検出した。地山面で平面形を確認した場合，基盤の地山面と不整円形または不整楕円形を呈する地山の土質に酷似した充塡土の間に，黒褐色土が環状を呈して検出されているのである。

中国縦貫自動車道沿線の地域では，平遺跡（註12），小中遺跡（註13），西原遺跡（註16），備中平遺跡（註15），谷尻遺跡（註16），西江遺跡（註17），土井遺跡（註18），横田遺跡（註10），塚の峯遺跡（註20）等で検出されている。備中平遺跡で検出した不明土壙から縄文式土器片が出土しているほかは，いずれも遺物が確認されていない。忠田山遺跡で検出した29箇所の不明土壙も，精査したにもかかわらず遺物が確認できなかった。むしろ不自然な立地形態を呈しているから，人工の遺構とは考えられない。

不明土壙の性格については，汚物処理用の土壙，果樹の周囲に掘開した肥料用の土壙，土器の素地を溜る粘土溜状遺構（註21）等の仮説があるが，関東地方で「性格不明の落ち込み」を考察された能

登　健氏の論文（註22）に注目したい。つまり，これらの不明土壙は，「風倒木痕」と考えておられるのである。忠田山遺跡の所在する中国地方と関東地方は，遠く離れているために自然条件が著しく相違していることがうかがえる。したがって，関東地方で把握されたことを，そのまま忠田山遺跡で検出した不明土壙の性格と結びつけるのは適当でないかもしれないが，現在の段階では，「風倒木痕」と理解しておきたい。

註

（1）柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（16）岡山県教育委員会　1977年

（2）註1に同じ。

（3）高畑知功・山磨康平他「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（11）岡山県教育委員会　1976年

（4）岡田　博・浅倉秀昭・田仲満雄「横見古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（15）岡山県教育委員会　1977年

（5）竹田　勝「佐藤遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（23）岡山県教育委員会　1978年

（6）正岡睦夫・田仲満雄・二宮治夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（20）岡山県教育委員会　1977年

（7）前島己基・松本岩雄「神原神社古墳出土の土器 —— 土器型式にみるその編年的位置について——」『考古学雑誌』第57巻第4号　日本考古学会　1976年

（8）註6と同じ。

（9）高橋　護・葛原克人・正岡睦夫・泉本知秀・伊藤　晃・栗野克己他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（1）岡山県教育委員会　1972年

（10）池畑耕一・枝川　陽・新東晃一・松本和男「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（9）岡山県教育委員会　1975年

（11）前島己基・松本岩雄編「平所遺跡1」『国道9号線バイパス建設予定内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　島根県教育委員会　1976年
前島己基・松本岩雄編「平所遺跡2」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅱ　島根県教育委員会　1977年

（12）田仲満雄・井上　弘「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（8）岡山県教育委員会　1975年

（13）栗野克己・高畑知功「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（7）岡山県教育委員会　1975年

（14）橋本惣司・栗野克己他「西原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（6）岡山県教育委員会　1973年

（15）栗野克己・井上　弘・岡田　博「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（12）岡山県教育委員会　1976年

（16）註3に同じ。

（17）註6に同じ。

（18）高畑知功・福田正継「土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（20）岡山県教育委員会　1977年

（19）岡田　博・秀島貞康他「横田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（23）岡山県教育委員会　1978年

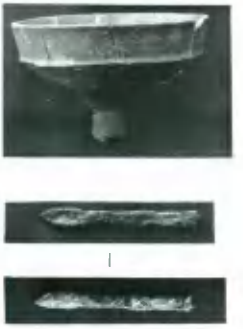
（20）高畑知功・福田正継・中野雅美「塚の峯遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』（23）岡山県教育委員会　1978年

（21）菅田　薫他「中臣遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1977—Ⅰ　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1977年

（22）能登　健「発掘調査と遺跡の考察——いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として——」『信濃』第26巻第3号　信濃史学会　1974年

図版24

遺構に伴わない遺物



1．No.1住居址出土遺物 3

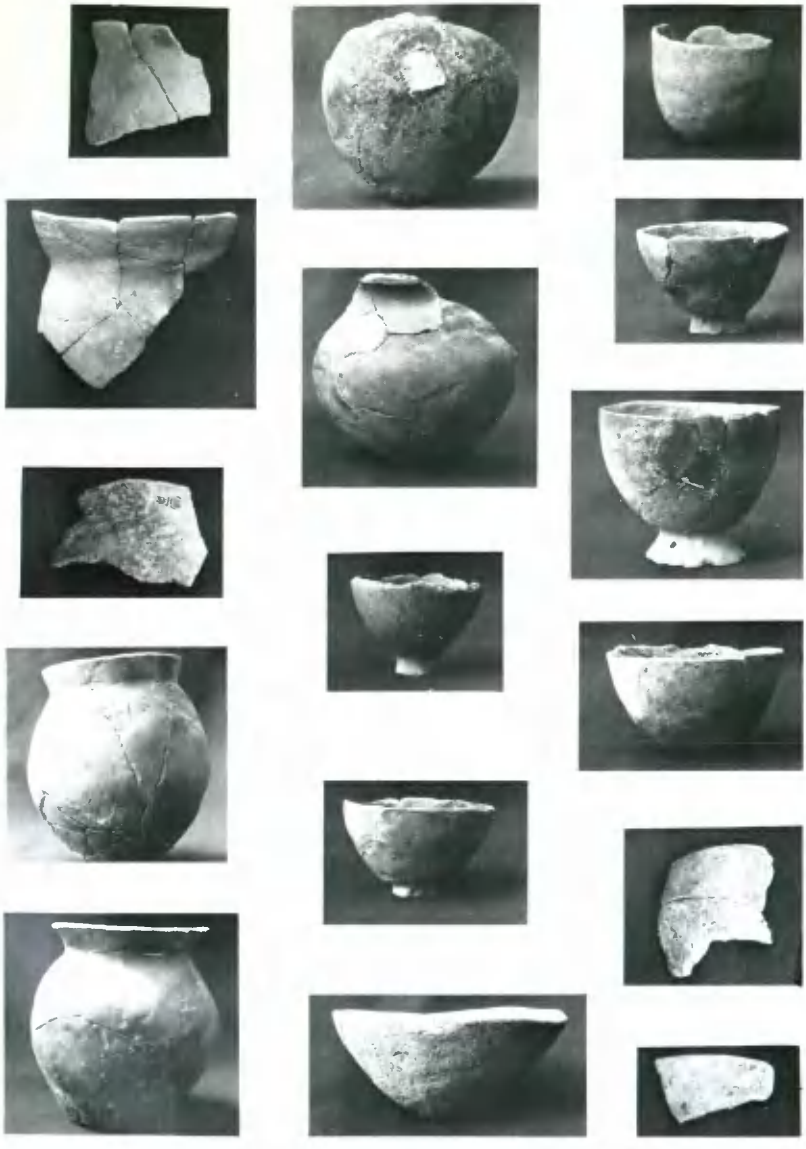
2．No.4住居址出土遺物

4．No.23井戸出土遺物

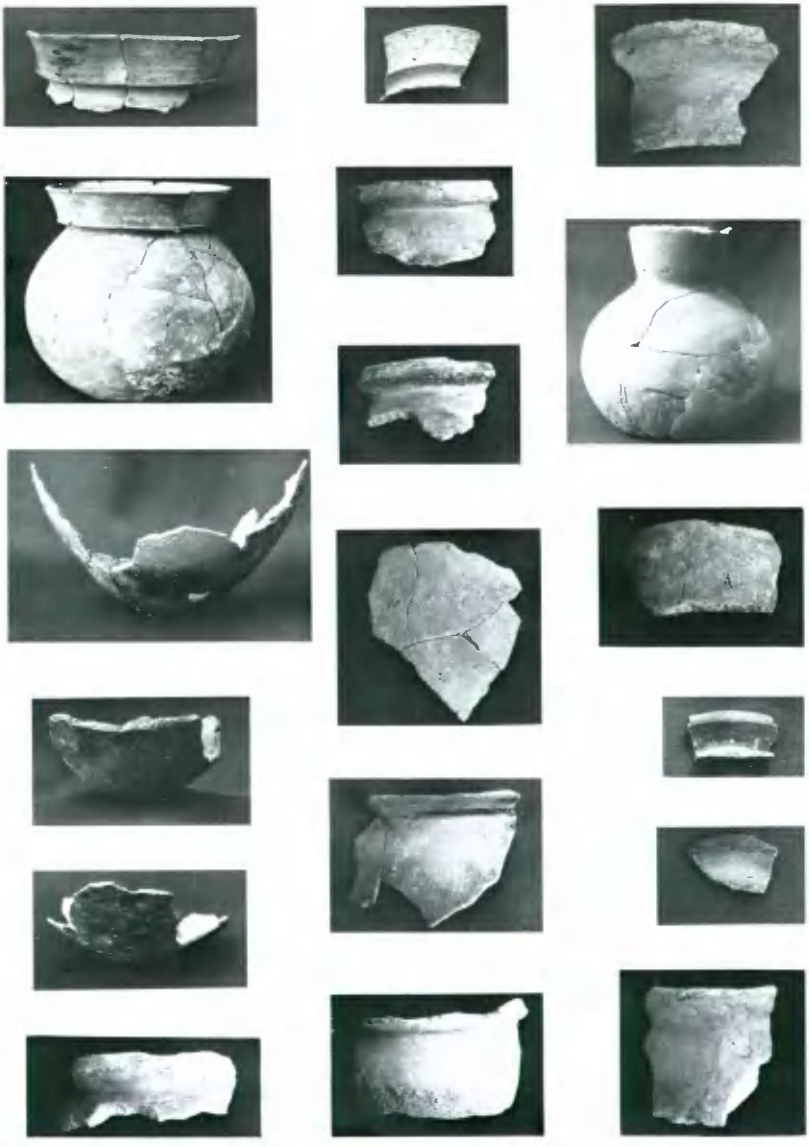
3．No.29集石土壙出土遺物

5．No.19建物出土遺物

図版22



No. 1 住居址出土遺物 2



No. 1 住居址出土遺物 1)

図版20

1．No.70不明土壙

2．No.72不明土壙

1．No.59不明土壙

2．No.63不明土壙

図版18

1．No.57不明土壙

2．No.58不明土壙

1．No.46・47不明土壙

2．No.46・47不明土壙

図版16

1．No.25古道

2．No.35鍛冶炉

1．No.26集石遺構

2．No.27集石遺構

図版14

1．No.29集石土壙

2．No.29集石土壙の溝

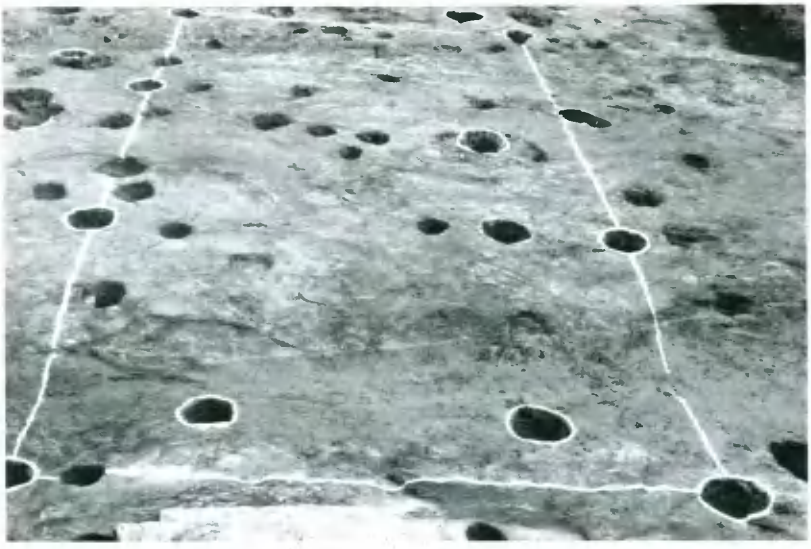
1．2区A地点近景

2．No.28集石土壙

図版12

1．No.23井戸

2．No.24井戸



1．No.20建物

2．No.19建物遺物出土状況

図版10

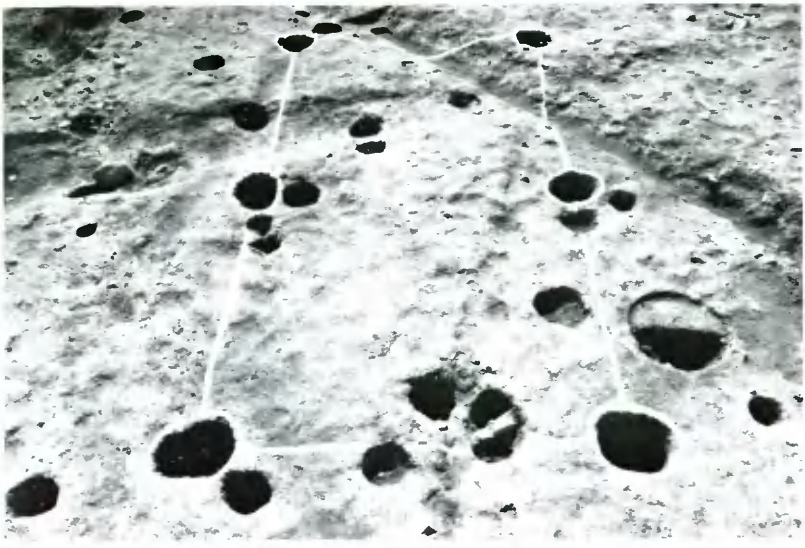
1．No.16建物

2．No.16建物

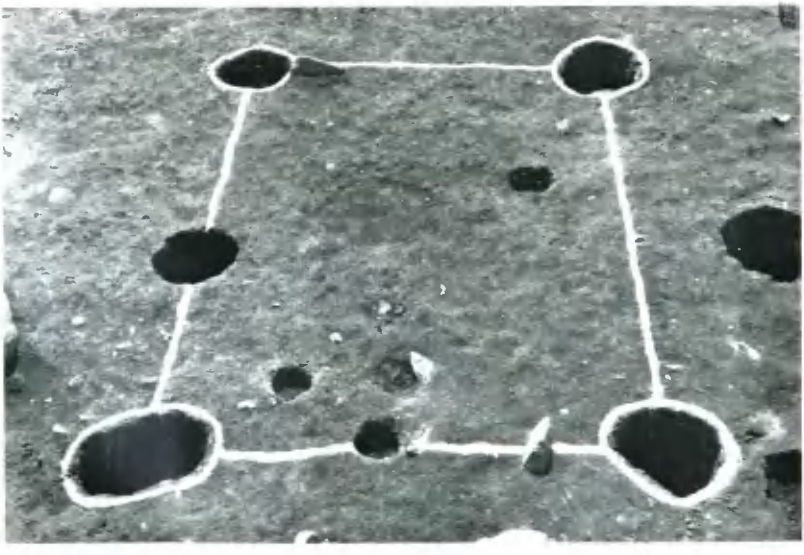
1．No.13建物

2．No.14・15建物

図版8

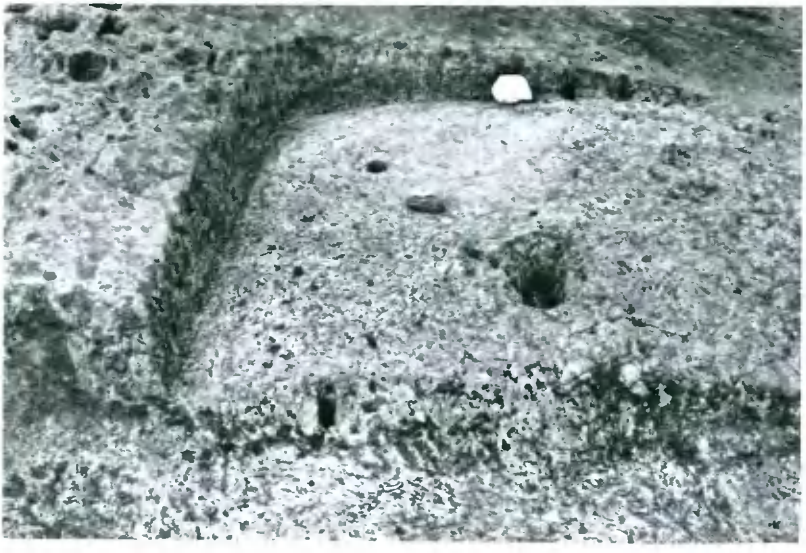


1．No.11建物



2．No.14建物

1．No. 4 住居址土層断面



2．No. 4 住居址

図版6

1．No.2・3住居址

2．2区A地点全景

1．No.1住居址遺物出土状況

2．No.1住居址

図版４

１．No.１住居址土層断面

２．No.１住居址遺物出土状況

１．忠田山遺跡全景

２．忠田山遺跡１区全景

図版２

１．忠田山遺跡土層断面

２．２区土層断面

1．忠田山遺跡遠景

2．忠田山遺跡遠景

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　23

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 13

昭和53年３月24日 印 刷
昭和53年３月31日 発 行

発 行　岡山県教育委員会
印 刷　岡山県出納局用度課